EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03030 7003

UNIVERSITY OF TORONTO
LIBRARY

purchased from the
MELLON FOUNDATION GRANT

for

EAST ASIAN STUDIES

◈あらゆる方面に採用された日本文學史の教科書◈

東京帝國大學文學部教授　文學博士　藤村　作先生著

三十四版

國文學史總說

定價金二圓五十錢
郵税金十四錢

教科用（學生用廉價版）
定價金貳圓
郵税金十四錢

内容目次概

緒論　國文學史と其の區劃　**第一篇　大和時代**　序說　第一章前期（古事記と日本書記—風土記—祝詞）第二章後期（萬葉集—宣命—懷風藻と日本靈異記）**第二篇　平安時代**　序說　第一章前記（初期の漢詩及び漢文—六歌仙と古今集—神樂と催馬樂—歌物語と傳奇的物語—土佐日記と蜻蛉日記）第二章中期（和歌と謠物—源氏物語—枕草子と日記隨筆）第三章後期（和歌と謠物—小說物語—歷史物語と傳說物語）**第三篇　鎌倉室町時代**　序說　第一章前期（歌集と歌人—宴曲—軍記物語と其の他の物語—日記・障筆・紀行）、第二章後期（和歌と連歌—軍記物語と歷史物語其の他—お伽草紙と舞の本—謠曲と狂言—徒然草）**第四篇　江戸時代**　序說　第一章前期（古學復興時代の和歌—俳諧と芭蕉—假名草紙と井原西鶴—古淨瑠璃と近松）第二章中期（賀茂眞淵と其の時代の和歌—蕪村と其時代の俳諧—狂歌と川柳—初期の讀本と洒落本—淨瑠璃と脚本）第三章後期（後期の和歌—後期の俳諧—後期の小說—脚本）**第五篇　明治時代**　序說　第一章前期（思潮概觀—詩歌と戯曲—小說）第二章中期（思潮概觀—長詩と短詩—小說—戯曲）第三章後期（思潮概觀—詩歌と戯曲—小說）

現行の國文學史教科書中で、優秀のものと評せられ、最も汎く用ゐられて居ります。古寫本・版本等の面影を窺はせるために七十餘個の寫眞銅版・凸版を挿入して、引例に充て、傳記・解題の間に思潮の概觀や批評にも筆を及ぼし、頗る要領を得せしめた所に著者の苦心が見られます。

發行所　東京市神田區表神保町一番地　振替東京　中興館

文學士 島津久基先生著〔鑑賞を指標とした源氏物語の現代譯〕

對譯 源氏物語講話

上製菊判美本全壹冊
總紙數五百六十頁
定價金三圓九十錢
郵稅金二十七錢

本書は

口譯と原文となるべく逐語對照の出來るやうに努め、又口譯だけで獨立した一個の小說として讀めるやうにしてある。

長恨歌の全文も國譯にして對照してあるが、立派な國詩になつてゐる。

釋評の部には隨處に源氏全篇に亙つての講說をも試みてあるから、全篇の知識を豐富にし理解を深め得られ、源氏研究の基調がつかまれる。

而も他の作品・作家との對比、時代・社會との交涉等、文學史・文化史の諸方面から考察し、其の上に、語義・餘釋・參考等の項を置き、研究者に便益を與へてある。

目次の一端

桐壺卷 桐壺更衣と桐壺帝の殊寵　桐壺更衣の父母　光君誕生　桐壺更衣と弘徽殿女御　僅嬪の嫉妬と弱者虐め　光君著袴　桐壺更衣の病苦と逝去　葬送と母北方の慟哭　桐壺帝の悲愁　親奠命婦勅使　命婦の復命と帝の懺悔　內裏住と幼時穎の悟　高麗人の觀相と光君の臣籍降下　藤壺入內—桐壺の再生　光君元服　婚姻　**長恨歌並國譯。**

帚木卷 光源氏の本性　御物忌の宿直どころ　つれ〴〵の雨の宵—頭中將の女人觀　馬頭の中品禮讚　葎の門の女神—童話味と瓏奇趣味　良妻難　妻定めの基準と夫婦和合の祕訣　才氣と實質—三技藝喩說　雛婚喜劇—指食物語　情獨笑景—月下の曲—撫子のゆくへ　常夏哀話　珍說、椒藝の草藥—女博士傳　學識と謙讓—溫雅中正主義の提唱　帚木卷後半・〈空蟬〉卷梗概　附錄　源氏物語序說。

兎も角、國文學を學ばんとする者が『**源氏物語**』は必ず讀まねばならぬやうに、源氏物語を學ばんとする者は、何物を措きても必ず**本書**を讀まねばならぬことを斷言する。

而して本書を讀みたる者は、未知の光明と、未だ嘗て味ひ得ざりし感興とに充たされ、源氏の妙味と眞價を知り、**深刻なる源氏愛好者**となることを確信する。

發行所 東京市京橋區田鶴町 東京市神田區淡路町 中興館

◇近古文學研究の權威◇

文學士 島津久基先生編著

近古小說新纂 初輯

上製美本全壹册
總紙數七百餘頁
定價金六圓
郵稅金二十二錢

本輯には嘗て刊行せられた『御伽草子』（今泉・畠山二氏校定）、『新編御伽草子』萩野博士輯）『室町時代小說集』（平出氏校訂）、『御伽草紙』藤井博士校訂）の四書に載せられて居ないもの十五種を收めてあります。

本文は原本のまゝとし、一字一句を改めず、たゞ振漢字を當て、句讀を施し、頭註に考異と特殊語の釋義と、參照事項、書名等を掲げ、各原本の表紙・本文・挿繪など多數の挿圖を隨所に入れ、而も終りに附けた『考說』（二百九十餘頁）は、著者が多年の研鑽攻究に成つたもので、初めに各編の梗概を掲げ、性質・素材・構想・題號・年代・文體・用語・原本・並に所在・系統・影響等に亘りて精敍されて居ります。

內容目次

▲朝顏の露の宮
▲ふせやの物語
▲かくれざと
▲ほうらい物語
▲おもかげ物語
▲さよひめ
▲はもち中將
▲まんじゆのまへ
▲小式部
▲天狗の內裏
▲判官みやこばなし
▲日本記
▲九けつのかひ
▲いづみが城
▲笛の卷

要するに本書は、從來刊行の斯種のものが、企て及ばなかつた多くの特色と大きな光輝とを持つて居ります。本書を繙く人々は、必ず獲る所のものが尠くない事を信じます。

近古稀覯小說の蒐纂成り秘庫の一端が開かれました。

發行所 東京振替 東京神田區表神保町二番三 中興館

昭和八年三月廿九日印刷
昭和八年四月三日發行

夜半の寢覺（教科用）
定價金二圓八十錢

編者　藤田德太郎
編者　增淵恒吉
發行者　東京市神田區表神保町八番地　矢島一三
印刷者　東京市神田區表神保町八番地　兒玉豐
印刷所　東京市牛込區早稻田鶴巻町一〇七番地　株式會社康文社印刷所

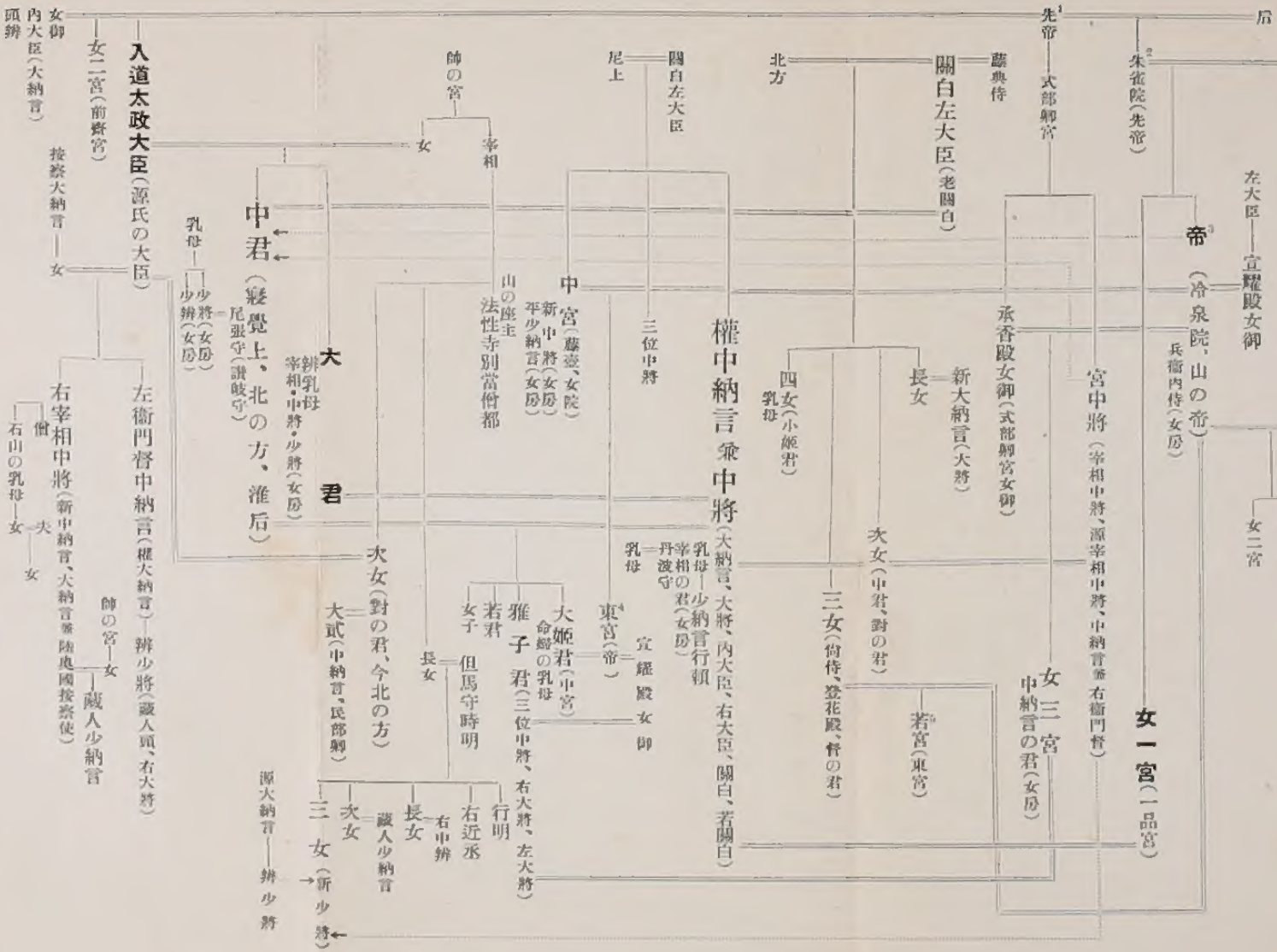
著作權所有

發行所　東京市神田區表神保町　振替東京四一二三番　中興館
（電話神田一二三五番）

[illegible]

夜の寢覺物語系圖

——四子関係。——夫婦関係。
……略語の関係を有しるもの。



（備考）物語中の人物は此の系圖の中に網羅したり。各人物の本文に出でし箇所は「窓の燈」に詳記しあり、且つ其の頁數も一々そこに附記せるを以て玆には夫等の註記をなさず。（但し「窓の燈」には誤認散見するを以て注意を要す）
文字の大小は主要人物か、然らざるかを示す。數字は皇系順位。（但し現存本は冷泉院帝時代の事にて終始せり）
主要人物の傍に小さく記せるは、その人物の乳母又は侍女と、その關係人物なり。

風葉集などを併せ考るに、此末猶いくらばかりか有けん。おしあてに、すべては十卷か、或は十五卷ばかりにもやと思はるれど、いかゞあらん。かばかりめでたき物語の、全く世につたはらぬこと、いとをしともいとをしく、いとあたらしともいとあたらしきことになん。

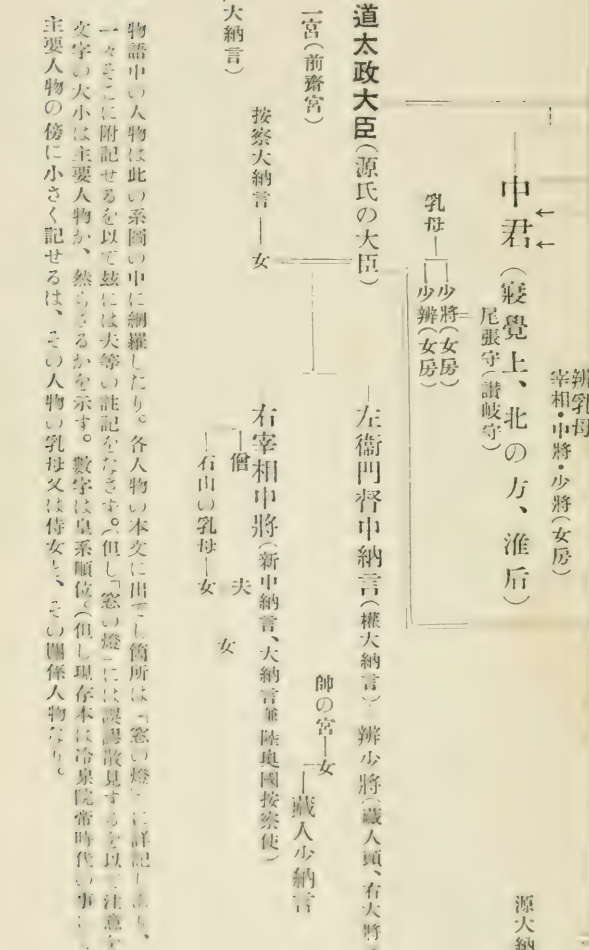
上のくだりにいへることゞも、猶いかゞあるべからん、いとおぼ〳〵しき事のみなれど、また後に善き本を得て、よみ考へん時のたつきにもと、かうはしるしものしつるになむ。

嘉永六年六月廿九日

横山由清識

夜の寢覺物語系圖

親子關係。　夫婦關係。
輕蔑の情を有しもの。



〔備考〕物語中の人物は此の系圖の中に網羅したり。各人物の本文に出でし箇所は「窓の燈」に詳記したり、且つ其の百數を一々そこに附せるを以て茲には夫等の註記をなさず。但し「窓の燈」には誤謬散見するを以て注意を要す。

文字の大小は主要人物か、然らざるかを示す。數字は皇系順位（但し現存本は冷泉院常時代の事にて終始？）主要人物の傍に小さく記せるは、その人物の乳母又は侍女と、その關係人物なり。

風葉集などを併せ考るに、此末猶いくらばかりか有けん。おしあてに、すべては十卷か、或は十五卷ばかりにもやと思はるれど、いかゞあらん。かばかりめでたき物語の、全く世につたはらぬこと、いとをしともいとをしく、いとあたらしともいとあたらしきことになん。

上のくだりにいへることゞも、猶いかゞあるべからん、いとおぼ〳〵しき事のみなれど、また後に善き本を得て、よみ考へん時のたつきにもと、かうはしるしものしつるになむ。

嘉永六年六月廿九日

横山由清識

(朱)原本は烏原侯の御藏なるを柯堂井上うじ借出て人にうつさせ置れしを又井岡氏のうつされし也

夜寢覺物語五卷、井岡氏の藏本をかり得て、嘉永五とせ神無月半ばかりより、筆をおこして、同き霜月はつかばかりに、うつしをへぬ。

此ものがたりの作者は、常陸介菅原孝標朝臣の女と、拾遺百番歌合にみゆ（母は倫寧朝臣の女にて道綱母の姪なりとぞ。）此人、はじめは祐子內親王家の女房たりしが、後に信濃守橘俊通が妻となれり。更級日記の作者にて、源氏物がたりをいみじう好みよみけるよし、かの日記にみえたり。さてなんかゝるものがたりをもつくり出けるなるべし。此のものがたりのみにあらず、御津濱松、みづからくゆる、朝くらなどいへるも、皆この人の作なりとぞ。詠歌またすくなからず。新古今より新拾遺までの撰集に、歌數すべて十四首みえたり。

此書、今あるところ五まき、轉々書寫のあやまりはさるものにて、卷々のついでをへ、いとみだりがはしきを、ひとわたりよみ考て、原本の五の卷を卷の一と定め、四の卷を二とあらため、一二三の卷を三四五とついでみるに、猶事つゞかぬさまなれば、かりに年立系圖やうのものを書つゞりて、さてよみ見るに、改めついでたる二の卷と三の卷との間に、凡八ケ年ばかりの事、もれたり。即寢ざめの十九歳より、廿六歳までの事どもなれば、すくなくとも、一卷か三まき、或は五卷も洩たるなるべし。さて三四五の三卷に、廿七八歳二とせのほどの事みゆ。拾遺百番歌合、

同雜二
しら雲のまだしらざりし奥山にかゝるべきよと思ひかけきや

忍びたる男の、いかなる事をしけるをりにか、よみ侍ける　ねざめの老關白の中君

草の葉にかゝるもつらき露の身の聞て悲しき風の音かな

題しらず　寢覺の廣澤の淮后

世中にふればうさのみまさりけりいづれの谷にわが身すてゝん

七十のよはひを、むすめの、がし侍りける時、中宮の行啓など侍けるに、よみ侍りける　寢覺の入道太政大臣

今はとて戸ぼそとぢてし草の庵にさやけき空のひかりをぞみる

已上十首

此物語五まきに出たる歌七十四首、右兩書に出たる歌二十七首、あはせて歌數百一首

○うき世には云々の次、しら雲云々ノ上

冷泉院のかしこまり、ゆるさせ給て後、女三宮もろともに、秋の夕をながめてよみ侍ける　ねざめの右大將

風葉雜一
ながらふるいのちをなどていとひけんかゝる匂もあればありけり

風葉和歌集哀傷

さらでだに涙ひまなき墨染の袖におきそふ秋のゆふ露

入道太政大臣かくれ侍て、日數すぎて、いでけるに、すゝきのうちまねきたり

ければ　　ねざめの關白

同

まねけども君なきやどは花すゝき涙さへこそとまらざりけれ

母のおもひに侍けるころ、人の返事につかはしける　　ねざめの右大將

同（朱）丹鶴本ナシ

わかれにしその曉の夢にても又はみるよのなきぞ悲しき

（朱）此間一首

忍びて物いひわたりける女の、こと人にむかへられければ、つかはしける

ねざめの關白

同戀四

かぎりとて思ひたえ行よの中に涙しもなど盡せざるらむ

（朱）此間一首

題しらず　　寢覺の右大將

同雜一

うき世にはわれすみわびぬほとゝぎすしでの山路（ヤ、）しるべやはせぬ

○此間一首末ニ記ス

冷泉院をいで給ひて後、院そひ奉りて、大内山にものしたまひけるころ

寢覺の女三の御子

中納言君消かへりて、いつかわすれん聞えける返し　右大將

同十四番右　吹はらふあらしにわびて殘ぢふの露のこらじと君につたへよ（つれ風）（か風）

風葉集雜二　白河院より、あながちにのがれ出給へるを、はじめて聞せ給ひて、つかはしける御ふみに　中宮

同十五番右　みしまゝの夢のうちにぞまどはるゝたちおくれにし身を恨みつゝ

中宮に、立おくれにしを、うらみつゝと侍ける御かへし　寢覺上（の歟）

同十六番右　くものかぎりへだつる空にたゞよへど君につたふるまぼろしもがな

母上かくれ給ひぬと聞えし時より、北山にこもりゐて、次の年の春、さくらにつけて中宮へまゐらせける　右大將

同十七番右　しらざりしみ山がくれの花の色をあはれむかしとなく〳〵ぞみる

風葉集哀傷　世を背て後、山のみかどの御文に、「此世にはうくて前しなかなるをいかに入に（別歟）

しひとつみちなり」との給はせたる御かへし　ねざめのうへ

同二十番右　かぎりなくうき身をいとひすてしまに君をも世をもそむきにしかな

己上十四首、詞書中三首、合十七首

風葉集にみえたる歌拾遺百番歌合に出たるはぶく

御ぶくにおはしましけるころ、人の御返事に　ねざめの中宮

風葉云、母のおもひにて、北山にこもりてゐて侍ける頃、花をゝりて中宮にたてまつるとて

（宋）丹鶴本ナシ

風葉和歌集哀傷

さらでだに涙ひまなき墨染の袖におきそふ秋のゆふ露

入道太政大臣かくれ侍て、日數すぎて、いでけるに、すゝきのうちまねきたりければ　　ねざめの關白

同

まねけども君なきやどは花すゝき涙さへこそとまらざりけれ

母のおもひに侍けるころ、人の返事につかはしける　　ねざめの右大將

同（朱）丹鶴本ナシ

わかれにしその曉の夢にても又はみるよのなきぞ悲しき

（朱）此間一首

忍びて物いひわたりける女の、こと人にむかへられければ、つかはしける　　ねざめの關白

同戀四

かぎりとて思ひたえ行よの中に涙しもなど盡せざるらむ

（朱）此間一首

題しらず　　寢覺の右大將

同雜一

うき世にはわれすみわびぬほとゝぎすしでの山路しるべやはせぬ

○此間一首末ニ記ス

冷泉院をいで給ひて後、院そひ奉りて、大内山にものしたまひけるころ　　寢覺の女三の御子

中納言君消かへりて、いつかわすれん聞えける返し　右大將

同十四番右　吹はらふあらしにわびて殘ぢふの露のこらじと君につたへよ
風葉集雜二

白河院より、あながちにのがれ出給へるを、はじめて聞せ給ひて、つかはしける御ふみに　中宮

同十五番右　みしまゝの夢のうちにぞまどはるゝたちおくれにし身を恨みつゝ

中宮に、立おくれにしを、うらみつゝと侍ける御かへし　寢覺上

同十六番右　くものかぎりへだつる空にたゞよへど君につたふるまぼろしもがな

母上かくれ給ひぬと聞えし時より、北山にこもりゐて、次の年の春、さくらにつけて中宮へまゐらせける　右大將

同十七番右　しらざりしみ山がくれの花の色をあはれむかしとなく〳〵ぞみる
風葉集哀傷

世を背て後、山のみかどの御文に、「此世にはうくて前しなかなるをいかに入に

しひとつみちなり」との給はせたる御かへし　ねざめのうへ

同二十番右　かぎりなくうき身をいとひすてしまに君をも世をもそむきにしかな

已上十四首、詞書中三首、合十七首

風葉集にみえたる歌拾遺百番歌合に出たるはぶく

御ぶくにおはしましけるころ、人の御返事に　ねざめの中宮

風葉云、母のおもひにて、北山にこもりてゐて侍ける頃、花をゝりて中宮にたてまつるとて

（來）丹鶴本ナシ

風葉云、世になきさまに聞えて後、右大將北山にこもれりとつたへ聞て月のあかゝりける夜、ながむらんおもかげもみる心ちして、思ひやられければ

風葉云、忍びて、しら川の院に侍けるに、物思ふ秋はあまた有しかど、いとかうはあらざりきかしとながめわびて

右大將三位中將ときこえし時、北山にこもり給ひぬときゝて　寢覺上

同八番右
しらざりし山べの月をひとりみてよるなき身とや思ひ出らん

風葉集雜二廣澤の淮后
白河院にて、身のありさまおぼしつゞくるゆふぐれに　同

同九番右
しをれわび我ふるさとの荻のはにみだるとつげよ秋の夕風

風葉秋上廣澤淮后
年久しく絶て後、めぐりあひ給へる秋、月の光虫の聲も、たゞ昔ながらの心ちして、石山にて、すみはつまじき契り成けんと聞しほど、別れ給ひし夜の心ちおぼし出られて、中々心づくしもやゝたちまさりて、人やりならず涙にくれて

關白

同十番右
かぎりとて命をすてし山ざとのよはの別れに似たる空かな

關白一品宮に參りそめ給ひける日、思ひなげき給へるをなぐさめて、「よしや君契はたえせじを命のみこそさだめがたけれ」と侍ければ　あねうへ

同十二番右
たえぬべき契にそへてをしからぬ命をけふに限りてしかな

院の御けしきよろしからで、女宮ぐし奉りて、冷泉院にわたらせ給ひける後、右大將、白河院にまゐりて、むなしくたちかへるとて、私にだにし給ふなよと侍りければ

女三宮の中納言

同十三番右
あらし吹あさぢが末の白露の消かへりてもいつかわすれん

風葉集雜二

風葉云、右大將、冷泉院にかしこまる事侍ていでけるに、わするなと申ければ

同女三宮の御子の中納言

在他書缺物語歌

拾遺百番歌合にみえたる歌

中宮御裳着のとき、御こしゆはせ給ふとて、出させ給ひて、うへに御たいめん有しに、うちの御けしきおぼしいでゝ　女院

拾遺百番歌合二番右

君により雲ゐの人を雲ゐにて心も空になすをみる哉

廣澤にひとり詠めて、あねうへもろともに、おきふしなれにしかたを、思ひ出給ふにも、春やむかしのとのみしのばれて　寢覺上

同三番右　みやこにて風

咲匂ふ花も霞ももろともにみしながらなる春のあけぼの

鳳葉和歌集春下廣澤の淮合

曉しのびまかる所よりかへるとて、冷泉院の左のおとゞの女御のもとに、まうで給へるに、「朝まだきゆきゝの道のたよりにもすぎぬ心は嬉しかりけり」と侍りければ　左大將まさこの君

同六番右

玉ぼこの道行ずりのたよりにもとふべき宿はさしてこそくれ

嵯峨にて、宰相の君の局にて、女君の比巴を聞て　入道右衞門督

同七番右

つげよ猶まやのあまりの雨そゝぎ我立ぬれて歸りわびぬと

兄ノ僧二ノ三丁（七四頁）　石山ヲタリニメノトノ領ズル處ノ寺ノ別當ナリ

宰相中將ノ乳母尼二ノ三丁（七四頁）　女二ノ十七（九一頁）　姫君ノ御メノト

宰相ノ君二ノ廿八丁（一〇五頁）　ネザメノ姫君ノメノト

中將ト云人二ノ卅七（一一七頁）　權中大納言上ノ女房歟

宣旨ノ君三ノ十三（一六六頁）　同　四十二（一九二頁）　二年五十（三十カ）ニ多クアマレルヨシミユ

兵部（卿カ）内侍三ノ卅五（一八五頁）

帥ノ君三ノ四十一（一九一頁）

命婦乳母四ノ三十（二三三頁）

但馬守 トキアキラ朝臣一ノ九(一〇頁)　一ノ廿五(二五頁)ニ年五十計トミユ

ユキアキラ一ノ十八(一九頁)

右近將監 一ノ廿六(二六頁)

一女 右中辨ノ妻一ノ三十三(三三頁)

二女 藏人少納言妻同

三女 一ノ九丁(一〇頁)　中宮ノ新少將一ノ三六(三五頁)

尾張守 五ノ五十六(三一七頁)　少將ガ下リシ尾張守ヲ讃岐ニナリトアリ　讃岐守

少納言 ユキヨリ一ノ九(一〇頁)

權中納言ノ御乳母ノ尼 ユキヨリ少納言ノヲバナリ一ノ九(一〇頁)

丹波守妻 横中歟 大納言ノ今一人ノ御メノトニノ十三(八五頁)　丹波ノメノトニノ廿五(一〇一頁)

新中將 中宮女房一ノ十八(一九頁)

平少納言 同　同(一九頁)

少將 一ノ廿七(二七頁)已下　ネザメノ上御メノトノ女　小辨ノ姉

小辨 同　同　少將ノ妹

權中納言ノ上ノ女房三人○辨乳母一ノ四十二(四二頁)○宰相同○少將一ノ五十七(五八頁)

姫君小姫君トモ御母寵覆上　二ノ十丁ウ（八三頁）誕生　五ノ廿四ウ（一八八頁）御年十一トアリ

マサコ君三ノ八丁（一六一頁）　已下百番歌合鳳葉集ニ左大將トアリ御母同

若君五ノ五十七（三一八頁）　誕生二月十日計　歌合鳳葉集ニ右大將トアルハコノ若君歟御母同

三位中將一ノ三十六（三七頁）中宮太夫中宮ニハ異腹ノ兄ト三ノ廿四（一七五頁）ニミユ

中宮今上后宮　春宮御母

登花殿尚侍三ノ一丁已下（一五五頁）　カンノキミ

○（朱）

（朱）○十（小カ）姫歟

尼上四ノ四十六（二四七頁）　右大臣ノ室　權中納言中宮ノ御母歟

藤典侍三ノ七丁（一六〇頁）　故殿ノ心ヨセカタラヒ玉ヒシトアリ

右大臣三ノ八丁（一六〇頁）　梅壺女御ノ御父歟

四位少將三ノ八丁（一六〇頁）

大貳中納言三ノ七丁（一六〇頁）　民部卿五ノ五十六（三一七頁）

源大納言一ノ

辨少將一ノ　但馬守ノ三女ニスミ玉ハントスルヨシミユ

○(朱)宰相中將ノ上四ノ十二丁(二一四頁)　宮ノ中將ノ北方歟

ウ(ッカ)チノ宮ノ御女權中納言ノ上　寢臺上ノ御母一ノ一丁(四頁)

按察大納言　一ノ一丁(四頁)

宰相

法性寺別當僧都

但馬守妻一ノ

對ノ君一ノ　太政大臣忍ビテメシ玉ノ　今北方トモ　大貳ノ北方三ノ七已下(一六〇頁)

太政大臣北方一ノ一丁(四頁)　左衞門督宰相中將ノ御母

○(朱)大納言ノ上四ノ十二(二一四頁)　辨少將御母歟

帥宮　五ノ六丁(二七一頁)　中納言ノ御シウトヽアリ

中納言ノ上藏人少納言御母歟

關白左大臣　大殿一ノ　故オトヽ三ノ六(一五九頁)　故關白三ノ廿一(一七三頁)

權中納言　兼中將一ノ　大納言一ノ六二(五四頁)　內大臣　右大臣
百番歌合風葉集ニ關白トアリ

太政大臣 一ノ 二ノ十五丁(八九頁)ニテ御出家 已下入道殿トアリ

左衛門督 中納言兼左衛門督一ノ 權大納言三已下 大將五ノ五十六(三一七頁)
御母按察大納言女一ノ

辨少將四ノ一丁(二〇四頁) 右中將五ノ五十六(三一七頁)

右宰相中將 一ノ 宰相中將 新中納言三已下 按察大納言五ノ五十六(三一七頁)
御母同

藏人少納言四ノ一丁(二〇四頁)

大姫君 一ノ五(七頁)ネザメニ五バカリコノカミトアリ同廿七(三七頁)年廿一バカリトミヱ權中納言ノ上
御母ウ(ソカ)チノ宮ノ御女

中姫君 寢覺上 百番歌合ニ寢覺上 風葉集ニ廣澤ノ淮后トアリ

女一宮

女二宮 齋宮
御母同入道殿四ノ五十五(二五五頁)

大皇宮朱雀后 今上一宮御母

宣耀殿女御 今上女御 オホイドノヽ女御トモ三ノ四十八(一九七頁)

梅壺女御 今上女御 女一宮女二宮御母四ノ廿六(二一八頁) 右大臣殿ノ女御トモ

式部卿宮ノ御方 三ノ十一丁(一六三頁) 中將承香殿女御ノ御母歟

夜寝覺物語系圖

○○朱雀院　一ノ一丁(四頁)已下　卷五　六十一ウ(三二二頁)ニ脫文アリソコニ崩御ノ事アリシナルベシ

- 今上　御門一ノ　御母大皇宮　風葉集百番歌合ニ冷泉院トアリ
- 一品宮　內大臣室　三ノ廿四(廿二カ)(一七三頁)已下　御母同

- 春宮　一ノ　御母中宮
- 女一宮　五(四カ)ノ廿六(二二八頁)　御母梅壺女御
- 女二宮　同　御母同
- 女三宮　五(四カ)ノ廿六(二二八頁)　御母承香殿女御
- 若宮　五ノ六十二(三二二頁)　御母カンノキミ

式部卿宮

- 中將　太政大臣御甥　式部卿宮中將一ノ廿二(二三頁)　宰相中將二ノ五十四(一三九頁)　中納言兼右衞門督五ノ五十六(三一七頁)
- 承香殿女御　今上女御一ノ　女三宮御母四ノ廿六(二二八頁)　式部卿宮女御トモ四ノ廿六(二二八頁)

廿七歳
△姫君十一歳

○正月　巻三一丁ウ（一五五頁）
二月　同　十一丁ウ（一六四頁）
已上原本一ノ巻
四月　巻四三十丁オ（二三一頁）
五月　同　四十一丁オ（二四一頁）
六月　同　六十一丁（二六〇頁）
已上原本二ノ巻
七月　巻五三丁ウ（二六八頁）
△姫君十一廿四ウ（二八八頁）
十月　同　三十七丁ウ（三〇〇頁）
○正月　同　五十三丁オ（三一四頁）
二月　同　五十七丁（三一八頁）
已上原本三ノ巻

○廿八歳
△姫君十二歳

夜寢覺物語年立

○八月　卷一二丁オ（四頁）　○寢覺上　十三歳
○八月　同　三丁ウ（六頁）　○十四歳
○八月　同　四丁ウ（七頁）　○十五歳
○七月　同　六丁オ（八頁）　○十六歳
十月　同　廿七丁オ（二七頁）　九月　同　廿六丁ウ（二六頁）
○正月　同　四十三丁オ（四三頁）　十一月　同　三十二丁ウ（三二頁）　十七歳
△姫君一歳

已上原本五ノ卷

三月　卷二一丁ウ（七二頁）　四月　同　四丁ウ（七六頁）　△姫君誕生十ウ（八三頁）
七月　同　廿九丁オ（一〇六頁）　九月　同　四十五丁ウ（一二七頁）
○正月　同　五十六丁ウ（一四二頁）　十八歳
△姫君二歳

已上原本四ノ卷

○此間　寢覺上十九歳ヨリ廿六歳マデ　姫君三歳ヨリ十歳マデ　八ケ年ノ事脫ス

草野子

去年かさせ給ひしまゝに久しくも也待りけるかな、ひと日いとまえつるまゝうつし終てかへし參らする也。このまきくりかへし侍るほど、いとこまやかにみいで給へる御こゝろおきて、いといみじくともいみじくて、

かゝげつる光はさらにあらはれて
おぼろげならぬ窓のともしび

由清君に

窓のともしび

消殘る寢ざめのまどのともし火は
かゝげてもなほおぼろ也けり

横山由清

夜寢覺物語

年　立
系　圖
在他書缺物語歌

窓のともしび

横山山清

附

錄

り、いとおほよそなる様に仰せらるれて、(一)[源皇子]「如何にぞや見えし。(二)御有様は如何なりにけむ。その覺束なさなど、今は尋ね[illegible]らでもありぬべく、味氣無き事なれど、さるも心にはありける」とて、え心つ[illegible]より果て給はず、泣かせ給ひぬる、いみじくいとほしく覺ゆれど、[藤宰相]「女にて(四)平かにおはすめれど、いかでかは、あるかなきかに陸ろへたる様になむ」と申す、[源皇子]「あはれ」とながやかに(五)仰せられて、[源皇子]我も人も味氣無かりける事かな」とて、云ひ思ひても、また押し返し、[源皇子]たださ許りの契逃れ難くこそは物し給ひけめ。萬の事さるべきなり。夢などのやうに(六)思ひないて已みなむ。さ許りもいぶせさ明めざらんは、心止まりぬべく覺えつるに」と仰せらる。

(一)おほよそなるさま—普通と變りない様子で。
(二)御有様は—寝覺上の。
(三)さる心には—矢張り氣にかかる。
(四)女にて　此度寝覺上が生んだのは女で、安産ではあつたがどう云ふわけか、産後は殆ど生きてゐるか死んでゐるか全くその消息の分らないやうな狀態で居られた。
(五)ながやかに—嘆息する意か。又は「なこやかに」の誤か。
(六)夢などの—寝覺上の事は。
(七)さ許りも—併し少しでも寝覺上の消息が分らないのは氣懸りに思はれたが、おの蔭で寝覺上の様子も明かとなつたから安心だ。

もて沈め用意して、いといたくかしこまりて侍ひ給ふ様を、冷泉院「見ざりつる月頃に、また並びなき匂ひ添へてけるかな。いみじからむ罪過更に知るまじや」と、つくづくと見守らせ給ふに、父大臣にい[み]じく似たりと見えながら、何處ぞや母上のふと思ひ出でらるゝ事、猶哀れに悲しく御覽じて、その折の事も中々今更に崩し問ひ恨みさせ給ふべきならねば、冷泉院「今は何かは、身をも世をも亡きに思ひなしてしかば、誰にも逢ひ見向ひ、物など云ふ事もなけれど、さのみ覺束なくてやは。幾世なき世に恨み殘るやうのあらむも味氣無さに」など、仰せられて、打泣かせ給へる御氣色に、中納言もえ忍ばれず。今更に懸けても何ぞや懸けしと思し召されど、なほいと人惡く、座主して冷泉院「一日か御消息聞ゆる心地せしは、確かなるなめり」など問はせ給ふ。雅子君「しか侍ふめりき」とて、御簾の許近く參り寄りて、懷より此の御文を引き出でて打參らせたり。と許り御覽ずるなるべし。いたく御聲打變りて、冷泉院「あらぬ樣に變り給ひにけるは、如何に。大臣の許し聞えられしか」と許り問はせ給ふ。雅子君「その程に、我も、とかく延べ申すべきならねば、とてもかくても罪去り申すべき方なければ、大臣に知られで物せられ果てつ」。寢覺上「猶現し樣にて世にあらむ事、我ながらうとましく覺ゆる。昔よりの本意あるを」とてなむ」と許り申せば、冷泉院「げに此の世の榮花にのみ纏れては、男も女も幾世なき世を過ぎなん事、味氣なかるべき事ぞかし」と許

(一)匂ひ添へて—隨分美しくなつた事だ。
(二)いみじからん罪過—冷泉院の女三宮と雅子君とが戀仲となり冷泉院より雅子君が御勘當せられた事を指す。
(三)父大臣—本篇の主人公。雅子君の實父。
(四)母上—寢覺上。
(五)その折のこと—御勘當を指す
(六)身をも—自分は。
(七)覺束なくてやは—御無沙汰のみしても居られない。
(八)今更にかけても—院は今更寢覺上の事を心に懸けて慕ふのも何故に寢覺上を戀ひ慕ふやうになつたのであらうかと後悔せらるるのであるが、それでも矢張り見苦しく由の座主にして、雅子君に寢覺上の事を尋ねさせる。
(九)一日か御消息—先達つて、寢覺上に私が手紙をさし上げた筈だが、確かに手紙を寢覺上にお屆けしたのか。
(一〇)しか侍ふめりき—左樣、確かにお屆けした筈です。
(一一)この御文—寢覺上より院への寢覺上の出家を告げる手紙であらう。
(一二)あらぬさまに—出家の姿。
(一三)大臣—本篇の主人公。
(一四)果てつ—「ぱこそ」とも讀まる
(一五)昔よりの—出家の本意は昔よりあるのに。
(一六)いくよ—「かく上」とも讀まる

(一)打解け書かれたるしも—「しも」は強勢語。
(二)赫やく心地—こちらが氣恥しい心地。
(三)打ち傾き—頭を傾けて手紙の主を考へて。
(四)思し出づる—寝覺上を。
(五)思ひもかけず—寝覺上が、ふと、便りを寄越すなどと、思ひ寄らぬ事は。
(六)まもらせ—見詰める。
(七)憂く淺ましく—寝覺上は憂く淺ましく厭ひ捨てても、自分(冷泉院)を自分は寝覺上の仕打が恨めしいと思ひ込み、嫌ひ捨てたので、自分は寝覺上の家に染み込んだ寝覺上の事は出家しても忘れられる事が、心強く思つて、此の手紙を見る。
(八)楊貴妃—楊貴妃は玄宗の亡き後、楊貴妃の墓に逢ひつつ、その形を金釵(かんざし)と合(香箱)に細工を各々牛を引折て、蓬萊山に至り楊貴妃に逢ひつつ、その形を金釵(かんざし)と合(香箱)

(一)明闇の空―月が西山に沒せんとして夜明方は明けきらずに未だ暗い空の様子は春の霞秋の霧にも劣らぬ程であるのに。
(二)箏の琴の上。―以下三三六頁九行その琴に續くか。
(三)以上には―原本では以下の文と別の紙に續ぎ足しがあり別の物と思はれる。
(四)院には―冷泉院は。
(五)行ひすましまして―佛道修行にいそしみまして。
(六)山の座主―天台座主。寝覺上一二巻の世話をさした色々の僧都法性寺の法師にこそ―法師にを與へる事なども出來ずは人に相談する事なれば、法師が直きに爲さるべき御程敬意を表すべき必要はない。併し天台座主の人の―院が直接に爲さるもてなしも出來ずは人に相談する事なれば、法師が直きに爲さるべき御程敬意を表すべき必要はない。併し天台座主の人の―
(七)祿などだけは―祿などを。
(八)さばかり―程の人に對して。
(九)御前に召して―御前に召して。―座主を院の御前に召して。
(一〇)うちやすらひて―躊躇し乍ら。
(一一)座主は寝覺上に―座主は寝覺上に。
(一二)誰がにか―誰がにか。
(一三)打解け文―打解け文。
(一四)暗からぬ道に尋ねて入りしかど此の世の闇はえこそ晴るけねは、雅子君の御勘當について心配する事を指す。「宜しきに思し許させ云々」は、雅子君の御許し願へない事でせうか、恐れ多い事ですがの意。

第三段

月入り方の明闇の空、春秋の霞霧にも劣らぬ景色なるに、いと大きなれど、木立物古り、いたく荒れたる所に、散りにし花の梢ども、いと若やかに青み渡れる中に、松の末より、木高く咲き懸りたる藤の、いとなべてならず物より殊に面白し。過ぎにし春の花の匂ひも忘れぬ許りになれば、車押し留めさせて見入るれば、箏の琴の。

院にはいといみじく行ひ澄ましておはしますに、山の座主參りたれば、祿などをこそ合はせ給ふ事も難けれ、法師と云へど、さ許りの人の分け參りたれば、人傳などにもてなさせ給ふべきならねば、冷泉院「此方に」と御前に召して、御物語のどやかにし給ふ。さるべき法文など問はせ給ふに、やゝ久しくなれば、御前に人も侍はず、いと物遠きに、なほいたく打見廻らして、物後めたげに打休らひて、此の御文を參らす。懸けても思し寄らず。冷泉院「誰がにか。思ひも寄らず、心深き御使にも」とて引き開けさせ給へれば、氣色ばみて、此所彼所に書き亂しなどもせず、只例の打解け文の樣にて、

寝覺上「暗からぬ道に尋ねて入りしかど此の世の闇はえこそ晴るけね
は御許し願へない事でせう　か、恐れ多い事ですがの意。

(一)見給へば―雅子君が故左大臣の邸内なる寢殿の様を見ると。
(二)藤は寢殿の東辰巳の―寢殿の東南には藤の東辰巳の―共に木がある。
(三)唐撫子―撫子の色目の名。表裏紅色。
(四)蘇芳―表は蘇芳色、裏は赤又は黄の赤みある色の襲。
(五)薄色―表薄紫裏白。
(六)蛙の―三三六頁八行より續く。
(七)打嘆きしめりて―雅子君の様か。
(八)憂き世には―雅子君の歌、この憂き世につらい世には住み侘びた。時鳥よ死の旅路の道案内。
(九)出で給ふ―雅子君は女三宮女房の中納言の君の家に出て。
(一〇)月影なげの間も―雅子君の月の光をも受けた容姿は少しも氣ならない時に於ても奥床しく。
(一一)送りて―中納言の君が。
(一二)思ふ事大内山の―中納言君の私歌。意は「貴方の戀人である女三宮は大内山の離宮に於て、思ふ事多く貴方と同じ様に泣いてゐる事であらう。」大内山は山城國葛野郡御室の北嶺。
(一三)さりげなくて―さしたる御様子も見せずまでしたが女三宮の御氣の毒な程悲しんで居られる折が多う御座いました。
(一四)げにうちしめり―實際見も知らぬ大内山の山深く打ちしをれ思ひに沈んで居られるで

たる廊に歩み寄りて見給へば、藤は寢殿の東辰巳の隅の端なるに、籬垂を捲き上げて、高欄に、宿直姿をかしげなる童寄り居て、花を見上げたるあり。長押の上の柱の下にいたく居隱れて、唐撫子の色々なめり。蘇芳を上にて、あざやかなる薄色の裳、腰付をかしく引き掛けて、和琴をぞ彈く。

第二段

蛙の聲々此所彼所喧ましきも、をかしくあはれに打眺め渡して、云へば、艶にめでたく、艶めき心深きに、打嘆きしめりて、柱に寄り居給へる程、繪に書きても餘りに見ゆる。萬を掻き盡くし、云ひ置きて歸りなんとする程、郭公一聲打鳴きて渡る。

雅子君　憂き世には我住み侘びぬ郭公死出の山路に導やはせぬ

とて出で給ふ。月影無げの間もゆかしく、涙ぐましく見奉り送りて、

中納言君　思ふ事大内山の山深くさこそは同じ音をば泣くめれ

さりげなくて心苦しく見奉る折多くこそ一と云ふにも、げに打ちしめり、御覽じも知らぬ山深く眺めさせ給ふらむ御有様のこちたさも、只今見奉る心地して。

あらう女三宮の御有様の非常な御氣の毒さも、雅子君には目の前に浮ぶ程の心持がして

(一)淺茅が末の白露と云ひし、中納言の君、里に出でたりと聞きて、打忍び訪ねおはしたるを、見奉りしは一字かばカ、いささかその節の淺きとも見え給はざりしを、雅子君「俄に引き放ち、夢などを見さしたるやうなる哀れを、召されんとも思はねど、今一日の見まくほしさに、懸け留めつゝ永らふる」樣をいとしめやかに言ひ續け給へる氣色の、哀れに心深き樣に、見る人も心盡くしなるまゝに、哀れ多く添へつゝ、かつは慰む許りにも、心苦しきまゝに、答へ聞えつゝ、見出だせば、曉かくる月さし出でて、いと廣くはあらぬ庭のたゝずまひ、さすがに木暗き木の下、いと冴えたるに、遣水に。音も聞ゆなり。朝まだき起きたる人もあなりと、をかしく思ひ遣られて、雅子君「此所は何處ぞ」と問はせ給へば、御供「故左大臣殿の女御のおはする所なり」と申す。眞實さぞかし。いで哀れを「かしき」程なめるを、今少し近く「寄り」て花をも見、琴の音をも聞かむ。「もし」見付くる「ひ」とあらば、雅子君「行き來の道「にも」過ぎ難くて」なども云ひ寄り、雅子君「さらず」ば、忍びても出でなむ」と思して、「御」車より下りて、歩み入り給へど、わづかなる宿直人は、明けにけると思ひて寢にけるなるべし、人影はせず、中門に續き

(一)淺茅が末の白露と云ひし、中納言の君、里に出でたりと聞きて、打忍び訪ねおはしたるを、見奉りしは一字かばカ、いささかその節の淺きとも見え給はざりしを、雅子君「俄に引き放ち、夢などを見さしたるやうなる哀れを、召されんとも思はねど、今一日の見まくほしさに、懸け留めつゝ永らふる」樣をいとしめやかに言ひ續け給へる氣色の、哀れに心深き樣に、見る人も心盡くしなるまゝに、哀れ多く添へつゝ、かつは慰む許りにも、心苦しきまゝに、答へ聞えつゝ、見出だせば、曉かくる月さし出でて、いと廣くはあらぬ庭のたゝずまひ、さすがに木暗き木の下、いと冴えたるに、遣水に。音も聞ゆなり。朝まだき起きたる人もあなりと、をかしく思ひ遣られて、雅子君「此所は何處ぞ」と問はせ給へば、御供「故左大臣殿の女御のおはする所なり」と申す。眞實さぞかし。いで哀れを「かしき」程なめるを、今少し近く「寄り」て花をも見、琴の音をも聞かむ。「もし」見付くる「ひ」とあらば、雅子君「行き來の道「にも」過ぎ難くて」なども云ひ寄り、雅子君「さらず」ば、忍びても出でなむ」と思して、「御」車より下りて、歩み入り給へど、わづかなる宿直人は、明けにけると思ひて寢にけるなるべし、人影はせず、中門に續き

(二)淺茅が末の十番歌合第三番、風葉集雜二、及無名草子にある「あらし吹く淺茅が末の白露の消えぬ歸りてもいつか忘れむ」による。即ち中納言の君はこの歌を詠んだ女三宮の女房なる中納言の君」の意。

(三)里に出でたりと聞きて—女房の中納言が里に罷り出たと雅子君が聞いて。

(三)引き放ち—冷泉院が女三宮を自分から。

(四)あはれを召されんとも—憐愍をかけられやうとも。

(五)見まくほしさに—女三宮にもう一度でも逢ひたい爲に。

(六)懸け留めつゝ—我が命を此の世に留めつゝ生き永らへる。

(七)氣色の—雅子君の樣子が。

(八)見る人も—女房の中納言の君も。

(九)慰む許りにも—雅子君を見てなるさと忘れ。

(一〇)見出だせば—雅子君が庭の有樣を眺めると。

(一一)曉かくる月—「春はただ霞む許りの山の端に曉かけて出づる月かな」の如く夜明方に出る晦日の月。

(一二)遣水に—以下三三七頁六行に續く。

(一三)音も聞ゆなり—以下三三八頁五行より續く。

(一四)故左大臣殿の女御—冷泉院の梅壺の女御。

(一五)わづかなる宿直人は—僅かの宿直の者達は夜が明けたからと寢入つて了つたのであらう

寢覺物語繪卷詞書

の通知の手紙を持つて使に來たので、その由を知つた冷泉院（繪卷詞書第四段）を始め人々は、皆寢覺上の出家を惜しく思ふ。その時に寢覺上は、

類なく憂き身を厭ひ捨てし間に君をも世をも背きにしかな（無名草子、拾遺百番歌合二十番）

と詠じた。出家した後の寢覺上は、始めて平和に後半生を過す事になる。

附記　一、以上あげた外、入道殿七十の賀、雅子君の梅壺女御訪問等の事件があるが、枝葉の事件なる故省略した。

二、「無名草子」に出て來る「中の上うせ」なる語は、假死をさすか、又は眞の死を指すかは疑問であり、その意味の如何は、この物語が、ハツピイエンドに終るか否かの分岐點ともなるのであるが、種々の理由からして、私は僞死を指すものと解した。勿論斷言は出來ない。

三、寢覺上の僞死と、寢覺上が白河院に逃れた事件とは同一かも知れぬが、之又かなりの根據をもつて、夫々獨立の事件となした。

四、上の如くに缺卷の梗概を立てたが、之が確かな筋であるとは自ら信じてはゐない。此の他にも幾多の種々なる梗概推定がなされる事は已むを得ないと思ふ。絕對的に確實な梗概推定は今の場合全く不可能な事である。たゞ此所に述べた所が、比較的に妥當性を持つてゐると云ふ事を主張し得るにとゞまる。

れた雅子君の悲嘆驚愕は非常なものであつた。

雅子君　かけてただに思はざりきや程もなくかかる夢路に迷ふべしとは（無名草子）

遂に母の失踪を悲しむ餘り、雅子君は北山に隱れる（拾遺百番歌合八番、風葉集雜二、又初めより寢覺上を憧憬し、何とかして寢覺上を己の物にしようとした、云はば寢覺上がその偶像でもあつた右衛門督（一二卷の宮中將）は、遂に出家する。それで主人公は、寢覺上なき後の淋しさ悲しさを慰める爲め、且つ、夫右衛門督の出家を悲しむその北の方と同病相憐れむ餘り、遂に、右衛門督上（故關白女）を對の君として迎へ入れて、君達の世話をさせる樣になる（無名草子）。院も失望落膽遊ばされる。北山に數ケ月を過してゐた雅子君は、母の寢覺上が墓はしくてならない。中宮に、

雅子君　知らざりし深山隱れの花の色をあはれ昔と泣く〳〵ぞ見る（拾遺百番歌合十七番）

と云ひ贈つたのも、この時の事であらう。

併し、何時迄も空死（そらじに）を裝うてゐる事も出來ず、寢覺上は一旦世間から交渉を絶つたが、雅子君を始め中宮其他の子供達の身の上が氣遣はれるので、假死を捨てて、又しても世間に現はれる。かくて寢覺上は、子供達を手許に引き取つて養育をし、主人公とも縺りを戻す（無名草子）。又冷泉院には、何とかして雅子君の御勘當を御免しになる樣にと、山の座主の取りなしでお願ひすると、院も寢覺上の再現を喜ぶと共に、直ちに雅子君の御勘氣を御免しになる（無名草子、繪卷詞書第三段）。

その後間もなく、寢覺上は、餘りに數奇な我が身の過去を振返つて、此の世の淺ましさ、はかなさを痛感し、遂に年來の宿望である出家を遂げる。一つにはそれは、寢覺上が又々主人公の胤を宿して女兒を生んだ、その分娩が難産の爲めに出家したのでもあつた。雅子君が母の所からそ

子君の事を考へては女三宮も悲嘆に暮れる。

女三宮　白露のまだ知らざりし奥山にかかるべき世と思ひかけきや（風葉集雜二）

その頃、女房の中納言君は里に出て居た。雅子君は女三宮に逢へぬ憂さ晴しに中納言君を訪ねて、

雅子君　うき世には我住み佗びぬ時鳥死出の山路のしるべやはせぬ

と悶々の心中を中納言君に訴へる。中納言君は女三宮も大内山に於て貴方をどれほど慕ひ慕つて居られるだらうと、

中納言　思ふ事大内山の山深くさこそは同じ音をば泣くめれ

の歌を贈る（續卷詞書第二段、風葉集雜一）。

寢覺上は主人公と比較的安穩な日を送つて居たのであるが、執拗な主人公の嫉妬に辟易してか、或は冷泉院からたつての御召しがあつた爲めか、又は例の大皇宮の奸計によつてか、とにかく秘密裡に、冷泉院の當時居られた白河院に參り、世間から全く隔離した月日を過す事になる。

寢覺上　しをれ佗び我が故郷の狹の葉にみだると告げよ秋の夕風（拾遺百番歌合九番、風葉集秋上）

とはこの時の寢覺上の心であつたらう。併し、白河院に於ても、又々寢覺上は、冷泉院の強い愛情の要求に惱まなければならなかつた。果ては、冷泉院の無理な態度があつた爲めか、寢覺上は白河院を逃れ出たが（拾遺百番歌合十五番詞書）、どこを向いても、寢覺上に取つては煉獄に等しいつらい此の世であつた。遂に寢覺上は、誰とからも交渉を絶たうと決心して、死を裝うて、一時ある處に隱れる。（寢覺上が、死を希望しながらも、死を擇ばなかつたのは、當時冷泉院から御勘當を受けてゐる雅子君、及び中宮その他の子供への愛着があつたからであらう）。この時、後に殘さ

五卷以後缺卷梗概

第五卷に續いて、帝（冷泉院）は讓位し、主人公妹中宮の御腹の東宮が即位する。朱雀院の女一品宮と主人公とは相離別し、女主人公寢覺上が主人公の正妻となる。而して主人公と寢覺上との間に生れた一の姫君、即ち石山で生れた大姫君の御裳着があり（拾遺百番歌合二番詞書、續いて入内して中宮となる。又尚侍殿（故關白女）御腹の冷泉院皇子が東宮となる。

寢覺上　寢覺せし昔の事も忘られて今日のまどひに行く心かな

の述懷は、この時の寢覺上の心を表はしたものであらう（無名草子）。

その後、冷泉院が同じくいつくしみ寵愛して居た、主人公と寢覺上との間の男君なる雅子君と、承香殿女御の御腹なる冷泉院皇女、女三宮との間に、戀愛が生ずる。どの様な理由があつてか、冷泉院より雅子君は御勘氣を蒙り、思ふ様に女三宮との逢瀬を樂しむことも、雅子君には堪めなかつた。ある時は、女三宮の居られた白河院に女三宮をひそかに訪ねたが、女三宮は既に御父に伴はれて、冷泉院（御所の名）に御移りになつた後であつた。雅子君は落膽をする。女三宮との間を取り持つて呉れた女三宮女房の中納言君が雅子君を慰める。

中納言君　あらし吹く淺茅が末に置く露の消え返りてもいつか忘れむ

雅子君　吹き拂ふ嵐に佗びて淺茅生の露殘らじと君に傳へよ（風葉集雜二、拾遺百番歌合十三十四番、無名草子）

その後、女三宮は、更に御父冷泉院と共に大内山に隱れ、雅子君からは遠ざけられてゐた。雅

を知り初めにし始めなりしに、あはれに思ひ捨て難き絆添へて、心に離れ難かりし方様にこそ、あながちに打忍ぶ言の葉も交し聞えしか。限りなき御事と云ふとも、味氣無く、大方ならん御返聞えんも、輕々し。などさべき折あはれにをかしと思されても甲斐あべき身かは。またいとなめく、目覺ましと御心置かせ給ふとても、如何はあらんとする。かくてあるもあるとも覺えず、幼き人々の數々見捨て難く、これかれの御扱ひを我さへ知らずなりなば、如何はと思ふ許りに、永らふるにこそあれ。眞實は世の常に止まる心の無きも心安きわざなりけり。此の世に染む心のあらましかば、恨めしき節なくはあるまじき」など思すに「此の世は、さばれや、か許りにて飽かぬ事多かる契にてや見もしぬべし。後の世をだに如何でと思ふを、さすがにすがすがしく、思ひ立つべくもあらぬ、絆がちになり增さるこそ心憂けれ」と、夜の寢覺絶ゆる夜なくとぞ。

(一)絆―子。
(二)交し聞えしか―右大臣と。
(三)限りなき御事と―帝の御事と
(四)思されても―帝に思はれても
(五)御心置かせ―帝が自分に隔てを置いても。
(六)世の常に―子供などのない方が安心だ。出家しても此の世に心が引かれる時は、恨めしい事が多いばかりだ。
(七)さばれや―仕方がない。
(八)や見もしぬべし―或ひは「止みもしぬべし」か。
(九)思ひ立つ―出家しようと。
(一〇)絆がちに―子供が多くなる。

(一)この御方―寝覚上を。
(二)物し給へば―寝覚上は。
(三)見知られ給ひても―深く帝に好意を持たれても、寝覚上は我が身のみ殘念に思はれ、帝の好意を思ひ知り顧なるも却つて いけない事であるから。
(四)をとこ―右大臣。
(五)名殘遠く―朱雀院崩御の後、日も經つに從つて女一宮の心細げになるを、右大臣は慰めようとして。
(六)女君―寝覚上。
(七)いみじからん事―ひどいと思ふ恨み言も、心の外には洩さない様にしてゐるので。
(八)こりずまなれど―右大臣は懲りもなく。
(九)あめりしかど―あつたらしいが。
(一〇)かゝる御心を―かうした貞節な心の寝覚上なるに、自分が亂暴に思ひあがり、も少し先の事まで かけて女君に誓つて貰はうと思つて云ふ中に、女君から恨めしく思はれたのは無理もない事だと。
(一一)いかでか人の御心―どうして人の心にこれほどつらいものだらうかと云ふ事を知つたのは、いやなしに右大臣からの關係を付けられて、此の世のつらさを初めて知つた時が最初であつたが。

こよなかりけるは、人の恣りならねば、云ふ甲斐なし。大方の有様、我が御心ざしは、督の君に貶し聞えん事は、いと心苦しうて、私物に此の御方をぞ思ひ聞え給ふ。何事も先づ聞え合はせ給ふに、物深く云ふ甲斐ある方も、いと目安く物し給へば、さらぬ顔にて、殊に御心寄を淺からず、見知られ給ひても、身のみ口惜しく覺ゆれど、思ひ知り顔ならんも、中々なべければ、男君の御前にては、ただおほどかなる様にもてない給へ。字イひつるなどぞ、いと目安う見え給へる。朱雀院には名殘遠くなるまゝに、宮のいといたく心細げに思し亂れ給へるを、此の程は夜離なく、慰め奉るべきものと思せば、彼方がちに繁う物し給ふを、女君も、さるべきことわりと皆思し知り、いみじからん事をも、心より外に洩らすべく、はた、物し給はねば、いとなだらかなり。懲りずまなれど、物のついでに、なほえ忍び果てず、右大臣内より立ち歸り御消息はあり「や」と問ひ出で給ひたるに、寝覚上「さればよ、例のとうるさければ、寝覚上「あめりしかど、いざ見ずなりにけり」と宣ふを、右大臣「さは何處へか散り失せにし」と尋ね給ふに、硯の箱を押し寄せたるを開けて見給へば、ただいまだ結ばれながらあるを、なほ有難く哀れに、かゝる御心を我猛く思ひ驕り、今少し行く先をかけて聞ゆる程に、恨めしく思さるゝことわりに、涙も落ちて、引き開けて今ぞ見せ奉り給ふ。寝覚上「如何でか、人の御心、かくしもあらんとおぼほゆるも、えさらず憂き世

るを、今宵は眠たく侍るを、歸り給ひて、後にも」とて、せめて引き入りぬる名殘、(一)事しも、年月を經て思ひ渡らん人を、たまさかに行き逢ひて引き外されたらん許り、飽かず佗びしく、と許り眺め入りて、院に立ち歸り給ひても、右大臣「(二)思したりつる御氣色のことわりに、(三)故大殿の萬の罪を消ちたりける名殘の心驕りに、我がいさゝか思はずなる一言葉をば、いと淺く憂きものに思ひしみ入り給へる、ことわりなりや」など、(四)餘り從へんと云ひつる程に、恨みられぬらん。我をば露も心過たじと思したるものを」など、ありつる御面影も心に懸りて、露まどろまれず、思し明かして、身の怠りを書き盡くし、右大臣文「さもこそあらめ、引き返し、いさゝかも御心の直らで、御覽じ捨てゝ、引き入らせ給ひしつらさ」を、おどろ〳〵しく書き給ひて、

右大臣(五)搔き昏らし昔を戀ひし月影に我中空に泣く〳〵ぞ來し

とあるを、今めかしの樣やと見給ひて、

寢覺上(六)なか〳〵に見るにつけても身の憂さの思ひ知られし夜半の月影

とのみあるを、打ちも置かず、見居給へり。御忌果てぬれば、何時しかと渡り給ひて、ありし夜の怠り述べ續け、人の御恨めしさも、盡きせず聞え惱まい給ひつゝ、珍しくいみじきに、明くるも知り給はず。督の殿の御方に渡り給ひて、若宮見奉り給ふ。(七)御方々は母屋の御簾の中に近くおはしますに、廂の簾上す。(八)上もかの御契の

(一)事しも―恰度まるで。
(二)思したりつる御氣色の―寢覺上が昔戀しく思つた樣子も尤もで。
(三)故大殿の―故關白が凡ての寢覺上の罪を思ひ消してゐた事に馴れてゐた、その名殘りの思ひあがりから。
(四)あまり從へんと―强ひて靡かせようと私が强く云ふものだから寢覺上に恨まれて了ふのであらう。もと〳〵寢覺上は私の心には背くまいと思つてゐた人であるのに。
(五)搔き昏らし―「月影」に寢覺上を譬へる。「中空」に「泣く」をかける。昔の故關白を惹ふ貴女に、愛想なく斷はられて、私は泣く泣く歸つて來ました
(六)なか〳〵に―夜半の月影に貴方を見るにつけても、却つて我が身の憂さが知られます。
(七)御方々―尙侍殿の姉君達。
(八)上も―帝も寢覺上との緣が此上もなく淺かつたのは、人の過失ではなく、自分が惡いからなので云ひ甲斐もない事である。

(一)あたくゝ「仇しゝ」などの誤脱か。
(二)人り給ひなん―帳の中に。
(三)さおぼすだめり―自分が恨んでゐるのだらうと、右大臣は心の中に推測して。
(四)今より後の事をも―今後の事もこの事につて豫め云つて置かうと思つて。下の「引きかへ」にかかる。
(五)隈なく―すつかり昔の故關白を戀しがつてゐる様な寝覺上の様子。
(六)姥捨の山の月見む心地―古今集「我が心慰めかねつ姥捨山照る月を見て」に據り、姥捨山に寄り居つてゐる右大臣の上に寄り居給へる意。
(七)岩の上に寄り居給へる―岩の上に寄り居つてゐる右大臣の有様を見給へる。
(八)昔の御心のみ戀しく―昔の故關白の御心のみ戀しく。
(九)などて少し―なぜもつと、故關白に過したら打解けるだらうかと。
(一〇)入れ給ふべくもあらねば―右大臣を、張の中に入れて呉れさうにもないので。
(一一)御消息―立ち返り帝からの御便りがあるだらうなどと、右大臣は思ひ遣られるが。
(一二)思ひ遣られど―一本の如く「る」が入るべきである。
(一三)我が心の愈―自分のあまりに恨みがましい心の過失からこの寝覺上の氣持を損れて了つたので。
(一四)解けて寝てのみ―心安く寝て夜を明して許りゐたのに。

我からにあたくなりぬる方は、その御心のけぢめも無かりけるをや」と、あいなく我があながちに慎み從ひたる心を、悔しく思し續けて、答へもせず、ただつくづくと打眺め出でて、いと引き隱し、事無しびにて入り給ひなんとするを、控へて、さ思ずなめりと、御心の中推し量り、氣色見るに、いとも〳〵いみじき、こゝろわりに、我が餘りの心に、今より後の事をも、此のついでに取り出でんと思ひて、隈なく昔戀しき氣色を見るより、悔しくなりて、引き換へいみじく慰めこしらふれど、さだに思ひ續け、眺めだちぬれば、姥捨山の月見む心地して、月影にいと艶かしくて、岩の上に寄り居給へる、繪に書きたらんやうに見ゆるも、味氣無やと目にも留まらず、少しさだ過ぎ、世の常のなべての様なりし、昔の御心のみ戀しく、などて少し打弛ぶ氣色を見え奉らで過ぎにけんと悔しきに、月の光も見えず、涙のみ浮かぶを、餘り見給ふらんと、心耻かしきに、入りなまほしけれど、さすがに許し給はねば、さらぬ顔に紛らはひつゝ、入れ給ふべくもあらねば、立ち返り又御消息ありつゝ、むかしと思ひ遣られど、え問ひも出でられ給はず。我が心の愈りの餘りに、此の御氣色をかくなしつるよゝに、いとほしく苦しきまゝに、萬を搔き盡くい給へと、更に聞き止め給はぬ氣色に、夜は更けぬれど、立ち出づべき方も知らず、とざまかうざまにこしらへ佗び、果ては涙をさへ落しかけ給へど、寝覺上「日頃解けて寝てのみ明かし侍

に書き付けられつるを召して、寢覺上「かやうにぞ書く心地しつる。かたはら痛しや。物の覺えざりつるまゝに」とあるを、月に宛てゝ打見給ひて、右大臣「如何で〳〵此の御弔ひを申さばやと思しけるに、かゝるついでを喜びながら、懇にあはれげに申し給ひてけるは、如何に身にしむばかり、いとど待ち御覽じつらんな、心を盡くいて、はた書き盡くいつらんな」と云ひ續けて、いと物しく思したるを、寢覺上「怪し。『されば、こそ御消息は聞えつゝれ。さしてゝらでありなん』とこそ宣はまし。『數々やうに』とて、故殿の此の御事を夢ばかりかすめ出で給ふに、我がいみじと打變る氣色を見給ひては、いみじき過しつと思して、引き換へこしらへ慰め思ひながら、懸けても懸け給はざりしものを、あながちに此の御心をば包み思ふ甲斐なく、はかなき程の罪あるまじき事をも、かくのみ取りなし給ふ、こよなき御心の程なりし。覺束なくて、隔たる日頃の事などをもさしおきて、すずろなる事を云ひ出でゝ恨み宣ふ。なぞあいなく幾世あるまじき世に、うけばり物を云はでであらむかしと思ひ消ちて過すを、餘り心もなき者と侮り易く思すなめりかし。如何に世を思ふらんなど、憚り思す所のなきよ。いみじく物思ひ知り、なべてならぬ物に云ひ思はれたる人も、憂き

(一)かやうに―「こんな風に書いたはかけ思ひます。疑をかけられはなら笑と止なまゝ何も考へるたのにしと寢覺にで書きつけいまし右大臣はそ手紙の寢覺上が言ふ月の光にあてて。

(二)如何で―帝はどうかして貴女に便りをしたいと思つてゐた處、皇子を御誕生遊ばされたんを御便りを寄越すに、又御覽貴女身につ貴女はたしなむ事ばかりを盡せ。

(三)怪し―寢覺上の心にもなくうれしく嬉しい事ばかりだ。

(四)數々―右大臣は云ふ事だ。

(五)あながち―大臣は自分は一生懸命に右の遠慮深い心の人。

(六)御心―右大臣の甲斐なく、はかなき程の心。

(七)あまりの程―大臣は、氣心も知れぬ女と私を思ふだらうが、

(八)いかなに―世を怨しく思ふ。

(九)いみじく物思ひ知り―非常に分別もあり又普通の人とは違つた立派な人と思はれてゐた男でも、その人自身のあやまりから關係の深かつた女より離れて行く事がある。その場合特別に相手の女に隔てる心もなかつたに。私と右大臣との關係は丁度其の自身で私から離れて行くのだなどと、遠慮して思ふ心は右大臣には少しもない。

(一)かくてある―この様にしてゐる自分（寝覺上）は。
(二)身に過ぎたりと―身の當然以上に過ぎて、物はかなき今の我が身の有様と思はれるのは何の爲だらうか。
(三)やむごとなき人をかた―以下脱落あり。「かた」は「片時」などとありしならん。
(四)忍びかねて―右大臣は我慢も出來ず女一宮の許から又歸り寝覺上の居る對に續いた、緣はなくて岩に渡しかけてある廊下に寄り居て。
(五)紅の單の御衣―以下寝覺上の描寫。
(六)折惡しく―朱雀院の御忌で。
(七)さらでもありぬべき―右大臣はしなくてもよささうな嫉妬の心が深く起つて。
(八)ただ御返ばかりこそは―ただ返事だけは、平凡に書きました。

宿世なめし。我が身許り思はずにて已みぬる類、多くはあらじを、(一)かくてある、げに跡はかなく、物寂しげに、かすかなる際にはあらねど、身に過ぎたりと覺ゆるは何。(二)そはやむ事なき人をかた。

(四)忍びかねて渡り給ふ。おはしますす對に續きたる渡殿の、見んに字暮はなく、岩に懸けたる方に寄り居給ひて、御消息あれば、ゐざり出で給ひたり。戸を押し開けて、月のいみじく明きに、御簾少し卷き上げて、岩に尻打ち懸けて見入れ給へば、(五)紅の單衣の御衣の色、いと濃きに、もてはやされて、いと白き御色は、雪などを丸がしたらんやうに、隈なきに、御額髮は絲を縒り懸けたるやうにこぼれ懸り、袖の上にゆる〳〵と引かれ出でたる樣、懸れる絶え間〳〵のいと白く艶きたるが、常に目馴れたる人とぞ見え給はぬや。右大臣「日頃の事ども、折惡しく、映えなき程なるこそ口惜しけれ」など宣ふ。御答よき程におほどかに宣ひ出でたるなど、深きゆゑよし添へらるゝ節もなけれど、萬に勝れてのみ聞き思ひなさるゝ餘り、(七)さらでもありぬべき物恨みの心も淺からで、右大臣「さて内の御返は如何聞え給へる。」寝覺上「何事をか。ただ御返許りこそは、いと直々しく」と答へ給ふ。右大臣「さても、如何」と問ひ聞ゆれど寝覺上「忘れにけり」とて、宣はぬを、右大臣「あながちに隔て給ふべき程の事にもあらぬものを」と恨みられて、必ずかからんものぞと思しければ、筆試み給へるゑゝ

らせ、殿の上許りを頼む蔭にて、我が下方と思ひなすに、かゝるを打聞きては、などか我もかゝる人を今一人な。今少し世にも驚かれ、我が心地にも如何許り嬉しからまし」と、かゝるにつけて、御心動かぬ様もなかりけるを「まいて故大殿の世に、我が様にて后に居など、たゞ廣ごりに廣ごらさしは、げに立ち並び憎くもあるべかりけるかな。その折は、餘りの心にもあるかな。何事にかは、我が身には心動く許りの事のあらんと思ひ侮りしは、悪しかりけりかし」と哀れに有難く思し出でらるゝにぞ、せめて我が御心をも靜め聞き過ぐし難くて、御消息などありける。いとめでたく嬉しげなる御産屋の、院の御忌、さし合ひて、いと折悪しくて、何事のはえもなし。御産屋に籠り給へる、さべき限り内々に忍びやかにもてないたる許りぞ口惜しげなりける。かからぬ程ならましかば、いとど如何はめでたからまし。内には、かゝる御思ひの程とは云ひながら、いと過ぐし難く聞し召し喜ばれて、大臣もなかんなる程、督の君に立ち代る返事、さりともあらじやは。さてだにこそ見めと思し召して、七日にならせ給ふ日、青鈍の紙に、

墨染に晴れぬ雲井も朝日山さやけき影に光をぞ知る

と仰せられたり。御思ひにも障らず喜ばせ給ひたる、なげの言葉の取り續けられたる様めでたしかしと、嬉しく見給ひて、これこそは女のある甲斐ありと云ふべき御

(一)かかる人—皇子をもう一人欲しいな。さうすれば。

(二)何事にかは—尚侍がどんなに出世しても、自分の心の動く様な事は決してあるまいと、輕蔑してゐたのは悪かつた事だ。

(三)哀れに有難く—故關白の自分に對する志が。

(四)かからぬ程—朱雀院の御忌等のない時。

(五)督の君に立ちかはる—尚侍に代る寢覺上の御返事。

(六)墨染に—雲井に宮中をかける忌服で陰鬱な宮中にも、皇子が生れた事により光もさして來る事である。

(七)うれしく見給ひて—寢覺上は

(八)これこそ—皇子を產んだ尚侍の宿世こそ、

(一)この事は―この尙侍殿の事は

(二)人劣り―中宮の東宮に引きかへて、尙侍殿の御子が女の御子であるなら殘念だが、皇子であつたから理想的で嬉しい。

(三)かかる御事に　右大臣は、朱雀院崩御の後業の爲に、

(四)御思ひ―忌服。

(五)殿の上の　寢覺上が思ひ立つ事もしなかつた尙侍の位に、寢覺上の代りにとだけでそれほど深く尙侍殿を思つた事ではないのに、皇子が生れたいとは、他の人よりはすぐれてかうした宿世のあつた事であると、「釣舟」は引歌あるか。

(六)內にといふ事　尙侍殿を入內させようなどとは故關白は思はず。

(七)世の光　皇子。

(八)我にも劣るまじかりける―尙侍は自分（中宮）にも劣らない程の容姿であるのに、私と立ち並ばせては自然無禮にもなるだらうと故關白が深慮をして入內させず、大殿に無理に嫁がせようとしたのを、常より尙侍にとつたものだから私が萬事承諾して參內させた。

(九)大殿に―此の人物不詳。或は右大臣か。

らましかど、如何はせん。そは餘りの事なり。此の事は、私樣に心苦しく思ひ扱ひ聞え給ふに、人劣り給はましかば口惜しからましを、後は知らず、此の際は思ふ樣に嬉しくもと聞し召し、御產養など、はえ〳〵しかべき程にはあらねど、侍ひ給ふ限りの人々は、よきついで、書讀むべき博士、弦打仕うまつるべき人々など、皆掟てさせ給ふ。かゝる御事に籠りて、忌々しき事をのみ扱ふに、此の御事を口入れんも忌々し。その程の事は右大將按察使の大納言など掟て給ふべく宣はす。內にも御思ひの程なれど、例ある事は忍びやかに、御佩刀など賜はせても、殿の上の思ひ立つべくもあらざりし釣舟許りに、物はかなく思し寄らせ給へりしものを、人よりけにかゝる契のありけるよと、淺からず聞し召し喜ばせ給ひたる樣、いとめでたし。父大殿、さ許り我がまゝなりし世を、怪しく思ひ卑下して、內にと云ふ事思ひ懸けずなりにしかば、いと宿世惡く、物はかなくて果て給ふべきものと、大殿失せ給ひて後は、幸ひなき例に引き出で、侮り聞えしに、思はざる外に內に參り給ひて、憎からず思し召されたりつるに、いと思ひの外になりつるを、程なく世の光を取り出で給へる契のめでたさは、天の下云ひ驚きたるを、中宮も聞かせ給ひて「我にも劣るまじかりける人の有樣を、立ち並びては、自らなめげなる事もありなんと、故大殿のかしこまり憚りて、大殿にあながちに心ざし給ひしを、我が心と許して參

らを盡くして、天の下營み響きて、過ぎ行くまゝには、若君の御美しさを、殿(一)もやう〳〵さとし、殿の御年どもも物思し知る程になり行きて、慎ましき事なく、打解け安らかにて、諸共に扱ひもて遊び奉り給ひつる御仲らひ、いと見る甲斐あり。宮の御方には事に觸れて消ち難(二)くのみなり增さり給ふを、安げなく思ひ愁へ、大王(三)の宮も憎く目覺ましくて、此の上(四)現れ給ひにし後、殿に御對面もなく、いといみじく御氣色悪し添ひ物し給ふも、かゝる程ぞ頼もしく思し知られさせ給ふ。後(六)の御事など、公事はさるものにて、ただ萬に、此の殿ぞ仕うまつり給ひける樣、いとさべい事(七)云ひながら、あはれに見ゆ。東殿には尙侍の殿の御産の程なるに、さる程穢(八)らいの行きまじるは、忌むべき事なれば、殿もえ渡り給はず。御消息のみ隙なく通ひつゝ、權大納言、按察使大納言、民部(九)、右大將(一〇)、さべきゆかりと云ふ中にも、故大殿の御時に取り分き淺からざりし御心ざしを思し知れば、此の君達(一一)の御事をこそは仕うまつらめと思して、院の御忌には立ち離れ給へり。御祈なども樣々添へて、殿の上故大殿の御末のはかばかしからずおはせんは、哀れに口惜しく、如何にと、折の悪しさをさへ嘆かしく思すに、七月朔日頃いたくも惱み給はで、男皇子生み奉り給ひたる嬉しさぞなのめならぬや。殿(一二)も、中宮に於き奉りては、春宮おはしませば申すべきにあらず、げにその中にも今一所おはしまさば、月日の光を並べたるやうにこそあ

(一)殿もやう〳〵さとし—若君の美しさを殿も漸く知りの意か。一本の「殿もやう〳〵御年どもも」の方宜し。

(二)消ち難くのみ—右大臣の無情な仕打ち、おさへつける事も出來なく。

(三)大王の宮—大皇宮。

(四)この上—寢覺上。

(五)悪し添ひ—「悪しさ添ひ」又は「あらそひ」の誤脫か。

(六)後の御事など—朱雀院の薨去後の御事など。この邊脫落がある樣である。

(七)さべい事—下に「と」とあるべきである。

(八)さる程穢らい—朱雀院の崩御の穢れ。

(九)民部—民部卿。前大貳。

(一〇)右大將—權大納言の子。

(一一)この君達—故關白の遺子の尙侍殿達。

(一二)院の御忌には—朱雀院の御忌には參らなかつた。

(一)これ侍らざらん程―「これ」は「日放たせ」にかゝる。私が居ない間、この若君より目を放してはなりませんよ。
(二)誰を―どの子供を。
(三)御伸ら―故關白と貴女との御仲に。
(四)さる者もさはせで―子も生れないで。「さはせで」は「おはせで」の誤。
(五)ゆきめぐり―私が又貴女に行きめぐり逢ひ、眞に深い私と貴女との契なる事をいつの間にかこの若君によつて知らされたのが。
(六)なれど―など云ひて。
(七)人の御心はかばかり―男の心は皆此の右大臣のやうにありたいものので、右大臣の遺り方にはいと少しも自分に取て恨めしい事はない。當然の事なのだから致し方がない。
(八)やむごとなき―女一宮といふ高貴な方が、北の方として内大臣には立ち並び。
(九)安げなき―自分に安き樣子もないのは自分の身の不運なのだ。
(一〇)御産屋―産養の事。
(一一)見なし―「誓し」とも解せられる。

らんとぞ思さるゝ。若君をも御懷に抱きて、つく〴〵と見奉り給ふに、あざ〳〵と美しき顏樣、今から何れにも劣るべくもあらぬを、勝れて悲しく見奉り給ひて右大臣雅子が幼くより、今は内にのみつと召し籠められて、心に任せて見る事も難く、飽かずのみ覺ゆるに、かくらうたき私物を見たる事とて、右大臣(一)これ、侍らざらん程目放たせ給ふなよ。誰をおろかなりとにはあらねど、忍び嘆きてのみありしに、年頃き許り隙なかりし御伸ら(二)ひに、さる者もさはせで(三)、行き廻り(四)、いと深かりける契を、何時しかと知らせたるが、いと嬉しく哀れなるに覺え侍るなり。暫しも見ざらんは、いと後めたかべきこそ苦しさをも添ふる心地すれ(五)など、盡きせず飽かずのみ思して、渡り給ふ程の氣色の、遙かなる別れめきてあるを、おろかならず見知られイナシて驚畫上人の御心はかばかりこそはあらめ。恨めしき節やはつゆもえじる、やむごとなき片つ方の立ち並び、安げなきは(九)、我が身の契の憂きが怠りにこそあれ(八)など、日頃立ち去りせず扱はれつる習ひ、心細くつれ〴〵なるに、何時しか尚侍の殿、大將殿、衞門の督の殿打續き渡りて見奉り給ふも、樣々いと賴もしげなり。如何におはしまさんと誰も心を盡くし給へる御産屋(一〇)、平かに思ふ樣に見なし奉り給ひて(一一)、思ひもなく嬉しく、心地も安まりて、若君の御五十日や、百日やなど、先々五に外の事とのみ聞き給ひしを、飽かずいみじと思しける事なれば、取り重ねいみじき清

女房盃取りなどして、物被けらるる、例のごと。

九日の夜は、右大將按察使の大納言魂勝れ、勞ありて物し給ふ人々にて、いと今めかしく、心殊にせられたれど、有樣は同じごと。上達部殿上人夜ごとに參りて、御遊びあり。殿の例よりもいと心地よげに打亂れ囃させ給へば、惜しむ人なくめでたく面白くて此の程過ぎぬ。

殿はあからさまにも立ち出で給はざりつるを、さのみやはとて、宮の御方に渡り給はんとて、右大臣「今はなほためらひて、起き居さわやかにもてない給へ。(一)さおはすめりと見置きてこそ、異方に侍らんも心安からめ。かくてのみ臥い給ひたるを見置きては、靜心なく、わりなかるべきを、苦しう思ひ亂れ侍り」と聞え給へば、憂曇上「今は何かは、後めたくは起きねど、心地もさわやかになりにて侍るものを」と聞え給へば、右大臣「例の心憂き御心。『(二)わりなく苦しく覺ゆ』とも惜しみ腹立ち給はましかば、如何に嬉しからまし。心憂くのみも」と涙みて、いとさいまめやかに恨み聞え給へば、憂曇上「(三)泣くにし留まるものならば」と打微笑み給へる顏の匂ひ、何の淸らあるべくもあらず、御髮は白き御衣どもの厚肥えたるに埋もれて、鏡などをだに見給はず面痩せ給へりしも美しくらうたげなる事、增さりて見え給ふをと見るにも、かく見るにも、如何でいとかくのみは人勝れん。(四)片方は我が心ざしの切なる見なしにやあ

(一)さおはすめりと—もう貴女が元氣になつたと見置いてこそ他の所に行くのも安心でせうのに。

(二)わりなく—私はあなたに傍を去られるのがつらい。

(三)泣くにし留まる—私が泣くので貴方が留まるならば泣きもしようが、どうしても去る貴方を誰が泣いて引留めるものですか。古今集夏「散る花の泣くにし留まる物ならばわれ驚に劣らましやは」による。

(四)片方は—一方には、我が寢覺上を思ふ心の深いその慾目からも知れないと。

(一)こちたきのいとなみ―「こちたき世の」と一本の如くあるべきである。
(二)おりたちて―右大臣自身親しく。
(三)中宮より―下の「萬をこちたく」にかゝる。中宮は、右大臣が年来の本望叶つて大變滿足してゐるだらうと推測したので、右大臣が待ち受けて驚く程。

(四)宮の亮―中宮職の次官。
(五)巣籠りて―この歌以下脱落餘白あり。眞鶴は寢覺上を嘗へた。
(六)れど―底本以下丁を改む。
(七)此の人の身にとりては―以下寢覺上の遺稿。
(八)こそ―右大臣は、自分の内心にこそ少しも他の女に分ける心もなく、深く染み込んだ寢覺上である。
(九)立ち增り―寢覺上にも立ち增り貴い身分の女一人とも體裁よくて、二人並べて、云ふ事はなすと思ふ心苦しく我が罪得がましてゐい事ながら、寢覺上に對して寢覺上をあれるが、かつて、寢覺上に對する切ない心が少しは減じて命も延ぶるなるのではないかと思ふのは、無理な右大臣の心である。

事をだに、(一)こちたき(イ世)の營みなるを、まいて此の度の事(イ)もは、(二)おりたちていみじく御心に入れ給ひたれば、誰かはなのめに思ふがあらん。此の折に如何でも深き心ざしを御覽ぜられんと、心を盡くして、三日にならせ給ふ夜は、殿の政所わざにて、殿の家司などさるべき限り、我も〳〵と心を盡くして仕うまつれり。大貳の民部卿も同じ夜仕うまつり合はせたり。五日は權大納言衛門督、七日は中宮より、年頃の御本意叶ひて、いといみじく御心に入るらんと推し量らせ給へば、待ち受け、御心驚く許りと、萬をこちたく御用意せさせ給ひて、御產衣など更なりや、御使には宮の亮、えも云はぬ白き紙に包みて、銀の五葉の枝に付けられたり。

中宮巣籠りていぶせく聞きし眞鶴の

(ロ)れど、此の人の身にとりては、それ、かしこかるべくもあらず。我が世に、はた、內々こそ露分くる方なく染み返りたれど、立ち增さりやむごとなき人を並べて、樣よき程にもてなしたる、打見るに、我にていみじく心苦しく罪や得らむと覺ゆるに換へて、命はさりとも延びもすらんと思しやらるゝぞ、あながちなる御心ざしなるや。打ち返し〳〵見給ひて、右大臣「宮はさかしく起き居て筆打ち繕ひてぞ書き出でつらんとぞ御覽じつべかめる。少しはかたほに書きなし給はで」と打微笑みて、御使に、

(一)さべきとは云ひながら―かくなるべき前世の約束とは云へかうなると豫想すべきだつた右大臣を女一宮の婿としたのは悪い思ひ立ちだつた。
(二)任せて御覽ぜよ―右大臣のなすに任せて御覽なさい。
(三)かからん程―出産といふ大事な時に。
(四)宮ばかり―女一宮ばかりには
(五)この御事―寝覺上の出産の事
(六)關のあなた―逢坂の關の彼方の石山に。
(七)若君―雅子君。
(八)我が御手づから―右大臣自身の手で。

事なり。(一)さべきとは云ひながら、さもこそ思ひ寄らめ。悪しう思し立ち初めしなり。さて猛かるべき様なし。人は中々心安くこそ思ふならめ。をこがましく、さりとも世におろかには思ひ聞えじ。(二)任せて御覽ぜよ」と教へ奉らせ給ふ。かゝる事どもを聞き給へど、ただなる折は宮がちにこそ侍へ、(三)かからん程はいみじき事ありとも、横目すべき事にもあらずと、聞きも驚かれず、(四)宮許りにはいと心苦しく語らひ聞えさせ給ひつゝ、暇聞え給ひて、ひとへに此(五)の御事を思すに、二月十日宵許りより、その御氣色にいと痛く悩み給へば、いとど物覺ゆる人なく、殿の中も騒ぎて、御修行や何やと現心なる人は少なく、念じ惑ふに、からうじて男にて、平かに生まれ給へる嬉しさぞ類なきや。姫君の御時には更にも云はず、隠し惑ひ、思ひ嘆きつゝ、關の彼方(六)に引き忍びたりしに、訪ね行きて見思ひし悲しさは、如何許りの心地かはせし。若君(七)の御時に、はた人に扱はせて、餘所の者と聞きなして、いみじく覺えしに、行き廻りて、程なく深き契のしるしに、さし出で給ひたる嬉しさもあはれも勝れて、生まれ落ち給ふすなはちより、抱き上げて、臍の緒なども、我が御手(八)づから、異人に手觸れさせ給はで、思ひ喜び給ひたる様の限りなきを、見奉り知れば、殿の中の人(イ人)ひとへに心地よげに嬉しげにて、御湯殿の氣色を始めて、御弦打ち、文讀む人も、かたほなるは交せず、撰り調へられたる、はかなくわざとならず思いたる

思し續くる。

その晦日の司召に、我右大臣になり給ひて、(一)大納言を内大臣になし上げ寛ろげて、大將に新大納言、新中納言大納言になして、陸奥國の按察使兼けさせ給ふ。源宰相中將を中納言になして、衞門督兼け、(四)前大貳を民部卿になして、權大納言の子の蔣少將を右大臣(五)に上げて頭になり、(六)少將が下りし尾張の守讃岐になりなど、ただ此の御ゆかりの一筋の(七)世の道理も消ちて、喜び榮えたる樣を、何れの御世にもいみじの人の御覺えやと云ひ驚きたり。更にも云はず、引き續きて殿の上(八)拜みたてまつりてぞ、外には歩き給ひける。(八)按察使の大納言に於いては、姫君(九)の生まれ給へりし折の御心掟を、あはれに思し染みにければ、人の恨をも知らじと引き越えて、親子なし上げても、なほ飽かずぞ思されける。(一〇)故大殿は、上の內々の(一一)御心ざしこそ、いみじかりしか、大方は權大納言羨み無くもてなし給ふ所もありき。此の御折の心は、ただ此の人の御まゝなるも、片方は人から心用ゐなどぞ、いとよく物し給ひける。大皇宮はこれを聞し召すまゝにも、大皇宮「如何でかく心のまゝにては見聞かん」と云はれさせ給へど、院の上(一二)「如何はせん。帝すら大臣のまゝにおはします。代も去りにたり。逆へ云ふべき方なき事なり」と宣はするを、大皇宮「さればただ宮を迎へ取り奉りて、又再び相見せ奉り給はじ」と宣はすれど、朱雀院「それ音聞いと怪しからず、直々しき

(一)一大納言を—首席の大納言を内大臣に昇進させて。
(二)新中納言—故關白嗣君。
(三)源宰相中將—故關白嗣君。
(四)前大貳—對の君の夫。
(五)右大臣にあげて—右中將の誤。頭は藏人頭。
(六)少將が下りし—少將は寢覺上女房。少將が嫁いだ尾張守は讃岐守となり。
(七)この御由緣—寢覺上、故關白の親類緣者。
(八)按察使の大納言—寢覺上の兄君。元新中納言。
(九)姫君の—大姫君が石山にて生れし時の。
(一〇)思ひ主人公—內大臣が。以下大人公たる右大臣と呼ぶ。
(一一)故大殿は—故關白の政治を取つてゐた時の司召には、帝の內內の御心も與つて力あつたが、內大納言が誰にも羨みのない樣に處置してゐたのであつた。處が此度はただ內大臣の心の儘であるが一方は品位又心の用ひ方も右大臣は大變良く、不平のない樣に取りはからつた。
(一二)院の上—朱雀院。
(一三)なほ〳〵しき—身分の賤しい人のする事である。

貳の北の方「先々は世を慎ませ給ひし紛れに、何れの方ともえ見奉り分き侍らざりき。異人はかくしも侍らざめるものを」と聞ゆるにも、同じくは、遂にかゝる契とならば、など我も人もいみじく心亂るゝ中絶えのありけんと、飽かず口惜しく思し出でらる。御方々も皆督の殿の御方に渡り集まりて、姫君とも御對面ありて、ひとへに明け暮れおはするを、殿聞かせ内大臣「洩り聞くに、宰相中將の上こそ、いとおとなしく、重りかに物し給へるめれな。あるが中に殿のやむごとなく心ざし給ひけんしもいと淺はかに名殘なしや。かゝればこそ、世を限りなく思ひ掟てても、あはれに後めたけれ。さべきにこそあらめな。親の相は違はずと云ひ流いたるも、空事にこそありけれ。今は如何はせむ。宰相をだに如何で中納言になして見せ奉らん」と宣ふを、いとらうたげに打惱み面痩せたるに、げにと泪さしぐみて、聞き止め給へる氣色の、限りなくあはれにらうたきに、故大殿のひたうの大納言中納言泣いて「世の恨みを負ひ、謗りを取り給ひけんも、かくこそはありけめな。げに世を逆樣になしても、餘りあるわざかな。またさても惡しからざりけり。異人はいみじき道理を立てても何ならまし。誰が御扱ひをも、心に入れて、下り立ち營み歩くを見れば、すべてえさるまじからん人には、世の謗りもいたく知るまじきわざにもありけり」など

(一)いづれの方とも—以前の出産の場合には、男親が誰であるかも。
(二)中絶え—寢覺上が故關白に嫁して、一時内大臣との仲が絶えた事を指す。
(三)殿聞かせ—「殿聞かせ給ひて」とあるが中に殿の—故關白がその中の中將上を愛し入内でもさせようと思つてゐたが、結局淺墓にうつて了つた宰相中將の上が、無駄になつてゐたのに、たとへ自分の姫君を皇后の位にとおきめて居ても、不安で心配なほ思ひ。
(四)ある中に殿のやむごとなく心ざし給ひけんしも—上の樣なれば、かうした例がある君の上が、宰相中將の上こそ、いとおとなしく、重りかに物し給へるめれ。
(五)親の相違はずと云ひ流いたるも—親の考へ定めた子供の運命は、違はないと世間で云つてゐるが、それは虚僞の事だ。
(六)親の相—親の考へ定めた子供の運命は、違はないと世間で云つてゐるが、それは虚僞の事だ。
(七)宰相—宰相中將を。
(八)いとらうたげに—寢覺上が。
(九)故大殿のひたうの—「ひたう」は「ひたぶる」の誤で、秘藏の意か。
(一〇)世の恨みを負ひ—内大臣が世間の恨みを負ひ又誹謗される。
(一一)世を倒さまにしても及ばぬ程—内大臣のなす事は世を倒さまにしても及ばぬ程の事であらう。
(一二)また—然も内大臣ならば、それをしても我々は承認する事が出來るが、もし他人が事をしたら、どんな道理を立てゝも承認する氣にはなれない。
(一三)たが御扱ひも—誰の御世話も親しく心に入れてなし歩く内

大臣の有樣を見ると、どうしても世話をしてやらなければならない人に對しては、世間の非難非謗などは顧みもしないで世話をなすべきものと思はれる。

(一)珍らしき御對面―久し振りで尚侍に逢ふのですから。
(二)此方樣に―今晩は私と一緒に休まうなどとは少しも思つては頂けますまい。
(三)つとめて―明朝。
(四)いと細やかに―尚侍殿は。
(五)よたけうにて―「こちたく」又は「ことごとしく」の意。「所せくよたけく」は、姙娠の寢覺上の描寫。
(六)忘らるゝ―貴女(寢覺上)を忘るる時さへあるならば、何の今更貴女のつれなさを强いては恨まないで居るでせうのに忘るゝ事が出來ない許りに貴女を恨むのです。
(七)我ながら―併し自分乍ら、帝の御志が勿體なく思ひ知られる事だ。
(八)いかにおはせんと―どうしたのだらうかと、尚侍は寢覺上の病狀を心配して。
(九)ゆゝしき事―一本に「ゆかしき事」とある。「ゆゝしき」ならば、「見習ひしかば」は「月日の過ぐるまゝに」にかかるし、「ゆかしきならば」は「見習ひしかば」は「厭はしかるべくもあらねど」にかゝる。「ゆゝしき」「ゆかしき」どちらにせよ「子供故にゆゝしい」又「子供故にゆかしい」の意味。「ゆゝしき」の方が良いかと思ふ。

罷出ぬれば、殿内大臣「珍しき(一)御對面殘り多く、此方樣(二)に世に思し寄らせ給はじ。我ながら惡き身の覺えぞ。つとめて(三)參らん」とて、宮の御方に渡り給ひぬ。いと細やかに(四)あえかにもとよりおはする人の、いとど打惱み面痩せ給へるは、いと忌はしくこそ見え給はねど、いとど貴にをかしげにおはするを、心苦しく見奉り給ふ。殿の上の、いと程なく小さき御身に、所狹く、よたけうにて(五)、臥し起きも心安からずいと惱ましげに思したるを、珍しくめでたしと、互に淺からず見交い奉り給ひつゝ、大納言宰相の上も皆渡りて、待ち聞え給ひければ、一つにさし集ひて、月頃の御物語に惱ましさも紛れて明かし給ひつ。つとめて內より御使いと疾くあり。例の御文の中にて、

帝(六)忘らるゝ時だにあらば何更につらきをせめて恨みざらまし

とあるを、まいていと惱ましきに、何とかは見入れ給はん。我ながら(七)忘るゝ時さへ如何におはせんと(八)心地も騷ぎ立ち給ひて、此の頃は朧氣ならではさし出でもし給はず。尚侍「先々もかくや物し給ひし。」寢覺上「ゆゝしき(九)事を見習ひしかば、幾らも〳〵からん人のあらんは、厭はしかるべくもあらねど、月日の過ぐるまゝに、胸塞がりてこそ侘びしく覺ゆれ」と宣ふまゝに、泪を落し給ふ。いといみじく物深げなり。大

ひにし百敷なればと思しも懸けぬまゝに、大貳の北の方少將などを立ち替りつゝ侍はせ給ふ。權大納言中納言などを、身の代りにと、心苦しげに聞え給へば、(一)故殿の御顧みをよろしく思し知る人々ならねば、立ち替りつゝ御殿に二字イとのゐる侍はせ給ふ。(二)罷出なまほしげに、心苦しげに思したれど、なほ今暫し御心地の樣見果てゝとて、罷出させ給はぬに、(三)さなりけりと見定め奉りて、(四)殿の上の御事も、いと近くなりぬるを、いみじく覺束なげに思ひ聞え給ふ。(五)上も(六)知らぬ命の此方に、罷出させ奉りて、(七)對面せばやと思したるもことわりなれば、正月十日に(八)四月と奏して罷出給ふに、(九)宮と申せど、あな思ひの外と御心動かぬやうもなきに、まいてこそ(一〇)御方々胸塞がりて、こは如何なる事ぞと思され、世人も(一一)思ひ懸けざりつる事かなと云ひあざみたる樣、ことわりなり。北殿にぞ罷出させ給ふべけれど、殿の上程近くなり給ひて、御動きなども、(一二)えあるまじきと、(一三)覺束なくて、急ぎ出で給ひつる本意なるべければ、上西の對に渡り居給ひて、姫君のおはします東面に、罷出させ奉り給ふ。御送りに參らん上達部殿上人の被け物、祿などなべてならず、薫物など、つとめてより燻きしめて待ち聞え給ふ。殿打添ひ給ひて、いと殊に嚴しくて罷出給へり。上達部など、さるべき限りは皆侍ひ給ふ。父大臣こそおはせねど、殿のおろかならず扱ひ聞え給ふ氣配、いと華やかにあなづりにくげなり。御饗の事ありて、もてはやし、(一四)心地よげにて

(一)故殿の御顧みを—この權大納言や中納言は、故關白の愛顧を並々でなく有難く思つてゐる人なので。
(二)罷出なまほしげに—尙侍は退出したさうに。
(三)さなりけり—御姙娠と。
(四)殿の上—寢覺上の出産の事。
(五)上—寢覺上。
(六)知らぬ命いこなたに—出産で何時死ぬかも分らないその前に。
(七)對面せばや—尙侍に。
(八)四月—御姙娠四ヶ月と。
(九)宮と申せど—たとへ中宮でも
(一〇)御方々—外の女御方。
(一一)思ひかけざりつる—尙侍に御皇子の出來るとは、思ひかけなかつた事だと。
(一二)えあるまじきと—「と」は「とて」。
(一三)覺束なくて—尙侍の事が氣掛りで、急ぎ退出させたのが本心なのであるから、寢覺上は西の對に渡り、大姫君の今迄居た北殿の東面に尙侍を渡した。
(一四)心地よげにて—上達部など寢覺上のお供をした人々を饗應し、その人々が。

(一)先々は—大姫君や雅子君出産の時は。
(二)珍しく—此度は以前と違つて。
(三)出でたべき—「出でたるべき」の音約。
(四)かき絶え—寢覺上は文を寄越す事も絶えて了つて。
(五)つれなきをしも—古今集戀五「つれなきを今は戀ひじと思へども心弱くもおつる涙か」
(六)なほ慰まぬ—拾遺集卷十二「逢ひ見てもなほ慰まぬ心かな幾千代寢てか戀の覺むべき」
(七)大臣のもてなし—內大臣の寢覺上に對する愛情。
(八)ただならぬ氣色—妊娠。
(九)殿の上—寢覺上は、尙侍殿を心苦しく氣がかりに思ひ遣つてはゐるが。
(一〇)あからさまの—一寸夕方時分に寢覺上が參內すると云ふ事でさへも內大臣は全くあるまじき事に思ひ。
(一一)我が御心にも—寢覺上自身も憂く疎ましいと急に爭ふ樣にして出た宮中であるから又參內するのもどうかと參內する事をば思ひも寄らぬ事として

しげに思したるを、(一)先々は雲井のよそにのみ打聞きつゝ、我も人も心を盡くし給ひしに、(二)珍しくあはれに、如何におはせんといみじく思さるゝまゝに、御祈より外の事なく、御修法七壇御讀經四五、如何なるわざをしても、平かに見奉らんと思し惑ひ、かつは御產屋の程のイナシ有樣、此の度こそは、もて出でたべき事と思せば、いみじき淸らを調へさせ給ふ樣、いとなべてならず。

その頃內に女宮三所、男春宮より外の儲の君おはしまさず。帝も、あいなく搔き絶え、(五)情なきをしもと云ふ樣に、戀しさも嫉さも、月日に添へて忍び難くのみ思し增さらるゝまゝに、雅子君を、夜晝御前も去らず召し纏はしつゝ、女御達の御宿直の數、此の君に皆押され給ひにたれど、樣異の事にて、恨み申させ給ふべき方なきに、(六)なほ慰まぬと云ふやうに、ことわりなくのみ思し召さるれば、いかで位を疾う去りて、少し輕らかなる程になりて、いみじき大臣のもてなし限り無しといふとも、今一度の逢ふ瀨を、如何で必ずと思し急ぐ御心深くて、冷泉院を急ぎ造らせ給ひつゝ、皇子のおはしまさぬ嘆きをせさせ給ふ。中宮を始め奉り、御方々いかでと御心を盡くし思し召すに、十月ばかりより尙侍の君(八)たゞならぬ氣色に惱ましう思いたるを、殿(九)の上いと心苦しう覺束なう思ひ遣り聞え給ふるか イひながら、(一〇)あからさまの宵の程だに、殿のすべてあるまじき事に思し、我(一一)が御心にも、憂くうとましと、俄に競ひ出で給

(一)心を心とせん―我が儘な人ならば、北の方がたとへ帝の女宮であつても愛しはすまい。

(二)百夜にあらん鳴の羽掻も―古今集戀五「曉の鳴の羽掻百羽がき君が來ぬ夜は我ぞ數掻く」に據る。内大臣の百夜の隔でも、氣にも留まらぬ樣に思ひ定めて。

(三)こと方々に―他の女御方にも。

(四)昔の形身には―故關白の形身としては。

(五)この御事共を―この尙侍殿、宰相中將上、新大納言上等の御世話をしよう。

(六)打思したる心掟―寢覺上の。

(七)惱ましげに思したる―月日が過ぎるに從つて、出産も間近い事とて惱ましげに。

ばこそ、せめて思ひ忍びて、あながちにはもてなせ。ただ心を心とせん人は、帝の御女と云ふとも、あながちに心を分けじものを」とぞ餘りには難かしく思さるゝ。此方には住み果つべき世かはとのみ、樣異に思し取りつゝ、百夜にあらん鳴の羽掻も、何と心留まるまじく思ひ取りて、明暮は姫君達の御かしづきを、心の及ばぬ事なくし給ひ、若君の内にのみ召し籠められ給へる御裝束何やかやに添へて、尙侍の殿の御交らひの程、異ナシ方々に、如何で、今一際何事も珍しく增い奉らんと、我が御裝束御帳御几帳の帷子、女房童下仕へ、はした物、裝束色を盡くし數によりて、五節の程、睦月などに、異事なくいそぎし奉り給ふ。宰相中將大納言の御方々をも、皆家司政所などし分けて、乏しかるまじく、萬を、し分ち奉り給ひしかど、さるべき折節の御裝束、はた、ただ我が御營みにて、心の隙なきは、げに物の恨めしさも哀れも、朧氣ならでは心もイに留まるべくもあらず、戀しさの盡きせぬ昔の形身には、此の御事共をこそはと、心にしめ給へるを、世とイに珍かに有難き事に、世語りにも云ひ傳へ、殿もいと哀れにめでたく思ひ聞え給ひて、露もおろかに見えんはいとほしきまゝに、一つ心に懇に思し扱ひ聞え給ふ、はた同じ心なる心地して、哀れに思し知られて、さる方に絶ゆまじき契り許りと、打思したる心おきてを、盡きせず恨み、それにつけても、憎からず言ひ交しつゝ、過ぐる月日に添へては、いと惱ま

(一)あいなくもあるかな—内大臣に厭くとは、云ひ様もない愚かな事であるよと。
(二)隙なく—内大臣が自分から離れる事もなく、他の女を思ふ事もなかつた昔の内大臣の有様を。
(三)行きあがる—「あがる」は離散するの意。時には他の女の處に通つて。
(四)思ふ本意—出家。
(五)背き難く—世に背く事も出來ずに、
(六)いとことわりなる—正妻があるのだから眞事に尤もな内大臣の顏に恨むれない態度を思ひ知りむのも、私が思ふ本意に逆つて、いやな氣持がするだらうと寢覺上は思ふので。
「さべたて」は一本の「うたて」の誤。
(七)よそのものに—内大臣を、自分に關係のない人のように問柄ひ放す。
(八)故大殿—寢覺上の夫の故關白殿。
(九)あまりいと心憂く—寢覺上は、内大臣は世中と同樣なので。
(一〇)いつとなく—寢覺上の夫の故關白が大臣になつて後も、寢覺上の態度が世中と同樣なので。
(一一)この一宮の心づきなき氣色—この女の樣子などは、ぬ嫉妬の氣に咲はうにもなく。
(一二)こなたに—寢覺上方に。
(一三)弱竹の緣程には過ぎたる—弱竹は竹の緣程には過ぎたる節(夜)に(かけ)る。ここでは、道當の度合以上の並はづれた女一宮に對する厚遇なのを。

は思ひ絶えて安からまし物を、盡きせず、あいなくもあるかな」と、心の中に思せど、隙なく餘り横目なかりし昔の御有樣を「難かしくもあるかな、時々は行き班るゝ方ありて見え給はずば、心安く遊びをもし、打解けてあるべきに、心弛ぶ時なく、つと物し給ふよ」と覺えし事の、叶ふにこそあめれと思し知られ、かくても何時までおべき身ぞ。もし平かにもあらば、遂に思ふ本意遂げてこそあらめ。幼き人々の御ゆかりばかりに、背き難く、さすらへ出でたるにこそあめれ。いとことわりなる御もてなしを思ひ知り顏ならん、我が思ふ樣には達ひてそうたてあべしと思せば、かりそめの餘所の者に思ひ放ち、打解けて恨み顏なる氣色、夢にも洩らさず、こはあるまじき世に暫し廻らふぞかしと思し耐へて、故大殿失せ給ひて後のもてなしながらなるを、餘りいと心憂くさへ思さるれば、いみじく恨み渡り給へど、何時となくらうたげに懷かしくのみもてなしながら、今はと解くるやうもなければ、懸けても此の心づきなき氣色などあべくもあらず（イのみ）なだらかなるは、嬉しながら、例には違ふ心地して、靜心もなく思ひながら、世の聞き耳ことわり（イは失はぬ御心にて、宮の御方に二夜、此方に一夜と、弱竹の程には過ぎたる御もてなしをも、大皇宮御乳母どもは、飽かず目覺ましき事に、盡きせず、許しなきを、大臣は「餘りこは何ぞ。片時横目すべくあらず、年月を經て戀ひ佗び渡りつるも誰ゆゑならん。我なれ

(一)有様の―寝覺上の有様の。
(二)今も見てしか―今にも直ぐ寝覺上に逢ひたいと。
(三)なか〳〵いみじく―却つて非常に貴女の御氣持が有難く思はれまして、近い寝覺上の所の日を過したのに、行かずに、貴女の所で数日を過したわけです。
(四)おろかにのみは―かやうに私はあなたにのみを決して思つて居りませんのに、大皇宮が道理も過ぎて御咎めになるのは、私にはおろそかにおろそかのこれ位の事は、罪あるべきあまりの事です。程のものでもありませんのに。
(五)ぞ―衍字か。
(六)かうぞ―皇族と云ふものはかやうに。
(七)どこもなく―何處と云ふ事もなく總體に上品で。
(八)ここなたには―寝覺上は。
(九)されば―ここに來るとすぐ案に違はず内大臣は、私を顧みないでゐる。前からもかうなると思はなかつた事か。

げに打ちかすめ給ふ有様の、らうたげに匂ひ多かるは、今も見てしかとのみ思ひ遣られ給ふを、さりげもなく様よくもてないて、その夜も明けぬ。またの日ものどやかに打語らひ暮らい奉り給ふ。宮の御心ばへと院の聞し召さん所とは、なのめならず心苦しく思さるれば、その夜を念じ明かして、またの日の夕つ方渡り給ふとて、

内大臣「なか〳〵幼き者一人侍る時は、夜をも隔てずのみ、行き通ひ習はいて侍れど、なめしなど言出でさせ給はぬ御氣色の、なか〳〵いみじく思ひ給へらるれば、近き程ながら、日頃を過ぐし遣り侍り。おろかにのみは侍らぬ心を、大皇宮のことわり過ぎたる勘當こそぞ餘りに侍れ。か許りのもてなしは罪あべい事にも侍らぬものを」と聞え給ふに、なほさべき御答へはあるべきを、ただ打背きておはします。宮達はただかうぞ、どこもなくあてにおはしますべきぞかしと、本意ある心地するものから、餘りさうぐしきも、物を思し知らせ給はぬにはあらず。飽くまで心深く氣高さの過ぎさせ給ひて、何事も世づいて答へんは、うたて思し召すべし。朧氣ならではさし向ひ聞え給ふ事もなきを、かしこまり置き奉り給ひて、いたく打解けては馴れ申し給はずなどぞありける。

此方には暮るゝ夜明くる日ごとに、昔はた戀しからぬやうなく、「されば(九)よ、思はざりし事かは。今はやう〳〵世を思ひ離れて行ひより外の事なく、如何にも此の世の事

るぞ。もとの心は聞えさせ侍りにきな。幼き人の、かの入道に琴習ひに、月頃あらせ侍りつるを、昨夜出で渡し侍りにしに、今一人も今はやう〳〵おとずけ罷るを、他所に放ちたるやうにて侍るも心苦しくて、一つ所に、事は取り集めてこそはあらせめ。(一)數多ある中に、物はかなき宮仕へ二字イナシ人の腹なるをだに、尋ね知る人なくやは。まして數多も侍らぬ者どもを、此所彼所に散らしては、かしこき御邊に侍ふとて、あるべきならねば、乳母どもの限りしては後めたく侍れば、「同じくは添ひて見よ」と(二)誘ひ出でて侍り。(四)げに聞し召すもことわりなれど、(五)又さのみやは。(六)男は限りなければ、又行きかかづらはぬやうはなくこそ侍るわざなれ。餘りきはだかなる仰せこそ苦しけれ」と、御乳母ども近く侍ふに、打宣ひて、かしこまり驚き給はぬは、いとど嫉けれど、ひとへに人荒ら立つべくもあらぬに、大貳の乳母ぞ憚りなく申し返す事どもいちはやけれど、聞きも入れ給はで御帳の中に入り給ひぬ。直々しく言に出でて宣はぬ御心ばへ氣色は、いみじく思ふ樣に嬉しくめでたく、なか〳〵かゝるにしもいとほしく添き事增さるやうに覺え給ふものから、重りかに貴なる方も過ぎて、餘りいと麗しく我が怠り言ひ所なくおはしますにぞ、我も言少なになりて、いとおほどかに盡きせずあえかにはもてなしながら、さべき節々聞き過ぐさず、憂きも哀れなるも必ず聞き止め、思ひ知るなめりかしと見えて、うらもなくいたくめ心美し

(一)今一人も—今一人の姫君も。

(二)數多ある中に—澤山の子供があつても、その中のつまらぬ宮仕人の腹に出來た子でさへ尋ねてそれを育てる樣な人がないでせうか。まして私には數多くもない子供達を。

(三)誘ひ出でて—寢覺上を。

(四)げに聞し召す—大皇宮が自分の行爲を惡い事と。

(五)又さのみやは—惡くのみ云はれる事でもありません。

(六)男は限りなければ—男は好色ならば限りはないが、又いくら眞面目にしてゐても、どこかに關係の出來ない事はありません。

(七)仰せこそ—大皇宮の。

(八)なほ〳〵しく—賤しい人間の樣に、言葉に出して怨みを云はない女一宮の心ばへ樣子は。

(九)うるはしく—端正。生眞面目で。

(一〇)いとおほどかに—以下寢覺上の描寫。

(一)われには人心をおくべき事―内大臣は、自分に他人が心を置く様な後暗い事があらうかなどとも思はぬ様子で、女一宮の許に歩み入りて。

(二)思ひ云ふ―寢覺上や内大臣を非難する事も忘れて。

(三)物を思し知らせ給はざらん―女一宮も、大皇宮の様に情理の分らない人ではない。

(四)人やはつらい―内大臣がつれない方が惡いのだらうか。寧ろ大皇宮の方が惡いのだ。

(五)昔よりかゝる本意深き人とは聞えき―寢覺上は内大臣の志深き人と云はれつゝ、又内大臣にて添うた故君があつたに不拘、強ひて内大臣に思ひつき人として内大臣の方に大皇宮の北の方が惡いから私が苦しむの仕方があらう。

(六)如何は聞えん―内大臣は慰め言葉もない。

(七)宮の御文を―大皇宮の御文を見もし給へりィかしと思ひければ、取りも隱さず。宮は怪しく、かたはら痛く思し召せど、ふと取り隱しなどせさせ給はんも、樣惡しき樣なれば、御覽じ入れぬやうなるを、内大臣「いと多かるは何文の御前近きぞ」と、面隱しに、これを取りて、見給ふに、いといみじく、書き續けさせ給ひたり。大皇宮文「さ許りめでたき人の色めかしくもてなし聞ゆらんに、いとしも見えざりし御心は、いとゞ名殘もあらじを、さて打添ひ給ふ一字イひたらん、いといみじく人笑はれなべきを、院に渡い奉りてん。さる心せさせ給へ。なか〳〵目覺まさしき人目ばかり時々待ち受け給はんも、何にかはせん。昔ながらにておはしませ」などあるなりけり。引き返し打見つゝ、思ひ驚き顏の色違ひなどはせず、いとのどやかに、さし寄りて、内大臣「こは如何に聞えさせ給へ

あへるに、いみじく清らに、匂ひ艶きて、いとのどやかに、我には人心置くべき事やとも思はぬ樣に、さし歩み入りて突い居給ふ恥かしさに、皆人心繕ひせられてぞ思ひ云ふ事ども、忘るゝやうなり。宮も如何でかはさのみ物を思し知らせ給はざらん。后宮のいみじき事ども書き盡くさせ給へる御文どもを御覽ずるに、女一宮「人やはつらき。昔よりかゝる本意深き人とは聞えき。またえさらず添ひたる人ありしを、あながちに思し寄り、もてなさせ給へる怠りにこそあめれ」と、人遣りならず心憂くて思し亂れたる御氣色、いとも〳〵ことわりとも、世の常なれども、如何は聞えん。宮の御文を見もし給へりィかしと思ひければ、取りも隱さず。宮は怪しく、かたはら痛く思し召せど、ふと取り隱しなどせさせ給はんも、樣惡しき樣なれば、御覽じ入れぬやうなるを、内大臣「いと多かるは何文の御前近きぞ」と、面隱しに、これを取りて、見給ふに、いといみじく、書き續けさせ給ひたり。大皇宮文「さ許りめでたき人の色めかしくもてなし聞ゆらんに、いとしも見えざりし御心は、いとゞ名殘もあらじを、さて打添ひ給ふ一字イひたらん、いといみじく人笑はれなべきを、院に渡い奉りてん。さる心せさせ給へ。なか〳〵目覺まさしき人目ばかり時々待ち受け給はんも、何にかはせん。昔ながらにておはしませ」などあるなりけり。引き返し打見つゝ、思ひ驚き顏の色違ひなどはせず、いとのどやかに、さし寄りて、内大臣「こは如何に聞えさせ給へ

(一)宮―中宮。
(二)少將―新少將。
(三)それにても―それにしても、貴方はそのやうに間もなく心弱くも私の姉に靡いて直々に結婚なさるべきでせうか。最へすれば「押しきらずに心弱くも」の意。
(四)定―禪定の意で、覺を聞く意。
(五)思ひ侘び―煩悶の餘り慰む事もあるかと思つて貴女の姉上と結婚したのですが、矢張り私は貴女の事を思つて苦しんでゐたのです。一本には「猶來しにし」とある。
(六)給へぬ―「給はぬ」の誤か。
(七)あなたに―女一宮の方で。

一人あらんと思さざりける淺さに、樣々なりける亂れとこそ覺ゆれ」と打笑みて、うらもなく云ひ出で給ひたる懷かしさに、我も笑まれて、内大臣「それは時明が女と思ひて、宮に少將をば召させしぞかし。さて見んと思ひしは淺かりけりや」と宣へば、

(一)(二)

麝臺上「それにてもさやは程なく藻鹽燒く煙も敢へず靡き寄るべき」と、打言ひ出で給ひたる氣色有樣、釋迦佛の定に入り給ひたらんも、なほ打亂れ給ひぬ許りぞ見まほしくをかしきや。

内大臣(五)「思ひ侘び慰むやとてなほ來しに晴れず迷ひし峯の白雲出でも遣り給へぬ(六)氣色を、麝臺上(七)彼方に思すらん事も空に推し量らるれば、眞實にけざやかにもて出でゝ、世の常めかしからむも、わりなく忍び初め侍りにしに心の鬼は、盡きせずかたはら痛くのみ覺え侍るべきを、幼き人々の御ゆかり、かやうに立ち交り聞えさせたるやうにてこそよからめ。身をも世をも思ひ知る事多くのみ侍れば、例樣に思ふ事も侍るまじ」と、まめやかに打ち泪ぐみて、彼方に渡り給はぬを、苦しげに、言には出でで、打ちかすめたる、(八)などて此の人に、人を並べては見るべきぞとのみ、濃かに打解け見るまゝに、心にのみ染み增さりて、ほろ〳〵と打泣かれて、内大臣「さも萬に思し放つ言葉のみ盡きせぬかな」と恨みも契りも立ち離るべき方なく云ひ盡くして、からうじて宮の御方に渡り給へる。(一)いみじき事ともを思ひも云ひ

(五)思ひ侘び―「云ひ盡くして」にかかる。
(六)などてこの人に―以下内大臣の心。「この人」は寢覺上。
(七)恨みも契も―「云ひ盡くして」にかかる。
(一〇)いみじき事ども―女一宮の方では寢覺上や内大臣の事を非難してゐる所に。

(一)迎へ出で給へる―傍若無人にも寢覺上を迎へ出でた。
(二)物忍びせぬ―我慢の出來ない。
(三)后の宮―大皇宮。
(四)給ふべるきにも及ばず―「る」は尊敬。大皇宮は、内大臣のなき方よし。大皇宮のなす事をとめる事も出來ずに。
(五)かしこには―故關白邸において。西山からこの故關白邸に、寢覺上姫君、内大臣は歸つて來たのである。
(六)横目なかからにてだに―他に女がなくてさへ、貴女に飽く樣な事は決してないだらうのに。
(七)なさしぐめる―一本の「枝さしぐめる」をとる。戀人が他に云ふ口癖を憚かるのが未だ女一宮を傍を離れる事が出來ずに、私はどうも貴女が私を恨む心の解けるのを待つて、それが夜がないのだらうと、それが苦しく思はれる。「になう」は「よなう」の誤寫。
(八)いでやなど慰む事もやと―さうでもしたなら、どうして心の慰ましたい事があらうかと思ひ寄つたのです。
(九)わくかくなく―「わく方無く」をとる。
(一〇)聞えしまゝに―私が申しあげた通りに私に靡いたならば、しばしりにたならば、間には亂れがましい世間の非難を受けようが、それも少しの間ですのに。
(一一)わが御方樣にのみは―自分に都合のよい事許り仰しやいまてなして、迎へ出で給へる愁はしさの、如何でかはよろしからん。いも寢ず嘆き餘りて、大貳の乳母と云ふぞ物忍びせぬ人なりければ、明くるも心許なくて、ある有樣を書き續けて、后の宮に參らせたれば、よろしう待ち御覽せんやは。限りあれば制せさせ給ふべるきにも及ばす、云はむ方なく心を盡くし明かさせ給ふ。彼所には緩るかに、日高う大殿籠り、驚いてもとみにも起き上り給はず。内大臣横目なからんにてだに飽く世あるまじきを、限りあれば、なさしぐめる跡絶えをいと餘り樣惡しうも淺ましう聞えし人の御習はしの名殘にて、我をば恨みの解くるになうあらむが、わりなく心苦しう覺え、我が心にも、片時の隔てもいみじう苦しかるべきまに、萬を語らひ盡くいて、いでやなど慰む事もやと思ひ寄りしならん。今は又分くかくなく思ふ樣にてあらましものを、すべて昔より御心のいみじく恨めしきが怠りなりや。聞えしまゝに、靡き給ひたらましかば、しばしぞ音聞亂りがはしきもどきを、我も人も負はましかな」と、今取り返し恨み續け給へば、寢覺上「などかく我が御方樣にのみは。たがつたり(一一)三字イつらかりける亂れにかは」と云ひ出で給へるを内大臣「如何に〳〵」と、せめて問はれて、寢覺上「いなや。旅寢の夢を思ひ合はするまでは

皆貴方の心がけが惡いので、かう云ふ間違が出來たのです

すね。
(一二)たがつたりける―一本の「誰がつらかりける」の誤ならん

(一)立ち離れ給はれが―内大臣が寝覺上の傍を立ち離れず。

(二)おほどかなる御もてなし―おほまかな寝覺上の態度を見て、入道殿は―大皇宮は大變意地が惡いと評判のある宮だから、都に歸つて後又この寝覺上にどんな仕打をするだらうと不安に思つた。

(三)琴―或は「錦」か。

外には騒ぎ立ちたれど、なほ味氣無くと、世を思し立ちもやすると、後めたく危ふさに、立ち離れ給はねば、齋宮に御消息ばかりにて、御對面もなきを、いと本意なく怪しと思しながら、はかなき御事も心にも叶はず、暮れぬる紛れにぞ、入道殿の御前にゐざり出で給ひても、はか〴〵しく、言葉續きて聞え給ふ事もなく、盡きせず、(一)おほどかなる御もてなしを、大皇宮いとさがなく聞えおはする宮なり、如何なる事かあらんと後めたく見奉り給ふ。姫君の御贈り物に、いと物深く籠め置き給へりける唐の琴など、(三)此の折にぞ引き出で給ひける。一車には姫君二所御乳母(すけこ)も、次の車に殿上奉りて、後に少將ぞ侍ふ。上達部殿上人車引きつゝき、御前は更なりや、殘るなく仕うまつる。いといみじくこちたうのゝしりて出で給ふ。道すがらも、故上を迎へ出でて、いとかすかにて留まり給ひしを、心苦しく後めたしと思ひながら、消息をだにせで、顧みのみせられて、道すがら此の御事を云ひ出でしかば、(四)權大納言の答へし樣など、夢の樣にぞ思し出でらるゝ。姫君のおはします町はいと殊に、何の草木も樣異に造り磨き參りたるに、中の御しつらひは、輝くばかりせられたるに、下ろい奉り給ひて、始めたる御渡りなれば、御前の物參り、女房の衝重など皆し盡くいて、上達部にも御饗あり。物被き龍出給ひぬるに、殿はやがて此方に留り給ひぬるを、宮の御方には月頃の定に打忍びてだにあらず、傍に人無き樣にも

(四)權大納言―當時の左衛門督。二卷の末部にこの事は出てゐる。

(五)町―邸宅の區劃。

(六)御重―桐の白木にて、方形に造りたる折敷に臺か重ねたもの。食物を置く膳の一種。

(一)命婦の乳母―大姫君の乳母はたと云へど、物打合はぬ心地して見奉るに、嬉しく胸明きて、小姫君の御乳母どもも、
(二)若君は離れ餘所々々にて、見つき聞え給ふ事はなきを、故殿のいみじくもてなし聞え給ひしにこそ、我が方の重き心地して猛かりしか、失せ給ひて後は、いと屈じいたく覺えつるに、姫(四)君の御覺えも、誰が腹とも聞えざりつるこそ、心疾ましかりつれ。かく見現し聞えては、皆引きかへ嬉しげに思ひ合ひたるもことわりなり。女房參り集ひそそぎだち(五)たるに、殿は夕陰になりてぞ驚き給ひて 内大臣「いとといたう暮れにけり。怪しかりけるわざかな」とて、女君は憂き故郷に立ち歸り、また如何なる事かと思すに、なほいと物憂く、動き難くて臥し給へるを、内大臣「などかうては、入道殿に罷り申しもし給へ。なほかくて背き給ひなんもイとや、少しは、をこなる事ぞかし。いみじく思し取りて入り給ひけん山路を、御髮長く生して、たゞならぬ事添ひ(イて)出で給はん、人聞耻かしくあるべき事なれど、如何はせんと思し消つばかり」と打笑ひ戲れ聞え給ふ。寢覺上「心の中に少しは思ふ事なれど、味氣無く世を厭ふ心もなかりき。心地の苦しかりしかば、永らへもやするとてこそ思ひ給へ寄りしか」と、微笑み給へる御匂ひ、見る甲斐ありと、盡きもせず見奉り給ふ。入道殿は姫君の御方に今朝よりおはしますと聞き給へど、我はなか〳〵向ひ奉り給はず、暮れ行くまゝに、

(一)命婦―大姫君の乳母は大姫君の寵愛が限りなくて入道殿の容姿又云へば、離れすんでなつかしく思ひ出て、何か調子の悪くて居たる氣持がし、道殿が大姫君を愛する樣を見て、入道殿が大姫君には疎遠で。
(三)故殿の―故關白が非常にこの小姫君を大事に扱ひつゝ、自分の方の重りかなこそ、自強地なんたで氣かつた間が、故關白が死して大變心細く思つてゐたのに。
(四)姫君の御覺えも―小姫君に比し大姫君の寵愛のすぐれてゐたこと。
(五)そそぎ立ち―それは當然と。急ぎ騷ぐ。
(六)罷り申し―お別れの挨拶。
(七)背き給ひ―「とや」をとる。この儘又世を背かうとするのでしか、それは又少し馬鹿らしい事です。
(八)いみじく思し取りて―出家しようと深く思ひ込んでこの西山に貴女は入つたのに、刺髮も姫も長く生やせずに入道殿は恥ずかしい事でせうなく身で山を出て、人聞づかしい事ばかりなく思ひ消す位の元氣なり。
(九)少しは思ふ事なれど―少しは出家の志はあつたが。
(一〇)我は―寢覺上は入道殿に。

(一)講ぜらるゝ―詩歌を讀みあぐ
(二)取りあふべくもあらぬ程なれど―取り敢へずの意で、急の事ではあるが。
(三)洩り出で―出し衣をするやうな事はないが。
(四)風の覆へる―引歌あるか。未詳。
(五)面白き―「面白さ」又は「面白き事」の誤脫か。
(六)御渡りの事―寢覺上の都に歸る事。
(七)かういうちつけなる事―今日都に歸るとはだしぬけの事です。
(八)打顰み―顰をしかめて泣き顰なする。
(九)この御母君を―以下入道殿の心。寢覺上を。
(一〇)これは―大姫君は。
(一一)母君の御契りの―寢覺上の宿世が思つたよりもつたなく、中宮として參内せしむる事も出來なくなつて終つたのが殘念に思はれたが、その代りにこの大姫君を。

添へて、隈なく澄めるに、ある限り亂れ遊び、夜もすがら文作り歌詠みて、曉方に講ぜらるる。(一)取りあふべくもあらぬ程なれど、御簾の中の用意わざと女房洩り出でなどせねど、(二)數多御簾の際に居たるべしなど、氣配聞えたる程、いとなべてならず、織物の御衣ども、小袿、濃く薄く、打ちたる色、匂ひは似る物なくて、御簾の中より押し出だされたるを、權大納言、新中納言その御子ども寄りて取り給ひて、品々被けらるる。朝ぼらけの霧の絶え間に、(四)風の覆へる紅葉の色々と見えて、今一返遊ばれたる、面白き(五)限りなし。極樂など云ふらん所も、かくやとぞ覺えたる。殿はいたく醉ひ進み給ひて、內大臣「怪しく人々に引かれても明けにける夜かな」とて、入りて御殿籠りぬ。暮れ行くも知られ給ふべくもあらねば、大納言中納言夜さりの御渡りの事營み置きて、上達部の親しくおはするは、皆やがて今宵の御送り仕うまつり給ふべければ、皆立ち止まりつゝ、さるべき所々に休み所しつゝ、打休み給ふ。入道殿はつとめてより渡り給ひて、姫君を搔き撫で奉り給ひて、入道殿「今よりは見奉らぬ日を隔てんは、いと苦しうこそ思ひ給ふれ。(七)かう打ちつけなる事」と、打ち顰み給ふを、姫君もいとあはれに物悲しく見奉り給ふ。(八)此の御母君をいみじく悲しく思ひ聞えしかど、そは心安かりけり。(一〇)これはいと殊に珍しく、(一一)母君の御契りの思ひしよりは口惜しく、我も雲井までは思ひ寄り聞えずなりにしが、いと胸痛き代りに、此の御有

(一)彈き止まなくも諫めて—彈き止めないやうに皆に注意して
(二)いみじく候ひける—大變賑かな時で御座いますね。
(三)上の—寢覺上は。
(四)僻事—彈き違へ。

(五)とよらの寺の西なるや—催馬樂葛城の寺の前なるや豐浦の寺の西なるや、江の葉井に白玉しづくや、ま白玉しづくや、おしとんどおしとんど、しかしてば國ぞ榮えんや、わ家らぞ富せんや、おしとんでおしとんど」
(六)錦暗かりぬべかりつる紅葉を—紅葉の錦も暗がりでは少しもその良さが分らぬと同じく、聞く人のない管絃の遊びは、興ざめであるのにと。
(七)御あかし—「御あるじ」の誤。饗應。御馳走。
(八)二ものに—琴笛とこの二つの樂器だけで合奏する。duet の意。或は「ひたもの」の誤か。
(九)文つくらせ—漢詩を作る。

斐ありと思して、待ち喜び聞え給ふ。御琴の音どもの彈き止まなくも諫めて、聞かせ奉らんと思したり。殿も内大臣「いみじく候ひける程かな。折よく參りて候ひける」と御氣色いとよくて、様々に限りなく見奉り給ふに、上の御琵琶は僻事にもあらんと恥かしく思して、せめて彈き止め(イて)几帳にすべり隱れ給ひぬるを、それをしも飽かず思して　内大臣「いとはしたなく候ふわざかな」と申し給へば、新中物言御供に參り給へるを、召し入れて、和琴彈かせ給ふ。入道殿箏の御琴參れり。大臣琵琶辨少將横笛面白く搔き合はせて、若君拍子取りて、「豐浦の寺の西なるや」と打出で給へる聲、物より殊に美しきを、皆事止めて泪落し給ふ。入道殿の御氣色ことわりとあはれなり。殿のおはします跡を尋ね(イて)權大納言、新大納言、宰相中將を初めとして、上達部殿上人引き連れ競ひ參りたるに、いと物騷がしくなりて、内大臣「見はやす人なくて止みなんは、錦暗かりぬべかりつる紅葉を」と、御氣色いとよくて、此方に召し入れたり。入道殿の御方より御あかしいと俄なるやうなれど、わざとなくよしある様にしなさせ給ひて、暮れ行くまゝに紅葉をもて遊び給ひて、琴笛二物に吹き合はせて、此方は飽くまで聞き知り給ふあたりと、人々用意を添へつゝ、手惜しみ給ふ人なく盡くし給へる、所がらに物の音も勝りて、面白う聞ゆる事限りなし。世に名ある博士ども、俄に召して、文作らせ給ふ。夜に入りぬれど、夜さへ見よと、月の光も心を

今暫しなほ永らへて、此の御末どもを見ばやと、哀れに悲しきに、上は御几帳の中になほ傍隱れて、定かにもおはせぬを、入道殿なほ外に出でさせ給へ。怪しく埋れて」と聞え給へば、ゐざり出で給へるに、琵琶奉り給ひて、入道殿これ少し、此の御事どもに、(一)さし混ざせ給へ。いと殊に聞えし御琵琶の音を久しく聞き侍らぬ。如何なりにたらん」とて奉り給ふを髮髮上「如何でか」など、返さひ聞ゆべき程ならねば、少し搔き合はせ給ふは、譬へて云はん方なく、(三)音聲樂の聲と聞え、見る目は、か許りいみじき公達に、けぢめも分れず、赫くとはかゝるを云ふなめりと見え給ふ。少し例よりは面痩せ給へるなど、琴の聲聞くよりもめでたきを、またなほ有難く、我が事も覺え給はず、打見守りて、あはれこれを何に狂ひて、尼になし奉らんと、なずらひにも思ひ寄りけん。大臣云ひ出で給はざらましかば、云ふ甲斐なく、うちない奉りて、かばかり筋ごとに、光を放つやうにて打ちやられ、ゆる〳〵と後るゝ筋なく、たゝなはり出でたる裾つきを、ふさやかに剃ぎ寞してましよと、今ぞ目も眩れて淺ましかりけるわざかなと覺え給ひける。風のさるゝと吹きたるに、木々の木末ほろ〳〵と散り亂れて、御琴に降りかゝりたるやうに散り蔽ひたる折さへ、いみじきに、只今物思ひ知らん人もがな。大臣渡りて見奉り給はん時、如何に甲斐ある心地せんと思ふ程にしもぞ渡り給ひたる。御琴の音どもを尋ねて、此方におはしましたるを、嬉しく甲

(一)さし混ざせ—この琴笛に混ぜて彈きなさい。
(二)返さひ—云ひ返す、承諾しない意。
(三)音聲樂—或は「飲酒樂」の誤か。
(四)すこし例よりは—以下入道殿の心。
(五)うちない—「打ちなし」にて尼にしてしまふ事。
(六)筋毎に—髮の毛筋毎に。
(七)たゝなはり—たたまる。重なる。
(八)ふさやか—ふさふさ。
(九)風のさる—一本の「風のさと」なとる。
(一〇)渡り給ひたる—内大臣が御いでになつた。

時は、人目をもえ憚り敢へず、思ひ懸けぬ夜中許りなどにも振り延へ給ふを待ち受けては、恨み所もなくて、をかしく覺えぬべきを。(一)さはれたゞかくてだにあらばやと思せど、御心にも叶はず、御兄達大貳なども、かたはらなく安らかにはあらずとも、さりとておろかなるべき御心ざし有様にもあらざめれば、今はと思ひ絶えつるあたらしさに引き換へ、嬉しき事に思ひたる事限りなし。

十月朔日頃、京に出でさせ給はん事、明後日許りとての夕つ方、入道殿此方に渡り給ひて、紅葉の色々面白く錦を引けるやうなる山の方を、御簾ども參らせて、落ち來る瀧の流れも、異なる氣色なるを、姫君に御覽ぜさせ給ふ程、打ち時雨つゝ、奥まで散り亂るる景色も、いみじき程なるに、姫君の御前の箏の御琴、試み給ふとて、我少し調べ搔き鳴らして、さし奉らせ給へれば、秋風樂を只今の折に合はせて彈き給へる、すべて十餘の人の琴の音とも聞えず、上手めき面白き事限りなし。母君の御琴の音は(イ心)凄く(イ少し)哀れに懷かしき所すゝぎ、實に天人の耳にも聞き過さるまじくいみじき。これはいと面白く、美々しく、そぞろ寒く上手めかしき事今から勝れ給へるに、雅子君の横笛吹き合はせ給へる音は、雲井に澄み昇りて、(四)名を揚げ給へる中納言のにやや優るやうなるを、餘りゆゝしく、容貌ども、はた光るやうにをかしくて、彈き出で吹き鳴らし給ふ琴笛の音は、此の世の物とも聞えぬを、過ぎぬる齡の程口惜しく、

(一)さはれただかくてだにあらばや―内大臣に引取られずに、ただこの盧西山に居たいと寢覺上は。

(二)御兄達大貳なども―下の「うれしき事に思ひたる」にかゝる。權大納言、新中納言、又大貳は女の北の方なども、内大臣には一宮が北の方として附ねられるので、寢覺上が大臣に引取られるにしても並ぶ者なく安らかであるとは行かないが、さうかと云つて、内大臣の寢覺上を思ふ心つは並々でない有様だから、今は世の別れと寢覺上が出家しようとして此の世を思ひ絶つたのを大變惜しく思つたへに引換へ、今度内大臣に迎へられる事を限りなくうれしく思つた。

(三)奥まで―部屋の奥まで紅葉が散り込む景色も。

(四)名を揚げ給へる―笛には名聲のある。

(一)心劣りし給ふべき—内大臣は心劣りのする様な人であると。
(二)なき昔の—昔の亡き關白の事のみ。
(三)山の端の心ぞ—たとへ巡り逢ひても、いつまでものどかに一緒に居ようとは思ひませんからです。表の意味は「たとへ昔の儘に月が出ても、山の端が月光の澄むのを邪魔をする」との意。「住む」を「澄む」にかく。
(四)心の底も多かりける—心の奥に考へてゐる事も多い。

るにつけても、若し永らふる命もあらば、恨めしき節多く心劣りし給ふべき人ぞかしと思ふに、なき昔のみ戀しく、我は我と打眺められて、

夢浮橋上　山の端の心ぞつらき廻り逢へどかくてのどかにすまじと思へば

えも云はず匂ひ多く香り滿ち、懷かしき氣配、いといたく子めきおほどかにもてない給へる程、心の底も多かりける、身に染む許りぞ、はかなき事も思ひなされ給ひける。暇なく事繁き御身に、里遠き御住家の程いみじく覺束なくのみ覺ゆるを内大臣「今は出でさせ給ひね」とのみ、聞えさせ給へど、さらば數多引き續き出で居ても、又如何なる事か出で來んと、物恐ろしくつらき所多く、心見るやうもやと慎ましきに、入道殿は姫君に見つき奉り給ひて、御行ひも打忘れて、明け立てば渡り給ひて、御琴教へ奉り、若君には笛習はし、樣々の御うつくしみに、萬忘れ給ひて、見奉らぬ日を隔てんは、いと打ちつけに覺束なくなど思したるも心苦しき中に、姫君に、入道殿の、御手どもかゝるついでに習はし聞えんと思し召せば、せめてもえ誘ひ出で奉り給はず。此の度は出で給はむに、故郷は大納言宰相中將なども住みつき給へる、所狹きやうなり。姫君のおはしまし所にと思し召いて、御しつらひ御調度女房の局々まで、昔には立ち勝るかなと覺ゆばかり忍びて思し營む程、長月はた過ぐさせ給ふべければ、なほ遠道の御通ひは、さ許り所狹き御身とも覺えず、忍び難く思し餘られける

(五)故郷—京都の故關白殿が狹くなつたので新に增築する。
(六)所狹き御身とも覺えず—内大臣は重々しい身分の方とも思はれない程に。

を語らひつゝ居給ふ程に、月さし出でぬ。姫君達若君などは、ひとへにさし集ひ碁打、偏突、御乳母ども女房數もなく、並み侍ひて、いと花やかに、各々皆心ゆきげなるに、二所は少しさし離れたる方に、御几帳ども、數多引き寄せて、端近く、御簾卷き上げて、小倉山を程遠からず聞きし鹿の聲々變らぬ音なひに妻戀ひ渡るも、年頃の忍び音によそへられて、住み果つまじき契なりけんと眺め侘び、別れし曉など、所も變らず、空の氣色なども同じながらなるに、その折の心盡くし、今さへ胸塞がりつゝ、泣きみ笑ひみとか云ふにも盡きせぬ御仲あはれなり。

内大臣　(一)古里に面變りせで廻り逢へる契嬉しき山の端の月

か許り數多繁き御仲の契、今はと安らかに(二)解けらるゝ心もなく、故大殿さだ過ぎ給へり(イし)かど、いとこち〴〵しく、わらゝかに優しかりし人の、如何でも此の人の心を靡かさんと、心を盡くしたりけん氣色、如何許りかはを(イか)しかりけん。かりそめにも上の(五)、如何で露のあはれを懸けられんとしめさせ給ひけむ御氣配、はた云ふ限りなく艶がしかりけんなどに、よろしく思ひ比べられんは、嫉く口惜しう覺え、いと心恥かしく艶きたる氣色に、如何で過ぎにし方のあはれをも覺ますばかりと、もてなし給ひたる氣色の、世になく見所多かるを、ほのかなりしを懸け離れ思ひ出でしこそ人より殊なりと心を留めて、あはれも深かりしか。なか〳〵かゝ

(一)古里に面變りせで―緣故のあるこの西山に昔の儘の貴女に逢ふ事の出來た契がうれしく思はれる。「山の端の月」を寢覺上にたとへる。
(二)解けらるゝ心もなく―寢覺上に打解けられる事もなく。以下内大臣の心。
(三)こち〴〵しく―無骨で。
(四)この人の―寢覺上の。
(五)上―帝。
(六)しめさせ―深く思ひ込まれた
(七)よろしく思ひ比べられんは―以上の樣な故關白や帝に自分が、寢覺上からつまらぬ者と思ひ比べられるのは。
(八)ほのかなりしを―以下寢覺上の心。
(九)思ひ出でしこそ―遠く離れて内大臣を思ひ出した方が。

(一)所狭かべき御身―姫媛の事。
(二)姫君ながら―貴女はまだ姫君の儘の様な態度ですが、それは見苦しい。
(三)御夕映ども―夕日に映ゆる若君姫君の御様子どもを。
(四)入りぬる磯の草―拾遺集「潮みてば入りぬる磯の草なれや見らく少く戀ふらくの多き」(もと萬葉集の歌)による。
(五)盡きもせぬ―若君姫君の生れる程のつきせぬ緣があるにも係はらず貴女は出家して捨てようとしたのですれ。
(六)憂かりける―憂いつらい契をばかけ離れないで、どうしてこの世に結んでおいたのだらうか、恨めしい事だ。
(七)さる事を見ばや―子の生れる事。
(八)事ならば―出來る事なら、その儘心安く一緒になつてしまへばよかつたのに、さうも出來なく。
(九)よくなりにいつる―一本の「世々中に隔つる」をとる。二人が、どちらも他の人と結婚しなければならなくなつた事を指す。
(一〇)ここにては―石山にて大姫君を出産せし後、寢覺上が西山に隱れし事を指す。

れば、かたはらに人々様々並み居給ひたり。又もいと所狭かべき御身を、せめてなほ姫君ながらの御もてなし、かたわなり。今は萬を安らかに、大人しく物し給はんや」とつぶやきながら、御硯の邊なる手習ひどもを、取りて御覽ずるに、ありつる御手習ひのまじりたるを見付け給ふに、様々なる御夕映どもを見渡し打思しつらん程、げに入りぬる磯の草よりも戀ふらく覺えて年頃を過ぐしゝに、如何でかう何れの程に繁りし松の末々にかと、いみじうあはれに打泣かれ給ひて、

内大臣　盡きもせぬあはれ此の世の契にや背き捨ててはやまんとはせしとて見せ奉り給へば、

寢覺上　憂かりける契は懸けも離れなでなどて此の世を結び置きけむ

など、打嘆き云ひ紛らはいて、いたう惱み面痩せ給ひたる御らうたけさぞ、似る物なきや。故大殿の、年頃さばかり隙なう添ひ居て、如何でさる事を見ばやと祈り願ひ給ふと聞きしには、さらで止めりしかど、我にのみ深くかゝりける契を結びけるさへ、あはれに嬉しきに、事ならば、やがて心安くもあらず、我も人も己がよくなりにいイ世々なかにへだつるは、心盡くしのつまを打添へける恨めしさぞ、かゝるに付けても思し知られつゝ、此所にてはいとゞ打忍び隱ろへ給ひし程の事、只今の如く思ひ出でられ、あはれに夢の心地するまゝに、隙間の風もあるまじく御衣引き交して、昔今

(一)心の暗—子を思ふ愛情。
(二)いかでかくしも—どうして、かくすぐれた子供達許りなのかと。
(三)様々なるしるし—二人の子供達や腹の中の子をさす。
(四)慰みも—意明瞭。
(五)殿—内大臣。
(六)搔き撫でなど—子供達を愛撫したりなどしては居ないのですか。
(七)我が御様に從ひて—人の親らしく身をもてなしたらよろしからうに。尙侍も、宰相中將上、大納言上も、皆貴女の様に子供らしくしてはゐません。
(八)思ひ聞え—貴女の事を心配してゐます。
(九)御扱ひ此所とて來れば—自分達が世話をすべき方は貴女であると云つて。「此所」或ひは「事」の誤か。

いと如何に口惜しくも、物心憂く覺えまし。(一)心の暗に惑はるゝにや、(二)いかでかくしもと、つくづくといと惱ましきまゝに、打ち見居(一字イ給ヘ)て、萬の憂さも嘆かしさも打紛れ慰む心地もし、またこは何時の程に様々なるしるしは現れしぞと、夢の様に涙ぐまれ給ひて、

寢覺上(四)慰みも亂れも增さる様々に契知らるゝ此の世なりける

と御硯引き寄せて、書きすさびて添ひ臥し給へる御様、はた露けぢめも分かず、たゞ同じ程の一續きの同胞のやうに、めでたくあはれに、御前なる人々見奉る程に、忍びやかにて、殿(五)おはしまいたり。驚きて、皆ゐざり入り給ひぬれど、女君はけざやかに起き上り、さわやかに打向ひ聞えん事は、なほいとまばゆくて、惱ましきに言託けて、顏を引き入りて臥い給ひたるかたはらに、様々並み居給ひたるを、打見給ふより、先づ涙はこぼれて、今はかくて見るべきぞと、思すも、危ふく、なほ靜心なくのみ思されて、内大臣「様々おとなしき人を、まがふべくもあらず、並め据ゑ給ひて、我が御心一つはなほ今めかしく、艶に鬱ほれ給ひたりや。か許りにては、物さわやかに打起き居、搔き撫でなどしつゝやはおはせぬ。見苦し。我が御様に從ひて身をば用ゐ給はゞこそ目安からめ。内に參りて見れば、尙侍いと心苦しう覺束なげに、思ひ聞え給へる氣色なめり。里にては大納言宰相の御方々、皆これ我が御扱ひ此所とて來

(一)行くべき方はなくも―行く方もない身の有様である事よ。以下寝覚上の心。

(二)紐解き―蕾を開く。

(三)すくし―一本の「すこし」の方宜し。

(四)若君―雅子君。

きるれば、心地の例ならぬに事寄せて、誰にも殊に、さわやかに起き上り見え奉り給ふ折もなく、姫君と御帳の中に起き臥し、打語らひ給ひつゝは、なぞや、(一)行くべき方はなくもある身の有様かな。後の世をだにと、思ひ取りし事も、罪さへ浅からざりければ、只今は叶はずなりぬ。恨めしき節多く、憂き事繁く、咲き盛くすべき身にこそはと、絶えず打嘆き給ひつゝ、御前の人少なに、いみじく物哀れなる夕の花は、色々紐解き渡り、空の氣色も都には綾りたる心地するを、姫君の世に知らず珍しと思して、すく(二)二字イ少しゐざり出で給へば、我も端近く、傍臥して見渡し給へば、姫君は萩の御衣ども、同じ打ちたるを上に着給へる、いさゝか片生のなり合はぬ程ともなく、いみじく花やかに匂はしく見え給ふ。若君(四)は紫苑の御衣龍膽の織物の指貫、様にけぢめ異ならず、貴に匂ひやかに、艶が艶かしく見え給ふ御容貌容體、女にていと見まほしく、小姫君女郎花なる御衣(五)はイを着給へる、御髪はゆら〳〵と翡翠とはこれを云ふにやと見えて、背中中の程打過ぎ、いみじく貴にをかしげにて、何心もなく、露も物隔たりたる身とも思いたらず、我しも増して睦れ遊び給ふも、限りなくらうたく、姫君を見奉るは、現とも覺えずなど、様々打見渡されて、繪に書かまほしく、美しき御様どもにて、並び居給へるも、一人々々かたほに飽かぬ事のおはせまし、

(三)すくし―一本の「すこし」の方宜し。

(四)若君―雅子君。

(五)御衣は―一本の「御衣を」の方宜し。

(六)物隔たりたる身とも―自分が同じ同胞でないとは知らずに

(七)おはせまし―「おはせましかば」などの誤脱か。

ばかりは、いと氣高くあらまほしく、貴はかに麗しき所つき給ひて、いみじく思すとも、なほ〳〵しき御物恨み氣色など見えさせ給ふべくもあらず、母宮の御心には、いと例へなく重りかにおはしまいて女一宮「今よりなりとも、惡しかべい事にもあらぬを、心より外に聞き憎き（イこそ）、苦しく」と許り、言少なに答へさせ給ひたる御氣配有樣いみじくめでたし。御心ばへ氣配の氣高さ、手打書き給へる樣は、飽かぬ事なく、我が契宿世口惜しからざりけりと思ひ送らるゝを、大王宮の餘りなる御もてなしに從ひ、心よからぬ御後見どもの物云ひ心ばへぞいと難かしく、などせしわざぞと覺ゆる折々多かりける。

入道殿にもさばかり申し置き、かの御自も思ひ立つべくもあらぬ身の絆、所狹かべき程と知り給ひにしかば、さりともと後安くなりて、此の御心取り給ふ。內に參り世の政治など繁き有樣にて、四五日も過ぎぬ。峰の朝霧晴れぬ山里にて、御心地の有樣をも、かくなりけりと親しき限りは見奉り知り、新中納言を始め、先々如何樣にと嘆き惑はれしに、此の度は、心にくしとても、たゞかくて閉ぢめむは、飽かずあたらしき身御行く先の遠さを、これ今始め、如何なべき事ぞとは思ふべき事にもあらぬ嬉しき事と、此の度は皆心ゆきて上下思へるに、自の御心には、おろかならずのみ、忍び初めてし事の隱れ蓑脫ぎたらん心地して、まばゆくかたはら痛くのみ、思

(一)母宮の御心には—大皇宮の心に比すると。
(二)惡しかべい事—以前からの關係でなくて、今新しく寢覺上と縁仲になつたとしても、どうしてそれなのが惡い事でせうか、それなのに意外な貴方の御言葉の聞づらいのが苦しい事です。
(三)思ひ送らるるを—思ひつゝ月日を過して來たのに。
(四)などせしわざぞと—どうしてかうした後見のある女一宮を北の方としたのかと。
(五)かの御自らも—寢覺上自身も、出家を思ひ立つ事も出來ぬ樣な身の絆（姫娘）のあるのも憚り多い事と知つて出家も思ひ留まつたので。
(六)この御心取り給ふ—寢覺上の機嫌を取る。
(七)かくなりけり—姫娘だつたと。
(八)心にくしとても—たとへ出家する事が奧ゆかしい事であると云つても、ただこの儘剃髮して此の世を遁れさせるのは。
(九)おろかならず—並一通りでなく深く隱してゐた事がすつかり露はれて了つた樣な氣がして。

(一)疎う思ひはなれよ—内大臣が寝覚上を厭ひ去る様にと思ひ計畫したのに。
(二)偏にすらあらはれ果てて—ひたすら露骨に、西山の寝覚上の許がちに内大臣が籠つて居るのを。
(三)この人の仲—内大臣と寝覚上との仲を、さいて了ふ事も出来なくなつた愁ひの高さは。
(四)ほた大臣の御身に—いくら大皇宮が非難をしても、内大臣には痛痒も感じないので。
(五)宮ばかりにて—一本の「ぞ」をとる。女一宮だけには。
(六)様もまた—一本に「給ひて、また」とあるをとる。

など、おとなしう聞え給ふを、限りなくのみ見奉り給ふ。

(一)うとう思ひ離れよとのみ思し構へしまゝに、(二)ひとへにもて現れ果てゝ、山里がちに籠り居給へるを、大皇の宮は異人よりも嫉くいみじと思し騒げど、如何はせさせ給はん。遂に此の人の仲をも遥へ果てず放りぬる御愁への高さ、富士の嶺よりも高けれど、云ひやらせ給ふべき方なきまゝに、世を恨みくねらせ給ふ、はた大臣の御身に苦しかるべくもあらねば、宮許りにて(五)ぞ思し召たゞん所心苦しくて、内大臣「これは今始めたる事にも侍らず」とて、もとより有りし様を委しく語り聞かせ奉り様(六)も三字イ給ヘテ内大臣「またあらためて珍しくなど思ふべきにも侍らずば、たゞ姫君のやう〳〵およずけもて罷るまゝに、いと後めたく侍れど、限りあれば身に添へてえ侍らず、餘所〳〵なる折がちに侍る程の覺束なきも思ひ譲りて、心安くと思ひ侍る許りには思ひ給へつきてぬを(七)、大皇宮はいとかしこく思し勘當せさせ給ふことわりに侍り、数ならぬ身の口惜しき代りには、又分く方なく聞し召されんをだに、かしこまりにと思ひ給ふるを、さすがにえ去りがたき絆数多にかゝづらひて侍る程をば、思ふ給へ棄て難くなんかの人もうけばり現れて頼むべき物とも思ひ懸け侍らずば、厭ふ心いと深く侍るめれば、無禮なる有様など世に聞し召され侍らじ。よからぬ人悪し様に取りなし申す事も侍らんを、ゆめ御心置きて思し召すな」と、細やかに聞えさせ給へば、御心はへ

(七)つきてぬ—「附きてぬ」か。突き出ぬ」か。「付きてし」の誤か。
(八)かの人も—寝覚上も。
(九)頼むべきものとも—私を頼みになる者とは。
(一〇)厭ふ心—寝覚上の私を厭ふ心
(一一)御心置きて—私を隔てがましく御思ひなさるな。
(一二)御心はへばかり—女一宮の心ばへ。

思ひ寄らざりけるも、げに淺ましく、憂き世を背きぬると、思ひなさまし。心はゆくとも、如何に見苦しく人見扱はまし程よ」など、思ひ遣るさへ、萬に罪淺からず心憂く、さりとてかうひたぶるに立ち隱れなうなりてしも、いとゞ目安かべうも無う、如何につら三字イ憂き節多く、恨めしき事數知らず重ならんとすらん。背き隔たらまし程の恨みこそありとも、永らへては、我も人もさわやかに大方の頼み多かる頼もし人にてはおはしなましものを。(イ過き)にし方も、我は立ち離れ、ひとへに忍び事の憚りを交しゝ程の哀れ淺く覺え給ひし人かは。此の度百敷の中厭ひ出でしよりして、如何ばかりかは憂さもつらさも思ひ知らるゝ事多かりつる。今はと召されむ程、后の宮の御心構へなど思ひ遣るに、ゆゝしくうとましければ、如何はせむと、打ちゆかむ イるび思ひ直さるる事はなきながら、秋の積り、風の氣配の涼しさに、限りありける心地は、やう〳〵さわやかに思しならるれど、入道殿には更に起き上り見え奉り給はず。思し合はせ給ふらん御心の恥かしさは、その折聞き付けられたらましにも、劣らぬ心地のみし給へば、なほ花々しからずもて隱しつゝ、さやかにも見合はせ御覽ぜられ給はねば、さ思すなめりと、心得給ひて、なほ若の御心やと、あはれに心苦しきまゝに、日々に渡り給ひつゝは、姫君を盡きせず、打見守り聞え給ひて、萬をあはれに聞え知らせ給ふを、姫君も、かゝる御有樣を見奉らで過ぐしけるよなど、打涙ぐまれつゝ、御答へ

(一)憂き世を背きぬると—自分だけはつらい此の世を背いてうまく出家したものだと思ひ込んで、自分の心は滿足しても、出家してから子を產む樣な事があつたなら、世間の人はどんなにひどく見苦しいと見、又思ひ扱ふ事であらうよ。程は時の意。

(二)ひたぶるに立ち隱れなう—四ケ月にもなつて。

(三)頼もし人にては—二八は綺麗な交際をして、寢覺上にとつては、內大臣は普通のお世話をしてくれる頼もしい人であるだらうのに。

(四)今はと召されむ程—是非にと帝から召されたる事や。

(五)いかがはせむと—どうしたら良いかと許り、心をゆるめて思ひ直さるる事もなく苦しい事のみ續くものの。「うちゆかむ」は一本の「うちゆるび」の誤。

(六)限りありける心地—死ぬ程だつた寢覺上の病氣。

(七)さおぼすなめり—恥づかしく思ふのだらうと。

(八)かゝる御有樣—祖父の入道殿なる。

(一)誰も千歳の―「憂くも世に思ふ心に叶はぬ誰も千歳の松ならなくに」(古今六帖第四)

(二)いかが見るべき―もし寝覺上に文でも送つたなら、内大臣が何と見るだらうとは御思ひになりながらも。

(三)などてか―いやどうして惡い事があらうか。この内大臣が公然と寝覺上と連れ添うてゐるのに、自分が言ひ寄つたなら、それは、いけないだらうが、少し位の事は知らぬ顔で手紙をやつてもかまふまいとお思ひになつて。

(四)苦しげさ―寝覺上の苦しさうな樣子よりは、その非常に惱ましく物思ひに耽つてゐる有樣を見て。

(五)剃ぎ寞し―剃髮す。

(六)四月許り―姙娠四ヶ月。宮中より寞覺上が退出した當時の契りで、この寞覺上の病氣は姙娠が原因だつたのであつた。

(七)御心地―この寞覺上の病氣は姙娠の爲だつたのだと。

(八)尊く思し赴かれぬ―後生を願ふ出家の事。

(九)知りながら―姙娠とは知り乍ら剃髮しようとしたのですか。

らば逢ふ世もやと慰めさせ給ふべきに、(一)誰も千歳の松ならねば、限りと聞き閉ぢめさせ給はむ御心惑は、我も增さりていみじく思し召されぬべきも、をこがましき心かなと返す〴〵思し取りながら、大臣の添ひ居て思ひ騷ぐなるも、(二)如何見るべきとは思し召しながら、そはなどてか、(三)現れて此の人に添ひてありしに、一言も懸け初めたらばこそ便無からめ、少々は知らず顔にてと思し召して、怪君の御文の中にて、例の白き紙に、言葉多くもあらず帝文「いとかゝれば」と許り書かせ給ひたるを、大臣御覽ずる程にて、内大臣「いであなのろ〳〵しの御事や。かくのみ思し渡る、げに御心地もかゝるにや」など宣へど、まいて御返此の程はあべき事にもあらずかし。御心地の苦しげさ(四)よりも、物をいみじと思し入りたるを、殿も皆心得給ひて、かばかり思すにては、手づから剃ぎ寞し(五)給ひてんを、如何せむと後めたければ、片時も立ち離れず、萬に泣く〴〵慰めつゝ、ひとへに纏はれたるやうにて見奉り給へば、四月許りになり給ひにたる御乳の氣色など、紛るべくもあらぬ樣なるを、此の御心(七)はかくにこそありけれと、淺ましく見驚き給ひて、内大臣「げにいと尊く思し赴かれぬべかりけり。知りながらさはれと覺い思ひしか。(イヌ)我かゝる事ありとも覺え給はどりつるか。いみじく思ひのまゝに、心幼かりける御心かな」と言ひ知らせあばめ聞え給ふに寞覺上「怪しと思ふ事どもはあれど、さのみ夢のやうに物はかなき契あらんやはと

(一)水淺みに—狹衣物語巻四の水淺みにも隱れも果てぬにほ鳥の下に通ひし底も見しかはの歌の意。

(二)かしこく構へ過ぐしける程—大姫君に關する事を小ざかしく隱しての事を、どんなに父入道が思ふだらうと。

(三)れたり顏—寢た風を裝うて、狸寢入。

(四)見合せざらんぜらるべき—どうかして入道殿と顏を見合はせないで居たいと。ぜらるべきは「見合せ御覽ぜらるべき」の誤寫、或は「とせらるべき」の意。

(五)さりげなくて—入道殿に話した樣子も見せないで、よくも入道殿は私をだましたものだ、内大臣は、思ひ立つた出家も遂げられないかも知れないと。

(六)思し亂るゝに—上に、一本に「など」とあるが、入るべきである。

(七)新中納言—寢覺上兄。

(八)思ふ事—出家。

(九)大納言宰相中將—共に故關白の婿君。その妻達も。

(一〇)上もまうのぼり—帝も尙侍がのぼる事もないので、登華殿に御ばい逢にて暫し忘れむ命だにあらば逢ふ世のありもこそすれ」命があらば逢ふ世もあらむと。

し。水淺みにいとかゝりける事を、面無くもて隱しけるよ」など中々心幼く、その折見付けられたらましよりも、かしこく構へ過ぐしける程を、如何に思すらんと、なか〳〵異人よりも、恥かしく、いみじきに、汗も流れて、ねたり顏に、息も立てず淺ましとのみ聞き思すに、打ちだに身じろかれず、如何で見合はせざらんぜらるべきにかと、悲しさまで物の恥かしきに、汗も流れて、寢覺上「さりげなくてすかし給ひけるかな。思ひ立つ事どもも、えあるまじきなめり」(イなど)思し亂るゝに、いとゞ御心地も搔き亂るゝやうになり增さりて、いみじく苦しげにし給へば、思し騷ぎて御修法數多始め、道々の陰陽師など召し集めつつ、御祓御修行など、こちたく思し殘す事なくて、籠り居させ給へれば、上達部殿上人參り込みて、いと物騷がしきに、今日ぞ新中納言も參り給へる。いと物騷がしく、思ふ事叶はで止みぬべく、口惜しさをさへ、方々思し入り、絕えて起き上りなどし給ふ事もなく埋れ給ふに、御心地も勝るなるべし。大納言宰相中將の御方々も驚き渡り集り給ふ。

尙侍の殿も罷出て見奉らんと焦られ思すとイせど內大臣「さまでおどろ〳〵しかべきにもあらず。今暫し心みてぞ」とて、罷出させ奉らせ給はねば、いぶせく覺束なき事を思し歎きて、上も參う上り給はねば、渡らせ給ひつゝ、心苦しく御覽じ慰め給ひて、一行の返事をだに御覽ぜさせず、まだ知らず淺ましう妬き人と思し召さん方は方にて、あ

(一)かゝる人―大姫君。

(二)まづ心にかゝらせ―まづ大姫君の事が氣にかかるのが。

(三)我が身も末に―自分も晩年に近づいたので、寝覺上を帝の女御にさし上げようなどと思ひ立つ事もなく已んで了つた事が、今こゝも殘念に思はれ、もう心細く生涯を過す寝覺上の身であると前途の希望もなく思はれて氣が晴々としないので。

(四)こまかなる物―ねんごろなる者に。

(五)人の御生先―大姫君の。

(六)その道ならぬ大和相を―人相を見る事は外國の方が上手であつて、此の道には餘り熟達してゐない日本の人相見に云ひ付けて人相を見させた所、此所の所は、源氏物語の桐壺の巻を思ひよそへたのであらう。

(七)上なき位―最上の位。帝、后の位。

(八)人のものし給ひける―人の様子なしてゐるので。

(九)その上や―知らぬ以前は。

と怪しく思ひ侍りつるは、かゝる人を見奉らん事にこそ侍りけれ。今日より、はかばかしからぬ念珠のついでには、極樂の望みはさし措かれ、先づ心にかゝらせ給はんずるが、此の世の絆強くなりぬる心地し侍るかな」と、まことにいみじく悲しと思したるを、殿もいみじく甲斐あり、いみじと思するイナシ、昔物語などの心地して、いとあはれなるに、止めもやられ給はず。立てて見奉り給へば、四尺の几帳に及ぶ程にて、いみじくをかしげなる御容體奏に、御髮は艶々なよ〳〵と隙もなく、後れ亂ふ筋もなくて、丈にたゞ少し外れ給ひつる、見れども〳〵母君に何處か劣り給はんと、嬉しく悲しく見奉り給ふ。三我が身も末にただなりになる心地せしかば、内に奉らんなど思ひ立ち敢ふべくもあらでやみにしを、今に口惜しく、心細く在り果てぬる御身と、生ひ先なく、思し屈ぜられて、若君許りこそは行く末の御賴もし人にておはすめるに、小姫君を取り得て、我が物と生し立て奉り給ふをだに嬉しく、かれをこそ(四)こまかなる者に生し立てゝ、えさらぬ御飾りともなるべかめれと思ししに、たゞ打見るより際もなき人の御生ひ先、その道ならぬ大和相を仰せて、上なき位を極め給はん事、何の疑ひあべうもあらぬ人の物し給ひける、そのかみや、憂しとも物しとも覺えまし。今はひとへに嬉しく賴もしく思されて、行も打忘れ、つく〴〵と見奉り給ふ氣色いとあはれなり。寝覺上いなや、こは皆聞え給ひてけるなめり」と「淺ま

き方やただ少し後れたる心地すると見るを、(一)これは今からィくか許りきびはなる御程に、いと氣高く、打見んに、たゞ人とは覺えず、添き樣さへ添ひ給ひつ（二字ィへる）を、かゝる人のまた世に出でおはする世にこそありけれと、打見奉り給ふより涙昏れ塞がる心地し給ひて（入道殿）「幾つにかならせ給ふ」と申し給へば、殿（内大臣）十一にならせ給ふらん」と申し給ふ。御年の程、(二)かまィぞへ思ひ出づるに、二年の限り帳の内より頭もさし出でず、臥し沈み、いみじくて石山に籠り、我も頭剃しなどせし程に、生まれ給へりけるなるべし。あはれこれを人に知らせじと程なき身に忍び隱し、さりげなくと思ひ嘆き給ひけん心地、如何許り侘びしかりけん。思はずに、心憂しと思ふとも、氣色を見付けたらましかば、云ふ甲斐なくて、我こそ扱ひ聞えましか。如何にしてもなど思し遣るさへ、いみじきまゝに、人目のをこがましからんも覺えず、隙なく押し拭ひつゝ、實にいみじくとも、我が心ならぬ事の思はずなりと覺えて（入道殿）厚きやうは侍らねど、もとより大君だつ筋にて、おれ〳〵しく、世の人のやうに際高にをかしき所は、今も昔も侍らざりし身にて、深う咎め云ふかど（二字ィ事）も侍らざらましものを、今までこれを他所の者とう聞き奉りて、見奉らざりけるよ。今日まで堪へぬ命に侍らましかば、やがて見奉らでや過ぎ侍らましと思ひ給ふるに、いとゞしくなか〳〵、その折思ひ奉りしよりも恨めしく心動き侍り。よく憂き節々を心強く見過ぐすかな

(一)これは―この大姫君は。

(二)かまへ思ひ出づるに―一本の「數へ思ひ出づるに」を取る。

(三)あつかひ聞えましか―立派に姫君の面倒を見た事であらう。

(四)いみじくとも―姫君を寢覺上の子とも知らずにあたのは忌々しい事だが、自分の心からした事でない、思ひがけない事であつたのだからと考へて。

(五)あつき樣は侍らねど―それほど深い血統といふわけではないが、自分も勿論天子の御血筋を引いてゐて。

(六)これを―此の姫君を。

(七)とう―「う」は衍字か。

(八)その折思ひ奉りしよりも―以前に内大臣との噂が高まつた當時、寢覺上を恨めしく思つたよりも却つて。

(九)心強く見過ぐす―寢覺上が。

り侍らん」と聞え給ひたり。例はかゝる御消息もなくてこそ渡り給へ、かくて物し給ふを、如何でか心得給はぬやうのなからんと、佗びしければ、さりげなく、寝殿上外に出で給ひてをこと宣ふに、いとをかしけれど、内大臣「如何は」とて御簾の外に出でて居給へる程にぞ渡り給へる。(八)道憂(一)暑氣にいたう凉み過ぐして、亂り風邪の例ならず侍りしかば、昨日もえ渡り見奉らざりし。(二)如何にぞかたくゝみは。(四)もてなしがらなり身をもて損ひ、物をのみ思はせ奉りけるは、胸痛う、見奉り給ふにつけて、心のみ今更に亂れ增されど、何かは、今はともかくも聞え給ふべきならねば、(九)いづら、かの聞き奉りし人は。此所におはしますか。今日だに如何で」と、聞え給へば、大臣、如何に聞き給ふらむといとほしながら、打ち笑ひて、御屏風押し開けて、内大臣「此方」と聞え給へば、いと愼しげにゐざり出で給へり。女郎花の織物の單衣、裏は黄の小袿着給ひて、いたく恥ぢらひ給ひたれば、かがや(十)しくなどはあらで、いとのどかに、扇を紛らはし給ひたる御もてなし有樣を初め、顏なく美しげにぞおはしける。よろしく成りあはぬ御樣を見付けたらんにてだに、打見むあはれいおろかなべきにもあらぬを、花々と匂はしき御容貌は、母君をこそ、我がむ(十一)めとも云はじ、世に顏(十二)なき一つ物と幼くより見しを、かれは切に愛敬づき美し〻匂ひ過ぎ給へる程に、氣高

(一)宣ふに―内大臣に。
(二)暑氣―寝殿上に向つての言葉。
(三)いかにぞかたくは―どうしてかく、難かしげにしてゐるのですか。
(四)もてなしがらなり―病氣は凡て氣の持ち樣によります。
(五)聞き奉りし人は―かれて聞いてゐる大殿君に。
(六)世に類なき一つ物―世に比類のない唯一の容姿の者と。
(七)かれは―寝殿上は。

(一)佛などの思はせ給へるにや―下の「と思ふ心ただつきにつきぬるぞや」にかゝる。
(二)かの御前―入道殿の御前に。
(三)我が思ひ寄らず―自分は田家などとは思ひも寄らず、濁世に心沈んで日を送つてゐるさへ憂きに、どうして他人の思ひ立つた田家を妨げようかと。
(四)さめやか―「さめやか」の誤。
(五)御身―寝覺上自身を指す。
(六)さまよき心―内大臣は又良い心のある人であつて、今度の田家も詮ない事と許して呉れたのであらう。

せ給ふ怨めしさは、世々を經とも、盡きすべくも覺え侍らざりつれど、佛(一)などの思はせ給へるにや、かの(二)御前に參りにしかば、これ常なき世に、味氣なしィく、我(三)が思ひ寄らず濁りに沈み過ぐし侍るだに心憂きに、なぞ人の思したらィ立たんさへ、妨げ侍るべきと思ふ心ただ附きに續ィっきぬるぞや」と、さめやかに宣へば、(四)寝覺上「げにさもやありつらんな。何かは心安べうもあらぬ御身(五)の苦しげさに、いと様(六)よき心はたおはする人にて、げにあいなしとも思し許しつらん。さて頼み聞えんは、我も人も恨めしき節(ふしまと)交らず、さわやかに、いみじく嬉しくあはれなべきわざかな」と、胸明く心地すれば、顔に押し宛てたりつる袖を少し引き直し、打ち緩ぶ氣色をかしくあはれなるものから、か許(七)りいみじくあたらしげなる様を、直ちに背き寢さんと思ふ心の深からんよ。如何ばかり世の恨めしく思ひ染み給ひけるにかと、いとほしく悲しう思さるるまゝに、都の方には諸共ならずよりほかは、(イはゝ)立ち歸るべき心地もせず、後めたければ内大臣交「暫し此所に見給ふべき事ども侍り。いとほしき人の患ひ侍りつるを、年頃懸けても問ひ侍らで、いとほしう見給ふる程に、暫しは休(八)らふべう」など聞(九)え給ひつ。院后(一〇)の宮いみじき勘當ありとも、如何せむ。さのみ慎しむべき事かと、ひたぶるに思しなりて心安きを、今日ぞ吉き日なれば、入道殿に姫君見せ奉らんと思せば、御髮參らせ引き繕はせなどして見奉り給ふ。思ふもしるく　入道殿「御心地は如何。參

(七)かばかり―以下内大臣の心。

(八)やすらふべう―ここに留まります。
(九)聞え給ひつ―女一宮に。
(一〇)院后の宮―朱雀院大皇宮。

(一)かく思し捨てたれど—母なる寝覺上は子供達を思ひ捨てたけれど。
(二)おぼつかなくのみ—子供達は母なる寝覺上を常に氣懸りに思つてゐる、その樣子が心苦しいので。
(三)よべまうできこえ—「まうできて」をとる。
(四)如何思し召し—もし大姫君を貴方に見せたならば貴方がどう思ひになるだらう、怪しどうお思むだらうと寝覺上が貴方の思を御覽に遠慮して、殊更に大姫君に入れないのだと聞いて居ります。
(五)かれば—内大臣が寝覺上の許に來ても、ここの數年來は特別に取扱つて可成逢はぬ樣にしたが、今日は姫君が居るので、露骨に部屋に入つてはいけませんなどと告げる事も出來ず。
(六)いとあやしく—以下寝覺上の心。化粧もしない見苦しい樣子を。
(七)うちとけ—内大臣に打解け。
(八)ただ入りに入り—内大臣が。
(九)とてもかくても—私はとにかくひたすらあなたを奥床しく思つて慕つて居るのですが。

しく立てたる所おはして、物怪(のけ)、字イしげなる御氣色などやと思ひつるに、いと嬉しくて、内大臣「(一)かく思し捨てたれど、親子の契あはれに侍りける事、いみじく覺束(二)なくのみ思ひ聞えさせて侍る氣色の心苦しさに、昨夜(三)參うで聞えて來て、ただ如何にもあづけ聞えさせ侍るは二字イりなば、自(おのづ)らしなさせ給ふやうありなんとのみ、身一つにはもて煩ひて、奉て參りて侍れど、(四)如何思し召し心得させ給はんと、御氣色を思し憚りて、殊に御覽じも入れぬとなむ承る」と聞え給へば、大納言「今さへかく包み隔てんと思はるゝこそ、いと心幼(をさな)く心憂く侍れ」など聞え給ひて、此方に歸り給へれば、かれ(五)をば年頃は背別にもてなして、姫君のおはしませば、露(あらは)になど言託(ことづ)くべきやうもなく、いと怪(あや)しからん程を、むげに殘りなく打解(と)け見え奉らんも、いとこそ恥かしく、入道殿ちこそ渡り給へ、如何(いかが)見思さん。姫君のかくておはするをも、怪(あや)しと心得給はんとすらんなど、いみじく苦しく萬(よろづ)に思し亂るゝに、何(なに)の障(さは)りなく、ただ(八)入りに入り給へば、云はむ方(かた)なくて、顏を引き被(かづ)きて臥(ふ)い給ひたるに、寄りて、かく聞えつる事の氣色も見せず、内大臣「今の程は如何(いかが)、御湯などは召しつや。とてもかくても(九)ゆかしと思へど、御出家(すけ)の事も、入道殿も『本意(ほい)深き樣(さま)になん宣ふ』と云ひ合はせ給へるに、妨げ申さむ、いと罪深き事に侍れば、さべきにこそ侍らめ。幼(をさな)き人々の爲めにも、『さながらも永く物せさせ給はむなん嬉しかるべき』と皆定め申しつ」見ず知らじと厭ひ捨てき

(一)若き者どもに―寝覺上の兄姉達に寝覺上をあづけたので。
(二)隱し惑ひ侍りし程に―寝覺上が苦勞したので、その罪過も消えてしまつた。
(三)はゆく―面はゆく。恥かしく。
(四)若君―雅子君。
(五)露違ふところ―内大臣と少しも違ふ所なく。
(六)今一人の御床しさ―大姫君も早く見たく思はれて。
(七)いづくよりおはしましたる―大姫君は何處から來た人であるか、母も誰とも内大臣が云はないのは、身分の高い女ではないのであらう。
(八)際々しく―入道殿は際立つて角々しい處がある人なので北の話を聞くときつと怒るだらうなどと思つてゐた處が、案に相違して、心優しく親切に語つて呉れるので内大臣は喜んで。

今に此の人の身を嘆かせ侍るまじ三字イりなましやは。たゞそこはかとなく、(一)若き者どもに打ちあづけて侍りしかば、いと一字イかが云はれん、我が怠りにや云はれんとのみ、心幼く怖ぢ包みて隱し惑ひ侍りし程に、萬の罪過を消ちたりける。故大殿の御志は、さる不意の事なり。それを見あやめ見貶す人も侍らましかば、如何にいみじかんべかりける事なり。只今思ひ遣らるゝ心地だにはゆく遣る方無う思ひ給へらるゝ。かく知り侍らましかば、いみじく眞事に閉ぢめつる命と見るとも、如何でかさは思ひ寄り侍らん。いと心幼くいとほしかりける人の心ばへと見聞き侍りぬれば、今より後も後めたくも侍るかな。げにその折こそ包み侍らめ。今はやう〳〵氣色をも見せ知らせ侍れかし。いと云ふ甲斐なく侍るや」と言ひもやらず、押し拭ひつゝ思いたる氣色いみじくあはれなり。(四)若君の此の事どもをつく〴〵と聞き入りて、のどかにさし並び居給へる顏付も、今日ぞ目止めて見給ふに、(五)露違ふ所なく、二にうつしたるやうなり。日頃もいとよく似給へりとは見つれど、なほ優れたる匂ひどちは、自さるにやとこそ思ひつれ。すべてまがふべくもあらぬを見給ふに、今一人(六)の御ゆかしさも取り敢へずなりて　入道殿「年頃は、(七)何處よりおはしましたる人にかは、『誰と聞えぬは、やんごとなきにはあらぬなめり』と、世人も申すと聞き侍りつるを、あはれにをこがましく侍りけるわざかな。今だに如何でか見奉るべく」と打ち萎れ給へば、(八)さは〴〵

(一)人は先き立ち―故關白は先に死に。
(二)命永さは―寢屋上の命永さ。
(三)見果てぬ夢を―後撰集「よそ作ら思ひしよりも夏の夜の見果てぬ夢ぞ儚なかりける」寢屋上の餘生を云ふ。
(四)いとどせげなる―「いとど狹げなる」の意。一本によれば「いと遠げなる」の意。
(五)え永かるまじき―以下「身にもあらず」迄寢屋上の言葉。「え永かる」一本「えなながらる」とあり、「え永らふ」の誤寫か。

勝る事は何處にかはと思ひ給へば、許し侍りにしかど、人は先き立ち、憂きに堪ふる命永さは、人にすぐれ侍りけるものを、見果てぬ夢をさへ嘆き添へさせず、たださてこそ世を盡くさすべかりけれど、さすがにえだいとせけなる生ひ先を、殘りなくもてはふらかすやうにしなして、悔い思ふ給ふるに、此の五月ばかり渡りて物せられし程より、例ならず氣に見え侍りしが、月日を經て、いと頼もしげなくなり增さりつゝ、「え永かるまじきやうになん、夢にも見ゆる。此の世の有樣も、今は限りの、殘りゆかしかべき身にもあらず」殘りなく世を飽き果て、心細げに泣く〳〵此の日頃言ふ事侍るを、暫しはあるまじき事と過ぐし侍りしを、切に物せられし氣色にも、いと頼もしげなくのみ侍れば、何かは、實にいみじく惜しみ止めても、限りあらん命をば、如何はせむ。それに懸け止むるやうもあらば、甲斐なき樣ながらも見てん。閉ぢめ果てつる命ならば、後の世の頼みもと思ひ給へなり。「さらば」と受け引き侍りし。此の宣はする樣には、夢の中にも思ひ給へ寄らず侍りけるおれ〳〵しさを、今日こそいみじかりける過かなと、さべき事と言ひながら、驚き思ふ給ふつらなれ。げに母添はぬ許りいみじき事はなかりけりとこそ、いとゞ承りぬれ。こんべき人添ひて侍らずしかば、その上自後安かべき樣に洩らし聞かせ侍りなましかば、人の思はれん所もかたはら痛く、さはもてなさで、

(六)それに―出家をして。
(七)おれ〳〵しき―愚かさ。
(八)思ふ給ふつらなれ―「つら」は「仲間」の意であるが、一本の方宜しい。
(九)こんべき―一本の「さんべき」をとる。さうした姫君迄ある間であるなら、其の當時に心安く私に知らせて呉れたなら、世間の人の思はくも氣懸りだ。故關白には嫁がせず父今に至るまでこの寢屋上を嘆かせる樣な事があつたらうか、なかつたに違ひない。「侍るまでやは」は、一本に「侍りなましやは」とある。

(一)心をやりて―自分の思ひ通りに。
(二)さだすぎたる人の―年の老いた故關白が、寝覚上には厭はしく思はれるのかと。
(三)我が思ふ氣色ざまを―自分の寝覚上を故關白に嫁がせたいとの氣持に逆らはないで。
(四)故昔人の心に―内大臣が故大君の心に遠慮をして。
(五)恨めしと思ひ聞えし折の―故大君との事について、内大臣を恨めしいと思つた折の多かつたのは。
(六)故大殿はたとの噂の高かつた時に、その寝覚上に寝覚上を迎へる故關白は寝覚に非常に輕蔑を感ずべき筈だつたのに。
(七)二所―寝覚上、内大臣、故關白。
(八)さる事―内大臣との關係ありて、寝覚上が石山にて姫君を産んだとの事。
(九)この人―寝覚上。
(一〇)怠り―私の過失。
(一一)眞事なるまでも―その噂が本當であつても、それは人が惡いのではない。自分の過失である。

(一)心をやりて、故大殿に許し放ちし程、男も女も如何許り思されけん。むべこそ命も絶えつばかり、いみじかりしを、たゞさだ過ぎたる人の厭はしきかとのみ心得て、佗び云ひカ恥ぢしめ聞えしを、如何に佗びしと思ひけん。そのまゝに逃げ隱れ、髮を剃ぎ落しなどもイナシせず、身一つを焦しまさり、病にないても、我が思ふ氣色樣を違へずもてなされ給ひしを、女君の御心をもいと有難くあはれに、此の大臣の思し宣ふ氣色見るに、實に淺からざりけんを、故昔人の心に憚り、亂りがはしきやうなりと、さりげなく忍び給ひける御心掟、恨めしと思ひ聞えし折の多かりしは、いと惡しう罪得がましかりけるわざかなと思し遣られ、故大殿、はたいみじき心劣りもしぬべかりける事を、待ち二字イナシ取り、露許りあやむる心もなくもてなし、思ひ捨て給ひにし、はた悲しう有難く、三所の御心を樣々思しことわるに、我がいみじかりける過に、多くの人の御心を亂りて、何心無かりけるは、云ふ甲斐なく恥かしういとほしく思さるゝに、ほつ〳〵と涙を流い給ひて、人道殿さる事なん世の人中すなると聞き侍りて、すべてともかくも此の人をもてなさで、打捨てて背き侍りにし身の怠りなり。眞事なるまでも、人の怠りならずと思ふ給へて、迎へ取りて見給へしに、命は今日明日とのみ殘りなく覺え侍り。我さへ見捨てゝはと、悲しく哀れに侍りしに、故大殿、『たゞ親樣に讓り取らせよ』と、切に物せられしかば、かゝる草の庵に、これより

(一)男子は隈侍り―男子はどれほど子供の世話をしようと思つてもいろ〳〵忙しくてその程度があり。

(二)自らは知らせ―貴方自身の經驗でも、子供に母が必要なる事はよく御存知でせう。

(三)母添はざらんやうなる―子供には母添はなんやうなる―子供程忌々しい事はありません。

(四)思ひ違ふ―一本に「思ひに違ふ」とあり。

(五)これを見過ぐして―今度の寢覺上の剃髮を見過ぐし、深くつつみ隱して、誰にも知らせずに許しておやりになる御考への樣ですが。

(六)つゝませ給ふことの侍りし―寢覺上が私との關係を隱してある間は、私も寢覺上の云ふなりになつて居りましたが。

(七)今におきては―今よりなつてはたとへ寢覺上自身が思ひ捨てても、この大姫君を人並に育てて見ようと思ふべきである。捨て樣などとはもつての外の事です。

(八)御前も―貴方もこれらの事情は御存じであるが、俗にも體の儘でなくても姫君の世話は出來ようとお思ひになつて、これから行末長い寢覺上を忽ちに出家させようとお考へになつたのだらうかとも、その間の樣子を知りたくて、以下の事をお話した次第です。

(九)搔きくづし―口說きたてる事。

(一〇)あはれかゝりける事ども―以下人道殿の心。

なば、後の宿世は知らず、宮仕へにも出だし立てんと思ひ給へ掟てたるに、限りなき志侍れど、男子は限り侍り、乳母などと云ふ者、はたはかゞ〳〵しく心の掟後安かべいやうも侍らず。自ら思し知らせ給ふやうも侍らん。女やう〳〵およずけむまゝに、父はなくても侍りぬべかりけり。母添はざらんやうなる、いみじき事なん侍らざりける。世の中の人の心うるはしくもあらず、おほけなうあるまじき心使ふ輩交りて、さるべきとは言ひながら、思ひ違ふ心も出で參うで來る、誰が心も安氣無う味氣無く侍りやうなほこれを見過ぐして忍び籠めて止みなんと思すべかめれど、つゝませ給ふ事の侍りし限りは、さてこそは御心に從ひて、忍び過ぐし侍りしか、今におきては、自をこそ思し捨てめ、此の人をばなほ人々しうもてなして見むとは思し召すべうなん侍る。女の御身忽ちに背かせ給ひても、きはだかに、雲に登らせ給はざらん限りは、此の世の御身の飾りとも、自らなるやうも侍りなん。御前も此の事どもの氣色を洩り聞かせ給ひながら、何かさして違もと思し取らせおはしまして、また遙けき御行く末を忽ちに寢し奉らんと思し寄らせ給ひけるにやとも、御氣色賜はらまほしう侍りてなん」と、搔きくづし打泣き〳〵聞え給ふ氣色の、心深うあはれげなるに、入道殿すべて〳〵目も口も一つになる心地し給ひて、淺ましきに、とばかり物も云はれ給はず。あはれかゝりける事どもを、夢の中にも我が知らで、

すのみ思ひ給へられしが苦しさに、事と慰む事もやと、怪しきふでまめになり置き侍りにし心をあらためて、朱雀院の宮の御事も思ひ寄りにしを、それに心の安まるやうはなきものから、昔の人には深う恨み置かれ、御前にもおろかになめげる者に聞し召し置かれ侍りし愁へ、高く思ひ給へ渡り侍りながら、ついでならではえ聞えさせ出でず侍るを、我も人も心安かりぬべき折をも待ち出で侍りけるを、何しに思ひ給へ寄りし心なりと、大皇の宮の御心掟のおいらかならず、さる事もやの御疑ひに、いぶせげに思し構ふる御事どもの侍るを見聞き侍るごとに、悔い思ふ給へらるるに、此所にも、いまだに露許り打ちゆるびあはれを懸け給ふ御氣色もなく、昔ながらに厭ひ捨てさせ給ふ、げに數ならぬ身の分くる方なくだにあらず、いと取り所なしと思ふことわりを皆思ひ給へ知りながら、一人も二人も、そは人の心がらにこそ侍らめ。いと心憂く、やがて見え知らるまじき樣にと思し立ちける御心を、昨夜承りつけしまゝに、驚きながら、此のついでに聞し召し入れぬまでも、昔よりの人知れぬ心の亂れ、契の恨めしさを聞えさせ現してんと、思ひ給へ立ちてなん、よしや思し召し捨てさせ給ふ身一つこそ侍らめ。男子はげに自ら生ひ立ち侍りなん、女に侍るは、いとけなき程こそ、げに乳母の懷一つを限りなき窓の内と頼みても生ひ立ち侍りにき。やうゝおよずけまかる年頃に、今一つ二つの年も加はり侍り

(一)事と―その事ととり立てゝ。
(二)まめになりおき傳りにし心を―眞面目になつてゐた心を改めて、浮氣心を出し。
(三)思ひ寄りにしを―朱雀院女一宮にも通ふ樣になつた事を指す。
(四)昔の人―故大君、内大臣の先の北の方。
(五)え聞えさせ―貴方に（入道殿に）。
(六)人も―寝覺上も。
(七)なにしに―どうして寝覺上を思ふ私（内大臣）の心なのかと。
(八)さる事もや―寝覺上と關係があるのではないかと。
(九)悔い思ふ―上の「何しに思ひ給へ寄りし心なりと」より續く。
(一〇)此所にも―寝覺上も。
(一一)一人も二人も―女を一人持つも二人持つも、皆人の心柄によつてであります。心柄惡ければ一人の女をもつても、その女は苦しい日に逢ふだらうし、良い心柄の人に愛される二人の女は幸福でせう。
(一二)御心を―寝覺上の心を。
(一三)思し召し捨てさせ給ふ身一つ―以下は「思ひ捨てる自身は良いだらうが、雅寝覺上は男子だから良いが、後に子君にとつて、母が世をこる姫君にとつては、非常に惡い事ですの意。
(一四)まかる―「まゝさる」の誤であらう。

く侍りし程、心のまゝに好きまゝ歩かんを許しなうもどき謗らるべきやうも侍らざりしかど、人の上にて、もどかしう見ゆる事を、さはあらじと思ひ給へ止め侍りしを、不意に見奉り初めて、我も人も行く方へも知らず思ひ給へ惑ひ、かゝる思ひに心を亂さじと思ひ給へし本意もなく、明け暮らす空なう思ひ給へし程に、殿に召し侍りしに、大殿かしこき事と勸め物せられしかば、參り付き侍りて、かつは身に餘りてかしこき御顧みを思ひ給へ知る方も淺からずながら、私の人知れぬ思ひ身を離れず侍りしに、夢のやうに聞き付け奉りても、今は如何亂りがはしく、さはこれなりけりと、もとの心を現し出づべきにも侍らざりしかば、たゞはかなかりける契を恨み思ひ給へしに、此の姫君の夢ばかりの契に侍りけるを、その心知るどち嘆き思ひて、行く方なきやうにもてなしつべう侍りしを、あながちに忍び尋ね取りても、何處よりともなくて、年頃は育み生し立てゝ侍りし程に、今やう〳〵物思ひ知る際にもなり果て侍るめり。雅子をもらし、さる氣色にやなど思ひ給へし程に、故關白の大殿に放たせ給ひし程に、我が爲め人の爲めいみじき事にもあるかなと思ひ給へしかど、昔人物せられし程にて、かれを淺くも思ひ聞えざりし心には、それをよろしう思ひ許さるべうも侍らざりしに、愼み思ひ給へて、ともかくも申し出でん方なく、夢路に惑ふやうにて、徐所に聞きなし侍りにしを、片時も思ひ怠らず、胸心安からち

(一)好きまゝ歩かん―一本の「好きまゝかり歩かん」を取る。「好色にて歩き廻る事」は。
(二)もどかしう―他人の事であつても非難し度く思はれ、自分は決してなすまいと。
(三)見奉りそめて―寢覺上を。
(四)殿―大君(寢覺上に召し侍りし姉君)を私の妻にと、貴方から所望されましたる處。
(五)大殿―内大臣父故關白。
(六)わたくし―私。
(七)聞きつけ―奉りても―私の契の妹の寢覺上つかたの女は、私の妻の妹である事を始めて新少將に聞いたが。
(八)今―もうかくなつては以上、亂りがはしく、さてはいかが。
(九)此の姫君の夢ばかりの契―寢覺上、寢覺上つかたと、本心の儘に寢覺上を追求する事は出來なかつたから。この姫君が夢ばかりのはかない契りに生れたのを。
(一〇)雅子をもらし―雅子君を出産した時、私と寢覺上との間柄も、もう無事に續くであらうと思つて居りましたのに。
(一一)放たせ―寢覺上を嫁がせた時には。
(一二)昔人―故大君も、未だ存命中だつた時で、私も妻の大君を淺くは思つてゐなかつた心に對しては。

内大臣「かゝりける御心地を、などさりげなくのみは。先づそれいと珍かなりかし」と聞え給へば、寢覺上「著き程は何時もかく侍れば、さにやと思ひて、誰にも事々しく聞えなし侍らぬものを」と、物はかなくのみ答へない給ふに、せめて恨み果つべき方もなし。眞實にいと苦しげに物し給ひけるを、知らざりけるさへいみじくて、つと添ひ給へるも、恥かしう愼しう、入道殿は如何見聞き給ふらんと思ふも佗びしければ、寢覺上「なほ此所にては、さらぬ顏に、端の方にを」と聞え給へど、聞き入るべうもあらず。入道殿は、「殿渡らせ給ふ」と聞かせ給へば、入道殿「何により、夜更けぬるに、思ひもかけず」と、驚い給ひて、御座所引き繕はせ、心ときめき、けいめいし待ち聞え給へど、此方には御消息だになければ、さんやうこそはあらめと思して、今如何許りになり給ひぬる人の御事を、親と申しながら訪ね問ひ給ふべきならねば、此方にも渡り給はで、御心地を覺束なく思し明かしつるに、つとめて少し日たけてぞ、此方に御消息聞え給ひたれば、用意して待ち聞え給ふに、若君後に立てて參り給へるを、打見奉り給ふには、帝の御女を三千人持たりと云ふとも、なほ中に望み交りぬべき人の御有樣なり。内大臣「大切におどろにイき申すべき事侍りて、にはかに參りて侍りしを、曉近くなり侍りにしかば、御行にかからせ給ひぬらんと思ひ給へてなん」と、昔の御物語細やかに聞え始め給ひて、内大臣「自ら聞し召しおはしましけん。まだ下蘆に若

(一)かゝりける御心地―それほど重い病氣であつたのに、どうしてさうした樣子もない樣に知らせないでばかり居たのですか。

(二)恥かしうつゝましう―寢覺上にとつては、恥つかしくも又愼ましくもあり。

(三)けいめいし―いとなみ設けて仕度をして。經營の音讀。

(四)御消息―底本「御せうこ」とあるは誤なり。

(五)さるやうこそは―何か事情があるのだらうと。

(六)今如何許り―「今はかばかり」の誤であらう。

(七)人の御事―寢覺上の御事。

(八)おどろに申すべき―「驚き申すべき」を取る。

(一)いかばかりのまじりか―今どんなに心が苦しくても、甚だしく世を悲観するやうな心が起つて来た爲めに、心変りをしてゐる様な爲めにはあるまじと油斷なりにこそまじりは「交り」であらう。「既」の意ではあるまい。

(二)思し捨て―上の「あはれなどを」「思し捨て」と續けて見よ。「あはれ」とは子供の事を指す。

(三)御ゆかりの御心構―今度の事は、皆私に緣故である大皇宮の御計畫から出た事である事は。

(四)こはいかで―一擧どうして私が生靈の一件から、この西山に來て出家しようとした事を内大臣が知つたのだらうかと。

(五)聞え出でんも―貴女に申しあげるのも。

(六)かく事託け給ふ程のことわりにもあり―薄情に冷淡にも、この樣に、生靈の一件にかこつけて、西山に隱れ然も剃髮する事は尤もな事であるが、併し又心幼く永諾した入道殿の心に逆つてこそ良い筈なのに。

(七)さまで聞き止むべき―貴方がそれほど聞き止める程の事とは、私の出家を、考へてゐませんでした。

(八)昔の事―昔敏圓自に嫁ぐ以前に貴方との噂が立つたか、その噂は實際だつたのだと父入道殿に思ひ合はせられる事も。

身に添へつゝ、避くべくもあらぬあはれなどを、今さりとも、如何ばかりのまじり(一)「ゆゑ」、思し捨て(二)難る御心あらんと、打ちたゆまれつるに、淺ましくおのが怠りならぬに、いと憂き御ゆかり(三)の御心構へは、皆思し知る節々もありなんを、言託けて、やがて思し捨てられんと思しける御心」を、泣く〳〵恨み給ふに、こは如何で聞き付け給ひけるぞと淺ましきに、胸塞がりまさりぬれど、何と答ふべき方もなければ、單衣の袖を顏に押し宛てて、臥い給ひたるに、内大臣宮の御心地の程、ありし事ども聞く毎に、をこがましくも、妬くも覺えしかど、「さる事こそあれ」と聞え出でんも、待ち聞き給はん御心地いと物狂ほしかりぬべかりしかば、さる事の外の事、いとだまねびだにせられでやみにしを、ひたぶるにおろかに、つらきにや、かく事託け給ふ程のことわりにもあり、また幼うさる人の受け引き思はむ程の心をば、達へてこそよからめ。いと思はずに、却りて淺かりける御心も、ただ我が身からとなん恥かしき」と宣ふにぞ、からうじて、實事上「などてか、さまで聞き止むべき事とも思ひ侍らざりき。此所にてはいかでか對面なども、昔の事、實にと思し合はせられむも、いとも愼ましければ、出でてこそはと思ひ侍りし程に、やがて心地の惡しくなり侍りにしかばこそ」と、うらもなくあはれに言ひ出で給へるにも、珍しくあはれなるに、

(九)昔の事―

(十)出でてこそは―この西山を出てから逃はうと。

(一)山の座主―比叡山延暦寺の座主。

(二)おはするやうにしてをあれ―「を」は強勢語。

(三)打聞き―寝覺上は姫君の來た様子を聞いて。

(四)面影離れ給はず―姫君の様子が寝覺上には忘れられず。

(五)おはいたるに―おはしたるに

(六)心亂るる―「心亂るる」の誤りか

(七)なりき御髪を―「長き御髪を」を取る。

(八)とみに―急に。

(九)まねびやりつつ―一本の「まねびやるべく」をとる。

ばかり始めなどせられたりける。入道殿は、山の座主の參りたりけるに對面し給ひて、物など申し給ひける程に、殿渡らせ給ふとて、人々騒ぐを、心地のよろしき時こそ齋宮の御方にも渡り給へ、起き臥す事もいと苦しくのみなり增さりにたれば、えさもあらず。いとうるさく思して、母屋の御簾ども下し渡し、御几帳添へて寝覺上「齋宮おはするやうにしてをあれ」と、宣ひ知らせ給ふに、御車寄せて、女房「姫君渡り給ふ」とあるを、打聞き付けたるは、かねてさる御消息もなくて、入道殿如何に怪しとや心得思さんと思ふ方は、いと慎ましく、かたはら痛ながら、苦しきに添へても、面影離れ給はず戀しきに、如何にも胸打ち潰るるまで思さるれば、人々退け給ひて、あらはなりとて、姫君をさへ入れ奉らであべきならねば、入れ奉り給ふに、殿續きておはいたるに「日頃いと怪しくのみ心亂る様を、今更にあいなのわざや」と思ふに、姫君の御珍しさも覺めて、奥様に打ち背きて臥い給ひたるを、御簾の外なる火影に見奉り給へば、いとさゝやかに小さく美しげなるに、さばかり多くこちたくなりイがき御髪を結ひて打添へたるを見給ふに、まことに目も昏れ惑ふ心地し給ひて、寄りてもとみに物も云はれ給はず、堰きやる方なく搔き昏らしたる涙に咽せつゝ、とばかりためらひて、昔より今宵までの心の中、眞似びやりつゝイろべくもあらず言ひ續け給ひて、内大臣「心盡くしにつらき御契ながらも、さすがにえさらぬ絆數多に、此所も彼所も

(一)御いのち―「御いのり」なとる「御祈り」なり。

(二)恨ある御命にもあらば―いつまでと定まつた寝覺上の命ならば、剃髪を許さないで死なすのは却つて後悔せられる。

(三)参りたれども―西山へ参つてもう参りたれども(は)の誤か。上の「げにさりとも」の誤か。上の「げにさにこそはとて」は下の「此の日頃は参らざりつる」にかゝる。

(四)殊の外にのみもてなし給ふが―殊の外に寝覺上が自分を冷淡に取り扱ふのも人目見苦しいので、この頃は西山には参らなかつた。

(五)たゆめ給ひけるにこそ―寝覺上は自分が油斷させてゐたのだつた。

(六)我はいたりとも―自分が行つても。

(七)出だし放ちて―一本に「いたく放ちて」とある。どちらでも意味は通ず。

(八)若君姫君―雅子君、大姫君。

(九)人賜―従者の乘る車。

(一〇)さ宣ふ人ありとて―たとへ寝覺上がさう願つたからとて。

なんと、あながちに思し忍び、御いのち(一)などもせさせ給はで、此の日頃入道殿に泣く泣く申させ給へば、『尊げに限りある御命にもあらば、後悔しき事もこそあれ、如何なる樣にても平かにて見奉らんのみこそ、我が世の喜びならめ』とて、その日許りと思し定め果てにたる」樣を、泣く〳〵聞ゆるに、すべて淺ましういみじとも世の常なり。内大臣『暑氣には何れの夏もかくのみなん』と、御返はいとなごやかにさらぬ顏にてのみあれば、さばかり隔て給ふ御心に、苦しからむを念じて宣ふにはあらじ。げにさにこそはとて、参りたれども、殊の外にのみもてなし給ふが人目も悪ければ、此の日頃は参らざりつる。さりげなくたゆめ給ひけるにこそありけれ。さて忽ちにきゝで思し捨てつべきものとは思ひ寄らざりける心のはかなさ―と搔き昏らし 内大臣『よしや此所にては、聞えても甲斐あべきやうなし』と、いとあはただしげに思いて、急ぎ罷出給ひて、「我はいたりとも、例の出だし放ちてこそあらめ」と、思せば、御車に若君姫君乘せ奉り給ひて、人賜一つに御乳母親しくきべき限り二人許り御前にも侍ふ限り、いと忍びやかにて、にはかに嵯峨に参り給ふ。道すがら内大臣「さ宣ふ人ありとて、入道殿の如何でかはゆくりなく受け引き給ふぞ」と、怪しく心得ず、かの御心は、憂く恨めしく思しつゝ、廿日餘りの月の出づる程にぞ、おはしまし着きたる。いと苦しくせさせ給へば、如何でかかくてのみはとて、今日ぞ不斷經二

しう見奉り給ふ。我が心地も驚かれて、先づ御文（内大臣文）「只今かく承るは、如何なる事にか」と書き續けて奉り給ひつれば、（一）おはしなどやさすがにせんと思すに、いと難かしかりければ、臥しながら（寝覺上文）「さすがに自暑氣に畫こそ例ならず思ひ給ふべけれ、夕暮などは、さも侍らず。今日明日過ぐして出で侍りぬべければ、さてこそ聞えさせめ」と、いとさり（イ）なう書い給ひつれば、げによろしうおはすべかめるを、幼い心地はおどろ〳〵しく聞きけると思して、（内大臣）「さもおはせざめり。如何なる事に事をつけて、返事せじと思し厭ひたるに、かく宣ひたるは、おぼろげにさはやかに物し給ふにはあらざめり。な思し嘆い給ひそ」と、二人ながらを聞え慰め給ひて、（内大臣）「數多の此の世の契ながら、我は隔たりがましく、よそ〳〵なる折がちなる、怪しかりける宿世なりや」と打泣かれ給ひて、待つらん事のゆかしく覺束なければ、その暮に内に俄に參り給ひて、先づ登華殿に參り給ひつれば、大貳の北の方、さもこそおろかに打申したりつるに、今日を過ぐさず驚き參り給ひたる御心ばへなるを、いとあはれに淺からぬものを、あながちに遁れ背き奉り給ふ御心強きよと思ふに、心憂きまで思ひ知られて、少し人離れたる方にて對面して、物など聞えて（大貳北の方）「五月晦日方より例ならず思されたりし御心地を、かゝるついでに世を背きなんの御心深く思し立ち果てゝ、おどろ〳〵しくば人々の渡りて見驚き給はんに、所狹くなり

（一）奉り給ひつれば―寝覺上に手紙を遣る。
（二）おはしなどやさすがにせん―内大臣が西山に來るかも知れないと思ふと。
（三）おどろ〳〵しく―それほどでもない寝覺上の病氣を幼い雅子君の心には驚く程の病氣と聞かれたのである。
（四）いかなる事に事をつけて―どんな事にかこつけても、私には返事もすまいと。
（五）かく宣ひたるは―めつたには奥れない氣分が良いから寄越したのは大變な氣分の私との契は隨分深いのに。
（六）數多の此の世の契ながら―寝覺上と雅子君とは、「數多の契」の意。
（七）待つらん事―大貳北の方が宮中で我を待つてゐるのが、何の故かと知りたく思はれ又氣がかりなので。
（八）さもこそ―あの様に輕々しく雅子君に頼んだのに。
（九）御心強きよ―寝覺上の心強きよ。「御心強さよ」の誤かん。

紛らはして罷出給ひぬ。

(一)内―宮中。

その夜さりやがて内に参り給ひて、尚侍の君に、御心地の様など聞ゆれば、侍、暑氣に『とのみあれば、よろしうこそ思ひ聞えつれ。いと淺ましかりける事かな。心憂く』『かくなん』とも宣はで、罷出て見奉らで、ただ世の常に思ひ聞えさせける」とて、いみじう驚き思したるに 大貳北の方「密に、かう〳〵の事を思し立ちて、誰にもおどろ〳〵しうは知らせ奉り給はぬとぞ氣色見侍る」と言ひ出でたるに、いとど淺ましくいみじと思し呆れて、えも云ひやらず、やがて埋れ給ふを、げにことわりに心苦しう見奉る。内大殿を待ち奉るに、「久しう見入 宰相参り給はず」と聞けば、心許無きに、若君の迎へられて出で給ふに 大貳北の方「いと忍びて聞えさすべき事ありてなんと聞えさする」と傳へ聞えさせ給へ 宰相つれば罷出給ひて、内大殿暑さもいと苦しう、上の御心地もさはやぎ給はざめれば、内裏にも久しう參らで戀しかりつれば迎へつるぞ。中宮尚侍の殿などには何事か」など問ひ給へば、いと大人しう、その事かの事と打語らひて 雅子君「『母はいみじう苦しうし給ふなり』とて、督の君もいみじう咲き泣いて、『罷出なばや』と侍るめりつ。大貳の里人こそ『聞えさすべき事ありて待ち聞えさするよし申せ』と侍りつれ」と云ひ出でて、目に涙浮けて、いといたう静まりたり。姫君も聞き給ふまゝに、涙ぐみて顔の色違ひて青い給ひぬるを、あはれに悲

(二)かう〳〵の事―出家の事。

(三)若君の迎へられて―雅子君が内大臣に迎へられて。

(四)傳へ聞えさせ給へ―内大臣に傳へて下さい。

(五)上―帝。

(六)母―寝覚上。

の松にしもおはせじ」と思せば、入道殿一廿五六日なんさやうの事によき日ならイナシる。それに成い奉らん。たゞ心を強く思して、御湯などを聞し召せ」と、泣く〳〵慰め聞え給ふに、命も懸る心地して、はかなき果物など夢許り御覧じ入れつゝ、御法服など、忍びて心設けせさせ給ふを、(一)大貳の北の方、少(二)将などは、更に淺ましういみじけれど、自の御心に深う思し立ちにたり、入道殿受け引き聞え給ひて、日をさへいと近う契り給ひつるを聞くも、物覺えず、内々に泣き焦れ、聞え止むるをば、いと憂く恨めしと思して、聞き入れ給ひつゝィふべくもあらず。大貳北の方「中納言、大納言と聞ゆとも、か許りにては聞え止め奉り給ふやうあらじ。内の大殿さりとも打聞き給ひては、よろしう思さじかし、これを聞かせ奉らばや」と、少将と語らひて 少將「少将は、つと御身に添ひて仕うまつる人なれば、すゞろに罷出んも怪しかべし。御前尚侍の殿に参らせ給ひ申させ給へ」と云ひ合はせて、さりげなう 大貳北の方「さべい僧の法服などは幾らばかり要り侍るべきぞ。此所ィそこらにては人目もおどろ〳〵しう、人々も心得て思ひ惑ひ侍らんもいとほしければ、罷出て、さりげなうして、その程に参らん」と、さし寄りて聞ゆれば、(三)簾上「(六)数多具事々しかべきにもあらず。(七)戒受けさせん人に夜晝の装束、それに二人許りぞ要る人あなる。それにはただ夜の法服、さては着るべき袈裟やうの物こそは」と、答へ給ふも、御顔打見守るに、ゆゝしく涙のこぼるれば、大貳北の方「さらば」と

(一)大貳の北の方―對の君。
(二)少将―女房。
(三)聞えとどめ―寝覚上の出家の志を止まらせる。
(四)まかでんも―この西山を辭去するのも。
(五)御前―大貳北の方。
(六)くだり―装束などの揃ひたる一數ふる語。源氏物語少女「年の暮には月の御装束などあまたくだりいと清らに」
(七)戒うけさせん人に―私に戒を受けさせて呉れる僧に。

(一)心を起して　元氣を出して。
(二)うけびき給ひて　寝覺上の出家を承諾して。
(三)御忌めて　一本の「御忌にて」
(四)參り給はず　この西山に參らない。
(五)それこそ　この中納言こそ、寝覺上を懇切に世話をし。
(六)かそよき　一本の「いとよき」をとる。
(七)心を見して　私の希望をお知らせして、意中をお話し申し上げましたから、お願ひするのですが、矢張りどうぞふわけか、私は氣分が何時も堪らない程惡いので。
(八)覺ゆる程にこそは　心地の少しでも宜しく思はれる間に剃髮しようと思ひます。

ありけんと、内大臣の氣色などを、さすがに思し合はせ、いと悲しうて、如何にも此の目の前の御心を慰め、心を起して、御湯などをも御覽じ入るゝつまとやなると受け引き給ひて、中納言舅ィの帥の宮薨れ給ひにしかば、その御忌めィてえ參り給はず、

(五)それこそ　懇に仕へ、又宣ふらん樣も、心剛くは見えにくき人とは思せば、かくて籠り居給ひつれば、みそィいとよき隙なりと嬉しきに寝覺上心を見して、打ちだに出で初め給ひてしかば、なほ如何に、心地のいと堪へ難うのみ侍るを、少しもよろしう覺ゆる程にこそは「とのみ、心苦しう聞え渡り給ふ。げに御心地樣も、おどろ〳〵しからぬものから、月日を經てさはやぐけぢめもなくのみ、沈み過ぐし給へば、げに如何なべき御有樣にかはと、思し侘びて、入道殿「さらばいとよく侍り。中納言大納言などに云ひ合はせ侍らざらん、怪しかべけれど、それはた「あへなんはやぞ」と世に許し申さじ。さすがに數多の御人扱ひせし親樣になり給へるを、親と言ひながら、ゆくりなく寝し聞えん、類に觸れて、世のもどかれありぬべき事なれど、たゞにて宣はばこそあらめ。いとかく久しき御心地にて、泣く〳〵宣ふを、人のもどき行く末を餘り辿りて聞き過ぐさん、後の悔いと心苦しかるべき事なり。幼くより此の世の人とは覺えず、假に生まれ出でたる變化の人にやとのみ、ゆゝしう覺えしを、餘りいとかく優れ給へる、げに末の世には、思ひに叶はぬ樣にておはするなり。命も千歳

(九)類に觸れて　貴女の出家を許す事は、それからそれへと傳はり非難されるだらうが。
(一〇)ただに　一時の氣紛れ位で、私に出家の志なを云ふのであるなら私も許さないが、この樣にずつと以前からの長く泣く願ふのに、もし人の非難や行先を考へて、その願を聞き入れなかつたならば、きつとあとで後悔するだらうし、それも心苦しい事だ。

(一)姉君の―一卷の大君（寝覺上の姉君）、内大臣の方（北の方）の嫉妬のあまり、死んだ例を思ふも忌々しく。

(二)傍なくのみ―傍を離れずに。

(三)さやうにては―内大臣に靡くまいとの思ひにてあるる様なのも、尤もいな事である。

(四)御年齢の若さ―思ふに―寝覺上の年齢の若さを思ふと、これ上間寝覺上が傷ましい事を考へて、此の上もなく惜しい事と思はれるが、しかしさうは云つてもこの寝覺上だけは、かく出家しようと決心するのも、似つかはしい事である。

(五)老いたるものが早く死に、若い者が早くも死なぬと定まつてゐる事でもない。

(六)如何ばかり赫くし―どんなに赫かしくいとほしい結構なもつてゐても、それはこの世たけの事であり、後世の善因にはならない。

(七)さておはすとも―剃髪せずにその儘に居ても、自ら表立たずに何をするる事もなくて生きて行くべきあるから、剃髪させても良いだらう。「あすする」は一本の「何する」をとる。

(八)宣はん事―貴女の云ふ事に反對すべきでもない。

(九)自ら貴女の思ひには―自分だけならば貴女の本意（出家）を叶へやりたいと思つてゐるが、お前の兄の上納言などが、

(一〇)思ひ離れよ―世の中を背めいて早く出家せよと佛様が勸めるに思したる―下の「氣色」に

様にては云ふべき事にもあらず。姉君の命をさへ厭ひ棄て給ひてし例を思ふゆゝしく、まいてこれは幼かりしより、傍無くのみ習はし、故大殿の御もてなしもさばかりなりし名殘にて、さやうにてはあらじと思すべかめる、ことわりなり。御年齢の若さを思ふに、遙かに見る目の限りなきさこそ、盡きすべくもあらぬ惜しさなれ、さすがに此の御身許りは、げにかく思し限るも似げなからぬ事なり。老たる若きと定めある世にもあらず。後の世まで思ひ遣らんに、如何許り赫くいとほしかべきめでたけれど、此の世許りの事（イなり）、さておはすとも、自ら内々あ何する事なくてはおはしぬべき人なり」など思ひ續けて、入道殿「いざや、實にさもある事なれど、御行く末ぞいとほしきや。いかに今更に宣はん事を違へ申すべきにあらず。限り無く心ざしをば思ひ聞えさせしかど、心ざしのまゝに仕うまつる事はなくて、空に任せ奉るやうなりし。自の思ひには、さ許りの御本意をだに叶へ奉る許り。中納言などやあるまじき事なども物せん」と宣ふ。いと嬉しうなり給ひて、寝覺上「行く末遠しとても、今は如何なべい事にも侍らず。殊更に昔よりかく思ひ離れよとのみ、勸むるやうに侍る身を、せめて永らへ侍らば、自ら憂き事も多かりぬべう」と、打ちかすめ出でて、いといみじう懇に思したる、世を飽き果て給へる氣色、若し如何なる事かまじき事なども物せん」と宣ふ。いと嬉しうなり給ひて、寝覺上「行く末遠しとても、

(一一)懇に思したる―下の「氣色」に思ひ合せて入道殿は大變悲しんで。

(一二)もしいかなることか―もし寝覺上にどんな事があつたのかと、内大臣の様子などを流石

(一)あいなき人の思ひ遣り事―何ともなく致し方のない子供達もある事で、それらの子供の世話もせねばならない事ですから

(二)こぼい給ふ―入道殿が御涙を零し給ふ様子は。

(三)よかなり―出家しても宜しいとは。

(四)短くならんばかり―髪を短く切る位の。

(五)御覽ぜむの御心侍るは―一本の「侍らば」を見たいとの御心が私を永くあるならば、どうか私の上の御心許し下さい。

(六)心の闇―後撰集卷十五及び大和物語に出でた一人の親の心は闇にあられども子を思ふ道にまどひぬるかな―の歌により、子を思ふ親心を云ふ。

(七)世に見えぬ様―この世には又とない程のすぐれた容姿を持つてゐた寝覺上であつたが。

(八)限なかべい物と―限なき皇后の位にも登る事の出來るものと。

(九)世の一の人―故關白。

(一〇)思ひいつかれ―大切にされ。

(一一)過ぎ別れ給ひにき―死別を指す。

(一二)やんごとなき様に定まりて―女一宮の北の方としてゐる事を指す。

(一三)いみじくとも―たとへ内大臣が寝覺上に思ふ志が非常であつて、女一宮の方を疎末にする様な事はあるまいから、劣り様で内大臣に思はれる事は云ひ甲斐もない事だ。

(一)あいなき人の思ひ遣り事なども侍るを、世を背く様にてや若し今暫し永らふるやうも侍る。また云ふ甲斐なきにても、後瀬の頼みも、さてはあるやうもやとこそ思ひ給ふれ」とて、いみじく泣き給ふ様の、あたらしくめでたきに、目も昏るゝやうにて、聞きも果てず、(二)こぼい給ふ御氣色のいみじきを 寝覺上「さればよ、よかなりとは世に受け引き給はじと思ひつかし」といみじく口惜しければ、泣く〳〵 寝覺上「髪の今少し短(四)くならんばかりの寝れより外は、今は何事の口惜しかるべきにも侍らず。さながらも永く御覽ぜむ(五)の御心侍るは、ィラば」と切に必ずと思いたり。心の闇(六)は堪へ難く悲しと見奉り思しながら、入道殿「今は此の世の外に住み果てにたる御心にて、實に宣ふ様ことわりなり。生まれ出で給ひたりしより、世に見えぬ様(七)のし給ひたりしかば、限りなかべい(八)物と思ひ聞えしに、その思ひ叶はで、我が身も世を捨てゝき、此の御身も本意ならぬ事ども出で來て、いみじく物嘆かしかりしに、いと上の際にはあらざりしかど、世の一の人(九)にまたなく命を棄つばかりに思ひいつかれ(一〇)、親同胞のあたりの草木まで、香を散らしたりつれば、何かは、心細く悲しく思ひ聞えし程よりは、これもある甲斐ある御様なりと嬉しかりつるに、夢のやうにて、過ぎ別れ給ひにき(一一)。内の大臣本意深き御氣色なめり。いとけに優れたる人がらと云へど、さ許りやんごとなき様に定まりて(一二)、いみじくとも(一三)、其方のおろかなるべきやうなければ、劣り

も猛う後の世も少し頼もしく思ひなられて、さんべからんついでに、如何で打出で聞えんと思すに、日に添へて、つゆ重湯などやうの物をだに見も入れ給はず、いと冷かなる水許りを聞し召しても、やがて止めず返しつゝ、忍びつゝいぶべくもあらずなり増さり給へば、起き上りなどもイナシし給はずなり行くを、入道殿いといみじう見奉り給ひつゝ、此方にのみおはしますに言託けて、怨めしき人の御文の隙なきにも、かく例ならぬ御心地とのみ言託けて覺束なきを、たゞ返事せじと宣ひなすなめりと、つらう悲しくのみ思ひ聞え給ひて　内大臣「餘り人憎く、きはだかなる御もてなしなりや。かくは見奉らざりつる御心を。餘りになればことわり」とのみ心得思すに、六月も過ぎ七月にもなりぬるに、此の御心地更に忘り給はず。思す事一あるにより、人々の訪ひにおはせむも、所狹ければ、おどろ〳〵しくも言ひなさせ給はず、たゞなほ忍びて、懺法御讀經許りぞせさせ給ふ。かく月頃經る御心地を祈などもせさせ給はず、たださらぬ顏にてのみ人目には過ぐさせ給ふやう、心得ぬ事なりやと打嘆きつつ、見奉り暮らい給ふ。夕涼みには、さは言へど、秋の氣色になりたる風の音も、山里には殊にあはれに聞きなさるゝに、少し心地も靜まるやうに思さるれば、頭擡げて物など聞え給ふついでに、　寢覺上「夢などにも世に永くはあるまじくのみ侍るを、世に今は何とありとも、同じ事に、惜しかべくもあらずなり果てにて侍るものから、

(一)うち出で―出家の志を、父入道殿に申し出ようと。
(二)返しつゝ―吐く事。
(三)忍びつつも―一本の「忍ぶべくも」をとる。
(四)こなたにのみおはしますに―寢覺上が伸々都に門で來ないので。
(五)うらめしき人―内大臣。
(六)覺束なきを―内大臣への返事も寢覺上はしないのを。
(七)辛う―内大臣は。
(八)きはだか―お高く止まってゐると云ふ意。
(九)かくは―これ程の寢覺上の心とは思はなかつたのに。併し寢覺上にはつらい事許り續いたのだから、かく自分に手紙を寄越さないのも尤もな事だらう。
(一〇)この御心地―寢覺上の病氣。
(一一)思す事―出家の希望。
(一二)惜しかべくも―惜しかるべくも。

(一)ありつかず—落付かず。

(二)暗きより—拾遺集巻二十「暗きより暗き道にぞ入りぬべき遙かに照らせ山の端の月」—死後の世に於て辿るべき道のたどりも、どんなに耐へ難く辛い事だらう。

(三)姫君—大姫君。

(四)思し出でぬ—大姫君が、私を思ひ出して呉れぬ様な事もあり得まい。

(五)絶え籠りぬと—出家して俗世間と絶つてしまつた。

(六)大姫君が聞いても。

(七)父殿は—特別に父(故關白)にも見馴れなくて。

(八)あつき—一本の「あべき」を取る。尚侍の後見に、普通平凡の人々の後見だけでは。

(九)つとこそは—一本の「つつこそは」の方宜し。

(一〇)打垂髪—俗界の人の姿で。

(一一)あらずは—「はしはなき方よろしく、もしあれば、よりはよい」の意味である。

(一二)いとよくかくは—以前にもよく、この様に世を背かんとは決心したのに。

(一三)うけひき—この剃髪の志を承諾して呉れないであらう。

しをこよなうあはれと思ひ出で二字イナシ忍べども、いと心憂くしなり。まいて憂きをもつらきをも盡きせず思ひ知り、うとましげなる名をさへ流し添へ、常に世にもありつかず、浮き漂ひてのみ過ぐすを思ふに、いみじく口惜しく、まして後の世如何許り暗きより暗きに入らん、道のたどりも耐へ難からん。心地もいと苦しくのみあるは、命も永らふまじげなめるを、此のついでに、やがて世を背きなばや、姫君の御戀しさぞわりなく苦しきまで覺ゆれど、淺からず見馴れ給ひにしかば、さりとも思し出でぬやうはあらじ。あらぬさまに絶え籠りぬと聞き給ひても、ゆかしくあはれと思きぬやうもあらじ。渡り給ひても見給ひてん。小姫君ぞ中々父殿は見も殊に附き給はで心苦しけれど、およずけ給ふまでは、身に添へても見てん。宰相大納言の上達は、いと後安し。尚侍の君ぞ、さすがに公しき御交らひにて、おろかにあつィべき人の限りにてはいとほしげにおはすべけれど、内々の御後見は、餘所ながらも思ひ遣り聞えつとィっこそは後見聞えめ。打垂髪にて都の中にありとも、我が身は何の頼もしげあべきにもあらずはィナシ、いとよくかくは思ひ取りてしものを、内の御事にかく夢の様に呆れ惑ひて、その心も皆亂れ給ひて、かゝる名をさへ取りつる。思ひィふに、いみじく悔しくのみ思ひ知らるれど、入道殿や受け引き給はざらんとすらん。それは必ずの事ぞかしと思ふにさへ、胸塞がりて、心地惡しく、例の寢られぬまゝには、此の世

(一)かしこには—西山に於ける寝覺上は。

(二)ものまねび—似せ。詐病。

(三)あつけ—暴氣に犯されて病む事。

(四)齋宮の御有様を—以下寝覺上の心。

(五)幸など云ふ方こそ—幸福といふ點に於ては、自分は人に劣り、又思ひ様にならなかつたであらうが。

(六)少しもの思ひ知られしより—自分は少し物心がついてから。

(七)有心—思慮ある事。

(八)昔さばかり—内大臣(當時中納言)と評判の立つた當時。

(九)移ろひし程—矢張この西山に移り住んだ時に。

(一〇)あふなう—奥無くにて、思ひやりなくの意。或ひは「敢ふなう」か。

(一一)その方—髪を剃つて世に背けば、入道殿も私をさうした者として、取り扱つて呉れたらうし。

(一二)人聞も—私が剃髪までしたならば、世間の人々も私を感心な女だとしたであらう物を。

(一三)さやうの筋を—剃髪といふ事を。

(一四)れんごろなりし人—故關白。

(一)かしこ彼處には五月晦日頃より御心地例ならず苦しう思さるれど、我ながら「いとかく物を思ひ入らんに、いかでか、苦しからぬやうあらん。命も餘りはえ堪へじ」と覺ゆるに、日に添へては、いといみじくのみなり增さり給へど、物眞似(二)びのやうならんもかたはら痛ければ、(三)あつけなめりと、せめてさらぬ顏にもてない給ひつゝ、齋宮(四)の御有様を、あはれに羨しくも行ひ澄まさせ給ふかな。(五)幸ひなど云ふ方こそ、人に勝れん事難く、思ふに叶はざらめ。此の世を捨てゝ、かやうに行ひてあらん事は、いと安かべい事なりかし。(六)少し物思ひ知られしより、何事も人に優れて心にくゝ、世にもいみじく有心(七)に深き者に思はれて、何となくをかしくてあばやと身を立てゝ思ひ上りしに、世とともにはいみじと物を思ひ碎け、淡つけうよからぬ名をのみ流して、人にも云はれ謗られ、世のもどきを取る身にてのみ過ぐすは、いみじく心憂く味氣無うもあるかな。(八)昔さばかりさべき人々にも疎まれ云はれ奉りて移ろひし(九)程など、(一〇)あふなう髪などをも剃ぎ寃してましかば、さし當りしその折こそうたてあるやうなりとも、入道殿も云ふ甲斐なく、(一一)その方にもてない給ひて、いかに思ふ事なうさはやかに、此の世も自ら住みつき、後の世はた如何に賴もしく、人聞も物思ひ知り顏にては止みなましものを、口惜しく、(一二)さやうの筋を思ひも寄らず、たゆ〳〵しくてのみ永らへて、身をとざまかうざまに漂はひて、(一三)懇なりし人の御心ざ

卷

五

給ふに、また露の御さ隙なくて、西山には思ふまゝにだに、え立ち寄り給はず。

(一)御さ隙なくて―「さ」は衍字。「御隙なくて」である。

(一)命をも惜しと誰故ならなくに―命も惜しいのは誰故でもない。皆寝覺上故であり、寝覺上に逢ふ事も出來なければ生きる甲斐もないのに。

(二)御心地―女一宮の御病氣も治癒して來たから。

(三)愁へ聞え―寝覺上の事に關して、内大臣が、近頃不快の狀態にある事を中宮に話す。

(四)上―帝。

(五)いみじき者―寝覺上をさす。

(六)さ許りの女に―寝覺上にこれ程に思はれてゐる内大臣の運のよい事が羨ましい。

(七)帳の内に―大皇宮が御几帳の内に帝を入れて寝覺上をお見せした。

(八)懸み―女一宮が懸みなどするに。

ぞあるに、云ひ遣る方なく、我が心の過失に、妬く悲しく悔しき事々のみぞ數知らず、我ゆゑには、昔より今日に到るまで、いみじく物を思はせて、良からぬ名を盡させず流さるゝ胸心の、我も人も明く許りもてないてしがなと、明暮の心に懸り、命をも惜しと、誰ゆゑならなくに、かゝる事のみ出で來添ふに、世の中いと味氣無く、世の謗り物のいとほしさも、知るべき心地もせず、萬をあいなく思し續けて(四)御心地今に怠らせ給ひにたれば、心安く今だに心を延べ侍らん とて、姫君の御方に渡り、内の御宿直など繁う習はし置い奉り給ふ。例の中宮の御方にて御物語細かなるついでに、愁へ聞え給へば(三)中宮 實に今さへあいなの御事や。(四)上の、夜とともの御嘆かしさに、いとほしげに見えさせ給ふ御返など、聞え給はざめる。『いみじき君木を造りたりとも、如何でかくはあらん。故關白大殿、さ許り(五)いみじき者に、隙なく添ひ居たりけれど、内の大臣の返事などはいとよくしけるものを、これはかの大臣の聞く所もありと、露の言の葉も後めたがらせじと。さ許りの女にいとかばかり思はれたる、實に優れたる人がらとは云ひながら、大臣の契さへ羨ましく妬けれ』と御涙をさへ惜しまず、常に宣はすめるものを、今はあいなしと思しなるらんな。大皇宮御はかりごとこそ。そも聞きしなり。(七)帳の内に上を入れ奉りてこそ見せ奉り給ひけれ」など語らせ給ふに、胸のみ靜かならず。懸み給ひなどするに、また添ひ侍ひ

(一)殿も―生靈の事か貴方も大變疎ましく不愉快な事だと云つてゐるといふ事が、驟々と寝覺上の耳に這入つて來るのを。

(二)思し召いたりし樣など―寝覺上の考に恥つてゐた樣子等を。

(三)さることを―寝覺上の生靈が現れた等といふ事を。

(四)思し取りけん―寝覺上が、人の評判する通りに信じて了つた事こそ。

(五)類なかりし人―類なく寝覺上を寵愛した故關白の妻となつても。

(六)もとゐ―雅子君大姫君等のある、二人の深い關係。

(七)頼母しき者をにー「を」は無き方宜し。

怪しき事も侍ひければ、殿も(一)『いとうとましう心憂かりけり』などなん聞えさせ給ふと云ふ事、隙なう聞え侍りしを、いみじと思し召し入りて、世にありとだに聞え奉らんは、恥かしかべいわざかなと、思し召し入りたりし程にしも、姫君を渡い奉り給ひてしかば、たゞ此の事を眞實とうとませ給ひぬるなめり」と思し召いたりし樣など、詳しく語り聞ゆれば内大臣「そよ。そがいと心憂き事を日頃思ふなり。(三)さる事を我は懸けて聞くもゆゝしきに、眞實とは懸けてだに思ひ寄りなんや。さる事こそあれと眞似ばんさへいと恥かしき心地して、聞え出でずなりにしを、ひとへに人の聞えんまゝに思し取りけんこそ、却りてはいと物はかなき御心なれ。」すべて言へば世の常なりや。御文にては、筆の行く限りあれば、聞え盡くしやるべき方なし。自明めんと思ふには、絶えて出で給はず、いとど心憂ければ、打泣い給ひて、内大臣「さ許り類なかりし人に類ひても、我をばなほ思し放たず、去り難き者に思ひ留め給へりし折々の事は、かゝるもとゐあいなしと懸け離れ給ひたりしかど、内の御事出で來にければ、增す影なう頼もしき者をイナシに靡き寄り(イて)し有難さ」など思ひ續くるに、我をばこよなう淺く心隔てあるものに、心置きうとまるゝ、いみじきことわりに、云はむ方なきまゝに、御文を日々に立ち返り、十枚許りに、立ち返り怠りを書き續い給へど、御返をその事も懸けず、いと言少なに寝覺上文「今出で侍りて、自ら」とのみ

(一)いかに〳〵—女一宮がどうなる事かどうなる事かと心配してゐたのに、生き歸つたのも内大臣にとつては。

(二)片つ方の心には—一方寢覺上を思ふ心に。

(三)あさましきことを—女一宮の物怪があさましい事を。

(四)この人故こそ—この女一宮の爲に、姥捨山ではないが、姑の大皇宮を捨ててしまひたいとさへ思つた事もあつた。

(五)人の爲—寢覺上にとつて。

(六)本意の事—自分(内大臣)の本意の事を、かく物の怪の現はれたの爲になし遂げられなくなつたのは。「さか〳〵」は「逆〳〵」か。

(七)心を計る心地のみして—我が本心を欺いてゐる樣な氣がして。

(八)患ひし所とても—女一宮の御殿にてたとへ病氣になつたからとて、いつまでも女一宮を朱雀院に置くべきでもないせっ。又院の御座所近くにゐるのも恐れ多い事ですのに、宮の御殿に女一宮を又渡しませう。

(九)姫君見馴れ奉り給ひて—大姫君は寢覺上に見馴れてからは遠くさへ—西山の樣な遠方に寢覺上が行つたのを。

(一〇)慰め給ふ—内大臣が姫君を慰めついでに—内大臣が姫君を慰めついでに。

(一一)とみには—以下、命婦の乳母の内大臣に云ふ言葉。寢覺上は。

を去らせじとし給ふに、いたくも筋違ひ憎くて、(一)如何に〳〵見え給ひつるに、消え返り給へる御有樣をも、嬉しうあはれなる方はおろかならねど、片つ方の心には、年頃燃え焦れて戀ひ嘆き思ひ〳〵て、からうじて隙あり、人も打弛びつる程に、淺ましき事を云ひ出でゝ、深く思ひうとまれ隔たるは、世に本意なくいみじきわざなりやと、思し續くるに、世の中いと味氣なく、此の人ゆゑこそ、若し姥捨ならぬ事もやと思ひ寄り聞えさせしか。慰む方はなかりし物から、餘りの御もてなし、心構へのいと心憂き御邊にて、げに人の爲め世の音聞心憂き事を云ひ出でて、本意の事さかへられたるは、妬く心憂きわざかな。なぞや幾世無き世に、かゝらで心安くてこそあべかりけれ。さるべきとは言ひながら、心を計る心地のみして、過ぎにし方行く先物のみ悔しくむづかしきに、院の御覽ぜむ所を、あながちにつくろふも苦しければ、内大臣「患ひし所とても、必ずかくやは離れさせ給ふ。おはします所近く侍ふもいとかしこきを、渡らせ給はん」と薦めて渡い奉らせ給ひつ。

(九)姫君見馴れ奉り給ひて後、いみじく戀しく思ひ出で聞え給ひつゝ、遠くさへ渡り給ひにけるを、心細く物悲しげに打眺めつゝ、忍び音がちに、屈じ給へるを、いとどことわりに心苦しく見奉り給ひて、内大臣「今近くなりなば渡い奉りてん」など、慰め給ふついでに、命婦の乳母「(一一)とみには歸らせ給はじかし。宮の御心地の程に、

れでその夜も明けぬ。さてのみあらんもいとすゞろに、宮の御有樣も覺束なからぬにはあらぬに、萬に身のことわりをも、人のつらさをも、いみじく云ひ置きて出で給ふ空もなし。

宮には、(一)かくのみおはします程を、とゞみもすれば見捨て奉り給ふ恨めしさは、盡きせず心憂しと思し宣はせて、所變へがてら、(二)院の上の覺束なくのみ思ひ聞えさせ給ひつるをとて、院に迎へ奉らせ給へれば、院の御覽せん所さへつゝみ憚る程、山里には思ふまゝにもえ紛れ給はず。わくらばに、打忍び振延へ給ふに、はた、(三)寵愛上文「なほ京に出で侍りなんにを。(五)入道殿のかけても思し寄らざんめるに、打驚かれ給はん御心の、他所の人よりも恥かしく侍るべければなん。たゞ御消息などにて、此の程の(六)おどろゝぼつかなさは、明めさせ給へ」とのみ、いさゝか(七)そば〳〵しげなる氣色もなく、うらもなげに書き出でつゝ、自は物越許りをだに思し離れ果てゝ、齋宮の御傍をかしこき蔭に、立ち離れて過しやり給へば、云はん方なく、嘆き恨みつゝ行き歸り給ふを事にて、日頃も過ぎぬ。

實に所がらにや有りけん、又そこらの御祈のしるしにや、六月一日頃よりは、宮の御心地怠らせ給ひにたれど、名殘事々しう恐ろしげにのみ后の宮思し惱みて、弛み給ふべくもあらず、物怪は(八)人氣の遠きに起るものなりなど云ひなして一字イっゝ、萬に(九)御邊たり

(一)かくのみおはします程を—女一宮の病の重くのみある間も
(二)院の上—朱雀院。
(三)つゝみ憚る程—内大臣が朱雀院に遠慮してゐる間。
(四)京に出で侍りなんにを—都に出てから御逢ひいたしませう
(五)入道殿のかけても—父は私と寄方と關係のある事は思ひもそのなきが知れて、父にいのに、驚かれる事は、他人に聞かれたよりも恥かしく思はれますから。
(六)おどろかなさは—一本の「疊束なさは」をとる。
(七)そばそばしげなる—よそ〳〵しい、親しからぬ樣子もなく。
(八)人けの遠きに—人數の少い時に。
(九)御邊たり—内大臣が女一宮の傍から。

(一)何事を…番歌合十九番に院御製、詞書に「女君廣澤にかきこもりぬと聞かせ給ひて、内大臣より藏人少將を御使にて、又風葉集雜二にこの山の歌あり。里にまかり出かせ給ひしとて、はけるる女あに賜はせける」とし、八重立つ山の歌とり。西山を白雲の末に遣百番歌合、見た。倚句は拾遺百番歌合、風葉集あり。「時雨も

(二)思はぬ山の…思はぬ山は入り山の音をあはれ花の盛に思ひ入るらむ」(後撰集春中)「時雨も花盛り行くすゑ知らぬ我爲にのみ」

(三)振り離れ見えず…振り離れ見え知らぬ我が身の盛り行くすゑ知らぬ我爲にのみ」

(四)有にの色合も…一本の「なげの色合も」をとる。

(五)召し侍る人は…雅子君は、内大臣自身連れて參内する。

(六)奏させ給ふ…内大臣に、藏人の少將をして帝にかく申しあげさせる。

て取らせて御覽ずれば、

(一)「何事を如何に恨みて白雲の八重立つ山に思ひ入りけん

(二)思はぬ山の」と書かせ給ひたる。わざと振延へさせ給ひたる御返、無くてはあべうもあらぬ事かなとは見給へど、待ち御覽せん御心盡くし、今少し增さむ程も、いと胸安からねば、さも薦めず、内大臣「何事につけても(三)振り離れ見えず知られじとのみ思「されたる、ことわりなりや」と打ち眺め出で給ふに、何時も聞え給はぬ物とのみなりにたる御返なれば、まいて思し懸くべくもあらず。若君の御迎へなる御使なれば、見放ち給ふべき事にもあらねば、我も出で居給ひて、いみじくもてはやし給ひて、内大臣「雨に增さりつらん木の下露の、しほどけさに、蓑代衣や要るべからん」と宣ひも果てぬに、御籠の中より、事々しき女の裝束にはあらで、眞實に色は映るばかりなる紅の織物の單衣襲に、樗襲の五重の織物の小袿に、撫子の織物の小袿重ねて、押し出でたる匂ひは、雲の上にも透りぬばかり薫り充ち、なにがの色合も、如何なる龍田姫の染め出でたる花の錦ぞと、目も驚かる。内大臣「源氏の入道例ならず惱まるよし承りて、驚き訪ひに參うで來たる折しも。(五)召し侍る人は、やがて自具して參るべき」よし、(六)奏させ給ふ。都の覺束なさも忘れて、その夜も昔の事をさへ、搔き續け、哀れに悲しく思し續けらるゝまゝに、泣く〳〵恨み續い給へど、聞きだに入

聞え給へれど、寢覺上「明日ばかり、かくて出で侍りぬべきを、さても聞えさせん。此所にはなほ暫し殊更になん」とぞ、なだらかに聞え出で給へる。内大臣「何でう心有り顏なる事かは。なか〳〵餘り物越ばかりの對面も、けざやかせ給ふこそうたてあべけれ」と(イたびたび)いみじう聞え給へど、同じ様に答へて、御對面あべくもあらず。さればよ、いと執念げなる人にうとまれぬるよと思すに、恨みやるべき方なく、我こそ、いと心苦しげに、絶え入り(二)〳〵し給ふを、如何でか聞き過ぐさんとは思へ、人は聞き怯えつゝ立ち出で、絶え籠りたる日頃をさへ、げに宜しう覺えじを、その一筋にてだに罪去るべき方なきに、憂き事をさへ云ひのゝしるを聞き添へたらん心地、如何でかは憂しいみじと思ひ離れざらん。方々に云ふ方なきことわりなる、たゞ身を責むる心地して、内大臣文「限りと思し閉ぢむるにても、今一度立ち出でさせ給へ」と聞えさせ給ひて、「胸の隙いさゝか明くべき事の侍るなり」と御文に書き續けて聞え給へば、寢覺上文「などてか限りとは思ひ奉らん。うたて禍々しげにも取りない給ふかな。此所にては聞えさすまじきよしは、先々も聞え侍りきかし。出で(イ侍りて)後ぞとは」とおいらかに書き出でつゝ、日も暮れゆく。歸り給ふべき心地もせず、内より藏人の少將を御使にて使「若(四)君參らせ給へ」と使「ただ暫しの程にて、罷出給ひにしまゝに、などか一」と仰せ言あり。殿おはしますに、御文引き出でん事如何と思ひ休らふ氣色を御覽じて、女房し

(一)ことでも―ここを出て都に歸つてから。

(二)絶え入り〳〵し給ふ―女一宮の病重くて絶え入り勝なのを自分（内大臣）だけは聞き過すべき事が出來ないで、傍に付き添うてゐたが、女一宮の物怪が、他の人々は、恐れて逃げ出だしたので、私だけ閉ぢ籠たつのでなかなか寢覺の上は氣持よくつた思ひ事なのに、一宮は許さぞ寢覺の上日行ぢてゐない。このさうでも寢覺の事だけは對する生も消えず、まして寢覺上に、寢覺上の心は、苦しめた等との事は、女一宮を寢覺上の心は、苦しめた等との事は、女一宮を寢覺上の心は、苦しめた等との事は、女一宮を

(一)かの云ひしばかりの―前遷。石山に於て大姫君出産の時、内大臣に逢つたがあのまま二度と内大臣にも逢はずに離れて了つてゐたなら。

(二)待ち迎ひ―内大臣を待ち迎ひ「迎ひ」は「迎へ」か「向ひ」か。

(三)かゝりけるよ―内大臣と以前から關係があつたのかと。

(四)入りおはしぬ―内大臣が。

(五)月頃になりぬる病者の―もう長い間になる病人(女一宮)のいつが良いと云ふ事もないので、見捨てて―こちらに來るわけにも行かず。

(六)心許なくのみ―寢覺上の事が氣懸りで。

(七)幼き人―癒子君、小姫君。

(八)などてかくくのみこそ―どうして貴方を避ける爲に、齋君の方に行くものですか。いつも齋宮の方に許りゐらつしやるのです。

(九)御消息―寢覺上への御消息。

取るに、げに今始めたらぬ事ならねど、かの云ひしばかりの有明のまゝに、心強く懸け離れ入り居なましかば、人を憂しと思ひ分く節もなく、我が世に知らぬ名も流れで、如何に殘りある心地して目安かべかりけりと、物のみ悔しきに、此所にてさへ心安く待ち迎ひ奉らんも、いとあいなく、入道殿の思しも寄らざめるに、かかりけるよなども知られ奉らんに、いと恥かしきを、たゞかくてあらば、何の障り所なく、入りおはしぬべければ、人目は樣惡しくとも如何はせんと思して、やをら齋宮の御方に渡り給ひにけり。殿は先づ入道の御方に參り給ひて、「内大臣」例ならぬ御有樣になんと承り驚きながら、「月頃になりぬる病者の何時となきを見給へ捨てで」など聞え給へば、入道殿先づ打泣き給ひて、「入道」今は老の積りの常の事となりにて侍るを、聞き驚き訪ひ渡られたる人々侍るをだに、さらでもありぬべく事々しく思ひ給ふるに、かくさへおはし參たるかしこまり」を聞え給ふ。いみじく心許なくのみ覺え給へば、言少なに、事無しびて「内大臣」「幼き人の參り侍りにけるも、あひ訪ひ侍らん」とて、立ちて此方におはしまいて、つゝむべき事もなければ、たゞ入りに入り給へれば、小姫君若君女房などぞある。「内大臣」「何處に」と問ひ給へば、「女房」「齋宮の御方にこそ」と聞ゆ。「内大臣」「などさは。參るとは聞きて逃げ給へるか」と問ひ給へば、「女房」「などてかくくのみこそ。さべき法文など習ひ聞えさせ給ふとて」と聞ゆれば、御消息など

(一)あさましく―一本に「あたらしく」とあり。
(二)御蔭にこそ―寝覺上の御蔭によつて。
(三)古の心おきても―以前權大納言（當時左衞門督）が寝覺上を苛めた事があつたが、今はその事も後悔してゐるので、殊に寝覺上を非難するといふ事もないのであらう。
(四)殿の上の事―故關白殿の上の事の意で、寝覺上を指す。
(五)ほのめかい給ひつる―「魂のあくがるる許り云々」の寝覺上の歌を指す。
(六)この憂き事―生靈の一件。
(七)我が言ひ出でぬか―自ら話してやらなかつたのを、心憂く隔てがましい事と思つたらう
(八)御物忌―前に雅子君の言葉に「今日より宮は六日の御物忌」とあるに應ず。
(九)この御心地―女一宮の御病氣に。
(一〇)打聞えて―女一宮に。

り給へるを見奉り給ふ。目も昏れて淺ましく口惜しとのみ思ひ聞え給ふ。權大納言も故殿の御世に我がまゝに匂ひ出で給ひしかば、此の御蔭にこそ面立たしき物なりけれと思せば、古への心おきても悔しかりければ、今は聞え出で給ふ事もなきなるべし。それより外は、さし越え、誰かは殿の上の御事とては、さ許りになり給ひぬる人の御事を聞え出づる人のあらん。

内大殿はありし御返を打忍び見給ひて、にはかに音もせでも渡りぬるかなと驚かれ給ひぬるに、ほのめかい給ひつる氣色の、此の憂き事どもを聞き給ひてけるなめりと見給ふに、さるにては我が言ひ出でぬを、如何に心憂く隔てたりと思しつらん、さればこそ氣色はいみじく思ひしめり給へりと見しぞかしと思すに、いと止め難く世を飽き果てぬらん事の、萬覺えず佗びしきに、此の御返を中々に聞えやるべき方なければ、何時しか自と思すに、いみじく心もとなく、呆れ明かし暮らし給ふに、御物忌の滿つる曉に、内大臣「源氏の入道殿いたく患ひ、日頃になり侍りぬれど、此の御心地に萬覺えで訪ひ侍らざりつるに、いと重くなりにて侍るなる、いとほしく、齡傾きぬる人の命知るべきにも侍らず、今一度見給へ訪はん」と打聞えて、鷄とともにおはしまいたれば、思ひも懸けぬ程に、人々立ち騒ぐ。女君は、例の世の憂きよりはこよなく慰む事多く、此のついでに、かくてやがて住み果てなんと思し

て來て思ひ入りし秋の空にも劣らぬ心地するに、世にあり佗びては、先ず思ひ入る吉野の山もはかなう、まだ變らぬやうもやなど、我が心ながら知り難う心細きにも、嵯峨野の契はあはれに思し知られて、

[illegible]上「幾返り憂き世の中をあり佗びて繁き嵯峨野の露を分くらん

麓の野邊の思はん事耻かし」など、思し續けておはしまし着きぬ。

故關白殿の御世に、我も終の御止りとは此所を思ふべきなりと思し宣ひて、山も野も廣々と古め入れて、建て添へられたる寢殿廊どもなど、いと數多いかめしう造り擴げ給ひてしかば、昔にも皆樣變りて、新しう建てられたる寢殿に、御しつらひはせられたれば、皆下りさせ給ひぬ。昔おはせし方には、入道殿の一つ御腹の女二宮と申ししは、齋宮にぞ居給ひにしかど、替り給ひにし後聞えおかす人數多あれど、殊の外に思し離れて、世を背かせ給ひにけるが、京の宮も燒けにければ、同じ山水の流れも諸共に聞え交い給ひて、此の三年許りは此所にぞおはしましける。淺くはあらざりけん御罪も殘りあるまじく行ひ濟ましておはしますを、羨しく見奉らせ給ひて、御對面どもあり。入道殿は何け一字イばかり苦しげにはあらぬ御心地なりけれど、御齋御覽じ入れで、いとか弱くなどぞ思し召されつる。珍しく待ち喜び見奉り給ふにも、只今十五六程の齡の御有樣とのみ若く美しげなる事、古へよりも光り添ひて匂ひ增さ

(一)思ひ入る吉野の山―引歌あるか。濱松中納言物語に「そむきては吉野の山に跡絶えて浮世を見じと思ひし物を」西山を吉野山にたとへる。

(二)嵯峨野の契―嵯峨野と自分とは緣が深い。何か事があると直ぐに西山に出かける。

(三)故關白殿―寢覺上の先夫。

(四)替り給ひにし後―他の女宮に齋宮が替つてからは。

(五)聞えおかす人―求婚する人が數多あつたが。

(六)おかす―「犯す」か、「置かす」か。

(七)なにけり―一本の「なにばかり」なとろ。

(八)御齋―御食事。

たらんもかくや」と、覺束なきよし、例の盡きせで、内大臣文「雅子が珍しく罷出て侍るなるを、え見給へぬこそいと覺束なけれ。さても必ず御言傳侍らんかし。吾が君〳〵それ賜はせよ。隱させ給はゞ、身をも世をも、限り〳〵とぞ思ひ侍るべき」など、細々と書き給へる。えさらず見合い給ひたる時、あながちに隱さんは、心しもあるやうなべきがあいなさにこそ、見給ふも苦しからね、隔てなき心を知らせんとても、これなむ御文とて奉らんも、いと便なく見え聞えがましければ、如何にもその事はかけず、寢覺上文「西山に『例ならぬ樣にて日頃になりぬれば、心細きを、見よ』など、心苦しげに侍れば、驚きながら渡り侍る程にてなん」と許りにて書き閉ぢめつるも、さすがに思されければ、

寢覺上　魂のあくがる許り昔より憂けれど物を思ひやはする

と書き紛らはして出だし給ひつ。忍びやかにてと思せど、大納言中納言またその御子ども、宰相中將など皆送りにおはす。人賜二ばかり、我が御車には身を離れ聞え給はぬ小姫君乳母などぞ乘りたる。いみじく忍びて、簡略ぎてと思せど、人の御程やむ事なくのみもてなされ、自ら枝々繁く廣ごりにたるに、人ごとにあまねう情あり廣き御心おきて淺からぬに、いと靡き從ひ聞え給ひつゝ、いと嚴しうぞ、はかなき御歩きなどに事々しげなる人の御身なる。我はたゞ昔いみじかりし程の亂れ出

(一)御言傳―帝よりの傳言。
(二)隱さんは―帝からの御文を内大臣に隱すのは。
(三)西山に―下の「渡り侍る」にかけて見る。
(四)例ならぬ樣―女入道が病氣で
(五)魂の―生靈になつて出る程、以前よりもつらい身の上であります、別に煩悶もして居ります。
(六)忍びやかにて―西山に渡るのは、こつそりと行かうと寢覺上は思つてゐたが。
(七)人給ひ―隱行者の乘る車。
(八)御心おきて―寢覺上の心の。
(九)昔いみじかりし―内大臣と關係して、石山にて大姫君を産み西山に參つた當時。二卷九八頁。

(一)殿は見奉らで―内大臣には逢はないで、参内しなければなりません。

(二)故殿の限りなきものに―故關白が、雅子君を此上なく可愛い者に思つてゐた事をさへ。

(三)さらば―貴女が御田になるならば。

(四)かけり―一本の「かばかり」を取る。

(五)心こそ―有り難い父入道の心と。

(六)御方々―新大納言上、宰相中將上等が寢覺上の所に來たのに。

(七)覺束なく―父が病氣で居りますので心配に思はれ、離れてゐるのも氣掛りですから西山に行つて。

(八)かの御心地―もし父の病氣が直りません時には、そのまゝ西山に居りませう。

(九)人心細く―一本「又心細く」とあり。

(一〇)誰をかはと―自分(寢覺上)が西山に渡つたなら、此の人達は誰を頼みにしようか、頼みとする人もないと。

(一一)殿より―内大臣より。

(一二)わりなき物の穴より―やつとの事で出した手紙と云つて。

六日の御物忌隙間もあるまじかなれば、殿(一)は見奉らで參りぬべきなめり」と宣ふを、寢覺上「何かは參り給ふ。暫しはかくて見え給へかし」とて、姫君の戀しくおはする慰めにも、さは云へど身に添ひて生ひ立ちし方の睦まじさも、故殿の限りなき者に思いたりし事をさへ取り集め、細かなる事は添ひて打語らひ給へる。入道殿にも參るべきよし聞え給ひければ、入道「風邪にや、亂り心地の例ならず侍るまゝに、いと覺束なく見奉らまほしく侍れど、所狹くもあり、さすがに御心の暇もよに物せさせ給はじと推し量り參らせつるに、さらばいと(二)〳〵嬉しかるべくなん。小姫君若君も奉ておはしませ」など、ひたぶるに喜び給ひたるを、昔も今もかけり(四)三寸ばかり憂さを厭ひ給はぬ心こそと、打泣かれて、御方々(六)渡り給ひたるに、寢覺上「例ならぬ樣にて、覺束なく思いたるが苦しさに、渡り侍りて、かの(八)御心地直り給はずば、さてこそは侍らめ」と聞え給へば、如何に人(九)又心細く、たづきなき心地して侍らんと、何れも心苦しげに思したる、ことわりなり。又誰をかはとあはれに見奉り給ふ。督の君にもかくなんと聞え給ふ。大貳の北の方に、同じごとく思しなして、よく後見給ふべきよし、返す返す聞えなどし給ひつゝ、寢覺上「人の御世定めなければ、とみにえ立ち歸らずもこそ侍れ」とて、大納言宰相の夜晝の御裝束ども奉り給ふ程に、殿(一)より、わりなき物の穴より出ださせ給へる御文とて、内大臣文「いと所狹き物忌にさへ閉ぢ籠められて、籠に籠り

とぞ書き給ひたるを見るまゝに、涙のこぼれ給ひぬるを、中納言賜はりて見給ひて、

中納言「いみじくも書き馴らせ給ふ御手かな。御前の御手に劣らせ給ふまじかめり」

とて、我もうち泣き給ひぬ。御返まいておろかなりけんやは。哀れげに濃やかにて

寝覺上「(一)まして思へ五月の空の闇にさへ搔き暗されて惑ふ心を

只今ぞ雅子君も内より罷出給ひたる。いみじく貴にをかしく艶きたる容貌樣は、姫君にも劣り聞えず、いとゞたゞ上の明暮御目離れず、搔き撫でつゝのみ夜をも明かさせ給ふに、心繕ひし習ひにければ、いとゞ靜かに、女にて見まほしき樣し給へるを、いと珍しく、心安かべきをさへ、目離れず見ぬ契りも珍かに、人に違ふ心地して、見奉り給ふに、日頃の物語督の君の御事など語りて、雅子君「まこと上の『これ見せ奉りて御返事必ず取りて參れ』と仰せられつる」とて、御文引き出でたり。いみじく書き盡くさせ給ひたる氣色なれど、寝覺上「いでおな心ぞ憂、此の御事なからましかば、いとよく思ひ固めて、逃れ行きし人に、取りも敢へず亂れ靡きて、かゝる憂き事を聞き添へましや」と思すに、いとゞうとましく、をかしともあはれとも見ては何にすべき。そはかばかりになりぬる人の人を、かく色を盡くして、數多かゝる名を流す、よろしき人の上にだに、さる類あらじかしな。さりきやとも、問ふべき類なき心地するに、例の先づ搔き昏れつゝ、見にだにも見られず、雅子君「今日より宮は

(一)まして思へ—意明瞭。
(二)上—帝。
(三)目離れず見ぬ—子供の側近くに居る事も、又見る事も出來ない運命も。
(四)この御事—帝が私に云ひ寄る樣なの事がなかつたならば。
(五)逃れ行きし人に—固く決心して長く關係を絶つてゐたあの内大臣に。
(六)見ては—面白いお手紙だと見ても何にしようか、致し方もない。見ては—或ひは見ては—と濁つて否定の意と見るべきか。
(七)かばかりになりぬる人の—私位の年齢になつた人が。「人の人」は「たを」の「人の」の東下りの條に「人の人詠め」と云ふ同じ用例がある。強める意。
(八)色をつくして—色々樣を變へて。
(九)よろしき人—普通の女でさへも私のはありますまい。又「私の樣なもの」の如き事があつたか。とも問ふ事の出來る樣な先例もない心持がするのに。
(一〇)宮—女一宮。

(一)この人に―新中納言に。

(二)名殘の君達―故關白殿の遺兒達、即ち新大納言上、宰相中將上、尙侍殿、小姫君等。

(三)大王の宮―大皇の宮なり。

(四)心赴け―心の仕向け。

(五)なものし給ひそ―内大臣が女一宮の病中にも不拘、小姫君等を見る爲めに私の所にやつて來るのも世間の評判がうるさく、又、來てはいけません等と内大臣に云ふのも。

(六)御心地―女一宮の御病氣の癒らない間に。

(七)西山―西山には、父入道殿が居られる。

(八)見奉らぬ―父入道殿を見ないのも。

(九)かむの殿―尙侍殿。

(一〇)引き込み―一本に「添ひ聞えし」とあり。「引き込み」なれば「宮中に籠つて」の意味になる。

(一一)かの殿―内大臣に此の事をお知らせになりますか。

(一二)いかにして―これまでどうして過して來たかと思はれる位に、今宵だけの御別れを、我慢出來ないで居ります。

(一三)如何にして過ぎぬる方ぞと思ふまで今宵許りを忍び侘びぬる

(一)此の人にたゞかゝる有樣を嘆き扱はれ奉るより外の事なきよなど、打思すに、思はずなる世に過ぐすと覺え給ふべし。故殿の心おきてのみこそ、此の世の思ひ出でにすべき身なりけれと戀しう悲しく思ひ知らるゝまゝにぞ、(二)名殘の君達の御扱ひは、いとゞ心にしみて、これよりけに憂き世なりとも、なほ忍びて、心の及ばん限りは後見聞えまほしく思されける。(三)大王の宮の(四)御心赴けも恐ろしくのみあり。云ふ甲斐なき賤の男まで名をこそ先に立つと云ふなれ。近き程なれば、自ら小姫君など見に立ち寄り給ふめる、聞き憎かめれど、(五)「な物し給ひそ」など聞えんもうたてあり、(六)御心地のかゝらん程、(七)西山に參りてあらばやとこそ思ひ侍れ。いと久しく(八)見奉らぬも覺束なく、彼所よりもいぶせきよし度々宣はするを」と宣へば、新中納言、さも侍る事なり。暫し渡らせ給はんかし。(九)督の殿の御事は、大貳の北の方引き込み給ひにたれば、後安げに侍るめり。げに此の程はさてぞよく侍らん。たゞ忍びやかなる樣にて」と此の君承け引き給へば、いと嬉しくて、新中納言、さらば明後日許り。何の心にくく清らあるべき御歩きならばこそ。(一一)かの殿には御消息の聞え給ふべき。何かそはさらずとも」など聞え明かい給ひて、曉方に打ちまどろみ給へるにぞ、殿の御文姫君のなどある。急ぎ開けて見給へば、

(一三)如何にして過ぎぬる方ぞと思ふまで今宵許りを忍び侘びぬる

(一)ひたぶるに―憂き事の絶えない内大臣との關係であるから一途に、何れて了かふべきである。の―ふく別れる事が出來ない前生からのつらい契なのであらう。

(二)新中納言―一二巻の宰相中將

(三)寝覚上の兄。

(四)野中の水―二一〇頁に、水草ゐし野中の水を掬びあげて雪に濁る今の佗しさ」とある。帝の詠の立つてからは。

(五)かの宮―内大臣北の方。

(六)さゝ―不詳、小事の意か、「索（サクシ）」の誤か。生靈の事を意味す。

しき人の御名殘のみ身に添ひて、

寝覚上ひたぶるに憂きを背きて已むべきになぞや此の世の契りなりけんとのみ嘆かれ給ふに、新中納言參り給へり。昔よりの有様を名殘なく知り給ふにしも、恥かしうまばゆくて、野中の水の後よりは、殊に濃やかに對面し、物なども聞え給はでのみあるを、今宵ぞ物など聞え給ひて、中納言近く參り寄り給ひて、新中納言「かの宮にさゝの事を言ひのゝしり、殿もいとうとましげに怨じ聞えさせ宣ふと言ひ散らし侍るなるこそ、いと淺ましき事なれ。殿は聞え出でやせさせ給ひけん」と宣ふに、胸打ち潰れて、いみじう恥かしけれど寝覚上「日頃さ聞き侍りつれば、うたて覺ゆれど、如何思ふべき事をだに、人よりけに心淺う思ひ入れで過し侍りし物を、何につけてかは、その御邊まであくがれ寄る心の有りけん」と、例のしどけなげに云ひなして、打泣き給へる氣色有様、見ても〳〵飽かずめでたきを、あはれ如何なる報いにて、此の人かくのみ思はずなる世を亂れ思すらんな、前の世に功德の程知られ、罪輕げなる御有様と見れど、心亂れ給ふ契りこそいと勝れてはあらざりけれと、哀に悲しう見奉り給ひて、こはまた聞き入れさせ給ひ、思ひ嘆いたまべい事にもあらず、かく物狂しき事は、聞く人もことわりてんと思ひ給ふれど、かりにもよしなしや、打思ひ入り給へる氣色のいと哀れに氣高き様なるに、昔より今に、

(七)思ひ嘆いたまべい―一本に「思ひ給ふべい」とあり。

(八)思ひ給ふれど―新中納言がなり。

(九)氣高き様なるに―一本に「深き様なるに」とあり。

(一〇)昔より今に―以下寝覚上の心

か」と許りにて、聞えまほしき事は多かれど、殿邊近う居給へれば、萬たゞ押し籠めて、顏に袖を押し宛てて、さりげなくていみじう泣い給ふ氣色を、姫君はまいて、さはいへど、思ひ遣り深くもおはせず、親など(一)は覺え給はず、思ふ樣に美しき御遊び敵とさへ思ひ睦れ馴れ聞え給ひて、引き離れ給はん事の飽かず佗びしきに、傍に打添ひて、顏も擡げ給はぬ氣色を、殿は寄り給ひて、内大臣「實に人の子許りあはれなる物はなかりけり。年頃見知らで生ひ立ち給ひしかど、親の邊惜しう立ち離るべうも思いたらざめり」と見るもいとゞ哀れに、心苦しかりければ、内大臣「たゞ今宵許り、明日の夜は渡い奉りてん。今宵渡い奉らんと聞えつるを(二)イナシ、いと嬉しと思いたりつれば、待ち聞え給ふらんに、さらずば甲斐なしと思し嘆かれん、いとほしう侍ればぞよ」と慰めて、上の忍びかね給へるをも、内大臣「さらば聞ゆるまゝに(五)」と、切に語らひ聞え給へれど、いとかう餘り心弱う見えじと思ひ靜めて、豐臺上「さらばとてイく渡し給ひて又も」など、あざやかに、ゐざり出で給ふ後手の、いと小さくをかしげなるを見送りて、禍々しきまでこぼるゝを、打見返りて、いと物憂げに思いたる樣ぞ限りなき。殿もさし寄りて、内大臣「(九)さこそ猛う思し捨つとも、名殘如何に思されむ。明日の夜さりにても渡り侍りなんとす。さても羨しの御氣色や。かやうに思されたらん時、如何ならん心地せん」など、いと多く、立ち離れ難げなれど、見え留まらず、戀

(一)親などは—寢覺上が我が實の親とは思はれないで。

(二)親—寢覺上。

(三)渡い奉りてん—又この北殿に姫君を渡しまさう。

(四)聞えつるを—尼上に申しあげました處が。

(五)聞ゆるまゝに—では私の申しあげた通りにして下さい。

(六)ゐざり出で—給ふ後手の、ゐざり出る大姫君の後姿の。

(七)見送りて—寢覺上は見送つて

(八)見返りて—大姫君が。

(九)さこそ—たけうそんなに强さうに、大姫君の事を思ひ捨つた後はどのも、思ふ事でせうれ。

(一〇)羨しの御氣色や—かく貴女に樣に思はれてゐる姫君は羨しい。

思はれてゐる姫君の如く思はれたい時には、どんなに嬉しい事だらう。

(一一)多く—「思し」とも讀まる。

(一二)戀しき人の—寢覺上は內大臣の事は日にも止めずたゞ大君の事が。

(一)聞きやし給ふらん—寢覺上は物怪の話を聞いたらうか、或は聞かないであらうか。

(二)かの御心を—尼上の御心を察して上げなさい。

(三)あらけ—「あらせ」を取る。姫君を、惡い評判の立つてゐる私の樣な處には置くまいと思つてゐるのだらう。

(四)えさらず立ち寄るも—この樣によんどころなく立ち寄るも皆大姫君が氣掛りで心配でならない爲なのであらう。

(五)我が心も—寢覺上の心にも。

(六)見奉らざらんは—寢覺上が大姫君をしばしの間も見ないだらうのは。

(七)うち添ひ聞えて—大姫君と一緒に、尼上の居る內大臣邸に御渡りなさい。

(八)のどめむ—さうした私の心持なら、貴女を私の邸に迎へる事によつて靜めませう。

(九)いかでか—どうして渡る事が出來ようか、などとは答へないものの、渡る事などはもつての外の事だと聞き入れないで

(一〇)いかでか—お留め出來よう。

かに、おほどきたる氣色に、大臣も、聞きやし給ふらん、聞き給はずもやあらん。あはれ此の人にか許りも玉に瑕をつけて云はするよと、我が身さへ恨めしう悲しきに、涙もしをれつゝ、內大臣「尼上の、小姫君を戀ひ泣き給ふ樣の、罪得がましきを、あからさまに渡い奉りて、又も二三日ありて渡い奉らん。さるはつれ〴〵に思さるらん御語らひ人にもと思ひ侍れば。思いたる氣色、見るにいみじういとほしければ、かの御心を、ただ思しやらん」となん宣ふ。かく樣惡しきあたりにあらけ奉らじ。此の御覺束なさに、かうやうにえさらず立ち寄るも、心の暇なしとなめりと、我が心もおいらかならず思ひなさるれど、さ答へんやは。げに久しうなり侍りにけるを、さは疾くも打ちつけに、暫しも見奉らざらんは、いみじう戀しう覺束なかべぞ、何に心をも慰むべきにかと、わりなう思ひ亂るゝ氣色や、いみじう忍べど、見ゆらん。內大臣「いと忍びて、打添ひ聞えて渡り給へよ。人の知るべきやうにもなし。又知るとてもつゝみ果つべき事かは。かうて一人離れ居給へるをさへ思ふ、眞實に心地も空に浮き立つやうに覺えて堪へ難きをも、のどめむ」など宣へど、寢覺上「如何でか」などけざやかにも答へぬ物から、殊の外に聞き入れず、夜更け行くも煩はしければ、さらばとゐざり退きて、姫君に、寢覺上「今宵渡らせ給ひぬべかめれば、搔き絕えたりつる年頃はさる物にて、日頃の名殘堪へ難う覺え侍れど、如何で

(一)尼上―内大臣中宮の母君、故關白太政大臣北の方。
(二)見初め奉りは。大姫君を見初めてからは。
(三)かくて離れ―かく内大臣殿に居る尼君から離れて、故關白殿の寝覺上の許に渡つて。
(四)うち出でん―尼君の頼みを内大臣が云ひ出す事は。
(五)されば―以下寝覺上の心。
(六)のしるけしきを―生靈の云ひ騒ぐ様子を。
(七)ここそありしかと―大した事でもなく虚偽の事と内大臣が生靈の一件を思つて居るならば、こんな事があつたと私の前で云はないが筈があらうか。かく云はない以上は、深く眞實の事と思つてゐるのだらう。
(八)名殘なくひきぎり―眞實と思つて居てと、それかと云つて、どうして内大臣が自分から未練なく去つて行く様な心持であらうと。面と向つて云はないでさりげなく思つてゐるのが大變自分には恥づかしく心憂い事だ。
(九)この人の―内大臣が折々女一宮に參る度毎に、亂れ出る自分の魂が、今にも、直ぐに女一宮の側に憧れ寄るだらうと思ふと、自分ながら忌忌しいが。
(一〇)さはれ見え果つべき―まゝよ いつまでも内大臣に逢ふ身の上でもあるまいからと。

つ、か許り他き果つる世の中に、引き切るべくもあらぬ絆に覺え給ふも、如何にすべき世ならんとのみ嘆かしきに、尼上は、見初め奉り給ひにし後、片時目放ち奉らずのみ習ひ給へる、かくて離れ渡りて、日頃經給ふを、戀しう覺束なく思ひ聞え給ひて、殿の渡り給ひつるに、尼―「宮の御心地如何」なども聞え給はず、星一姫君を見奉らで、日頃の過ぎ行くまゝに、心地も果れ〴〵として、行ひもせられずなん。いみじく思ひ聞ゆれど、人の御子許り心憂きものこそなかりけれ、我をば何とも思さで、離れ給ひたるよ」と打云ひ恨み泣き給ふが、あはれにいとほしう、内大臣「かう思ひ聞え給へば、罪もこそ得給へ」と驚きながら、例の宵の紛れに渡り給ひて、内大臣「一日の御眺めの常よりも心に染みて、後めたう覺束なきさへ添ひて思ひ、現し心もなき心地して」など、盡きせぬ御言の葉は、常の事と思ひ馴れて、打出でん事のいみじう我恥かしう心苦しきに、堰き止め包み、言ひ出で給はぬを、されば よ、一夜もさ許り現れ出でてののしる氣色を、ここそありしかと、あらぬ事と思さば、宣はざらましやは。深く眞實と思すなめり。如何でかは、きりとて名殘なく引き切りなる御心遣のあらん。なか〳〵さりげなくて思すらんこそいみじう恥かしう心憂けれと、此の人のほのめい給ふ度ごとに、亂るゝ心今や〳〵あくがれ寄るらんとこそ、我ながらゆゝしけれど、さはれ見え果つべき身かはと思せば、いとなだら

(一)かれはた―寢覺上は。
(二)いかでよろしからざらん―長い間煩悶してゐたのに急にゆつくりと逢ふ事が出來るやうになつたのだから、どうして並一通りの態度で居られよう

(三)御たちかくれ―内大臣が寢覺上の所に隱れた事。
(四)物怪―寢覺上の生靈。
(五)立ち寄り―内大臣がやつとの事で、寄り―私(寢覺上)の許に立ち寄つたのに。

方は人の御程いとやんごとなく忝さもおろかならず。(一)かれはた、年頃思ひ惑ひ心を盡くしゝに、にはかに隙ある時の、(二)如何でよろしからざらん。さも苦しき心の中かなと打嘆かれつゝ、身に添ふ魂もなき心地に、大皇の宮のかく、寄りおはしまして、盡きせず泣き恨みさせ給ふ御言葉、眞似びやる方なければ、たゞ打ちかしこまりて聞き居給へり。今宵の御(三)立ち隱れに、堰き遣るべき方なき事を思し騷ぎ、いみじき事々衍カどもの亂れ出で來て後、夜の加持に御物怪(四)あらはれて物怪「からうじて立ち寄り給へるに、またかく呼び取られ奉りつる妬さに、やがて立ち添ひて參うで來つるなり。時々はよろしう聞き過ぐして、夜をだに明かし給へかし」とて、打敲きて泣きのしるに、さればよと思ひ居たるを聞き居給へる殿の御心地、いといみじう難かしう心憂し。内大臣「我を恨むるなどの氣色(六)にはあらで、何時よりもいみじう思ひ入りたりつる氣色には、此の事の聞えけるにやあらん。さらば深くも世を憂しと思ひ飽きなん(八)かし」と思ふに、慰め所なくことわりなるを、悲しく思し續けて、露もまどろまれず、明くるや遲きと、御文いみじく書き續けられたるも、(九)如何に思すらん、うとましからぬやうはあらじかしと思ふに、いと恥かしく御返聞え憎けれど、(一〇)書きたらんもまことに深き恨みにかゝればこそと心得給はんも、いと苦しければ、なだらかに直よかに打聞え給ひて、姫君のいとおよずけ美しき御有樣に、起き臥し語らひ聞え給ひつ

(六)氣色―寢覺上の樣子。
(七)この事―寢覺上の生靈の現れた事。
(八)思ひ飽きなん―寢覺上が世をいとひ果てるやうになるであらう。
(九)いかに思すらん―内大臣は自分が生靈に現れた事をどうお思ひなされるであらうか。
(一〇)と思ふに―と寢覺上が思ふに書きたらんも―掻き絶えんもの誤、返事をしないのも寢覺上が内大臣から恨んでゐるかだと内大臣から深く恨まれるのも寢覺上に取つては心苦しいから。
(一一)打聞え給ひて―返事をして。

(一)心苦しげなる―以下内大臣の心。

(二)怯えおきて―「おきて」は「起きて」か、「置きて」か。

いみじく心苦しげなる氣色に、立ち離るべうも覺えねど、かく聞きながら驚きて參らざらんもいと怪しかるべし。さりとて怯えおきて程なく立ち歸りなんを、我にてことわりと思ひ許すべき事ならずかしと思し煩ひ、いみじく打嘆き給ふ氣色を、さなめりと思しければ、かたはら痛く、(寝覺上)「かく物せさせ給はん程は、御文などにて覺束なきは明らめてんものを」とばかりぞィナシ云はれぬる。(内大臣)「吾が君や、などかくのみ思し放つ御心ならん。」「患ふ人ありとも、など見えぬ。此所にのみあらで」と苛み給はゞこそ嬉しう覺えめ。たゞ何事につけても、見知らじとのみ思したるこそ」と恨み給ふに(寝覺上)「さればあくがるゝ魂もあなれば」とは、答へまほしけれど、いと世の常び、戯れたる心地すべきもうたてあれば、たゞ押し籠めていと思するに、もてなし給へるに、續いて又人參りたり。(内大臣)「あな苦しや」と打嘆き佗びて、からうじて出で給ひぬ。宮におはして見奉り給へば、常の御苦しげさにて、またいと心苦しげに見奉るも、又いとほしく胸塞がりつゝ、御傍に添ひ臥し給ひて、(内大臣)「如何なればかくのみ心をば盡くさせ給ふぞ。心憂く」と御手を捕へて、御顔に泪を落しかけ給ひても、いといたう思ひ亂れ給ひつゝ、(六)人の氣色、琴の音、獨言たれつる事なと、耳につき面影に見え、世に苦しかるべき事は、二方に心分くるに增す事こそなかりけれ。何れもいと深くはあらずなのめなるを、日安くもてなすこそ、心の中は安らかなりしか。此

(三)されど―さう云はれますが、私には貴方故に憧れ出る魂もある程、深く思つてゐるのではありませんか。

(四)いと思するに―つくづくと考へて、そ知らぬ樣子をよそつてゐると。或ひは上より續けて、押し籠めてんと」の誤か。

(五)又人―内大臣の迎ひの人。

(六)人の氣色―寝覺上の樣子。

(七)二方に―二人の女、即ち女一宮と寝覺上に。

(八)こなたは―女一宮の方は。

(一)御心地―女一宮の御病氣。
(二)言ひ續い―一本に「云ひ盡くい」とあり。
(三)宮には―一方女一宮の方では。
(四)殿―内大臣。
(五)さなめり―又北殿に行つてゐるのだらう。
(六)この北殿に參り―以下十六行の「て告げ申せ」に續くべし。
(七)させ給ふを―二三六頁二行の「すがく〳〵と云ひ續け」より續くべし。
(八)この人―寝覺上。
(九)念じて―涙の出るのも我慢して。
(一〇)さだに―一度寝覺上の生靈の寝覺上に立つと、世の限り、この噂が立つのは聞きづらい事を云ふ樣になり。
(一一)跡を絶たん―内大臣を寝覺上からすつかり離れさせようと
(一二)見捨て奉らんも―病氣に惱む女一宮を見捨てゝ、寝覺上の處に行くのも。
(一三)かしこには―寝覺上の方では
(一四)隔て顏に―以下二四〇頁三行の「やと思せば」に續くべし。
(一五)て告げ申せと―五行の「此の北殿に參り」より續くべし。
(一六)かくなんと―寝覺上の女房達が内大臣にその旨を告げ知らせる。

所ありなど思ひ憚られつゝ、心のまゝにもえ紛れ侍らず居り。心憂くわりなき御心地に思ひなん佗びぬる」と涙を落しつゝ、言ひ續い給へど、耳にも留まらぬに、宮には苦しくせさせ給ふに、皆驚きたるに、あからさまに立ち出でさせ給へる殿の見え給はで程經ぬるを、さなめりと心得て、后宮もいといみじくけやけくつらしと思し、人々も心憂がりて憎かりければ、此の北（イの）殿に參り。

させ給ふを、此の世にあるまじき事をも宣はするかな。いみじき帝の御女畏しとても、此の人に絶えんよなど、かけても聞くには、胸塞がりてゆゝしう涙のこぼれぬべきを念じて、又ともかくも聞え給はず。さだに言ひ初めつれば、世とともに、たゞ此の上の御爲めに聞き憎き事を言ひて、夢語りなどをし出づるごとに、大皇宮良き事とこれにつけて取りなし、跡を絶たんと思し掟て給ひたる樣のいと嚴しき。それに從ひ聞ゆべき事にはあらねど、かく物し給ふ夜を、せめてないがしろに見捨て奉らんもいとひが〳〵しかんべき事なれば、すゞろに心地もあくがれ惑ひて添ひ侍ひ給ふを、彼所にはことわりなる御暇の程と恨みらるゝ心もなく、日頃經るまゝに、姫君の見馴れもておはしつゝ、打解けて嬉しげに打語らひ思しつゝ遊び惑はれ給ふが、いみじく哀れに、萬慰みて、忍ぶれど、氣色は自見聞き給へるめるものから、隔て顏に。

人々「告げ申せ」とおどろ〳〵しくのゝしれば、驚きて「かくなん」と怯え申すなり。

をさへ搔き立て給へる。これはいみじう諫め聞ゆる事とも思さぬなめりな、又聞く人もあらましき時聞き過ぐいてあらましや」と云ひ恨み給ふ。(一)げには露許りもうとましう、うたてありと思し宣ひける人かとも覺えねど、押し返し如何でかはその氣色を露はには見えんな。さりげなくて思すらんこそ恥かしけれ。おもなく物を言ひ出で答へをせんが心憂さよと打思ふに、たゞ先づ知る涙のこぼれぬるを、(二)かゝる事聞きたらんとしも知り給はで、げにこれ恨むる氣色ならむと心得給ふらんかしと思ふも、一筋ならずわりなければ、あながちに知らぬ顔にもて紛らはして、常よりもいと言少なに思ひしめり給へる氣色の言ふ方なうらうたげなるを、我は(五)人の御心地を思ひ惱みても、片時忘れぬ覺束なさを、おろかに思しなすにや。また此の云ひのゝしる事をや聞き給へらん。さらば必ず心深う思ひ入りなんかしと思ふに、いと苦しければ、えも打出で給はぬを、(六)朝夕に云ひ知らせらるゝ事なれば、用ひられ給ふにこそ。さる事こそあれと、打笑ひもあざみもし給ひてまし。げにと思しけるなめりと心得給ふに、我よりはこよなく淺かりける御心なりかし。さべい事の折は、人目も知らず、たゞ此(七)の人の御心をこそ我は思へと思ひ合はするに、いと憂けれは、答へなど聞えん言の葉も覺えぬを、なほ(八)例ならぬ御氣色かなと胸塞がりて、内大臣怪しくのみある御心地を、后宮もいと物頻はしく、おいらかならでくねり苛みつゝ、院にも聞し召す

(一)げには―以下寢覺上の心。かく云ふ内大臣の有樣は、我が生靈の憧れ出た事を少しでも疎ましく、又物憂しとも云つた樣な人だらうかとも思はれないが。

(二)その氣色を―よく考へて見ると、疎ましと又は物憂しと、内大臣が思ふ樣子を露骨には。

(三)おもなく―厚かましく。

(四)かゝる事聞きたらんとしも―内大臣は寢覺上がらんとしも―内大臣は寢覺上が既に先日の事件(生靈)を聞いてゐる事も知らないで、涙を寢覺上が落す恨む樣子なのだらうと思ふのも、寢覺上にとつては一方ならず詮方なく思はれる。

(五)我は人の御心地を―以下内大臣の心。自分は女一宮の御病氣を惱んでゐても、寢覺上の事は片時も忘れず、覺束なく思つてゐる。その心をも寢覺上は疎かに。

(六)朝夕に―以下寢覺上の心。朝夕とはなく夕となく世間で云ひ囃すやうに、自分が、内大臣迄が、内大臣と嫉妬して生靈となつて出たと云ふ事を眞實と思つてゐるのだらう。こんな事があつたと笑ひながら、久鶯き乍らも、私には隱さずに話して異れても良きさうなものだ。それをしないからは眞實だつたと内大臣は思つてゐるのだらうと。

(七)この人―内大臣の。

(八)なほ例ならぬ―内大臣は、矢葉りいつもと違つた寢覺上の御樣子だと。

(九)御心地を―女一宮が御病氣なので。

見え渡るに、御格子もさながら、人々は皆と(イカ)くより臥しつゝ寝入りたるに、例の寝覺は、(一)鳴くや五月の短夜も明かしかねつゝ、少し端近くて、花橘の枝もいとゞむかしきつまィいたとなり勝りつゝ、その折かの折と思ひ出づるに、なぞやかゝらぬ(二)人も多からん世を、我が身一つ世とともに物哀れに、心の浮びたるよと打嘆かれしは、いと怪しからざりける心なりや。(四)などさ思ひけん。その折許りこそ、いさゝか身の人聞目安き程はありィしけれなど、つくゞくと眺め出で給ふにも、胸より餘りて堪へ難ければ、箏の琴を引き寄せて、

寝覺上　(五)今のごと過ぎにしかたの戀しくば永らへましやかゝる憂き世にといと音高く搔き鳴らし給ふ折しも、殿は聞き憎き世にも紛れず、覺束なさに忍びかね、例のあからさまに立ち出で給へるやうに紛らはして、いみじう忍びて、西の格子の端の下にて、暫し聞き給ふに、末つ方に想夫憐を心のゆく限り彈き給へる、いみじう面白しとも世の常なり。我が身も浮き立つ心地するに、忍び佗び歩み入り給ふに、思ひもかけぬ程なれば、誰とも思ひ分れず、奥様に引き入り給ふを 内大臣「などかくは」と引き止めて、

内大臣「(七)世の中に無き身ともがな引きかへし昔の事ぞ人も戀ひける心憂の御獨言やな。なぞかう人少なにて、端近なる御眺めの、人聞驚きぬべき音

(一)鳴くや五月の―拾遺集卷二「時鳥なくや五月の短夜も獨りしぬれば明かしかねつも」

(二)むかしきつま！賞愛すべき然も昔を思ひ出させるたよりと一本に「いたとあるが、「枝」の誤字か。それならば、「賞愛すべき枝」といふ意味になる。古今集卷三の「さ月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」に據る。

(三)かからぬ―我が身の樣でない人も。

(四)などさ思ひけん―なぜあの位の事を嘆かしいなどと思つたのだらう。現在はそれにも幾倍かの苦惱に遭つてゐるのだ程だつたのに、などと。

(五)今のごと―これから先も、今の樣に、樂しくも無い過去さへも戀しく思はれる程苦しみのみが續く浮世であるなら、そんな浮世には長らへたくない。

(六)聞きにくき世にも―噂のうるさい世間にもかまはずに。

(七)世の中に―これほど苦しい世の中なら、この世を去りたく考へてゐます。貴女も昔の事を思ひ出しては戀しがり、現在の世をはかなんで居ります。

(一)まことにいみじう―どんなにひどいつらい事があつても、自身なこそすれ、他人を憎しと思ひ憧れ行く魂は、たとへ心の外の心と云つても、あるべき事か。

(二)人の上―他人の身の上の事は良い事ならばもてはやして評判はしないのに、良くない事とさへ云へば云ひはやすのが世間のならはしであるらしいから、自分の生靈が現はれたといふ事を。

(三)大臣―内大臣も、眼前の女一宮の御病氣を。

(四)御心づくしは―内大臣の女一宮の御病氣を遣ふ心には、尤もらしく名告り云ふ物怪の態で、寢覺上のをさあらぬ爲に此處に現はれたのも尤もな事だらう。疎ましい事だ。

(五)籠り居なん―參籠でもしたいと。

(六)内の上―帝。

(七)かの人―内大臣。

け賴み聞ゆべきものとは思ひだに寄らぬ事にて、まことにいみじうつらからん節にも、身をこそ恨みめ、人をつらしと思ひあくがるゝ魂は、心の外の心と云ふとも、あべい事にもあらぬものを、人の上良き事をばさもてはやさず聞えぬめり。良からぬ事とだに云へば、云ひ扱ふものなめるを、如何にいみじう聞き傳へ世にも云ふらんと思ふに、げに大臣もさしあたりたる御心地を見奉り扱ひ給ふらん御心盡くしは、つきづきしう名告り言ふらんを、げにさりげなくて、内大臣さもやあらんな、うとましし」とも聞き思ひ給ふらんかしと思ふに、恥かしさは例の萬よりも、さし進むを、寢覺上「いであな心憂の心や。此の月頃我ながらも必ずつらき節多く、便なき事も出で來なんものをと、思ひ離れ飽き果て籠り居なんと思ひよりし物を、内の上の御事の、せん方なく佗びしう思ひ惑はれしまゝに、かの人の御蔭につきて誘はれ出でなんとせし程に、心弱く亂れ立ちて、今まで永らへて、かゝる事を聞くが我ながら思ひ取る方強からず、口惜しう物はかなき心の怠りなり」。つくづくと思し續くる夜ななり、さるは面馴れて、さすがに度ごとに、いみじう心の亂るゝこそは、かの十五夜の夢に天つ少女の教へし樣の叶ふなりけれと思し出づるぞ、前の世まで恨めしき御契なるや。

五月廿日の月いと明う、此所彼所の木の下小暗う、夕間暮ならねど、物恐ろしきまで

(八)面馴れて―内大臣と見馴れてその度毎に。

(九)かの十五夜の夢に―一卷六頁に出てゐる事を指す。

にしすなはち迎へ寄せて育み立て侍るめり。方々におろかに思ふべき人に侍らねど。

やと思せば、宰相中將の上、新大納言の御方なども渡り給ひつゝ、もて遊ばし、限りなき御有様を、いとほのかなる火影に美しう見奉り給ひつゝ、夜は皆一つに渡り集り、晝は御帳の中に二所繪書き雛作りなどして見せ奉り給ふ。世になうめでたういみじと思ひ聞え給ひて、あからさまに立ち歸るべき物とも思い立たぬを、いとあはれに見奉り思ひ聞え給へるに、かゝる事出で來て、宮の中にも云ひののしり、世にもあざみ、后の宮の哀に宣はするやう、殿の思いたる様など、有る事も枝葉を付け、無き事をもつき〴〵しう、かゝる折は云ひけるを、詳しう人告げ申すに、いと淺ましう胸塞がり給ひぬ。昔より今に取り集めて、なれる我が身と、云ひ顔にあれど、もとより心のいとおろかに淺うなりにければ、よく思ひも入れで、千々の憂き節を餘り思ひ過ぐし來て、云ひ知らずうとましう音聞きゆゝしき耳をさへ聞き添ふるかなと、げに人からのなべてならず目安きとばかり見知りにしに、こよなうさだ過ぎ給へりし世の常の人様に引き移され、我が身をば恥かしう悲しう思ひ入りし程に、憂きを知り始めしばかりにこそ、折々絶えぬあはれをば見知り顔なりしかど、今となりては打解け又頼みをかけるべきものな　どとは思ひも寄らぬ事で。

今となつては、内大臣に打解

(一)侍られど―二三五頁六行の「しか恨みなす事」に續くものと思はれる。色々な方面に於て寝覚上と私とは關係が深いので怨みを云ふやうな事は少しもないと思はれますが、そのやうな事はありますから。「侍られど」は「侍らねば」とありたき所。「侍られど」でも意は通ず。

(二)やと思せば―二四四頁一五行の「隔て顔に」より續くもの。

(三)渡り給ひ―寝覚上、大姫君小姫君等の居る御部屋に、渡り給ひつゝ、もて遊ばし、限りなき御有様を、いとほのかなる火影に美しう見奉り給ひつゝ、夜は皆一つに渡り集り、晝は御帳の中に二所繪書き雛作りなどして見せ奉り給ふ。

(四)思い立たぬを―一本に「思いたらぬを」とある。大姫君が、内大臣殿に歸らうとは思つて居ないのを。

(五)かゝる事―寝覚上の生霊が女一宮を憑め、呪ひの言葉を云つたといふ事を。

(六)あさましう―寝覚上は呆れ返り胸もつまつて。

(七)なれる我が身と―古今集戀五「夕れるわが身と人なき床を打拂ひなげかむ爲となれる我が身かな」に據る。

(八)疎ましう―自分の生霊が女一宮に取り憑いたなどと云ふ事だやなる評判さへ立てられる事だ。

(九)人柄の―内大臣の人品の。

(一〇)さだ過ぎ給へりし世の常の人様に―もう年の老いた平凡な人品の故關白に。

(一一)折々絶えぬあはれをば―我が臣嫁せし故關白存命中に、内大臣が情をかけられたが、それを受け入れ顔ではあつたが、

(一)ゆくてのことにて―帝が私(寝覚上)に云ひ寄られたのは本心からなした事ではなく、物のついでになした事で二度と私の事は思ひ出して下さらない恥かしさを、内大臣の私を思つて下さる事が深切であるならそれによつて思ひ消さうと思つたのに。

(二)露のまことは―少しの眞實なる事はないのにと。一本の「まことはなを」とかしうも」をとる。

(三)渡り聞き給ひて―もし寝覚上の生霊が現はれたといふ事を寝覚上が洩聞いたならば、思ふに思ふに付けても臣が思ふに付けてもこれほど寝覚上の魂の憧れこがれて来る程である上がどれほどから、寝覚は宮に帰つて寝覚上の北殿に試し御覧なさい。貴方が居てはお即つて御病氣は夢るから上。此の上もない

(四)女一人―寝覚上の事だらうと内大臣の女一宮の御方を呪つてゐる事だらうと内大臣の女一宮の御方を呪つてゐる事だらうと内大臣の女一宮の御方を呪つてゐる

り給ひて、絶え入りがちにおはしますを、大臣のかゝる折とても一つにもあらず、紛れがちに心空なる様なるを、妬しと后思し召して大皇宮「己もいと弱うくづをれにたり。さべき仲こそかゝる折は頼もしかなれ。此の頃ばかりだにもて狂され給はで、扱ひ聞え給へ。憎くすさまじくは思ひ聞え給ふとも、院の上の聞し召さむ所は思すまじくやは。それは何時も〳〵見なぐさびづさひぬべき人、宮は生き止まり給はん事も難かめり。此の頃ばかりだに念じて見奉り給へ」と、果は譲りて、召し据ゑぬれば、いとことわりにて、えも立ち退き給はず。御髪はこちたく清らにて、九尺許りおはしますを、結いて打ちやられたり。もとも氣高くをかしげにおはします人の、いたく弱りくづをれ給へるは、かくてこそなか〳〵あはれげにおはしましけれど、見奉るに、をかしう愛しき方はおろかならず見奉り給ふに、日を經て御物怪も様々亂れ出づる中に、故上の御氣配と覺ゆる物の立ち交るはことわり、今はの際までいみじう心置き、此の宮により恨みを止めてしかば、さもあらんと思すだに、いとあはれに聞き苦しう思さるゝに、又北殿の御生霊恐ろしげなる名告りする物出で來て、生霊「あはれ今はかくてあるべき物と思ひ頼むに、あながちに忍びつゝわざともて出で給はぬが妬う、かしこき筋と云ひながら、内の御事の淺ましう打ちすさびて、

(一)后―大皇宮。
(二)さべき仲―夫婦の仲。
(三)狂ほされ―寝覺上に心を迷はされないで、女一宮の看護を。
(四)憎く―女一宮を憎く。
(五)院の上―朱雀院。
(六)見なぐさび―一本の「見なづさひ」を取る。寝覺上にはいつでも一緒になる事が出來るが、女一宮は生きながらへる事も難しい重病なのです。
(七)御髪は―女一宮の髪。
(八)もとも―もとよりも。
(九)故上―寝覺上の姉君。一二卷の大君。内大臣の最初の北の方。
(一〇)今はの際まで―死に際まで非常に心づかひをして、この女一宮を大變怨んで死んだので。故上即ち大君存命中から、大皇宮や朱雀院の御懇請により内大臣は女一宮に通ふ様になつた。大君は嫉妬の爲死んだのだつた。
(一一)北殿―寝覺上の。
(一二)今はかくてあるべき―今は自分と内大臣とは公然と夫婦になれるものと。
(一三)忍びつつ―無暗に内大臣は、私との關係を秘密にして、殊更に、私との仲を世間に公表しないのが癪に觸るので。下の「あくがれにし魂の來たる」にかゝる。
(一四)もて出で給はぬが―一本に「もていき給はぬが」とある。
(一五)かしこき筋と云ひながら―例へ畏れ多い帝と云ひ乍ら、帝がおさましく無暴な事をなさある。

れて。一本に「うちすさびて」の變りに、「うちすまひて」とある。

琴など教へ立て參らず、今はいと後安くとて、雅子がさばかり召し籠められて、片時暇賜はらぬも、怪しきわざかな。苦しくや覺ゆらん。督の君の御方にさてあり、中宮さておはしませば、後安けれど、苦しうや思ふらんと思ふこそらうたけれ。若やかにおはせん親は持たるまじき物なりや。學問などよくせさせて、物思ひ知りなんにこそ、交らはせむと思ひつれ」などいとのどやかに、打休み給ふを、人目如何とかたはら痛く、女君は思せど、立ち離れだちぬる時は自らありや、見だに馴れぬれば、立ち離るべき心地もせず、いとゞ日高くなるまで、御殿籠り過ぐいたり。人目怪しからむかしと打驚かれて、からうじて起き給ひても、出でやらず、萬に聞え置き給ひて、出で給ひぬれば、紛るゝ事なきまゝに、諸共に添ひ臥し給ひて、昔の事どもなど聞え出で給はん、なか〳〵なるべければ、雛の事繪物語のをかしきなど、いと若やかに聞え出で給ふを、姫君は親とも覺え給はず、たゞいみじき遊び敵に逢ひぬる心地し給ひて、嬉しくいみじく思し喜びたる樣ぞいとあはれなる。たゞ一二年許りが隔てある姉妹のやうに見え給ふを、御前に侍ふ人々はあはれにをかしく見奉る。かく明暮語らひ遊びつゝ、盡きせぬ心の中もこよなく慰み紛れ、寢覺めの夜長さも過ぎにし方のやうに、繪書き雛遊びし手習ひなどして、さそひ暮らし明かい給ふより外の事は、皆紛れ給ふ御心の中なるを、宮は絶え入り給ひたりし後、いと重くな

(一)教へ立て參らず―「教へ奉らず」の誤寫か。
(二)自らありや―男が女の側を離れるべき時機に離れてしまつた時には自然にそれでも我慢出來たが、此のやうに二人の間が馴染んでしまつては、到底側を離れるやうな氣持がするものではない。
(三)もろともに―寢覺上と大姫君
(四)姫君には―大姫君は、寢覺上を實際の母などとは思はれず。
(五)たゞ一二年許りが―二人は親子のやうではなく、ほんの一二歳違ひの姉妹のやう。
(六)たゞ一二年許り―一本の「遊び暮らし」を取る。

(一)いかでかさはあらんー女一宮と離婚をするなどとは、どうして出來ようかとも貴方が思ふならば、決して寢覺上の北殿には立ち寄らないで下さい又お子様はこの宮にお迎へたらい良いでせう。

(二)すが〳〵と—愛想なく。

(三)云ひ續け—二四四頁六行の「させ給ふを云々」に續く。

(四)心安くはかくて—此のやうにゆつくりと貴女の側に居る事も出來ないのです。

(五)小姫君—前出。尚侍の妹。故關白の遺子。

(六)例ならぬ人—大姫君が參つた事を指す。

(七)これは—此の大姫君は。

(八)しばし小姫君と—大姫君に對する言葉。

(九)御添ひ—「さそひ」を訓る。寢覺上が誘つて。

(一〇)如何見給ふ—大姫君がどう御覽になりましたか。

(一一)内の御文に—帝の御文などには。

(一二)つつみ隱さん—私との戀仲は包み隱さず様によく心がけて。

(一三)琴—大姫君に琴を。

(一四)この御事—此の大姫君の世話をするといふ事より。

(一)如何でかさはあらんと思さば、彼所へな立ち寄り給ひそ。幼き人は此所にも迎へ給へかし」と、すが〳〵と云ひ續け。ならずもて紛らはしくイて、寢覺上「昨夜淺ましう承りしは如何やうにか。大宮に聞えさせんも苦しう、さりとて音なひ參らぬも如何と、萬に亂れ侍りてこそ」と宣ふ。内大臣「物怪の仕業なりければ、歸り侍りて、暫しありて、例様にはなり給ひたれど、なほいと賴もしげなくなん難かしう侍りや。心安くはかくて」と、打嘆きて、内大臣「いづら小姫君は」と聞え給へば、蘇芳の織物の御衣、青朽葉の小袿着給ひて、御髮はゆらゆらとして、肩の程にて、いと貴に薫りをかしげなる御顏つき、例ならぬ人おはしけりと、打恥らひて、上の御蔭に居隱れ給ふを、内大臣「これは恥ぢ聞え給ふべき人にもおはしまさず」と聞え知らせ給ひて、内大臣「暫し小姫君と二人遊ばせ給へ。乳母少將など御前に參れ。帶解きなど寐る間なくて、亂り心地いみじく堪へ難く侍るを、暫し打休みためらひ侍らん」とて、御帳の東の方に、御几帳ども押し寄せて、御添ひ聞え給ひて、御裝束引解き給ひて、内大臣「如何見給ふ。怪しうはあらず生し立てゝ侍りな。戀ざめにはえ思されじと見るは如何は。(イ今)若々しく内の御文に心入れ給はで、なほ包み隱さんの御心よろしくて、琴教へ奉り給へ。いみじく此の御事より增す事なくは思ひながら、男子は限りある事繁き程に、いとゞはか〴〵しからぬ中に、御

心に、夢の様に見奉るは、おろかなる事なりやは。殿の添ひ居給ひたれば、物もえ聞え給はで、床に押し懸りて、たゞつくゞと打見守りて、いとゞしき匂ひに、泪のこぼれ添ふまゝに、打赤みたる御色合顔の氣色、よく咲きこぼれたる八重櫻の朝露に萎れたるを、霞の間より見渡す心地するを、萬の事打忘れてつくゞと打見守り給へば、扇をわざと。

内大臣「しか恨みをなす事更によも侍らじ物を、狂しき狐などが、名告りをし、かつらけ申し出でん事を、眞實とし給ふいと不便に、人聞き思ふらん事も返りてをこがましき事に候ふ」と申し給ふを、いとゝみじく妬く憎しと思し召いて、味氣ない狐の名告りや。異事をもさ言へかし。何の由緣も昔よりぞ。皆ある樣有りて聞えき。さすがに形の樣にても物し給ふを、必ず防がしう思きるらんと、さらでだに思さるゝ事なり。すべて己が世づいたる樣にて見奉らんと思ひ懸けらるがいと悔しきなり。異人には幾人も〳〵通ひ給へ。そは許し申さむ。此の人にはいみじき御心ざし限りなしと云ふとも、更になかけて行き通ひ給ひそ。かの人去り難う思されば、宮に更に人聞きばかりを思いて、絶えぬ樣にな繕ひ思しそ。院内聞し召さむ所あり。

(一)扇をわざと―寝覺上が扇をわざと。以下錯簡と思はれる。二一六頁三行の「ならずもて紛らはして」に續くものであらう。尙、帝國圖書館本にも錯簡なる由指摘してある。

(二)しか恨みをなす―二四〇頁二行「疎かに思ふべき人に侍られど」より續く。

(三)かつらけ―「且告げ」「かこつけ」等の誤寫ならん。

(四)こと事―もう外の事ならさうした嘘も云はれようが。

(五)何のゆかり―どんな因緣も昔の原因があつて生ずるのです。今度も皆原因があつて、あの一宮が物怪に取り憑かれてあゝした忌むべき事を云つたのです。皆貴方が寝覺上と關係してゐるから生じた事なのです。

(六)形の樣にても物し給ふを―この物怪い有樣に、世にありふれた通りで餘りひどくもないので。

(七)防がしう―寝覺上が自分の爲に辯護して貰ひたいと思つて居られるだらうと、たゞでさへ貴方は寝覺の上の爲めに氣付かつて居られる事です。

(八)己が世づいたる樣にて―私が人の戀路の邪魔をするやうに貴方に思はれるのが、懸けられる。に懸けられるとの誤寫か。

(九)こと人―寝覺上ならぬ外の女には。

(一〇)この人―寝覺上。

(一一)かの人去り難う―どうしても寝覺上と離れる事が出來ないならば、噂だけを恐れて女一宮に通ふ事の絶えない樣になどと、表面だけを繕ふ事はして下さい。

(一二)院内―朱雀院と帝。

へゆゝしきまでどよみたり。物覺えざりつる殿の御心地も、のどまりて、またいみじき御祈どもを重ねて念じ給ひても、なほ私心はさし進み、並びておはすらん樣、思し立たむ氣色ども、心にかゝりてゆかしう思さるれば、后の宮の添ひ給へれば、かしこまりて御邊近うも參り寄り給はねば、あからさまに立ち出で給ひて、打休み給ふ顏にて、這ひ渡り給ひたれば、御格子どもは參りたれど、まだ御帳の内に大殿籠りたりけるを、殿の御氣配に打驚き、今朝は宮の御有樣を如何にとも問ひ聞ゆべければ、起き上り床よりゐざり下り給ふにぞ、姫君も驚き給ひぬる。藤の濃き薄き御衣、青朽葉の御小袿を着給ひたる、花やかならぬ御衣のあはひなれど、着給ひたる人が ら、小高き岸より、えならぬ五葉に懸りて咲きこぼれたる朝ぼらけの藤を、折りて見る心地して、打引かれたる裾袖口まで、今から心にくく艶さたる氣色し給ひて、いささかいはけ、あふなき事交らず、良い大人のやうに、用意あくまでありて、御容貌のいみじう匂ひやかに、美しげなる樣は、唐撫子の咲ける盛りを見んよりもけなるに、御髮は筋も見えぬまで、艶々とこぼれかゝり、末は海松房と譬ふれば、いと情なきやうなり。絲を撚り懸けて、末を押し切りて結び付けたらんやうに、なよ〳〵と懸りたる程など、繪に書かまほしきを、知らぬ人と見んだにいみじうめでたうあはれなりぬべき御樣なるを、まいて年月を經て、如何ならん世にとのみ思し渡る御

(一)ならびておはすらん樣―寢覺上と大姫君とが並んで。
(二)后の宮の―大皇宮が女一宮に附き添うてゐるので、内大臣は寄り附かない。
(三)這ひ渡り―寢覺上の居る北殿に。
(四)問ひ聞ゆべければ―寢覺上は女一宮の御病氣が如何であるかとも、内大臣に聞くべきであるので。
(五)人柄―着る人柄か人柄だけに
(六)けなるに―すぐれてゐるのに

(一)さりともこれに―「これに」はこの大姫君によりての意味。
(二)後にさは―勿論の事です。後程その事（自分の心が慰められる事）は覺る事が出來ませう。
(三)答へ出で給へる―寢覺上に大姫君の答へる有樣は。

(四)さまざまに―あなたの事が心配な譯ではないが、色々と心が思ひ亂れる。
(五)御物怪の―御物怪が女一宮に取り憑いて惱まさなくなつたので。

堪へず押し宛て給へる袖の雫の、いと所狹きを、殿「今はかく並べて見奉るべきぞかし」と仰せられ、喜び泣きもえ止め給はず。御前に侍ふ命婦の乳母、少將小輩なども嬉しくあはれに、樣々に思ひ出づる事の多かる心の中ども、時ならず時雨る袖の氣色も、いとしほどけくなり、さし並べたる御樣ども、めでたさ、萬も紛れて、いみじき事ありとも、立ち離れ給ふべき心地もせぬに、使者「宮只今絕え入らせ給へり」とて人參りたり。聞き給へる人もいとあへなく、あな淺ましと、心の驚かるゝに、殿はましていと慌だしき氣色ながら、内大臣「(一)さりともこれに御心慰め給ひてんな。如何」と宣ふを、寢覺上「更なる事は、後にさはとぞ」と答へてぞ立ち給ひぬる後に、なべての世のあはれにつけても、あないみじ、如何にと思ふ〳〵今ぞ物聞え給ふ。答へ出で給へる御氣配言の葉いきゝかいはけたる事なく、目安くおはするを、あはれにめでたく嬉しく見奉り給ひて、夜いたく更けぬれば、眠たく思さるらんとて、諸共に御帳の内に入り給ひて、打交し大殿籠りぬるも、現とは思されぬに、とばかり有りてぞ内大臣女「只今なん生き出で給へる。いと心慌だしくて、見捨て奉りぬるも後めたきにはあらで、樣々に」とぞ書き給ひたる、さ許りの事の紛れにも、かく書かれ給ひつらん、淺くはイナシ思ひ捨て難ければ、硯召して、寢覺上「いかにと思ひ參らせつるに、嬉しく」と許り書きて出だし給ひつ。御物怪の取り入れ參らせざィまりければ、喜び泣きさ

く、女共の上ども思ひ捨てゝ、たゞ一つなりし習ひの心に、打思ひし絶えんも心苦しう佗びしけれど、かゝる程はた如何せん。心慰めに、忍びて吉き日を見給ひて、夜打更けて、あからさまに立ち出で給ふやうにて、我が御車姫君命婦の乳母までは、親しう侍ふ人々三四人、此所にはィナシおはします様にて、いみじう忍びて渡い奉らせ給ふ。何時も必ずうけばりもて出づべき物とは思し寄らぬ有様なるに、ことわりなる御暇の無さを、恨めしうなども思ひ寄らぬ事ながら、殿の推し量り思しつるに違はず、襲覺上「あいなの身の有様や。何時もたゞかくぞかし。まして今はと打解け頼み果てゝは、如何許りなべき心の亂れにか。いィむならんついでに、なだらかなる様にて、籠り居にしがな」とは、寢覺の夜な〳〵思し明かさぬにしもあらぬに、今宵ぞ萬忘られて打忍び、さる御用意さりげなく、淺からで待ち聞え給ふに、人寢靜まり際に渡り給ひたり。新中納言ぞ今宵も立ち添ひ仕り給ひて、渡し聞え給ひし折々の事、只今の心地して、夢のやうにあはれに思し續くる。御殿油よき程にて、見奉り給へば、扇さし隱して、様ようゐざり下り給へるを、石山にて、いみじうあるかなきかなりし程の、單衣に包み臥せられ給へりしを打見遣りしを思し出づるに、かくまた廻り逢ひ奉るべき物とは思はざりつる年頃の心の中思し出づるにぞ、何の歎かしさも覺めて夢の心地するに、殿も居給へれば、いと愼しうて、聞え出で給ふ事もなく、たゞえ

(一)うち思ひ、思ひたえんも―「うち思ひしたえんも」の誤か。寢覺上が内大臣の事を諦めてゐるのも思ひたれしくもあるが、かうした女一宮の病氣の時でもあるので、どうにも出來ない。併上の心慰めの爲に。

(二)立ち出で給ふやう―女一宮の許を。

(三)姫君―「大姫君。

(四)までは―「または」の誤か。

(五)此處―「おはします様にて」この内大臣邸に今迄通り居るとして。

(六)渡い奉らせ―大姫君を寢覺上の居られる故陽内邸に。

(七)うけばり―寢覺上はいつでも内大臣の云ふ事を背いて、そ云ふ通りにし事をしてくれるとは思ひも寄らない有様であるとのので。

(八)御暇のなさ―女一宮の處許もりになかつて寢覺上の許に來る事に上は少しも恨めし對して、寢覺暇しい等とは思ひも寄らぬ事であるものの。

(九)違はず―「思し明かさぬにしもあらぬ」の下の「思し明かさぬにかゝる。

(一〇)心の亂れにか―どんなにつらい思ひをしなければならない事だらう。

(一一)籠り居にしがな―參籠をしたいものだ。「籠り居にしが、などは」とも解せらる。

(一)思ひ溜めてん事は―あれほど寝覺上の事を深く思ひ込んでゐるのであるから、どんなに云つた處で甲斐はあるまい。「溜め」或は「嬌め」か。

(二)内の上なむ―帝が寝覺上に云ひよられたれども、寝覺上はその一夜だけで。

(三)給ひにてる―「給ひにける」をとる。

(四)帥の君―大皇宮方の女房。

(五)云ふ人の心―さうした噂を、云ひ觸らして歩く帥の君の心

(六)何の思ひさます―そんな噂を聞いたからとて、それが寝覺上を思ふ心をさます原因となるか。

(七)事なくおはしますは時こそ―何も變つた事のない時こそ内大臣は心が浮かれさせ盡きせず寝覺上を思慕し、又は全部心を取り戻して寝覺上にかけてゐるけれども、この樣な宮の御病氣といふ場合にはどうしても居られようか。

(八)しつめ―「沈め」か、「爲詰め」か。

(九)わが御心にも―内大臣自身の心にも、女一宮のみまかるといふ事を。

(一〇)心のままなる―思ひの儘に寝覺上の許に通ふ事も出來ないので、寝覺上は氣掛りである。

(一一)打靡き―内大臣に靡きそ「悔しさを」は、下の「うち思ひ」にかかる。

(一二)またわくかたなく―故關白は自分の女子共の身の上を背思ひ捨てて、寝覺主以外には誰

澄んだる氣色、言少なくてのみ參り給へば、言ふとも〳〵、さ許り思ひ溜めてん事は、甲斐あんべうもあらぬまゝに、帥の君「内の上なむ、さおはしましけれど、一夜ばかりにて、身を恨みて罷出給ひにてゐる」と云ふ事を、帥の君人毎に云ひ散らし、大臣にも洩り聞かせ奉れど、我が御心に隈なう知り給へる事にて、なほ云ふ人の心見えて、うたてとのみこそ思さるれ、何の思ひ覺ます節とかはならん。女君も洩り聞き給ひて、さればよ、昔より憂く淡つけき名をのみ立つ身の契の心憂くもあるかなと思ししめど、さりとては如何はせん、いとゞ物愼しうのみ忍び勝りて、恨みられ給ふに、四月一日の程より宮いといみじう患はせ給ひて、日頃過ぎ行けば、大皇の宮も渡らせ給ひつゝ、見奉らせ給ふ樣のおろかならぬも、方々いと限りなきに、内の大殿も、事なくおはしますす時こそ、心を空にあくがらして、盡きせぬ思ひ一つ心の限りをも、もてしつめ給ひても、かうおはしますす折さへは如何でかは、大方の人目のみにもあらず、我が御心にも、空しうならせ給はんを見奉らん嘆きも、なのめなるべうもあらず、我が御心にも樣々御祈りや何やと心の隙なく、つと添ひ侍ひ給ひて、心のまゝなる御紛れもし給はぬ片つ方の覺束なさもわりなく、さりげなくて、さればよあやなかりける心の亂れ(一二)の紛れに、打靡き寄りたりける悔しさを、また分く方なにも心を分けず、一つ心にも

つびあつてゐた。さうした事

に關れてゐた寝覺上の心に。

き有様もや御覽せん。學問の方も笛も、いみじく整へ果てゝこそ世にも交ろはせめ。暫しなほ引き籠めていたく御目馴らさずもがな」と思せど、あながちによそへ睦びさせ給ふ氣色を、せめてこれをさへ出だし立てず取り籠めむも、身を抓めば心苦しく忝くて、御裝束匂ひなど、いみじう整へもてなしつゝ、大貳の北の方も內裏に侍へば、その後見おろかなべくもあらねば、後安くて、御氣色のまゝに、かの君ばかりは、許しさり合はせ給へ、我が御中にはなほ心安くもあらず、女君の返すゞ〳〵、入道殿の御許し無うては、萬よりも如何でとのみ、あながちにつゝみ給ひつゝ、いと著るかるまじくとのみ、もて隱い給ふにしも、男君はいと飽かず中々なる思ひ增さり、わりなく靜心なくのみ、あくがれ漂ひ給へる御氣色を、如何でかさのみ人の見知らずはあらん。雨よりけに隙なくて、北殿に〳〵とのみ、這ひ渡り給ふも、さればよとのみ氣色取りつゝ、萬の事よりも、こはいとなだらかなる御邊に、目覺ましかりぬべき人かなと、宮の內嘆かしう思ふに、大皇の宮も聞し召して、如何でかはよろしう思し召されん。我がさばかり樣々言ひ思ふ氣色を、かの大臣に深う心をしめ交いて、露も打靡かず懸け離れ果てゝ、一つ心になりにたる心の、いと妬う佗びしう、異人の數多並び聞えさせんよりも、これはすぐれて、如何樣にもせむと御心も治めあへさせ給ふまじう思さるれど、如何はせさせ給はん。大臣とてもいと恥かしげに思ひ

(一)よそへ　睦びさせ給ふ氣色―帝は雅子君を寢覺上に親しなれて寢覺の御樣にはずらへ強ひて寢覺上のみなら子なのに、この雅子君迄も延に出さず殿の取り君上に能くめくめてのに、我が身の君上りは―大貳の北の方の心を許し、かばかりは―大貳の北の方だけはこの內大臣と倚侍、雅子君のし而倒かつて、互に見てさり合せは、ゆるしより合はせ給へ。

(二)我が御仲には―內大臣と寢覺上との御仲には。

(三)我が御仲の誤か。

(四)萬よりも―外のどの事よりもこの內大臣に靡くといふ事は。

(五)男君―內大臣。

(六)北殿―故關白殿の北殿。寢覺上の居る殿。

(七)なだらかなる―この平穩なるべき女一宮の所で。

(八)我がさばかり―自分があれほど常に靡かせよう等と色々考へたにもう關らず、寢覺ひ且あの內大臣に深く心を結かずは上はあして、少しも帝に靡かず交して、

(九)こと人の―寢覺上ならぬ他の澤山の女を愛するよりも。

(一〇)いかさまにもせむ―どんなひどい仕打をしてやらうかと。

(一)御方に見所ある御方として。尚侍の居る登華殿を
(二)我が言出ださせ給ひし—尚侍殿の参内については、中宮御自身先に立つて取り図られた事であるからして。
(三)権大納言—新中納言—共に寝覚上の兄。
(四)大貳—大貳北の方。一二巻の前の君。
(五)人柄—尚侍殿の人品。
(六)あまさにはあらぬ—一本の「浅さにはあらぬ」を取る。
(七)釣舟の便—寝覚上の動静を、この尚侍によつて知る事が出来るを云ふ。後撰集雜四「波にのみぬれつるものを吹く風に便うれしき夫の釣舟」等に據る。
(八)忍びの御文の中に籠めさせ—常より寝覚上への御文を、尚侍の御文の中に入れるにつけても。
(九)よく通へる—寝覚上とよく似通へる。
(一〇)中君の御方にては—中宮の御方には、流石にたとへ雅子君を御寵愛になつても、御思ひの儘にこの雅子君を御側に召さないが。
(一一)ありよくて—居良くて。
(一二)母君—寝覚上。
(一三)人目もあまりなるべき—人目もあまり見苦しい程憎まれく寝覚上の戀しい様な時々は。
(一四)心安く—「心安くあらん」等とあるべき處。
(一五)あふなき—敢ふなき、云ふかひなし。或は「魂なき」か。「危なき」か。

どの、今めかしく見所ある御方に、皆心を寄せて、細殿の隙なく立ち迷ひ、内の大殿はたいと思ひはぐくみ聞えさせ給ふ。我が言出ださせ給ひし事なれば、中宮の御心寄せおろかならず。新大納言権大納言四字イナシ新中納言などいと眞心に思ひ後見聞え給ふ。大貳いとしたゝかなる御後見にてありなどすれば、中々親立ち添ひ御子達おはする御方々よりも、いと花やかにもてなされて、人あなづるべうもあらず。上も、人からのいと貴に若くらうたげなるも憎からず、珍しき御思ひもあえぎきにはあらぬ、御心にしめたる釣船の便とさへ心を止めさせ給ひて、忍びの御文の中に籠めさせ給ふとても、常に渡らせ給ひなどして、雅子君のいとよく通へる容態氣配の美しさを思し召しよそへさせ給ふ方にても、中宮の御方にては、さすがさは云へど、思すまゝに、此の君をもえ近く語らはせ給はず、あなづらはしく心安き督の君の御方にてはありよくて、母君罷出給ひにし後は、片時も出ださせ給はず召し纏はして、我が御方にては人目も餘りなるべき時々は、ただ此の御方にて御覽じよそへさせ給ふに、承香殿の御方の女三宮を美しう思ひ聞えさせ給ふにも、いたう劣らず、らうたき者に、此の御方にては、御覽じ馴れなどする程、督の君の御覺えをなほ優れたりと人も思ひ云ひ、御方々も如何でかは心安く。

内の大臣殿は、雅子君のかくのみ召し籠められたるを、内大臣幼き程は自らあふな

羨みの童げたるを、をこがましく見奉らせ給ふ。かくて後はイそ宮の御恨み少し直りにたれば、心安く思されて、我が御心の中醒むべき世なく苦しきに思しかね、式部卿宮の女御、人よりはらうたく思し初めてしを、見ばや慰むと、心地の例ならぬを、わざとなど度々聞えさせ給へば、參り給ひたり。數多侍ひ給ふ中の、容貌はこれこそと思し召されつるを御覽ずれば、いとよき程に犂やかにたをやかに、物より拔け出でたる樣し給ひて、いと花やかに清げなれど、火影にはすべてなぞらへに云ひよるべきにあらずと、御覽じ比べても、先づ打泣かれさせ給ひぬ。

右大殿の女御梅壺と申す御腹に女一宮、女二宮二所おはします。此の御方に女三宮いとすぐれて美しう、生ひ出でさせ給ふを、さる時の人の御腹にもおはしまさねど、宮をさる並びなき者に思ひ聞えさせ給ふにも、心苦しくあはイナシれに濃かなる御思ひさし添ひて、いみじく思ひかしづき聞えさせ給ふも、ことわりなる御生先にぞおはしましける。中宮をば更にも申さず、そのつれ〴〵とて、とてもかうえさらぬ筋にて、親立ち添ひ給へる中に、尙侍はあはれに心細かりぬべき御有樣にて、立ち馴れ給ふ程もなくいとほしかりぬべけれど、繼母の上の思ひ到り深くかしづき、御心に入れて、身こそかく御垣の外に懸け離れ給ひしかど、細かに云ひて、數多の御目移しに、立ち並ぶべうも、萬なべてならず思ひ扱ひ給へる樣の、なのめならず、殿上人な

(一)式部卿宮の女御―朱雀院御弟式部卿宮の女。宰相中將の御妹。式部卿宮女御又は承香殿女御

(二)火影には―火影に見し寢覺上には。

(三)この御方―式部卿宮の御方。

(四)時の人―ときめく人、即帝に特に御寵愛のある女御の御腹にでないのに。女三宮の御母たる式部卿宮女御は、それほど御寵愛も受けないのに。御思ひ―式部卿宮女御に對する帝の御志。

(五)御生先―女三宮の生先。

(六)中宮をばさらにも申さずそのつれ〴〵とて―「つれ〴〵」は「とて」は衍字か。「火々」の誤か。中宮は云ふ迄もなく、その次々の女御達でも皆此の承香殿女御の樣に無視に出來ない例方面に帝との關係を持ち（又は持つ樣に）、親皇女たる立ち添つて力強い後見をしてゐるのに。

(七)繼母の上―寢覺の上。

(八)御垣の外―宮中外に。

(一)かばかりつらき人は！—これほどつれない寝覚上の様な人は云ふ甲斐もない話になら物の考へ方も普通とは違ひ、ものの、それとは違ひこの中宮の御心に。

(二)昔よりゆかしと—寝覚上は私が以前からゆかしく思ひ込んで、

(三)ほのめかし寄りしに—私の寝覚上のみ思ふ心なそれとなく示し た處、寝覚上は全く意外と

(四)さればよ—矢張自分の思つた通りだつたと。

(五)さやはあるべき—あんなに寝覚上がすげなくすべきだらうか。

(六)打ちこぼさせ—御泣きになる

せられ給ひて、ありしやうに互うらなくも思し召され絶えィ立ぬも、さすがにいと苦しく、かばかりつらき人は思ふ方異に、云ふ甲斐あべうもあらぬものから、此の御心に思し恨みらるゝもあいなしと、思しなられつゝ、渡らせ給ひて、のどやかなる御物語のついでに、帝「昔よりゆかしと思ひし人なるを、かゝる折だに如何でと思ひて、大皇宮に聞えさせしかば、渡いて曝イ奏して見せさせ給へりしに、すべていと思ひの外なりと思ひ染み、懸け離れて、内の大臣一心になりて、取りも敢へず、罷出にし」など詳しく語り出でさせ給ひて、帝「いみじく妬く覺ゆるを、如何で此の本意叶へてしがなとこそ思へ」と語らひ聞え給へば、中将「さればよとをかしく思されて、中宮「登花殿に自参る折もあらんを、督の君に語らはせ給へかし」と聞え給へば、帝「今はよに参らじ。如何ばかりゆゝしく恐ろしと思ひ染みたりしかば。實に思ひも懸けずゆくりなき程と言ひながら、五「さやはあるべき。限りなく目覺ましかりける人よ」とて、宮の御覽ずる所も、をこがましとつゝませ給へど、打ちこぼさせ給へるを、いといとほしと見奉らせ給ひて、中宮「さても如何に侍りけるにか」と聞えさせ給へば、帝「すべて云ひ盡くすべくもあらぬ人なりけり。たゞ邊ち匂ひ満ち給ひ、李イ玉、光り赫くなどは、かゝるを云ふなりけりとぞ見えし。たゞ人なれどめでたしや内の大臣は。かゝる女に、いみじく思ひ靡かされたるよ」と宣はする御物

(一)御覽じ生―立てよと―大姫君を養育して下さいと、私が貴女に申しあげたに不拘。

(二)云ひ初めてし事なれば―云ひ初めた事であるから又云ひますが。

(三)見給ひすてじ―「すてじ」をとる。

(四)心も空に―寝覺上は心も空に大姫君の以前の樣子が。

(五)如何に年頃を過ぐいつらん―大姫君を見ないでよくまあ年頃を過す事が出來たものだと。

(六)いとみしときはいり―一本に「いとみじと消え入り」とある。

(七)かの人―寝覺上。

(八)宮―中宮。

ば、日次いでよろしくてこそは。さても如何で御身を無きにない給ひても、(一)御覽じ生し立てよと聞えしに、せめて振り離れし月頃の御心強さぞ憂きや」と云ひ出で給ふを、わりなく思いたり。思ひ寄らぬ事なく、萬を云ひ置き、少將を召して　内大臣　女房誰々か侍ふ。御前に人數多侍へ。新中納言など、宿直にはなど侍はれぬ」など宣ひて、御殿油參る程に、からうじて出で給ふ。内大臣「禍々しけれど、云ひ初めて(二)し事なれば。幼き者の例ならで惑はし侍るが心苦しさに、え見給ひ捨てじィで」などさりげなく云ひなし給へど、心(四)も空に、ありつる樣、答へ給ひつ二字イへる事ども、目に見え耳につきて、只今も如何にとのみ忍ばるべうも覺えぬにつけてぞ、(五)如何に年頃を過ぐいつらんと、我が心ながら淺ましくぞ思さるゝや。

内の上は、か許り書き盡くさせ給ふ御返さへ跡絶え果て、珍かに、餘り憂き人の心ばへかな。内の大臣は一つ心に取りもあへず、急ぎ出でにし妬さなど、類無くのみ思し召さるゝに、それにも堰かれず、さやかなりし火影の、いと見し時は入り惑ひし氣配有樣、はた二字イ片時の程も、御心に離れさせ給はで、如何にしてありしばかりも、(七)かの人に行き逢ひ見るやうもがなとのみ、ことぐゝは御心にも留まらぬまで嘆かしう思し召し沈むめるを、人はたゞ御心地の例ならずおはしますとのみ見奉るを、宮は(八)御心の中にイナシ恨めしく思さるれば、殊に上りなどもし給はず、我も心々なる心地のみ

と書きて見せ奉り給へば、

(一)えぞ知らぬ―私に憂世を始めて知らせた貴方でなくて、他の人に私の心が通ふとは、譯が分りませんね。

(二)なほしばし―矢張しばしの間は今迄通りにして下さい。

(三)心のまゝならん事は―心のまゝに無理なことをするのに、色慾慮しなければならない事情もあるので。

(四)うらなく―一本の「空なく」の方よし。

(五)おほけなき思ひ―貴女が手に入れようとする樣な身分不相應な考の、中々なくなりさうの所には寢覺上の外に、雲居雁の許に、故關白の遺女寢覺上が居る。それ故、中將は上大納言の宰相中將の許に、宰相中將が通ふから、「傍に置きて」と云ふのである。

(六)隈なき心―好色の方面に於てはぬかりのない心。

(七)姫君―石山にて生れし姫君。以下この姫君、故關白の遺女寢覺上の繼姫君、の姫君を大小姫君と便宜上呼ぶ。

(八)思ひ絶えたりつる―内大臣とは絶縁して了つてゐた年頃よりも、姫君がゆかしく思はれて。

(九)御文の氣色―卷三の「引き添ふる袖見ても尚思ふかな同し尾上に生ひぬ契を」を指す。

(一〇)心の闇に惑ふと―後撰集雜下―人の親の心は闇にあらねども、子を思ふまどひに惑ひぬるかな」

(一一)さは思ひよらぬ―内大臣殿方

(一)えぞ知らぬ憂き世知らせし君ならでまたは心の通ふらんゆゑ

遠くても近くても、無氣のあはれを添ふる氣色、身に染み增さり給ふまゝに、恨みもやらず、語らひ續い給ふ御あはひ、千歲を經ても飽く世あべくもあらず。(二)「なほ暫し例ならぬ樣ならでこそ」と、眞實に苦しと思し入り給へば、内大臣「などかく世づかぬ御心にか」と恨みながらも、また我も今始めぬ事と云ひながらも、何時しか心のまゝならん事は樣々憚りなきならねば、暮れ行くに出で給はんうきならく、事しも遙かならん別れめいて、えも出で遣り給はず。内大臣かくのみ厭ひ離れ給ひては、一人はいかでか明かし給はん。さ許りおほけなき思ひ絶ゆべくもあらぬ宰相中將を傍に置きて、兄弟とも言はじ。大納言も思ふまゝに、隈なきく心ある人なり。かかる人々を左右に置き給ひて、我はかすかに夜を明かい給はんこそ後めたけれ。いと忍びて姫君の許に渡り給へ」と聞え給へば、思ひ絶えたりつる年頃よりも、いとゆかしく覺え心苦しげなる御文の氣色も、いとのどめ難く覺ゆれど、心の闇に惑ふと言ひながら、ゆくりなくさは思ひ寄らぬ事なれば、忍びやかに紛らはいて。(二)此方渡い奉らばや」といたうなほ恥らひながら、いと心苦しく思いたれば、内大臣さらに居る大姫君の許に渡るなど

とは、思ひも寄らぬ事である

から。

淡つけう思し寄る、ことわりなりや。惡しう習はい奉りし我が御習ひぞや。（ィかく云はれ奉るにも、身より外につらき物こそなけれ。か許り云ふ甲斐なく物思ひ知らぬ心にも、などて心憂かりし忍振摺にかはありけん。それをあはれと思し知る人も無かりける物を」と宣ひて、忍び難げなる氣色のいみじさに、げにことわりなりやと、返す〴〵百返り怠りを云ひ盡くいても、いとかう見るまゝに、いよ〳〵珍しう類無き心地のみ勝るまゝに、安からず後めたきなりけり。かくのみ安げなく、恨み交い給ふ程に、御返いと久しくなりぬ。いとかしこしと唆かし立てられて、少し起き上りて、白き唐の色紙に、萬はたゞ押し籠めて、年頃の習ひ、殘りなき程の覺束なさィさ少し打書きて、

寢覺上「假の間の暫しの程と思ふだにいかばかりかは袖の濡れける

罷出させ給はむ事、只今すゞろには、いかでかは」と書きゝ果て給はぬに、取りて見給ふに、はィっねに召さィめなれたるとも覺えず珍しくめでたきを、督の君のと見較べ給ひて、内大臣「さて上の御返は。それをこそ先づ」とて、今少し押し磨りつゝ、唆かし給へば、うたてもとて背き給ふ、いと美しきを、見る甲斐ありて、かつは夢の心地し給ひて、濡らし給へる筆のついでに、

内大臣「百敷を氣色は霞み隔つれど心の中は通はざらめや

(一)忍ぶ振摺―古今集「陸奥のしのぶもぢずり誰故に亂れむと思ふ我ならなくにによる。貴方の爲めに思ひ亂れてゐるのに。

(二)思し知る人―内大臣をさす。

(三)おこたり―怠くいても―自分が惡かつたと寢覺上にお侘びを云ふ。

(四)萬はたゞ押し籠めて―萬事は言外に含めて、長い間の宮中生活をも全く捨てゝ、宮中を退出したなどと細く思はれると云ふやうな事を少し書いてい。

(五)假の間の暫しの程―尚侍にあてた歌。思つてさへ一寸の間の別れであるとどんなに涙の流れた事か。

(六)罷出させ給はむ事―貴女が宮中を御退出になる事。

(七)取りて見給ふ―内大臣が寢覺上の文を取りあげて。

(八)はれにめされたる―一本の「常に日馴れたる」をとる。

(九)押し磨り―硯の墨を磨り乍ら。

(一〇)百敷―宮中と此處とは大變離れてゐるけれど、心の中は通はざらめやうである。表面は帝と疎遠の事が、貴女の心は宮の帝の事を御思ひになつてゐるのだから、こんな歌でも書かれたら如何ですかと寢覺上にあてつけた歌。

れ仕うまつらばやと、我にて思ひ寄らじやは。まいていとかゝる御氣色を見知り思ひ靡かざらん人は、心なく口惜しくさへあべきを、今も昔に變る事なく、いと若やかにおほどかに、たを〳〵とあるもてなし氣色ぞ、いとあえかなれど、物を見知り思ひ分くまじうはあらぬ人にて、たゞ人の思ひ定めたる方あるに習はれてあらんよりは、數多が中に限り無く思し時めかされたらんを、いと后には及ぼずとも、それを此の世の思ひ出でにしてんをと思はぬやうはあらじを、たゞ尚侍さて侍ひ給ふその由緣に事寄せて侍ひつきたる、そのもどかれを始め、我が聞き思はん事もありと深く思ひ染み、かばかりの御氣色を心强う、さ許りもて離れしに、名殘無く我が蔭に立ち隱れて、逃れ出でたる心ばへ、いと有難く我が方樣のあはれは頓無く思ひ知らるゝ物から、かくてのみ逢はざらん程は、さりとも、打見て涙ぐまるゝ節々もありなんかし。故大殿の御時には、命も絶えつ許り思ひ入りながら、親兄弟に、えさらず、もてなされ從ひたると思ひしは、さても胸心安まる時も有りしにや。これは、世の聞耳の表面をもて離れて、心の中には、あはれとも忝しとも、身に染みて思ひ知り打眺めんこそ、世に佗びしく胸痛かべけれと、つく〴〵、と許り物も云はれず、思し續けて、あらましごとには涙をさへ こぼしつゝ、さぞ思すらんの推し量り事を、うちゐらみ宣ふに、面赤みて、苦しげに思いて、寢覺上「かうのみよからぬものに、

(一)今も昔に―然るに寢覺上だけは、今も昔若やかなる事なく大變おほに變る樣なほどこそ、たをやかなる取子なり、併し。

(二)ただ人の思ひ定めたる方ある樣に―私の妻のなる樣なる人にも、親つきとしたへ后しくさなれるよりも、たとへ倚侍の樣の位でなれる尚侍の中でも宮中に入り多くの女御御寵愛の中でも帝にくれ御寵愛の世の思ひ出にしたすぐに、これの世の思ひ出にしたのを、通のの人なら思はないわけと普通のに、寢覺上はさうしたは事はいの思はずに。

(三)もどかれ―非難。

(四)我が聞き思はん事も―内大臣の。

(五)かばかりの御氣色―あれほどの帝の御熱心。

(六)かくてのみ逢はざらん程は―かくて長のみ逢はざらん程は―ないで久し振りで逢ふ間なく樣には、寢覺上時には、涙の種でも私となる見て、色々なあはれな事共もあるだらうよ。

(七)世の聞耳の―世の評判の恐ろしさに、表面だけは寢覺上から離れて、心の中にのみ。

(八)あらまし事―これから先、どの樣になるのか知らとの豫測としては。

(九)うちゐらみ―一本の「怨み」をとる。

(一〇)良からぬ者に―私が惡い者に

(一)泣きみ―泣きみ笑ひみなどと云ふ意。

てのみ思ひ果つべき事にや。心憂くも思いたるかな」など泣きみとか云ふやうに、萬を語らひ盡くして、いとのどやかなるに、登花殿より御文あり。とみにもえ引き出でず、少將がィの氣色だつを聞き給ひて、内大臣「此方や」と召し寄せたれば、いと大きに包まれたり。引き解きて御覽ずれば 尙侍文「夜の程の覺束なさ、離れ奉りては、えあるまじきを、罷出なばや」など、心苦しげに細かにて、

尙侍「古へもかくやは物を思ひけんえも云ひ知らぬ心地こそすれ

(二)難かしげにのみ―大變不快に御思ひになつたから。

(三)宣はするを―貴女が御退出になつた事を。

いみじく、難かしげにのみ思し入らせ給ひて、出でさせ給ひにしかば、宣はするを、聞え侍るさへいとうるさけれど、今朝渡らせ給ひて、逃るべうもあらず言ひつけて、參らせよと侍れば」とて、上の御文の、中なるを見るより、胸潰るゝを、此の世彼の世をかけて恨み盡くさせ給ひつる樣、見る目も及ばぬまで、いみじく添げにて、

帝「絶えぬべき命のなほも惜しき哉人に負けじと思ふばかりに

(四)身をし絶えずば」と愁はしげに、(五)のろ〳〵しげにさへ書かせ給ひたる樣、(六)女にて、いとかゝる御氣色のいかでか見知られ、あはれならぬやうはあらん。(七)御容貌氣配いと氣高う艶き、心深う優におはします。御文の書樣、眞實はかばかり見所限り無う、添き言の葉盡くさせ給へる。人の御程上を極めさせ給ひたりとは世の常なりや。ただかゝる御氣色無からんにて、ほのかに見奉らん女の、少し心あらん、同じうは馴

(四)身をし絶えずば―萬葉集卷九「三諸の神の帶ばせる泊瀨河水脈し絶えずば我忘れめや」等による。「身をし」を「水脈」にかけた。

(五)のろ〳〵しげ―人をのろふやうな樣子で。

(六)女にて―女の身に取つては。

(七)御容貌―帝の御容姿。

(一)心の中を—自分の心中を。
(二)表面ばかり—かく云ふのは、言葉だけとも見えない。
(三)筋違ひてもと—計劃が齟齬した。
(四)隔てゝ—「隔てし」の誤か。
(五)すこしほのぼの氣色知らせ奉り—父入道殿に少しは事の様子を知らせてから、すつかり貴方に縋りたいと思ひます。
(六)もとより—元から貴方には近づくまいと思ふ心が私にあつたなら、たとへどんな事があらうとも、これほど殘なく打解け頼みて居られるでせうか。
(七)道の絆—さうした方面の束縛も。卽ち内大臣との間に生れた雅子君姫君等を指す。
(八)見えかゝらでも—たとへ貴方が私にもう逢ふまい、久かうも訪れても來まいと御思ひになつても、矢張り私は貴方を御慕ひするだらう。それほど淺間しいまで貴方を思つてゐる事は。
(九)しばし—しばらくの間は私の云ふ通りにして下さい。無理な事はしないで下さい。
(一〇)心やわらかに—貴女は、人をうまく操縱する事に馴れてゐますね。皮肉。
(一一)例もかくて—私がいつもこの様にして居らずに無暴な事をするのでしたら、貴女が昨夜私を逢ひもせずに歸したのも尤もな事だらうが。
(一二)けぢめ思ひ分く人も—一體無ろまれず、思ひ明かされつる一心の中を、いみじく恨めしげに、云ひつゝ居給へるも、表面ばかり飾るとも見えず、さりとて打解け果てん、憚り多く許いあべくもあらぬを、如何に成り果つべき身にかと、我もいと泪ぐましきに、氣色見たる人達なべければ、御前近くなどもあらず、のどやかにもてなしたるに、御方々のおはせぬ氣配もさすがしるければ、やをらすべり入り給ひぬるを、今は如何はもて離れん、なほ月頃立ち寄り給へるまゝに、さりげなくてと思ふ。

殿上人「大皇の宮の、思ひしには筋違ひてもと、聞し召さん御心を始め、入道殿のむげに隔てゝ心ともあるかなと思さむもいと慎しきを、少しほの〴〵氣色知らせ奉りなどしてこそ。もとよりもて離れ奉る心のあらまし時には、いみじくとも、いとかく殘りなく打解け頼み聞ゆる顏なべい事にやは。様々道の絆もえさり難くのみ侍れば、今はあながちに見え、かゝらでもありなんと思しなるとも、なほ慕ひ聞えぬべき心の程の淺ましきィさなどは、さりとも見知り給ふらんものを、たゞ暫し聞ゆるまゝにを」といと細かに、打語らひ給ふを、

内大臣「實にさる事なれど、今宵許りの覺束なさは、打付けに萬を顧みるべき心地もせず。いとよく人をこそすかし出でさせ給ひけれな。心やわらかに、はた習はし給へるぞかし。例もかくてあり暮らさずばこそあらめ。けぢめ思ひ分く人もあらじ。またさ

(一)人も—人間
(二)理をする人間か、しない人間かの區別の出來る人が居ない
(三)やうですね。
(一四)暴な事をする人間とばかり思つて了ふべきだらうか。

(一三)またさてのみ—また私を、無

(一)一つ方の疎ましく―帝の御執念があまり疎ましく。
(二)うち靡き―内大臣に靡き。
(三)ここにてさへ―里に歸つてさへも。

大殿渡らせ給ふとて、人起き騷ぐ。(一)一つ方の疎ましく、ゆゝしう覺えしにより、とく百敷を出でんよすがにこそ、名殘なく打靡き聞えしに、(二)此所にてさへ、いと障り所なく、さのみ待ちかけ聞えん事、后宮の、さばかり恐ろしかりし御計事の甲斐なく、思し騷がんもいと愼しく、うらもなく語らひつけられ聞えたりし程給へず二字イだに經ず、御構へをも逃ぐるやうにて打解け靡き寄らむ、我にてもよろしく思ふべき事にてもあらぬに、まして如何なる樣に、もてはふらかし云ひなさんと思さん、いとことわりに、むくつけく、我が心にも如何にぞや、心疾ましく恨めしき節なきやうにあべきにもあらぬを、いかでいときィさ人聞殘りなくはあらじと思ふ。また萬よりも入道殿などの「如何はせん、さてあるばかり」とある一言葉を聞きてこそ、如何にも〳〵我はと、もて離れ顏に、心を心とはいかで聞え奉らんと思すに、いとゞ苦しく難かしけれど、さばかり靡き寄りて、又引き返しあらためはしたなめむも、いと心得ずうたてあべし。萬に盡きせず打嘆かれて、ありしやうに母屋の御簾に几帳添へて、廂に入れ奉り給へるを、内大臣「けざやかや」と打微笑みて、さるやうこそはと思せば、御簾のもとに突い居給ひぬ。内大臣「聞えざらんも怪しく、聞えんも直面なる心地すべきを、(七)此所にて見苦しく、(八)思ひ亂れながらゐざり出で給ひたれば、思ひかね、(九)言託けて參りたりしを、いさゝか待つ御氣色もなく、省き捨てゝ返し給へるつらさ、その後やがてまど

(四)いかなるさまに―大皇宮等はどんなに自分の事を惡く云ひ觸らすだらうと思ふと、氣味惡く思はれるのも當然で、又(五)いとき人ぎき―「いとさ人ぎき」を取る。
(六)いかにも〳〵―どうしてもどうしても内大臣に靡く事は出來ないと。

(七)ここにて見苦しく―下の「はぶき捨てて云々」にかかる。
(八)思ひ亂れながら―貴女が宮中から思ひ亂れて御退出になつたのを見て、私も堪へ難く思つて。
(九)言託けて參りたりしを―女一宮にはうまい口實を作つて、わざ〳〵訪ねて來たのに。

(一)朝ぼらけ—拾遺百番歌合四番に、寝覺上の歌として、「かすみたつうきみ」とうき意は明瞭。「かすみ」の上から通はせた憂き身を霞と間違へ眺めながら、幾度春の花を見て來た事だらう。

寝覺上　朝ぼらけ憂き身霞に紛へつゝ幾度春の花を見つらむ

櫻の唐の御衣七八ばかりが上に、同じ綾の紅の映るばかりなるが、打ちたるに、見分かぬまで艶々とあるを着給ひて打眺め給ひつる、朝顔の花の木末も、霞のたたずまひも映らず、めでたうのみ見え給ふもいと、かばかり並びなく優れ給へる御有樣ながら、いと際限りなき程にはあらず、絶えず物嘆かしうのみ思したるを見れば、えいて憂き身はことわりなりやと、思ひ知られて泪ぐまれ給ひぬ。

宰相中將上　何時とだに憂き身は思ひ分れぬに見しに變らぬ春の曙

これは柳の御衣七八許りに、紅梅の固紋の織物を着給へる、さし並び給へる目移しこそ、あなこよなと見ゆれど、取り放ちて見んはいと貴に氣高く物清げなる御容貌もてなし用意、いとしつるづかに心にくき樣は、これしも優れ給へるを、上は哀れにあたらしく見奉らせ給ひつゝ、互に慰めつゝ、明け果てぬるに、對より「御宿直の御暇明かせ給ひてや」とて、御迎へに人奉らせ給ふ。我も渡殿の程にたゝずみ給ふ氣色なるに、寝覺上「げに怪しく心なしと思されつらん。渡らせ給ひて、君出で給ひなば、かやうにてを。督の君の打添ひ給へる名殘、つれ〴〵に心細う侍るを」と聞え給ふ。見るに物思ひ忘るゝ御有樣には、何時も〳〵たゞかくて添ひ聞えたらまほしきに、餘りあやにくだつやうなるいもと、かたはら痛きやうなれば、渡り給ひぬる程に、また內

(二)際限りなき程にはあらず—寝覺上は、此の上もない皇后の御位などにはなれないで。

(三)いつとだに—風葉集春上に、「寝覺の前關白中君」の歌としてある。前關白とは故關白の事である。

(四)さし並び給へる目移しこそ—寝覺上と一緒に並んで見較べると、隨分宰相中將上の容色は見劣りするけれども。

(五)しつるに—「靜かに」を取る。

(六)上—寝覺上。

(七)我も—宰相中將自身も

(八)かやうにてを—又こちらへゐらつしやい。

内大臣　年月を隔てゝだにもあるものを今夜をさへや嘆き明かさん

と艶かしく打ち嘯きて歸り給ふなるも、さすがに耳留まりて、其後やがてまどろまれず。宰相の御方も、この御消息の後より目覺めたる氣色なれば、隱れあべうもあらぬ事を、隔て顏ならんもうたてあれば、いと有る樣はとこそ（イとて）云はねど、大皇の宮の御かたイまへの恐ろしきなど、心得給ひけり三字イふばかり、ほのめかしつゝ、世を思はずなるものに、深う打嘆きつゝ語らひ給ふに、(一)いとさし過ぎてはあらぬものから、物にいとよう心得、云ふ甲斐あり、あはれげに答へ、(二)我が身親の思し掟てしにはあらず、憂きながら、如何はせむに、(三)思ひ流いて過ぐす樣など、さかしくは云ひ續けねど、たゞ氣色は盡きせず、思ひ續くるなめりと見えたるには、我もげに泪に浮き沈み、一人ならましかば、常よりも心盡くしならまし寢覺を、慰む心地もし、あはれをも添へて明けぬるに、御前の御格子一間ばかり參らせて、二所ながら端にゐざり出で給ひつれば、(四)名に流れたる曙の空霞み渡り、今開け初むる花の木末ども、似る物なき程なるに、古へ西山までイにて、(五)見しながらなると眺めし程の嘆かしさ、身の有樣、その折もよろしうはあらざりしかど、過ぎぬるとなればにや、いと此の頃の心地はせざりしをやと打思し比ぶるに、え忍ばれ給はず、何の折も、(六)世とともに嘆かしかりつる年頃の、此の曙は、戀しき事ぞ(七)歸るらむ波よりも繁きや。

(一)いとさし過ぎてはあらぬ物から―宰相中將上は、出しやばりはしないが。

(二)我が身親の思しおきすしには―故關白は特にこの宰相中將上を愛してゐたが、親の豫期に反して、好色の名高い宰相中將に嫁した事を指す。

(三)思ひ流いて―思ひ諦めて。

(四)名に流れたる―後撰集「移ろはぬ名に流れたる川竹の」の世に秋を知るべき―等の「名に流れたる」と同意義。

(五)見しながらなる―恐らく一二卷間の缺卷中にあつた歌であらう。拾遺百番歌合三番に、「廣澤にひとり詠めて姉上も昔の人の臥し馴れにし方を思ふにも春や霞の匂ふ花の木末」咲き出で給ふ曙の空霞み渡り、今開け初むる花の木末ども、似る物なき程なるに、古へ西山までイにて、見しながらなると眺めし程の嘆かしさ、身の有樣、その折もよろしうはあらざりしかど、過ぎぬるとなればにや、いと此の頃の心地はせざりしをやと打思し比ぶるに、え忍ばれ給はず、何の折も、世とともに嘆かしかりつる年頃の、此の曙は、戀しき事ぞ歸るらむ波よりも繁きや。

(六)世と共に―命の限り。後撰集「よと共に歎きこり積む身にしあれば」なぞ山守のある甲斐もなき。

(七)歸るらむ波よりも―伊勢物語「いとどしく過ぎ行く方の戀しきに羨ましくもかへる浪かな」

(一)信田の森の―詞花集「我が思ふ事の繁きにくらぶれば信田の森の千枝は数かは」と同じ意。以下寝覺上の心。

(二)見苦しなど―我が有様を見て見苦しいなどと思はない御訪問であらうか。見苦しいと思ふ。

(三)人物し給ふよし―他の人が来て居るから、御面會は出来ないといふ事を。

(四)ことならひに―「事なしび」の誤か。

(五)人を起いて―宰相中將上を起して。以下寝覺上の心。

(六)さのみ受け取るべきもの―すぐに内大臣の申し出に應ずるものと、内大臣に思はせて了つては。

(七)いかならんと口惜しく―内大臣が、逢つて呉れぬとはどうしたの事かと残念がつたり、これは一體どうしたのか等と思ふべきで―もない。

(八)もてはふべき―一本に「もてはふくべき」とあるが、何れにしても意不明。「もていふべき」の誤か。「はふく」は「省く」の意か。

(九)御暇あらば―御暇があつたら御面會もしよう。

(一〇)我が―内大臣。

(一一)さばかりの人の一つには―宰相中將上の様な他人が、寝覺上と一緒に臥してゐるのだらうから。

給へば、寄りて忍びやかに驚かい奉る。信田の森の千枝に劣らぬ心ながらも、此の夜な〳〵露まどろまでのみ亂れ明かいつる。げに心より外に、いとよく大殿籠りにけり、見苦しなども思ひもかけぬ御便にかは。寝覺上「人物し給ふよしを聞えよ」と、いとねぶたげに、ことならひに答へ給ふを少將「さりとて、今めかしくも如何でかは歸しなどもし奉らせ給ふ。輕々しう」と聞ゆるも、さる事にはあれど、人を起いて外に遣るべきにもあらず。さりとて驚き我起き上がりて、ゐざり出でんもいとかたはら痛し。さのみ受け取るべき物と思ひ習ひては、必ず心苦しく恨めしき節無いやうあらじ。こは今始めたる事ならねば、如何ならんと口惜しく、こは如何になど思ふべきにもあらず。たゞきィきりぬべからむ折は、ともかくも、げにか許りの折節には、深かりける頼み心に、もてはふべきにもあらず。何時となく月頃のやうに、人目には見えであらめと思せば、寝覺上「亂り心地さめ〳〵しくのみ取りなし侍りつる。げにやまことに、例ならでなん聞えさせぬ。明日などの程に御暇侍らば」と、いと直直しく、あざやかに云ひ給へるに、我がおながちに思ひ構へて來つる心深きの甲斐もなく、心憂けれど、押し立ち入らん事は、さ許りの人の、一つィへには眞實に臥い給べかめるに、様惡しく便なかるべければ、宮の思し召し、人の云ひ驚き申さむ事も、苦しくいとほしからぬにはあらねば、恨めしげに、とばかり月を眺め入りて、

(一)面影に見え―寢覺上の有樣が目の前に現はれて。

(二)よもと―今宵はまさか自分(內大臣)も來まいと。

(三)出でん―女一宮の許を立ち去る。

(四)見てまうで來ん―見て參らう

(五)御位世の覺えこそ―內大臣の位階や世間の評判こそ、あまり仰山になつて了つてゐるが年齡や御樣子は。「いとよい程なりかし」にかゝる。

(六)少將―寢覺上の女房。

(七)いかがは―多分寢覺上は御逢ひにならないでせう。

も有りしを、我が心もいと打ちつけに、今の間の程も面影に見え、心地に染みて、何事を云ひ、世を如何に苦しう打思ひ亂れて臥いてやあらん、居てやあらむ。我を待ちやすらん。今宵はよもと思ひ離れて寢やしぬらんとのみ心地も浮きて思ほゆるに、さりとて今宵さへ出でんをば、如何思ほし、人も見思ふべきと思ふ方も、やんごとなさのおろかなるやうもなし。我が身はいみじう苦しからんずるわざかな。此方かしこしとても、かの人の心に露も恨めしと思はれて、はた世にあべうもあらずはィナシと思ひ寄るより、涙はたゞこぼれにこぼれて、人目も憚しきに、臥し佗び、遂に

內大臣「今宵さへ明かしてん、情は無きやうや。罷りて見て參うで來んよ」とて、起き給ひてさへぞ、親しう思し召す人二三人計り、いと忍びやかに、輕らかに這ひ渡り給ふも、御位世の覺えこそ、餘り事々しうなり定まり給ひにたる御年齡身の有樣は、かやうの御忍び歩き、唐土など云ふらん所まで尋ね歩き給はんが、いとよい程なりかしと、ほの心得るは、をかしく見奉る。おぼろかにをかしく澄める月影に、いみじく艶かしく、なよび脫カかに、窶れ給ひて、打敲き給ふ。皆人は寢にたる氣色なるに、少將ぞさにやと思ひ寄り參りたる。格子押し放ちて少將「大殿籠りたるが、如何は。宰相中將の御方も此方に物せさせ給ふめれば、愼しとぞ必ず思し召さんかし」と答ふるに、內大臣「いなや、待たせ給はざりけるよな。なほ惡い身の覺えなりや」と恨み

て、例ならぬ御心地も見捨て難くて、宰相中將の上我が御方にも歸り給はぬを、何かは樣々夢のやうに思ひ續けらるゝ事共に、いとゞ寢覺め明かされ古慰めにも、此の君は今少し云ふ甲斐ある心地もし給へば、寢覺上「なほ」(一)とも聞え給はず、日頃の事どもなど聞え出で給ひつゝ、御臺なども御覽じも入れで、大殿籠りぬ。

大臣は少し立ち遲れて、宮におはしまして、内大臣「内に事繁う、奏し下しなどする事ども(四)ありて、宮の出でさせ給ひし御送りにも參り侍らずなりにしを、いと無禮なる者に、思し召しけん」など云ひ始めて内大臣「此の北に侍る幼き人の例ならぬ樣に侍りければ、驚きて、關白の里人今宵出で侍るめりつ。如何なるぞと能りて見るべく侍りつれど、いぶせく侍りつれば、先づ此方樣に參りぬる。我ながら心憂くおろかなりと覺えしや。(八)いとまことにはあらぬ人だに、俄に出で侍るめりつるを聞く〳〵」と、言よく云ひ續け給ふぞ憎きや。御帳の内に入り給ひて打休み給ふに、これを惡うおはしますと覺ゆるにはあらず、氣高く清らかに麗しう、貴なる御氣配有樣、かうこそは帝の御女はおはすべけれと、限りなく見奉りながら、うちのきて年頃隔てつる折は、自打紛れけり。かやうにいと氣高く靜やかにはあらず、いとまことに美しうたをやかなる氣配有樣の似るものなきはやと打思ひ較ぶるに、心地打騷ぎて、いづれとなく表面を繕ひ渡いしこそ心の中はのどかなりしか、搔き絶えて年頃經し折

(一)この君―宰相中將の上。
(二)なほとも―矢張り貴女の御部屋に御歸りなさいとも、寢覺上は云はず。
(三)宮におはしまして―北の方なる女一宮の許に。
(四)奏しくだし―帝に申しあげる事、及び帝から申し蔓される事など。源氏紅葉賀「おほやけ事多く奏しくだす日にて」。
(五)宮の出でさせ―大皇宮が。
(六)この北に侍る幼き人―故關白鄙の北殿にゐる幼き人、即ち小藏君。
(七)關白の里人―寢覺上。
(八)いとまことにはあらぬ人だに―眞の母親ではない寢覺上さへ。
(九)これを―この女一宮を。
(一〇)うちのきて―然るに互に離れて寢覺上を見なかつた折こそ自然物に紛れてゐたが、今度逢つて見ると、この女一宮の樣に氣高く靜やかな處はないが眞事に美しくしなやかな寢覺上の樣子有樣は比べるものもない事だと。
(一一)いづれとなく―何處の女といふ事もなく、女一宮の手前表面あらぬ風に裝つて適ひ歩いた時は、心の中ものんびりしてゐたが、今度の寢覺上に對しては。

ひ鬱ほれて、はか〳〵しく聞え遣り給ふ事もなく、事しも遙かならん別れめいて、思いたる氣色ども、いと有難うあはれなり。大納言二人中納言三字イナシ源宰相中將など、かゝる折の宮仕へをだにこそはと、皆心を盡くして下りたちもてかしづき給ひたる樣、いとあらまほしきに、内大殿もいとうけばり我イを打添ひ率て出で四字イ出でて顏ならばこそ、さすがに上の思し召さん所いとほしかりければ、いと諸共ならねど、殿の中にある限りの人催し立て、上達部殿上人、よせ〳〵につけて、皆仕うまつりたれば、事々しかるべうもあらず、俄にいと忍びて出で給ふなれど、いとどこよなく嚴ほし。此所にも大納言殿の上、宰相殿の上皆渡り集り給ひて待ち聞え給ひけれは、下り給ひて、珍しきにも、督の君の心苦しう思いたりつる、いと哀れに打思ひ出で聞え給ひつゝ、我が有樣の此の程に樣々なる事の聞えも、此の君達の思さん心も、恥かしとのみ覺え給へば、心地の例ならぬに事寄せて、晴々しからず御帳の中に臥い給ひぬるに、小姫君は、御五十日の程から渡り給ひしより、片時離るゝ折なく習ひ給ひて、此の日頃いみじく戀ひえじ二字イくんじ入り給ひたりつれば、宵惑ひせず待ち喜びて、やがて懷に入り給ひぬるもいとあはれに「げに、など見で、味氣なく隔てつる日頃なり」と、我もいみじう戀しうのみ思ひ聞え給へれば、これはしも恥かしき思ひなく、打語らひ遊ばひつゝ、督の君の傍に添ひ習ひ給へりつるに、人少なにありつかぬ心地し

(一)事しも―殊更にも。

(二)率て出で顏ならば―自分も寢覺上と共に、退出しさうな樣子でもしたら、流石に帝もどんなに殘念に御思ひになるだらうと。「さすがに」は「いとほし」にかゝる。

(三)よせ〳〵につけて―内大臣に心を寄するにつけて。

(四)此所にも―故關白邸に於ても

(五)大納言殿の上―共に故關白の女。大納言は新大納言、宰相は宮中將。

(六)おり給ひ―寢覺上は車から降りて。

(七)小姫君―故關白の女。大納言殿上、宰相殿上、尙侍殿と姉妹に當る。

(八)御五十日の程から―小姫君の關白の許に嫁いで來たのであるが、その時より。

(一)我が御身づから　尙侍君自身も。
(二)わが御代に―寢覺上は自分の代りに。
(三)大貳の北の方―大貳中納言北方。一二卷の對の君。
(四)かくておはしますも―帝はこの儘にここに居るも、人目惡く思はれるので。
(五)憂きは物かは―後撰集「まくてつらきを見るは憂けれども憂きは物かは戀しきよりは」に據る。
(六)出で入り給ふべう―宮中に出入する樣に。
(七)うけたまえりて―「承りて」の誤ならん。
(八)いとことなる御心用意―帝がかくまで寢覺上に對して特別の御心づかひをなされるのは、やはり尙侍に對する帝の御寵愛が甚だしい爲であらうなどと。
(九)督の君に―寢覺上は尙侍に。
(一〇)參り給はじかし―寢覺上は、二度と參上する樣な事はあるまいと。

りもなく、我が御身づからとても、たゞいと貴やかに、子めかしき一筋より外の御心は、深くしも物し給はぬに、いと後めたく思ひ聞え給ひて、我が御代りに大貳の北の方を添へ聞えんと思して、御消息有りければ參り代り給へり。大方の氣配內外騷がしくなりて、隙あべうもあらぬものから、かくておはしますも人惡う思し知らるれば、淺ましう妬う心憂しと思し召しながら、憂きは物かはと思し召さるゝに、若し有難しと思ひ知り參り給ふやうもやあるの御心用意に、正三位の位賜はせて、いと若々しく慕はしげなる御氣色も、覺束なからず。出で入り給ふべうなど仰せられて、車もうけたまえりて、宣旨下るを「いと殊なる御心用意は、なほ尙侍の御覺えなどのいみじきに引かれ給ふにこそは」と、人々驚き、大臣は、あながちにいみじう思し召すべきかなと、思はずにや、心疾ましさぞ增さり給ひける。萎れ暮らすより外の事はなかりつる程に、督の君に心のどかに物もえ聞え給はず。明暮打添ひ習ひ聞えて、如何に名殘だになき心地する。故鄕に立ち歸り心細う例の難かしう覺えんと思し續け、督の君はた更なり。添ひ給ひたりつる程こそ、如何なりつる事も賴もしかりつれ、世をいとかく思ひ亂れて罷出給ひぬれば、よもおぼろげならで參り給はじかしと思すに、片時立ち留まるべうも覺えず、心細う悲しきに、罷出なまほしげに思いたれど、如何でと、さはあるべき事ならねば、互に俺かず心苦しとのみ思

方より、いと誠しう、堪へ難く苦しげにて、今宵罷出給ふべきよし奏せさせ給ふを、大臣「さ承りて侍りつれど、まことにいと堪へ難げに侍るが、切に罷出んと侍り、輦の宣旨何でふ事か候はむ」と申し給ふに、餘り澁らせ給はんも、心得ず思し煩はせ給ひて、帝「さは早」と仰せらるゝ御心の中いと口惜し。同じ御垣にだにあらじと深く厭ひ出づる心ばへの、珍かに心憂けれど、登花殿に渡らせ給ふと聞くに、大臣も靜心なく、ただ亂れに亂れ入らせ給はん、何の障り所かあらんと思すに、いみじう後めたければ、忍びやかなる方より紛れ入り給へれば、例居給ふ所にもあらず、深く隱ろひたる氣色を、あはれに有難く見て、忍びて添ひ居給ひぬれば、いとど何の云ふ甲斐あべうもあらぬに、上は何の隈々しき疑ひあるまじき程にて、帝「一言聞えさすべき事なん」と責めさせ給ふ。督の君にも、いみじう宣はするを、いとわりなしと思して、尚侍「かりそめに見侍りし心地の、苦しげにのみなり增りて」と聞え給ふ。異人々も同じ樣にて、それにぞ打ちみじろぎ寄らせ給ふ事は難かなりるカ。帝「その臥い給ひたらん几帳の程に、多くも聞ゆまじ。たゞ一言許り」と恨み暮らさせ給ふを、人々、殿のおはすれば、えも聞えつがず、中にて咽せびたる氣色を、大臣をかしと聞き臥し給ひたり。暮れぬれど、上は歸らせ給ふべうもあらず。今宵出でさせ給ふべしとて、御迎へに女房參り集り、御乳母など言ひて物はかゞしく後安き思ひ遣

(一)輦の宣旨―輦許可の宣旨を、御出しになつても差支へありますまい。
(二)深く厭ひ―寢覺上が帝を厭ひ
(三)登花殿に―帝が登花殿に御渡りになる。
(四)ただ亂れに―帝がただ亂れ押し立つて、寢覺上の居る部屋に入つたならば、何の障碍もなく安々と寢覺上に近づく事が出來ようと思ふと。
(五)例居給ふ―寢覺上はいつも居る處には居なく。

(六)御乳母など云ひて―尚侍君には御乳母などと云つても、しつかりした後事を託して安心出來ろ樣な思ひ遣りのある者はな〳〵。

(一)なぜせしわざぞ―どうしたものかと。
(二)一方の事―帝の方の事。
(三)こよなく隔て果てたりし氣色の―此上もなく隔たつて了つた様な、寢覺上の様子が變つて。「打語らひたるは」にかかる。
(四)上の御氣配有様―帝の御様子
(五)露の言葉ばかりも―帝へのわづかな御返事をしても、あるまじき事と、寢覺上が帝に御返事する事は、少しでもあるまじき事と)自分が思つた事に到し。
(六)さては見じと―寢覺上は自分に逢ふまいと思つた程怒つた事が、かうした事件には結局は何のこだはりも捨てて、この様に自分は屏ひて來た事や。
(七)除間なかりし―以前寢覺上が、故關白在世中の時に於ても、自分と内内密に言葉を交して呉れた事等を思ふと。
(八)限りなき事ども―例へば帝からの御言葉であつても、それに靡かず、寢覺上を我が物としようとする者が多くあるけれど、その中でも。
(九)人目ばかり―人目を憚かつて、寢覺上以外に女一宮(北の方)に心を分けると云ふ事は世へ難く思はれて。
(一〇)口入れ難くて―寢覺上の退出について、口をきく事は差し出がましいので。
(一一)新中納言―寢覺上の兄

た引き返し胸塞がりて、(一)なぜせしわざぞといみじう打嘆かれぬるに、女君は、(二)一方の事の疎ましさをゆゝしう思いたるまゝに、只今我が身の後行く先のあらまし事までも辿られず、今宵の憂き瀬は逃れぬべきなめりと、心安くなりて、(三)こよなく隔て果てたりし氣色の、思ひ佗びひたぶるに打嘆き、たゞ出でなばやと思はせて打語らひたるは、哀に涙さへ止まらで、(四)上の御氣配有様のさばかりあるを、(五)露の言葉ばかりもいみじかるべきものに我がかけたらん有様を、(六)さては見じと思ひたりしかど、かゝる事の亂れには、名殘無く思ひ靡きたる程、昔もさばかり隙間なかりし折々の、あながちに交いし言の葉など思ひ續くるに、憂き世を知り始めければ、(七)限りなき事どもと云へど、その中を分けて、我が方様の心寄せはいとあはれなりしか」と思ふに、我が身驕らはしく、嬉しくいみじく覺ゆる事の限りなきに、(八)人目ばかり、(九)心を分けん事の、いとわりなく覺えつつ、その程の思ひ遣りなどこそ、今宵はひたぶるに語らひ明かし給ひて　寢覺上「なほただ常の御もてなしのまゝに紛らはしてを」と、せめて佗び給へば、今朝は疾く出で給ひて、我もさすがにかたはら痛ければ、(一〇)口入れ難くて、(一一)新中納言の參りたるに、氣色ほのめかい給ひて、教へたてゝ、我は御前に參り給へれば、「怪しう例ならず、つと侍ふかな」と思し添ふる方のありて、たゞならず思さるゝに、春花殿の御

て思し續くるに、「えも云はず、をかしうなりまさる人の御氣配有様かな。是をほのかに御覽じたらむ人の御心惑ひ、げに如何ならん」と推し量りやるに、今の間も後めたければ、御文書き給ふ。

内大臣水草居し野中の水を掬び上げて雫に濁る今の佗びしさ

女君はいとゞ、物恥かしさをさへ添へて、今日は督の君の御行く方と知らずありつるまゝに、やがて埋れ臥し給ひて、御返も聞え給はず。上よりは督の君に「聞えつる言葉二字ィ事の、暮には必ず〳〵。さらずば、いみじう憂しとのみなん思ひ聞ゆべき」と立ち返り聞えさせ給ふを、いとわりなくこそ、いと苦しげに思したるを見るも、御心ときめきの胸の隙なくなり增さる心地のみするに、野中の清水は暮らしも果てず、流れ寄り給へるを、さのみはうけばりもて出でゝ、受け取るべきものとは思されねど、殿覺上「さは如何はせん。かくてあらん程は、心緩うィぶべうもあらず苦しうのみある。頼もし人には誰をかは」と仰ィ思せば、あるにもあらず、見つるまゝの御有様を内大臣「などかくて若々しう見苦しの御有様や」ともて煩ひ、言ひ恨みつゝ、今はかくて見るべきぞと思ふは夢の心地して、命嬉しきを、又側に分くる心あるべくもあらず、暫し横目堪へ難かべきに、さすがにひたぶるには引き移まじきを思ひ遣る、まと。

(一)水草ねし野中の水―もう既に生つて了つた野中の水草も濁つた雫を汲むのは佗しい事である。既に見たさ帝に汚れた貴女を思ふと憂鬱に騷がれる。狭衣へ立ち返りなる。古へ「げ」の等野中の水の歌あり

(二)いみくさぬ―みくさに苦しげに思したる―帝の事

(三)野中の清水―内の大臣。見る内と上の事

(四)さのみは―寢覺上の心。そのうのみ内大臣の逢ひたいと云ふ希望を自分の方から積極的に出て、承諾する筈のものとは思はれないが。

(五)心緩―心を緩かめる事も出來ないで苦しいばかりである。頼る人としては、この内大臣の外に誰があらう。

(六)仰せば―「思せば」を取る。

(七)あるにもあらず―寢覺上は、大變心が煩悶する。

(八)見つるまゝの御有様―尋別れた時と同じ、寢覺上の様子なので。

(九)今はかくて―これからはかうして、寢覺上を我が物とする事が出來ると思ふと。

(一〇)側に分くる心あるべくも―寢覺上以外の女に愛情を移すと云ふ事は出來る筈のものでなく、又すしでも寢覺上よりは堪へ難い事であるのに、流石に今云ふふいに、女一宮と妻があるから、一途に全心を寢覺上に引移す事も出來ないと思ふ。

(一)昔を知らぬ人―昔の貴方と私との關係を知らない人は。

(二)大皇の宮のさもやの人―貴女が私と心の宮のさもやのを安しとしてゐるかも知れないと想像してさへゐるかも、大皇宮には心を怒らしてゐるのに、私が貴女のに、まましてかうして實際に聞いた時には、どんなにすると貴女にはなるひどい事を貴女にすると早であらう。それにつけても早く宮中を退出なさいつ。

(三)たゞ御心なり―心次第です。

(四)姫君―石由にて生れし姫君。

(五)斧の柄朽ち―年月の經過の久しい事。古里は今集雜下に斧の柄の朽ちし處ぞ戀しかりける」

(六)かくて侍る―此の樣に無事で居りますと姫君に申しあげて下さい。

(七)事無く―格別に事もないのに

ろしくあながちの思ひ遣り事のみせられつゝ、怨び恨みもし、此の御返や聞えさせ給はんの後めたさへ添ひて、出で給ふべくもあらず。内大臣「人の見聞き思ふらむ樣に、昔を知らぬ人は、淺はかに淺しとこそは、思ふらめな。大皇の宮のさもやの思し遣りにだに、心安かるべうも侍らざめるを、まいてかばかりも聞し召しつけたらん程よな。吾が君今は何時も／＼たゞ御心なり、とてイく出で給ひて、今宵も罷出ぬべく奏し給へ。姫君の戀ひ侍るなるも、げに餘り立ち離れて、斧の柄朽ちにけるも、いと心苦しう」と、眞實に思し入りて宣ふを、[illegible]「此の御文の後しも、などかく取りあへずおはせ給ふらん。かくて侍るとも、たゞ聞えさせ給へかし。なでふ事かあらん。亂り心地の惡しう、胸の痛ければ、みまかづし[illegible]さばかり仰せらるゝに、返すく奏すとも御車世に許され給はじ。事なく申し出でんが、いとかたはら痛からん」とて、たゞつくゞと臥い給ひたるを、云はむ方なく苦しく思し侘びて、果ては物も云はれず背き給ひぬるを、内大臣「眞實は何事を思ひ惑ひつる年頃の心にもあらず、互に背き／＼恨み交いてあべきかは。少し心のどかに心を延べてこそ萬の罪考へ申すべかりけれと思ひなるは、なほ胸いみじく苦しきに堪へ侍らぬぞや。吾が君かくな思し背きそ。と引きかへつゝ慰めこしらへて、からくして、さすがに打忍びて歩み出で給ふ。御ねくたれの御匂ひいと見る甲斐有り。御宿直所におはしまし

(八)ねくたれ―寢亂れ。

さてはあべうもあらず。聞えしやうに所(イな)狹き位なども、ひたぶるに捨てんとなむ思ふ」など、たゞ我になりて見るだに、涙止め難く心深く、書き盡くさせ給ひて、

(一)鶏の海や潮干にあらぬかひなさはみるめかづかむ方のなきかな十三字イナシ

來ん世の蜑」と六字イナシ書かせ給ひたる、見所いみじきを、(二)女にては、いかでか、かうのみ書き賜はせんを、あはれに悉く、思ひ弱る心のなからんと、胸塞がり勝れど、(四)宣旨の君の語りし樣は、まことなりけりと、心清く現し果てつる方は、少し心落ち居給ひにけり。(五)何時も心地良き時は無くのみある中にも、昨日今日などは、泪にすすぐ(六)より外の御繕ひなくてのみ沈み臥し給ひたる面影の、いみじく耻かしければ、明かうなるまゝに、いよ〳〵顏引き入れてのみ、臥し給ひたるを、せめて引き遣りつゝ、讀み聞かせ給ふも、いと聞き苦しきに、藏人參りて、「若君とく上らせ給へ」と立ち返り〳〵召す。内大臣「御返のゆかしく思し召すにこそあめれ。(七)添く疾く申し給へと聞え給へ」と唆かし給へば寢覺上「難かし。などかうのみ」と切に背き給へば、あながちに搔き遣りつゝ、見奉り給ふに、げに顏變りするまで、いたく泣き給へる氣色しるく、顏なども例ならぬしもぞ、云ふ限りなく美しげなる。中納言の君の導して(八)垣間見せし日、「あないみじ、如何ならん世に心安く相見ん」と昏れ惑ひし心地も夢のやうに思ひ出でらる、嬉しきに、上のいと深く思し入れさせ給ひつるは、あやふく恐

(一)鶏の海や―濱松中納言物語「鶏の海の蜑もかづきはせぬものを海松布寄せ來る風の吹くらむ」。海松布は「見る目」にかける。意は、甲斐(貝)もなく貴女を見る事も出來ない。

(二)來ん世の蜑―引歌未詳。

(三)女にては―女の身に取つては下の「思ひ弱る心のなからん」にかけて見る。

(四)宣旨の君の語りしさま―寢覺上と帝とに、事實上の關係のなかつた事。

(五)いつも心地よき時は―寢覺上にとつても、いつでも氣分の良い時はない。

(六)すすぐ―涙で顏を洗ふ。

(七)添くとく申し給へと―この内大臣の言葉は、若君に云ふ言葉と思はれる。寢覺上に早く返事を書けと云ひなさい。

(八)中納言の君しるべして―一卷の行頼少納言が案内して、寢覺上を最初垣間見した事を指す。

からィナシむめり。氣配容體こそ母君に通ひけれと御覽じて、承香殿の女三宮を限りなく思ひ聞えさせ給ふを、か許りおはしまさずかしと、目覺ましきまで打見守らせ給ふ。御文書かせ給ひて、帝「これ母に忍びて奉りて、御返必ず取りて來よ。さらずば思はじ」と仰せらるれば、苦しと思ひたり。忝く、裝束引き繕ひ給ひて、帝「必ず〳〵」と仰せらるれば雛子君「いづら、(一)上は」と尋ね來て見るに、殿も臥い給ひたるほど、帝「忍びて」と宣はせつるを、さは云へど、深く隱すべき事の至りなく、御几帳引き間けて、雛子君「御迎へに參りたりつるを、上にやがて召し止めて、御懷に臥せさせ給へ」ィひつなど語るを內大臣「かぞィよそへさせ給ひけるなめり。我もさ覺ゆる事ぞ」とをかしく聞きて、內大臣「さて〳〵」と言へば、宣はせつる事など語りて雛子君「來ずば、憎まむとぞ仰せられつる」とて、大きやかに包まれたる御文を懷より引き出でたり。いとゞ聞き憎く難かしきにと、苦しくぞ聞き給ふ。殿は嬉しく、昨日の御文だにゆかしく見まほしきに、見給へるめきィると思すに打ち笑まれて、起きて見給へば、帝文「さりとも必ず思し知りなむと覺えしもてなしを、我猛う、をこがましく思し離れ、一行の御返もなくのみあるは、淺ましう後瀨の山の頼みもあるまじかめるを、何の人目か。たゞ心に任せて亂れたる人の上なりとも、少し世の常にてこそ思ふべきわざなりけれ。昨日今日のやうに物の覺えば、いみじく思す樣に隙間なく定まり果て給ひぬとも、

(一)上は—母上は。

(二)かぞへさせ給ひける—帝は雛子君を、寢覺上に擬して居られる樣だ。一本の「よそへ」なとる。

(三)いとゞ聞き憎く—寢覺上の心

(四)見給へるめると—帝が寢覺上の返事を御覽になつたのだと思ふと。又に、同じ帝の書かれた文を寢覺上が昨日見たのかと思ふとの意歟。

(五)後瀨の山—前述。

(六)定まり果て—內大臣のものとなつて了つても、そのまゝにしては置かない。

の參りたる氣配を聞きつけさせ給ひて　帝「およずけても寐敏きかな。美しき者なりかし」と仰せられて、まだ夜深く見捨てゝ、下り給ひぬる慰めに　帝「雅子は此方や」と夜のおとに召し入れたり。何時もかくのみ氣近く習はさせ給ひたれば、いとよく馴れ聞えさせたるを、帝「眠たからむ。此所に寐たれよ」とて、裝束など引き解かせ給ひて、御衣を打ち覆はせ給ひて、近う搔き寄せさせ給ひたるに、我が身にしめたる母君の移り香まさゝぎるべうもあらず、さと匂ひたる懷かしさ增りて、一重の隔てだになくて臥させ給ひたるにはゝたち身形つぶ〳〵と丸に美しうて、髮の手當りなど、いと艶かに貴に懷かしく、なよゝかなる氣配手當り、心のなしにや、いみじと聞きゝ消え入りし有樣のふと思ひ渡さるゝに、いみじうらうたうならせ給ひて　帝「今宵母の許にこそ寢たりけれ」など問はせ給へば、打ち頷づきたり。　帝「羨ましかりける事かな」とて、帝「內の大臣よりも我を思へよ」など語らはせ給ふに、折々申し出でたる御答など、いはけなからず、かゝる女のあらましかば、少し心は慰みもしなましとまで、あはれに思されて、今ぞ少し大殿籠り入りたる。君も寐入りて、ことゞ〳〵明うなりにければ、驚きて、打解けたるをかたはら痛げにて、すべり罷り出づるを、帝「さばれ幼き程はたゞ我にも見えよ」もゝとて搔き撫でつゝ御覽ずれば、髮挿、髮の懸り、頭付など、火影のたゞそれと覺ゆるに、限りなく御覽ぜられつる。顏はたゞ內の大臣に、違ふ所な

(一)下り給ひぬる―尙侍が。
(二)おとゝ―おとゞ（御殿）の誤脫か。
(三)はたち身なり―「かたち」の誤ならん。或ひは「肥（ヒ）立ち」か。
(四)有樣の―寢覺上の有樣。
(五)渡さるゝ―「出ださるゝ」の誤か。

どの、(一)こよなう思されんこそ、中々うたてあれ」と盡させずくね〳〵しげなる御氣色に、慎ましうて、(二)せめても言はれず、昔より今に、目安からず、露ばかり心にくき思ひ遣りなくのみある身の有様かな。物の心を思ひ知りしより、何事もなどてか人に劣らん、いかでいみじう重りかに恥かしく人にすぐれても、たゞなる世に過いてばやとのみ思ひ起りしものを、幸ひなど云ふ事こそ、心及ばぬ方にて、思はずにもあらめ、たゞ我が身の有様ばかりだに、(四)思ひしにあらず、昔より怪しからず、淡つけく輕々しう憂き(イも)のに、人に云ひ誘らるゝを事にて止みぬべかめるよと、盡させず悲しう思ひ入るに、まことに心地も搔き亂るやうになりて、いといみじう心苦しげなる御氣色を、我も打泣き給ひて、慰め佗び給ふに、(五)こと〴〵明かくなりぬめり。上には、淺ましう思ひしか、一行の返事だになくて止みにしより、か許りの心にては、さりともと賴をかけ、後の逢ふ瀨をこがましかりけりかしと、いみじう悔しう妬う思し召されて、尙侍に見馴るゝ程はなけれど、父大殿なども無く心細げなめる御有様を、人よりも心苦しうなむ思ひ止めらるゝ。(六)其所にも增す方なくのみ思さむなむ嬉しかるべきを、かの人昔より思ふ心深かりしかど、口惜しくてなむ止みにし。罷出なむとのみなむあめるを、なほ暫し慕ひ止めて、忍びやかに、思ふ事云ひ聞かす許り、思し廻らせ」など露まどろまず語らひ明かせ給ひける。御迎へに雅子君

(一)こよなう思されん―この上もなく憂い事に思つて居られる事が。
(二)せめても―強ひても。
(三)昔より今に―以下寢覺上の心
(四)思ひしにあらず―かれて思つてゐた樣ではなく。
(五)こと〴〵―盡く、全く。
(六)かの人―寢覺上。

(一)御迎へに—尚侍の御迎へなり
(二)大納言—權大納言。一二巻の三巻に接續く。
(三)中納言—左衛門督。
(四)若君—雅子君。
(五)殿—内大臣殿。
(六)今とても—以下寝覺上の心。
(七)紛らはしくとぞ出で給ひぬれ—一本の「紛らはしてとう出で給ひぬれば」取る。内大臣が早く此處から立退いて呉れゝば良いと、詮方なく思つてゐるが
(八)おそろしとても—以下内大臣の心。たとへ帝が畏れ多いにしていと云つても、そのまゝにして遠慮すべき事だらうか。
(九)さらば—こちらから強く出たならば、流石帝でも寝覺上に對して。
(一〇)曉起—和泉式部日記「宵毎に君になしはすれどいかで猶曉起は霜の曉起を思はずば君が夜殿によがれせましや。」後撰集「おくれじ」
(一一)いかがはあないみじなど—寝覺上は「どうしてそんな事が出來ませうか。それはいけない事です」などと云ふべき事でもないので、默つてゐると内大臣は。
(一二)上の渡らせ給ふほど—「上の渡らせ給ふ程」は「移ろはひ奉り給ふ」にて受ける。
(一三)いかでかなど—有無を云はせず寝覺上を抱いて。
(一四)例もかく侍はぬ御方かは—こ

御迎へに人々參るに、大納言の子の辨少將、中納言の子の藏人の少納言、打連れて、若君も大人しう、出で參るを、あはれと殿は聞き臥い給ひたり。今とても心安かるべうもあらす、物を苦しう、慎ましき世なれば、誰が爲めにもあいなう、人目も淺はかなるを、忍びやかに紛らはしくとぞ出で給ひねと、わりなう思いたれど、恐ろしとても、さてつゝみやるべき事ならばこそ。内の御氣色なども、さらば云ふ甲斐なく色に出でては押し立たせ給はじと思せば、あながちに忍ばんの御心もなく、今さへ泪を堰きかね、あながちに別れや出でんなど思せば、少將が參りて、明くるよし氣色ばむに、内大臣「盡きせず今めかしの人の曉起は、つきなくなりにたる心地するを、暫し打休みぬべき宿直所や」と宣ふを、寝覺上「如何は、あないみじ」など聞ゆべくも脱力あらぬ御事なれば、上の渡らせ給ふ程、女君の御隱ろへ所に、御上莚敷きなどしたるに、いかでかなど云はすべくもあらず、やがて搔き抱きて移ろはひ奉り給ふ。人々の見思ひ、督の君などの樣々にもと思ひ給ふみィらむ程の、これもなのめならぬ恥かしさに、なほさりげなくもてなして　寝覺上「忍びつゝ立寄り給はむこそよからめ。里などに出でなんにこそ」とわりなく思いたれど、　内大臣「上渡らせ給ひなば忍びやかに罷出なんものを。例もかく侍はぬ御方かは。忍びやかに今宵は明かし果て侍らむほの局は、いつも貴方が居られない處でせうか。

卷

四

今宵なども出でなばやと思ひ侍りつれども、(一)飾磨に染むる様にては。それにつけても、(二)いかでなほとも聞えさせまほしくて、待ち聞えさせつるものを、心淺うも侍らざりつるものを、云ふ甲斐なげにのみも」といとらうたく云ひ出でたるに、千々の社をかけて誓ひ給はん人よりも、心の底濁り無さも現れ、さは云へど、かゝる節には頼みける氣色の露なるも、言に出でて言葉多くも云ひ續けられねど、いと哀れげなる氣色を、いとゞ添へまいたるに、(三)いみじからん過失をさし當りて見附けたりとも、え咎め思ひ止むべうもあらず。故大殿もかくて(五)萬を消ちてし、ことわりなりやと思ひ知らるゝものから、なほ胸苦しきまゝに、(六)月頃の事どもは、後の事に置かれて、とざまかうざま、云ひ惱ましあやむるを、いと苦しげに、たゞ打泣きて、たゞ疾く出でなばやと切に思いたり。云ひ〳〵ては、(七)廻り逢ふ年頃の數へられて、珍しくあはれに夢の心地するにも、忍び難う泪のこぼれつゝ、秋の夜だに(八)人がらなるものなれば、まいて春の夜の短かさは、まどろむ程なく、明けぬるなめり。

(一)飾磨に染むる―「播磨なる飾磨に染むるあながちに人を戀しと思ふ頃かな」（詞花集卷七、曾根好忠）。戀しと思ふ意味。

(二)いかでなほ―「いかでなほ網代の氷魚に言問はん何によりてか我を問はぬと」（拾遺集卷十七、修理）などの歌による。

(三)まい―「增し」の音便。

(四)思ひ止む―愛する事を止める。

(五)萬―内大臣と寢覺上との過去の關係を。

(六)月頃の事ども―長い間の積る話は後まはしに殘しておいて、いろ〳〵と内大臣が寢覺上と帝との事に關して、皮肉を云つて答めるので。

(七)廻り逢ふ年頃の―いろ〳〵と云ひ逢つた結果は、過去に内大臣と寢覺上とが別れてから再會するまでの年數なども數へたりなどして過去の事を思ふにつけても二人の緣は珍しく哀れで。

(八)人がら―相手の女がよい女であるなら秋の夜でも短く感じられる。

少將「夜より今日は日暮らし惱ましげにて、打休ませ給ひにたり」と聞ゆれば權大納言「さば明日も參らん」とて出でぬなり。內大臣「(一)かの云ひしばかりの有明の月に、盡くし果てんと思ひし殘りの事も、濱の眞砂の數云ひ知らぬつらさ怨めしさも、逢ふ夜もあらばとのみ思ひ渡りつれど、今日此の御事を聞き給へるに、萬皆醒めぬ。實に思ひの外に、事にもあらず、(二)よき釣舟の便出で來て、(三)なか〳〵我と思したらましよりは、世の聞き耳さらぬ顏にて、必ずかゝる事ありぬィ十二字ナシべきなめり。またさ思し取り、今始めたる事にもあらず、(四)更に見じ聞かじと覺え捨てつると心得ながらも、自らその思ひに逢ふ事も世にありかし」と、返すゞ〳〵云ひ恨み問ひ惑ひ給ふに、いと佗びしきに云はん方なけれど、またいときのみ押し込めて、身一つの罪にやなさんと思ふに、飽かず愁はしきに、いみじくためらひて寢覺上「(六)思ひだにも寄るべくもあらぬを、心憂くのみ取りなし給ふに、聞えむ方なくてこそ。大皇宮」出でぬべき折だに渡れ」と、大宮の度々宣はせしを、聞き過ぐさんもいと〳〵怪しかべければ、渡り參りたりしに、思ひもイナシかけず、ほのめき給ふめりしを、たゞさばかりも、誰は誰とも御覽じ知られ、ありぬべき身をと、あいなく思ひ給ふる心の亂れも聞き給ふらんやうにこそは。(七)誰も聞き傳へは、憎からぬにもあらず。いみじくも心憂かるべき身の濡衣かなと、いとど嘆きを添へてこそ暮らし侍りぬれ。すべてはかなくて長居侍ふるィが忘りなれば、

(一)置かれ—「さし置かれ」の方、正し。
(二)聞きつるさま—帥の君に昨夜の事を聞いた事情。
(三)宣ふに—内大臣が凡てを語ると、寢覺上は。
(四)聞きや付け給はんの—内大臣が聞きつつけ給はんのだらうかと、その豫測だけるのさへ凡て他の事を忘れ心配でなかつかれ一日を經ずにすぐに、内大臣に昨夜の出來事を洩らせた大皇宮の心がなほ知らせにかゝえ。
(五)かの珍かに構へ—併しあの大皇宮の御心構も元は云へば、この計略も元は云へば、この内の大臣の事から出てゐる。内大臣が北の方なる女一宮を愛さるかいで、寢覺上に惹かれてゐるから、それを思ひ切らせる爲の大皇宮の計畫なのである。
(六)まいて打解けてなんと—まして内大臣に打解けて話した等と大皇宮に聞きつけられたなら。
(七)おほろしけれど—「恐ろし」の方正し。
(八)御送りの人々—尚侍の御送に行つた女房達。
(九)少將—女房の名。前出。
(一〇)御前に—寢覺上の御前に。
(一一)中將の君—女房の名。

置かれ、聞きつる樣、我が思ひ暮らしつる心の中、上の御氣色のいちじるかりつるなど、搔き盡くし宣ふに、聞きや付け給はんのあらましごとにだに、萬も忘れて覺えつるに、目をだに經ず先づ洩らし聞かせ給ひつらん宮の御心の、かく思し構ふるとは心得ながら、なほ珍かに、憂く疎ましきに、いでやかの御心構へも此の人によると、いみじくおほぃそろしけれど、かくて入りおはしたるを、怯え人呼びなどせんも、いと怪しからざべければ、ともかくも答へすべき方も覺えねば、たゞ打泣きて、顏を引き入れて臥し給へる氣配、えも云はずらうたく美しき氣配、昔にこよなく勝りにける心地して、珍しくあはれなるに、えも問ひやらず、かつは慰むる程にぞ、御送りの人々來たる。少將「御前に人の侍ひ給はざりけるよな。例ならで暮らさせ給へるに、怪しかりけるわざかな。中將の君は下りさせ給ひにけるか」とて御几帳の内を、さし覗きたれば、男の臥い給ひつるに、あないみじと驚かるれど、誰ものどやかに音なき御氣配なるは、さなるべしと思ふに、聞ゆべきやうもなければ、如何にも只今人に知らすべき事かはと思へば、御几帳の外にさりげなくて見ゐて、少將「細殿の方に皆人々おはせ。人の氣配數多すなり。御前は、かばかりにてありなん」とて、皆遣るを、をかしと聞き給ふに、權大納言來て「御殿籠りぬるか」と問へば、

(一)かゝらぬ程ならましかば―寝覺上がこれほど可憐な樣子でなかつたならば、あの樣に自分から離れて行つたあるから少しも好上意思心なのであら少しが、可は持てないのでの事件に心も盡かは怯えきつつ夜咋の事件に心も盡き果てても空になつたのの哀想てにも夜咋の事件に心も盡

近く打臥すに、いとど被き埋もれ勝りて、若君に一つゝへに纏はれて、消えも入りぬるかと見ゆる氣色に、若君の打驚きて、頭を擡げて打見て、御帳の外なる火影のいと暗くはあらぬなれば（雜子書「誰ぞ」と恐ろしがりつるに（寝覺上）早う殿のおはするなりけり」と云ふに、内大臣「かゝらぬ程ならましかば、さばかり思ひ離れつる心地に、よろしくもあらねど、昨夜に心は盡き果てて、身に添ふ魂も無くなりにけるにや、二つゝに取りては、さは如何。それをば、今始めて口惜しいみじと呆るべきにもあらずかし」と打沈むる心も、我ながら異人なりけりと見ゆる、あはれも又こよなく、隔たりつゝいくいつかゝる年頃の積り思ふに、たゞ先づ珍しく、夢の心地のみして、水も淀まぬに、多く増さる心地して、とみに物も云ひ出でられず。女も、憂しと思ひ開え給へる心惑ひの名殘こそは如何はせん。殿留りつれ、それなりけりと思ひ出づるには、いと恥かしく、身の濡衣を如何聞きやし給ひつらんな。世にあらじとは思さじ物を、あはつけう憂かりける者に思ひ果てられて、負けじばかりに野中の清水あらためてもあいなかるべくなど、思ひ解き行くには、心の慰むべき方なく、濡らし添へたる袖の氣色心苦しげなり。昨夜もかくてぞ御覽せられけめと思ふに、年月頃の事共は（ゝさし

(二)かゝらぬ程ならましかば―寝覺上がこれほど可憐な樣子でなかつたならば、あの樣に自分から離れて行つたあるから少しも好上意思心なのであら少しが、可は持てないのでの事件に心も盡かは怯えきつつ夜咋の事件に心も盡き果てても空になつたのの哀想てにも夜咋の事件に心も盡

(三)水も淀まぬに―喪衣物語―涙のみ淀まぬ川と流れつつ別るる消ぞ行きもやられぬ」等と同じ意味。

(四)多くまさる―涙の多く流れ

(五)女も―寝覺上も。下の「と思ひ出づるにはに」にかかる。

(六)憂しと思ひ開え給へる―憂きつらい事と思ひ惱んだ、昨夜の心惑ひの名殘はどうしようその痕跡は出來ない。

(七)殿とまりつれ―内大臣が宮中に留つたが、それはこの事件に關係しての事なのだと。

(八)負けじばかりに―負けぬ氣で又は張り合ふつもりで。

(九)野中の清水―播磨國印南野に

(十)思ひ解きゆく―一々思ひつめて行くと。

(一一)御覽ぜられけめ―常は御覽になられたのだらう。

あると云ふ清水。歌枕の一。古今集「いにしへの野中の清水ぬるけれど元の心を知る人ぞ知る」。以前の内大臣の愛情を取り戻して見ても。

て、妬く悔しき胸の隙をだに明けよ」と、語らはせ給はんと思し召して、尙侍の君の御方にぞ帝上らせ給へ」と御消息ありける。(一)上の例ならぬ御氣色を見捨て奉り難く思したれど、唆かいて上せ奉り給ふを、內の大殿はさりげなくて、立ち寄りて聞き給へば、月のいみじく明きに氣配めでたく、なべてならぬ匂ひ、女房の衣の音なひまで、いと心殊にて、權大納言立ち添ひ上り給ひぬめりと見て、人や見付けんなど、あながち愼むべきならねば、いとなよよかに、やをら立ちかはり入りて見給へば、御前に殊に人もなし。皆御送りに上り、留りたるも立ち班れたる程なるべし。帳のもとまで寄れど見附くる人も無ければ、引き上げて見れど、內には人も無し。怪しと見れば、帳の前の東の側に臥いためり。打見付け給へるより、嬉しきも、心の靜かならぬぞ餘りなる心なるや。たど〳〵しき程にはた有らねば、歩み寄りて見給へば、若君を傍にて、衣なども一つに打ち着せて、大きさはたゞ同じ樣にて、臥し給ひたり。あはれに見ゆるに、女君は女房にこそはと見えも留め給はざりつるに、艶に染み深き匂ひの、さと薫りたるに驚きて打見給へば、男の寄り來るに、(二)上の違ひておはしましけると思ひ寄るに、いと云はむ方なく、昨夜よりも心地惑ひ勝りて、引き被きて、若君を引き寄せて、汗も流れわなゝきたる氣色を、(四)さ思すなめりと見ゆれば、暫し我と知られで心見むと思せば、(五)ひィぷとも云ひ出でず、裝束など引き解き、やがていと

(一)上の例ならぬ―寢覺上の。

(二)若君―雅子君。

(三)上のちがひて―帝が尙侍と行き違つて。

(四)さ思すなめり―自分を帝と思ふのであらう。

(五)ひともー「ふともー」の方宜し。

一世の源氏、近き帝の御孫、先の關白左大臣の上にて、輦許され給はん、難かべき事かは。いと怪し」と打ちつぶやきて、案内申させ給へば、大臣も御前に侍ひ給ふ。故關白殿の女房患ふ事ありて、罷出給ふべきを、車許させ給ふべきよし、登花殿い尚侍申させ給へるよし、頭辨奏するに、上の御顔の色移ろはせ給ふ。殿はた、疾くも出だいてばやと思せど、昔より聞き置かせ給へる事あるにより、かたはら痛くて、言混ぜ給ひ難けれど、いと心もとなさに、内大臣「許させ給ひたらんに、何でう事かさふらはん」と申し給へば、物も仰せられで、かれはかゝるついで、いさゝか用意するけぢめ見せて 帝「思ふ事のあるにより、暫しと思ふなり。先づ今宵は宮出できせ給ふ騒がしきやうなり。異なる事なくば、今二三日あひためらひて罷出よと物せよ」とぞ仰せらるる。御氣色とよせ三字イこゝまで申すべくもあらず、籠め果てて（ゐんと思し召すにこそあめれと見聞くに、顔の色違ひやしぬらんと覺ゆるを、わりなくして侍ひ暮らし給ひて、夜さり大宮罷出給ふに、必ず侍ひ給ふべけれど、今宵は内に侍ふべき事あればと、やをらすべり留り給ひぬ。

中宮は明日より嚴き御物忌にて、上らせ給はず、承香殿は里に出で給ひにしかば、后大殿三字イ左大臣の女御宣耀殿と聞ゆるぞ侍ひ給へど、草のゆかり懐かしくも思ひよそへらるるうちに、いとらうたき氣色したる人なめるを、一なほ此の人暫し云ひ止め

(一)大臣―内大臣。

(二)殿―内大臣。

(三)かれはかゝるついで―誤脱あらん。帝の御心。内大臣はかう云ふ機會に寢覺上を退出させようとするのであらうと、帝はいさゝか用心なされる樣子を態度に現して、などと云ふやうな意味であらう。

(四)御氣色とよせ―「御氣色言交ぜ」の方をとる。

(五)籠め果てて―寢覺上を宮中に強ひて止めようと。

(六)かならず侍ひ給ふべけれど―大皇宮の供奉をしなければならないのであるが。

(七)后大殿―「左大臣殿」の方正し。

(八)草の緣―源氏物語若紫「れは見れど寒とぞ思ふ武藏野の露分け佗る草の緣なり」等による。登花殿尚侍は寢覺上と同じく義母子になる。寢覺上と緣のある尚侍が懐しく思はれるとの意。

(九)この人―寢覺上。

女房など、「殿上人、登花殿に今日立ち返り御消息もて參る、なほ人に勝れたる御覺えなりや」と思ひつるも、心知りにさぞかし〳〵と心得るに、上のいといたう、思し入り打眺めさせ給ふ御容貌有樣の、匂ひやかになどこそえおはしまさね、氣高く艶かせ給ひて、艶にをかしうおはしますを、まいてさばかりいみじき言の葉盡くさせ給ひつらんを、さりとも見奉りつらんかし。さは云へど、なべての人には、異にもはイとや思ひ較べ奉りつらんと思ふにぞ、忝けれど、いみじう妬う腹立たしきや。例參り給ひては、先づかの御方に立ち寄り、出で給ふとても必ず避き給はぬを、今朝は御前に參らんと思いつるに、かゝる事を聞き付け暇なくもあれば、え立ち寄り給はぬを、登花殿の上は、雅子君「殿參らせ給ひぬ」とて、若君の入りおはしたたるにも、先づ心騷ぎ勝りて、およずくるまゝに、ようかしづきたらん者の姫君などのやうに、貴に懷かしく、美しげなる、打見給ふにも、まいて殘りなからましかば、此の御爲めなどいかに心苦しからましなど胸のみ潰れて、返る〴〵隙無う恨み盡くさせ給ふ御文も、督の君の見給ふらん事さへかたはら痛うて、いかでかゝる事を見ず、とく此の百敷の中を離れなばやと、暮れ行くも靜心なきまゝに、權大納言の參り給ひつるに、寢覺上「亂り心地のいと惡しく侍るに、今宵なども罷出なばや」と聞え給へば、權大納言「げに久しうならせ給ひぬかし。など輦の宣旨は澁らせ給ふにか。我が御身

(一)心しりに―内大臣は事情を知つてゐるので、
(二)上の―帝の。
(三)なべての人には異にもはや―普通の人とは違つてゐると、寢覺上は帝の御有樣な自分と思ひ較べたらうと思ふと。
(四)かの御方―登花殿の方に。
(五)かゝる事を聞きつけ―かうした不愉快な事柄を聞きつけた上に、又暇もないので。
(六)若君―雅子君。
(七)おはしたたる―「おはしたる」の誤ならん。
(八)およずくるまゝに―雅子君が成長するに從つて。
(九)殘なからましかば―名殘なく内大臣が來ない樣になつたならば。内大臣は雅子君の父である。
(一〇)御文―帝の御文。
(一一)權大納言―寢覺上異腹の兄。一二卷に於ける左衞門督。

(一)はにも触れず—齒にも触れず。實際に帝と寢覺上とが關係があつたならその事をば少しも口に出さずに。
(二)うしろむ—輔佐する。寢覺上の爲に辯護する。
(三)これこそあれ—寢覺上である
(四)宮と申すとも—たとへ女一宮が大皇宮の姫宮であると云つても。
(五)立ちまさりて—寢覺上以上に
(六)かしこき御前—帝。
(七)云ふながら—「云ひながら」の誤か。
(八)氣配有樣—寢覺上の。
(九)事もあれば—帝は。
(一〇)片端もうち御覽じては—少しでも寢覺上を御覽になつては
(一一)さ思しぬべき人ぞかし—誰でも一度見れば帝の樣に、物懸さるを得ない樣になる寢覺上だ。
(一二)よそには少し—渡れ—寢覺上以外の女にも少しは通ふ事もあるが、寢覺上を思ふ心は極めて深いのに。
(一三)いと憂き人の—契のつらさなれば—寢覺上人の宿命は極めて不幸なものだから、今度の事についてもどんなものであらうか。帝に召される樣になる事はないだらうか。もしさうした場合には。「いと憂き人」とは寢覺上を指す。内大臣につれない人の意味。
(一四)えも立ち寄り給はず—寢覺上の居られる登花殿には。

君も眞實にはあらん事をば、はにもふれず、いとかく、後むべきにもあらずと、心ざしの引く方に思ひなすに、此の人のをこがましく見ん所も憚られず涙ぐまれぬべきを、念じて、内大臣、かう問ひ聞えつとも、な洩らい給ひそ。あいなし」と口固めて立ちあがれても、異事なく、胸に滿ちて、かうのみ懸け離るれど、遂の我が世のとまりとは、これこそあれ。宮と申すをイとも、味氣なや、立ち勝りてもてない奉るべき事かはとのみ、限りなく思ふに、中に隔つる契のありけるだに、取り返さまほしう口惜しきに、まいてかしこき御前とは云ふながら、さばかりも氣配有樣を御覽せられけんは、いと愁はしう思ひ續けられ、いと心地難かしうなりぬれど、奏し給ふ事共ありて、御前に侍ひ暮らし給ふ。した安からず、さりげなくて、目を付けて見奉り給へば、心のなしのうちつけ目にや、事もあれば眺めがちに、例ならぬ御氣色にて、人の申す事も聞し召し入れぬ顏なるを、片端も打御覽じては、必ずさ思しぬべき人ぞかし。我こそ昔より今に堪へ難きを念じて、他所には少し渡れ、いと憂き人の契のつらさなれば、いかにぞ、召し取られたらん心地何心地しなんと、我も異事なく思ひ鬱ほれつゝ、事繁き日なれば、えも立ち寄り給はず。又如何なるにても、名殘思ひ亂れて、臥し入りたらんに、よも對面せんと云はんを聞き入れじと、推し量るに、いみじう妬ければ、あながちにも立ち寄らず、さりげなくて見聞けば、

(一)からー枯聲
(二)この御仲は―内大臣と寢覺上との御仲は。
(三)後安くも云ひけるかなともー御心配もなく内大臣に宣旨君が御返事したものだと寢覺上が思ふ樣に寢覺上に聞いて戴きたいと思つたので。
(四)御氣色―寢覺上の御樣子。

からイラ聲に問ひ給ふも、さぞかしと心得たれば、遂には此の御仲は一つなるべきに、さこそ云ひしかとも聞え給はんを、洩り聞き給はんがいみじく心苦しきに、後安くも云ひけるかなともイナシ洩り聞き給へかし(イと)思へば、宣旨君「世にも有難くあはれなる御氣色かなとのみ聞き侍りつれば、無からん事を聞えさせ告ぐべきにもあらず。在らん事をいとかく問はせ給ふに、あながちに隱し聞えさすべきやうは、あべきにも侍らず。たゞさばかりを、聞きイ消えぬ許り、いみじく思し惑ひたりつる御氣色のすゞろに心苦しうてこそ、立ちも離れ侍らず、御前に參イあられて侍りつれ。御答などの少しも馴れ〳〵しく世づきたらましかば、立ち出で侍りなまし」とて、今朝上の宮に申させ給へる樣など、細やかに語り聞えて宣旨君「御文侍りけれど、夜より患ふよし尙侍殿ぞ聞えさせ給へりける。宮の御返もさぞ侍りつる。いかに世を怪しと思さるらん。見奉る(イに)すゞろに心苦しく、つゆも隈あらん後めたさは罪得ぬべく、見えさせ給ふ」と云ひなして、世をいとふさはしからずと思へる氣色の現なるを、宮の遂に構へ出でさせ給ひつる事なめりかし。怪しく例ならず長居し給ふとは見つるぞ。尙侍の事を逃れにしかば、朱雀院にと構へ給ふ。そも殊の外なる事と逃るる便を、良いついでと思し構へ、宵渡して上に御覽ぜさせ給ひけん程を思ふに、今より後こそあらめ、昨夜までは女の怠りなべい事にはあらずかしと、をこがましけれど、宣旨の

(五)立ち出で侍りなまし―自分は聞きかれて外に出て行つてしまつた事でせう。
(六)宮の遂に構へ出で―以下内大臣の心。
(七)長居し給ふ―寢覺上が宮中に長く居續けてゐる事を指す。
(八)朱雀院にと―朱雀院は帝の御父。朱雀院にと寢覺上に話があつたのだらうか。不分明な處である。

色見たる人やはあると思へば 宮旨君「何事にか侍らん。聞く事ありとも覺え侍らぬを、承りてこそは」と答ふれば、内大臣「見聞く事なしと宣ふに先づいと心憂し。御心をばかうは思ひ聞えずこそありけれ。實にあながちに訊くべき事にはあらねど、また世に少し珍しき事はさぞあるかし。異人には、かけて問ふべき事かは。御心知るゝりと聞けば、うちつけにゆかしきぞ」とて「帥君こそ(一)ささの事云ひつれ」と云ひ出で給へるに、あいなく我さへ胸打塞りて、(二)かの君は知るべきやうなし。宮の寄りて、さゞめかせ給へるは、此の事なりけりと思ふに、いとうたてあれば、宮旨君「あなうたて、むげにいたうまめだちても云ひない給ふかな。昨夜宮の『罷出なんとす、心のどかに自聞えさせん』と立ち返り〳〵聞えさせ給へりしを、上御覽じて『昔より名高きを、ゆかしう思ひ渡るを、如何で見侍らん』と切に聞えさせ給ひしかば『さば、夜さり渡りゝして御覽せよ』と聞えさせ給ひて、御物語など侍りつる程に、渡らせ給ひて、御覽じ餘り、立ち出でさせ給ひつるに、御前に侍ひつる心地こそ、皆人心合はせて後めたかりつる樣にや、心得思すらんとわりなく覺え侍りつれ。『昔より心ざしの深きゝさ、登花殿に渡る度ごとに自と聞ゆるを、情なくて聞き入れ給はねば、かゝる折にと覗ひ參りつる』などこそ仰せられつれ。そは道芝要るべき事にも侍らざりつる物をと、うたて總角までは」とおいらかに云ひなすを 内大臣「さのみはあらじ」と

(一)ささの事―さ樣さ樣の事情を

(二)かの君―帥の君。

(三)道芝要るべきことにも―道芝(道案内)を求めて尋ねる程の事でもないのに、まして、どうして事實上の關係などありませうか。總角については前述。

(一)あげまきか―源氏物語總角卷「結び籠めむ」なる事實上等の關係はあつたのかどうか。

(二)道芝にて―狹衣物語「たづかぬべき草に枯れて誰にぬれまし道芝の露」の如く、道案内であつてといふ意味。

(三)女の御樣のすゝみざまは―寢覺上の態度の方が却つて積極的で。

(四)大殿の名殘近き程―故關白の死後間もない時は、その悲しみで人にも靡くなどと云ふ事は決してなすべき事ではないと思つてゐたのであらうが。

(五)さばかり氣高く―この樣に氣高く又貴く、心深く艶かしい帝の御有樣を見ては。

(六)さりや―一本の「さもや」を取る。

(七)ありのまゝに云ふべき事にもあらず―例へば登花殿に行つて寢覺上に聞いた處で、寢覺上が昨夜の出來事をありのまゝに云ふだらう事でもない。

(八)消息を賜はさせつれば―一本に「消息せさせ給ひつれば」とある。

(九)この宮には―大皇宮方の女房の中では。

(一〇)宮の御後―女一宮を北の方となされてからは。

(一一)いとう―「いたう」か、「いとと」の誤脫か。

(一二)宮の御前へも―內大臣は大皇宮の御前へも未だ參らず。だから未だ昨夜の出來事の話を聞いては居ない筈。

(一)あげまきか」と問ひ給へば、帥君「更なり。その程は宣旨の君ぞ、詳しうは道芝にて知り給ひつれ。女の御樣の進み樣なりける」と云ふに、とばかり物も云はれず、いで、さはあらじものをと思ひなせど、人の心さもあらん、大殿の名殘近き程の哀れにこそ、懸け離れゐるまじき事とも思ひけめ、さばかり氣高く貴に、心深く艶かせ給へる御有樣見奉りて、人には異に、實にさりけるや打思ひ靡き奉りぬらんと思ふに、妬く佗びしきに、奏すべき事のあるも打忘れて、此の事の初のいみじうゆかしう聞き果てまほしきに、登花殿に行きて問はんに、有りのまゝに云ふべき事にもあらず、我をばいよ〳〵思ひこそ離れぬらめ。宣旨の君詳しう知りたるに問はんと思して、局に立ち寄りて、消息を賜はさせつれば、宣旨君「なに事により」と驚きながら下りたり。年卅に多う餘りぬる人なれど、人がら容貌いと若く淸げに、心ばせある樣の人に異なれば、此の宮には、此の人をぞ時々立ち寄り語らひ給ひける。宮の御後はいと煩はしと、愼ましながら、かやうに時々はわりなく忍びつゝ、思し忘れなんもいみじく心憂かるべく覺ゆるに、今日は例ならず、明かなる晝間に、立ち寄り給へるも怪しく覺ゆるに、打ち微笑みて、內大臣「只今聞く事のあるを、見聞き給ひけんまゝに、確かに細かに宣ひてんや。さてぞ御心の程も知るべき」と宣へば、此の事にやあらんと思へど、いとうさは誰か聞えけん。宮の御前へもいまだ參り給はず。我より外に氣

言葉にも情添へぬ樣のあらん。見る目もてなしのさばかり艶き、ゑえかなる程よりは、いと物はしたなく、心強き程にぞ侍りける。さはれをこがましきこと、世の聞えも輕々しく、女房の中にも散らし侍らじ」と聞えさせ給ふを、宣旨の君も御前に侍ひて、げにとをかしう承るに、まことにもて離れたりけりと見ゆる御氣色を、いと本意なく口惜しと宮思し召して、添く、いみじくとも、たゞ人と等しく思ひなぞらへ聞ゆべき事なりやとて、いと目覺ましく思し召す。罷出給ひなん今宵の程も後めたきに、內の大臣に、如何で上の立ち寄らせ給ひたりし氣色疾く聞かせて、思ひ疎ましませんと思し召しければ、帥の君と聞ゆる人の、その大臣にも馴れて、問はず語りに打聞えなどしつべきを、敎へさせ給ひたりければ、何時しかと待ち聞ゆるに、六日御物忌に閉ぢ籠りて、今日ぞ參り給ひたる上にて奏し給ふべき事ありて、此方に參り給へれど、宮と御物語聞えさせ給ふ程なれば、隱れの方に入りて、帥の君の居たるに、內大臣「とみの事にて、奏すべき事あるを、何時よりおはしますぞ。御前に指し出でん、便なかるべくや」と問ひ給へば、帥君「昨夜よりかくておはします」などぞ答ふる。內大臣「例ならず、さは」と思ひも寄らず問ひ給へば、帥君「登花殿の上渡り給へりしに、御對面ありて、明け果つめりつ。今朝もいとゝとくかくてこそ」と云へば、胸ふと塞がりて、顏の色變りぬらんと覺ゆれど、內大臣「なぞの御對面ぞ。若し

(一)散らし侍らじ—昨夜の出來事を女房達にも知らせまい。
(二)宮—大皇宮。
(三)添くいみじくとも—どんな事であらうとも、恐れ多くも帝を普通の人間と。
(四)上の立ち寄らせ給ひたりし—帝が寢覺上の許に立寄つたといふ樣子を、早く內大臣に知らせて寢覺上を疎く思はせようと。
(五)帥の君—女房。
(六)その大臣にも—內大臣にも。
(七)敎へさせ—寢覺上に帝が逢つて、御話をなされたといふ事を御敎へになつたので、帥の君にいつかいつかと內大臣の來るのを。
(八)うへにて—帝に。
(九)登花殿の上—寢覺上。

せましかば、限りあらまし物をと見思し取る。かう宣ふを聞き給ふに、いみじく心苦しげに泣き入りつゝ、侍「なか〳〵殿の御心掟よりも細かに何事も御覽じ入れつるを、年頃も思ひ給へり。まいておはせで後は、片時も御邊離れ聞えさせず、起き臥しも見奉り馴れ侍るに、萬心細さも嘆かしさも打忘れてこそ侍るに、立ち離れ奉りては、片時あるべき心地もし侍らぬを、さらば添ひ聞えさせてこそは出で侍りなめ」と宣ふ樣も、いみじうあはれなり。

大皇の宮の御方より「昨夜は大夫に云ふべき事侍りし程に、早寢入り侍りにけり。歸らせ給ひつらんも知らず、如何に怪しく、さは云へど老の積りのほけ〳〵しさ、かくこそはと口惜しく思ひ給ふる。暮になん罷出侍りぬるを、自はいかでか」と書い給ひたるを、心(五)〔イ憂〕く、口惜しければ、督の君して「夜より亂り心地いと苦しく侍り、とくイて自御返事聞えぬにて、推し量らせ給へ」とばかり書かせ奉り給ひてやみ給ひぬ。

(六)大宮は本意(七)の事し損じつと思し召すに、夜さり出でさせ給ふべければ、上渡らせ給ひて、御物語りせさせ給ふついでに、帝「すべて思ふ氣強く侍りける人を、ことわりとは云ひながら、いとはしたなくもてなし侍りつるに、我が身の程知られてこそ歸りにしか。内の大臣の方の心のいみじく深きにこそ侍りけれ。(八)いかでかさはなげの

(一)殿―尚侍の父故關白。
(二)おはせでのちは―父が死んでからは。
(三)添ひ聞えさせて―私も一緒に
(四)自らはいかでか―自らいかでか參らんの意。
(五)心く―一本の「心憂く」をとる。
(六)大宮―大皇宮。
(七)本意の事―帝に寢覺上を靡かせようとした事。
(八)いかでか―これが自分でなく内大臣に對してだつたなら。

(一)御消息賜はせたる人は！一本の方を取る。寝覚上は

(二)さばかりもあはつけう―昨夜あんなにかろ〳〵しく私の参りましたに、だしぬけに云ひ寄られた事に対しての世間の評判や。

(三)いみじう覺束なく―貴女（尚侍）の事を非常に氣掛りに思ひ申して、かく宮中に一緒について参りましたが、あゝした帝の御振舞がある以上、今迄通りにこれから参上して貴女の御面倒を見る事も出來ないと思ひました。

(四)昔の御かはり―散關白のかはりの形見としては、貴女以外に誰を求めませう。

(五)さりとも其人あればと―私は退出しなければならないが、さうかと云つて、私の外にこの人が居るからと安心して、貴女の世話を讓る事の出來る樣な人もあはませんし。

(六)大空の―大そうの」の誤か。

(七)大方の事―「内々の御有樣は」と寸照的な言葉、一通りの事柄こそ、自分以外の誰でも、あの樣に參内以前には面倒を見て呉れるだらう、少しは面倒を見て呉れるだらう、が、表立たぬ内内い事柄い世話は、自分以外には誰がするだらうと。

(八)親樣に頼み聞えさすべうもあられど―寝覚上の若く美しい樣子は、尚侍の親樣と雖て尚侍が頼み聞ゆる事い不自然な程であるけれど。寝覚上は尚侍の繼母である。「聞えさすべ

えさせ交さんをいと憂くのみ覺ゆれば、督の君に一御消息にて（こせうそこ）二字（イた）まはせたる人は、此の曉方より、いみじう苦しげにてなん、かゝこそより聞えさせ侍るめると書かせ奉り給ひて、督の君に添ひ臥し給ひて、大皇の宮の御心構へ、今宵淺ましかりつる事も、うらなく語らひ聞え給ひて、寝覚上「さばかりも淡つけう、行く手に御覽じつけられたる、世の音聞き、人の如何に思はん事は、罪逃れやるべき方なく侍れば、いみじう覺束なく、思ひ聞えさせ侍るとも、かやうにはえ今は參り見奉るまじう思ひなり侍りぬる。如何なるにつけても、片時忘れ聞えぬ昔の御かはりには、又誰をかは。

(五)さりとも其人あればと後安く思ひ讓るべき方なく―、心苦しき御有樣を、さすがにかかる大空の御交らひに出だし立て奉りて、大方の事をこそ、誰もさ云ひ初めしをとばかりも思さめ、内々の御有樣は、我より外に誰かはと見奉る心苦しきになん、盡きせず、か許り飽き果て侍りぬる世をも、えひたぶるには思ひ捨つまじう侍る。露の世に廻らひ侍らん限り、里ながらは、心の到らん限り、何事も忘るべきにも侍らず、かやうには思ひきこえさすまじかめるを、御交らひの程、女房の用意などよく教へ整へさせ給へ」と聞え給ふまゝに、堰き難う悲しげなる御氣色の、若く美しげなる樣は、親樣に頼み聞え增すべうもあらねど、思し扱ふ樣は、まことの母をばおは侍の繼母である。「聞えさすべ

「う」の方をとる。

りともと思ふに、心慰むもいとはかなく思ふ。さィまも人に似ず憂かりける身の有様かなと、昔より今を搔き昏らし、明けぬれど起き上り給はぬを、御氣色の（ィい）みじう耐へ難げなるを、（一）いかなればと見奉り驚かれつゝ、尙侍もえ起き出で給はぬ程に、藤典侍御使（二）に參りたり。（三）さし延へて侍る御消息のあるも常の事、人はあやめぬを、胸打潰れて、いとゞのみ沈み入られ給ふ。典侍「御返必ずとく賜はりてとこそ侍りつれ」と心もとながり居たるを、げに中々心しもあり顏なる、怪しければ、頭許りを擡げて、御文を引き明けたれば、盡きすべうもあらぬ事を書き續けさせ給ひて、

帝「見やしつる見ずやありつる春の夜の夢とて何を人に語らん

をこがゝしく、我がしこに思し出づらんをさへ、思ひやるに、いと消えぬべし」など書き亂れさせ給ひつ（二字ィへる）、見所ありぬべけれど、見も果てず、いたう顏變りするまで泣い給ひける氣色しるし。今もかごとがましう押し拭ひつゝ（寢覺上）遂にあいなく名さへ流れぬべきこそ今まで永らへにけるさへ悔しけれ。散らむもむづかし。（四）取り隱いてよ」と宣ふ御氣色のいと怪しきも、少將は見奉りあやめて、（五）此の御文を押し卷くまゝに、（少將）遂に宮の御心構へのありけるなめり」と思ひ寄るに、いと心苦し。如何で、深う情あり、あはれと覺えんと、あながちに御心（六）繕ひし給へる程を、かたじけなく有難しと思ひ寄らん人は、思ひぬべけれど、御返などあはれを知りげに聞

（一）いかなればと―尙侍は寢覺上の様子が變なので、どうしたのかと。
（二）御使―帝の寢覺上への御使。
（三）さしはへて―わざ〳〵帝からの寢覺上へあてたお手紙があるのは常の事なので、誰も不思議に思はないけれど。
（四）散らむも―この手紙が洩れ散るのも面倒である。
（五）少將―女房。
（六）御心繕ひし給へる―特に心用意をして書かれた御文を。

にもあらず、いみじう心盡くしに、物思ひ佗びさせんとあやにくに、結び置きけんつらさも、疎ましからぬにもあらず。今となりて、はた、いとやんごとなく、さばかり恐ろしき樣に定まり給ひたるを、我は何の賴もしげある身の際にてもあらで、今更に靡き依り、憂しとも つらしともさいまだならぬ方の恨みをさへ添へて、思ひ盡くさせんと結び置きける身の契とならば、大方に情々しう云ひかはし賴みをかくる方は有りとも、眞實には打解けじと深う思ひ染みし心ながらも、心强くのみ思ひ離るる事のみ思ひしかども、それはたゞなる時の心のすさびにてこそありけれ。かゝる事の節には、萬を消ちて、たゞかの人の事こそ、恐ろしうも愼ましうも、なのめならず覺えつるは、おぼろげならずしみにける心にこそと思ひ知らるゝにさへ、なぞいとさしもありけるも、かゝる人の御心構へ、名を流すべきも、たゞかの人の御ゆかりぞかしと、いと疎ましさは、まさる物から、思ふも物の心地して、いかに宮はんとすらん、いかに答へやらんとは、さしまじりつゝ覺ゆるにつけても、まいて何事に亂れ押し立ち侍る心地のあらまし。いとゞ如何に置き所なく佗びしく、誰にも目を見合はせず、いかばかりなる心地せまし。いみじき名は立つとも、心の中には紅の神にも、さ

(一)結びおきけんつらさも―寢覺上自身と内大臣とを、結びつけて置いたらしい前世からの契とのやんごとなく―内大臣が朱雀院大皇宮の女一宮を、北の方として心からまことにあるる事を指す。

(三)まことには―内大臣には打解けまいと。

(四)それはただなる時の―さう決心したのも、それは何もない普通の時のたはむれであつた。今夜の樣な非常な事の場合には。

(五)たゞかの人のことこそ―ただの人の事だけが。

(六)おぼろげならずしみにける心にこそ―並一通りでなく、内心で内大臣の事が しみ込んだ事だと。自分の

(七)さしもあるも―石山に隱れなければならぬ樣な破目になり浮名を流したのも、元はこの内大臣の御心構へ。

(八)名を流すべきも―今夜の事で浮名を流すべきも、それもこの内大臣にゆかりのある大皇宮の計事から出た事である。

(九)思ふも物の心地して―源氏物語藤袴の歌「忘れなむと思ふも物の悲しきを いかに樣にせむ」等によるも。

(一〇)いかに宮はんとすらん―内大臣が今に夜宮に聞いたなら何と云ふだらう。自分は又何と答へたものだらう。

(一一)何事に亂れ押し立ち―今後どの樣な仕打をせられてもそれに對して頑張る丈の强い

(一二)紅の神―正しの意味。枕草子

心があるだらうか。

いかにしていかに知らまし いつはりを實にたのめる夢なら

かりそめに、心の中は人妻にはなるまじ。

らせ給ひぬれど、つゆまどろまれさせ給はず。なべてならぬ匂ひばかりは、御衣にいと深く移りにけるを名殘にて、云ひ知らず懷かしく哀れなりつる氣配有樣の、たゞ御身に添ひたるやうにて、さても淺ましう心強かりつる人の心かな。さばかり思ふにては、後の逢ふ瀨世にあらせじものを、などしつるをこがましさぞと思せィナシすが、いみじく妬きに、戀しさとりもあへず、かくのみ覺えば、いかで永らへやるべきにかと、泪に浮きて明かさせ給ひつ。

女は登花殿に歸り給ひて、督の君の御方に打臥し給ひて、恐ろしからん夢の覺めたらん心地して、今も現とも覺えずぞ淺ましさや。かゝる便に事寄せて、先づ參りたる樣に、世の人聞き思ひ云はん、憂く淡つけう心憂きを、親兄弟も、昔も今もかゝる名をのみ色をかへつゝ流すよと、打聞き思さん御心どもを始め、我が心の中こそ有難く逃れぬるぞかしと思へ、かの御方樣より云ひ流されんずべき方あらじを、何の科をも消ちて、用ゐ思したりし亡き御影もいとほしく、近き程さすがに、見たく　三字イ枝々繁くなりまさりて、聞き嘆かれん程の古への憂かりし節々にも、これはさし勝りて、方々思ふに、なのめならぬ大方の世の有樣をば思ひも寄らず、いみじかりつる心地の惑の中にも、まづあないみじ、內の大臣如何に聞き思さんと打覺ゆ事のみ先に立ちつるも今思ふぞ怪しき。昔より世をも（イ身をも）憂き物と思ひ知り嘆かしきも、誰故

(一)心強かりつる人の心かな―心強かつた寢覺上の心である事だ。

(二)などしつるかこがましさぞ―どうしてあれほど、寬大な態度をとつて了つたのであらうか。

(三)かゝる便に事よせて―尙侍の御寢覺上見たと、以下寢覺上の心。

(四)かゝる名をのみ色をかへつゝ―かうした情事い浮名を品をかへつつ。

(五)かの御方ざまより―大皇宮の方から、評判をたてられるのは防ぐべき方法もない。

(六)亡き御影―故關白。

(七)繁くなりまさりて―枝々繁くなりまさりて」をとる。

(八)かたがた思ふに―かれこれを考へたがた、思ふに、甚大なれ世間體の事なるは頭に浮ばず、非常な心惑ひの中にも、まづ「なにいやこの事だ、內大臣がどだんの事を聞いて、思ふ思はくだらう」と、內大臣の思はくだけが先立つて考へられたのは、今思ひ出しても妙に思はれる。

(九)打覺ゆ―「打覺ゆる」の誤脫か

(一〇)誰故にもあらず―誰の爲でもない、內大臣の爲である。

(一)かきまぜのよろしきだに―普通の姿のよい女であつても、衣の色をこく出した打目に映發する月光をうけた姿は優美であるのに、ましてこのすぐれた美貌の持主たる寢覺上であるから。打目とは、艶を出す爲砧にて打ちたる痕。

(二)雲の上に住みはつまじき―宮中には住みつく事の出來ない貴女なるを知つて、自分の心は何も考へる事が出來ないほどになりました。拾遺集「君をのみ思ひやりつつ神よりも心のの空になりし雪かな」等の「心の空」に同じ。「雲の上」は宮中。

(三)心をのべて―心を落付けて。

(四)雲井には―意明瞭。影は光。

(五)御氣色―寢覺上の御樣子。

ぞ御供の人々各々打ち臥しつゝ、有明の月の、明方になりにける霞にも障らず、さやかにさし入りたる影に、打ちたる御衣を上に着給ひたるに、隙なくかゝれる髮の艶も、ひとへに輝きあひたる御頭つき容態、扇さし隱し給へる樣など、たゞかきまぜのよろしきだに、色濃き打目には、もてはやさるゝ月影は、をかしう見ゆるを、まいて餘りゆゝしく、此の世の者とぞ見えぬや。よき程にゐざり出で給ひぬるを、蔭の方に引き留めさせ給ひても、なほいみじのわざやと御泪を盡くさせ給ひつゝ、

雲の上に住み果つまじき月を見て心の空になり果つる哉

御供の人々の聞くらん程も、いとわりなく苦しきに、聞えさせん方なけれど、ただ疾く逃れ出でなんと思ひに心を延べて、

寢覺上　雲井には及ばざりける身を知れば暫しも住むに影ぞはまばゆき

云ひも果てぬやうにて、せめてすべり出で給ひぬる名殘、とばかり見送らせ給ひて、

帝「などて、をこゝとがましく、かゝる逢ふ瀬は難くこそあらめ、あながちに心苦しさを見知りつるぞや」と悔しくいみじく思さるゝに、人目苦しからずば、やがて立ち續きぬばかりの御心地ぞせさせ給ふ。宣旨の君は、いとほしく心苦しかりつる御氣色のいみじくあはれにて、え行きも離れず、此の邊に侍ひ給ひけるを、起させ給ひて御供に出でおはします。兵衞內侍ばかりにゝして歸らせ給ひて、いと密かに夜の御殿に入

(一)志賀の浦に御命をかけしく―一本の「かけて」の方をとる。千載集「思ひきや志賀の浦浪立ち返り又あふみともならむもの」等の如く、またの逢ふ瀬に御命をかけて。

(二)うらもなし―心もない。浦にもかけてゐる事勿論である。

(三)後にまた―意明瞭。

(四)泪のみ流れ逢ふ瀬―涙のみ流れて、逢ふ瀬は何時とても、憂きに憂きけふ名を流す事許り加はり、浮名を流す事でせう。

(五)憂きに憂きけふ―「けふ」は「今日」か「一本の」「添ふ」ならば意分明である。

(六)思し出でじ物を―自分を思ひ出しては下さいませんでせうに。

(七)我が大君の―「いかるがやとみの小川の絶えばこそ我が大君の御名を忘れめ」(拾遺集卷二十)の歌によりの「君の御名を忘るる事あらじ」の意。

(八)歸り給はんを見てこそとて―寢覺上が御歸りになるのを御覽になつてから出ようと、帝は急には部屋を御出にならないが。

(九)ただ逃れ出づる―寢覺上は。

(一〇)見送らせ給へば―寢覺上を帝が見送りになる。

ひ知らずはあらじかしと、思し召す。(一)志賀の浦に御命を懸けしく　(二)空イて、立ち出でさせ給ふべきうらもなし

帝　後に(三)のちまた流れ逢ふ瀬のイを頼まずば泪の沫と消えぬべき身を

眞實に搔き昏らさせ給へる御氣色の、心深く、艶かせ給へる御樣の、いとなべてならず見んに、限り無くぞおはしますや。立ち退かせたぶべきなめりと見え給ふに、今ぞ現し心出で來る心地する。

寢覺上　泪のみ流れ逢ふ瀬は何時とても憂きに憂きけイモふ名をや流さん

といみじく打嘆きたる氣配の、身に染むばかり思さるゝに、別れ出でさせ給ふべき方もなく、帝「内の大臣に靡き果てなば、いみじく痴れてすかされし人ありきとだに、思し出でじものを」と恨みさせ給ふに、「我が大君の」と答へ聞えさせて、内の大臣の面影は、只今も此の邊に立ち添ひて見ん心地のみして、空恐ろしく難かしく思ひ遣る心は、夢にもや見ゆらんと思ふさへぞ佗びしきや。帝「返すゞ、明日の暮をたゞかやうに」と宣はせもやらず、たゞ扇ばかりを形見に取らせ給ひて免させ給ふ程、云へば世の常なり。(八)歸り給はんを見てこそとて、とみにも退かせ給はねど、(九)たゞ逃れ出づる嬉しさに、また心地も惑ふばかり覺えて、今だに疾く此の憂き瀬を離れなんと思せば、いとやをら出で給ふに、やがて立ち添ひて見送らせ給へば、(一〇)二間ばかり隔てゝ

(一)便なげに―不都合だと。
(二)所せからず―窮屈でなく。
(三)又人をも並べずば―他の女御方を並べて見るよりも。寝覺上一人だけを。

(四)定まり果て―内大臣に引取られ。

(五)かばかりはいつもいつも―今の御話位なら、何もわざ〳〵此處に御呼びになつて申し上げる程の事でもないのに。

(六)御もしつかひ―文字遣か心遣等といふ程の意味か。

(七)從ひ聞えたる―貴女の云ふ通りに服從した自分の心の愚かさを、思ひ知らない樣なら承知しません。

(八)我が御身の―自分の身分が帝と云ふ誤魔化しのつかない高位に上つたと云ふ事も却つて寝覺上を戀する餘りには、その地位が邪魔をするので後悔せられる。

をも(ィの)どめて、さはれ世にあるまじき事と誘り深く、内の大臣も、便なげに思ひたらば、かう所狹からず、心安き樣にて、又人をも並べずば、起き臥し見馴れんに增す事はあらじとなん思ひなりにたる。これに懲り給ふとて、内などに入る事難くなり給ひたらば、只今年の内に、此の位をも捨て、八重立つ山の中を分けても、必ず思ふ本意叶ひてなん已むべき。いみじく思ふ樣に、定まり果て給ひぬとも、それをさて聞くべきにもあらず。人の見聞かん所なども、よろしく辿るべきわざにもあらざり(イけり)と、すべて現し心もあるまじ、それは我も人もいたづらになるべかりける事の樣かなとなん覺ゆる」と云ひ知らぬ事どもを宣はする程に、春の夜は、はかなく明けぬらんかしと覺ゆるに、寝覺上「人如何に思ひ侍らん。かばかりはィナ何時も〳〵彼方にて、いとよく聞えさせ待りぬべきを」と云ひ出づるを、まことにいと思ひ入りけるも、少しはげにことわりなれば帝「いとようこそ餘り心安き御ィさもしつかひなれ。かばかりいみじく、從ひ聞えたる心の痴れ〳〵しさを思し知らぬ物ならば」と、萬に恐ろしげに誓ひ聞かせ給ひつゝ、今宵は中宮上らせ給ふべき夜なるに、人も如何に怪しと尋ね思ふらん。我が御身の紛れ難く所狹くなり初め給ひけんも、此の人故は悔しくも、厭はしくも思しなられさせ給ひつゝ、明日は逢ふ瀬と頼むべくもあらざら行カめる人の氣色に、ただ我が情ばかりを盡くし知らせ給ふ。さりとも思

るを、帝「さりとも思し知りなんを、かばかりにてはいみじうとも、我が心なるべい事を、わりなく忍びつゝ、かばかり情あるもてなしを、いよ〳〵いみじと思しためれば、すべてあいなく、いみじとも、あはれあり情ありと思さるべきにもあらざめり。さりとならば、ひたぶるに我が心をやらむに、眞實は何の慎ましかるべきぞ！」と荒立たせ給ふに、やう〳〵生き出でつる命、絶えぬる心地して、此の頃の枝垂柳の風に亂るゝやうにて、さすがにいと執念くて、靡くべくもあらず、珍かに淺ましと眞實に妬く思さるゝに、からうじて　寢覺上　思ひ知らぬには侍らぬに、昔ながらの身ならましかば、かばかりも、思ひ懸けぬに、御覽ぜられましやと思ひ侍る涙ばかりのどめがたきに、堰かれ侍る程なさも心憂く、いかばかりの石木ならば、かう思ひ知り聞えさせぬやうは」と、慰め出でたる言の葉に、いみじう心苦しく思しなられて、帝「さだに思し知らば、それに替へつる命にて、痴れ〳〵しき名をも流しつべしや」と打ち弛べさせ給ふに、我が心をもあながちにこしらへて、盡きせず恨み續けさせ給ふ御答なども云ひ出でたる、いみじくまた知らずらうたく思し召さるゝに、後瀬の山を頼み契り語らはせ給ひつゝ、帝「いとかく人のゆくりなくと聞き驚くまじく、御心

(一)さりとも―いくらなんでも、自分の情ある態度を思ひ知つて呉れてもよささうなのに。
(二)我が心なるべい事―又自分の心次第で、寢覺上をどうする事も出來るのに。
(三)わりなく忍びつつ―無理に我慢して、これほど情ある振舞をしてゐるにも關らず、寢覺上は却つて。
(四)昔ながらの身ならましかば―下の「御覽ぜられましや」に掛かる。以前の通り故關白在世中の私の身でしたなら、これほどの思ひがけない帝の有難い御言葉を頂く事が果して出來ようか。
(五)涙ばかりのどめ難き―涙ばかり止め難く出て、涙にせかれつつ物を考へる餘裕がないのも思ふ。涙ばかりの止め難きに」は「涙ばかりの止め難きに」とも解される。
(六)いかばかりの石木ならば―如何に無情な石木とても、帝の心を思ひ知らない樣な事がありませうか。私にもよく帝の御心は分ります。
(七)盡きせず恨み續けさせ給ふ御答なども―盡きる事なく御恨みになる帝の御言葉に對しての御答なども。上の「こしらへて」は「言ひ出で」にかかる。
(八)後瀬の山―萬葉集の坂上大嬢の歌「かくに人はいふとも芳狹路の後瀬の山の後も逢はん君」等による。後の逢瀬。
(九)ゆくりなくと聞き驚くまじく―私のなした事が、思ひがけない事だからと云つて、人が此の話を聞いても、決して驚かない樣に取り計つて下さい

(一)許し放ちて―寢覺上を故關白に取らせて。

(二)尙侍にと心ざし―寢覺上を尙侍殿にしたいと所望したが。

(三)人に讓り―故關白の三女即ち今の尙侍に讓つて、言ひ遣れ。

(四)草のゆかり事よせて―「草のゆかりに事よせて」とあるべき所、寢覺上と尙侍との間柄の、密接なるに事よせて。

(五)宮―大臣宮。

やがて入道大殿の聞き入れず、故大殿に許し放ちてしを、年頃妬うも口惜しくも心にかゝりて、忘るゝ時なかりしに、大殿亡くなりて、今だにさる方に(一)つけて、淺くもてなさじと思ひ寄り、尙侍にと心ざししに、あながちに懸け離れ、人に(二)讓り逃れ給ひにしを、いみじう恨めしとは思ひながら、(三)草のゆかり事寄せて、自ら思ふ心の片端をも、聞え知らする風の紛れもやあると、似げなからぬ事に思ひなして、若しや〳〵とほのめき渡るに、殊の外なる氣色に思ひ佗び、宮にあながちに申して見し火影より、耐へ難き思ひ勝りて、此の日頃は、また人を見、世に永らへむとも覺えず、呆れ〴〵しう例ならぬよしは、自ら聞き給ふらん、誰ゆゑにもあらぬを、露許りも哀れと思し知る氣色もなきが憂く淺ましき事」と泣く〳〵宣はする御氣色の哀れげに艶かせ給へる事は、いと氣高く物深けれど、つゆのことわりも知られ(七)、過ぎにし(六)御影もいとほしく、いとかく淡つけくて、かばかりも御覽ぜらるる、いと世に例ない心地するに、内々の曇なきは知らず、かばかりもおはしますは、やがて流れての濡衣となりなんずる事と思ふに、なべての世の人聞などまでも只今は覺えず、内の大臣にあな思はずと打聞きつけられたらん恥かしさ苦しさに、帳の(八)内に人の氣配はしきかし、かゝりける御たばかりごとを思ひも寄らず、(九)いみじう宣ふとも、參らずこそあるべかりけれと、我が心の悔しう妬きに(一〇)聲も立てずゝばかりの心地す

(六)過ぎにし御影―故關白。

(七)流れての濡衣―眞實でもない浮名を立てられる事になるだらう。

(八)帳の内に人の氣配はしきかし―几帳の中に、人の居る樣子があつたのに。

(九)いみじう宣ふとも―どんなに大臣宮が御呼びになつても。

(一〇)聲も立てず―一聲も立てようとする程の、一本の方宜しく。

(一)云ふ甲斐なしと思ひなるべき氣色にも―寢覺上は、自分を全然問題にしない樣子でもない。
(二)そもことわり―寢覺上が、くれ惑うて自分を拒むのも尤もだ。
(三)わりなからぬはたも―一本に「わりなからぬせも」とあるが後者の方宜し。
(四)いささか引き繕ひ―以下寢覺上の心。
(五)人柄―寢覺上の。
(六)明かし暮らしけん人―故關白。
(七)これもあるまじ―故關白の未亡人なる寢覺上が、女御とする事はあるまじき事と。
(八)源宰相中將―宮中將。
(九)琵琶の音―寢覺上の琵琶の音。
(一〇)いとわざとなりにし心―「戀ひし、思ふ合曾にあなたい戀ひし、思ふやうになつた私の心を。

め、如何はせむ。(一)云ふ甲斐なしと思ひなるべき氣色にもあらざめり。(二)そもことわり、此の瀨をいみじう情ある物とだに思ひ知られなば、何時も〳〵自らかくわりなからぬはを(三字イ)もありなんなど方々思し忍びて、いとやわらかに艶かしくもてなさせ給ひて、あながちに和めて、たゞ打添ひ臥い給ひて、わざとならねど、衣ばかりは引き交させ給ひたるに、いみじう心強う引きくらゝくされたる一重の關を、引き綻ばされたる絶え間より、ほのかなる身なりなど、つぶ〳〵と丸に、美しう覺えて、かばかりも近き氣配有樣は、立ち離れ見し火影にこよなう立ち勝りて、云ひ知らず懷かしう、らうたうぞあるや。さるは、(四)いさゝか引き繕ひ、世の常なる有樣にて御覽せられんとは覺えず、如何ならん憂き氣色も御覽せられて、疎ましと思し逃れ、立ち離れ奉りてしがなとのみ覺え給へど、(五)人からの限りなくのみ、なり置き(二字イ出)にければ、何の情もなく、ひたぶるに思ひ佗びたるしも、譬へん物なきまゝに、帝「あないみじ。これを心解けて見馴れ打語らひ明かし暮らしけん人、げにいかばかりの心地しけん。(七)これもあるまじ便なしと、世にも云ひ謗り、人も嫉み云はば、國の位を捨て、ただ心のどかに心をゆかせて、起き臥し契り語らひてあらんに、增す嬉しさありなんや一とのみ思し召さるゝまゝに、我も涙をえ留めさせ給はず、搔き昏らされ給ひて帝「(八)源宰相中將の、(九)琵琶の音の事奏し出でたりし秋の夕より、(一〇)いとわざとなりにし心を、

(一)思ひもあへぬ様ならで―今の様な思慮も出来ない様な狀態の時でなく、ゆつくりと帝の御心葉を聞きたいものです。

(二)旨人目心憂く―人目も辛く父此人になつまらない様子で帝に云ひ寄られたのも、數ならぬ自分であるから尤もだと。一本の方宜しくなんかし」と上に續く。

(三)行く手に―事のついでに。

(四)おろかなるべくもあらざめる―寢覺上と尙侍とは、並々ならぬ間柄で。

(五)かゝりける物をと思ひ知りなば―情に厚い帝であると、寢覺上が思ひ知つたならば。

(六)人の程方々にいとやんごとなし―殊に寢覺上は父や夫やどの點から見ても身分の高い人である。

(七)又讓る方なく―尙侍の後見を誰にも讓る事が出來ず、寢覺上が後見として參内した事を指す。

(八)我がありつきたる方にだにあらず―寢覺上にとつては、場慮馴れのした處でもない此宮中に於て。

(九)おほぞうの行く手に―なほざりの行きがかりに帝に攫まれて。

(一〇)憂しつらしと―寢覺上に。

う宜はするに和やかに御答をも申して、たゞ疾く立ち離れなんとせめて心を靜め、涙を止めても、聞え出でん言の葉もなく、口惜しう消え果てにたる心地するを、あながちに思ひ落して寢覺上「いとよく思ひもあへぬ様ならで、いとよく承りなん。昔・宇ィ・ト人目心憂く云ふ甲斐なき様に思し寄らせ給ひけるは、數ならぬ身を、ことわりに思ひ給へ知るに、亂り心地も昏らさるゝやうにて、えこそ承り分くまじう侍れ」といみじうすくよかに云ひなさんと、何の情もつけず、えも續けやらず、かごとがましげなる氣配のいとゞらうたく美しう心にのみ染み勝りて思されど、まことにただかく行く手に情なく、あながちに押し立ちても、かばかり思ひ惑ふにては、憂しつらしと思ひ入りて、やがて今は參らずなりなば、輕らかにせめて訪ね寄るべきにもあらぬに、今少し佗びしさのみこそまさらめ、何の甲斐あるべきにもあらず。尙侍侍ふ、おろかなるべくもあらざめる心ざしどちにて、絶えず參りぬべかめるを、此の度いみじき御情を見えなば、かゝりける物をと思ひ知りなば、いとかうのみも思ひ惑はじ。げに人の程方々にいとやんごとなし。又讓る方なく後めたさに立ち添ひ、かくまでも立ち出でためるを、我が有り付きたる方にだにあらず、かたこ字イトノかゝる大ぞうィらの行く手ィにて、げに思ひ惑ひたる様、いとことわりに心苦しきを、憂しつらしと思ひ果てられては、一時の心地こそゆくとも、永らへての身の嘆きは勝るつまとこそならし

(一)あな淺ましー以下寝覺上の心。
(二)萬に宣ふにー どんなに帝が御言葉を盡されても、どうしても自分が勁きさうにもないのに困つて、遂に大皇宮がこんな事を計畫したのであらう。
(三)なにに|下の「恨みらるれ」にかかる。
(四)やむごとなきもとゐ|院の一品宮といふ北方のある内大臣の家庭に、自分の劣り離れて立交る事は。
(五)かけ離れてゐたのに。
(六)藻鹽の煙|新古今讀人知らず
(七)やに浦にたく藻鹽の煙|摩かめ浦風の意味。
(八)煙摩かめや浦風に吹くとよめる。又狹衣に「外の風は藻鹽の煙摩かめや浦風に吹くとよめる。
(九)内大臣に寝覺上の事だらうけれど。
(十)底の光をかこつ方にもと|内大臣の前で、自分の心の底が決して濁つてゐなかつたと云ひ張る口實にもと。

見る物と習ひにたれば、御心許されぬ亂れはよもせじとよ」といとのどやかに、恥かしげに、情なき亂れはせさせ給はぬに、少しづゝ生き出づる心地するにしも、(一)あな淺ましし。(二)萬に宣ふに、如何にも我が動くべくもあらぬに、思し煩ひ、遂に宮の構へ給ふ事の樣や。などかくては、また内の大臣に如何なる事を云ひ聞かせ給ふらんとすらん。(三)何に、(四)やむごとなきもとゐを見ながら、我はこよなき劣り樣にて交らん方をこそ、すべてあるまじき事にも、あながちにも懸け離れつゝ恨みしィらるれ。それより外につゆも怠りありて、聞き疎まれんな大方にとりても有るまじき事なりしに、我が心にもあらずもてなされにし藻鹽の煙は、(七)命を限るまで覺えしを、まいて此の際は、いさゝかの迷こそありけれと聞えん恥かしさを思ふに、なほ消えぬ佗びしくて、明日までありと聞えずもがなとぞ思ひ惑はるゝや。いよ〳〵和めこしらへさせ給ふも耳にも入らず、恐ろしくいみじくゆゝしく覺ゆれど、かくのみ沈み入るをもげにあないとほしくィと、云ひ寄りて引き放つべき人もなし。我が供なる人はさし離れて、物の覺えざりつるまゝに、宣旨の君の唐衣の袖ばかりを、控へたりつるも、いとかたはら痛かりければ、心苦しくいとほしく思ふ〳〵、脱ぎやりて、御几帳の後にゐざり退きにたり。せんかたなければ、(九)内の大臣に云ひ聞かせ給はん事は、たゞ同じ事なれど、我が心の問はんにだに、心清く、(十)底の光をかこつ方にもと思へば、か

(一)訪ね知り―寝覚上を。

(二)御事なのみ―貴女の事許りを折節の事も云つて深く故關白は私に御んだ。だから私に、なき關白の形見と貴女を思つて。

(三)思ふ様に定まり―希望通りに内大臣のものとなつて。

(四)さても心を交す方にこそ―それにしても心を交す方に互に情を交す仲であるならば、どんなに厳重な監視の下に於ても、絶えず言葉の遣り取りの出来る方法もあつたであらうに。

(五)身の覺え―自分の貴女に思はれ様。

(六)心ざし―一本に「心うし」とあるが、「心うし」の方がよい。

(七)殘なく情なき心を―私は全く同情もない心を、貴女に見せようなどとは思はないのに。

(八)いかにひたぶるなる人の―何といふ一途な人の振舞に驚れてある、貴女のその無情ごころ、一途な人とは暗に内大臣を指す。

(九)ただ人や人の許さぬ―普通い臣下の人間こそ、他人の許さない事を。

親しう習ひ思ひて、御事を限りなく思ひけるまゝに、故關白亡からん後、必ず訪ね知り聞えよ』と、心苦しかりける女共の數多ありけるをば、さも云はず、ただ御事をのみいみじう折々の事も聞え出で、(イ)こゝ、戀しき昔の形見とも思ひて、渡る度ごとに消息聞ゆれ。男も女も一言打出づる、聞き過されぬ物と習ひにたるを、いとうたてある御心ときめきの、中々物教へ顔なるやうに聞き入れ給はぬが心憂さに、罷出なば、まいて如何でかは。(三)思ふ様に定まり給ひなば、つゆの隙間も、世に物し給はじを、(四)さても心をかはす方にこそ、隙なき關守より絶えず言の葉を通ふ道にもありけめ。(五)身の覺え片端にいみじく届じ、卑下せられて、かくて物し給ふ程、昔よりの心の中を、哀れとも心ざしど(六)憂しとも聞え知らせんとて、此方に渡り參り給ふと聞きて、よき隙ななりと、打忍び參り來つるを、いと憂くも怖ぢ惑ひ給へるかなゝことわりなれど、又いとかばかりには、などてか契遠く物し給ふと見てしかば、世の許あるまじき今しも、殘りなく情なき心を見え奉らんとは思ひも寄らぬものを、如何にひたぶるなる人のもてなしに思ひ習ひ給ひにける御心ときめきこそ中々淺けれ、よし心得給へ。げにや御心より外に見え奉りけると、只心を靜めて、聞えん事を、よく聞き給ひて、げに哀れとも又憎しとも一言答へ給へ。たゞ人や人の心許さぬ振舞をも押し立つらん。いとかく所狹き身は、人の進み參り、若しは上りなどするを待ちかけつゝのみ

ず、打嘆きて、月影にめでたき御有樣を打見守りて居たるに、なよ〳〵と殊更び艶なる御衣の匂ひばかり打香りて、いとやをら、屏風押し明けて入らせ給ふを、思し寄らず、宮の歸らせ給ふかと思せば、いとやわらかに起き上り給ふを、やがて寄りて捕へさせ給へるに、いと淺ましとは世の常なり。影につきたるやうなる內の大臣など、此所にてはかゝるべきやうなし。人は誰かは紛ふべくもあらぬ御氣配なるに、なか〳〵死ぬる心地して、物も覺えず、搔き昏らさるゝ心惑ひの中にも、寢覺上「あないみじ。內の大臣の聞き思さん事よ」と云ふと覺えで、淺ましう怪しと御覽じ思さん事いゝはと思して、汗になりて水のやうに慄きたる氣色、我も中々なる御心惑ひを靜めさせ給ふ程に、みゝとみに物も云はれさせ給はず、とばかり思し靜めて帝「あな心憂。こはいとかう物思し知るまじき程かは。憂き我からは、かくこそ雅兒になり返り給ふ人もありけれ」など、いと恥かしげにあばめさせ給ふも、何事も聞き分れず、人の聞き思はん樣も打思ひ續けられず、如何樣にして消えも入りなばやと、ひたぶるに取りもあへず、泪に沈む樣の、餘り世に知らず珍かなるに、暫しこしらへて心をのどめさせんと思し召せば、あながちに樣惡しうもてなさせ給はで、帝「眞實に我が身思ひ知られ、心憂く若々しき御心かな。昔より思ふ心を空しうないて、年頃を經て思ひ渡るさま、故大殿親しかるべき人と云ふなかにも、幼くより分きて

(一)入らせ給ふを—帝。
(二)宮の歸らせ給ふかと—寢覺上は、大皇宮が御歸りになつたのかと。
(三)影につきたるやうなる內の大臣—いつも寢覺上につき纏うてゐる內大臣。
(四)御氣配—帝の御樣子。
(五)淺ましう怪しと—寢覺上は言葉も出ないで、只帝が眞分を。
(六)かうもの思し知るまじき程かは—私が來たからとて、そんなに譯も分らず驚く程の年頃でもありますまい。
(七)憂き我からは—貴女故に苦しんで、我と我が身でこんなに赤兒の樣に、凡てを忘れて狂ひ出す私の樣なものも居るのですよ。

もかく宣はするを、背き顔ならんも便なければ、さらばためらひてと、夜いたう更けて渡り参り給へるに、此方面はさる心して、いと人遠く退けさせ給ひて、御格子も参らず、廿五六日の月、空遠う澄み面白きを、御几帳打懸けつゝ、宣旨の君ばかりを御前に侍はせ給ひて、いみじう若やかに今めかしう契り語らはせ給ふを、憎からぬ程におほどかに打答へ聞えさせ給ひて、心の中にはすゞろなる身の有様かなと打思ひ續け、例の言料の春や昔のとのみ打眺められ給ふに、心もとなく思し召さるらんかしと宮は静心なく思し召さるゝに、宮の大夫と聞ゆるは、異腹の御兄なりけり。その参り給へるよし聞えさせ給ひて、大皇宮「暫し大夫に云ふべき事侍り。今宵は昔覺えて雲の上の月見明かす夜にて侍らん。暫し物せさせ給へ。宣旨の君御前に侍ひ給へ」とて、ゐざり入らせ給ひぬるを、宣旨の君は宮にも離れ奉らず、いとやむごとなき人にて、心ばへなど、宮の御心にはみさらず、從ふやうなれど、心の中にはいとよく物思ひ知り心ばせありて、此の上の御有様をえさらず思へば辛イひ、離れずのみ侍ひ給へば、去年の冬頃殿にてあながちにまつはし、ひとへにのみもてなされ給ひしに、如何はせん、一人許りにはと、え隱れ敢へ給はずなりにしを、見奉るに、めでたくあはれに、悲しきまですゞろに思はしう思ひ聞えついたる人にて、かゝる御構へを、あないとほし、如何に呆れいたう思さんといみじう心苦しけれど、えも云ひ出で

(一)さる心して―大皇宮の方ではその用意をして。帝に寝覺上を會はせる爲め。
(二)憎からぬほどに―寝覺上は。
(三)春やむかしのとのみ―在原業平の「月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身一つはもとの身にしてし」による。
(四)心もとなく―帝がどんなにじれつたく御思ひの事だらうと。
(五)宮―大皇宮。
(六)宮の大夫―中宮の大夫であられる方に、大皇宮とは異腹の兄だつた。
(七)聞えさせ給ひて―寝覺上に申しあげて。
(八)みさらず―「えさらず」の誤か。
(九)この上―寝覺上。
(一〇)去年―中の冬頃殿にて―二三卷間缺卷中にある事件であらう。勿論白の死後である。内大臣が無理に寝覺上に言ひ寄つて。
(一一)一人ばかりには―他に女房は誰も居ないで、宣旨の君只一人だけなのに。
(一二)見奉るに―寝覺上を見たところ。
(一三)思ひ聞えついたる人にて―その時から宣旨君は、寝覺上を好ましい方と思ふ様になつて居て。
(一四)かゝる御構へなど―大皇宮のかういふ御計畫を。
(一五)呆れいたう思さん―寝覺上がどんなに驚き呆れ返る事かと。

於て、一旦思ひしめたからにはどんなに宣旨を出しても甲斐にない事だらう。もう内大臣に、寢覺上を諦めさせる事は難かしかちう。

(一)そのまゝに―氣分が惡いと云つて私の所から退出したまゝ直ぐ自分の局へ歸つてしまつた。

(二)かくておはします程に―此のやうに寢覺上が宮中に來てゐる間に。

(三)ありし夜のやうにて―先達つての夜のやうに寢覺上があなたの所に遊びに來た時私が寢覺上に會つて何故にそのやうにつれないのかと恨みを云つてやりたい。

云ひ知らせて氣色見んと思し餘らせ給ひて、帝「その後、渡り參り侍らずや。いと見まほしき心樣のすゞろに戀しく侍れば」大皇宮「『夜ごとに渡れ』と侍れど『心地惡し』とて、そのまゝに彼所にこそ渡りて侍りしか」と聞えさせ給へば、帝「いと輕らかにも」と云ひさせ給ひて、帝「登花殿に渡り侍る度ごとに、自と云はせ侍るを、更にこそ逢ひ侍らね。例なう淺ましく思ひ給へらるゝ。(一)かくておはします程に、(二)ありし夜のやうにて、いかで『などてかくは』と恨み聞かせ侍りしがなと、怪しく眞實に氣配などの今一度聞かでは、えあるまじく思ひ給へらるれば、罷出侍りなんと奏せさせ侍れど、車を許し侍らぬなり」と聞えさせ給へば、打笑ませ給ひて、大皇宮「さては『暮に渡れ』と、切に物し侍らん。ありしやうに密かに物せさせ給へ」と、いと御氣色よし。(四)うへ上の御有樣を見ぬ限りこそあれ。かばかり限りなう艶かしく艶にいみじくおはしますを見奉りだに初めてば、(五)え心强からじ。必ず思ひ靡き奉りて、かの大臣の方樣は思ひ退く心附きなんと思し召すにいと嬉しくて大皇宮「明日の夜は罷出なんとするを、心のどかに聞えさすべき事ども侍り。必ず渡り給へ」と宣はせたるを、餘り今めかしくまつはしたてさせ給ふも、いと心につかず思さるれば、寢覺上「亂り心地例ならで、罷り出でなまほしう思ひ給ふれど、車の許され侍らざなれば、あるにもあらで」と(六)聞えずるび給へるを、大皇宮「いみじう心憂し」と返すゞ恨みさせ給へば、今宵し

(四)上の御有樣を―帝の御有樣を寢覺上が未だ見ぬ中こそ。

(五)え心强からじ―帝の艶しい姿を見ては、寢覺上の心も動くだらう。

(六)聞えずるび―うまく云ひ逃れる意か。「ずるび」恐らくは「すまひ」の誤寫なるべし。

りて御覧ぜられ給ふなどとぞ、これより云ひ知らざらん御心用も罪あるまじく、契めでたく見えさせ給ひける。内の上は同じ御垣の中ながらも、宵の間暁の人間に紛れ寄らせ給ふべき方なく、思し餘らせ給ひて、大皇の宮の「罷出させ給ひなん」と聞えさせ給ふついでに、帝「故關白の里人は眞實に有難く侍りける人かなと、いとかうは思ひ遣らずこそ侍りつれ。思ひ遣り深くゆゑ〳〵しき方などすぐれて侍るべし。尙侍の方の有様何事もなべての外の有様には似ず有りつき心憎くもてなして侍るめれ。むべこそ故大殿の命に代へて思ひ惑ひ、内大臣も、昔より心をしめて思ひ侍りけれ。此の大臣さて侍るべきなめり。さばかりぞなずらふあはひ、似氣無からで、互にあはれをかはすらん程の思ひ遣りこそめでたけれ」と、羨ましげなる御氣色にて宣はするに、宮は上もかくこそは聞かせ給ひけれと思すに、いと心疾しく御氣色打變りて、大皇宮「昔よりの本意深しと云ふとも、宮に並べ奉らん事はいと淺ましかるべくなむ。あの姉はもとより心ざし深からでありつかずと聞き侍りしかばこそ。今始めてさへはいかでか分くる心あらん。事見聞かんとなん思ひ侍るを、今は已はさだ過ぎにたるに、いとあなづらはしく思ひ侍るめるを、御前に此の事聞き入れさせ給ふ」御氣色についで侍らば洩らさせ給へ」と奏せさせ給へば、帝「かゝる方の思ひしめられなんには、百返の宣旨かひなくや侍らん」と打笑はせ給ひて、いかでかく思ふ心ありとだに、

(一)御覧ぜられ給ふなどとぞ―契めでたく」にかかる。
(二)これより云ひ知らざらん御心―只御渡りになると云ひ様もない帝の心がけ(寝覚上を靡かさんとする)も。
(三)内の上―帝。
(四)故關白の里人―寝覚上は。
(五)この大臣さて侍るべきなめり―この内大臣が、そのまま寝覚上のよとなるべきであらう。
(六)なずらふあはひ―よく似合つた間柄。
(七)宮―大皇宮。
(八)昔よりの本意―内大臣が、寝覚上を昔より深く思ひつめて居たとしても。
(九)宮―大皇宮の女一宮。
(一〇)あの姉―亡き大君、即ち内大臣の元北の方には。
(一一)ありつかず―内大臣は寝覚上の姉にはみつかず。
(一二)いかでか分くる心あらん―今更どうして内大臣が寝覚上以外の新しい女に心を靡ける事があるだらうか。
(一三)今は已は―今は私は年を取つたので内大臣が寝覚上を愛しないやうに諦めても效果がないから。
(一四)御前に―あなたが、内大臣の寝覚上に對する氣持を御覧りになつたやうですから申し上げるのです。
(一五)御氣色につい―侍らば―あなたの氣色につい筆で侍らば―あなたの氣持次第でもし良い機會があつたら内大臣に此の事を話して忠告して下さい。
(一六)かゝる―かたの思ひしめられなんに―かうした男女の關係に

はせなどするを、さもあらず、いと裏も無げにはもてなさせ給へど、なほ御心の中はむづかしげなるまで、打嘆きがちにのみおはしますも、あやめ奉らんも、我も人も打亂れさせ給へる時こそよけれ、うたてさくじりたるやうなれば、見知らぬ顔なる物から、さすがに鬱ほれたる心地して、中宮「昔より思し初めて（イし）事の目に近うて侍ふに、御心の亂るゝにこそあべかめれ。さて督の殿がちにおはしますなめり。夜の宿直は人に勝るとも見えぬ物を」と心得給ひて、をかしと思し召しけり。いと萬の事に心得重りかに、のどかに有難き所勝れておはしまいて、大皇の宮は、ふさはしからずと思ひ聞えさせ給ふ程に、自らいとしも同じ御心ならず。人々「わざとならず思し召す事も、中宮の御方様の事をば、え消たせ給はず」などあるを、大皇の宮は、「などさはあべき。限りなくとも、我があらん世の限りは中宮のかしこかるべき事か」など思し蔑しめ、事に觸れてさてありなんの御もてなし言葉の逸速さに、挑ましくなど思ひ聞えさせ給ふべきにはあらねど、心々なるやうに、ひとしからで、互に睦び聞えさせ給はずぞありければ、關白の上を我が物と靡かし果てんの御心どりに、尚侍を取り分き片引かせ給ふ樣いと頼もしげにて、帝「今暫しありて我が位をも讓らん」など宣はせて語らはせ給ひつゝ、輕らかに登花殿に渡り通ひなどせさせ給ふ。いとさらでもありぬべき御有樣なれど、内にかくておはします程は、帝春宮日々に渡

(一)さくじりたるやうなれば―差し出がましいので。
(二)思しそめてし事の―帝が、昔から思ひそめてゐた寝覚上が
(三)夜の宿直は―尚侍が帝の御側に侍る事は。
(四)ふさはしからず―中宮のやり方は、我が心に適つた仕方でないと大皇宮は思ふ。
(五)同じ御心ならず―大皇宮と中宮とは仲がよくない。
(六)わざとならず―帝が重大な事と思つて居られる事には、中宮の御意見を無視なされる事は出來ないと女房達が噂をするのを。
(七)かしこかるべき事か―どうして畏れ多い事があるものか。
(八)さてありなん―中宮に不利の樣にと。
(九)逸速さに―烈しいので。
(一〇)挑ましくなど―中宮は大皇宮の言行に對して、爭はうなどと思ふべきではないが。
(一一)關白の上を―帝は寝覚上を自分のものと靡かじ。
(一二)片引かせ―ひいきをする。

さは驚かさじ。いとけざやかにて、暫し罷出させで、さるべき隙をや計はん」と忍び返させ給ひて、すべて異事なう、此の事のみ御心に懸らせ給ひて、苦しきまでぞ思し召さるゝまゝに、さりぬべき夕暮夜さり、殊に渡らせ給ひつゝ、帝「あはれなりし昔語も聞えさせん」とのみ宣はすれど、麗華上「世の憂きを思ひ知るより外の思ひ遣り深うはあるまじかりし齡に、(一)さだ過ぎ給へりし人に行きかゝり隙間なう定まり糅ひし身なれば、つゆの御答なども、いかゞ聞えさせん」などいみじう恥かしう慎しきを元として、麗華上「(三)内の大殿をさこそさし離れ、大方には絶ゆべうもあらぬ筋は方々繁きに、はかなき(四)御返聞えさするなどをだにいみじう諫め給ふを、まいて自聞えさすなど聞き付け給はゞ、如何ばかり思し宣はん」と思ふも、さのみ心置かれん事、はたおいなく捨て難くさすがに思さるれば、とかく申し紛らはして聞えさせ給はぬを、わりなう思し侘びさせ給へば、その邊と許りに心を懸けて、(五)尚侍の覺えのいみじきに取りなして、世には愛でのゝしり、御方々にはいと安からず、愁はしき事に、各々心を亂りけり。(七)中宮許りぞ、氣憎からず、らうたげに思し召いたれど、御氣色いと(八)三千人を窮むる程にはあらざめるを、帝「此の頃怪しう例ならぬは、世の盡きぬるにや」など心細げに宣はせつゝ、在りしにもあらず物嘆かしげに、靜心無げなる御氣色は(九)怪しうもあるかな。年頃つゆの隔なく、先づ宣はせ合

(一)渡らせ給ひつゝ―寢覺上の居る弘徽殿の北表に御渡りになつて。
(二)さだすぎ給へりし人に―そんなに幼い年齡で、年老いた故關白に嫁いで。
(三)内の大殿をさこそ―自分は内大臣からさし離れる事も出來ず父おしなべては絶ちきる事の出來ない關係がかれこれ深いので、内大臣との間に子のあるを指す。
(四)はかなき御返聞えさするなどだに―一寸した帝への返事を書いてさへも。
(五)わりなう思し侘びさせ―帝はその邊とばかりに―寢覺上の居られる、北表の邊にでも居たいとばかりに。
(六)中宮ばかりぞ―中宮だけは、尚侍をいみじくなく可愛くお思ひになつてゐたが。
(七)三千人を窮むる―長恨歌「後宮佳麗三千人。三千寵愛在一身」に據る。多くの女御侍女に御かけになる寵愛を一身に集めつくす程の、尚侍の御器量樣子でもないのに。
(八)帝の樣子の普通でないのをあやしむ。

(一)そはまだいとわりなく―併しそれは未だいとわりなく分らない年頃で、これほどの美しい容姿の寢覺上が、盛督のゆるやかな兄姉寢覺上を見又は嘸に聞いたでもなければどんな男でも安らかで居られようか。

(二)源氏の大臣―寢覺上父入道殿の女春宮の母

(三)いみじき一の人―關白太政大臣の女、春宮の母―たとへ關白の御母(中宮をさす)と云つても、その方を並一通りに思ふこつてなのも、寢覺上を大事にして様だ事があらうか。

(四)大殿―故關白。

(五)内大臣必ずさべき事なめり―内大臣必ずさべき事なり―故關白が、かく寢覺上の夫なだから、には、必ず寢覺上が死んだ故關白が自分のものとするに違ひない。

(六)たゞ人なりとも―内大臣は皇族ではなく臣下の身ではあるが。

(七)その人ばかりぞ―寢覺上にはこの内大臣のみが似合ふ人としてくらべられる。

(八)御覽せんとも―帝も又、それらの女御とも御覽にならうとも思はれない。

(九)火影に―火影に見た寢覺上に

(一〇)くだけきーちぢに思ひ碎ける

(一一)さはなさずー内大臣のものとはなさずに。

あらぬにやあらん。(一)そはまだいとわりなく、かばかりの様を、同胞の側にありけんに、ほのかにも見聞いて、如何でか人の安くもあらん。心ならで必ず此の人の名は今も立ちなん。(二)源氏の大臣ぞいと口惜しき心ありける人かな。かゝりける女をはか〳〵しき後見無しとて、我には得させで、故大殿に取らせし心ばへよ。(三)いみじき一の人の女春宮の母と云ふとも、此の人を我なのめに思はましやは。世の誘人の怨みも知らず、上なき位にはなし上げてまし。大殿(四)だにありも果てずなりにしよ。磨ける玉に傷つけるやうに飽かず悲しき事なりや。内大臣(五)必ずさべき事なめり。たゞ人(六)なりとも、げにその人許りぞなずらふべかりける。などて我もこれをかの入道にせめて請ひ取らずなりにけん」と來し方の御心ののどけささへ悔しう、片時の間に萬を搔き暗し思し續けて、あいなうしを〳〵と打濡らさせ給へるや。此の月は神事がちなる程にて、何れの御方も罷り上らせ給はず、御覽せんとも(八)思されず、さやかなりつる火影(九)にやがて魂は立ち添ひぬる心地して、我は我ならぬやうに思し召されつゝ、帝「如何で此の人に、いとかくくだけきと、また心の中をだにつぶ〳〵と云ひ知らせて、氣色をも見ばや。内の大臣に靡き果てなば、嫉う口惜しきわざかな。如何に構へて打忍びつゝ、(一一)さはなさず、我が物と見るわざをせばや」とのみつゆまどろまず思し明かされて、見きとばかりの氣色もほのめかせ給はまほしけれど、帝「中々

あふまじう、やがて立ち出でても引き留むばかり思さるゝを、此方彼方もいと俄なるべき人目の、我も人も輕かるべき際ならねば、佗びしう念せさせ給ひて、我もやをら出でて返り渡らせ給ふ御心地いと中々なり。面影は身に添ひぬるやうに、わりなう思し召さるれば、つく〴〵と端近う眺めさせ給ひて『故大殿の、ことごとは、人に勝るとも覺えぬを、此の女君見馴るゝ妻なん、人より殊に類なかりける。故大殿』『我が身と思ひ知らるゝ事と、これを生ける世の思ひ出にてありぬべし。司位も用なし』と云ふと聞きし折、如何許りの人にてか、さはあらん。勝ると云ふとも人は限りこそあれ。餘り心ざしに任せて、いたう云ふなりと、をかしう聞きし。眞實にさ思ひつべうこそありけれ。いみじう聞きおいつる事は、はかなき事も忘ず見劣りせぬ事はなきをと聞きつるに、世の常の人のをかしげなるにこそは思ふにあらめ。その中に三十二相皆しも備ふ事は、人のいと難かるべし。廿八九三十相の足らふをかうはのゝしるにこそあらめ。さりとも二相は世に足らはじとのみ思ひつるにこそ惡しかりけれ。此の人は二相のみにあらず。それもなほ過ぎて卅五六相をさへ備はりたるが中に、容貌容體もてなし樣、聲氣配こゑの中になほ其所こそ後れたりけれと見ゆる節の無かりつるよ。いかでかうしも優れけん。手打書いたる樣、見る目に劣らざめり。心や多くあらんな。まだ女ながら內の大臣に名立ちけんよ。いと重くは

(一)我も人も—帝も寢覺上も。

(二)ことごとは—外の事共は。

(三)これを—寢覺上を妻とした事を。

(四)いみじう聞きおいつる事は—評判のあまり甚しいものは、一寸した事でも、實際に當つて見ると見劣りのしないものはないと聞いてゐたが。「聞きおい」は聞き置いたか。「聞き負ひ」か。

(五)世の常の人のをかしげなるにこそは—思ふに、それは普通の人の中で一寸すぐれた容姿である場合にさう云ふのであらう。

(六)三十二相—佛及び轉輪聖の有せしといふ三十二の妙相。備ふ—「備ふる」の誤脫か。

(七)心や多くあらんな—只この寢覺上には、浮氣な性分なのだらうよ。

(八)內の大臣に名立ちけんよ—一卷の事件を指す。

くもあらず、たを〳〵と懷かしく艶きたる樣など、長恨歌の后のたかの(一)ィナシ殿より通ひたりけん形も麗しう清げにこそありけめ、いとかう愛敬溢れて美しう匂ひたる樣は、えこれに及ばざりけんとぞ思し知らるゝ。宮(二)も繪をば御覽じ捨てゝ、見る度ごとに餘りゆゝしうのみ成り添ふ人かな。あなゆゝし。內の大殿のこれをいろ(三)二字イ宮に見較べ聞えん程よなと思し寄るには、胸潰れながら、命延ぶるやうに、見ても〳〵飽かずあはれに見守られ給ふ。まことにこれを內の大殿に思ひ放ち果てさせて、我が女にして、明暮見ばや。いみじきもてあそび物なりかしと打思さる。つゆ(四)打ちもみじろがせ給はず、見入りておはしませど、御几帳の內に自ら人の氣配や覺ゆらん、扇を引き直して、それにいとよう紛らはし隱れて、いたうも見入れずなりぬれば、御殿油取りやりぬ。女君は上かくておはしますらんとは思ひも寄らず、餘り氣近さ過ぎたる御もてなしなめれば、さるべき女房などの入りて見るにやと思し寄るにいと愼しうなりて　寢覺上「さらば又も此の御繪は尙侍に見せ侍りてを」とて、ゐざり出で給ふ後手髮の隙なう凝りあひて、裳の裾にゆる〳〵と引かれたる樣など、繪に書かんに、筆及びなんやとぞ見ゆる。もてなしなどは鶯(イの)羽風も厭はしきまでたを〳〵とあえかに和ぎ艶いて、打匂ふ風も、世の常の薰物香に入れ染め、心(五)のかづす百敷の外まで止まれる心地して、飽かず中々に宮の御覽せん所なども見憚り

(一)たかの殿―「高殿」か。

(二)宮―大皇宮。

(三)いろに見較べ―一本にある如く「宮」の誤りならん。宮は大皇宮の女一宮。

(四)つゆうちもみじろがせ給はず―寢覺上。

(五)心のかづす―百敷にかかる言葉。心を誘惑させる樣な立派な宮中。

(一)よく御覽ぜさせむと—帝によく寢覺上を御覽じ入れようと大臣宮が書から計畫してゐた事だから。

(二)昔ありけん—昔あつたといふ塚屋に籠つて、人からは嫌はれる樣な（もう死ぬのも間近い）老年になりましたが。

(三)塚屋—墓守の住む家。

(四)かはらぬ心—若い時と變らない心。

たげなる樣など、云ひ盡くすべくもあらず。聲氣配ほのかなる有樣、かけまくもかしこき御命にも替へつ許りに、いみじと御覽じ染ませ給ふ御心騷ぎ、音にも高く聞えつ許りなるに、(一)よく御覽ぜさせむと晝より思し構へたる事なれば、宣旨の君人々遠く除けて　宣旨書「その燈近くなさばや。上より此の晝つ方長恨歌の繪賜はせたりつるを、先づ見てこそは」とて參らせ、宣旨書「去りつる齡を思へば、昔ありけん塚屋に籠りては、疎ましき齡になけれどゆけど、かやうの物のゆかしく覺え侍りし、變らぬ心こそつきなき事にはあれ」とて、火近く召し寄すれば、御几帳ども、隙間あるまじくて、御殿油參り寄するに、いとこまばゆげに扇差し隱して、扇よりはぐれて見えたる影のさやかに優れたる、云ふもおろかなり。櫻襲を例の樣の同じ色にはあらで、權中に花櫻の濃くよき程にいと薄きと、皆三重にて、五重づつ二重に重ねて、紅の打ちたる葡萄染の織物五重の袿に、柳のやがてその枝を二重紋に織り浮かべたる、五重の小袿なめり。夜目には何とも見えず、薄樣をよく重ねたらんやうに見えて、唐の綾の地摺の裳を氣色許り引きかけたるは、凡て此所は彼所はとも、少し世の常ならんが見ゆべきなりけり。あたり匂ひ滿ちたる樣、目も耀やくとは、これを云ふにこそありけれと御覽じ入るに、繪に心をば入れたれど、なほ扇を放たぬ用意緩ぶべ

(五)少し世の常ならんが—もう少し普通な處が見られて良いと思はれる程、どこまでも並とは違つて、すぐれた寢覺上の容姿だ。

侍の方様ならでも、げにかゝる折御覽じ初めさせ給ひては、必ず忍びたる様ながらも、思し召しまつはさせなん。さらむ程に内の大臣聞き疎み思ひ離るる御心もつきなん。かくのみ思ふ心の離るべきにや、かくも宣はせ、かの人も思ひ寄らざりし百敷に近付き寄りけん」と思し召すに、なほ嬉しくて、大皇宮「げに人に御覽せさせまほしき容貌に侍り。さらば夜さり忍びて渡らせ給ひて御覽せよ。なべての女房知りては、自ら洩り聞くやうも侍らん、いと後めたういとほしかるべし。切に忍び渡らせ給ひて、さらば必ず自物せさせ給へ」とて、渡らせ給ひぬ。大皇宮「宣旨の君も、上の宣はせつるを、渡らせ給はん人に氣色見せで、此の帳の内に入れ奉れよ」と云ひ置かせ給ひて、大皇宮「餘りなりし日頃の名殘に、いとどしう、苦しきまで心に懸り給ふを、必ず」と立ち返り仰せられたれば、寢覺上「何かは。さ宣はむをげに憎くやは。さんべきやうなる程ぞかし」と思して夜少し更けて渡り給へり。上は心も空に思し召しければ、夜の紛れに渡らせ給ひて、御帳の内に入り居させ給ひにけるも、いかでかは知らん。御殿油心許なき程にほのかなる程、容體小さやかに、をかしげに見えて、さやかなる火影に類無く、よるらゝ見ん玉はかくやと御心驚かれて、珍かに御覽せらるゝに、打ちもてなしたる様も、物打聞えて笑ひ給へる氣配、云へばおろかなり。いといみじう若やかに、懷かしう聞く人さへ微笑まれて、さと匂ひ滿つやうなり。美しうらう

(一)思し召しまつはさせなん―帝が。
(二)かくのみ思ふ心の―自分の娘の事で心配してゐた心がいよ〳〵晴らされる爲に、帝もかく寢覺上に逢ひたいと云ひ、寢覺上に於ても思ひもかけず宮中に參つたのだらうか。離る」は「叶ふ」とありたき所。
(三)宣旨の君―大皇宮の女房。
(四)上―帝が寢覺上に御宣はせつるを―帝が寢覺居たいと云つて居られるのだから、こちらに御いでになる人(寢覺上)に帝が來られるとは知らせないで、或は、帝がこちらにおいでになる様子を女房達には見せなかつたか。
(五)必ず―御いでなさい。
(六)さ宣はむを―それほど自分に必ずの意か。
(七)渡り給へり―寢覺上が弘徽殿に御渡りになつた。
(八)上―帝。
(九)容體小さやかに―以下寢覺上の様。
(一〇)よるらん―一本の方宜し。夜光の玉。
(一一)滿つ―「滿つる」の誤か。

(一)わが思ひよりすゝむる事は―自分（大皇宮）の娘の女一宮は、内大臣の北の方に殊の外につれない様なのも。

(二)いとさらば―「いとは「つれなくもまさる」にかかり、さらばは「しなしてしがな」にかかる。

(三)外様にしなして―寝覺上を内大臣から離れさせたいと。

(四)思ひよらずかし―寝覺上は、それ程まで、大皇宮が執念深く考へてゐるとは思ひ寄らなかつた。

(五)上―帝。

(六)異人にさへ―内大臣ならぬ他の男と寝覺上が仲が良いとしても、それまでどうして悪く思はうか。大皇宮が寝覺上を憎むのも内大臣に關してだけである。

(七)親と申しながらも―大皇宮は帝（冷泉院）の御母におはせられるが。

(八)わらか―陽氣に。

(九)今はげに―尙侍なりし上げた今になつて、自分が常に近づくなとは、而白くない事と、寝覺上も覺つてゐるだらう事は尤もであるが。

(一〇)外様にいかでしなさばや―寝覺上なを内大臣以外の誰かの男のものとなしたいと。

(一一)讓り逃れにし尙侍―嘗つて帝から尙侍にと寝覺上に所望になつたが、故白の娘の三の君に讓り逃れた事を指す。その尙侍にではなくとも。

せて、我が思ひ寄り勸むる事は殊の外にもて離れたる氣色も、いと憎く嫌しと思し召せど、いと、さらば、え人もて出づる事もなからん程に、なほいかで外様にしなしてしがなと思す御心常よりも勝る頃なれば、いと近き程にて戀に打仰せられなどすれども、いと執念く、またさまで思し寄らせ給ふらんとも思ひ寄らずかし。寝覺上

一たづきも知らぬ心地して、心細く覺え侍るに、入らせ給ふと承りしより、いと頼もしく、さても暮に自參りて何事をも」とある御文を、上おはします程にて、帝

一いとしも繕はぬ書様も、世に珍しく侍る人かな と置き難う御覽ずるに、内の大臣の方様にてこそ、蔑しめまほしけれど、異人にさへ、などてかは、悪様には取りなさせ給はん、大皇宮 容貌有様こそいと珍かなるまで見え侍る人なれ」とて、折々の有様詳しく語り申させ給ふに、いとゆかしさ勝らせ給ひて、親と申しながらも、物にいと氣高く物遠くはおはしまさず、いと氣近うわらゝかにのみおはしますに、少し打解けて、帝 夕さり渡り參り給ひつらんに、見給ひ侍らばや。心にかゝりゆかしう思ひ給へ侍りしを、口惜しくて已み侍りにしを、今はげにかの人もあいなく思ひ知り侍らん事は、ことわりなるを、同じ御垣の中にてだに、如何で名高う聞え侍る氣配有様ばかり見給へまほしけれ」と切に思しめいたる氣色にて申させ給へば、さらでだに外様にいかでしなさばやと明暮思し召す御心なれば、大皇宮 讓り逃れにし尙

もあらず』と宣ひしなりけり。(一)ましてたゞ人の分く方あらんは、よに見る甲斐なきわざかな。」片時も隙間なかりし御伸らひに打思し給ひて、なほ内の大殿方の事はいと苦しう思さるゝに、(二)いられ給ふ氣色絶えて、さりげなき顏なれど、此の頃はいと(三)内がちになり給ひて、督の君の上り給へる夜はさらぬ顏にて、立ち離れ給はぬも、げに今始めて淺ましくいみじと思ふべきにはあらねど、逃れ所なからん事は、なほ後の悔の恐ろしさに、あながちなる樣に紛れつゝのみ、逃れ過ぐし給へど、それも色に出で聞え寄り給はぬ程なれば、たゞ吾にもあらず、物くね〳〵しう鬱ほれ、大方なる樣にて過ぐし給ふ。

二月朔日にぞ御所顯しありける。その事共は、皆殿ぞしり給ひける。畫渡らせ給ひて御覽ずるに、人がらさゝやかに五字イつやかに聳えて、あえかに身もなくきぬがちに、貴にらうたげに、此の頃の枝垂柳の心地して、いと憎からずあはれと御覽じながら、北の方あるぞかしと思すに、御心懸想おろかならず、如何に構へて氣配有樣を此のついでに見てしがなと思し召し渡れど、只今さすがについでなくては難かるべきを、苦しきまで思し嘆かせ給ふに、その年の司召二月にありければ、大皇の宮入らせ給ひて弘徽殿におはします。此の人内に參りにし後よりは内の大臣の御宿直がちなるを、なほあるやうあるべし。我が見る前を繕ふにこそありけれと、これに深く心寄

(一)ましてただ人の―まして臣下の普通の人で、然も心を分ける他の女のある人に靡く等とは、力強い後楯もなくといふ事は。(「例へば自分が内大臣に靡く等といふ事は」の意を含む)

(二)御伸らひ―故關白との交情。

(三)いられ給ふ氣色絶えて―内大臣が寢覺上に云ひよらんと、いらゝする樣子はなくなり

(四)内がち―宮中に居がち。

(五)逃れ所なからん―八々に云ひ逃れ出來ないやうな事

(六)御所顯―入内の御披露。

(七)殿―内大臣が行つた。

(八)畫渡らせ―帝が。

(九)人柄―尙侍殿の人品。

(一〇)きぬがち―衣を多く重ね着て

(一一)北の方―寢覺上。

(一二)この人―寢覺上。

(一)云ふなゆめ―過去の事は決して云はないで下さい。拾遺百番歌合十八番にこの歌記載さる。

(二)今よりは―今後は親しく思ふあまりに、この歳しい自分も無遠慮に致します。

(三)伊勢なの蜑―「あまり」の「あま」にかける。

(四)げに故大殿のある世なりせば―故關白が存命してゐたならばと嚴覺上が故關白の事を思ひ出す事も、さうは云ふものの、どんなに多い事だらう。

(五)まうち遠に―尚侍が待遠に思つて居られるだらう。

(六)式部卿の宮の御方―承香殿女御、式部卿宮中將御妹、女三宮御母。以下は帝が尚侍に云ふ詞。

(七)御文―式部卿宮の御方、即ち承香殿女御の御文。

(八)夜は延びし―お前を夜呼び寄せる事が、延びに延びになつたのだ。これは嘘を云ふのである。

(九)いみじき宮と申すとも―たとへ非常な勢力のある式部卿宮の女御であつても、故關白の思はくが氣の毒で決して中宮尚侍以外には夜御上せない。のに、故關白は居ないからして中宮尚侍以外の誰をも上らせても氣づかひはない。併しこんな事につけても寢覺上等に、故關白が居たならばと繰延ず由もたい過去の榮華を思ひ出すだらう。賤の小田卷は前に出た寢覺上の歌。

(一〇)色し見えねば―さうした事は御顏色素振りにも表はさない

(一一)いつとなく安氣なのわざや―此の頃は帝が尚侍を御呼び寄せになる事が過去かつたかいつといふ事なく心配な事だ

云ふなゆめ」とて、寢覺上「あなかしこ」とて、典侍に御裝束一具、雲唐衣添へて、心殊なる薫物銀の箱に麗しく包みて、寢覺上今よりは疎からず思ひ聞ゆる餘りになん、伊勢をの蜑も餘り憚りなく」とて、送らせ給ふ。この御返を上御覽じて、昔見しにもこよなく書き勝れにけるかな。げに故大殿のある世なりせばと思ひ出でらるゝ事も、さは云へど、如何に多からん。なげの言葉にも、ことわりの哀れは添へても奏したためるかな。なほ有識なりや！としほたれさせ給ひつゝ、かくてある程に如何で必ず氣配有樣を聞きてしがな！と思し召し勝る。此所には、やがて中宮おはしまして、中宮「待遠に覺え給ふらん。いとほしう」とて、切に下りさせ給ひぬれば、帝「式部卿の宮の御方こまかに親しき御心ざし淺からず習はせ給へ」と宣ふが、いと世の中怨めしげなる御文の氣色は心苦しくて、夜は延びし」と宣ふにつけても、「いであはれ、故大殿おはせましかば、いみじき宮と申すとも、思はん所いとほしくて、異人雜ぜざらましを、いと心安しや。賤の小田卷かゝるにつけても思ひ出づらんかし」と推し量らせ給ふを、色し見えねば、登花殿には先づめでたきにても、寢覺上「何時となく安氣たのわざや。これを思いて、入道殿は『やむごとなき後見なき人は、宮仕へす（イ）き事に

(一)子めいて人の女とは—子供らしくて娘の樣にとは思はれますが、上品で美しいといふ點は少ないでせう。
(二)只今はことゝしく—今の中は子供らしく見えるのがよいので、大層らしくしてゐたなら却つて私にはいやに思はれたらう。
(三)いと淺きとは—帝の尙侍に對する御思召が淺くはない樣に見えた。
(四)またの夜—五日目の夜。
(五)中宮—內大臣の妹。
(六)こと人—中宮及尙侍以外の女御方。
(七)めづらしき人の—尙侍が帝には憎からず思はれるにつけても、中宮の心だけには少しも逆らふまいと帝が思し召すのもめでたい中宮の御覺えだ。
(八)藤典侍—前出、女房。
(九)故大殿—尙侍の父、寢覺上の亡夫。
(一〇)御事をなむ—入內する意志が事を。
(一一)大人び立ち添ひて—尙侍上の後見役として、大人らしく立ち添つて。
(一二)君ももし—昔忘れぬ—貴女も、昔私が貴女の入內を欲した事等を忘れないならば、私と同じ心になつて、尙侍を亡き夫の形見と思つて、諸共に可愛がつてやつて下さい。
(一三)仰せられたる—仰せられたのに、その御返事も申し上げないのは。
(一四)百敷を昔ながらに—宮中を故關白(寢覺上の亡夫)存命の時の境遇で見る事が出來たならば、と思ふのも悲しい。昔を今更取り返す事も出來ない。

何」など問ひ聞えさせ給へれば、帝「なほ氣配手當りなど子めいて人の女とは覺ゆらん、らう〳〵じき方や少なからん。只今は事々しく見えんもうたてうゝあるべき。心安くらうたげにはありぬべかめり」と宣はする御氣色、いと淺きとは見えさせ給はず。おはしまし暮らして、その夜も尙侍參う上り給ひぬ。またの夜は中宮上らせ給ひて、やがて上の御局に侍ひ給へば、異人はえ上らせ給はず。珍しき人の憎からず思し召さるゝにつけても、宮の御心につゆ許りも違ひ聞えさせじとのみ思し召すぞめでたき人の御覺えなるや。畫つ方例の藤典侍御使にて北の方に御消息仰せらる。帝「故大殿の病の始めに、御事をなむ云ひ置きしかば、昔よりの志に添へて、如何でと思ふ心深きを、厭はしげに宣ひ捨てたんめりし九重の中に、大人び立ち添ひて參り給へるも、いと哀れになん聞し召す。心のどかにさて物し給はば必ず自ら聞えさせん」と宣はせたり。御文には、

帝　君ももし昔忘れぬ物ならば同じ心に形見とも思へ

御返はいと愼しけれど、まめやかに過ぎにし哀れを仰せられたる、聞えさせざらんもいと怪しかるべければ、心を延べて、

寢覺上「百敷を昔ながらに見ましかばと思ふも悲し賤の小田卷

(一)出でさる―「出でたる」の誤か。

(二)目止めたり―人々が注意して見た。

(三)母君―寝覚上。

(四)大井川しづ心なく―今宵貴女に逢ふ迄の間は、落付いた氣持もせず泣かれる事だ。流るるに泣かるるをかける。

(五)北の方―故關白北の方、即ち寝覚上。

(六)柚引くにしも―「柚人」の誤か。御自分の事を、どうして大井川の筏師等に御たとへになるのだらう。大井川……流るるの句を指す。

(七)筏師や―「いかだし」は「いかれにし」にかかる序詞。今朝御別れにしてからは、どうしたのか涙が流れてなりません。

(八)世の常事―「世の常の事」の誤か。

(九)我が心も―寝覚上は自分の心が幾つの間に、かやうに尚侍の世話を見る等といふ程に大人びて了つた事かと。

(一〇)まう上り給ふ―三夜續けて、尚侍が帝の夜の御殿に侍ふ。

き程に洩り出(一)でさる女房の袖口裾の褄いと心殊に、薫物の匂ひは雲の上までも通る許り心惜き氣配、かたはらに多く推し量らるゝ御簾の中の氣色なり。銚子取りて出でたる童の頭付、容態髪のかゝり、もてなし、此所はと見るに、いと勝れたりと、目止めたり(二)。盃次々の人土器取り給ふに、果に雅子君紅梅に葡萄染の織物の指貫、青色の裾長う引きて、角髪結ひて（イ取り出で）給へるもてなし有様、凡ていはけたる所なく、艶き目もあやなるに、美しさを、人は淺ましきまで、あはれに見守り給ふ。母君(三)も今ぞねざり出でて、泪ぐましく見奉り給ふ。御文には、

帝　大井川(四)静心なく流るゝは暮待つ程の心なりけり

北の方(五)の見給はん所恥かしく、御用意せさせ給ひけれど寝覚上事しもこそあれ、かたじけなく、柚引くにしィにもなど譬へ寄らせ給ふらん一と見給ひける。御返はいとわりなく慎しげに思したるを、せめて書かせ奉り給ふ。

尚侍　筏師(七)や如何にと思ひ寄らぬにも浮きて流るゝ今朝の泪を

御使の祿女の裝束、紅梅の織物の細長添へらるゝ世の常事(八)なり。すなはち御使立ち歸り參るが嬉しさカも、何時の間に、我が心(九)も、かう大人びしぞと恥かしく思し知らる。

先づ頻りて三夜は參う上り給ふ(一〇)。四夜と云ふ夜、中宮の御方に渡らせ給へるに中宮如

(一)また誰にか讓る方なく—自分以外に、誰にも付添の役を讓る事も出來なく、寝覺上は。(二)狹け—寝覺上の居殿だけでは狹く、登華殿の北表をあてた。(三)上は—寝覺上は帝の事等もいかにと—寝覺上は帝のあるので(二三卷間缺卷の梗概參照)、參内するのもどんなものかと。(四)大貳の北の方—一二卷の對の君。(五)姫君—小姫君、尚侍の妹。(六)大納言二人—新大納言と權大納言。(七)中納言—一二卷の宰相中將。(八)大貳の中納言—對の君の夫。(九)源宰相中將—一二卷の宮中將。(一〇)御前—御先驅。(一一)世にすこしあらばさかしき人の限り—少しでもすぐれてゐさうな人があれば、それ等の人々全部をお供として内大臣おらおとなる。(一二)おはせしにも—とあるべき處。(一三)參り給ひぬ—尚侍入内した。(一四)兄人—姉の夫なる新大納言、宰相中將、及びその子供達。(一五)人柄—尚侍の樣子。(一六)いとさしも—帝は今度入内の尚侍を、それほどの容貌を持つた女ではあるまいと想像して、御氣にもとめなかつたが。(一七)もし暗紛れの隙もやと—寝覺上の居られる弘徽殿とは近いので、もし暗紛れの隙間もあつて、寝覺上に逢ふ事も出來はしないかと。(一八)あしたの御使—帝より尚侍への後朝の御文。

給ひて、よき程になるに、我は先立ちて内に參り給ひて、御局のしつらひ等せさせ給ふ。登華殿なりけり。(一)また誰にか讓る方なく、殿の上も添ひて參り給ふべか三字イへるめれば、(二)狹ければ、大皇の宮の時々參らせ給ふ折の御座所、弘徽殿の北面をしつらはれたり。(三)上は如何にと、添ひて參り給ふを愼しく思せど、さりとてはいかでかは、必ずあるべき事なれば、(四)大貳の北の方此處に侍ひ給ふに姫君をば預け奉りて參り給ひぬ。(五)大納言二人、(六)中納言、(七)大貳の中納言、(八)源宰相中將、(九)その次々、(一〇)御前は内の大臣殿より世にすこしあらばさかしき人の限り奉らせ給ふ。故殿に親しかりし人も、本意あり嬉しき事に喜びて侍へば、故殿の(一一)おはせましにも劣らず嚴しくて參り給ひぬ。故殿の心寄せ語らひ給ひし藤典侍と云ふ人も片寄り仕うまつるべく思ひ置きたり。參う上り給ふにも、(一二)兄人その御子供など、眞實の御兄人めかしく打見えていと親しきもあはれなるわざなり。(一三)人がらいとさゝやかにィっゃゝかに(一四)聳えて、飽くまで貴に艶かしくらうたげなる氣配手當りなれば、(一五)いとさしも思し召さゞりつれど、こよなく近勝りして、あはれに思し召しなられにけり。内の大殿もやがて侍ひ給ひて、御宿直所は梅壺なれば、近き程にて、若し暗紛れの隙もやと、尚侍の上り給ひぬるより、やがて侍ひ給ひて覗ひ給へど、大納言達、中納言その子供も、女房等も立ち騷ぎ隙あるべうもあらず。(一六)あしたの御使待ち受け給ふ御心なべてならず。右大臣殿四位少將參りたり。いとよ

(一)爲据ゐつゝ―「あたりあたりいと勢あり―にかかる。
(二)我が名殘にて留まりし―自分の父の死んだ當時、自分がその殿の後繼とつたが其時の殿中に殘子は寂寞かつたんなに引達へたの様に事かにましてこの故關白の家には子孫として殘る男の子もなく。
(三)こよなくあるしけじめ―あるしけじめ―の誤か。
(四)北の方―寝覺上。
(五)かゝる時―かうした故關白の姫君の入内の折等には。
(六)むなしくはもてなし給はじ―姫君達ふ寝覺上は、いたづらに扱ふ事はあるまいと。
(七)人をも世をも用ゐる方の―人に見世をも用ゐる方の心ばへは、世の出來事の世話をしたり、世の出來事を處理したりする事は。
(八)我は―寝覺上自身が。
(九)有るに任せ―寝覺上が出たら目なる事をやつたなら。
(一〇)遺言―故關白が自分に與へた遺言。
(一一)思ふとも―たとへ自分（内大臣）が故關白の爲めにつくさうと思つても。
(一二)數のまゝに―數の多い故關白の姫君達の世話を。
(一三)この姫君達の人の―寝覺上が尙侍入内の事や重大事に思つて、何やかやをしてゐるので自分もどうかしたいと思ふ。重大事のある際だから、寝覺上が自分につれないのも尤だずいと若び艶いたる様はしながら、心の内まことにづしやかにあらまほしかりける人かな。見渡せば西東の對々に姫君達いと目安く尋ね取り、爲据ゑつゝ、我が名殘にて留まりし故殿の御殿の内の氣色、いかばかりかは引き變へたるやうなりし。またしてこれは名殘とて留まる男等も無し。今はの荒野ともなるべきを、あたり〳〵いと勢あり、よしなからず住みなして、君達も在り付かれたれば、こよなくあるしけぢめ無かめるを、故大殿の、北の方にのみ心を入れて、女共を云ふかひなく漂はして止みぬるよと、世に謗り云ふめりしかど、かゝる時を見るにはもどきあるまじかりけり。後めたからぬ心ばへを見置きて、いと勞ありし人の御心ばへなれば、空しくはもてなし給はじと、賴み思ひ給ふにこそありけりかし。人は手書き歌詠み、をかしき方はさる物にて、まことに人をも世をも用ゐる方の心ばへは、いと難げなる物を、我はひたぶるに若びて、いたく仕度の事を思ひ寄らず、有るに任せ給はましかば、いみじう哀れなる遺言を思ふとも數のまゝに我等はいかゞせまし。此の人のいみじき事に思ひたるにこそ、いかでと思ふ心ざしも催さるれ。我が爲めつらきはよく思へば又さる事ぞかし。何時しかさらばと靡き寄りなましかば、嬉しきはさるものにて、世の聞耳あざやかにはあらざらまし」と思ひ續けられ給ふに、いとゞ心のみ染み勝れど、まして内外いと騷がしければ、あざやかにもてなし、萬細かに掟てもてない

給ひつ。

今は心安くと立ち返り、例の隙なくと人も思ひ、我が御心にもなさうるさく心懸想せられ給ふに、御參内の直々しき御消息の掟よりほかに御消息もなく、まして自は見え給はぬを人々もあやしく思ふに、御心には中々さはやかに、餘り煩はしげなる世に、心置かれ奉らじと思したるにこそ、いはゞと心得給ひてひとへに内參りのいそぎをし給ふに、宮おはしまさねば寢殿に歸り給ひて、東の一二の對に宰相中將、西の一二の對に新大納言と移ろはし奉りて、皆いと覺束なからで、さる方に思ふ樣にて、督の君の御事を夜晝いそぎ給ふ。内々の心恨み深くなり優り給へど、此の御事には人々御心に入れて思し急ぐ氣配さへ加はりて、いとこちたうもありぬべけれど、此の御有樣に違ひていとさはあらじと、事そぎ給ひて、女房もくだくだしき搔雜ぜなるさせず、容貌有樣心ばせ各々口惜しからぬ限りを、選り出でて三十人、童下仕四人、はした者その御方の人、闇の夜にも香り隱れぬばかり整へ給ひたり。人々の裝束の色あはひ重なり、薰物の匂ひ、扇さし隱したるなど、すべて世に類なき樣に仕立てられたり。其日になりてつとめてぞ内の大殿はふすべ果て給はず、事共御覽ずるに、いさゝかその事こそ飽かず足らはざりけれと見ゆる事なく、細かに有難く盡くされたるに、大きに驚き給ひぬ。事添ふべき事もなかりければ、内大臣「盡きせ

(一)御參りのすぐ〳〵しき―もう女一宮なら居ないからと安心して、以前の如く、例によつて内大臣は隙なく寢覺上を追ひ廻す事だらうと人々も思つてゐる事なので、内大臣自身も、何だか色つぽい心持になつて心がときめくのであるが、それだのに、内大臣はただ故關白の三の姫君の御參内についての、眞面目な消息のきまり文句より外は。

(二)御心置かれ奉らじと―寢覺上の御心には、おかけられまいと。

(三)心置かれ奉らじ―他人から疑はれまじ。

(四)宮おはしまさねば―内大臣北方、朱雀院女一宮。此の句、一方、五四頁四行の「宮へ參り給ふ」にも「宮」を受けつゝ。

(五)寢殿に歸り給ひて―内大臣は寢殿に歸り給ひて。

(六)宰相中將―宰相中將は二卷に出た宮中將。

(七)新大納言―新大納言は夫々故關白の二の姫君、一の姫君の夫。

(七)この御有樣に違ひて―今は父の故關白も存在せず、ひつそりした姫君達の生活だつたから、それに相應せずあまり仰山に素晴しくはすまいと。

(八)ふすべ果て給はず―すれてしまふ事もしないで。

(九)つきせず―寢覺上は。

(一)引き別れ—子の日の松を引く事を姉弟の別れるに譬へる。
(二)初子—初音にかく。
(三)あやめも氣色を得てこそ—以下こうちく〳〵の心も人の程を。
(四)大皇の宮—朱雀院の后。而して朱雀院の女一宮は内大臣の北の方になつてゐるのであるこの參り給ふとあるは、大皇宮が女一宮の處に來るを云ふ。大皇の宮は—と思し召すにかかる。
(五)久しき居もありしやうには—内大臣が女一宮にあまりよりつかぬを云ふ。
(六)かくてあるには—以前とは隨分の變り樣だ。
(七)かゝらましかば—かうした狀態だつたならば、どんな騷ぎが出來て來るだらうか測り知れない。
(八)院—朱雀院。
(九)北の方をなほ聞ゆるに從ひて—内大臣が、故關白の北方(寢覺上)を大切にしてゐられるのに任せて、おゝ前は朱雀院へお歸りなさい。

羅子書 (一)引き別れ二葉の松は初子にも思ひ知りける事ぞ悲しき

あはれ〳〵と見けるまゝに、言忌もせず打續けたる言葉筆使、なほ美しう今始めたらん心地ぞするや。

寢覺上 心から二葉の松に引き別れ初子をよそに聞くが憂き哉

いでや人惡く過ぐし、あやめも氣色を得てこそ、さすがに心慰むばかりいと哀れに、なだらかなる一行を見んも餘りはうれたきをと思し止めつ、内々の心も人の程を。

(四)大皇の宮は、參り給ふ時あれど、彼方には久しき長居もありしやうにはあらぬを、

大皇宮「さればよ、かくてあるにはこよなく變りけりかし」と

大皇宮「かゝらましかば如何ばかりなる亂れあらまし」と思し召すに、

大皇宮「今より後もいと後めたけれど、さてのみも如何でかは。院も覺束ながり聞え給へば、北の方をなほ聞ゆるに從ひて院に侍ひ給へ。おのれ心留めて聞えなん。事をつゆにてもおろかにはありなんや」と切に聞えおもむけさせ給ふを聞くもゆゝしきまで覺ゆれど、覺束なからぬ程に打紛らはしつゝ過ぐし給ふ。いと心許なしと思し召しながら院に歸り參らせ給ふ。御贈り物などいと珍しき樣なり。冠り賜はり給ふは、新中納言、御加階に讓り

(一)引き別れ—子の日の松を引く。
(二)初子—初音にかく。
(三)あやめも氣色を得てこそ—以下こうちく〳〵の心も人の程を。
(四)大皇の宮—朱雀院の后。
(五)長居もありしやうには—内大臣が女一宮にあまりよりつかぬを云ふ。
(六)かくてあるには—以前とは隨分の變り樣だ。
(七)かゝらましかば—かうした狀態だつたならば、どんな騷ぎが出來て來るだらうか測り知れない。
(八)院—朱雀院。
(九)北の方をなほ聞ゆるに從ひて—内大臣は大皇宮が女一宮にかくすゝめるのを聞いて、忌々しい迄に嫌に思はれたが。
(一〇)聞くもゆゝしきまで—内大臣は女一宮ほ。
(一一)いと心許なしと—女一宮が母院に御歸りになる。
(一二)歸り參らせ給ふ—女一宮が母大皇宮のすゝめにより、朱雀院に御歸りになる。

御顏いと赤くなり給へる、いとはなゞと美しげなり。見給へば、

姫君「(一)引き添ふる松見てもなほ思ふかな同じ尾の上に生ひぬ契りを

(二)かの遊べども」と書き給へりしは、こよなく幼かりき。誠にいみじく書きなりて、これをいみじき帝の御返せさせ給はんにも、たゞうながら恥あるべうもあらず、上手めき美しげなる樣を、打傾きつゝ、(三)北殿へ奉らんとて、書き給へると心得給ふ。思し寄りたる御心ばせ哀れに悲し。事忌もせらるずほろ〳〵と溢れて、内大臣「(四)我ならましし時、いみじき命絶ゆべき筋と云ふとも、これをたぐへでイたたへて見奉らんと思はましやは。母の思ひは世には並びなしと云ひ傳へ見聞けど、此(五)の人の御心ばへは、更にさこそあらざりけれ。古へは、よし、げに我はいみじく若くて、ひとへに物慎しく恥かしかりけんに、やがて親兄弟(六)のもてなしなれば如何はせん。それを從はず背き離れなましかばと、よく思へば心よからぬ事ぞかし。今(八)だにとは思ふべきを、淺ましきまで、如何に〳〵と、いと心得ず思ひ知られながら。是は(九)思ひしめするめりな。(一〇)いとよく思し寄りたり」とて、我引きて見イ包みて、松の枝に附けて奉り給ふを、例は教へ給ふにこそ、心ざかしら有るやうに思すらんと慎しくて、伏目にそばみて物宣ふを、内大臣「幼の御樣や」といと哀れにて、御返の氣色いとゆかしく見まほしきぞ人わろき心なるや。とばかりありて持て參れり。先づ引き開けて見給へば、

(一)引き添ふる—初子の日に引く松なと私と一緒に暮らす事で出來ない運命を思ふ事です。雅子君にあてた歌。萬葉集卷十五

(二)かの遊べども—山の川の清き河瀬に遊べども忘れかねつも—等奈良の都は忘れかねつ。今日のその日に居ても、あんなに引いるか。松の事がつかしく思はれてならない。

(三)北殿—故關白殿の北殿。寢覺上が雅子君と共に居る御殿。

(四)我ならましし時—已が寢覺上であつたならば、たとへ命のなくなる樣なる時でもこれほど可愛い姫君を、一緒に伴はないで居られようか。

(五)この人—寢覺上。

(六)親兄弟のもてなし—寢覺上が故關白に嫁せしを指す。

(七)それを從はず—併しそれでもその場合親兄弟の言葉に從はたないで、故關白から背離れならば、よく思へば致しれ方はなかつたにしても、自分には不愉快に思はれるのだ。

(八)今だにとは—今度さへは自分ならぬと彼女が思ふべきなれば。

(九)是は—この姫君の手紙は。

(一〇)思ひしめするめりな—寢覺上に思ひ知らせるであらうな。

(一一)例は教へ給ふにこそ—いつも手紙を書く時は、内大臣に教へられて。今日は、自分一人で書いたので、内大臣は生意氣に思ふだらうと。

(一)尙侍―寢覺上の嫁せし故關白の三の姫君。
(二)大納言達―尙侍の姉の夫の大納言、及び寢覺上兄の大納言(一二卷に於ける左衛門督)。
(三)大方なる御文の御返り―普通の用事の內大臣への返事だけは。
(四)例ならぬ氣色もなきに―寢覺上は尙侍入內の準備に忙殺されて、內大臣には特別の樣子も見せず、今迄と同じなので內大臣は姫ましく。
(五)かばかりの絆―姫君(寢覺上と內大臣との間に生れた男君。從つて姫君とは姉弟)などいふ己の子のあるのに、それらの二人を互に行違はせて合せないで、自分も姫君の顏を見ずこんなにつゝしして居る寢覺上の心强さを。姫君は內大臣方に內大臣と共に、雅子君と共に居る。
(六)御しつらひあらたまるけぢめ―御座所の立派になつてゐるのは例年の通りである。
(七)我が御程は―姫君自身の樣子は。
(八)うらめしき人―寢覺上、

んも、さばれかし如何許り悔しかるべき事ぞと、つゆ許り見怪め給ふ氣色もなく、なだらかにて、(一)尙侍の御參內正月の廿日餘りの程なれば、いと近くなりぬる(イは、御いそぎの事どもばかりは、大納言左地二字イ遺中納言帥などに詳しく、聞え置きて、その事かの事など大方なる(二)御文の御返り、はたあべい程に聞え給ひて、(三)例ならぬ氣色も無きに、いと妬く、(四)かばかりの絆どもを行違はせて、いとかう側顏なる御心强さは、かゝらんものとは思はざりしを、折々の御返を思ひ合はするに、如何に思しなる御心變りぞと胸塞がりながら、我が心をもしうねく念じつゝ、うち〳〵の御言の葉は絕えて過ぐし給ふに、初子の日つとめて、とく起きて姫君の御方へ渡り給へば、更なりや、御(五)しつらひあらたまるけぢめ殊ならず、めでたき女房童、人に劣らじと挑み繕ひて、所々群れ居たる、童氣たる雛扱ひなどするに、姫君は紅梅の薄きを六つ許りに、梅の五重の御衣、やがて枝折りつけられたる萠葱の五重なる、雛を造り据ゑたらんやうに、我が(七)御程はをかしげなるに、御衣がちに引かれて、今咲きたらん花もいとかゝる匂ひは、何時かはあると見るより所狹くこぼれ出てたるやうなるは、(八)うらめしき人ふと思ひ出でらるゝに、御硯の蓋に、小さき松ども打置きつつ、青き唐の薄樣に御文書き給ひけるを見奉り給へば、恥しらひて打置き給へるを、內大臣「御文は何處に書かせ給ふぞ」と打笑みつゝ、問ひ聞え給へば、恥かしと思して、

(一)なになり袖の氷解けずー一卷四一頁の事を指す。
(二)萬のことわりを思ひ許し—内大臣(一卷に於ける大納言、この物語の主人公)は色々の道理を思ひ許し、寢覺上(一、二卷の中の君、この物語の女主人公)の無情なる仕打をも許し又自分の心を無理に沈め過し來たが、道理以上に又眞事に人目恥しい迄に寢覺上が怨めしく思はれるので、「さめやかに」は「まめやか」の誤。
(三)いとほしともー内大臣に氣の毒と寢覺上が思ふ樣になるかと、それを試みる爲に寢覺上には便りもあげない。
(四)宮へ參り給ふ—朱雀院大皇宮の女一宮、内大臣北の方。
(五)姫君—石山にて生れし姫君。内大臣はこの姫君を養育してゐる。
(六)我が君をも—「を」は感動詞の「な」ならん。我君もの意なり。
(七)母—寢覺上。現在は故關白の邸に居る。姫君は内大臣の所に居る。
(八)渡し奉り給はずー寢覺上方に姫君を渡さぬ。
(九)過ぎにし方は—「悔しかるべき事ぞ」まで寢覺上の述懷。過去に於て自分の思慮が淺かつたと内大臣に恨まれるのは却つて自分にとつては幸ひだなどと、人知れず心で惱んだけれど、併し今は中君である内大臣の靡き奉りても、何の目安き事かあらむと、何の體裁の良い事があらうか。
(一〇)后の宮—大皇宮。當帝及び女一宮の御母、朱雀院后。
(一一)まいて如何ばかりー内大臣に靡いたならば、まして一宮に心配な事が多からう。内大臣には女一宮といふ北の方がついてゐるし、然も宮の背後には朱雀院后もついてゐるのだから。
(一二)見果てぬ夢の世をー後撰「よそ年ら思ひしよりも夏の夜の見果てぬ夢ぞはかなかりける」等による。この儚い世に強ひて内大臣が恨み寄るのに今更はしたなめるわけにも行かず云ひ樣もなく思案にも暮れるのに、この儘内大臣を思ひ絶ち又離れ切るのが、まゝよどれ程に殘念な事があらうかそれほど殘念な事ではないと少しも内大臣から便りのないのを怪しむ事もなく普通と同じく平穏に。以上の句は「くは」しく聞えおきて」にかかる。

なになり袖の氷解けずと嘆き明かし給ひてし朝より、餘り萬のことわりを思ひ許し、心をもあながちにのどめ過す、ことわりも過ぎてさめやかに怨めしく、人目恥かしきまで思し知らるれば、いかゞ宣ひ思しなる、いとほしともや思し弱る氣色見ゆると、心見るとて御消息もなくて、宮へ參り給ふついでにも、南の御簾の内にて内大臣「姫君は如何に」と許り淺はかにて、やがて立ち入らで、内大臣「我が君をも我を思はゞ、母なる暫し見奉り給ひそ」と内大臣「我をいみじく憎み給へば、心憂し」と云ひ知らせて渡し奉り給はず、跡絶えするやうにて年も返りぬるを、心知る人嘆きいとほしがれど、過ぎにし方は、中々淺はかなるものに恨みられ奉らんは苦しうなど、亂れ給ひし人知れぬ御心の内なれど、今はあながちに、靡き奉りても、何の目安き事かあらむとする。后の宮の御心掟見もて行く、いと物恐ろしく、まいて如何ばかりか心憂き事あらん、見果てぬ夢の世をあながちに恨み寄り給ふも、さすがに今始め、はしたなめ給ふべきにもあらず、云ひ遣る方無くのみ覺ゆるを、かくて思し絶え疎みたらゝ絶え

卷

三

中君は身の薄命を嘆いて、

草の葉にかゝるもつらき露の身の消えて悲しき風の音かな（風葉集巻十九雜二）

寢覺上の後見一切をしてゐた對の君は大貳の妻となり（三卷參照）、女房の少將は尾張守の妻となる。（五卷參照）

關白は、三番目の姫君を帝に奉れと勸める人もあつたが聽かず、大納言に與へようとしたが、大納言は之を辭退した。かくて寢覺上は關白の溺愛に比較的安らかな日を送つてゐたが、好事魔多し、關白は北の方の寢覺上や姫君達を殘して他界する。その際故關白は姫君よりも寢覺上の事を心配して、亡き後を大納言に依頼する。而して寢覺上は大納言に後見せられる事になり、故關白の姫君達もその世話になる。（三卷參照）

かくて帝は又しても寢覺上を尚侍にと懇望せられるが、寢覺上は固く辭して、故關白の嫡君、自分には繼子に當る三の君を尚侍に推薦する。（三卷參照）

大納言は今こそ寢覺上を我物にせんとしきりに云ひ渡るが、寢覺上は體よくあしらつてゐる。

大納言は內大臣に、寢覺上の兄の衞門督は權大納言、宰相中將は新中納言、故關白の長女大姫君の嫁してゐる殿は新大納言となり、かくて第三卷にうつる。

此の間に八ケ年の歲月が過ぎて、寢覺上は廿七歲、かの石山で生れた嫡君は、十一歲となつた。

覺上との氣持は次第に融け合ひ、近づいて行つた。（無名草子參照）

かくする中、朱雀院（先帝）よりその女一宮の大納言への御降嫁についての話がある。大納言は寢覺上を關白に奪はれた當時であるから、心ならずも朱雀院の女一宮に通ふ樣になる。大納言北の方の大君は寢覺上の事件の後、又この女一宮の爲苦しまねばならない（五卷參照）。大納言が女一宮に通ひ初める日、北の方の嘆き思ふを慰めて、

よしや君長き契は絕えせじを命のみこそ定め難けれ（拾遺百番歌合十二番詞書）

との歌を送つた。

絕えぬべき契にそへて惜しからぬ命を今日に限りてしがな（拾遺百番歌合十二番、無名草子）

この北の方の歌にも、嫉妬閨怨の深刻さが思ひやられる。北の方はかゝる物思ひが原因となつて死んだ。（四卷二三八頁參照）

一方寢覺上は、大納言との間の世間の取沙汰があれほど騷がしかつたに關らず、入道殿に自ら進んで寢覺上を迎へる事を主張した關白、この關白の寬大な思ひ遣り深い態度、及び心からの愛撫に憂き世も忘れる程であつた。（三四卷參照）

始めより寢覺上に心のあつた宮中將は、一夜關白殿に忍び込み、寢覺上と思つて關白の殊に慈愛深かつた中君、卽ち二番目の姫君に契り、遂に之を連れ出したが、寢覺上にあらざるを知つて落膽した。併し最早如何ともする事が出來ず、この中君を北の方とする。これからの中君卽ち宮中將の上にはつらい運命の悲曲が奏でられて行く。なぜなら宮中將は名だたる漁色家であつたから。關白の悲嘆は甚しかつた。ならう事なら后の位までと思つてゐた程の中君の愛し方だつたからである。（四卷二一八頁、五卷三一六頁）

みあるべきならで出で給ふ(筆者註、嫁ぐ日の)曉の事どもなど、又關白殿へ渡らせ給ひて後、いとあやにくなる御氣色にて(筆者註、關白が寢覺上を)慰め侘び、大殿廣澤におはして愁へ給へる、入道もいとものしと思して、宰相中將(筆者註、寢覺上の兄)御使にてさいなみおこせ給へるを、(筆者註、寢覺上が)頭もたげてつく〳〵と聞きても、云ふべき方もなきまゝに、いとはかなげに、づゝきもなくまぎらはして、袖に顏を押しあてて居給へるこそいとほしげれ。

とある。關白には四人の姫君が居た。長女は已に嫁いでゐるが、後の三人は尙關白の膝下にあつた。そして四番目の姫君は生れてから未だ五十日程に過ぎなかつた。間もなく寢覺上は大納言の男君を產む。(五卷)

かく寢覺上が關白に嫁いでからの大納言の苦惱焦燥は一方でない。自分以外の誰に嫁すものかと油斷してゐたその際に、急に關白の北の方となつて了つた事を知り泣くにも泣かれなかつた。(五卷)

限りとて思ひ絕えゆく世の中に涙しもなど盡きせざるらむ(無名草子、風葉集卷十四戀四)

又は、

君はさは限りと思ひ絕えぬなりひとりや物を思ひ過さむ(無名草子

と大納言は嘆く。寢覺上は、大納言とはお互に思ひ交してはゐるが、姉君の思ふ所も考へて、決して大納言に便りもすまいと思つてゐた。併し關白に嫁して後、新しく生れた君(雅子君)を見るにつけ、忍び切れず、大納言から來る手紙の返事は常にしてゐたが、段々關白にも靡いて行き、姉君とも仲よくなつてからは、自然大納言にも遠ざかつて、或る忍びの逢瀨に大納言は、數々の言葉を盡して寢覺上を何處かに連れ去らんとしたが、それにも心强く拒絕した。而して關白と寢

られなかつた。もう已に傷物である寢覺上を、誰が進んで引取つて呉れるであらう。美しい寢覺上であるのにと、取分け愛してゐた寢覺上であるだけに入道殿の心痛も甚しい。（五卷）

當時大納言の父の關白は死し、母は尼君となり、關白には、左大將であり然も北の方を失つたばかりである大殿がなつた。この關白が寢覺上の容姿のすぐれ、世に比類のない美貌の持主なるを知り、世間の噂をも顧みずに、亡き北の方の代りに是非寢覺上を貰ひ受けたいと、西山の入道殿に左衞門督を使として申し込んで來た（無名草子）。入道殿の喜びは云ふ迄もない。大納言とのつまらぬ噂の爲に、よもや寢覺上を引受けて呉れる樣な特志の方はあるまいと思ひ諦めてゐた處、人もあらうに關白から假令後妻ではあり、又さだ過ぎた關白でありはしても、その北の方として申し込まれようとは夢にも思はなかつた。之によつて寢覺上の憂欝も直るに違ひないと早速關白の申し出でを承諾した。尙この時、帝（冷泉院）からも女御にとの御所望があつたが、入道は勿論之を御斷申した。なぜなら、浮名の高い寢覺上を入内させるとはあまりに畏多い事と思つたからである。かくて入道は、寢覺上に是非關白の北の方となる樣にとすゝめるが、寢覺上は直ちに承諾はしない。年老いた關白の許へ嫁ぐ事は、現在大納言を戀人として持ち、且其人の子を産んだ寢覺上には無理な註文である。かく寢覺上の嫌惡するのを、父入道殿は大納言の事は氣にも留めずに、只關白の老人なるが故であると解してゐた（五卷二八二頁參照）。併し寢覺上はいつまでも頑强に反對も出來ず、又たつての關白の懇請なので已むなく嫁ぐ事になる。その前後の模樣は無名草子に、

又老關白の許へ渡らせ給ふ程近くなりて、わりなく（筆者註、寢覺上が關白に）對面し給ふ程の事ども、姫君（筆者註、石山にて生れし姫君）の御事（筆者註、對の君などが）聞え給へるに、いとどつつましげなる顏引き入れておなづきたるほどなどこそいとほしけれ。さての

二・三卷間缺卷梗概

西山に隱れて後の寢覺上（以下中君を寢覺上と呼ぶ）には、懊惱の日のみ續いて行く。現在の姉の夫と關係したといふ不倫な行爲は、いくら拭うても拭ひ去る事の出來ない苦痛を、寢覺上に刻みつけた。姉の大君と幼い日互に戲れ睦び合つた事が今更の如く懷かしまれてならない。

　咲き匂ふ花も霞ももろともに見しにかはらぬ春の曙（拾遺百番歌合三番）

といふ樣な感懷も起きるのであつた。

又一方大納言も、思ふに任せぬ寢覺上との逢瀨を、又なく心憂い事に思つてゐる。久し振りの逢瀨には、石山に隱れて出產をした寢覺上を訪ね、これが最後かとも思つた事などを思ひ出し、

　限りとて命を捨てし山里の夜半の別れに似たる空かな（拾遺百番歌合十番）

といふ如く、奇しくも傷ましい寢覺上と我との緣の絲に慟哭する事も屢々である。

宮中將も、かねてから寢覺上に心あり、ある夜等は廣澤のこの別莊に忍び來て、宰相の君と云ふ女房の局で、寢覺上の妙なる琵琶の音に聞き惚れるのであつた。

　つげよ猶まやのあまりのあまそゝぎ我泣きぬれて歸り佗びぬと（拾遺百番歌合七番）

かゝるたまさかな寢覺上と大納言の逢瀨、それには對の君少將等の手引きの苦心は勿論あつたらう。その逢瀨を重ねる中に寢覺上は又しても大納言の子を宿す。世間の取沙汰がやかましく、それにつけても、大君の嫉妬がそれに正比例してつのつて行く。（五卷參照）

寢覺上の父、入道殿は、かく世間の評判の高い寢覺上の處置はどうしたものかと迷はずには居

身の緣にさし驚かしなどする事もなく、いとゞのみ搔き絶え勝るに、思ひ餘り十日宵の程に大納言殿參り給へり。入道殿いと嬉しく待ち喜び給ふ。左衞門督宰相中將など參りて、精進の御饗、所に付けて樣異にをかしくしなさせ給ふ。御前なども御覽じ入れつゝもてはやさせ給ふ。公私の御物語いと靜やかに。

消えて衰れに有難う打見守られ給ひて左衛門督「あひなき事により、入道殿のよろしからず思し召したる御氣色に憚られて、いと久しう見奉らざりけるかな、御髮は落ちさせ給はずやある」と搔き出でたれば、六尺許りなる末つき扇を展げたるやうなり。左衛門督「こよなうこそ長うならせ給ひにけれ。あはれにあたらしき御樣なりや。見奉れば中々心盡くしに覺えける」とて涙押し拭ひ給ふ氣色もさすが淺からず。入道殿も、此方におはすると聞き給ひて、かイナシなかの御兄にて、許しなう思ひ聞え給へるがいと怨めしきに、かう心許して見奉り給ふを嬉しと思す。衰れなる御心なり。我も渡り給ひて御臺など此方にてもてはやし聞え給ふ。人々歸り給ひぬる名殘、つれ〴〵に端近う打眺めて、左衛門督のいと心美しう思し宣ひつるも、身の恥かしさは置き所なう覺え勝りながら、大納言の上何時かやうに思し許されなむ。幼うよりまた無う思ひ睦れ並び聞えしかば、吹く風につけても先づ思ひ出で聞えぬ時の間もなく、戀しく思ひ聞え給ひけり。對の御方少將など「姫君年勝り給ひて如何に美しき御程ならん。御戴餅などせさせ給ふらんかし。煩はしき世の中に、あいなく飽き果てゝ、久しく參り見奉らぬィんよ」など云ひて、打泣きなどするは、さすがに御耳止まりて、年の數添ひ給ふけぢめにや、身の憂さも衰れも在りしよりけに思ひ知られ給ふ折多かりつゝ、隙無うて、立ち歸り給ひし後誠に心憂しと覺え、入りて音なひ給はぬを、え去らぬ形

(一)末つき—髮の末の方の樣子。
(二)かなかの—底本此の上二字分缺字。「ある」の誤脫したる歟。「ある」が中の」前田家本には「かゝ」よし。「おはすると聞き給ひて、なかの」とあり。此の左衛門督は入道殿の子の中では一番の年上で。
(三)許しなう—中君の事を許すまじき事に思つてゐたので、入道殿は怨めしい事と思つてゐたが。
(四)打眺めて—中君の樣子。
(五)大納言の上—大君。
(六)姫君—石山にて生れし姫君。
(七)御耳—中君の御耳に。
(八)隙無うて—「さし驚かしなどする事もなく」にかかる。
(九)立ち歸り給ひし後—大納言は雪の夜、逢ふ事も叶はず立ち歸つた後は、心憂く思つて訪れもしないでゐるのに、中君は中君で隙もなくて姫君とあひふ切る事の出來ない形見があるのに、大納言には何の音沙汰もしない。

(一)櫻梅の御衣ども―中君の樣子

例の世の常の人樣にて居給ひたらば心安くもあるべきを、櫻梅の御衣どもの上に紅梅の固織物の小袿着給ひて、萠葱だちたる帶を、はかなげに打掛けて、行ひし給ひけるなめりと見ゆるを、恥かしと思して、數珠など引き隱して、もて紛らはし給へる樣のなほ珍かなる光り添ひ給へる心地して、淺ましきまで美しげなるを見るに、あたらし、いかにすべき人の御身ぞと目も昏るゝやうに覺ゆれ(イん)、物も云はで見廻し給ふ。侍ふ人も、かゝる山里には、つきなきまで清げに打ち裝束きわたりたれど、何の心地よげならず、經を誦み行ひしける樣にて、つれ〴〵にしめやかなり。入道殿物こそ宣はねども、如何なる御心地ならむ、(イさばかり思し取りし道の絆になりぬらん)かしと樣々心苦しう物のみ哀れなるに、我も世にある甲斐なくぞ覺ゆる。

(二)覺ゆれ(ん)―「覺ゆればし」か。

左衞門督は今日ぞ參り給へる。此の後はかく心づきなき者に思して此方にはさし覗き見奉らせ給はぬも、年隔たりては、罪淺くや思しなるゝ。三字缺字今日ぞ此方にはしたる。姫君は、さ許り思し勘じたる月日の隔てを、變らず見え奉らんいと面なう心無きやうなればイど、宰相の君おはする程にゆくりなう入りおはしたるに、差し隔て隱れなども如何せむ。又心有る樣に取りなし思しなさむと思ふいと苦しければ、顏の色いたう移ろひわたりて、少しそばみ給へるを、さこそ云へ、左衞門督も見奉り給はぬ折こそ、淺ましき者にも思ひ聞え給へ、遙かに隔てゝ見聞え給ふに、萬の罪

(三)此の後は―大納言と中君との關係露顯以後は。

(四)姫君はさばかり―中君は左衞門督はあれほど自分をせめて長い月日の間互に逢はなかつたのに、今又以前と同じく逢ふのは。

(五)心ある樣に―未だ大納言と關係ありげに思ひとられるだらうと思ふと、中君は。

(六)思ひ聞え―中君の事を。

(一)女房ちと—「女房達、と」等の誤脱か。大君と大納言は中君の事以来、仲が悪く、向ひも合はず、心中の怨みは、つも晴れ間がなく、耶の内外の様子が偲りに陰鬱だと云ふので、女房達だけは愉快さうに集つてゐる様子。

(二)大殿—大納言。

(三)さし並び給へる—大納言と夫婦であらせられる大君は、最上の栄位にある人とは云はれないが。

(四)又わくかたなう一人を—たとへ大納言が大君を専心に愛して居たとしても、大納言自身の人品が下品なら、満まらない。併し大納言は立派な人である。大君も仕合せだ。

(五)心の中にこそ—大納言は中君を愛された故、心の中では大君は懊むだらうがそれは人目には分らない。大君は人には此上もない幸福な人と思はれてゐるだらう。

(六)姫君—中君。

(七)忍貝—来詳

がましき心のまゝにやあらんと思ひて、大納言殿に参り給へれば、外におはする程にて、御簾の外にけざやかに居給へれば、大納言などさは、内に入り給へ と度々宣へば、入り給へるに、几帳引き寄せて、なほ向ひ給はず。内々の御怨みどもは、何時も晴れ間なけれど、内外氣色悲しとして、女房らと心よげに参り集ひて侍ふ有様、更にも云はず、いとあらまほしげなるに、大殿君の御容貌有様今年は殊に匂ひ優り給へる心地して、さし並び給へる、げに、いと際もなき幸ひ人と云ふべきならねど、后に宣一字居給カはざらんには、かうてこそおはしまさめ。又分く方無う一人をかしこき者に思ひ聞え給へりとも、人がらなべてならむは、何かはせむ。心の中にこそ安からざらめ。人目はそのけぢめ見ゆべき事にもあらざめりと打見渡すに、姫君の御有様こそ口惜しきものはありけれと思ひ出づるに、涙ぐましき氣色を、心通ふ御心地見遣られ給へど、かう思ひ續くるもイナシ心の中もそゞろなる心地すれば、急ぎ立ちて、やがて廣澤に参り給へれば、御堂の方に法師ばらぞ侍ふ。都には消えにし雪處々村消え殘りて、今も打ち散りつゝ、来だ古年の心地するに、端近き梅許り春を知らせ顔に開け渡りて、池のほとり三字イ程の水の流れ、石のたゝずまひなど、世變りて珍しきに、据ゑ奉らせ給へる忍貝(七)イしひ、有様ばかりはいみじけれど、歩み寄るより、もて離れ世づかずの御住居やと大納言殿にて思ひ出でィはで聞えつるもしるく、涙先に立つ心地するに、

き絶え晉もし給はで年もはかなう返りぬ。

(一)宰相の中將は、大納言女「朔日の程も許しなき御氣色、(二)こは萬世も現れぬらむ」と宣ひたるを、をかしくもあはれに御覽じ思し出でて、(三)子持の名殘なほ弱げにて臥い給ひたるに、宰相中將「(四)心一つに思ひ佗びて申し合はせつゝ、胸の隙は明けじ物を」と宣ひ出でたるを、中書「あな心憂、恥かしくもありけるかな」と中書「如何に聞き給ひけん。後めたくのみもある御心かな」と怨じ給ふ。宰相中將「此の御返さろが中さむは珍しげなし」と聞え給へど中書「筆取るべくもあらぬ物を」と宣へば、宰相中將「などかく若々しくは。(五)打ちわなゝいてもあへなむ。たゞ臥しながらも」と紙筆取りて切に聞え給へば、中書「わりなくもあるかな。書かるべくもあらぬものを」と云ひながら、

・中書　(六)問ふにこそ片(七)飼籠の巣籠りもいぶせからずは思ひなりぬれ

げに何の(七)繕ひもなしや。殿の御膝に搔き靡かされて、筆に任せて書きて打置き給へる墨付き筆の流れなほ珍らかに、伏しながら書き出でたるとは見えぬも、あはれ如何でかく萬に優れ給ひけむ。命やえ長からざらんと思ひ續くるはゆかしく涙の止め難きを、せめて思へば、かばかり飽かぬ事なき人がらには、(八)后の位そら極めたる事と覺ゆべくもあらぬに、見る目有樣よりは契宿世下樣なりける人なりけり。世の(九)一の人に限りなく思ひ崇めらるゝ(十)勢ひは並びなげに。(十一)我さへ搔き絶えんもさは云へど亂れ

(一)宰相の中將は—中君の兄。「御覽じ思し出でて」にかかる。
(二)こは萬世も現れぬらむ—中君が私を許さない樣子は永久に消えずに現はされる事でせう。
(三)子持の名殘—中君の樣。
(四)心一つに思ひ佗びて—あなた方は、大納言から手紙があつて、處置に困つて相談をしあつて、大納言に返事をやらない積りなのですね、そんな事をしても、あなた方の胸は晴々としないだらうに。
(五)うちわなないても—たとへ慄へた文字でもかまはないだらう。
(六)問ふにこそ—あまりにうるさく貴君から云つて來るので、この樣に引き籠つて居る事も却つて少しもうつたうしくは思はぬ樣になりました。
(七)なにの繕ひもなしや—その中君の手紙には。
(八)后の位そら極めたる—皇后の位とても、この中君にとつては最上のものとは思はれない程だと思はれるのに。
(九)世の一の人—大納言。
(十)勢ひは並びなげに—此の邊脱落あらん。
(十一)我さへ—宰相中將は、自分迄が大納言に御無沙汰をするのも。

(一)あいなくとせめて―大納言には氣の毒ではあるが、中君との事はもう仕方のない事だと強ひて思ひ切つてゐるのであるが、併し中君から大納言が眞實に離れる樣な事があるのは心細い事、又殘念な事と思はれるのにさすがに見つともない事だ。

(二)巡り逢はむ―無名草子所載。あなたは中君と巡り逢ふ事の出來るを待たずに、之が最後と思ひ切るべきでせうか、又逢ふ事も出來ますよ。

(三)君の御有樣―中君の御有樣。

(四)今宵だに―もう自分とはかけ離れて了つた中君に、折角雪をわけて來た今宵さへ逢はされないのに、どうして又の夜を頼む事が出來よう。

(五)またなく―大納言は中將が此の上もなくれたましく思はれる中にも。

(六)ことわりと思ひ知る程も過ぎて―雪道を分けて訪れて行つたのにも逢つて異れない中君のつれなさは、道理を過ぎてあまりに心憂く、思はれるのでうさやかなるに、殊更引き繕ひたる事無う、寒し給ひて、いみじう恨み萎れて、立ち出で給ふ樣の淺ましう、あいなくとせめて思ひ離れ奉れど、世に誠に思し飽き給はむは心細う、口惜しかりぬべう覺ゆるぞ人惡き。何かは、なのめなるべき事の樣ならば、いとかう恨みられ奉らでもありなましものをと、心弱く打忍ばれで、

少將　廻り逢はむ折をも待たず限りとや思ひ果つべき冬の夜の月

いとさゝやかに容躰をかしげなる人の白き衣どもの上に、濃き搔練着て、あざやかなる裳引き懸けて、わざと云ふとも無く打紛らはして、いみじう心苦しう思ひ入り眺め出でたる月影の氣配懷かしく和やかなる樣、君の御有樣を明暮見習ふべかめれば、あたりの人までかやうの人とぞ覺えぬ、これさへ飽かぬ心地して、え乘りもやられ給はず。

大納言　今宵だに懸け離れたる月を見でなほや賴まん廻り逢ふ夜を

車引き出づる程にぞ中將も中門のもとより立ち出づる直衣姿艶かし。雪打ち拂ひつつ、うつたへに思ひもよらで、女の罷出ると思ひていみじく氣色ばみて「御送り參らん」とて過ぐるを、またなく心疚ましと思ふ紛れにもをかしと見給ふ。目覺ましき心ある人にて、必ず此の人に語らひ靡かされなむと思ひ寄るさへ胸打潰るゝことわりと思ひ知る程も過ぎて餘り心憂ければ、いとほしとや思ひ知ると、それより後搔

(一)これをば―中君はこの宰相中將を。
(二)なにせむに―一體何の用があつて、宰相中將の事などを御聞入になられるでせうか。
(三)人にあはれと―中君にあはれと心留められ樣と、思ひ顏のわざ〳〵の來樣である。
(四)こはよもあらじ―一本「にはよもあらじ」宰相の君を目指して來たのではあるまい。
(五)心高き―宰相中將は心あがりした人。
(六)かやうに―自分の樣に。
(七)あさましく―中君が大納言との關係を。
(八)あひなし―中君を大納言に逢はせる事は、不都合な事と思つて、少將自身も決心してゐた事であるから。

そも人がらなれば、(一)これをば哀れにをかしと聞し召すらんかし」と宣ふ氣色いと物しげなれば、少將「あなゆゝし。(二)何せむに聞し召し入れむ。かの君は入道殿に親しう參り給ふ人なれば一と聞ゆれば、大納言「それも畫などこそあらめ。必ず人に哀れと心留められ奉らんと思ひ顏なる夜の振延へ樣にこそあめれ」と宣へば、少將「宰相君として侍る人心ある氣色にて折々かくこそ。異人だに見もとゞめ侍らぬ物を、まして御前までは何とか聞し召し入るべき」と聞えさすれば、大納言「宰相の君、(四)こはよもあらじ。これはいみじう心(五)たかき人ぞ。あるやうありて參るにこそあめれ。怪しく人に思はるべき樣して、羨しき人ぞ。(六)かやうに云ふ甲斐なく、人に厭ひ捨てられぬべうもあらず、見入れられ奉りなむと思ひてこそ、今宵も參りつらめ」など、いと心よからぬ氣色にて打嘆きつゝ、露もまどろまず床中に起き居て明い給ふ。見奉るは、いみじく忝く、哀れなれど、淺(七)ましくいみじと覺えたりつる樣もことわりにて、あながちに、忍び靡かし奉りても、何ばかりかは。(八)あひなしと我も思ひ固められたる事なれば、只打嘆きつゝ、見奉り明かす。

明けぬる氣色なれば、大納言「今宵より外に、また世にありけりと見え聞かれ奉らん事も恥かしければ、云ふ甲斐なく、思ひ閉ぢめつる」樣を氣配めでたうしめ〳〵と云ひ續けつゝ、車差し寄せて、乘り給ふ程に、こちたう積りたる雪の光も月も、曇り無

(一)言ふかひなし―大納言も文句が出なくなつた。

(二)さこそ宣へ―雪に惑ふ〳〵も歸りぬべきを」とある前の大納言の言葉をさす。あゝは言つたものゝ、歸る氣にはなれなかつた。

(三)和めおこづり―「おこづる」は甘言をもつて誘ふ意。少將の氣嫌を取つたり怨んで見たり

(四)此方―君が此方へ居られるなら逢はす事も出來ませう、父上の所に行かれたのですから出來ないと相談ですの。

(五)世の中いみじう慎ましう恐ろしう―中君が。

(六)かゝる山里に―此の句、下の「眺めつゝ」にかゝる。矢張り中君の樣。

(七)見奉る人も―以上の如き中君の樣を見る人も。

(八)此の少將達も、心配で耐らぬよ。

(九)安からぬよしを―安からぬよいふ話なら、下の「打言ひて」にかゝる。

(十)これさへ氣配懷かしく―中君の樣子のさへ押しはかられるのは言ふまでもなく、此の少將の樣でも物懷かしい樣子でしのんみりかなと。

(十一)なにになり袖の氷りもやらず―大納言がいかにも尤もだと感じる程に、中少將が中君の心細き樣の話を申し上げて。

(十二)怨みもしてられず―少將の涙を落すみも樣子を見ては、その言ひ分も尤もなので、大納言も怨み言を言ひ通すわけには行かなかつた。

(十三)なにになり袖の氷りもやらず―此の語、前にも「なにになり袖の氷り解け」と出づ。何故か、冬の夜寒にもかゝはらず少將の眼から流れ落ちる涙はだらかに答ふるに言ふかひなし。さこそ宣へ立ち歸るべき心地もせず、いみじう和めおこづり怨み給へど少將「いとわりなし。此方におはしまさばこそあらめ」と言ひて、動くべくもあらず。世の中いみじう慎しう恐ろしう思して、かゝる山里に、あるにもあらず心苦しう眺めつゝ、言はで思したる御氣色の心細う、今日など眺め暮らさせ給ひつる御氣色の、見奉る人も安からぬよしを、これさへ氣配懷かしくしめやかに、ことわりかなと聞ゆばかり打言ひて、涙落す氣色いとことわりなるに、え怨みも果てられず、さすがにいと聞かまほしく、問ひ聞かれて、なにになり袖の氷りもやらず流れ添ふ程、夜半ばかりにもなりぬらんかしと思ふ。上より人來て女房「式部卿宮の宰相中將參らせ給へり。『上りて對面せましと給へ』となむ云ふなり」少將「亂り心地搔き昏らすやうに侍れば、え上り侍るまじ。例の宰相の君に消息申せかし」とて遣りつなり。なぞ、我のみ分けたる雪を、かしこき事に云ひ立つる道の空を、此の中將のかゝる夜半に振延へ來つらんよと覺え給へば、大納言「など思ひも懸けぬ程なる。

たくて色々その樣子を問ひ聞くので、聞かれる少將は。

(十四)なにになり袖の氷りもやらず―此の語、前にも「なにになり袖の氷り解け」と出づ。何故か、冬の夜寒にもかゝはらず少將の眼から流れ落ちる涙は凍りもせずに、川となつて流れ增す程に泣き悲んでゐるうちに、夜も更けて今は夜半頃になつたらうと少將は思つた。

(十五)宰相中將―太政大臣の甥。

(十六)宰相中將―宰相中將が、こちらで少將にお目に掛りたいと、少將に告げて下さいと云つてをります。

(十七)我のみわけたる雪―女房の名。

(十八)雪―自分だけが雪い中を分けて訪れて來たのを勝れた事に取り立てゝ云ひたい程の雪道であるのに。

て少將「入道殿の今日の雪氣に風邪起らせ給ひて、惱ましうし給ひて、え渡り給はずとて御消息侍れば、やがて御堂に渡らせ給ひぬ。對の御方も御伴に參り給ひぬれば、かうともえ申し侍らず。いみじう口惜しうも」と言ふに、言はむ方なく淺ましく心憂くて大納言「俄によも風も起らせ給はじ。驚き騷ぎ渡らせ給ふ事もあらじ。などさる御事託なくとも、たゞたゞ」「あるまじう便なき事なり。眼醒ましうつらくもあるを、かゝる事な聞かせそ」となん宣はせつると、有りのまゝに語らむは怨み所なきことわりにて、雪に惑ふ〳〵も歸りぬべきを、あらはに空事つぎ〴〵しく取り續けらるゝかな」と怨めしげに思いたるを、いとほしけれど少將「わりなき事。つゆも例ならず物せさせ給ふには、自ら聞かせ給ふらん、先づ渡し聞え給ふを、わりなう慎しきよしを聞えさせ侍らんにあながちなるべき事にやは。などて無からむ事をば聞えさせむ」とな

取りついではならぬ、知らぬ顏をしておけと中君が言つたと。

(四)有りのまゝに語らむは—何故本當のことを言はないのか、あなたが本當の事を私に仰つたなら、私も中君のお怒りも尤もと思つて怨む事も出來ないので。

(五)あらはに空事—分り切つた嘘を似つかはしく仰る事ですれば。

(六)いとほしけれど—少將は氣の毒に思つたが。

(七)わりなき事—それは御無理といふものです。

(八)つゆも例ならず—入道殿が少しでも御氣分の惡い時には。

(九)自ら聞かせ給ふらん—挿入句あなたも自然かねゝお聞きぬ。

(十)先づ渡し聞え—上の「例ならず物せさせ給ふには」に續く。いつも中君をお傍にお呼び寄せになつて、傍をお放しにならないのですから。

(十一)わりなう慎ましきよしを—あなたが中君にお逢ひになる事は到底不可能の事と申し上げたの草ではありません。

(十二)などて無からむ事を—何うしてそんなない嘘などを申しませうか。

(十三)なだらかに—穩かに、尤もらしく。

(一)わりなかりし世を―大納言に通知なかりし世を―世間も出来ず、世間なる事も忍ばれなければ、の人目をなら無理にも出来ず、世間なる事も忍ばれなければ、事情なかつた當時の苦しい情況は、少將はそれとなく大納言に説明して。

(二)逃れやる―言ひわけをした。

(三)よしやつらさは―兎に角お怨みの程は中々言ひ盡されぬから、今晩だけに中君にお目にかかつて一寸でもお話したい。

(四)逢ひたなつて居られる樣子も思し―ひどく中君甚だおたのの毒だが。

(五)我が心―つなられば―少將の一存では何うにも出來ぬ事なので。

(六)語らひ合はせてこそ―一應對しの君に相談してから、御返答しませうと少將は大納言に言つて。

(七)上る―少將は對の君の居る上座敷へ出て行つた。

(八)聞き給へば―耳を澄まして後に殘つた大納言は聞くと。

(九)端近う眺め―中君が緣側に出て月を眺めてゐるのであらう。

(一〇)秋の澄の月にまどはれしの―此の秋だ月に思はれず心がさそはれて、中君が筝を彈いてゐると見えてその音が聞えてくる。

(一一)所がらにや我もそゞろに―此の山里の場所がら、大納言は非常に面白く感じて氣が浮き立つ程に面白く聞かれあたればかりし―匂ひ美しい顏をもつてゐる中君が。

(一二)世を捨て給へる―出家した父親人道の手元に引取られて。

わりにかたじけなけれど、(一)わりなかりし世を打ちかすめつゝ、(二)逃れやる。男君も、大納言(三)よしや、つらさは言ひやる方なし。今宵だに物一言聞えさすばかり」とわりなう思したる氣色いみじう心苦しけれど、我が心一つならねば、いかにも對の君にも語らひ合はせてこそとて上る。聞き給へば、端近う眺め給ふなるべし、秋の月にまどはれし筝の琴搔き鳴らされたる、所がらにや我もそゞろに浮き立ちぬばかり聞ゆなり。さばかり匂ひ美しかりし容貌に、物をいみじう思ひ亂れて、世を捨て給へる親の御蔭に隱れて、如何ばかり心細く悲しかるらむと押し量らるゝ面影の、只今向ひたる心あらでイ地ロこそ、その嘆きのまゝに、我をつらからぬやうあらじと思ひやらるゝに、さばかり哀れなる人にかう物思はする我が契さへ怨めしく悲しきに、搔き渡さるゝ琴の音に涙落ちつゝ、只今もやがてぞ歩み出でまほしき。少將が告げつるなるべし、なべてならぬ調一字イしらべながら彈き止まれぬる他かずいみじ。やゝ久しく待たれて少將下りへ出て行きたい。

(一三)押し量らるゝ―大納言が中君の樣を想像すると、その顏が今眼前に向ひあつてゐるかの如く浮んで來る。「心あらべ」は一本の「心地して」の方宜。

(一四)その嘆きのまゝに―前の「心細く悲しかるらむ」とあるを受けて。中君はそのやうに悲しく思ふにつけても、自分に對してつらくあたるに違ひないと大納言は思つて。

(一五)あはれなる人に―美しい中君に之程に物を思はせる自分の運命(大君の婿となつた事)までが怨めしい。

(一六)搔き渡さるゝ―琴を手元から向ふへシャランと鳴らす事。その琴の音を聞くにつけても大納言は涙がこぼれ出た。

(一七)只今もやがてぞ―今にも直ぐその琴のなる中君の部屋の方へ出て行きたい。

(一八)少將が告げつる―大納言が來たと中君へ告げた爲か。

(一九)なべてならぬしらめながら―大變よい曲だのに。

(二〇)彈き止まれぬる―琴が途中で止めてしまれぬる。

(二一)待たれて―少將が大納言に。

(二二)下りて―上の部屋から下がつて。

(一)いかばかりの岩木を作りてか情をかけざらんと、胸打ち潰れつゝ、暗うなりておはし着きて、女房の參ると思はせて、憚りなく遣り入れさせて、少將が局へ寄せさせ給へば、打休みたる程に車を差し寄すれば、術なしと思へど、かうはかけても思ひ寄らず、中將の君と言ふ人の久しう參らぬが、今日の雪に誘はれて參り給へるなむめりと思ひて、ゐざり出でて、少將「妹が戀ひ路ならねど、分け參り給へるこそ淺からず」と言ふを、をかしと思して、几帳差し出でたるに、暗き程なれば下り給へるに、呆れて物も覺えず、少將「否や、こは如何に」とて、居たれば、大納言「如何なる人の參るをか淺からず思ひ知り給へる。如何なる身なればか哀れをも知る人無くかひなきならん」と宣ひ、大納言「さても御心の懸離れ、殊の外なる怨めしさは、數ならぬ身の怠りと思ひ知らるゝ折々もあり。私にはさばかり見馴れ契りしに、さりともと思ふを、かくなむ渡らせ給ふとだにかすめぬつらさ」を怨み給ふ。ことと思つてゐたやうにこむ渡らせ給ふと—此のやうに廣澤へ參るといふ事を聞らせて、私にあまたり告げ知らせてくれぬとは、そのおりの怨みかなどけひじにけり。是れと。大納言のお心もたり尤もけでは思はつたが。

(一)いかばかりの岩木を作りてか何れ程岩木のやうに固く冷い心をつくれども持つて情をかけずには居られない自分であらう。

(二)胸うちつぶれ—胸がどきゝくする。

(三)おはし着きて—廣澤へ到着して。

(四)女房の參ると—女車に女房が乘つて訪れて來たやうな樣子をして。

(五)憚りなく遣り入れさせて—躊躇せず、直ちに門から邸内に車を乘り入れさせて。

(六)打休みたる程に—少將は最早やつ寢る所に訪問客の車がなつて來たものであるから。

(七)術なしと思へど—困つた事だとは思つたが。

(八)かうはかけても思ひ寄らず—大納言が訪つれて來たなどとは少しも考へざりまし女の家といふ譯合でもあるかなどとは少しも考へざりまし女の家といふ譯合でもあるかなどとは少しも考へざりまし女の家といふ譯合でもあるか

(一)つらけれど思ひやるかな！風葉集冬の部に、乾覺の關白として出づ。あなたは私につらくあたられるが、私はさすがに咋晩のやうに、雨の音が聞えたが何んなに佗しくあの時雨の音を聞かれたことであらうかと思ひ遣つた事ですが、まうつては何の樂しい思ひ出もなく、埋る雪が降つたので、さすがに中君は心細く思つて緣側にに中(三)思ひ出なき故郷の空さへ閉ぢたる心地して、さすがに心細ければ、端近くゐざり出て、白き御衣ども數多、なか〳〵色々ならんよりもをかしく懷かしげに着なし給ひて、眺め暮らし給ふ。一年かやうなりしに、大納言の上と端近くて雪山造らせて見し程など思し出づるに、常よりも落つる涙をらうたげに拭ひ隱してイナシ、

中書思ひ出はあらしの山に慰まで雪ふる郷はなほぞ戀しき

我をばかくも思し出でじかし、と押し量りごとにさへ止め難きを、對の君いと心苦しく見奉りて、對の君苦しく今まで眺めさせ給ふかな。御前に人々參り給へ」など、萬思ひ入れず顔にもてなし慰め奉る。

かの大納言殿も大殿にて姫君の這ひ歩き給ふを見給ひて、うつくしみ給ひつゝ、あはれ山里にいかに思ふ事繁う眺め給ふらむと思しやりて、なよらかなる御衣どもに薰物心異に薰きしめて、夕暮に山里へおはします。我かばかり雪を分けて尋ね入りたら

氣の毒に思つて。

(八)くるしく今まで—今までそんなに考へ込んで居られては毒ですよ。

(九)御前に人々—女房達に當中君の御傍に行つて慰めて上げなさい。

(一〇)萬思ひ入れず顔に—對の君は萬事何の心配もなさつた顏もなして、中君の心を慰める事に努めた。

(一一)大殿にて—關白邸に於て。

(一二)うつくしみ給ひ—寵愛する。

(一三)あはれ山里に—大納言の心。

(一四)なよらか—やはらかい着物。

(一五)山里へ—廣澤へ。

(一六)我かばかり—大納言の心、自分がこれ程に雪中をかき分けて、わざ〳〵訪れて來た深い志を見ては。

廣澤に居られる中君は。

たゞ」とばかり、筆に任せて愼みなく走り書きたるを、めざましく見給ひて、などか御身づから見給ふまじきと思す。さすがに姨捨山の月は夜更くるまゝに澄みまさるを、珍しくつくづく見出だし給ひて、眺め入り給ふ。

中君　ありしにもあらず憂き世に澄む月の影こそ見しに變らざりけれ

そのまゝに手觸れ給はざりける箏の琴引き寄せ給ひて、搔き鳴らし給ふに、所がらあはれまさり、松風もさゝと吹き合はせたるにそゝのかされて、物哀れに思さるゝまゝに、聞く人あらじと思せば、心安くて、心ゆく限り彈き給ひたるに、入道殿の佛の御前におはしけるがに聞き給ひて、あはれに言ふにも餘る御琴の音かなと美しきに聽き餘りて、行ひさして渡り給ひたれば、彈き止み給ひぬるを、入道「なほ遊ばせ。念佛し侍るに、極樂の迎へ近きかと心ときめきせられて、尋ね參うで來つるぞや」とて、少將に和琴賜はせ、琴搔き合はせ直しなどし給ひて遊び給ふ程に、はかなく夜も明けぬ。かやうに心慰めつゝ明かし暮らし給ふ。常よりも時雨れ明かしたるつとめて、大納言より、

(一)めざましく見給ひて―少將の手紙には、歌が亂暴に走り書きしてあるのを大納言が見て見苦しく思つて。

(二)などか御身づから―中君自身親しく此の手紙を見たであらうのに、此の事の致し方だと思つた。

(三)姨捨山の月―信州更科の姨捨山の月の名所。こゝはたゞ月を姨捨山の月と言つたまでの事で、固有名詞に意味はない。

(四)珍しくつくづく見出だし―山の名月も珍しくてぢつと家の方を眺めやつてゐた。

(五)ありしにもあらず憂き世に―自分は以前と全く違つた境遇につらい思ひをしながら住んで居るのであるが、月は昔と變らずに清い光をしてゐる。澄むに住むを言ひかけた。

(六)そのまゝに手觸れ給はざりけ―そのまゝ捨ておいて、今まで手を觸れた事もなかつた箏を手もと近く引き寄せて

(七)松風もさと吹き合はせ―松風の音に合奏するかのやうに鳴り渡るので、中君も乘氣になつて。

(八)あはれに言ふにも餘る―口で言ふも事も出來ぬ程に感情の深い音を、よくもものだと入道は感心して、その美しい音色をたゞ一人で聽いてゐるもの。到頭佛前のお勤中途でやめて中君の部屋へやつて來た。

(九)なほ遊ばせ念佛し侍るに―もつとお彈きなさい。私が佛壇の前で念佛してゐたら此のよい音が聞えて、私は極樂からの迎へに天人が來向して此ういふ妙なる音樂が聞えたのかと思つて、胸をどきつかせながらその琴の音の聞える場所を指して此のお部屋へやつて來たのですよ。

(一〇)琴搔き合はせ直し―琴の調子を取り直して、和琴箏などの合奏をして遊んで居られるうちに夜が明けた。

(一一)常よりも時雨れ明かし―いつもよりも終夜時雨の雨がひどく降つて夜が明けた、その朝早く大納言から手紙が來て。

(一)さても少將からくなむ！大納言の心。あの少將はびどい女だ。中君が廣澤へ移つた事位に知らせてくれてもよささうなものだ。

(二)ことわりながら餘りたけくも―中君の心が自分から離れるのも尤もな事だが、餘りに心強くも自分を見捨てゝしまつたものだと、中君の心が怨めしく思はれて耐へ難くなつたので。

(三)思ふらむ憂さにもまさる―中君が自分に何の音沙汰もなく廣澤へ行つてしまつたのを自分が怨めしく思つてゐる心は中君が自分を怨めしく思つてゐるよりも以上だ。

(四)紛るゝ方なからむ―何の樂しみもない廣澤で退屈に暮して居る中君の注意をひく爲に、わざと此の歌を風流な散し書に書いて。

(五)上はいと直よかなる―封筒に何の色氣もない立文にして。當時鬼書は多く包み文にして正式の書簡は立文とした。立文には竪に手紙を他の白紙で包んで、上方を折り曲げて折り込んだもの。

(六)宰相中將のもとより―大納言は使の者に中將の所から手紙を持つて參りましたと言はせて、手紙をさし上げさせたので。

(七)さにこそはあらめと―女房も中將からの手紙と思つて、中君にさし上げたので中君が中をあけて見ると、―中は大納言からの鬼書だつたので中君は胸潰れて―

(八)かゝれば、片時も放たずもて遊び見まほしくて、心も慰め給ひけり。さても少將からくなむ。渡りぬるとばかりは告げよかし。ことわりながら餘り猛くも我を放たるゝかなと、怨めしきにも、忍び難ければ、

大納言思ふらむ憂さにもまさる今とだに告げで入りにし人のつらさは

(四)紛るゝ方無からむ山里のつれ〴〵に、かの御目止まるばかりと亂れ書きて、上はいと直よかなる立文にて、宰相中將のもとよりと名告らせて奉らせ給へれば、さにこそはあらめと思ひて、御前に參らせたれば、引き開け給へるに、かゝれば胸潰れて、中君「中將のとは見えずこそ」とて打置き給へるを、對の君と少將と二人見て、二人必ずと賴め契り給ひしを」と言ひ出でつゝ、あはれは絶えず、姫君などの御事を思ひ出づるに、ひたぶるにはなほえ見過ぐし難くて、少將御返聞え、少將文「先づ、御覽ぜさせ待りぬれば、

(一)ありとだに聞きてしなぞと思ふ世を憂さに懲りとや人に告ぐべき

(九)必ずと輔め契り給ひしをと―中君が自分に引取るからお前達と大納言がかねゝ〴〵自分達にれ言つて居られたのに、對の方や少將さえ思ひ出しと、合ふにふつつかに思ひ話し合の情ほど少しも薄らがずに

は驚いて中將の手紙の樣ではないと言つて傍に置いたなくて。大納言の手紙に對して全く知らぬ自分が引取るかなぬ顏をして居るわけにも行かないので、少將がそれに返事の歌を書いた。一本によれば「御覽ぜさせ」以下が少し違つてゐる。

(一〇)ひたぶるにはなほえ見過し難くて―大納言の手紙に對して全く知らぬ顏をして居るわけにも行かないので、少將がそれに返事の歌を書いた。一本によれば「御覽ぜさせ」以下が少し違つてゐる。

(一一)ありとだに聞きてしなぞと思ふ世を憂さに懲りとや人に告ぐべき

自分が此の廣澤に移り住んだといふ事を、何の必要があつてあなたがお聞きになつたのですか。答めたつもりあなたは世の中で憂いわざと懲りまして廣澤へ引込みますのに、世の中に、わざ〴〵あなたに知らせる必要はありません。中君の歌。

しかりし心を慰めて、心安く皆侍ひつきたり。

(一)大納言はいと明かに―大納言は公然と中君と同棲するもさすがはしく暫らく思つて、九條の尼君の家にしばし中君を隱しておかうと思つて、その準備をしてゐたのに。

(二)九條の尼君―始めて大納言が中君と逢つた時に、大納言の乳母宿つた家の主。大納言の乳母

(三)かく渡り給ひにけるを―此のやうに中君が廣澤へ移つてしまつたと聞いて、大納言は裏切られたやうに殘念に思つた事は一通りではない。

(四)きびしき憂世のあたりをも―大納言はしきびしく思つて大君の所に慰を脈はしはよりもせず、自分の本宅にに閉ぢ籠つて廣澤へ行くので、中君は少しも澤事を、自分に告げ知らすが出來なかつたのであらうと大納言は思ふつけても。

(五)かの女君はしたなめられしかの女君は大君達がいぢめられの中君が毒氣なので、時時中君の部屋の格子先へ寄つて色々と慰めてやつたので、自分も自然夜も寢られぬ悲しさを忘れる事も出來たのだが。

(六)いと餘りにかく言ひなしつる―併しあまりに大君が中君の惡口を言つて、中君にすべての罪を押し付ける態度が、大納言には脈はしく思はれて。

(七)跡留むべくもあらず―もはや

しかりし心を慰めて、心安く皆侍ひつきたり。

(一)大納言はいと明らかにもて出でんはさすがなれば、(二)九條の尼君の家に暫しと思ひ構へ給ひつるに、(三)かく渡り給ひにけるを聞きて、本意なく口惜しとは世の常なり。(四)きびしき憂き世のあたりをも飽き果てて、籠り居給ひたれば、つゆばかりの言の通ひ絶え果てぬるなめりと思すに、心細く胸痛くて、(五)かの女君はしたなめられしいとほしさによりてこそ慰め聞えしに、自ら(六)寢覺も紛るゝ折ありしか。いと餘りに斯く言ひなしつる飽きたさを思ふにも、(七)跡留むべくもあらず淺ましくなりて、いとど大殿がちになりまさり給ひつゝ、姫君のやう〳〵(八)居る程になりて物してよりィく、造り(九)たらんやうにつぶ〳〵と肥えて、(十)色は隅なく白く美しげに匂ひて、(十一)頭いと青やかに、(十二)日々におよずけ―日々に成長して行く。

(八)居る程になりて―座る程に成長して。

(九)造りたらんやうに―人形のやうに丸く肥えて。

(十)色はくまなく白く―色は殘る所もなく白く美しい顏色をし

大君の所には全く姿を見せたくはないと思ふ程に淺ましく思つて、一層本宅關白邸に閉ぢ籠つてゐる日が多くなつた

てゐて。

(十一)頭いと青やかに―髮の毛は黑くつやゝかで。

(十二)日々におよずけ―日々に成長して行く。

(十三)常に抱き給ふに―大納言がいつも姫君を抱くので、此の頃は顏を見知つて大納言に寄つての姿を見ると笑つて傍に寄つて來るし、大納言が立ち上つて外へ

行かうとすると泣いたりなどするのが。

(十四)いとかなしくあはれ―大納言には一層姫君がいとしく可愛く思はれて、一寸時も姫君を傍から放されずに、此の姫君所にに遊び戯つて大れたくて、此の納言の心も慰む事が出來た。

(一)我が身の事なれば―自分に直接利害關係のある事となると夫が浮氣したやうな場合にも知らぬ顏をして人目見苦しくなくたゞ自分一人心中で心配なくて裏面は平氣な風を裝ふなどと言ふやうな事の出來ないのは世間の女の普通のやり方で、やむを得ない事だ。

(二)大納言のたゞならず亂るゝ氣色を―大納言が一方ならず中君に思ひかけてゐる樣子を覺つて居て、大君も頗る非常に煩悶をしたる事であらう。それは尤もな事であるが。

(三)その中にも少しは―それにしても、もう少しは靜かにして、憎まれ口をきかなければよいのに。

(四)左衛門督の押しおもむけ―左衛門督が罪を一途に中君に負はせて、ひたすらその惡口を言つてゐた樣子を思ひ出すと、入道は情なくて耐らなかつた。

(五)若き女房達などは―入道の心中君お付の女房達は此んな人里離れた住居に心細くて、暇なく貴つて、やだと言つて、公しようと言ふやうな水くさい心になるかも知れぬと入道は思つたので。

(六)局など心留めて―女房達の住む部屋などは特に注意して、面白く思ふやうに飾りつけをさせた。

(七)はかなき木草の本をも―庭の草木や泉水の流れなどをも、風流に造つて女房達の心を紛れさせ慰めさせるやうにと入道は心がけて。

(八)御行ひをも打休めつゝ―入道は佛樣へ御勤めをもやめてみづから手を下して、風流に庭の手入をなさり思ふまゝに女房達と遊んで。

(九)侍ひよかり―女房達が此の山里に居つくやうに。

(一〇)君のいとしたく屆じ給へる―中君のいとしみにくれてゐるのも、皆世の悲の無情な事から起るのだと入道は思つて、その中君の心をも慰める爲につまらぬ事にも人々の興味をひく爲にと、面白くはやすやうに勧めて居られもするのだ。

(一一)見るにいみじく―その父の樣子を見ると、中君も父上がひとく氣の毒に思はれて。

(一二)夜も霧かりし古里よりは―中君自身も亦本宅にゐてつらい思ひをしてゐた頃よりは、此の廣澤に移つてからは普通の人の通りに靡悲さうにして居られるので。

(一三)女房達もむつかしかりし心―お付の女房達も本宅で周圍がうるさかつたので不愉快だつた心も慰むやうに思はれて皆此の廣澤に住みついてしまつた。

我が身の事なれば、おほのかにもかゝる方を安らかに慰へ思ひみさをづくりあへぬ、世の常の事なり。大納言のたゞならず亂るゝ氣色を心得て、實に苦しかりけむ、ことわりながら、その中にも少しは靜め言はむや。左衛門督の押しおもむけ、ひたぶるに言ひし氣色を、つらしと思し出づる事限りなし。若き女房達などは、かく世離れたる御住處を心細く、侍らずなど、淺はかに徒心作らむと思せば、局など心留めて、をかしきやうに見なしなさせ給ふ。はかなき木草の本をも、水の流れもて遊ばせつゝ、つれ〴〵をも心をも慰めさす許りにと、御行ひをも打休めつゝ、おりたち見所ありてしなさせ給ひ、心に任せて遊び戯れして、侍ひよかりぬべく、君のいとしたく屆じ給へる御心をも、世の憂きよりはと、思し慰めさせんと、はかなき事につけてもてなし思したるを、見るにいみじく哀れなれば、我も憂かりし古里よりは、少し世の常に晴れ〴〵しくもてなし給ひたれば、女房達もむつか

の君の事を泣く〳〵誰にも言ひ置きしかど、我がある前に言ひ聞かせじ。聞き所ありと、いみじき過失ありとも、思ひ憚かる人やありける。憎く心付きなく覺ゆとも、世の聞き耳を忍びやかにもてなして、言ひ教へてはあらで、ひたぶるにのゝしりはしたなめ奉る怨めしさに、此の罪は皆消えて、たとひまことに犯したらむにてだに、いかゞは今はせん。そもさるべき前の世の宿世にこそはありけめと、彼所に言ひはしたなめられて、苦し侘びしと思しけむだに、思ひ遣るにいみじく哀れなり。我さへ待ち受けて物しげならば、何所にか身をも隠さむと思すに、皆醒めて、いとかくても見え奉らじと思せど、思し續くるにえ耐へ給はず、泣き給ひぬるを、姫君はいかなる事を思すらんと思すに恥かしくわりなくて、涙落ち添ひ給ひぬる氣色いと〳〵らうたげなり。あはれ、如何にすべき人の御身なるらん。幼くより、さりとも思はざる外に人には勝れなんとこそ頼み思ひしかと思すに、いと口惜しく、大納言殿の上は

(一)我がある前―入道殿の前では中君の事を云ふまい、入道と云ふ聞き手があるからと、たとへに中君とが過失があつたらうか。

(二)憎く心付きなく覺ゆとも―たとへ中君を憎く不愉快に思つても、萬世間の噂に立つ事を憚かつて、中君を秘密にして、そかに誠ればよいのにさうもしないで。

(三)ひたぶるに詈りはしたなめ―頭から中君の惡口を言つて中君をめじる。

(四)此の罪は皆消えて―かへつて左衛門督が怨めしく思はれるとは腹の立つ人間許りいじめる。

(五)たとひまことに犯したらむにて―たとへ中君が本當に中君の罪を憎む心は全くなつて。

(六)前の世の宿世にこそはありけめと―此の「と」は、下の「いかゞは」にかかる。

(七)彼所に―本宅で大君の爲にいじめられて、さぞ苦しく思つたらうと、此の「思す」にしたなめられて、言ひ教へてはあらで、ひたぶるにのゝしりはしたなめ奉る怨めしさに、此の罪は皆消えて、たとひまことに犯したらむにてだに、いかゞは今はせん。そもさるべき前の世の宿世にこそはありけめと、此の「と」は、下の「いかゞは」にかかる。

(八)我が中君は何所に身をも隠さむと思すに―我の中君は何所にか身をも隠さむと思すに、皆醒めて、いとかくても見え奉らじと思せど、思し續くるにえ耐へ給はず、泣き給ひぬるを、姫君はいかなる事を思すらんと思すに恥かしくわりなくて、涙落ち添ひ給ひぬる氣色いと〳〵らうたげなり。あはれ、如何にすべき人の御身なるらん。幼くより、さりとも思はざる外に人には勝れなんとこそ頼み思ひしかと思すに、いと口惜しく、大納言殿の上は

(九)皆醒めて―今までの中君に對する入道の憤懣の情は全く消え失せて。

(一〇)いとかくても見え奉らじと―入道は中君に泣顔などは見せまいと思つたが、いろ〳〵と考へると耐へ切れなくなつて入道は涙を落した。

(一一)姫君はいかなる事を―何のやうに思つてかやうに泣かれるのであらうかと、中君はその心を押し量るにつけても、さぞ自分の犯した事を口惜しく思つて居られる事であらうと推量すると、恥かしく情なくなつて。

(一二)涙落ち添ひ給ひぬる―今までより一層中君は涙にくれてゐるその樣子が、まことにいじらしい。

(一三)あはれいかにすべき―入道の心。さても中君の身の上は何うなる處置をしたらよからうか。

(一四)幼くより―此の中君が子供の時ざる外に意の上は思ひ外のふかい世をすのであらうと希望のあらたの事がまことに殘念とに思はれて入道殿の心。大君のいのちもよしの身の上は大又入納言の變結構である。

世の栄えめでたけれど、假の事なり。口惜しかりける御宿世なればこそ母君にも見
イヘ 添ひ聞え給はず、己もかく世を限る閉目に會ひ給ふらめ。身をいかで人並にと思ひ
急げど、前の世の宿世と言ふ物あるべかんめれば、思ふにかなはぬわざなり」と許
り聞え給ひて、涙押し拭ひ給ふ氣色いみじく哀なり。御菓物御臺など手づから取寄
せつゝ、あながちにそゝのかし給ひつゝ、思ひ續くるに、此の人の科は。女子に思
ふ人添はず、そこはかとなく在る時は、ねんごろに言ひおかす人の在るに心弱く欺
かるゝ、皆例の事なり。我にても知りにき。更に賢き人、心強き人、あながちに思
ひ入る心ざしにはなかりし物なり。たゞ主強く定まりて、それがもて崇むるに、
女は強き心も、重りかなる氣色をも用ゐるものなり。此の人の氣配有樣をほのかに
も見聞きたらん人の、いみじき佛聖と言ふとも、心をかけであるべきやうなし。た
だ我ともかくももてなしたてゞ、兄弟を賴もしきものに思ひて、讓り置きける怠り
のみこそ罪去り所なく後めたけれ。人の惡しとも言ふべきにあらず。さばかりこそ此

(一)口惜しかりける御宿世なれば―お前は前世の因緣が不運にて母君にも生れついてゐるので、幼くして別れつゝ又自分も此のやうに晩年になつてないつも死ぬるかも知れぬ年頃になつても、お前に私を御つて居るのであらう。
(二)身をいかで人並にと―何うかしてお前を人並の女にしてやらうと思つて、あせつて居るのであるが。
(三)前の世の宿世と言ふ物―人は皆前世の因緣に引かれて運がよくも惡くもなるものだからお前の事も自分の思ふ通りにはならぬのだ。
(四)御臺―中君の御膳。
(五)手づから―入道みづからが運ぶ。
(六)あながちにそゝのかし―無理に食へと、中君に入道が勸めながら入道が思ふやうは。
(七)この人の科かは―以下入道の心。
(八)女子に思ふ人添はず―女が夫たもたず、身が固まらずにぶら〳〵してゐる時に。
(九)ねんごろに言ひおかす―男が親切にその女をかき口說くと、女は氣强くはねつける事も出來ずして、到頭男にだまされてしまふのは世間によくあるためしである。「おかす」に「犯す」の意ならん。
(一〇)我にても知りにき―女男の方は自分の若い時の事を考へてもよく分るが、女は一途に思ひ込むと何んな賢い人、志の堅い人でも、持だかになつてしまふものだ。だから大納言のやうに理非曲直を忘れて、中君をかき口說くやうになるのも尤もだ。
(一一)たゞ主强く定まりて―たゞ女には一つ强く定まりたる夫があつてその夫が妻を大切にすると、妻も自然心を强く持ち、態度も重々しくなつて男の誘惑などに負けなくなるのである。
(一二)この人の氣配―この中君の樣子有樣。
(一三)たゞ我ともかくももてなしたてゞ―此のやうな事になつてのも、たゞ自分がみづから中君を育て上げないで賴みにもならぬ兄弟を賴もしく思つて中君の世話を任せておいた自分の罪であつて、まことに中君に對してもすまなく思ふ、別に人を怨む事もない。

し着きたれば、入道殿心憂しと思ひ聞え給へど、いと久しく見奉らせ給はぬも、心弱く覺束なくて、渡り給へれば、菊の御衣どもの色々なる上に、いと薄き蘇芳のめでたく清らなるを着雜せ給へるに、かゝれる御髮は塵のまよひなく、つや〳〵と隙なくかゝりて、いといたく面痩せ給ひつる容貌の、言ひ知らず香り、をかしげなる匂ひこぼれぬばかりらうたげにて、世を屈じ濕めり給ひつる懷かしさ、よそ〳〵なる時はさやは思ひ聞えし。思はずなりける御有樣かなと心付きなかりつれど、打見奉り給ふに萬の罪消えて、哀れにも悲しくも覺え給へど、少しは聞え知らせむと思しつる事も、むつかしく思し亂れむが心苦しさに、思し止めて入道「さばかり久しかりつる御心地に、更に衰へ給はぬかな。御髮も落ちぬらんと思ひつるを、裾も細らざめり。萬の事、さはれ、な思し入れそ。幾世なき世に廻らひ侍らん限りは、たゞかくて見奉るべきなり。立ち後れ給ひなば、たゞ此の庵にて世を盡くさむと思し放れよ。此の

(一)入道殿心憂しと思ひ聞え給へど―入道は中君を情ない女だと心中怒つては居るものゝ、また長い間顏を見ないので心強くも思はれるので、中君の部屋の方へ會ひに行つた。

(二)菊の御衣ども―中君の樣。菊は襲の色目の名、表白、裏青。その菊襲の濃き薄き色々の着物を重ね着た。之は五衣であらう。

(三)薄き蘇芳―之は袿であらう。

(四)かゝれる御髮は塵のまよひなく―着物の上に垂れ下がつてゐる垂髮は少しもおくれ毛がなく、黑くつやがあつて隙間も見えぬ程に髮が濃く多い。

(五)言ひ知らずかをり―よい香ひがしてその顏色のあつて、世の溢れる程に上品で美しさは中のうるさい事を厭つて涙にしをれてゐる中君の樣子の、懷かしい風情を父が見た時には。

(六)よそ〳〵なる時は―入道の心今まで難れてゐた時には、中君が是程にやつれずに、思はれずはいつもけなれたもの思はれたもの情ない事をして、大變だと思つて、中君を不愉快に感じてゐたが。

(七)打見奉り給ふに―今中君の哀な樣子を見ると、今までの怒りも消えて。

(八)少しは聞え知らせむと―少しはその身の不始末を責めてやらうと入道は思つてゐたが、中そんな事を言へば中君は世のだらうからそれも氣の毒なので入道は中君を叱る事をやめて。

(九)さばかり久しかりつる御心地に―あれ程長い間病氣だつたのに少しも痩せ衰へはしないやうだれ。髮も脫けたでありらうと思つてゐたが、垂髮の端でも少しも髮が脫けて薄くなつた樣子はない。

(一〇)萬の事さはれ―世間には色々なうるさい事があるが、そんな事は構はぬから氣に止めるな。

(一一)幾世なき世に廻らひ―またと生れ替つて來る事も出來ない此の人間界に自分が生きてゐる間だけは、私は充分お前の世話をしてやる積りだ。

(一二)立ち後れ給ひなば―若し自分が先に死んでお前が生き殘つたなら、たゞ此の御堂にお籠りして世間一生を暮らさうと決心して世間の事は考へるな。

(一三)此の世の―俗世間の榮華もよいがそれは一時の事。

中君文「日頃亂り心地も例ならず侍るに、(一)父より渡れと侍れば、今日なむ」と大納言殿の上に聞え給へれど、(二)御返も聞え給はず。まいて渡り對面しなどは思ひ寄らずなりぬるを、(三)ことわりながら、人の御心の憂きもつらきもげに、我からと忍び難くて、起き上がりて、(四)車など寄する程端に出でて、見渡し給へれば、(五)今日を限る心地して、何の草木も眼留るに、(六)年頃あの御方と諸共に明暮眺めつゝ、(七)故上の御面影の我は覺えぬを言ひ出でなどし給ひつゝ、月をも花をも諸共にもて遊び、琴の音をも同じ心に搔き合はせつゝ過ぎにし昔の戀しきに、(九)殘りなく飽き果てられぬる世なれば、いよ〳〵山より山にこそ入りまさらめ。(一〇)またしも返り見じかしと思すに、池に立ち居る鳥どもの、同じ樣に一雙なるも、羨ましき、(一一)に涙のみこぼれつゝ、

中君 (一二)立ちも居も翼を並べし群鳥のかゝる別を思ひかけきや

(一三)我が身の有樣のすべて現しざまなる事はなく、夢のやうに覺えながら、御車に奉る。九月許りなれば、嵯峨野の花も枯れ〴〵に、空の浮雲心細く、物のみ悲しくて、(一四)おはしに着き—廣澤の御堂へ。

(一)父より渡れと—父上が廣澤に來よと仰せになつたので、今日廣澤の方へ引移りますと大君に手紙で申し上げたが。

(二)御返も聞え給はず—大君は返事もしないので、まして大君が中君の部屋へ來てお會ひになるなどといふ事は思ひもよらぬ事となつたが。

(三)ことわりながら人の御心の憂きも—それも尤もであるが、姉君の御心の情なくつらいのも、皆自分が惡いからだと思ふと、悲しさに耐へ切れなくなつて。

(四)車など寄する程—出立の準備がとゝのふ間、中君は緣側に出て庭先を見渡すと。

(五)今日を限る心地して—今日が此の庭の見をきめのやうな氣がしてつまらぬ草木まで別が惜しまれるので。

(六)年頃あの御方と諸共に—中君所に朝夕此の庭を眺めて。以前はいつも姉上と一

(七)故上の御面影の—姉上はいつも死んだお母樣のお顏を自分が覺えてはゐないのを、色々話して下すつて。

(八)琴の音をも同じ心に—琴をも姉上と一所に合奏したりして過した過去の事が。

(九)殘りなく飽き果てられぬる—今は全く姉上に嫌はれてしまつたのだから、いよ〳〵自分は山奥深く隱遁してしまはう

(一〇)またしも返り見じかし—決して再びこゝに歸つて來て、此の庭を見るやうな事はあるまい。

(一一)池に立ち居る鳥どもの—庭の池のほとりにとまつてゐる水鳥が、昔と變らずに一雙居るのを見ると、自分が姉君から嫌はれた事が情なくて、その鳥を羨ましく思つて涙がこぼれ出た。

(一二)立ちも居も翼を並べし—平生いつも一所に暮してゐた姉君と、此のやうに情なくも別れねばならぬとは思ひもかけぬ事であつた。

(一三)我が身の有樣の—自分の樣子はまるで現實社會に生きて居るやうでは無く、夢の中に生活してゐるやうに中君は思ひつつ、呆然として車に乘り

(一四)おはし着き—廣澤の御堂へ。

は、少將(一)氣配の、前々見るにもあらず、いといみじくのみ思ひ入りて、答ふる事なく、姫君をも見で急ぎ歸りぬるを、如何に思ひなりぬるぞと、胸塞がりて思すに、乳母(二)の、上の御前より、姫君磨き立てゝ、抱き奉りてゐざり出でたる火影も、いたく泣きたる顏したり。寄り給ひて、大納言「少將(三)は何事か言ひつる。など見奉らでは急ぎ歸りぬるぞ」と問ひ給へば、乳母(四)「あの御前に、此の御程なる子供をばわざと召して御覽じ入れつゝ、人間には心苦しく打忍び思し召したるなど語り侍りつる」と申すを聞き給ふに、ほろ〳〵(五)とこぼれて、さだに(六)思はばえもて離れじ。これを心安く見むと思ひやらじやと頼もしく思しなりて大納言文(七)かの事、今日明日の程にも。世の憂き目見えぬ山路(八)なむ尋ね出でたる」と言ひ遣り給へど、日に添へて(十)憂さのみまさる世なれば、何の哀れも定めで、御返もせず。(十一)怪しく覺束なしと思す。

(十二)いと忍びやかに廣澤に渡り給ふに、音なからんもいかゞと思せば、知らず顏にて、

(一)少將氣配の前々見るにもあらず―今日の少將の前とは違つて大變心配子は、以前の様子は、自分の言ふ事には何の返事もせずに、姫君の顏も見ないで急いでしまつたが、何のやうな事を思ひこんで居るのだらうかと。

(二)乳母の上の御前より―乳母が祀母の所から姫君を美しく飾り立て、抱いて出て來たのを大納言が燈火の光りで見ると姫君は今まで大變泣いてゐたやうな顏付をしてゐた。

(三)少將は何事か言ひつる―大納言が乳母に言ふ詞。少將は前に何を話してゐたのか、何いで歸つてしまつたのか。急

(四)あの御前に此の御程なる―中君の御傍には丁度此の姫君と同じ年頃の子供をわざ〳〵呼び寄せて、せめて慰めになつて御覽になつて他に人の居ないに時には、お氣の毒にもたゞ一人でひそかに姫君の事を思ひこんでゐる様子を、少將が私に話しました。

(五)ほろ〳〵とこぼれて―大納言はほろ〳〵と涙を落して。

(六)さだに思はゞ―それ程に思つてゐるのなら、中君は到底自分から離れる事は出來まい。此の人目憚はよもや願ひもものだとは、中君はよも見たいはずには居られないであらうから。

(七)かの事今日明日の程にも―あの中君の身體を奪つてしまはうと言ふ自分の計劃を、二三日の中に決行しよう。

(八)世の憂き目見えぬ山路―古今集卷十八「世のうき目見えぬ山路へ入らむには思ふ人こそほだしなりけれ」より出でた語。世間の惡評より聞かないでもすむよい隱家を求める事が出來たから。

(九)と言ひやり―大納言が手紙で少將の所へ。

(十)日に添へて憂さのみまさる―中君の方では日毎につらい事許りまさつて來る世の事であるから、大納言の手紙などは何の感じも起さないで、返事さへ大納言にやらないかつた。

(十一)怪しく覺束なし―大納言の心返事もくれぬとは不思議な事で氣がかりだ。

(十二)いと忍びやかに―中君が。音なからんもいかゞと―姉君とに何の挨拶もしないのも變だと思つたので、大納言を中心としての二人の間のいざこざは知らぬ顏をして。

言はで思へる氣色の、懷かしく心耻かしげなる程、(一)これさへ眼安きかな。辨、中將などが物言ひ氣色の、物早く飽きたか(二)イナシめるをと思ひ較べ給ふに、(三)思ふらむ所の、我耻かしく思されて、返す〴〵(四)同じ筋の事を、必ずあるべきやうに契り給ふも、哀れなり。大納言―姫君は上の(五)御懷に御殿籠りにければ、今宵は見奉るまじかめり。明日許りはかくて」と宣へど少將「(六)今心のどかに」とて、乳母に忍びて(七)少將世の有様、かばかりなる人に姫君の御有様をばえ思ひ寄らざめり。(八)かやうにて參り見奉る人聞えも、自ら漏りや出でんと思ふが、いみじく慎ましければ、行く末はさはれや、かかる匂ひに靜ひ所無きしるしをば顯さじと思へば、(九)え參り見奉るまじき事。(十)さすがに御前にはさりげなくて、思ひ出で聞え給ふかと見ゆる時々もある御氣色のいみじく心苦しきを、(十一)忍びて御有様など書きおこせ給へ」と言へば、乳母「御乳母參り添ひ給ひにたれば、自ら暇侍り。(十二)忍びて參りなん」と泣く〴〵語らひて歸りぬ。大納言

(一)これさへ眼安きかな―大納言の心。此のやうに中君方の人はお付の女房までがすぐれた人許りだ。

(二)辨中將などが物言ひ氣色の―大君方の人と言へば、辨の乳母や中將の君などの口のひどい氣に喰はぬ人間許りだと、大君方の人と中君方の人々と大納言が較べるにつけても。

(三)思ふらむ所の我耻かしく―此の少將はまた心中で、自分の言ふ事を何の様に考へてあるのだらうかと思ふと、何だかの大納言は我ながら氣耻かしく思はれて。

(四)返す〴〵同じ筋の事を―くれ〴〵も同じやうに中君を奪ひ取る事を必ず決行するから、よい様に會を見計らつてくれと少將に約束をなさるのも、おなじ氣の毒な大納言の有様である。

(五)姫君は上の御懷に―赤兒は今夜母はお前に寢てゐるから、今晩には行かぬ。明日だけもう一日留しなさい。そしたら赤兒に會はせて上げよう。

(六)今心のどかに―それではまたゆつくり出直す事に致しませう。

(七)乳母に―姫君の乳母。石山の乳母の娘。その乳母に少將が聲をひそめて語るやうは。

(八)世の有様かばかりなる人に―世間の有様が、中君が此の姫君の母親だなどとはよもや思ひも寄るまいが。

(九)かやうにて參り見奉る―自分が度々こゝへ來たならば、姫君に會ひに來る女が居ると言ふ噂も自然と世間に漏れるかも知れぬと思ふと大變氣づまりですから。

(一〇)行末はさはれや―將來は兎に角目下の所では、此の姫君の美しさが中君の生んだ子と言はれても、その言を駁する事も出來ぬ程の證據となるものなら、世間の人からは覺られまいと私は考へて居りますから。

(一一)え參り見奉るまじき事―當分はこゝへ來て、姫君のお顔を見る事も出來まいと思ふと大變悲しいのです。

(一二)さすがに御前にはさりげなくて―さすがに中君は表面平氣な顔を裝つてゐるが、心中ではお姫君のお事を思ひ出されてやらしい様子の時々見えるのが、私共にとつてはまことに氣の毒に思はれるので。

(一三)忍びて御有様など―時々はひそかに姫君の御様子なども、手紙に書いてお知らせ下さいまし。

(一四)參り添ひ給ひ―姫君には私より他に添ひ給ひ乳母が附き添うて居られるので私共に自然と取なされる時が多いのですから時々姫君の様子をお知らせに參つては姫君なぞ致しませう。

(一五)歸りぬ―少將が宴がはてゝ歸りぬ。

(一六)大納言―此の話は下の「胸に」の注。

人知りぬとならば、我も人も心安かるべくとなむ思ひなりにたるを、我が御心とは善かりなむと思し寄らじ。さるべき隙を計らひて、消息せよ。外に率て奉りてん」と、切に語らひ給ふ。げにかゝる憂き事をのみ聞き給ひて、いかになり果て給ふべき御有様かと見奉るも悲しく口惜しけれど、さりとて此の宣ふまゝにては。さは云へどやむ事なくえ去り難き元結にて上おはす。内々こそこれより先の契と淺からず見ゆれば、さるべきにこそかくも亂れ立ちぬれ。あながちに忍び難かし奉りても、人知れぬ御心ざし許りは深くとも、打忍びもて隠されて、淡つけにィき、世の訕をのみ重ね給ひては、行く先はいかゞあらん唯今は中々にいみじく安氣無かるべき御有様にこそあらめと思へば、さはとも誓ひ聞えず。世をいといみじく憂しと思ひ入れる氣色にて、常よりも言少なにて、たゞ打泣きつゝ、きは〳〵しくも言ひ返し、あるまじき事なりとも、けざやかに憂き事淺ましき事とも世を愁へ聞えず、言に出でてはばりとそれはいけない事ですとか呆れたれた行ひですなどと、非難したりするやうな事は此の少將はしない。言に出でては何事でも言はずに一口に出心中でくよ〳〵とおもつてゐる少將の様子が、大納言にはものやさしくも氣耻かしく感じられたので。

(一)我が御心とは善かりなむと！中君は自分の心から逆んで、私は到底の計劃に分養成はしてくれる。

(二)さるべき隙を計らひて、消息せよ。外に率て奉りてん」機會があるべいあきの隙を計らひ私ら中たを計らつ君が所に知らを奪つて他所に忍び隠込て、中君をしんでしまふから。

(三)げにかゝる憂き事をのみ聞き給ひて、いかになり果て給ふべき御有様かと見奉るも悲しく口惜しけれど、さりとて此の宣ふまゝにては。さは下げにて言少なにて、たゞ打泣きつゝ、きは〳〵しくも言ひ返し、あるまじき事なりとも、けざやかに憂き事淺ましき事とも世を愁へ聞えず、言に出でては。心の憂き事の心を。此の中君の身の上に惡評が立つ。此の中君の身の上に惡評が立つ。此の中君の身の上に惡評が立つ

(一)見聞く事なれば―乳母が何時もあなたが中君の所へ忍んで行くのを見てゐるふりをしてゐるのでせうか。

(二)聞き憎かりしき事なるものなら、今後あなたは思ひ中君のなるべき苦しき事とおもひなさつぱりと諦めてよいのでせうか。

(三)心付きなければ―大納言は不愉快に思つて、ほつと吐息をつい。

(四)みじく心留めて起きて來た。

(五)和納言は慰むる―いくら熱心に大納言が取つて、大君は大君の氣嫌を取つて、葉を聞き入れ少しも大納言の言葉を聞き入れなく、意地惡く心直でなる事も折れて來る樣子許りが目に/\まざまざつい忍び過して―

(六)大方あながちに忍び過してお無理にに中君は、此のやうに無理なしい心を厭へつけて知らぬ顏をしてゐるへも、命が耐ふらなくなつてゐる程早くに死んで思はれかなのでぬ。

(七)迎へ給ふ定めの女房少將なる大納言が色々お怨みの言を言つて無理に自分の邸へ連れて來ようとした。

(八)さすがに渡り給ふべき程も近づいて本邸へ移る日も近づいてゐるので。

(九)何かは此の度許りこそは―以下一下少將納言は此の心、何大お伺ひ此度君が最後だ姫君の顏だを見て來ようとんで。

(一〇)淺ましく跡を絶ちたる樣の怨めしきを泣く/\宣ひて、大納言且つは憂き世の有樣を、げにかく思し飽き果つるもことわり。されどそれは樣にこそよれ。かゝる事の出で來ずばこそ人の聞き思はむも思し憚からめ。今はわりなく搔き絶えてもて放れ給へど、はざりけれ。あな心憂と宣へば、大君「見聞く事なれば言ふにこそあらめ。聞き憎かるべき事ならば、思し寄るまじくこそあらましか」と答へ給へるに、心付きなければ、打ちうめきて起き出で給ひぬ。いみじく心留めて和め慰むるを、げにと撓む所なく、曲々しくなだらかならぬ氣色のみ勝り給へば、大方あながちに忍び過ぐして見過ぐすも、命耐ゆまじくのみなりゆくを、同じ名を、心安く明け暮らさむに、何の人眼か苦しくも愼ましくも覺ゆべきと思しなりて、少將を萬に怨み給ひて、迎へ給ふ。さすがに渡り給ふべき程も近くなりにたれば、何かは。此の度許りこそは限りなれ。姫君をも見奉らんとて、いといみじくわりなく忍びて、參りたり。淺ましく跡を絶ちたる樣の怨めしきを泣く/\宣ひて、大納言且つは憂き世の有樣を、げにかく思し飽き果つるもことわり。されどそれは樣にこそよれ。かゝる事の出で來ずばこそ人の聞き思はむも思し憚からめ。今はわりなく搔き絶えてもて放れ給へど、

さすがにそれを斷るわけにも行かないので。

(一一)且つは憂き世の有樣を―それも世のこの中君のだから、その惡ふ言ふ中君の御心が私から放れてしまつたのは尤もでです。

(一二)さればそれは樣にこそよれ―併しそれも私ともの事情には子供まで出

際を絶つてしまつた事が、まことに怨めしく思はれると泣く/\怨みを言つて。

(一三)今は中君は私なくて絶つて遠ざかりは世間の惡評などを遠慮する必要はないのです。

(一四)世間の惡評などを遠慮するのですから、そのやうに世間の惡評などを遠慮する必要はなくなつて中君は私なくて絶つて遠ざかりは

(一)思したる御心焦られのまゝに、さも思し立ちぬべかめれど、(二)思ふ人聞もいとうたて、(三)さはあれど懸け離れなむあはれも淺からず、(四)かの人の心おかれ給ふ樣も、さまざま安氣なく思し亂れて、(五)今宵大殿に渡り給ひなむとしつれど、(六)情なきやうに、聞き憎く宣ふも、言ひ〳〵の果は、我が爲めはさはれ、かの人の聞き思すらむ事のいみじく哀れに思し遣らるれば、(七)げになき事ともや思しなほると、立ち止まりて、(八)やがて帳の內に入り給ひて、互みに泣き笑ひ、(九)あらぬ樣を誓ひ契りつゝ、(一〇)常は明かしかね給ふ秋の寢覺の、今宵は世の常に紛れて、明けぬれどとみに起き給はず、日闌くるまで御殿籠り過したれば、人眼もいと安し。辨の乳母心ゆきて(一一)「あの御方の御格子今宵もや放ち設けられつらむ」(一二)と高やかに言ふが聞ゆれば、大納言「(一三)これ制し給へ。(一四)まろが爲めは思ひあるべくもあらず、男子の身は、これよりあるまじき事をも思ひ寄る、世の常の事なり。女の御爲めいといとほし。(一五)よくこそ思ひ聞え給ふ事もない、男子が妻の妹に通ずると言ふやうな事よりもつとひどい浮氣をするのはあたりまへの事ですから、別に私は何とも思はぬが、あゝ言はれては中君に取つて甚だ氣の毒です。(一六)よくこそ思ひ聞え給はざりけれ—あなたは少しも、自分の妹の事を思つてはやらないのですね。情ない人だ。

辨乳母「あの御方の御格子今宵もや放ち設けられつらむ」と高やかに言ふが聞ゆれば、大納言「これ制し給へ。まろが爲めは思ひあるべくもあらず、男子の身は、これよりあるまじき事をも思ひ寄る、世の常の事なり。女の御爲めいとほし。よくこそ思ひ聞え給ふ事もない、男子が妻の妹に通ずると言ふやうな事よりもつとひどい浮氣をするのはあたりまへの事ですから、別に私は何とも思はぬが、あゝ言はれては中君に取つて甚だ氣の毒です。よくこそ思ひ聞え給はざりけれ—あなたは少しも、自分の妹の事を思つてはやらないのですね。情ない人だ。

(一)思したる御心焦られのまゝに—大納言の心。大君は思ひ込んだ一徹の心に、尼にならうとも思ひ立つてゐる樣子であるが。
(二)思ふ人聞きも—大君が尼になつたと聞いて、世人が勝手な憶測をするのもいやだし。
(三)さはあれど懸け離れなむあはれも—いくら大君の心がけがいけないと言つても、全く別れてしまふのもさすがに未練が殘る。
(四)かの人の心おかれ給ふさまも—又中君が大君から打解けずに疎ましく思はれてゐる樣子も氣の毒で、色々と大納言は心中に煩悶して。
(五)今宵大殿に渡り給ひなむと—今晩は關白の邸へ歸つて寢ようと大納言は思つてゐたが。
(六)情なきやうに—大君が自分の惡口を言ふのも、結局は自分の爲にする兎も角、中君が聞いてゐるだらうから、それが可哀想に思ひやられるので。
(七)げになき事ともや—もしかするると大君が、自分と中君との關係は事實ない事だと、考へ直す事もあるかも知れぬと大納言は思つて。
(八)やがて帳の內に—そのまゝ二人で寢所に入つて。
(九)あらぬさまを誓ひ契りつゝ—お互ひに、心の變はる事のないやうにと誓ひかはして。
(一〇)常は明しかね給ふ—いつもは大納言の秋の夜長を眠りもやらず明かしかねてゐたのに、今晩は大君と夫婦らしい睦言に紛れて夜が明けても起きずに、日の高く上るまで二人で寢過してゐたので、人が見ても結構な事である。
(一一)心ゆきて—滿足して。
(一二)あの御方の御格子—中君の部屋の格子戸は、今晩も大納言を迎へる爲に明け放して居るだらうが、そんな事をしてもう駄目だよ。
(一三)と高やかに—と聲高く聞えよがしに言ふ。
(一四)これ制し給へ—あの辨の乳母があて言を言つてゐるのをお止めなさい。
(一五)まろが爲は思ひあるべくもあらず—自分の爲には別に氣遣ふ事もない。
(一六)よくこそ思ひ聞え給はざりけれ—あなたは少しも、自分の妹の事を思つてはやらないのですね。情ない人だ。

は、いみじく人申すとも、世にふらじと思しのどめてこそ見定め給はめ」と、心耻かしげに宣ふつれなさに、いとゞ物も言ひやらず、ほろ〳〵と泣き給ひぬるを、げにいと若やかなる人の御文　一字イうへ　ならば、眼留るあし　イほし　きを、少し直よかに物遠くづしやかなる人の、忍びあへず心弱げなるぞ、いかばかり覺え給ふ事ならむ　イとし　思ふに、いと罪得がましくいとほしく哀れになりて、近くさし寄りて、いと和やかに打慰め給ふ氣色の艶めかしくめでたきを、まいてさばかりなる氣色に、心を盡くして哀れと見せ給ふらんを、かの君もいかに思ふらんとのみ思し寄るに、つゆも慰まず、いと嫉きに、涙のみ流れ勝りて、

（八）尼衣立ち別れなむと思ふにも何人悪く落つる涙ぞ

と宣ふ氣配など、（九）いとよし〳〵しく心憎き様に、これもなづらへ　四字イなべて　の人には似ず、勝りたる御様なれば、いと心苦しく哀れにて、我も涙ぐまれて、　大納言　「吾が君や、などかくまめやかにつらき御心ぞ」と打泣きて、

大納言　（一〇）重ねじと思ひ立つとも尼衣此の世とのみも君を頼むか

（一）心耻かしげに宣ふつれなさに　大納言が愛嬌たつぷりに言ふその圖々しさには、大君も果れて物も言はれずにほろほろと泣くので。

（二）げにいと若やかなる人の　若いにいと若やかなる人の、人が泣くのであるから、感傷的な年頃には有勝の事で、まして人目も素かないが、直よかに　少し直よかに、人と親しつんとして所のある、人と馴れ馴れしみない、大君のやうな人が、耐へ難くなつて心弱く泣くのは、何程悲しく思つてゐるのやうに前に悲しく泣いて居るのだらうか。

（三）思ふにいと罪得がましく　よく〳〵考へて見ると、罪の深い仕業で大君が可哀想にもなつたので。

（四）近くさし寄りて　大納言は大君の傍に近寄つて、やさしく慰めてゐるその様子が、大納言はさばかりさるる氣色に対して言はずにうかやうに優しくするのであるから、まして中君に対しては一様に美しく生き甲斐命に、愛情を示すべき事であらうから。

（五）かの君も　妹の中君もどんなに大納言を懐しく思ふだらうと、かうしたら大納言の言かと考へると、少しも有難くない。

（六）まいてさばかりなる氣色に　大君に

（七）かの君もいかに思ふらんとのみ思し寄るに　大納言の愛撫も少しも有難くない。

（八）尼衣立ち別れなむと思ふにも何人悪く落つる涙ぞ　大君の風情なのが、此の人の自分は尼となつて此んなけつれなつてしまはうとは思ふに、男とは別れてしまはうとは思ふに、何うして見苦しくつも此の様に、涙が流れ出るのであらうか。

（九）いとよし〳〵しく心憎きさま　大君の風情なのが、此の人の自分は尼となつて此んなけつれなつてしまはうとは思ふに、男とは別れてしまはうとは思ふに、何うして見苦しくつも此の様に、涙が流れ出るのであらうか。

（一〇）重ねじと思ひ立つとも尼衣此の世とのみも君を頼むか　吾が君や、などかくまめやかにつらき御心ぞ」と打泣きて、自分も思はず涙ぐんで。

（一一）重ねじと思ひ立つとも尼衣此の世とのみも君を頼むか　吾が君やなどかくまめやかに、何うして此の様に、本當に情ない御心を持つてゐらつしやるのですか。

（九）いとよし〳〵しく心憎きさま　大君の風情なのが、此の人の自分は尼となつて此んなけつれなつてしまはうとは思ふに、男とは別れてしまはうとは思ふに、何うして見苦しくつも此の様に、涙が流れ出るのであらうか。

（一〇）重ねじと思ひ立つとも尼衣此の世とのみも君を頼むか　吾が君やなどかくまめやかに、何うして此の様に、本當に情ない御心を持つてゐらつしやるのですか。

（一一）重ねじと思ひ立つとも尼衣此の世とのみも君を頼むか　衣の重ねじ。あなたは私と夫婦の縁を重ねて結ぶまいと、尼になろうと思ひ立つても、私に来世の事を頼むまいと、此の世の限りはあなたを私の妻と思つて頼みに致す積りです。

なぞうれはしき氣色なるぞ。(一)我も人もいみじく所を措きて慎み憚かる本意なく、と思し續けて、いと世の中うとましく味氣なく眺め入りたるを、上はたゞ心癖に見なし給ひて、いみじく心疚ましかりければ、ゐざり出でて、大君一日に添へてあらぬさまに思し移ろふ御氣色こそことわりぞやと思ふものから、見る度に心動き侍れ。ただ心に任せて、彼方におはしましつきね。一つ心に誰も隔て思すに、なか〳〵心付きなさまざる」と宣ふを、言に出でて、などてイナシ言ひなし給ふと思ふが憎ければ、のどやかに尻目にかけて見遣りたれば、物こゝろやかに懷かしく愛敬づきてこそあらぬ樣なれど、清げなる御顏の、物のいみじく心疚しかるべき眉いと赤く色付ひたるが、常よりも、あな清げと見ゆるは、さすがに眼留まりて、大納言「何事をいかに宣ふともこそ心得侍らね。誰が申し知らせたる事ならん。うたて聞き憎き事のみ、隙なく洩り聞ゆるものかな。我が爲めはさはれや、人の御爲めはいとほしくも思されぬるィか。男子の好色はさも思ひ寄るべかりける事とこそなか〳〵思ひなりぬれ。聞き憎き事にそんな事を知らせたのでせう。

(一)我も人もいみじく所を措きて—自分も、中君も、此の大君には一日おいて遠慮してあるかひもなくて、徐り我儘過ざる有樣だと。

(二)と思し續けて—以下大納言の樣。

(三)上はたゞ心ぐせに見なし給ひて—大君はいつもの通りに、これも大納言が中君の事を思つて考へ込んでゐるのだと思つたので、心中甚だ平かでなくて、御帳の外へ出てしまつた。

(四)日に添へてあらぬさまに—以下大君に大納言が中君の事を思つたので、御心につけてまして、中君は私よりずつと尤とは思ひ絞ぼまれるのですから、併しあなたのそまつなひとりぐらしを見ては、いつも私の心の平和が保てない樣なります。

(五)たゞ心に任せて—たゞあなたの御心のまゝに、中君と同棲なさいでせう。

(六)一つ心に誰も隔て思すに—皆一つに心を合せて私をのけ物になさるので、私の方でもけ物扱ひにして不愉快になります。

(七)言ひなし給ふと—大納言のどてなどて言ひなし給ふは口に出してその心を言ひがかふとりなすのであらうかと思ふ。而憎く思ひ平氣になるので、大納言はわざと構へて、横目でその顏をじろりと睨んだ。

(八)物こゝろやかに懷かしく—大君の顏は愛情深く物懷かしく所もなく、且つ愛敬もない容貌であるが清らかな御顏であつて、心中の憤懣に耐へず眼のあたりを赤く泣きはらしてゐる樣子が、いつもよりも美しく見えるので、さすがに大納言もその容貌には眼がとまつて。

(九)何事をいかに宣ふとも—何の事を何ういふわけで怒つておいでになるのやら、譯が分りません。

(一〇)誰が申し知らせ—誰があなたとは思ひませんか。氣の毒な事。

(一一)うたて聞き憎き事のみ—嫌な事聞きづらい噂許りが、絶えず世間に廣がるものでせう。

(一二)我が爲はさはれや—そんな噂も自分の爲には何んでもないが、中君の爲には氣の毒な事とは思ひませんか。

(一三)男子の好色はさも思ひ寄るべかりける—男子は色好みなもので、他に女をこしらへようなどと思ふ事もあるものだとは、私もいさゝか存じて居りますが。

(一四)聞き憎き事は—中君との關係だけは何んなに世間の噂がかましくても、決してあるべきものではない、とあなたの大きく持つて、何うか正しい判斷をして下さい。

(一)人眼の爲めにも、聞き憎かるべき事は—人目が見苦しくない爲にも、人が悪しい噂をする時には、それ耳に制止して、それにたんなる噂中でどれそこに、夫れだけ自分の浮氣な事を怨むのが普通の人の致し方とふものだ。

(二)男子ならん方とつてから—男の身に、人から悪評を立てられたるのは、無論なる事だ。

(三)飽きたく心憂げに—だのに、現在大君の夫たる人と一所になつて、中君と悪く言ひ立てるとは、呆れ果てた情ない心掛の女だ。きても珍らしい女も有るものだ。

(四)我なればこそいとあながちに—自分から無理にも心なおさへて怒を忍び、ひそかに事が圓滑に取まるやうに心が砕いてゐるのだが、

(五)思ひのまゝならむ人は—之が我意一徹の男ならば、自分の樣に耐へてはゐないだらうから、

(六)え絶ゆまじき契もあるを—自分と中君とは、間には切つても切れぬ子までで設けてあるので、その子をかせにして中君と同棲し、二人の間の秘密を公表したなら、一體大君は何うするだらうか。

(七)此の御身こそ—さうなれば、落付所もなくなつてしまふ事だらう。

(八)賢き人も女の筋になりぬれば—何んなに立派な男でも、女は世間の非難にも、思ひ切つた行心にもかけず、爲をするもの。

は、さなめりと心得給ふとも、なだらかにもて消ちて、(一)人眼の爲めにも、聞き憎かるべき事は制し聞き入れ給はで、忍びて我を怨み給はむこそ世の常の事なれ。(二)男子ならんからに、聞き憎き名を憚からぬやうやある。(三)飽きたく心憂げにも言ひ、しりたる、かく珍かにもあるかな。(四)我なればこそいとあながちに思ひ忍びて、人知れぬ心をも碎け、(五)思ひのまゝならむ人はかくも忍ぶまじきを、(六)え絶ゆまじき契もあるを、もて出でて尋ね寄り、たゞ顯しに現れましかば、いかゞはせまし。(七)此の御身こそいとほしく中空にならましか。(八)賢き人も女の筋になりぬれば、世のもどき辿り思はず。(九)大殿もかく聞き給ひては、子ある宿世こそとて、いかばかりかもて騒ぎ給はゝし。(一〇)あながちに悪しき事とも、よも制する人もあるまじけれど、(一一)げにたゞ見初めし有樣ゆくりなく淡つけきやうなればその元の心を忍びつゝ、女方のいみじく怖ぢ憚かり給ひて跡を絶つに、我も苦しく覺えて、あながちに忍び過ぐすこそ我ながら有難き事なれ。(一二)かく忍び〳〵の果、あの御爲めこそ言ひ〳〵ては味氣なけれ。(一三)此の御身は

(九)大殿もかく聞き給ひては—自分の父關白も此の事を聞いたなら、子供を生んだ緣の深い女の方が結構だと言つて、何れ程中君をもてはやす事だらうか。

(一〇)あながちに悪しき事とも—又自分が中君と結婚すると言つても、無理に悪い事だと言つて止める者も居るまいが。

(一一)げにたゞ見初めし有樣ゆくりなく—初めて二人が逢つた時の樣子が、仲介人もなくて突然に忍んで關係を結んだので眞に輕々しい有樣であつたから、中君方の事情とはその初めて逢つた時の事情を世間には秘密にして、それを人から知られて自分と交際なれるのを恐れて自分と交際なまふので。

(一二)我も苦しくまさりて—自分も中君が氣の毒に思はれて、無理にも戀しい心を壓へて月日を過してゐるのは、我ながら世に珍らしい心掛のよい男だと思ふ。

(一三)かく忍び〳〵の果—此の樣に秘密を隱してゐる結果、遂に中君の爲に結局不幸な運命となるのであらう。

(一四)この御身はなぞ—此の大君はなぜ何故此のやうに居られるのか、此の樣子は自分達の身の上を考へて呉れてもよさそうなものだ。

(一)あなたの心地いかにいみじく―中君の心地いかにいみじく思つてゐるならうと想像すると、大變可哀さうに思はれて、大納言は涙ぐましく感じた。

(二)女は見馴れぬ限りこそあれ―大納言の心。女は男と親しくなら男に對してよそよそしくしてゐるものであるが。

(三)言ふ肌なくなりぬれば―一度男たりぬれば、仕方がない。男の言ふ通りにならうといふ思ひ定めて。

(四)あるまじく便なき事にても―何んなまじく便なき事にてもの意。男と關係を續けてゐる事が、世の道理を外れた不都合なことであるにしても、行爲でのひそかに行はれる際の中の續けて行くのすべて世の女の常のものに。

(五)されど―此の世の常の筋は、云々の語は、下の「それよりは」の句の他の世の常の筋は、云々」中君は、自分がその行方に探し出した事も出來ず、仕方なくしまふ事も隱されて、耐へ難ふ程に、なだらかに聞き分けて、自分の子供だけ引渡し分けてのみ云ふ事は聞かれず。

(六)そのうつたへに我を見ず聞かじとは―言葉の通り取り許りくれた時、自分の子供を生んだ中君は、自分の關係をなそやうな情愛を以て、上君付評免文を、中君の行を慎しみ、自分の身の行方を慎しみ、自分の身の行方を慎しみ、自分の身の行方

中將歸りて、(一)宣へるさま語り給ふに、女君耻かしく悲しといとゞ思し入りたり。かくは云ひ騷がるれど、(二)人に似ず憂かりける前の世の契知らるゝ節より他に、誤まつ事ありとも我が心には覺え給はねば、言はむ方ぞなきや。左衛門督は、かゝる事聞きて後は、(三)日々に參り給ふ音すれど、此方にはさしのぞき給はず、あの御方にて例の事ども言ひ出でて、左衛門督「(四)女はなぞ容貌は角生ひても、心こそ要るべきものなれ。容貌よからん女子は捨てぞしつべき。(五)かたじけなく親の面伏なるたぐひを見るに、いと心憂し」と言ふなれば、また中將と云ふ人、中將(六)など、それこそなほめでたけれ。人にいみじく思ひまどはさるれば　とぞ答へたる。左衛門督(七)「いで何かめでたき。かりそめにほのかに打見たる事まで男はしばし思へど、つひには疎ましからぬやうなし。(八)心こそ女よ」と言ふを、大納言は此の筋なりと思ひて、耳を留めて聞き給ひて、(九)これを聞く〳〵、あな聞きにくとも諫め宣はざなり。淺ましくも言ひ當つるかな。(一〇)何の至りなき女はさはれ、左衛門督のけやけうも云ふなる事かなと、きと(一一)震

(一)宣へるさま語り給ふに―入道のお言葉を中君に話したので

(二)中君のは騷がるれど―以下中君の心。此の樣に自分の事を惡く世間の人々から言はれてゐるが

(三)人には似ず憂かりける―自分の心には別に惡い事をしたとも思はないが、前世の因緣が、人にも似ずまことに幸い運命を持つて生れて來たと言ふ事が思ひ知られるだけで、それより他に別に惡い事をしたとは自分の心中には覺えないので、世間の評判が一層情なかつた。

(四)日々に參り給ふ音すれど―毎日此の本宅にやつて來る樣子ではあるが、中君の部屋はのぞかうともせずに、大君の方に行つて例の中君大納言二人の事ばかり出して。

(五)女はなぞ容貌は角生ひても―女には何うしても顏形などはいくら美なりとても構はぬが、立派な必要だ。顏の美しい、女の子は、かへつて捨てゝしまつた方がよい。

(六)かたじけなく親の面伏なる―もつたいなく親の面目を生みの親の顏に泥を塗るやうな事をする中君などの顏を見ると、美しい女はどうの例を見ると、

(七)などそれこそなほめでたけれ―何故美しい女はどうの例を見ると、

(八)心こそ女よ―容貌なんぞは第二の問題で、よい心がけを持つてゐる女が本當の女だ。

(九)これを聞く〳〵―大納言は此の話を聞きつゝも、そんな事は聞きたくもない等と、左衛門督を答めるやうな事はしなかつた。

(一〇)何の至りなき女はさはれ―何の思慮分別もない女ならば兎に角。

(一一)震―左衛門督のけやけうも―左衛門督までが人目に立つて此んな事をいふとは、心の淺い男だと、さに此の言葉を聞いて、左衛門督といふ男が輕蔑される男のやうに思はれた。

美しい女がよいものか。ふと女の美しが容貌たちりと見た時は、男は一寸の間その男女に心を索られてしまふ。結局男から他かれてしまふ。

(九)心こそ女よ―容貌なんぞは第二の問題で、よい心がけを持つてゐる女が本當の女だ。

(一〇)此の筋なり―大納言は此の話を聞いて自分と中君との關係を、それとさして評判するなどとは呆れたもの

事を言つてゐるのだと思つて

(一一)これを聞く〳〵―大納言は此の話を聞きつゝも、そんな事は聞きたくもない等と、左衛門督を答めるやうな事はしなかつた。

(一二)淺ましくも言ひ當つるかな―以下大納言の心。自分と中君の關係を、それとさして評判するなどとは呆れたもの

事を嘆き思すべかめれば、(一)たゞ臥し沈みてのみ物し給ふめる、いと心苦しく見奉る。(二)ただこれに迎へ奉らせ給ひてよ」と申し給ふ。我が御心地にも、いかでかさる御事の眞實にてはあらむと思す事なれば、此の君の云ふ樣をまことゝ思して、入道「見奉らんにもいと憂かるべけれど、大納言の上尼になりなむとあなれ一人をこそいたづらにもなし侍らめ、いと不便なる事を、さ思し立たぬ前に、此所に渡りて物せられよかし。我さへ見ず知らずなりなば、いかなる空にかはふれ失せん。何せんに、此の君をあながちに並べ二字イ来らべて見んと思ひ念じけん。そのまゝに空しくなり給ひなましかば、ひたぶるに哀と思ひ出でゝ、いかに心安からまし。今はすべて此の世の事見ず知らじと思ひつるものを、我が仇敵の生まれ出でたるにこそありけれ」とて、泣き給ふ。見るにいといみじくあはれなり。(三)御堂は別に建てゝ、中に渡殿をして、いと小さくをかしげなる寢殿を建てられたり。そこにぞ常はおはする。御堂に續きたる、大きなる廊を續きてあるに移ろひ給ひて、此の寢殿に迎へ奉らんと思しなりぬ。

(一)たゞ臥し沈みてのみ―中君は床の中に泣き沈んで許り居ら(れ)ますのが大變可哀想に思はれたこれに迎へ奉らせ給ひてよ―何ぞ此の廣澤に中君を引取つてやつて下さい。我が御心地にも―入道自身心中に、中君にはそんな事はよるまいと思つてゐたが所なもやで、宰相中將の云ふ事を信用して。

(四)見奉らんにも―中君にも顏はれど大變つらいに合はせるのべで。

(五)一人をこそいたづらにもなし侍らめ―中君一人を、此のやうな山里に埋もれ居るのは仕方ないと思つてゐるのが、大變君まで尼になるのは不都合だ。

(六)立たぬ前に―大君が尼になつてしまはぬうちに、早く中君をこゝに引取つなどと思ふ事であるから。

(七)我さへ見ず知らずなりなば―自分までが死んでしまつて、中君の世話をする事が出來なくなる所方なしに放ち、中君は何の知るやうもなくなつてしまふ。

(八)何せん―何の爲に此の君を他の中將君に並べて見た方宜しかなしに病氣の癒を祈つて、無理矢理に平癒の願を掛けたのであらう。

(九)そのまゝに空しくなり給ひなましかば―此の時給ふ中君の病氣の本の方宜しかなしまつたなのに、此の君あなたの中君が此の樣に自分に心配をかけるとは前世に思ひ出す許りで、自分に哀想に思ひ出す許りで、自分に哀

は何の心配もなかつただらうに。

(一〇)今はすべて此の世の事見ず知らじと―今自分は出家したのだから、俗世間の事に係はつて心を亂すまいと思つてゐたのに、此の中君が此の樣に自分に心配をかけるとは前世に

(一一)御堂―佛堂と、小さく風流に建てゝ―寢殿とは別に建てられてある寢殿との間は、渡殿を以つて續けられてあつた。入道はその寢殿に住んでゐたのである

於ける自分の仇敵が、此の世に中君として生れて來て自分を惱ますのであらう。

が、此の佛堂に續いて建てられてゐるその大きな渡殿に入道は住居を移し、寢殿には中君を迎へて住ませようと思つた。

氣配やするなどは思しもやすらん、立ち止りなどし給ふを、格子放ちて入れ奉ると取りなし侍るべし。たゞさやうのふしぶし積り〳〵、誰が御爲めも、いとかく聞き憎き名の流れ侍りとぞ心得侍る。(一)弊の乳母心ばへいかゞ侍る、殿も知ろし召したらん。(二)さしあたり見たるやうに申し聞かすれば、上さ思し宣はする、ことわりに侍り。男子の心はた知らず、見奉らばやと思しもやすらん。一人おはする所にもあらず、一つ所にて、いとさうけばり、宵曉ごとに、格子放ちて、出だし入れ奉る事は、いかでか侍らん。(六)なにがしも一つ心にてなむ通はし立てあへると云ふ事にて、御簾の内にも入れられ侍らず。(七)たぐひなき天の下の有識には物し給ふめれど、一人に二人の妹を見せ奉らんとは思ひ寄るべき事にも侍らず。(八)劣りざまの異人をこそさて見奉らめ。(九)先づ身に取りては極めたる虛言に侍れば、思ふにまして異事もさにこそ侍らめ。(一〇)上下言ひはしたなめて侍る樣いみじかるべし。(一一)女房も世をいといみじと思ひ浮かれつゝ、里に罷出つゝ、さるべき限り五六人、いと人少なにて、此の頃はまたかゝる

(一)たゞさやうのふしぶし積り〳〵その樣な事が、度重つて、皆の人名の評判が、か樣にうな事に浮名を世間に流すやなつたのだと私は考へる。

(二)弊の乳母心ばへいかゞ侍る—あの弊の乳母が、何んなたも御存知でせう。

(三)さしあたり見たるやうに—その弊の乳母がありもせぬ事を眼前に見たやうに大君に言つて聞かすものだから、大君も其を信用して、一所になつて中君の惡口を言ふのも尤もです。

(四)男子の心はた知らず—又男の心は分らぬものですから、大納言も多少中君に心を寄せて居るかも知れません。

(五)一人おはする所にもあらず—併し、中君が一人居るわけでなく、大君が一人居られると御一所にるのに、そのやうに公然と朝夕部屋の戸をあけ放して、大納言を中君の部屋に出入させる事が出來るわけのものではありません。

(六)なにがしも一つ心にて—私も心を合はして、大納言を中君の所に引き入れてゐると言ふので、大君の所ではゐる部屋の中へ入る事も許されません。

(七)たぐひなき天の下の有識には—なる程大納言は天下に稀な大學者ではありますが、一人の大納言には二人の妹を、嫁がせようなどとは、私は決して思ひも寄らぬ事なのです。

(八)劣りざまの異人を—大納言よりも身分の低い他の人を、中君の婿に取りたいと望んで居ります。

(九)先づ身に取りては—ですから私が大納言を中君の所へ通はしてゐるなどと言ふ、私の一身に關するなど噂は全くの嘘です。まして、私の考へる所では、他の中君に關する噂などは何れも嘘だと思ひます。

(一〇)上下言ひはしたなめ—大君方の人々が高きも低きも皆一所になつて、中君の惡口を言つてゐるのは實にひどい事です。

(一一)女房も世をいといみじと思ひ浮かれつゝ—中君お付の女房もその爲に世間體を憚かゝるべき限り五六人—譯く中君に心を寄せてゐる女房が五六人だけお傍につき添うてゐた上に、お傍にも少くなつて、中君はまた此の頃は此の噂の事を悲しんで居られますので。

て、心が落ち付かぬので里へ歸つてしまつて。

(一)明かに押し課せ―はつきりと罪な中君の身に着せて、二人の間に關係のある事を言ひ切つた。

(二)ことわりながら我が前にてだに左衛門督は父なる事だが、此の中君の自分の前立ても此の様に非分を言ひ立てゝゐる。まして他の人の前立てゝは何んな事を言つてゐるだらうかと思ふと。

(三)かの御身よりは怨めしきぞ―過ちを犯したあの中君よりも、寧ろ非があればき立てる左衛門督の、子方が怨しく思はれたのも、お散の闇の親心と思はれば心中思し澄ます可哀想である。

(四)わりなく心を聞の上の蓮の上に入道の事を聞いて後は、此の上なく心を聞つて、清くし熱やめて、始終心極を願ひも願ひも―左衛門督は物思生ひの願も樂往さ

(五)さる事言ひしは眞實か―左衛門督密通の事を話したが大納言中君が、其は本當か、何うした事でかは疾くも申しなつたかなかと―おなやまあ早くも左衛門督なかは

(六)あはれ疾くも申してけるかなと聞くに、いと憂けれど、我も申すべき事ならねば、宰相中將「知らず。

(七)人々の御仲の親しと言ひながら、いかでか知り侍らん。たゞ見侍るには、去年の秋より病に沈みて過ぐさせ給ふ。今も例のやうなる折少なく、あるかなきかのやうにて過し給ふに、いつの隙に、いかでかさる事の侍らむとこそ見給ふれ。今年となりて、なにがしが侍はぬ折は少なくこそ侍れ。大納言の御方の侍ひどもの一所なれば、つれ〴〵なるまゝに、女房の局に立ち寄り懸想し侍るをも、御使に來ると言ひ侍るなり。月の明き夜大納言のうそぶき眺め歩き給ふついでに、さこそ侍れ、人の

つけ申し見付け給ふ事こそ侍らめ―と、明かに押し課せ、ひたぶるに宣ふ。ことわりながら、我が前にてだにかく言ひ思へり。まいて、と思すに、かの御身よりいと怨めしきぞあはれなる御心の闇なるや。此の事聞きて後は、わりなく思し澄ます蓮の上の御願ひもさしおかれ、起き臥し亂れて、宰相中將の參りたるを召し寄せて入道「左衛門督の、さる事言ひしは眞實か。如何なる事ぞ」と問ひ給ふ。あはれ疾くも申してけるかなと聞くに、いと憂けれど、我も申すべき事ならねば、宰相中將「知らず。人々の御仲の親しと言ひながら、いかでか知り侍らん。たゞ見侍るには、去年の秋より病に沈みて過ぐさせ給ふ。今も例のやうなる折少なく、あるかなきかのやうにて過し給ふに、いつの隙に、いかでかさる事の侍らむとこそ見給ふれ。今年となりて、なにがしが侍はぬ折は少なくこそ侍れ。大納言の御方の侍ひどもの一所なれば、つれ〴〵なるまゝに、女房の局に立ち寄り懸想し侍るをも、御使に來ると言ひ侍るなり。月の明き夜大納言のうそぶき眺め歩き給ふついでに、さこそ侍れ、人の

(八)見侍るには―たゞ私の見た所によれば。

(九)今も例のやうなれば。折少く―今でも中君は氣分のよい折が少くて、いつも寝込んで日を過して居りますので。

(一〇)いつの隙にいかでかさる事の侍らむと―その様に、大納言と關係を結ぶ隙間はないと私は思ひます。

(一一)今年となつては、私が中りて―本年となつて日は少いのです。中君の御傍に參らぬ大納言の家の侍どもの―大納言の家來達も中君大君と同じ邸内に居るので、退屈のまぎれに中君お付の女房の部屋に忍び寄つて、戀を仕かける事もあります。

(一二)御使ひにまりて來るとの云ひ侍るなり―その大納言の家來を、大納言の所へ持使として來て、手紙を中君の御つとして來たのだと言ひふらして居るのです。

(一三)月の明き夜大納言のうそぶき―又月の明るい夜、大納言が月を眺めつゝ詩吟を誦して庭中を逍遙する時に。

(一四)さこそ侍れ人の氣配やする―左様々々此人の部屋には中君と云ふ様子方が居たれたが、一寸中君その様子方が見たいものだ。中君のどの居る部屋の前あるのと大納樣が知らんなる事言がすいも中君はかの部屋の前に立止るやうな事もあるのだ。中君の子を明け放つて大納言の部屋を連れ込んだ事なれば、噂なして居るなどとりのでせう。

有識と、後安く思ひ給へるに、いかなる事にか侍らん。いづ方にもいと聞きにくゝ苦しく、など、疑ひなく直々と言ひ續けたるを、聞き給ふ心地世の常ならず、淺ましとばかり物も宣はず、御氣色打變りて、一此の夏までは病に沈みてかの君もありつるを、何時よりありける事にか。確かに見付けたる人ありや。若き女房のそこはかとなくかたはしらに居たるを、若き男のゆかしく思はぬ樣あらじ。立聞、垣間見などせらるゝ事のとりなさるゝにやあらむ。女の心知り難し。世にさらじと思ふべきにあらず。かの大納言の、なげの事取り情け寄らんを、正身ならずとも、ある人人の心寄せぬはあらじ。母なき女子は人の持たるまじき物なり。かたのやうなりと母の添ひてあらましかば、いみじく思ふとも過ぎたざらまし。久人もかく言はざらまし。そこはかとなき若き女房を、打ちあづけて、同胞の邊りにあらせたる怠り科なり」とて、ほろ〳〵と泣き給ふ氣色のいとほしく哀なるを見ては、また　左衛門督　一言ふまじかりける浮きたらん事を、かの上さまで宣ふべき人におはしまさず。思ふに

(一)後安く思ひ給へるに―私は大納言を信用して居ましたのに。

(二)いかなる事にか侍らん―何うしたお譯でせうか。大君中君の身に取つても見苦しい事です。

(三)疑ひなく直々と―左衛門督は疑ひなく直々と一點も疑ふふ所がないもの、やうに、すら〳〵と話し續けたのを聞く大臣の心中は一通りの驚きではない。

(四)淺ましとばかり―淺ましい事だと、果れ返つて口もきけず

(五)此の夏までは病に沈みて―あの中君は此の夏までは病氣に顏色を變へて。

(六)若き女房のそこはかとなく―若い女房が何氣なく人目につく端の方に出て居るのを、若い男が見付けては奥床しく思はぬ筈はない。

(七)立聞垣間見―そこはかとなく若き女房を大納言が奥床しく思つて、立聞したり垣間見たりしてゐたのを人が見つけて、そんな噂が取沙汰せられるやうになつたのであらう。

(八)女の心知り難し―併し女の心は分らぬものだから、大納言との關係が全くないとも云はれない。

(九)かの大納言の―美しい大納言のなげの事取り一寸の美しい御氣取りの手紙を、大納言が、中君に寄こし上げて言ひ寄つた時には、中君が背大納言に心を寄せて女房が仲介なりして、二人の間に關係が結ばれる樣な事はあるまい。

(十)母なき女子は人の持たるまじき物―母なくして、父親一人で女の子などを持つものではない。

(十一)かたのやうなりと―何んなに身分の賤しい母親であつても、母親が如何に付き添うてゐたならば、娘がいかに浮氣な心を起してもとんだ過ちを仕出かす

(十二)久人もかく言はざらまし―久人もかく言はざらまし。世間の人がその娘に對して、そのやうな惡評を立てるやうな事もあるまい。

(十三)そこはかとなき若き女房を打あづけて―つまらない若い女房達に、中君の世話を任せてしまつて姉大君の傍近く住ませてゐたのが、私の過ちでこの事になつたのだ。

(十四)言ふまじかりける浮きたらん事を―大君は口にすべき事でもない何の根據もない、浮說をば、人に話すやうな人物ではありませんぬ。

(十五)思ふに―私の考へでは、大君が人に言ひ付けて大納言のあとをつけさせて、大納言が中君の所に忍んで行くのを確かに見屆けた事があつたのでせう。

入れず。(一)大納言さなめりと心得給ふに、(二)あな淺ましの事共やと思すに、(三)いとゞ憂さに懸離れ行くはことわりかな。(四)いかに見聞き思ふらんと思ひやるに、(五)同じ名にこそあなれ。(六)事は心安かるべき樣に構へ語らはむと思して、少將を迎へさせ給ふに、更に參らず。(七)いとゞ慰む方なく、行く方なき心地し給ふ。宰相中將も、(八)世の聞き耳をいとほしと思へど、我が知る事にもあらず、(九)さし離れむをいかゞはせんと思へば、苦しくもあらぬに、(十)たゞ女の御身の萬にいとほしげなるを見るにぞ、身にも代へつ許り心苦しき。左衞門督廣澤に參り給ひて、(十一)左衞門督「かう〳〵の事なむ大納言殿の上宣はせて、尼になりなむと思し立ちて侍り。(十二)何れも同じ事にておはしませど、(十三)世の音聞の例なかるべき、いと怠々しく思ひ侍るを、(十四)男子の好色と云ふものは、昔より賢き人なく、此の道には亂るゝ例ども侍りけり。(十五)これよりあるまじくおほけなき事を思ひ寄りあやまつたぐひ多く侍らめど、その中に此の大納言はいと若き年齡には似ず、(十六)有難く此の方にも靜めて、(十七)天の下世のもどきなかるべく思ひ靜まり收め給へるのおろそかな事だと思ひます。(十八)世の噂聞の例なかるべき—世間にも類のない姉の婚に妹が通ずる等とは、家内取締からん考へを起して、とんだ事を仕出かす例も多い事でせう。(十九)有難く此の方にも—此の大納言は、珍しく此の色の道にも心が堅固であつて。(二十)天の下世のもどきなかるべく—日本中で人々から非難される事もなく、心の落ちついた思慮分別の深い人格者だと。

(一)大納言さなめりと—大納言は、大君がすべての事を知つてしまつたのだなと覺つたので。(二)あな淺ましの事共やと—姉妹が反目するとは、淺ましい事だと思ひ。(三)いとゞ憂さに—大納言の心。中君が情なく思つて、自分から離れてゆくのも尤もだ。(四)いかに見聞き思ふらん—中君は世間の人の噂を聞いて、何なに思つて居る事だらうと、大納言は同情せられて。(五)同じ名にこそあなれ—惡名が立つのは何うせ同じ事だから。(六)事は心安かるべき樣に—一層の事は心安かるべきさまに構へ安心して逢へやうに取り計らはうとゞ慰む方なく納言は思つて。(七)行く方なき心地し給ふ—大納言は少將も來なむ方なく慰まず一層心が所持の聞きた。(八)世の聞き耳を—世間の中君方に對する惡評を甚だ氣の毒に思つて、元來此の事件は自分の事でもなく。(九)さし離れむを—大君と自分との仲が惡くなるのも、致し方がない事だと思ひ切つて居る別に苦しくも思はない。(十)惡口をあはゞ女の身の上に代へたいものだと思つた。(十一)廣澤の父入道中將は心苦しく思つた。(十一)左衞門督—廣澤の父入道參りて。(十二)かう〳〵の事なむ大納言殿の所に行く。(十三)何れも同じ事にておはしませど—大君も中君も兄弟であるから、大納言の妻としては何ちらがなつても同じ事である。(十四)世の音聞の例なかるべき—世間の噂聞の例なかるべき—世が。(十五)男子の好色と云ふものは—色の道に分別のない人となつてしまつて、みだらな行爲に及ぶ例は多い事です。(十六)これよりあるまじくおほけなき事を—此の大納言の場合よりも、もつとなすまじき怪しき事を仕出かす例も多い事でせう。(十七)有難く此の方にも—此の大納言は、珍しく此の色の道にも心が堅固であつて。(十八)天の下世のもどきなかるべく—日本中で人々から非難される事もなく、心の落ちついた思慮分別の深い人格者だと。

事いかで承らじ。(一)人の聞き思はん事よ。(二)男子の御好色には、高き賤しき女もゆかしと思さぬやうなし。(三)さぞ皆侍らん。(四)氣色ばえ、(五)通ひあるまじき事は、ことのほかにもてなしつれば、(六)げにとはしたなくてやみ侍りぬるわざなり。(七)見るかひある御有様を、をかしきやうに見愛でて、見聞き入れ奉る程に、事上りにけるにこそあなれ。(八)さばかりにては論なく中將は氣色見侍りぬらん」と申し給へば、(九)聲の乳母「いかゞは。皆一つ御心に侍るべし」と言ふ。(十)左衛門督「至りなき女房はさもあれ、口惜しの主や。(十一)我は我と思ひたれどえせ者にこそ侍るなれ。(十二)人は片輪なる事見苦しき事を分き知れるこそ人にてはあれ」と宣ふ、(十三)は「字イとばかり案じて、(十四)すべて異事なく、下司上下なく押し赴けて、(十五)事に觸れて、此の御方はしたなく云ふ樣耐へ難く、聞き忍び難けれど、いかゞはせむ。(十六)さりとて外に渡りなどせむにつけても、聞き憎さのみこそ增さるべければ、あるにもあらぬやうにて過ぐるに、宰相中將かの御方に御簾の内にも

(一)人の聞き思はん事よ―人が聞いたら何う思ふ事だらう。
(二)男子の御好色―男子は色好みなもので、身分の高い女も賤しい女にかゝはらず女を戀ひ慕はしく思ふものだ。
(三)さぞ皆侍らん―何んな男でもさぞ皆侍りたもの―だらう。
(四)氣色ばえ―通ひあるまじき事はある樣に成せて、此の二人が通ずるあつても、云ふやうな事は、世の道理としてなすべき事ではないのだから。一本の方宜しい。
(五)ことのほかにもてなしつれば―大納言が中君の方に言ひ寄せつてほかの事は中君の方で、もつてなかつたなら。大納言をもてなしたなくて―大納言は尤も思つて取りあはなくて―大納言はしたなくて―大納言はそれは尤もと思つて問はや惡いのでしまふのである。
(六)げにとはしたなくてやみ侍りぬるわざなり―然るに中君の方では、大納言の言ふ樣なる立派な人子と見て、大納言を美しい樣なと思つて、大納言の云ふ事を聞き入れてはめやしそのの成りたもの二人が關係なつたのだらう。
(七)見るかひある御有樣を―然るかひあるある立派な人子と見て、大納言を美しい樣なと思つて、大納言の云ふ事を聞き入れてはめやしそのの成りたもの二人が關係なつたのだらう。
(八)さばかりにては論なく中將は氣色見侍りぬらん―大納言はあの戀ぶ事かに成つたのだらう。
(九)聲の乳母―大納言の乳母。
(十)左衛門督―中君の方の女房。
(十一)我は我と思ひたれどえせ者にこそ侍るなれ―宰相中將は自分を立派なと思つてゐるだからう。
(十二)人は片輪なる事見苦しき事を分き知れるこそ人にてはあれ―人間は片輪なる事見苦しき事を分き知つてゐる人間は不道徳な事、世間體の恥しい事を分つて居るのが人間だ。宰相中將のやうな道理の分らぬ者は人間ではない。
(十三)は―計略をめぐらす。一本の「とばかり」の方宜し。
(十四)すべて異事なく―左衛門督はすべて異事なく、下司上下なく押し赴けて。
(十五)事に觸れて―何かの事に觸れて。
(十六)さりとて外に渡りなどせむにつけても―さりとて外に渡りなどせむにつけても、聞き憎さのみこそ增さるべければ、あるにもあらぬやうにて過ぐるに、宰相中將かの御方に御簾の内にも

仲を取りもつとは情ない男だ。
(十三)ほかり案じて―計略をめぐらす。一本の「とばかり」の方宜し。
(十四)すべて異事なく―左衛門督はすべて異事なく、下司上下なく押し赴けて。
(十五)事に觸れて―何かの事に觸れて。
(十六)さりとて外に渡りなどせむにつけても―さりとて外に渡りなどせむにつけても、聞き憎さのみこそ增さるべければ、あるにもあらぬやうにて過ぐるに、宰相中將かの御方に御簾の内にも

たが致し方もない。
(十七)宰相中將かの御方に―宰相中將なれば、大君の御方では部屋の中にも入れない。

聞き侍る。(一)げに心とある事にはよも侍らじを、(二)懇に心を盡くして聞え犯す人のあればこそあらめど解サルも、押し量るに、かく淫りがはしき事聞くべきたぐひやは侍る。(四)身の宿世のいと心憂きに侍れば、人を怨むべき方なし。(五)似つかはしき御間にもあるべきを、(六)同じくは思なきさまにてあらせ奉りて、(七)こゝには形をも變へて、(八)此の世の事見聞かざらむ所に入りなむと思ひ侍り。(九)昔より取り分きたる御はへゝ心ばへの哀に思ひ知られ侍れば、かくも聞え侍るなり」とて打泣き給ふに、(十)淺ましく驚かれ給ひぬ。辨の乳母も御前に居て、(十一)石山にても御使の繁く通ひ侍りける様、辨の乳母「對の御方少將の君の局より傳へつゝ、(十二)御文は雨の足よりも繁く通ひ侍る。(十三)夜は御殿籠りぬるやうに侍れど、人の寢ぬる間には起き出で解サルも、かの御方へおはしましぬれば、(十四)御格子を放ち設けて入れ奉る。(十五)かゝる事どもは、さは世には侍りけり」と語り續くるを聞き給ふに、(十六)眼も口も一つになる心地して、(十七)爪彈きをはた〳〵として、左衛門督(十八)「かゝる

(一)げに心とある事には―それも中君が、自分の心から逆んでつくした事ではあるまいが。(二)懇に心を盡くして―中君に執心してかき口説く男が居るも結果になるだらう。此の様な結果になるのだらうが。(三)押し量るに―かくみだりがはしき事―よくよく考へて見ると、此の話は聞いた事もあるが、例もない事だ。(四)身の宿世のいと心憂きに―それも身の不運からと思へば、別に中君や大納言を怨む事もなく、夫婦としてもよい中君なら、夫婦としてもよいあるからあはしき御間―大納言と(五)似つかはしき御間―大納言と(六)同じくは思なきさまに―同じ事なくば、二人を夫婦にして心配のないやうにして。(七)こゝには形をも變へて―私は尼にでもなつて。(八)此の事見聞かざらん―見聞かざる事の、耳にも眼にもふれない世の事の、耳にも眼にもふれない世の事に入つてしまひたい。(九)昔より取り分きたる御はへの―「はへ」は「ばえ」の誤り。あなたは以前から、私の世話をしたのは、私には特にあなたが親しくて、私が下つもの、かやうに私の心の底まで思はれて、お話したのです。(十)淺ましく驚かれ―左衛門督が前に―中君の傍に居て申すやうに。(十一)石山にても御使の―中君が石山にてもお籠りして居た時には、大納言の御使が度々參つた様子を語り、そして云ふには。(十二)對の君の局より―對の君や少將の君の部屋から、大納言の手紙を取り次いで中君にさし上げ。(十三)少將の君の方へ行かれる。(十四)御格子を放ち設けて―中君の方へおいでになつて、大納言を家の中へ案内する。(十五)かゝる事どもは―まさかこんな事は世の中にはあるまいと思つてゐましたが、さてはかういふみだらな事も世の中にあればあるものです。(十六)眼も口も一つになる心地して―左衛門督の呆れた様。眼も口もくつつく程に呆れ返り。(十七)爪彈きをはた〳〵として―心中がいらいらとして、爪をばたばた〳〵と彈く。時の憤慨した時にする。(十八)かゝる事いかでそんな面白くない噂は聞きたくないものだ。

(一)たえて今は取り入れ—今は全くその手紙を受け付けず、大納言の云ふ事を聞き入れない。

(二)對の君の氣色もあらはれぎまに—對の君の樣子までが憂骨に邪見になつて來たので。大納言は一層不愉快であつて。

(三)いとゞ心地も慰み—「慰み」は「慰まず」等の誤寫か。

(四)あはれも—もよほされける—情ない氣持にもなつた。

(五)これは今はじめた—以下大納言の心。此の中君との關係は今始まつたわけでもなく、自分の罪でもない。大君と結婚する前からもあつた事で、前世の因緣で此の樣な關係を結ぶやうになつただけだのに。

(六)さしていみじくとも—その樣に世間のうるさいやかましくても、何うして今までの緣を絶ち切つてしまふ事が出來ようか。

(七)それより過ぎたる事やは—自分に取つても中君に取つても、二人の緣を絶つよりも以上に、つらい事はない。

(八)女君の思したる氣色も—大君の怒つてゐる樣子も、一層不愉快に思はれて。

(九)我は我に思ひ—大君が怒つてゐるなら自分も自分の思ふ通りにするまでと、大納言が思ひ込んで居る樣子なので。

(一〇)例よりも心留まらぬやうに—大君は何時もよりも一層大納言が氣に喰はず、大變情なく思はれて。

(一一)えも忍びあへ給はず—心中の悶々の情を我慢する事が出來ず、大君が左衞門督に語るやうは。

(一二)昔より殿の御心ざしの—大納言の御心では以前から、中君よりも私の方を此の上もなく輕蔑してゐるのだから、大尤もです。

(一三)親の御眼にも—親の眼から見ても中君は私よりも此の上もなく優れてゐるのだから、大納言が中君の方を私よりも寧愛なさるのは當然だ。

(一四)我が身のはか〳〵しからぬ—自分が大して出世もしないので、自分い名譽をあげる爲にも、是非妹の中君を女御などに出世させて見たいものだと。

(一五)上のおはせずなりにし代りに—母上が死なれた代りに、姉上が親代りとなつて。

(一六)にか〳〵しからずとも—大した事は出來なくとも—自分と中君はお互ひに力となりあつて、よく中君の世話をしてやらうとかねがね思つてゐたのに。

(一七)そむきそむきにきし隔て—中君は自分に對して、讀も見せずに打解けぬ樣子で。

(一八)他人よりは人聞恥かしかるべき事をなむ—赤の他人ではなくて姉妹の間の事なので、一層人に聞かれても恥かしく思はれるやうな噂が聞いた。

ど煩はしがりて、(一)たえて今は取り入れ聞き入れず。(二)對の君の氣色もあらはれ樣にあれば、むすぼほれ、(三)いとゞ心地も慰み、(四)哀しもよほされける。(五)これは今初めたる我が過失にもあらず。かゝるべかりける契許りを、(六)さしていみじくとも、いかでか跡を絶たむ。(七)それより過ぎたる事やは我も人もあると思し續くるに、(八)女君の思したる氣色もいとゞ懷かしからぬ心地して、(九)我は我と世を思ひ澄みたる樣に、例よりも心留まらぬやうにいとつらく覺えまさり給ひて、(一〇)えも忍びあへ給はず、左衞門督に、(一一)昔より殿の御心ざしの、あの君にはこよなく思し落したれど、ことわり、親の御眼にもこよなく優れ給へる人の樣なれば、いかでか思さざらん。(一二)我が身のはか〳〵しからぬ—(一三)上のおはせずなりにし代りに、姉上が親代りとなつて。(一四)にか〳〵しからずとも、互にこそは賴みをかけて、後見思ひ聞えめと思ひ渡るに、(一五)そむきそむきにきし隔て、(一六)他人よりは人聞恥かしかるべき事をなむ

なる巖の中を求めても、かく心づきなき事を見聞かであらばやと、(一)思し亂れたる事を、見咎め聞え給はむ事も、さすがに人聞きいと便なし。いかにせましと、たゞ此の事をのみ思されて、(二)此の頃はいとゞ解けたる御氣色もなく、眼も見合はせ奉り給はず。まして辨の乳母の思ひたるさまの憎きを、(三)此の御方にもかゝるべき事とは思ひし事なれど、(四)其の後、人の御心を見聞き入れもてはやし聞ゆる事もなきをば、(五)たゞ怪しき御寢覺の立ち聞きのかくなりぬるにこそはあるべかめれと、(六)むつかしく聞き嘆かるれど、(七)云ふべき方なき事なれば、たゞ聞き知らぬ様にて過ぐす。(八)上は殿おはせぬ程は、夜も晝も此方に渡りておはするを、此の日頃は搔き絶えて御消息もなく、渡り給はねば、(九)此の事どもの聞えにけるなめりと思すに、(十)姫君はすべて撫子の露のあはれは忘れて、いみじかりし程になくなりなましかば、かゝる事を聞かましやと、生きかへりにける命を怨めしく思し亂る、いみじく心苦しげなれ(イ)り。

大納言は、(十一)かばかりなる關川の水にも憚からず、(十二)隙なき御文をも、對の君少將な

(一)思し亂れたる事を—斯様に大君の心中に頗悶してゐる事を大納言に向つて咎め立てゝ怨みを言ふのもさすがに人の憚かれて出來い事であるが、何うしたらよいであらうと。

(二)此の頃はいとゞ解けたる—此の打ち解けた様子も見せず顏さへ合はせまして辨の乳母の怒つてゐる様子は面憎い程。

(三)此の御方にも—中君の方でも。

(四)其の後人の御心を—あの時以後大納言の中君を慕つて居られる御心を受け入れて、大納言の御取持したやうな事は全く無いのに。

(五)たゞ怪しの—たゞ大寢覺の立ち聞きの—たゞ怪しの物思ひの餘り手水に寢覺の外ぬまゝに、中君の部屋の外ぬまゝに、中君の部屋の外ぬまゝに、中君の部屋

大納言(一)あはれともつゆだにかけよ打渡し獨り佗びしき夜半の寝覚を

と心苦しく宣ふを、内には聞き知る人あれど、苦しくのみ覺えて、聞き知り顔にもあらず。

(二)心に何のあやめも、心置く節なかりしこそ、見付くる人なかりしか。(三)誰がもとへ夜を重ね立ち出で給ふなど、心見て窺ひければ、見付けつる人ありて、さこそありつれと、一人だに云ひ出づれば、その折かの折と、日々に事添へて、片端ありけるも、枝を付け葉を添へ、何事もつきづきしく取り續け言ひそめくを、いみじく心よからむ人そら、さる事を聞きつけてたゞに思ふべきやうはなきを、辨の乳母打思ひたるさまぞいみじきや。上も大納言の月頃の御氣色を思し合はするに、何の疑ひ置かれず、我よりは萬の事にいとめでたくすぐれたる君なれば、げによろしくは思ひ給はじを、いかにこよなく思し較ぶらむと思すに、よその人よりはいと怨めしく、いか

(一)あはれとも…私は永い間たつた一人でつらい思ひをし、ながら、夜も寝覺めて物思ひに沈んで居ります。少しは可哀想だと云ふのに、言葉でもかけて下さいよ。

(二)内には…聞き知る―家の中の女房には、そのお聲を覺つた者もあつたが。

(三)苦しくのみ…思ひ憚つて、知らぬ顔をして居つた。

(四)心に何の…中何に何のあやめも思はく心置く―心なかつた時分へ納言が子供を引取つたと云ふ噂の未だ立たぬ時は、大納言が中君の部屋の格子の前に立つのを見付ける人もなかつたが。

(五)誰が…の所へ毎夜の所へ夜を重ね―今は誰かれるこんで行くかと。

(六)心見て…見て窺ひければ―氣を付けて行爲をつければ。

(七)見付けつる…見付けつるの人ありて―大納言が中君の部屋の前へ立ち忍ぶのを見付けた人があつて。

(八)さこそ…さこそありつれと―斯樣々々な事がありましたよと一人が言出すと。

(九)その折…その折の折―あの時の大納言の樣子が怪しかつた、此の時も二人の素振が變だつたと、多くの人々があらぬ事まで誇大に言ひふらして。

(一〇)片端…片端ありけるも―小さな事でも枝葉をつけて、色々な事をも實際つけた事らしく作り出して噂して居るので。

(一一)いみじく…此ういみじく心よからむ人そら―此ういふみだらな話を聞いては、何んなに氣立のよい人でも平氣で居られる筈はないのに。

(一二)辨の乳母…辨の乳母打思ひたるさまぞ―まして大君の乳母の憤慨して居る樣子といふものは、一通りではない。

(一三)上も…上も―大君も。

(一四)何の…何の疑ひも置かれず―此の噂には、何の疑をさし挿む餘地はない。

(一五)我より…我より―萬の事に―大君の心中君は自分よりすべての點に於いて立派な人で、すぐれてゐる人であるから。

(一六)げに…げによろしくは―大納言は中君の事を決してなみ大抵には思つて居られまいのに。

(一七)いかに…いかにこよなく―自分と中君とを較べて見て、何んなに此の上もなく中君の方が立派な人と思つて居られるだらうか。

(一八)よその…よその人よりは―大納言の相手の女が自分の妹の中君であつた事は、他人でないだけに一層怨めしく思はれて。

(一九)いかなる…いかなる農の中か―如何なる田家隱しの中に、此の岩屋の中にでも不愉快な事を見もせず聞かずに居りたいものだと。

(一)見餘り給ひて―あくまでも見つめて、遂には思ひ餘つて中君に手紙を書く爲に。
(二)移る許り赤き―手が染まる程の眞赤に。
(三)よそへつゝ―あはれとも見よ―此の撫子の見て居る間に、段段成長して美しくなつて行く花をあの姫君に思ひよそへて、せめてはあはれと思をかけて下さい。
(四)只今御覽ぜさせばや―今すぐに御覽ぜさせばや―姫君を、あなたのお目にも此の撫子の位でも。
(五)例のやうに―いつものやうに詳しく、言葉多くは書いてなく。
(六)これにも―御前の壺なる―中君の方でも、御前の壺の前の庭で子供が庭に下して、草を引取つて居て、其の庭の草をさせて、手入れをさせて、中君は留められずに見て居る際なので。
(七)例ならず眼留められ給ふに―大納言の手紙に撫子を見て、眼留められて、大納言と中君とは違つて今日は書いつゝ、心が索かれた。
(八)對の君などもいと哀れに思ひ遣らるゝ―對の君なども、大納言の心中が哀れに同情せられる際なので。
(九)此の度は―今日は是非、大納言に返事をお書きなさいと勸めたが。
(一〇)如何でか―慎まーげにて―中君は何でかと慎まーげにて返事をしようかと、世間の人の様子で返事をお書きになるならばかつた。
(一一)此の後は―此の語は「かき絶えて」中君が返事をしようと思つたのに、その後は全く消息が絶えて。
(一二)憂束なさのみまさるに―以下大納言の―中君の居る部屋の方の彼方の―中君の居る部屋の方の格子の面に―格子の外に忍び寄る。
(一三)去年の此の頃―自分が始めて中君に逢つたのは、去年の今頃だつたと。
(一四)怨めしき風の音―人の心をかき亂す怨めしい秋風の音に、悲しさを催されて。
(一五)つくづくと寄り居給ひて―つくづくと思ひ餘つて、中君の部屋の格子戸の所に近寄つて。
(一六)言問ひ寄るべき―中君に入るべき方法案内を乞うて。
(一七)我だに―引歌未詳。「君はいかに寢覺すらめや思ひやる我だに夜をば思ひ明すや」の歌か。

いとよく似たりかしと、見守り給ふに、いと悲しければ、見餘り給ひて、移る許り赤き紙に、撫子を折りて包みて、

大納言「よそへつゝ(三)あはれとも見よ見るまゝに匂ひに增る撫子の花

只今(四)御覽ぜさせばや」など許り、例のやうに(五)言葉がちにもあらず、優に書き給へるを、(六)これにも御前の壺なる、童べ下して、草引きつくろはせて見給ふ程なりければ、例ならず(七)眼留められ給ふに、(八)對の君などもいと哀れに思ひ遣らるゝ御程なるを、對の君「(九)此の度は」とそそのかし聞ゆれど、(一〇)如何でか(一一)と慎ましげにて、聞え給はず。此の後は、さりともと思ひしに搔き絶えて、(一二)憂束なさのみまさるに、いとゞあくがれだちて、例の寢覺の夜な〳〵起き出でて、(一三)彼方の格子の面に寄り居〳〵し給ふ。中にも七月七日の夜、月いと明きに、(一四)去年の此の頃ぞかしなど思ひ續くるに、怨めしき風の音も物悲しきに、(一五)つくづくと寄り居給ひて聞けど、(一六)言問ひ寄るべき方なく、虫の音の亂るゝを、(一七)我だになど獨り言ち給ひて、格子をいと忍びつゝ打ち叩きて、

先づ物ぞ哀れなる。(一)かくのみ安氣なく思し怨みたる氣色なれど、(二)などかく思すべき、數多かゝづらひ通ふは世の常の男子い、さるなほ〳〵しき際こそかゝる筋をかく思ふなれ。ふさはしからずなど思せば、姫君はた一日の隔て、晝間の程も戀しく覺束なければ、大殿がちにのみなり給ひつゝ、枝さしぐめる程に通ひ給へるを、尋ね寇はせ給へど、げに其所にその人を思すとも聞かねば、いみじく嘆かしく、(三)舞の乳母の心焦られ靜めもあへず、思ひ言ふを、こなたには、聞くにもいとゞ煩はしきまゝに、御返などもいとゞ絶えてなし。覺束なくいぶせくて過ぎ行く慰めには、姫君をたゞ明暮抱き見奉らせ給ふ。宰相の君と云ふ人の、乳あゆる、御乳母に召したり。(四)御五十日百日など過ぎて、此の君眼もあやに、日に添へて光を添へおはする樣、餘りゆゝしきを、いとあはれと見つゝ、鼠鳴しかけ給へば、物語をいと高くしかけて、高々と打笑ひ〳〵し給ふにほひ、かの石山にて在るか無きかなりし火影に、が惡く思はれる程に美しくなるのを。(九)鼠鳴しかけ給へば―大納言が姫君に目をならして見せるとて。(一〇)物語ないと高く―姫君の樣。大納言に何かしやべりかけて。(一一)にほひ―姫君の顏色。(一二)かの石山にて―あの石山で、病に苦しんでゐた中君の燈下に見た樣つきによく似てゐるとも。

(一)かくのみ安氣なく思し怨みたる―大君に斷樣に、大納言が他に女あるらんと安心出來ぬやうに思つて、怨んで居る樣子であるか。(二)などかゝづらひ通ふ―大勢の女に關係するのは普通の男子の事。(三)數多かゝづらひ通ふは―大君は考へて居るのであらうか。(四)さるなほ〳〵しき際こそ―それも身分の低い女ならば、男が浮氣するのは、そのやうに嫉妬するとも云ふ事もあるであらうが。(五)ふさはしからず―大君の樣に高い身分の者がそのやうにはしたいなく、嫉妬をするとも云ふ事は聞かぬ。(六)姫君に似合はしくない事だ。(七)姫君にはまた一日でも見ない時には、書間一寸他所に出て居る間でも、戀しくて心配でならない。(八)枝さしぐめる程に―極く僅かに引き延つて。(九)寇―大納言は大君の所に行かず、いつも關白邸にまれ〳〵にあらせられる。(一〇)大君の所に通つて行かれるレみで、或は反對に頻繁ので。(一一)こなたには―中君の方では、その事を聞くと一層困つた事に思つて。(一二)御返なども―大納言の手紙に對して、返事をさし上げるやうな事は、全くなくなつてしまつた。(一三)舞の乳母―大納言の手紙に其所にその人を―實際何の人なのかしと云ふ所、大納言の愛して居られる女だとも一向嘆かないので大君は一層嘆かしく思ふ。(一四)宰相の君と云ふ女房が乳が流れ出るとも云ふので、姫君の乳母に召し出した。(一五)五十日百日―姫君の誕生後、五十日目の祝や百日の祝。(一六)此の君眼もあやに―此の姫君は、見る眼も不思議な程まで美しく。(一七)にほひ―姫君の顏色。(一八)係りゆゝしきを―却つて緣起

(一)いとなべて世の中怨めしく―世の中がすべて怨めしく思はれ、餘りにひどい事だと大君が怒つて居る樣子を大納言が見て。

(二)獨り侍りし程―未だあなたと結婚りしない前に、時々忍んで通つてゐた女がありまして。

(三)かゝる事のありけるも知らざりける程に、時々忍んで通つてゐた女がありまして。

(三)かゝる事のありけるも―そのの後その女と交際を絶つたので、此の樣な事の出來た事も知らなかつたのですが。

(四)殿に聞き給ひて―私の父がその事を聞きつけて、子供を引き取つたのでせうと思ひます。

(五)憎からぬ樣の―その子は見苦しくない容貌なので、父もいつくしんで居りますのに、何うしてと私一人がその子を見捨てまふ事が出來ませうか。

(六)さるべからむ事にこそ―その中よいあつたなら、是非あはせう。

(七)同じ御心に―私と一所にその子を愛してやつて下さい。

(八)打赤み―大君は泣いて涙に顏を赤くすりなして。

(九)年頃も同じ―あなたは今までも同じ―いつも、表面だけは何もなしいやつも、知らぬ顏を裝つて。

(一〇)世には物嘆かしげに―本當の情愛はなくて、たゞ物悲しさそうな樣子かして居て、何だか存じて居りましてゐる御心とは存じてそれの事となきには―大君の證據もないので、深く咎めて立てはしなかつたのですが。

(一一)姫君迎へられ給ひて後―あなたがその姫君を引取られたので、始めて私の身の不運なる事が情なくも思ひ知られて、安心の出來ぬ。あなたの御心では、ありますが。

(一二)生まれたる程を思せ―いやそのやうにあなたは思はれなれたお愛しはそのやうにあなたの女の事をあなたの當座が無理ですが。

(一三)怨むの生は私の方が無理ですが。

(一四)たとひさるにても男子は―まあたとへあなたが他に一人位女を圍つて居られても、其は男子が誰でもやる事ですかられど。

(一五)されど怪しく實法にて―併し私は不思議にもきまじめなどのやうにあなたに妻らしい取扱ひも受けず、日蔭者となつてしまつた身の上ですから。

(一六)人の心をおりて思し咎む―わざ〳〵人の心の中にまで立ち入つて人から惡く云はれるやうな行爲はまさか私は致しません。本によれば「折りて」

(一七)彼方打見遣られて―左樣に大君が大納言に怨言を云ふにつけても、顏を横にそもけつて悲しい心に襲はれるのである。

出で來る所もありけるを、知らざりけるよと、(一)いとなべて世の中怨めしく、物しげに思したるを、見給ひて、大納言は 大納言 「(二)獨り侍りし程、時々打忍びつゝ通ひし所に、(三)かゝる事のありけるも知らざりける程に、(四)殿に聞き給ひて迎へ取り給へりけるにぞ見侍る。(五)憎からぬ樣のしたれば、いかでか一人も思ひ捨て侍らん。(六)さるべからむついでに、いかでか見せ奉らん。(七)同じ御心に思せよ」と申し給へど、打赤みて、大君 「(九)年頃も同じのどめたる表面許りさりげなくて、(一〇)世には物嘆かしげに、靜心なげなる御氣色とは見つれど、(一一)さしてその事となきには、自ら深くも咎められ給はぬに、姫君迎へられ給ひて後、身の宿世つらく思し知られて、安氣なき御氣色を、わりなしや、生まれたる程を思せ、我が後か」と 大君 「(一二)たとひさるにても、男子はさのみこそ侍れ。(一三)されど怪しく實法にて、埋れ木などのやうになむ二字イナシなり侍りにし身なれば、人の心をおりて思し咎む許りの振舞はよもし侍らじ」と聞えても、彼方打見遣られて、

(一)此の局に来つゝ―此の後とも此の部屋にいつも来て、姫君の顔を見てやつて、しれ。

(二)ほの〴〵とする程―夜明方。

(三)かたじけなく―提れ多くも、大納言手づから少將を車に助け乘せて。

(四)をかしやかなる贈り物―風流な土産物を、行頼をして少將の車に入れさせた。

(五)出でたるに―車が動き出したので少將が後を振り返ると。

(六)心細げに見送りて―以下大納言の様。

(七)嵯峨野へ姫君さてのみも―廣澤の御堂には中君たそのまゝ留めておくわけにも行かないので、大納言の本宅に引き取らせた。

(八)少將参りて―少將は中君の所へ歸りついて。

(九)御文御覽ぜさす―大納言の手紙を中君に見せる。

(一〇)こまゝ〴〵に書き盡くして―詳しく情を籠めて様々の事を書き並べ、特に姫君の事を中君があはれに思ひ出すやうに書いてあり。

(一一)形身ぞと見る度ごとに―此の姫君をあなたの形身に思つてその顔を見る度に、あなたの事が思ひ出されて涙のみ袖に落ちかゝりますが、此の様な私達の縁は一體どう云ふ因縁から生れたのでしやう。

(一二)言の世さへ―前世の因縁までが怨めしい。

(一三)見ぬやうに―中君はその手紙を見ぬやうな風をして、ごまかしては居るが之をぬすみ讀む時。

(一四)忍草の露も―大納言を忍ぶ心は同じやうに中君の胸中にもわいて、涙の露がはら〴〵とこぼれて、涙の露がはらはし給へど、忍草の露も同じくほどけて四字イしほどけくかゝり給へど、御返までは思しも懸けず。贈り給へる物のこまやかに異なるを、日ぐらして對の君に見す。大殿には異事なく此の御かしづきを明暮し給ふ。御五十日の日を數へて、世のいとなみ、響を、かの御方には聞き給ひて、かゝる人に、準備をして大騒ぎをして居るのを、

(一五)御返までは思しも懸けず―此の姫君のお世話許りをいつもして居られた。

(一六)贈り給へる物のこまやかなどとは、中君は思ひもよらなかつた。

(一七)大殿には異事なく―關白の方では他の事は何もせず、たゞ

(一八)御五十日の日―赤兒出生後、五十日目の祝の日數を數へて。

(一九)世のいとなみ響み―世の中の人々がその五十日の祝の爲

(二〇)かの御方には聞き給ひて―大納言の御方には、北方、大君は此の事を聞いて。

(二一)かゝる人出で來る所も―此のやうに子供を生まるやうな女が、他にも聞いて居られたとは今まで知らなかつたと。

(一一)こつぼねに 此の局に來つゝ、絶えず見よ―とて、(二)ほの〴〵とする程に、行頼召して、車寄せ(三)せ給ふ。かたじけなく御手づから乘せ給ひて、(四)をかしやかなる贈り物、行頼してさし入れさせ給ひき。(五)出でたるに見返りたれば、(六)心細げに見送りて、柱に寄りかゝりて立ち給ひたるを、少將もあはれに見奉る。(七)嵯峨野へ姫君さてのみもえおはすまじければ、大納言殿に渡し奉らせ給ひてけり。(八)少將參りて、對の君に、日頃の物語、殿の宣ひし事など、打泣きつゝ語りて、(九)御文御覽せさす。(一〇)こまゝ〴〵細々と書き盡くして、姫君の御事哀れに思ひ給ふ許り書きて、

大納言 (一一)「形身ぞと見る度ごとに涙のみかゝるやなにの契なるらむ イなりけむ

(一二)昔の世さへ怨めしく」とあるを、(一三)見ぬやうに紛らはし給へど、(一四)忍草の露も同じくほどけて四字イしほどけくかゝり給へど、(一五)御返までは思しも懸けず。(一六)贈り給へる物のこまやかに異なるを、日ぐらして對の君に見す。(一七)大殿には異事なく此の御かしづきを明暮し給ふ。(一八)御五十日の日を數へて、(一九)世のいとなみ、響を、かの御方には聞き給ひて、かゝる人

(一七)大殿には異事なく―關白の方では他の事は何もせず、たゞ此の姫君のお世話許りをいつもして居られた。

(一八)御五十日の日―赤兒出生後、五十日目の祝の日數を數へて。

(一九)世のいとなみ響み―世の中の人々がその五十日の祝の爲に、準備をして大騒ぎをして居るのを。

(二〇)かの御方には聞き給ひて―大納言の御方には、北方、大君は此の事を聞いて。

(二一)かゝる人出で來る所も―此のやうに子供を生まるやうな女が、他にも聞いて居られたとは今まで知らなかつたと。

に御顔打見守りつゝ、火をいみじく見守り給ふを、關白「(一)こはいといみじき者の様かな」とて、(二)いとゞいみじく思したり。御乳久しくなりぬとて、乳母召し出でたれば、(四)いと顯證なる御前に、ゐさり出でたる頭つき、容體、(五)髪のすがりかゝりたる様、もてなしいと清らなり。やがて御前に臥せさせ給へるを大納言は見置き給ひて、(八)乳母の局におはして、少將にあはれなる事ども盡きせず宣ふ。大納言「御文參らせば、(一一)心に入れて傳へ奉りて、御返必ず申し勸めよ。(一二)さるべからむ隙には、なほ思ひ構へて、いたく搔き絶えぬ様にを。(一三)かくてのみは更にえ忍び敢ふまじ。(一四)世にたぐひなく、みだりがはしきやうなりとも、世のもどきをも、人の恨みをも知らず忍びて取り隱し奉りてんとのみ思ふを、(一五)同じ心に思ひたばかれ」など、泣く〳〵宣ひて、火近く取り寄せ給ひて、(一六)御文細かに書きも遣り給はず、押し拭ひ〳〵書き給ふ火影の、いとめでたきを、(一七)げに同じくは思もなくて見奉らばやと、口惜しく見守り居たり。大納言「(一八)此の御返必ず〳〵」と宣ひて、大納言「(一九)其所には、さりとも姫君をば思ひ捨てじ、

(一)こはいといみじき―これは大變美しいと赤兒の顔立だ。(二)いとゞいみじく―關白は一層孫を可愛く思つた。(三)御乳久しくなりぬ―長い間赤兒に乳を飲ませなかつたから、乳を飲ませまよと云ふので。(四)いと顯證なる御前に―大變に晴れやかな關白の御前に、乳母がそろ〳〵とゐさり出て來たその顔かたち。(五)髪のすがり―「すがり」はつがりに同じ。綱のやうに結ばれあふ事。或はさがりの誤か。(六)かゝりたる様―髪の毛が額際にかゝりつゝある様。(七)やがて―御前に臥せさせ―關白の命令で赤兒を寢させる様子を大納言は見屆けて。(八)乳母の局に―乳母は御前に召されて留守なので、少將一人殘つてゐる。(九)あはれなる事ども―物悲しい話をば果てしなく少將になさせる。(一〇)御文參らせば―私が中君に手紙を差し上げるからその時には。(一一)心に入れて傳へ奉りて―よく注意して私の手紙を中君に取次いでくれ。(一二)さるべからむ隙には―是非お書きになるやう、に勸めてくれ。(一三)かくてのみは更に―此の様に會があつたなら何程に、亂倫な事であつても。(一四)世にたぐひなく―たとへ世に例もない程に、亂倫な事であつても。(一五)世のもどきをも―世間の非難も人の恨みをも、構はぬ、中君を奪つて隱してしまはうと思つて居るが、(一六)同じ心に―自分の此の計劃に中君に逢はずしては全くやりきれない。(一七)御文細かに―中君宛の手紙、を大納言はこまかに詳しく書きかけたが、筆は一向進まずに涙をおしぬぐひつゝ書いてゐるその燈下の大納言の様子が、大變美しいので。(一八)げに同じくは思もなくて―少將の心。いかにも同じ事なら、何の心配もなくて此の方なら、中君の婿として見たいものだと、物事に思ふまゝならぬ少將は殘念に思つた。(一九)此の御返必ず〳〵―是非々々此の返事を中君から書いて貰つてくれ。(二〇)其所には―中君の所にはさりとも―幾ら何でも、お前は姫君をば見捨てはすまいから。

同意して、お前も計略をめぐらしてくれ。(一七)御文細かに―中君宛の手紙、を大納言はこまかに詳しく書きかけたが、筆は一向進まずに涙をおしぬぐひつゝ書いてゐるその燈下の大納言の様子が、大變美しいので。(一八)げに同じくは思もなくて―少將の心。いかにも同じ事な

ば、やがてその日と定めて、中宮より、渡らせ給ふべき稚児の御衣、櫛櫛、御押包みなど、いと麗しく白銀の箱に入れて、奉り給へまば、大納言かく聞し召し入るべき程にもあらぬを」と、かしこまり給ひて、御使に物被けさせ給ふ。少將歸りなむも心細く思さるれば、大納言彼所にも顯證なるべきにもあらず。送り給へ　とていておはす。丹波の乳母御送りに參る。西の對には、大納言殿の、音無の窓にし給へば、そなたの北の渡殿を乳母の局にしつらはせ給へり。そこに少將も下し据ゑさせ給ひて、大納言　「此所にかくて。聞えさすべき事ども有るを」とて、姫君御前に手づから率て奉り給ふ。上一所におはしまして、いつしかと抱き美しみ奉り給ふ。類なく美しく愛しと思さるゝに、男君二人、女はたゞ中宮一所おはしますをさう〳〵しく思し召さるゝに、思ふさまに女にてさへおはする嬉しき限りなきに、未だ見えぬ顔つきにて、二所して抱き美しみ奉らせ給ふに、いさゝか打泣きなどもし給はず、見知り顔

(一)やがてその日と―その日に赤児を闕白邸に引取る事に定めた。

(二)中宮より―下の「奉り給へれば」にかゝる。

(三)渡らせ給ふべき―今度闕白邸に引取られる赤児の着物、むつき、赤児を包む着物等を立派な裏の箱に入れて、中宮から大納言に差し上げた。

(四)かく聞し召し入るべき―その話でもございませんのにと、大納言は恐縮して中宮の御使には祿を取らせた。

(五)少將―姫君を見送つて來た中將の女房。

(六)心細く思さるれば―大納言は便りないやうに思はれたので。

(七)彼所にも顯證なるべき―闕白邸にお前が來ても別に人目に立ちもすまいから、赤児を見送つて闕白邸にゐらつしやいとの意か。或ひは「出ておはす」にて、少將をも連れて行かれたとの意か。

(八)いておはす―「奉ておはす」に

(九)音無の窓―不明。西の對の屋か。

(十)渡殿―廊下。但し廊下の左右には、女房の部屋が並んで設けられてあるもの。

(十一)そこに少將も―その北の渡殿の局に、少將なども事から下しりげなれど未詳。

(十二)姫君御前に手づから―姫君を大納言自ら抱いて、闕白の部屋へ連れて行つた。

(十三)姫君御前に手づから―姫君を大納言は少將に言つておいて、

(十四)上一所に―闕白と北方とが御一所に座つて居られて。

(十五)いつしかと抱き―母上が待ちかねた樣子で、急いで姫君を抱き取つてあやしていて居られた前に話すべき事があるからと

(十六)男君二人―闕白の子供。

(十七)さう〳〵しく―闕白の子供には女の子としては中宮唯一人なのを、物足りなく思つて居られた所に。

(十八)思ふさまに女にてさへ―大納言の子供がかねてからの希望通り、女の子であるので、親は此の上もなく嬉しくて。

(十九)未だ見えぬ―未だはつきりとは眼が見えぬ顔付で、の意か。或は又、「また見えぬ」にて、他に類のない可愛らしい顔付で、の意か。此の句は下の「いさゝか打泣きなども」の句に續く。

(二十)二所して―闕白と北方と。

(二一)見知り顔に―赤児い樣、闕白や北方の顔をまじまじと見知つて居る樣に、ぢつとその顔を見つめて。

でたくあらまほし。(一)御前なども數知らず參り集ひ、女房なども數多御迎へに參りたれば、(二)多く續きのゝしりて出で給ひぬる名殘ぞ譬へなきや。大納言は左衞門督と一つ御車に乗り給ひて、(三)留まり給ふ人の心苦しさを道すがら思せど、(四)心の鬼に御消息をだに聞え給はず、(五)かひなき御仲らひなり。

(六)姫君殿に渡し奉らんとて、殿に參り給ひて、(七)殿も出で給ひぬる間の、のどやかなるに、大納言「(八)わりなき事を常に勘當せさせ給ふがかしこさに、(九)御願ひのまゝなる者をこそ見給へ出でて侍れ。母は世をいみじく慎み侍る者の樣なれば、取り放ちて率て參りなむとするを、慎み思へるもいとほしくことわりなり。(一〇)唯今はそれがもとにありける」など大納言「(一一)いちじるかるまじく生し立てさせ給へ」と申し給ふを、(一二)聞き驚き給ひて、母上「(一三)何時ありける事ぞ。など今まで知らせさせ給はざりける。」大納言「此の朔日頃になむ生まれ侍りける。」母上「(一四)よも口惜しき邊には出で參うで來じと思し召せ」と聞え給へば、母上「(一五)さはれや、云ふかひなき際なりとも、珍しくさし出でたるいと嬉し」と宣ひて、(一六)殿にも聞え給ひて、(一七)晦日の日いと吉かりければ

(一)御前なども―先驅にたつ者も澤山集つて來て。
(二)多く續きのゝしりて―大勢の人々が續いて大騷ぎをして出て行つた後の寂しさは、譬へやうもない程であつた。
(三)留り給ふ人の心苦しさを道すがら―後に殘つてゐる中君の事が道中でも、心苦しく思ひ出されて。
(四)心の鬼に御消息をだに―氣が咎めるので、途中から手紙を中君にやる事も出來ずして。
(五)かひなき御仲らひなり―眞に張合もない二人の間柄である。
(六)姫君殿に渡し奉らんとて―中君の生んだ女の子を、大納言が父關白に引取つて貰はうと思つて。
(七)殿も出で給ひぬる間の―丁度關白も外出中でお留守なので、邸内は人も少く物靜かだつた。
(八)わりなき事を―子供を作れと父上がいつも無理な事を仰つてお叱りになるのが恐しいので。
(九)御願ひのまゝなる―御希望通りの子供を私が作り出したのです。
(一〇)母は世をいみじく慎み―その子の母は甚だしく世間を憚かつてゐる樣子ですから、私がその子を取り離して父上の所に連れて來ようとするのを嫌がり又尤もでもあります。
(一一)唯今はそれがもとに―唯今その子は、母の手元に居ります。
(一二)聞き驚き―大納言の母が。
(一三)何時ありける事ぞ―何時子供なりけとつくつたのか、何うしてたつのか。
(一四)よも口惜しき邊には―まさか私が言ひがひのない賤しい女に、子供などを生ませはすまいと思つて下さい。
(一五)さはれや云ふかひなき際なりとも―左樣たとへ賤しい身分の女に生れたのであつても、はじめてお前に子が出來たのは大變嬉しい事だ。
(一六)殿にも聞え給ひて―母上から關白にもその事を話して。
(一七)晦日の日いと吉かりければ―ト占はせて見ると月末が日がよかつたので。

(一)今までかくて侍るなり―そのお蔭で、今まで此の様に生きて居る事も出来たのだ。
(二)いかでも平かにて―何んなに成つても、無事に再会出来たら結構な事だ。
(三)淺ましく痩せ衰へ―中書が。
(四)あえかに―弱々しく。
(五)ともすれば―何うかすると氣絶してしまひさうな様子なのを、父大臣は見て、心苦しく思つた。
(六)一方ならずいみじく―大君が中君の病ずいによつて一方ならず心配した、今までの事なば中君に話したので。
(七)胸塞がる―中君は心苦しく胸が一杯になる。
(八)なほ世に永らへては―矢張自分は生き永らへてゐては、いつまでもこの様に心を苦しめてゐなければならないから。
(九)淺ましく痩せ衰へ―一層の事此の様な思ひした絶ち切つて、出家してしまひたい。
(一〇)入道の御心地は―父大臣は氣世にも中を慶はしく思つた。
(一一)此の御方にも―中君も此の所へ来て居ると大納言は聞くにつけても。
(一二)心の中はのどめ難く―心中はせき止め難い程までに逢ひたく思つたが。
(一三)久しくならせ給ひぬ―大納言が大君に云ふ言葉。永い間留守をあけておいでになつたから、早くお宅へお歸りなさい。
(一四)今はたゞ心のどかに―今はもう大臣の御病氣もよくなつて、安心な御様子で靜かにして居られるのだから。
(一五)渡り給ふとても―大君は本宅へ歸らうとする時にも。
(一六)姫君を諸共に彼所に―中君にも自分と一所に、本宅へお歸りなさいと大君は勧めたが。
(一七)なほ此の御有様の―私はもう少し父上の御傍に居りたく思ひますから、もう暫く此所に殘りませう。
(一八)入道殿もなほ例ならぬ―大臣も中君の来だ健康が恢復してが命からにて、今までかくて侍るなり。いかでも平かにて見え奉らんこそよからめ」と慰め聞え給ふ。淺ましく痩せ衰へ給ひつれば、あえかにともすれば消え入り給ひぬべきをいと心苦しく見奉らせ給ふ。大納言殿の上も来だこれにおはしましければ、一方ならずいみじく心の亂れつる日頃の事どもなど語り聞え給ふにも、胸塞がる心地すれば、なほ世に永らへてはかくのみ苦しかるべき心の中を、殘さずもがなとぞ厭はしく思さるゝ。入道の御心地は例様になりにたるを、さてのみやはとて大納言殿御迎へにおはしたり なり。此の御方にも渡り給へりと聞き給ふに、心の中はのどめ難く思されけんを、大納言「久しくならせ給ひぬ。さらば早く渡らせ給ひね。今はたゞ心のどかにかすかにてなむ侍るべきを」と勧め聞え給へば、渡り給ふとても、姫君を 大君「諸共に彼所に渡り給ひね」と聞え給へど、中書「なほ此の御有様の見奉らま欲しければ、今暫しかくて」と聞え給ふに、入道殿もなほ例ならぬ様を後めたく思して、留め聞え給へば、一所渡り給ひぬ。さは云へどももてかしづき聞え給へる様は、いとめでたく、大君お一人だけでお歸りになつた。
(一九)さは云へども―大納言は大君をさまで愛してはゐないと云つても、矢張よく大君の世話をして居られる様子は、實に立派な結構な事である。
ゐない事を心配に思つて、中君を廣澤に留めておいたので。

かしく思ふ。(一)中宮にはかくと先づ聞え給ひたりければ、(二)聞き置きしより心に懸りて、いかにと思ひつる事の、(三)嬉しく思ふ樣にもと喜び思したり。

(四)一條には、(五)渡り給ひにし事、大納言の思し宣へりし樣など、(六)人間に語り聞えさすれば、(七)をかしかりし樣をまた見ずなりにけるよとや思しやるらむ、答へはし給はで、涙の落ち給ふ氣色いみじく哀れなり。(八)いみじかりし程、惜しからぬ人六字イ知らぬ人に見えにしその程は、(九)物覺えず苦しかりしかば、耻かしさも如何にも覺えざりしを、今思ふにいと淺ましく、中將の君などの(一〇)憂き身の有樣を殘りなく知り扱ひ給ひしも、(一一)やう〳〵覺え給ふまゝに、耻かしく思されて、今も更にさはやかに起き上り、人に見え給ふ事なし。(一二)廣澤の御事許りぞ見奉らま欲しく覺束なげに思したれば、(一三)かくなむと聞き給ひて、渡し奉り給ふ。(一四)互に限りと思し限りし程、夢のやうに思し出でらるるに、(一五)あらぬ樣に變り給ひにけるを知らざりけるよと見奉り給ふに、(一六)眼も昏るゝ心地して、太政大臣「(一七)かく思されんにより、今まで見奉らざりつる。(一八)かゝる有樣になりたる

(一)中宮にはかくと―大納言は妹の中宮には既に、中君の子供をこゝへ連れて來たと知らせておいたので。

(二)聞き置きしより―中宮の心。かれ〳〵の事を何う始末をつけたいてよからうかと心配に思つてゐた事が。

(三)嬉しく思ふさまにも―思ふ通りに行つて嬉しい事だ。

(四)一條には―一條のお屋敷に於ては。

(五)渡り給ひにし事―姫君が他所へ連れて行かれた事。

(六)人間に語り聞えさすれば―女房達がお傍に居ない時に、對の君が中君へお話した。

(七)をかしかりしさまを―あの可愛らしい姫君の姿が、またと見ない樣なつてしまつたと中君は悲しく思つて居られるとのだ。

(八)いみじかりし程―中君の心。苦しみに於いて自分が病氣に成つた際に。

(九)惜しからぬ人に見えにしその程は―別に未練も居たいと思つてゐる人に逢つた方があるといふ事。

(一〇)物覺えず苦しかりしかば―苦しさの餘りに前後不覺の狀態だつたので、別に耻しいとも思はなかつた。

(一一)憂き身の有樣を―情ない自分の身の有樣を。

(一二)廣澤の御事許りぞ見奉らま欲しく覺束なげに思したれば―世話をしたり背樣を知つて、此の身の上を思ひ出して、氣下すつて、此の世話をしてくれる人の事も、次々に思ひ出してゐると。

(一三)かくなむと聞き給ひて―父大臣は中君が自分に會ひたがつてゐると云ふ事を聞いて、中君に呼び寄せた。

(一四)互に限りと思し限りし程―父廣澤に限りと思し限りし程、夢のやうに思ひ出された來た。

(一五)あらぬ樣に―父が以前とは違つた出家の姿に變つた事を、今まで自分は知らなかつたとは情ないと思つて、變り果てた父の姿を見ると。

(一六)眼も昏るゝ心地して―此の下脫文あるか。

(一七)かく思されんにより―自分の出家した姿を見たなら、お前がそのまゝ悲むだらうと思つて今までお前に逢はなかつたのだ。

(一八)かゝる有樣になりたるが―此の樣に出家したのも、命が生き延びたいからなので。

で起き上る事もなく、人に顏を見せた事もない。―ただ廣澤になる父の御事許りぞ。

(一四)廣澤にかゝつて仕方がないので、父大臣に會ひたがつてゐると聞き給ひて―父が自分に會ひたがつてゐる事を聞いて、中君に呼び寄せた。

(一五)かくなむと聞き給ひて―父大臣は中君が自分に會ひたがつてゐると云ふ事を聞いて、中君に呼び寄せた。

(一六)互に限りと思し限りし程―父廣澤に限りと思し限りし程、夢のやうに思ひ出されて來た。

(一七)あらぬ樣に―父が以前とは違つた出家の姿に變つた事を、今まで自分は知らなかつたとは情ないと思つて、變り果てた父の姿を見ると。

(一八)眼も昏るゝ心地して―此の下脫文あるか。

(一九)かく思されんにより―自分の出家した姿を見たなら、お前がそのまゝ悲むだらうと思つて今までお前に逢はなかつたのだ。

(二〇)かゝる有樣になりたるが―此の樣に出家したのも、命が生き延びたいからなので。

の恢復した今でも爽かな氣持

(一)しばし突い居給ひて！暫く膝なつついて座つて、姫君が中君に別れを告げて來るのを待ちながら。

(二)心安く並べて見る—中君と姫君と二人並べて、呑氣に共に暮すと事も出來ない私共の運命だ。

(三)さる世有りなんや—中君姫君と自分が三人で、一所に暮すやうな時節が來るであらうか來さうにもない。

(四)御佩刀取りて—いよ／＼大納言が立歸る時には、姫君の懐刀を捧げて、二人のお見送りに車に乘つて來た。

(五)さき事とは云ひながら—中將が若き事の世話をして下さるのは、當然の事とは云ひながら。

(六)侍はたゞ御德なり—赤兒の傍に付き添うて世話をして下さるのは、實に深い御恩德である。

(七)いかでかこれ人々しくしなし—一族の意味。

(八)あの御身近きれば—中君の傍近く付き添うてゐた人。

(九)殿に渡り給ふまでは—姫君を父關白の所へお連れするまでは、付添の人も少くて淋しいから。

(十)誰ばかりならんとゆ—誰と知る人あらじ—お前が中君の女房だなどと、氣付く人は居るまい。

(十一)しばし添ひてあれ—暫く姫君に付き添うて、私の乳母の家に來て居れ。

(十二)我もいと見捨て—我もいと少將姫君と別れて、ひとりくて覺束なく思しぬべき御氣色なめるを」と云ふに、大納言もしばし突い居給ひて、泣き給ふ。大納言「心安く並べて見るまじかりける契の程よな。さる世有りなんや」と宣へるに、皆人ども泣きぬ。少將御佩刀取りて、御送りに參る。中將のいと忍びて隱ろへて思ひ扱ふを、あはれに嬉しと思して、大納言「さるべき事とは云ひながら、侍ィ類はたゞ御德なり。いかでかこれ人々しくしなし立てゝ、見せ奉らせばや」と宣ひて、いと哀れと物を思し亂れたり。少將はあの御身近き人と思せば、いと懷かしく放ち難く思されて、大納言「殿に渡り給ふまでは人少ななるを、誰と知る人あらじ、しばし添ひてあれ」と留め給ふに、我もいと見捨て奉り難く覺ゆれば、留まりぬ。稚兒君前に臥せて、哀なる事どもを夜もすがら宣ひ、廣澤には、大納言「四日物忌去りてし給ふべければ」と云ひなして、姫君をつと添ひ抱き給ひて、つくづくと見奉り給ふ。主人の乳母喜びまどひて、御湯殿手づから參り騷ぎたる樣ぞいみじき。乳母、添ひ奉れる女房の有樣など、よろしきにはあらざめり。誰ばかりならんとゆ

(一)しばし突い居給ひて！暫く膝なつついて座つて、姫君が中君に別れを告げて來るのを待ちながら。

(二)心安く並べて見る—中君と姫君と二人並べて、呑氣に共に暮すと事も出來ない私共の運命だ。

(三)さる世有りなんや—中君姫君と自分が三人で、一所に暮すやうな時節が來るであらうか來さうにもない。

(四)御佩刀取りて—いよ／＼大納言が立歸る時には、姫君の懐刀を捧げて、二人のお見送りに車に乘つて來た。

(五)さき事とは云ひながら—中將が若き事の世話をして下さるのは、當然の事とは云ひながら。

(六)侍はたゞ御德なり—赤兒の傍に付き添うて世話をして下さるのは、實に深い御恩德である。

(七)いかでかこれ人々しくしなし—一族の意味。

(八)あの御身近きれば—中君の傍近く付き添うてゐた人。

(九)殿に渡り給ふまでは—姫君を父關白の所へお連れするまでは、付添の人も少くて淋しいから。

(十)誰ばかりならんとゆ—誰と知る人あらじ—お前が中君の女房だなどと、氣付く人は居るまい。

(十一)しばし添ひてあれ—暫く姫君に付き添うて、私の乳母の家に來て居れ。

(十二)我もいと見捨て—我もいと少將姫君と別れて、ひとり歸つてゆく氣にもなれなかつたので。

(十三)留まりぬ—大納言と一所に乳母の家に。

(十四)稚兒君前に臥せて—姫君を前に寢かせて、終夜大納言は少將と哀な話をして語り明かした。

(十五)廣澤には—廣澤なる大君の所には。

(十六)四日物忌去りてし—四日間物忌をしなければなりませんから、其がすんでからお伺ひ致しませうと廣澤には云ひつくろつて。

(十七)主人の乳母—此の家の主人なる大納言の乳母は、主人みづから湯を取つて姫君の產湯をつかはせたりして、騷いで居る樣子が甚だしい。

(十八)の乳母—姫君について來た右近の乳母や。

(十九)よろしきには—乳母や女房の樣子が立派だから、普通の身分の人ではあるまい。

(二十)誰ばかりならんとゆ—どれ程の立派な方のお腹に出來たのらうかと、主人の乳母は堪らの女を知りたく思つた。

はと、(一)切に思して宣ふ。(二)人の御世を今は限りにやと思ひとじめ(イし)程も、振延へ訪ねおはしたる御(三)心ざしの忍び所と思ふに、(四)物も覺えぬまゝに、(五)打解け入れ奉りしが、(六)今さへうけばりて、(七)さのみ待ちつけ、心安からん事は淺(八)ましき事に思ひ放れたるを、(九)身を去らぬ火影の堪へ難く思ひ出らるゝまゝに、(一〇)今宵さりとも必ずと、(一一)ありし習ひに心ときめきせられ給へるを、(一二)いと佗びしく怨めしければ、(一三)大納言「たゞ片時の程」と云ひ怨みられ奉りて、對の君「(一四)今宵は左衞門の督物し給ふらん。(一五)所狹くこちたかりし御有樣の輕ませ給へれば、(一六)何時もかばかり捨て難げなる人のおはしませば、(一七)自ら世の常にならせ給ひなば、(一八)さのみ人繁くも侍らじ」と慰め賴め聞ゆるに、げにさもある事と思しなして、夜いたく更けぬ先に、(一九)さらばとて、御車寄せさするに、對の君「あはれや、(一〇)昨日の御氣色さばかり心苦しげなりしを、(一一)今一度見せ奉らでや、(一二)さりげな

(一)切に思して―しきりに逢ひたく思ひ御世を―對の君を責める。(二)人の御世―石山世を―以下の心をあはせた時は、中言を中君に逢ひ永き事が出來ず、之が最早生此の世で居た時の別でもあり。(三)御心訪ねざたの忍び所―わざわざ來たその大納言の心に逢ふ事は目人目を忍んで中君に逢ふ事なとなるとなるとなる

唐衣、裳は同じ薄色、扇なども心ある様なり。中將君用意をさせたり。大納言は暮るゝも心もとなくて、御車に下簾垂懸け、女房車の様にておはして、御消息云ひ入れたれば、侍など侍ひて、宿直人侍ふめれば、人目も稀にのどやかなれば、女房の參るやうにて御車寄せたり。下り給ひぬれば、御殿油よき程にて、對の君對面して、日頃の物語などして、大納言「いづら」と宣へば、散米して率て出でたる乳母の樣眼安なィか めりと見ゆ。稚兒の君抱き移して見奉り給ふに、只今は何のあやめ見えぬ御顏なれども、眼も及ばず、夜光りけん玉はかくやと覺え給ふにィナシ、あはれに悲しとは世の常なり。角生ひたりけむ稚兒の樣しておはせんだにも、飽かず夢のやうなる契の形身ども打見む哀は淺からじを、押し量り思しつるよりもめでたく美しげなるにも、先づ知るものは留め難く覺ゆるを、大納言「今宵はいみじや、事忌みすべきものを」と押し拭ひ隱し給ひて、かの御有樣を、いかゞ、かゝるついでに覺束なくて

(一)同じ薄色―乳母と同じく薄紫色の裳。
(二)心ある樣なり―風情のある扇なれば、宰相中將が皆とゝのへたり。
(三)用意を―之等の女房達の着物用意を携へてゐる。
(四)心もとなくて―待遠しくて。
(五)御車に下簾垂懸け―大納言が一條の邸に向ふ體。自分の參るを外から見られぬ爲に簾垂懸け二重に下げる。
(六)女房車の樣に―女房の乘つて居る車の樣に裝つて、一條邸に參る。
(七)侍ひて宿直人侍ふめれば―護衛の男子や宿直人など控へて居るのみで、女房の參るには少く氣のおけない樣なので「女房の參るやうにて」は下の句で受ける。
(八)女房の參るやうにて―女房が來た風を裝つて、車を緣側に寄せさせた。
(九)御殿油よき程にて―燈火があまり明るくもなく、又暗くもなくよい程にかきたて。
(一〇)いづら―赤兒はいづれにあるか。
(一一)散米―米をまいて邪氣を拂ふ。赤兒を邪氣にあてない爲に、出産間もなくの時には當時よく行つたもの。
(一二)率て出て―乳母が赤兒を抱いて出て來た樣子。
(一三)抱き移し―乳母から抱き取つて。
(一四)只今は何のあやめ―今は未だ自分の體によく似てゐるか何かのけじめもよく分らぬ赤兒の樣であるが。
(一五)眼も及ばず―見極め盡くす事も出來ぬ程の、赤兒の美しさ。
(一六)夜光りけん玉―夜光珠、寶珠の名。夜光玉が發する玉。述異記に出づ。赤兒の美しさを譬へた。
(一七)角生ひたりけむ―此の兒に角形身と思つて、此の兒を見る時には深く情愛が催されるのに。
(一八)飽かず夢のやうなる―あのはかない一夜の契から生れ出たる愛兒と思しつるよりも―まして此の兒は想像以上に美しいにつけても。
(一九)押し量り思しつるよりもめでたく美しげなるにも、先づ知るものは留め難く覺ゆるを―先づ哀を知つて眼に浮ぶ涙の流れるのを留める事が出來ない。
(二〇)今宵はいみじや―今晩は赤兒の命を賭ける大切な日用度い日だ涙を流すやうな緣起の惡い事なしてはならぬ。
(二一)かの御有樣―あの中君の御有樣は、今何うして居られるであらうか。
(二二)かゝるついでに―此の樣な機會に逢はずして歸る事が出來ようか、是非逢ひたいものだと。

ても、すべきやうもなければ、(一)他所ながらもてかしづかれ給はむを聞かばこそよからめ。(二)他にかゝる人の出でおはせぬ先にと思ふものから、(四)いとあはれに打見守りつゝ、(五)母君をば今はいかゞ人見奉らんと、(六)思ふ事もなければ、(七)女房達數多に讓りて、(八)心知りの少將少辨などは打休むやうにて、西の對に入り居て、(九)御方諸共に、(十)乳母つくろひ立て、(十一)姫君の御襁褓御押し包みなど、なべてならず清げに仕立てゝ、(十二)薫物炷きしめて、(十三)姫君に湯など浴せ奉る。中將君も(十四)人知れずさゞめきいとなみ給ふ。藤の衣六ばかりに、(十五)紅の打ちたる(十六)青朽葉の織物の袿、(十七)撫子の唐衣、(十八)薄色の裳、(十九)宿直物に白き(二十)唐綾の袿五、女房二人、童は一人、下仕、(二十一)はした者清げなるなど、(二十二)目安き程に仕立てて渡し給ふ。(二十三)少將君は御送りに參る。(二十四)唐撫子の衣五許り、藤の織物の袿、若蝦手の

(一)他所ながら―よそながらも此の姫君が、大納言の御所で愛されてゐると聞くだけで滿足しよう。

(二)他にかゝる人の―大納言には未だ他の女に子供を設けてゐられないので、それよりも先に早く此の姫君を大納言に渡した方が、姫君の爲に幸福であらう。

(三)思ふもつから―對の君は左樣に思ひつゝも。

(四)打見守りつゝ―姫君のあはれに、お可哀相な事だと見つめる。

(五)母君は今は―少將少辨の心中は他の女房達が傍に近づいても今は怪しむやうな所もなく、お腹も平常の通りになつて居るのだから、

(六)思ふ事もなければ―母君につては、別に心配すべき所もないので。

(七)女房達―他の秘密を知る女房達の數多に、中君のおほぬ世話を任して。

(八)心知りの少將少辨などは―事情を知りつゝ、ねるやうな風をして。

(九)御方諸共に―對の君諸共に。

(十)乳母つくろひ立て―乳母の裝ひ。

(十一)姫君の御襁褓―襁褓は産衣の事。姫君には産衣を着せたり。

(十二)薫物炷きしめて―着物に香の匂ひをつけて。衣裝に匂ひをつけるは、香を炷いてその煙を上にそのまゝ着物を載せて匂ひをつけたり。之を「炷きしめる」と云ふ。

(十三)人知れずさゞめきいとなみ―人知れずひそかにそは〳〵しく、おのづから手傳ひをしてゐる。

(十四)藤の衣―襲の色目の名。下に出づ。これは五衣の樣。以下は姫君の乳母が今までの汚しい裝束を脱いで、代りに美紅の打つたる。紅色の着物を打つたる。紅色の着物を出したもの。

(十五)青朽葉―襲の色目。表縦青、裏黄色の糸にて織りたるもの。

(十六)撫子の―襲の色目。表縦青、裏黄色の上着で、禮式の日には此の上に裳唐衣をつける。

(十七)袿―婦人の上着。

(十八)裳―襲の色目。表紅梅、裏青。

(十九)薄色の―薄紫の。

(二十)宿直物の料に―夜赤兒の添寢をする時、宿直をする時に着る着物。

(二十一)唐綾―團なども云ふ。

(二十二)はした者―下仕と共に、女房の中以下の賤しき者を云ふ。

(二十三)目安き程に―見苦しくないやうに衣裝を着せて、大納言の邸に引き渡す。

(二十四)少將君は―女房の少將は赤兒を見送つて、赤兒を引き取る。大納言の乳母の家へついて行く。

(二十五)唐撫子の色目の名。―少將君の衣裝。表も裏も紅色なるもの。これは五衣の樣。

(二十六)藤の―襲の色目。表薄紫、裏青。又は表紫。

(二十七)若蝦手の―襲の色目。表薄青、裏紅梅。又表薄青、裏紅梅。

(一)出で給ふ―中君が石山から歸京する。
(二)御迎の人々も―太政大臣邸から来つた迎への人々にも。
(三)障る事ありて―中君に急に散障る事が起つたから歸るのだと云ひつくろつて。此の詞は前に太政大臣のつくつて渡し奉れ―とあつたのを受けて渡るべき―障る事―は或は月の障りの事かも知れぬ。
(四)品々物賜はせ―色々の品物を餞美に賜はせ―餞美に與へて。
(五)御修行など―中君平癒の爲の行法を行はせられた。
(六)本の御車には―中君の乘る車には、少將少輔が同乘。
(七)御方―貴の君。
(八)立ち遲れ給ひつゝ―中君達の車から離れ。
(九)覺束なし―中君の事を心配してゐる女房達が、此の一條邸に集つて。
(一〇)御氣上―中君は途中でのぼせ上つてしまつたので。
(一一)臥し給ひぬ―一條邸につくと直ちに臥してしまつた。
(一二)御前に人々侍へど―中君の寢所の傍近く、女房達が控へてゐるけれども。
(一三)今は心安く―すでに分娩してお腹も小さくなつてゐるので氣安く思ふ。
(一四)立ち遲れ給ひつる―乳母と赤兒の乘つて居る車。
(一五)かう―忍びやかに―中君歸京の樣々な行幸が大納言に語る所樣々な行幸で、姫君と乳母達が乘つて居る車には人目を忍んで。
(一六)大方にも安らせ給はず―少しも中君一行の車には人目を忍ぶとはかたじけなく―いとしい事だ。
(一七)始めたる歩きは―始めて太政大臣の孫に當る姫君が、外出する時に仰々しく立派な有樣であるのに、その樣に人目を忍ぶとはかたじけな

いみじく哀なるを、見奉る人もいと悲しくて、皆泣きぬ。

(一)出で給ふ曉には、御迎への人々も、(二)障る事ありて出で給ふ」と云ひなして、此の僧ども、別當を始めて、(三)品々物賜はせ、(四)御修行などせらる。(五)奉る御車には少將少輔乘る。次には人々の車、今一つには今の乳母姫君抱き奉りて、(六)御方添ひて、(七)立ち遲れつゝ忍びやかに續けたり。逢坂の關の程にぞ左衛門督御迎へにおはしたる。一條殿の荒れたる所修埋し掃き清めしつらひて、(八)覺束なしと思ひ聞ゆる女房達集まりて、待ち奉る。道の程御氣上りていと苦しく思さるれば、(九)臥し給ひぬ。(一〇)御前に人々侍へど、今は心安く嬉しかりけり。(一一)立ち遲れ給ひつる車西の對の南面に寄せさせて下りぬ。大納言殿より石山に例の行賴奉らせ給ひつるが、殿に歸り參りて行賴(一二)かう〳〵忍びやかに、大方にも交らせ給はず、立ち遲れつゝなむ」と語り申せば、大納言「あはれや。(一三)かたじけなく。(一四)始めたる歩きは事々しくこそあるものなめれ」と宣ひて、いと涙ぐましく思したり。大納言「(一五)夕さり彼所へ行かむ心してあれ」と仰せらる。(一六)一條にやがて大納言「日もよければ迎へに參り來べき」と宣ひつるを、(一七)いかゞは惜しみ聞え奉り

(一八)夕さり彼所へ―夕方に一條の中君の所へ姫君を迎へに行くからその用意をしておけ。
(一九)一條にやがて―一條の中君の所にも直ちに、今日は日がよ
(二〇)いかゞは惜しみ聞え奉りても―幾ら姫君を手放す事を惜しんでも、他に致し方も無いのであるから。
(二一)いかち姫君の迎へに行くと知らせてやつたから。

その夫子を生ませて程なく人の婿になりにければ、ありにくゝはしたなく覺えて、世の憂き目見えぬ山路と思ひ入りて、つれ〴〵と眺むるを、中將の君「かくてあるよりは、世に惡しからじ」と宣ひて、御乳參り給ふ。髮容貌淸らにて、君に具し奉りて、晴がましからんに恥なく、目安き樣したり。君は消え入るやうに見え給へど、京に出で給ふべければ、御湯など召して、姫君にも浴せ奉りて、めでたき御樣に、世の愼ましさも忘れて日頃抱き扱ひ奉るに對の君「引き離れ奉りて、如何に戀しくつれづれならん」と、少將と二人語らひ合はせて、打泣きて、母君の御傍に臥せ奉りて、思ひ給ふれば、萬こそ慰み侍りぬれ。迎へ給ひなば、いかでか見奉らせ給はん」と差し寄せたるを、消え入るやうにのみしつゝ、何事もはか〴〵しく思ひ分れぬに、いと耻かしけれど打見遣られて、げにをかしげの顏やと見給ふに、深く思ひ續くる事はなけれど、涙の流れ出でぬるに、はしたなく覺えて、顏を引き入れ給ふ氣色の

(一)人の婿に—その夫は此の乳母が子を生むと間もなく、他の家の婿になつたので。(二)めりはしたなく—その男が惡しとおもつたので。(三)世の憂き目見えぬ—女は世間離れた山の中へと志して、此尼君の所へやつて來た。(四)つれ〴〵と眺むる—物淋しさに、物思ひに恥つて居るので。(五)世に惡しからじ—そんなにぶら〳〵して居るよりは、此の赤兒の守をした方が、お前の爲に大變よろしかろう。(六)君に具し—赤兒に具しつき添うて。(七)晴がましし—人々の前へ出しても恥づる所もない程に、見苦しくない樣子をして居る。(八)消え入るやうに—此の句は、下の「御湯など召して」にかゝる。(九)御湯など召して—行水をつかふ。(一〇)世の愼ましさも忘れて—對の君は子供の美しい樣に、人眼を忍ばなければならぬといふ事も忘れて、赤兒をいつも抱いて世話をしてゐるので。(一一)引き離れ—若し此の姫君におはしたなら、何んなに戀しく思れきふだらうかと。(一二)少將と二人—對の君は、中君お付の女房の少將と二人で。(一三)臥せ奉り—赤兒を中君の傍に寢させて。(一四)かゝる人の御宿世にて—あなたが、意外の御心勞をおかけ申すのも、かういふ美しい人を生まうが爲であつたと思へば。(一五)萬こそ慰み侍りぬれ—何事も氣が紛れて居りましたが。(一六)迎へ給ひなば—大納言が此の子をお引取になつたなら。(一七)いかでか見奉らせ—何うして再び出來ませう赤兒の子顏を御覽になる。(一八)差し寄せ—赤兒を中君の傍へ。

(一九)何事もはか〴〵しく—中君は悲しさの餘り今にも氣絕するやうな樣子で、全く理性を失つてしまつたやうだつたが。(二〇)對の君の云ふまゝに耻かしけれど—それでも赤兒の方に顏を向けて。(二一)げにをかしげの顏やと—如何にも美しさうな顏だと、赤兒を見て居る中に。(二二)深く思ひ續くる—別に深い物思ひの餘くる。(二三)上げて來たわけ—悲しさがこみ上げて來たわけではないが。(二四)顏を引き入れ—中君は顏を着物の間に入れて、隱したその樣子が。

ら侍らん」と聞ゆれば、大納言「それはなどてか。男子の故は何れも〳〵人の知り難きものなれば、ともかくも紛らはし侍りなむ。さしてさならんと思ひ寄る人あらじ。それをきへ引き隔て、打忍びてはいかゞ」と宣ふまゝに涙の落つるを、道理なれば、宰相中將「彼所には猶えおはしまさじ。とかく紛らはして、一條に率て渡し奉るべく侍るを、その程に迎へ奉らせ給へ」と申し定めて出で給ふを、稚兒のやうにいと羸はしげに見送り給ふ氣色はいと哀れにいとほしげなり。

石山におはしつきて、入道し給へるとは聞かせ奉らで、よろしくなり給へるよしを聞え給へば、いと弱げにて嬉しと思したり。大納言殿の宣ひつる事對の君に語り給ひて、此の君見奉り給ふに、いと美しげなれば、宰相中將「昨日一昨日の程に勝り給ひにけり。ことわりかな。誰に似てかよろしくは生ぬれ出で給はん。あはれかゝる御樣にていみじく人の心をまどはし給ひつるかな。これをあらはれて大臣の君に見せ奉らばや。如何に愛しく思されん。よろづさもかひなく闇の夜の心地するかな」と云ひ合はせ給ふ。御乳母は此の主の尼君の女、人の妻になりて迎へられて有りけるが、

(一)それはなどてか—それは無論の事。(二)ともかくも紛らはし—何とかそれとも立つてあらうが、男子であるから誰でも皆人知れず女と關係して、子を設ける位の事はするものであるから。(三)ともかくも紛らはし—何とかそのの赤兒の身については、誤魔化してしまひませう。(四)それをきへ引き隔て—中君は云ふまでもなくその赤兒にも逢ふ事が出來なくては、何うして默つて忍んで居る事が出來ませうか。(五)彼所には猶えおはしまさじ—兎に角あなたは石山においでになつてはいけません。(六)とかく紛らはして—その中機會をとかく見て、一條の屋敷へ赤兒を連れて行く積りですから。(七)その程に迎へ奉らせ給へ—その際に赤兒を引き取つて下さい。(八)稚兒のやうに—大納言の樣。(九)よろしくなり—父大臣の病氣が。(一〇)いと弱げに—中君の樣。(一一)此の君—中君の生んだ赤兒。(一二)昨日一昨日の程に—二三日の間に、隨分立派になられたものだ。(一三)ことわりかな—大納言と中君との間に出來た子だから、美しいのも尤もだ。(一四)誰に似てかよろしくは生ぬれ—大納言や中君に似たならば、平凡な容姿を以つて生れて來る筈はない。(一五)あはれかゝる御樣にて—此の事を秘密にして居なければならぬとは、如何にも日陰たい樣に美しく生れて來られたものを、胎内にある時は隨分人の人に心配させた事だ。(一六)これをあらはれて—父大臣に公然と此の子をお見せ致したいものだ。(一七)よろづさもかひなく—總ての人の妻になつて迎へられて有りけるが。(一八)云ひ合はせ—對の君達と。(一九)御乳母—中君の赤兒の乳母。(一〇)此の主の—此の草庵の主人なる尼君の娘であつて。(二一)迎へられて—人の妻になつて出産のかひもなく、世間が闇の夜になつたやうな心地がする。その夫の家に引き取られて同棲してゐたが。

思ひなさるゝなかにも、姫君の御事は猶打交りつゝ、中將を召し寄せて太政大臣「石山に參うでて『心地はやみたるによろしくなり侍りたり。とく强り給ひて相見むと思せ。』かく樣變りとな聞かせ奉りそ。左衞門督は世の道理たてたる人にて、心苦しく思ひ留めたる氣色事にふれてなかめり。朝臣だにその君相思ひ聞えよ」とて打泣き給ふ。いと悲しと見奉り給ふ。罷出給ふを大納言見給ひて、我もとく行き逢はまゝ欲しき御心焦られに、大納言「明後日許り又參らん。かくてもやがて侍ふべけれど、內に奏すべき事ども侍る程なれば」とて、大殿に參り給ひて、宰相中將を呼び給ひて案內問ひ給へば、詳しく聞えさす。大納言「何日か出で給ふべき。」宰相中將「道の程も消え入る許り弱氣にて物せらるれど、左衞門督なども物せられなむ。さてはえ侍るまじければ、相助けて明後日許りなど思ふ」と聞え給へば、大納言「その侍らん人はさていかでかもて隱し給ふ方侍らじを、迎へてんと思ふを、そちこそ參らんと思へ」と宣へば、宰相中將「げに紛らはしにくき御有樣にこそ侍るめれど、さても物の聞えは自

(一)猶打交りつゝ―中君の事だけは、氣にかゝるので。(二)石山―中君に參うで、中君に傳へて下さい。併し私が出家したとは申しまいな。(三)心地はやみたるに―私の病氣も直つたので、大變氣分がよくなつた。(四)とく强り給ひて―早く丈夫になつて。(五)世の道理たてたる人―理窟ばつた人。(六)心苦しく思ひ留めたる―左衞門督は中君を可愛想に思つて氣をつけてやる樣子が何事につけてもない樣に思はれる。(七)朝臣だにその君相思ひ聞えよ―お前だけでも、中君を大切にしてやつてくれ。(八)我もとく行き逢はまゝ欲しき―大納言自身も早く石山に行つて、中君に逢ひたいと思つて氣がいらゝしてゐるので。(九)「心焦られ」は、下の「大殿に參り給ひて」と云ふ句に掛かる。(十)明後日許り又參らん―大納言が早くそこを行き度いと爲に、口實を作つて太政大臣に云ふのである。明後日までお何ひ致しませう。(十一)かくてもやがて侍ふべけれど―此のまゝおそばに居りたいのですが。(十二)內に奏すべき事―帝に申し上げる事があります。(十三)大殿に―自宅の關白の家へ歸つて。(十四)宰相中將―大臣の邸を出て來た宰相中將を自宅へ呼びよせて。(十五)案內―中君の樣子を。

(十六)何日か出で給ふべき―中君は何日頃石山からお歸りになるか。(十七)さては―その中左衞門督などが見舞に來たならばそのまゝで放つておいては秘密が曝れるから、人と助け合つて、明後日頃に中君を連れ歸る積りです。(十八)その侍らん人は―中君に生れた子供は、何うしても隱してしまふ方法がないであらうから。(十九)迎へてんと―自分の所に。(二十)そちこそ參らんと―お前が私の味方になつて、私の所へ赤兒を連れて來ようと思つて下さい。(二十一)げに紛らはしにくき―いかにも赤兒は隱してしまふ事は出來ないものですが。(二十二)さても物の聞えは―あなたの所に赤兒を引き取つて貰つても、世間の評判は何うしてもたつてありませう。

(一)聲たゞ變りに變りて―聲が涙聲に全く變つて。
(二)心ざしある人の上と聞くに―大納言の事だと言しまつて、思ひ侍らん限り―思ひ侍らんの事も、涙の流れしるまで留めへる事なが出來なかつた。
(三)世に生き廻らひ侍らん限り―私の生き廻らひ侍らん限りは、充分な事ある限りは、心の及ぶ限りその方のお世話を致しませう。
(四)淺からぬ心のまゝに―深く中君の事を思ふつてゐるその心の思ふつぼなので、早速承諾した。
(五)御處分ども―遺産分配の際にも。
(六)えさらず―やむを得ずして。中君に許り財産を分けてやりたいが、さうも出來ず仕方なく。
(七)此の殿には―太政大臣は、大君に値打のない帶や太刀等を與へて。
(八)先代の御世より―先祖代々傳つて來た物は全部。「ここまか」の句は、下の「たゞ姫君に」に續く。
(九)これは―とのみ―とのみ思すとも―たとへ大納言が中君だけにそんな立派な物をやるとは、これは意外だと思ひになつても構はぬ。
(一〇)御莊も勝るにて―諸所方々にある莊園なども勝るにて中君には一番餘計にやつて。
(一一)たゞ姫君の御料とのみ―其等の家の費用なども、皆中君の財産だと證文に書き記して。
(一二)時の花を飾す―左衛門督の性

夜半の寢覺卷二

入れ、御用意せさせ給へ」と宣ふまゝに聲たゞ變りに變りて、いみじく思したる氣色なるを、たゞ大方にて遺言を聞かむだに哀なるべし。心ざしある人の上と聞くに留め難く、ためらひやり給はず。大納言「世に生き廻らひ侍らん限り、はかゞしからずとも、心の及ばむ限りは後見聞え侍らん」と、淺からぬ心のまゝに受け申し給ふを、いと嬉しと思しためり。御處分どもを分ち給ふにも、えさらず、此の殿は、大納言殿の上に淺はかなる帶太刀やうの物どもは搔き分かちて、先代の御世より傳はり物どもはこまかに、これはと思すとも、御莊も勝るにて二字イは、たゞ姫君の御料とのみ書きて、左衛門の督に見せさせ給ふ。情けだちたる心ばへはなく、時の花を挿す心ばへある人にて左衛門督「などいとおとなさりには思し分かたせ給ふ。大納言殿の見聞き大殿の聞かせ給はむ所も有り。猶少し讓ろへさせ給ふべくや侍らん」と申し給へば、太政大臣「などてかそれは大納言殿の上をばかく見奉る。賴りなきが寄る方なからんこそいとほしかるべけれ」と宣ふを、男子と云ひながら、我が方樣を思ふ。百の品かくなしつ。本意の如御髮剃させ給ひて、戒の力にや御心地もさはやかに、萬清しく

(一)たゞ變りに變りて―聲たゞ變りに變りて、いみじく思したる氣色なるを、たゞ大方にて遺言を聞かむだに哀なるべし。
(二)心ざしある人の上と聞くに留め難く、ためらひやり給はず。
(三)世に生き廻らひ侍らん限り、はかゞしからずとも、心の及ばむ限りは後見聞え侍らん。
(四)淺からぬ心のまゝに受け申し給ふを、いと嬉しと思しためり。
(五)御處分どもを分ち給ふにも、えさらず、此の殿は、大納言殿の上に淺はかなる帶太刀やうの物どもは搔き分かちて、先代の御世より傳はり物どもはこまかに、これはと思すとも、御莊も勝るにて二字イは、たゞ姫君の御料とのみ書きて、左衛門督に見せさせ給ふ。
(六)えさらず、此の殿は、大納言殿の見聞き大殿の聞かせ給はむ所も有り。
(七)猶少し讓ろへさせ給ふべくや侍らん。
(八)賴りなきが寄る方なからんこそいとほしかるべけれ。
(九)我が方樣を思ふ。
(一〇)百の品かくなしつ。
(一一)戒の力にや御心地もさはやかに、萬清しく

(一二)山大君の方にお與へになつたがよいと思ひます。
(一三)などてかそれは―何うしてお前は、大君の事をその樣に云ふのか。
(一四)賴りなきが―賴る人もなく、寄る邊もない中君に同情すべき筈だ。
(一五)猶少し讓ろへさせ―も少し澤質。妹の身を思ふやうな人情はなくて、たゞ一時の榮華を盡したい性質の人なので。
(一六)おとなさりには―何故姉よりも妹の方に、多くのものをお分ちになるのですか。
(一七)大殿―關白。
(一八)猶少し讓ろへさせ―も少し澤山大君の方にお與へになつたこの樣に御處分になつた。
(一九)御髮おろさせ給ひて―大納言は、希望通りに髮を剃つて。
(二〇)戒の力―受戒したせいか、病氣が大いに快方に向つた。

あらず。(一)おの〳〵かばかりになりぬれば、深き過失なくて、命だにあらば、(二)おいづから成り上りなむ。(三)大納言の北の方は唯今の定にては後めたかるべきにあらず。(四)まことにすぐれて深き御心おはせずとも、(五)おはしつきなむ。(六)心をもて輕め思すべき人ならず。(七)幼くより此の君をぞいと心苦しく思ひ聞えつるに、(八)はか〴〵しく見る事もなくてやみぬ。(九)ごくらくさまたげ極樂の妨ともこれぞなるべき。我を思はゞたゞ(一〇)此の君の御事をいかでと思へ。(一一)此の世に別るとも、(一二)隱れず天馳けりて見む」と宣へば、(一三)君達いみじく泣き給ふ。(一四)大納言近く入れ奉りて、出家の本意遂ぐるよしを申し給ひて、(一五)太政大臣「身に殊に思ひ惱む事も侍らず。子供とて侍れど、男の子どもは宿世に任せてあれど、もとより思ひ放ちたれば心安く侍り。殿に奉りて侍る人は、(一六)今日までかく時々おはしますめれば、さりともよもむげに思し捨てさせ給はずやと深く賴み侍り。(一七)その中に自ら聞し召すらん、付く方なき女一人なむ侍るを、(一八)眼の前に空しくなり侍りなばなか〳〵心安かるべきを、(一九)若し永らへ侍らばこれなんいと心苦しく思ひ給へ侍る。(二〇)必ず聞し召しまつたなら、(二一)寧ろ私には安心に思はれる事でありませうのに。(二二)若し永らへ侍らば—若しその子が今のやうによくなつて命が生き永らへるなら、その將來が心掛りです。(二三)必ず聞し召し入れ—何うか是非私の云ふ事を聞き屆けて、その子の事をよく氣をつけてやつて下さい。

(一)おの〳〵かばかりに—お前達兄弟は是程までに成人したからには。
(二)自ら成り上りなむ—自然と官位が昇進して出世するであらう。
(三)大納言の北の方は—大君も今の身の上では、別に心がかりな事はない。
(四)まことにすぐれて—大納言が特に深く大君を愛しては居なくても。
(五)おはしつきなむ—大納言の尻は、結局大君の所に落ち付くであらう。
(六)心をもて輕め思すべき—大納言はなほ心から、大君を輕蔑した行爲をするやうな人でない。
(七)幼くより此の君をぞ—其で他の兄弟達は皆安心だが、只此の中君だけが、中君が未だ子供の時から心を痛めてゐたのだが。
(八)はか〴〵しく見る事もなくて—逢に中君が立派に身を固めたのを見ないでしまつた。
(九)極樂の妨なので—此の中君の事が心掛りなので、自分が極樂に行く佛道の修行をするのに障害となるであらう。
(一〇)此の君の御事を—中君の事を何うかして幸福にさせようとお思ひなさい。
(一一)此の世に別るとも—たとへ自分は死んでも、自分の魂は隱れずに空中からよく見て居るぞ。
(一二)君達—左衞門督。宰相中將。
(一三)大納言近く入れ奉りて—大納言なも、大臣の傍近くその部屋の中に召し入れて。
(一四)身に殊に思ひ惱む—出家しても、別に私の身に後に心掛りな事もありません。
(一五)男子どもは—男子は運次第で仕合せがよくも惡くもなるものですが、男子の事は以前から念頭に置いてもぬないので出家しても別に心掛りな事はありましたせん。
(一六)今日までかく時々おはし—大君はあなたが今日まで、斯樣に時々來ては見てやつて下さいますので。
(一七)その中に自ら聞し召すらん—之等の兄弟達の中で、自然とお聞きになつた事でございませうが、未だ身の振方のきまらない女が一人ありますが
(一八)女一人なむ侍る—中君。
(一九)眼の前に空しくなり侍りなば—その子が今眼前で死んでしまつたなら、
(二〇)若し永らへ侍らば—若しその子が今のやうによくなつて命が生き永らへるなら、その將來が心掛りです。
(二一)寧ろ私には安心に思はれる事でありませうのに。
(二二)必ず聞し召し入れ—何うか是非私の云ふ事を聞き屆けて、その子の事をよく氣をつけてやつて下さい。

(一)身には頼もしげありとは—私自身には別に將來の身の上が安心だと思ふ事も出來ないやうな冷淡なあなたの心持であります。

(二)一人は寄る邊ありとは—大君自身の事を指す。父上は私には夫もつて居るから安心だと思つて居られる樣ですが、其が返つて人眼にはお氣の毒に見えますよ。

(三)おいらかならぬ氣色—さういふ大君の樣子に、おだやかないらぬ氣色が見えるので。

(四)近江の海の事—石山でひそかに中君に逢つた事を思ふと。

(五)數ならぬ身の際より外は—私の身分だけは眞に頼もしい事なれば、其より外に頼もしく私の何うさせふんが、其所が頼もしく思つて居られるのでせにうかの心中は何もあなたに心配させるやうな、やましいの。

(六)急ぎ參りたるを—宰相中將が石山から歸つて來たのを、大納言が參りたいのを。

(七)納言なる—中君の病氣や大臣の出家の事等に見付けぶかき事ども—中君の氣掛りな心配な事が多いので人々があれば、中君の事を詳しく問ふ事も出來ず。

(八)たゞ大方に—たゞなつけて—たゞ大方に眼をつけて見おこせ—し給ふを、中將は心得ながら、便なくて得聞えず。大臣の御前に召し寄せて大政大臣(九)如何に其後は」と問ひ給ふ。宰相中將「一昨日許りよりは少し宜しき氣色になり給ひて、殿の御事をいと覺束なげに思ひ聞え給ふめるになんくづほれ給ふと見え給ふ」と申し給へば、(一〇)先づ打泣きて、大政大臣「我も覺束なけれど、見奉らば、いとゞしく留まりぬべし。佛の御驗いと尊し。今暫しさはやげて渡し奉れ。我がかくなりぬとな聞かせ奉りそよ。今人のいとゞ至もなく思はむに、(一一)又心地まさりもぞする。我が身は今は世に交らふべきにもかゝるついでにと思し立つになん侍る。身には頼もしげありとは覺えぬ御心ばへを、一人は寄る邊ありとのみ思したるこそ人眼なか〳〵にかたはら痛けれ」と宣ふが、おいらかならぬ氣色も、近江の海の事にと思ふには心騷ぎせられて、大納言「數ならぬ身の際より外は、何とか頼もしげなき節とは御覽ぜらるらん」と許り言少ななり。宰相の急ぎ參りたるを打見付け給ふに、覺束なくいぶせき事どもの騷がしく紛れて、えも問ひやらず、たゞ大方に眼をつけて見おこせ—し給ふを、中將は心得ながら、便なくて得聞えず。大臣の御前に召し寄せて大政大臣(九)如何に其後は」と問ひ給ふ。宰相中將「一昨日許りよりは少し宜しき氣色になり給ひて、殿の御事をいと覺束なげに思ひ聞え給ふめるになんくづほれ給ふと見え給ふ」と申し給へば、(一〇)先づ打泣きて、大政大臣「我も覺束なけれど、見奉らば、いとゞしく留まりぬべし。佛の御驗いと尊し。今暫しさはやげて渡し奉れ。我がかくなりぬとな聞かせ奉りそよ。今人のいとゞ至もなく思はむに、(一一)又心地まさりもぞする。我が身は今は世に交らふべきにもて、その爲めに弱り込んだやうに見えます。

(一一)先づ打泣きて—大臣が其を聞いて泣きながら。

(一二)我も覺束なけれど—私も中君なのが氣にかゝるが、併し中君の事は何に其後は—中君の病狀は大納言の心中を合點して中將も大方に眼をつけて—

じてかひある事をも承るかな。(一)さても何所にかく美しき御契は物し給ひけるぞ」と問ひ聞ゆれば、大納言「(二)さかし。そはさはれな知りそ。今自ら聞き給ひてん」と宣へば、陰陽師召して、その日許りと定めて、大納言「御湯殿の具などは殿に侍ふべけれ。なべてならず心留めて」と宣ふ。太政大臣御髪剃し給ふべきよし聞き給ひて、あはれなる人眼はさる事にて、人知れぬゆかりを思すに、いと〳〵哀れにて、驚きながら参うで給ふ。女君例の解け難く清げなる様にて、いとゞ打ち萎れ給へる、心恥かしげに物々しき氣色のあなづりにくげなるも、云ひ知らず懐かしく哀れげなりし火影は先づ思ひ出でられて、これを悪しとはあらねど、更に似給はざりけりと思ひ較ぶるには、胸打潰るれど、さりげなくて、大納言「一昨日のあなたの日にや侍りてん、著かりしかば衣をたゞ一重着て、御遊に侍ひしに、曙まで物仰せられなどせしかば、え立たで、冷かに覺えしより風邪起り侍りて、胸痛く心地も搔き亂りて侍りつれば、大殿になんためらひ侍りつる。御心地はよろしきに聞きなし奉りつるを、などかく俄には」と聞え給へば、大君「さ云ふ許りにはおはせざるべかめれど、年頃の本意有り、

(一)さても何所に—其にしても、何所の何といふ人と、そのやうなお縁結びになつたのでございますか。
(二)さかしそはさはれな知りそ—さやう、その事だが、それだけは聞いてくれるな。
(三)今自ら—今に自然と、女の素性は聞くであらうから。
(四)その日許りと定めて—陰陽師に赤兒か引取るによい日を占はせて、何月何日とその日を定めて。
(五)御湯殿の具などは—赤兒に生湯をつかはせる道具などは、一切父上の所にあるだらう。
(六)なべてならず—何うか充分に注意してなら育てゝくれ。
(七)あはれなる人眼しは—大君の婿とはしれなく表面上悲しく思ひつゝ見舞ふに大臣の所へ行くべきは云ふまでもなく。
(八)人知れぬゆかりを思ふ—人知れぬ関係を結んだ中君をの事を思ふと、一層大臣がのの毒で。
(九)参うで—廣澤氣の御堂に参ふ。
(一〇)心恥かしげに—向ひあつてゐつた。
(一一)云ひ知らず—以下中君の様。
(一二)懐かしみ難く思はれ、嚴が、大納言に居られる親
(一三)悪しとはあらねど、更に似給はざりけりと思ひ出でられて、これを悪しとはあらねど、更に似給はざりけりと思ひ較ぶるには、胸打潰るれど、さりげなくて、大納言「一昨日のあなたの日にや侍りてん、著かりしかば衣をたゞ一重着て、御遊に侍ひしに、曙まで物仰せられなどせしかば、え立たで、冷かに覺えしより風邪起り侍りて、胸痛く心地も搔き亂りて侍りつれば、大殿になんためらひ侍りつる。御心地はよろしきに聞きなし奉りつるを、などかく俄には」と聞え給へば、大君「さ云ふ許りにはおはせざるべかめれど、年頃の本意有り、

(一四)御遊びに—帝の管絃の御遊に侍してゐた所が。
(一五)物仰せられなど—夜明頃まで帝が話しかけたりなどなすつたので、立ち歸る事も出來ず身體が冷えた、その時から風邪をひいて。
(一六)大殿になんためらひ侍りつる—父關白の屋敷で愚圖々々して居りまして、お何ひする事も出來ませんでした。
(一七)さ云ふ許りには—何大した理由もありはしないでせうが。
(一八)御心地はよろしきに—太政大臣様の御病氣はよい方だと聞いて居りましたのに、何うして急に出家しようなどと思ひ立たれたのでせうか。
(一九)さ云ふ許りには—何大した理由もありはしないでせうが。
(二〇)年頃の本意有り—出家しようとは、かれ〳〵の父の希望でもありますし。

ひつる人の事は常の事にて、(一)珍しき御有様に萬慰めてなん。(二)明日罷出侍るべきを、細かには自ら申し侍らむ」とあり。見給ふに笑まれて、かの母君の腹より我が子の出で來たらん、げに何かは世の常ならんと、我が御身も心傲りして、思しやるに心もとなく、いと中々なり。殿にはまだきに迎へすべし。日頃經でと思せば、今一人の御乳母の丹波の守の妻にてありけるを召して、大納言「慎むべき事ある人に年頃忍びつゝ通ひつる程に、かゝる事なんある。類だにあらば紛らはしつべき(イ侍)。大殿を見(イ侍)るに、中宮の御光のみいみじき幸ひにておはします人な(一字イ べか)めり。我は何許りの事かある。これを見れば、男子は口惜しく、女はかしこき者と思ふ筋にてさへあれば、忍びて迎へて、夜晝嘆かせ給ふ(二字イナシ)殿にあづけ奉らんと思ふを、暫く(二字イしばしは)いちじるくさし出ださじ。先づ其處の許にと思ふを、さる心せよ」と宣ふを、打聞くよりいと嬉しげに笑みて、乳母「遅くもといと心もとなく見奉るに、からういと思ふから、何うかその積りでゐて貰ひたい。あなたに子供のお出來になる事が遲いと、心配をも」漸々の事でかりあるましたが、つたとは、聞き付きがおお出來になる事なく成つて大變嬉しう存じます

(一)珍しき御有様に―生れ出た赤児の世話で心が紛れて居ります。

(二)げに何かは世の常ならん―あの美しい母との間に出來た子供は、何うして世間並の子供であらうか、飛び抜けて美しい子供であらうと。

(三)我が御身りして―大納言自身も心中では子供の事を諦らしく思はれて。

(四)思しやるに心もとなく―生れた赤子や中君の事を思ひやると、逢ひたくも思はれて。

(五)中々なり―その手紙を見て、却つて切ひが増した。

(六)殿にはまだきに―大納言の心自分の邸に早く引き取らう。

(七)日頃經で―何日も月日がたつと都合が悪い。

(八)今一人の御乳母―少納言行輔の母に當る乳母でもなくてもう一人の乳母の丹波守の妻を召して。

(九)慎むべき事ある人―世間に秘密にしなければならぬ身の上の女に。中君を指す。

(一〇)かゝる事なん―かやうかやうの譯で子供が出來た。

(一一)類だにあらば―その女が他の男にも子供が出來て居るやうな事も出來るが、さういふ女ではない。で出來た子の始末に困る。

(一二)大殿を見る―父關白の子供の御光を見ると。

(一三)中宮の御光―自分の妹の中宮だけの御光のみ。

(一四)我は何許りの―自分は何れ程の出世なして居るであらうか。たかゞ大納言位。

(一五)これを見れば男子は―これを見れば男子は口惜しく之によつて見れば男に情ないものの輿にもなるだが、女は何んな玉の實に大切な者と思はれる。自分の忍び通つてゐた女に生れた赤児は、その大切なる女兒でさへあるから。

(一六)忍びて迎へて―その子をひそかに自分の所に引き取つて。

(一七)夜晝嘆かせ給ふ殿に―いつも自分に、子供が出來ぬ事か悲しんで居られるお父上に。

(一八)暫くいちじるく―暫くはつきりとその事を、お父上には申し上げず子供を差し上げまい。

(一九)先づ其處の許に―先づお前の所にあづけて、育てゝ貰ひた

所に隱し据ゑられて、心肝の限りこそ盡くして侍りつれ。事なくて、とばかりありて、又絶え入らせ給ひぬとて騷ぎ侍りしぞ、其後異なる事もおはしまさぬなめり。宰相『つとめて參れ』と宣ひつれど、『いかではいか。覺束なしと思し召すらん』と申し侍りつれば、『かゝる程にて御文はえ書き侍らず。同じ事なり。後は知らず、唯今は平かに物せらるゝやうに侍れば、何事も忘れぬる心地して侍り。吾が君ゆめおはしまさむとな思しかけそ。明後日の曉には罷り出づべければ、自ら細かに申さむ。道の程山賤の見る目も輕らかなる御歩あるまじき事なり。おはしまさぬおろかなりと人思ふべきにあらず。おはしまさむとあらばゆめ〳〵申し留めよ』となむ宣ひつる」と申すに胸明きて嬉しきにも、ゆかしく覺束なき心焦られぞ類なきや。

今日は萬慰めて、たゞこれのみ心に取りて心もとなければ、げにわりなき人眼の關を紛れ給ふべき方なく苦しく思さる。此の曉に奉り給ひつる人夕方歸り參りて、中將の文にて、「詳しき事は行賴の朝臣申し侍りぬらん。其後異なる事侍らず。月頃弱り給

(一)心肝の限りこそ―心身を盡くして心配した。
(二)事なくて―事安産して、暫くして又中君が氣絶した。これは後産。
(三)異なる事も―別に變事もない樣子。
(四)つとめて參れと―夜があけてから歸れと、宰相は申された。
(五)いかではいか―何うしてそんなに心配して居らるゝか。
(六)かゝる程にて―斯樣に取り込んで居る際なので、大納言に詳しくお手紙を書く事も出來ません。
(七)同じ事なり―手紙は書いても書かなくても、お前の口から報告しないでも、お前も同じ事。
(八)唯今は平かに―中君は後には何が無變で居られるかも知らない。
(九)何事も忘れぬる―今までの心配は、皆忘れぬるから、皆忘れてしまつた樣な心持がする。
(一〇)吾が君ゆめおはしまさむと―大納言樣よ。この石山に見舞に來ようなどとは、ゆめ〳〵思ひもよらぬ。
(一一)自らこまかに―私自身、大納言に親しく詳しくお話を致しませう。
(一二)道の程山賤の見る目も―大納言とも思はれるが、道中下賤の者から輕々しく見られるやうな御出歩きをなさるべきではない。
(一三)おはしまさぬおろかなりと―大納言が中君の所に來ないのは、親切が足りない等と誰も思ひはしない。
(一四)おはしまさむとあらば―若し大納言が中君の所へ來ようなら、充分に仰せにつけて、お前から諫めて留めて下さい。
(一五)胸明きて―ほつとして。
(一六)ゆかしく覺束なき―中君の顏も見たく心がゝりに氣がもめる大納言の心中は、甚だ耐へ難いものがあつた。
(一七)今日は萬慰めて―今日は萬事心も愉快であつて。
(一八)げにわりなき人眼の關を―宰相中將の云ふ通り、無理に人眼を忍んで中君の所に行くべき譯も煩悶しないので、大納言はひとり閑つた。
(一九)此の曉に―少納言の歸つて來た今日の明け方に、又中君の所に遣はした使が、その文にて―その使が持つて來た手紙は、宰相中將が書いたのであつて、その文面には。
(二〇)中將の文にて―
(二一)異なる事侍らず―その後、中君は別に惡くもなりません。
(二二)月頃弱り給ひつる人の事は―長い間衰弱せられて居るから、それは何時もの通りで別に恢復も致しませんが。

(一)ふくよか―ふつくら。ゆつたりとしてゐる。姙婦の着物だからであらう。
(二)なくもなりなば―大納言の心中君が死んだなら。
(三)世を背き―出家して、深い山奥に入つてしまはう。
(四)片時も現し様にて―今の通りの生活では、少しも生きながらへては居まい。直ぐに出家してしまはう。
(五)御臺も参らず―御飯もたべずに寝て居らるる。
(六)入申しければ―大納言の家来が、大君に知らせたから。
(七)いと怪しき事かな―大君が使の者を大納言の邸にやつて、「大變怪しからん事つよ。何故私の所へお出でにならないのですか」と云はせた。
(八)いと覺束なしと―あなたの所へ参らうと思つたが、大變氣分が悪いので心配したものだかも参らなかつた。今直ぐ参る積りだ。これは大納言の言葉を家来が大君の使に取次ぐ言葉であるから大納言の言葉に「思す」と云ふ敬語が使つてある。
(九)思し惑はるるにも―一本の「思し惑はるるにとの方宜し」
(一〇)なほ待ち給ふに―大納言は矢張り少納言が石山から歸つて來るのを待つてゐると。
(一一)曉方に―翌朝の夜明頃少納言が歸つて來た。
(一二)いかに云はむとすらんと―中君の病狀について何の樣な事を云ふであらうか。吉凶如何と胸をどきつかせた。
(一三)寄り参りて―少納言は大納言の傍に近寄つて。

(一四)衣は裏も表もふくよかにて、たゞありつる人の香にて懐かしく染みかへりたる袖を顔に押し宛てゝ泣き給ひつゝ、亡くもなりなば、これ許りを形身にてこそは世を背き深き山にも跡を絶ため。此の人なくなりなば、片時も現し樣にていかでか長らふべきと思し續くるに、我ながら心細くあはれなり。
(一五)「大納言は御心地いと苦しげにて、御臺も参らず臥させ給ふ」と人申しければ、上「いと怪しき事かな。など見えさせ給はぬ」と聞え給ひければ、大納言「風邪にや、例ならず思ひ給へられて、参らんと思して、いと覺束なしと思しまどはるゝに」もゝ、仰せど、なほ待ち給ふに、曉方に
(一六)ぞ参りたる。いかに云はむとすらんと胸打ち潰れ給へるに、寄り参りて、少納言申
の時許りに参りつきて待りしかば、宰相中將『いとゝみじく不覺におはします』とて、宰相聲も惜しまず泣きまどひ、御堂に修行(ゝし)騒ぎて、宰相中將『唯今いみじくかくおはするを、さなむとて参りたらば覺束なしと思し召さむ物ぞ。今宵許りは此の御有樣をともかくも聞き定めて参れ。今宵を過ぐし給ふべきにあらず』と宰相の宣ひしかば、留まりて待りしに、酉の時許りなむ平かに女にておはしますと承りつる。程なき

(一七)曉方に―夜明頃に石山に到着しました。
(一八)不覺に―人事不省。
(一九)御堂に修行―發ぎて―御寺では祈禱をしてあはて騒いでゐて。
(二〇)唯今いみじくかく―唯今此の樣に産氣づいて大切な時期であるのに。

(二一)申の時―午後四時頃に石山に歸つておいでになる。
(二二)氣がついたなら、大納言はさぞ御心配に思はれる事であらうから。
(二三)今宵を過ぐし―出産は今晩よりも遲くなる事はあるまい、必ず今晩中に生れるであらうから。
(二四)酉の時許りなむ―午後六時頃に無事に出産して、女の子が生れたと承りました。
(二五)程なき所―狹い所。

(一)身に近き御衣許りを―肌につけて着て。(二)云へば更なり―形容する事も出來始めこゝまでに―あなたは私と中君との馴染の初を、詳しく御存じになつて居られる樣ですから。(三)事の始細かにさりとも聞き給へる―二字ィふべかめれば、心知の猥りがはしき事過失はえ罪も負せ給はじ。よしや總べて來し方行く末辿るべき心地もせず、罷りつくまでの命もや侍らざらむ」なども續け遣り給はず。宰相もせきやる方無げなる氣色にて、宰相中將「亂り心地更に昏れまどひて、(七)萬に辨へ侍らず。(八)明け果てぬ先に」と、そそのかしたてられて、道すがら引き返す心地し給ひつゝ、(九)大殿におはしつきて、(一〇)心地のいみじく思さるれば、打臥し給へるも、(一一)唯浮き上がるやうに覺えつゝ、あるかなきかなりつる面影、(一二)身に近かりつる氣配手當など、(一三)身を去らぬやうなるに、平かにあらせて相見ばやと思すより外の事なし。(一四)祈りつけ給へりし人々に、いみじき祈ども添へ、(一五)御修行の使ども所に忍びて出だし立てなどし給ふを、人々も怪しと思ふ。(一六)少納言を又押し返し奉り給ひて、(一七)云ひて返り來むと思すに、胸塞がりて、(一八)御臺參り据ゑたれど、つゆ許りだに聞し召さず、(一九)殿の御方にも參り給はで、つくづくと臥して見給へば、(二〇)形身の

(一)身に近き御衣許りを―肌につけて着物だけを形身に取りかへて着て。(二)云へば更なり―形容する事も出來こゝまでに―哀れである。(三)事の始細かに―あなたは私と中君との馴染の初を、詳しく御存じになつて居られる樣ですから。(四)心知の猥りがはしき事―事情を知つて私が中君と通じたと云つて、此の過失の罪を私に負せはなさるまい。之も不可抗力の自然の因緣なのです。(五)罷りつくまでの―都へ歸りつくまでは、私は生きては居りますまい。今にも死んでしまふ樣な心持が致します。悲しみの切なる樣。(六)せきやる方無げなる―涙をせきとめる方無げなる樣。(七)萬に辨へ侍らず―萬事譯が分らなくなつてしまひました。(八)明け果てぬ先に―夜が明け放れない中に早くお歸りなさい。(九)大殿に歸り―大納言の父關白の邸に歸る。(一〇)心地のいみじく―大納言は、心中に甚だ悲しく思つて。(一一)唯浮き上がるやうに―涙が流れて海に浮き上がるやうに、自分の身體が浮き上がるやうに思はれる程まで泣き悲しんだ。(一二)面影―中君の弱々しい樣子。(一三)身に近かりつる氣配―自分と共に寢た時の中君の樣子、肌觸りの工合など。(一四)身を去らぬやう―今も自分の身から離れぬやうに思はれる。(一五)祈りつけ給へりし人々に―中君宮産の祈禱を賴んだ人々の上に、更により以上の祈禱をすべき人を加へる。(一六)御修行の使ども―諸國の神佛に參拜して歩く事を修行といふ。巡拜して歩く使の人々を、諸所の神社佛閣に遣はす。(一七)少納言を又押し返し―少納言に行賴を直ちに引き返させて、石山の中君の所に使にやつて云ひて返り來む―どのやうに中君の病狀を報告しに歸つて來るであらうか。大變惡くなつて居りはしないであらうかと思ふにつけても心配で胸が一杯になつて。(一八)御臺參り―御膳を運んで大納言の前に置いたけれど、大納言は少しも御飯をたべない。(一九)殿の御方にも―太政大臣邸の大君の御部屋にも。(二〇)見給へば―傍から見ると。(二一)形身の衣―中君から貰つて來た形身の衣の着物。

言はつく〳〵と見奉り給ふに、あはれにらうたくいとしくも可愛らしい様子で、色艶もすぐれて立派なので。

(一)あはれにらうたく―いとしくも可愛らしい様子で、色艶もすぐれて立派なので。

(二)いかさまにかけ留めて―何うにかして此の人の生命を取り止めたいものだ。「かけ留め」の「かけ」は接頭語。「影」にあらず。

(三)打交して―大納言の脱ぎすてた着物と、中君の着物とを重ねて着て同衾する事。

(四)つき〳〵しく打隔てそむきなども―打解けぬ態度で背を向けると云ふ様な事はせず、如何にも此の場合に似つかはしい態度で。

(五)例様にて―中君の病氣に弱つて居る様を見る様につけても、中君が當りの身に逢つたのならば、前の身の様に、何んな嬉しい事であらうかと大納言は思ふ。

(六)鳥の音―あけて鳴く鳥の音も、早く起きなさいと歸りを催促する様なる。

(七)おの衣々―大納言と中君とが重ねて着て寝た着物を其々身に着けて、中君に別れて歸つて行く心持も、大納言は少しもしないのである。

(八)聞え煩ひて―人々は大納言に歸る様にと勧めても、きかないので困つてしまつて。

(九)見ぬ山を尋ね入りて―人の眼につかぬ山奥を選んで、わざ〳〵中君を連れて來たその殿隠れなくなれば―父大臣に、あなたが中君の處に忍んで來たといふ事の秘密が曝露したなら、「眼」は「ごとの」の誤寫か。

(一〇)程なき御身の―中君は痩せてすらりとした方でありましたのに、姙娠して立居も自由にならぬ有様となり、人眼につきさるもの憂くてすから困ると心配なくわりなく侍るべきを」と萬に聞え慰む。宰相もいと苦しく思へる氣色にて打嘆なひ居給へるを、餘り人目知らずあやにくなるやうならんも事の様に違ひて便なかるをかけてゐるのです。

(一一)程なき御身の―中君は痩せてすらりとした方でありましたのに、姙娠して立居も自由にならぬ有様となり、人眼につきさるもの憂くてすから困ると心配なくわりなく侍るべきを」と萬に聞え慰む。宰相もいと苦しく思へる氣色にて打嘆なひ居給へるを、餘り人目知らずあやにくなるやうならんも事の様に違ひて便なかるをかけてゐるのです。

(一二)見ぬ山を尋ね入りて―人の眼につかぬ山奥を選んで、わざ〳〵中君を連れて來たその殿隠れなくなれば―父大臣に、あなたが中君の處に忍んで來たといふ事の秘密が曝露したなら、「眼」は「ごとの」の誤寫か。

(一三)憂東なく思し召されば―貴方のお心が心配で耐られぬ様でしたなら、又人眼を忍んで此の山奥にやつて來るやうに、お計ひしになつたらよいでせう。

(一四)尋ね怪しがり―都に居られる大臣邸の人々が、あなたの行方が不明なので不審がつて捜索したならば、隠す所もなくすべての秘密が曝露して大変不都合な事になりませうから早くお歸りさいませ。

(一五)打嘆なひ―大納言にお歸りになる様に奉なかけてゐる。

(一六)餘り人目知らずあやにくなる―餘り人眼に知られず構はず無理な行爲をするのも、今の場合にはなすべき事でもなく不都合な事であるから。

事なかりつ。如何なる契にかありけむ、(一)一目見奉りてし後、心魂も靜まる時なく、夜はつゆまどろむ時なく嘆き明かし、晝はひぐらし思ひ暮らすより他の事も覺えざりつるに、(二)つひに例の樣にて今一度對面せで別れ奉りなば、片時立ち遲れてあるべきにもあらず。(四)よし人も見聞き給へ。我も人もは(五)かりける世を、(六)尋ね聞き奉りても、あぢきなく(七)人目を慎みはかりて、(八)などてすこしつゝむ心のまゝに、(九)亂れ立ちてこそ何處へも(十)率て奉るべかりけれ」と、云ひ續けて泣き給ふ氣色の(十一)心深う耐へ難げなるを、中將もいと悲しくつく〴〵と聞きて、(十二)げにいかに見思すらむ。心淺き我になりてもいみじかるべき事を、(十三)此の人の身をも世をも靜め思したる樣は、(十四)いみじき事ありとも、かく心弱くまどひ給ふべくやは見ゆる。我が(十五)妹とも云はじ。(十六)契こそ思はずに結び給ひけれ。見る眼の有樣は打見む人の思ひ捨つべくもなくぞ物し給ふかしと、(十七)つく〴〵と思し入りたる樣を見聞くにも、(十八)若し平かにおはせば、つひにいかなるべき事ならんと、事の紛れにもかの(十九)上を思ひ出でけり。大納

(一)一目見奉りてし後―一目あなたにの氣の顏の落ちつく時もなく。頻(二)つひに例の樣にて―あなたが安產し一度お目にかゝらずしてしまつたし健康體となつた上、此のまゝあなたが死んでしまはれたなら。(三)片時立ち遲れて―私も寸時も後に殘ずに、直ちに後を慕つて死んでしまひませう。(四)よし人も見聞き給へ―皆樣方も私の云ふ事を聞いて下さい。(五)かりける世を―私と中君とはおかりける世を、此の樣に果敢なく別れの仲は、ならぬ緣であります。(六)尋ねも聞きも奉りても―中君の居ら所を、同じ邸内のあの部屋は聞きながらも。(七)人目を慎みはかりて―情なく事をおそれ憚かなつも人目に立つ居て。(八)一ど許り少しむ心のまゝに宜しく過して。どうして―本來たのであらう。上より續けて過してつゝ人目をつゝみはかりこそ―人眼も構はず、通りに振舞つて中君を連れ思ふ何處へ姿を隱すべき筈れあつたのに、何うしてかさうなかつたので、(九)亂れ立ちてこそ―人眼も構はず、通りに振舞つて中君を連れ思ふ何處へ姿を隱すべき筈れあつたのに、何うしてかさうなかつたので、(十)率て奉るべかりけれ―何處へ姿を隱すべき筈れあつたのに、何うしてかさうなかつたので、(十一)心深う耐へ難げなる―心深く思ひ込んで耐へ難げに耐へきれぬ程の樣に耐へきれぬ心。大納言の御心中は何うであらうか。(十二)げにいかに見思すらむ―以下宰相中將の心。(十三)此の人の身をも世をも―此の人の身も世をも靜め思したる樣は、大納言の、己れの身も人の身も落ちつかせるやうな平靜なさうでは斯樣に悲しんで居るのに、今中君の病床に臨んでは斯樣に悲しんで居られる。(十四)いみじき事ありとも―何ん態度を見ると。(十五)我が妹とも云はじ―此の大納言に斯樣に悲しませるとは、中君は自分の妹だとも云はじ。(十六)契こそ思はずに結び給ひけれ―安つぽく自分の妹だとも云はじ。(十七)つく〴〵と思し入りたる―大樣なる氣がする。(十八)若し平かにおはせば―若し中君は親兄弟の心に反して、意外居られた大納言の心に反して、意外居られた大納言と見ると結んで居られた大納言と見ると結んで居られた大納言の可憐な有樣眼の係反した樣はんで居られた大納言の可憐な有樣眼の係反した樣はんで居られた大納言の可憐な有樣眼の係反した樣はん

さぬはあるまじきを、(一)まいて夢のやうにて、たゞ一目ほのめきよりて、月頃を経て限りなく思ひしめて戀ひ思す中の、かゝる折をしも見奉り給ふ御心地なのめならんやは。眼も昏れまどひ給へば、御几帳の帷子一重を打ち懸けて、押し遣りて、大納言「何か斯許り隔て思す」とて、御殿油をかゝげて見奉り給ふに、色は雪などを丸がしたらんやうに底ひなく白く、(イき)よげなるに、苦しげなる面つきいと赤く匂ひて、云ふかひなく臥し給へる顔のあざ〳〵とめでたき様は、月影のもてなし用意し給へりしは世の常なりけり。是を空しくなしてむ事よと思すに、来し方行く先の事も忘れて添ひ臥して、御手を捕へて、顔に顔をあてて、聲も惜しまず、人眼も知らず泣きまどひ給ふ様、のどめ給ふ人も世にはなかりけりとぞ留めむ方なく、寝入り給へるが、やう〳〵驚きて、あらぬ氣配とはさすがに覺えければ、眼をいとたゆく見上げて、打見合はせて、袖を顔に引きかけつるを、大納言「吾が君や、などかくつらういみじき契はおはしける。物覺えて後めぐらひ侍るに、心に殘る事もなく、思ひ惱む

(一)まいて夢のやうにて―「夢のやうにて」は直ぐ次の「一目ほのめき寄りて」にかかる。(二)たゞ一目ほのめきよりて―「たゞ一目ほのめきよりて」は、前日君に逢つた時、嘗つて夢のやうにほんの一目だけ顔を見て、一夜の逢瀬を重ねたいと交わしたけれど、以後長い月日を経て、心中深く君を戀ひ慕つてゐるのに、柄でもなく大納言のやうな心中は、一方なら悲しい事であつた。(三)月頃―月頃を経て。(四)御心地―御心地は、一方なら悲しい事であつてゐる布帳に下がつてゐる布帷子を云ふ。(五)帷子―帷子を凡帳の横木の上に打ち懸けて―帷子を凡帳の横木に押し遣りて―押して開けて。(六)打ち懸―打ち懸けて―開ける事。(七)押し遣りて―押して除けて。(八)何か斯許り―何もそんなに遠慮なさいますな。(九)かゝげて―燈火の心をかきたてる。(一〇)雪―雪などを丸がし―中君の様。(一一)赤―赤く匂ひて―色艶の美しく匂ひて―色が白く美しいのに。(一二)云ふかひなく―赤く色がついて。(一三)あざやかに―弱々しく臥して居る顔が。(一四)月影のもてなし―以前月のよい晩に中君と逢つた時の中君の有様に較べ今の病中の中君の様は比較にならぬ程美しい。(一五)是を空しくなしてしまふのは―是を空しくなし、空ぬ程美しく―此の美しい人を、死なしてしまふのは殘念だと。(一六)のどめ給ふ人も―大納言の悲しむ様を見てのお付の人々の心。世には悲しみにも動じない、我慢の強い人は居ないものだと思つて。(一七)留めむ方なく―大納言を制止する事も出來ず。(一八)寝入り給へるが―此の時まで中君は寝入つて居たが。(一九)やう〳〵驚きて―此の時にやう〳〵眼がさめ。(二〇)あらぬ氣配―いつもとは違つた人の居る様子と。(二一)袖を顔に引きかけ―顔を見合せて大納言と察したので、中君は袖を顔へあてゝ顔を隠した。(二二)などかくつらう―何うして私共の關係は、此のやうにつらく悲しい運命なのでせう。(二三)物覺えて後―物心がついて後色々と世渡をして來ましたが記憶に殘る事もなく―何の心配もなかつたのに。(二四)心に殘る事もなく―殘るやうな事もなく、何の心配

(一)云ふかひなく―中君の容體が甚だ惡くなつてゐる事を告げ知らせ。
(二)待ち聞く心地のあへなさ―その張合ひのない事は。
(三)此の世には―この世では、私に任せぬつらい仲ましたが、もう一度だけはおもふ心。
(四)今は―今は大納言の心。
(五)世に永らへ給へ―永らへてあらんべきの意。
(六)さるべからん御契の中を―然るべき前世からの因縁なれば、仲なほしたのも、無理やらん。
(七)今時―際。
(八)月頃―中君は永い間の病氣。
(九)物―御病の氣。
(一〇)御殿油御帳の外に―燈臺を中君の側に少し遠ざけて、中君の顏を照らす爲の御帳。
(一一)喜びながら―大納言の様。
(一二)小さくおはする人―中君の様。
(一三)腹いと高く―妊娠の様。
(一四)こちたげ―甚だ苦しさうな様子。
(一五)なよ〳〵と―着ならして糊の落ちて、やわらかくなつてゐる着物。
(一六)胸の程にぞ―腹が大きいので腹の所は着物が合はず、胸の邊に着物の前を合はせて着てゐるのである。
(一七)いと身もなく―痩せ衰へて、身體は見えず着物許りの様子。
(一八)何のいたはりもなく―無造作に。
(一九)亂れまよふ心地―髮が少しも亂れずに、おくれ毛の様なものも見えず。
(二〇)裾は扇を―髮のすその末廣がりに廣がつてゐる様。
(二一)あたらしく惜しげ―殘念にも亦惜しい氣のする中君の有様は。

對の君對面して、云ふかひなくなり給ひたる様を云ひもやらせ給ず、待ち聞く心地のあへなさ、云ふ限りぞなきや。大納言「此の世にはつらかりける御契を、今一度見奉らん」と泣く〳〵宣ふ。宰相の君、今はさはれ、世に永らへ給ふべき御様ならばこそ行く先をもたどらめ。さるべからん御契の中を、あながちにも隔てじ。今時二字イは哀をも添へて思ひ給ふ許り。月頃經る御病なれども、いさゝか物むつかしげに衰へたる御氣色もなき御様なれば、御殿油御帳の外に少し取りやりて、入れ奉る。喜びながら見給へば、いと小さくおはする人の、腹いと高くこちたげにて、白き御衣のなよ〳〵とあるを引きかけて、胸の程にぞ押し宛てたる、いと身もなく衣がちに衰れげなる心苦しさに、何のいたはりもなく御髮のィは引き結ひて打ち遣られたる、いさゝか亂れまよふ心地なく、つや〳〵とめでたく(イて)裾は扇を廣げたらむやうにて臥し給ひつるが、あたらしく惜しげなる様は、鬼神武士と云ふとも涙落

(一)事そぎたる寝殿だつもの—極めて簡素な寝殿らしい建物が一棟だけ見える。
(二)人眼も絶えて—人間の姿も見えずして、寂しい景色である事は一しほである。
(三)かくみて安らかに—一本の「かくみて」の方宜しい。あたりまへならば中君出産の時には、かやうに淋しい有様ではなくして安心して。
(四)鳥の音聞えぬ—僻遠の地を云ふ詞。深い山里に中君を連れて入り、氣をもみながら世話をさるべき事とは—其の前世の因縁づくとは云ひながら。
(五)我はかなく—自分の悪い心掛から、意外な陽係を結んで。
(六)焦がす嘆の—嘆の「き」を「木」に云ひかけて「焦がす」と云つた。
(七)羽打振き渡るさへ—はばたきしながら鳴き渡るのまでが甚だしく哀情を催されて。
(八)諸聲に打立てつべし—郭公と一緒に、自分も聲をあげて泣きたい様に思はれた。
(九)郭公あはれ知る音に—志賀の浦は近江の琵琶湖にある名所「なみだに」は「波だに」と「涙」にを云ひかけた。郭公の悲しさをさそふ鳴く音に自分も寄せるなつて、志賀の海に打波の様に流れ出る涙に、かきくれて、一層心が掻き亂された。
(一〇)此所には—中君お付の人々は此所に、下の「泣く〳〵思ひまどふに」にて受ける。
(一一)昨日今日!—以下中君の様。
(一二)おのが身とだに—以下中君の様を見て對の君達の心。中君が身二つになりもせずに。
(一三)行方なく空しく—果敢なく病死してしまはれた時の悲しさを、今から考へて泣き迷ふ。
(一四)命にかくる—鳥の聲なも命にかけて佗びる。里より離れたる山奥の住居の、音信を待ちかねてゐる様を譬へた。
(一五)打聞きつけたる心どもは—對の君達の心中は。
(一六)物の聞え世の慎ましさ—大納言が中君の所を訪れたと世間に評判されては困る事も忘れて。世間體を憚る事も出來すして。
(一七)南面—南側の座敷は、正面で客間となつてゐる。
(一八)世づきたる方—世間並に裝飾等もしてある座敷に。

はりもなく、事そぎたる寝殿だつもの一つのみぞ見えたる所の様いとをかしきに、人眼も絶えてかすかなる氣色は殊更なめれど、かくみて安らかに、常よりも人繁く立ち騒ぎて扱ふべきを、あながちに隠し忍び、鳥の音聞えぬ里を尋ねまどひ扱ふ心地ども、げに如何にいみじからむ。さるべき事とは云ひながら、我はかなく思ひし振舞のゆくりなさに、我も人も焦がす嘆きの因となりにけるも悲しく思し續くるに、木末に郭公の羽打羽振き渡るさへいみじきに、諸聲に打立てつべし。

大納言郭公あはれ知る音に志賀の浦のなみだにいとゞ迷ひぬるかな

此所には、昨日今日眼をだに見上げ給はず、今も絶え〴〵頼もしげなき御有様を、おのが身とだになり給はず、かゝる旅の空にて、行く方なく空しくなし奉りてん悲しさを、泣く〳〵思ひまどふに、僧都入りおはして、大納言殿おはしたるよし告ぐるに、かゝる世離れたる所には、空飛ぶ鳥の一聲をだに命にかくる事なりければ、あながちに忍び隠ろへ尋ねおはしたらん心深さを、打聞きつけたる心どもは、あはれに悲しきに、物の聞え世の慎ましさも忘れて、南面の世づきたる方に入れ奉りて、

する顏にし置きて、さるべき女房侍は皆侍はせて、御方許り、やをらかの尼君の家に率て奉り給ふ。京にはよろしくなり給へるよしを聞え給ひたれば、左衞門の督もおはせず。

大納言心の及ぶ限り御祈は殘さずせさせ給ふ。關よりをちに籠り給ふよしを、いと覺束なく、これをよそに聞き騷ぐ許りにて、寄り付き扱ひ給はぬ心の中ぞイナシ譬へん方なきや。僧都に會ひて問ひ給ふに、宰相のかく思し構ふるよしを聞えければ、明暮るゝにつけても如何にと思し餘りて、いとあながちなる樣に構へぬすまはれて、垣間見の導せし少納言、また親しく思す人二三人許り、わりなく忍びやつして、四月五六日の程に、日打暮るゝ程に、京を出で給ひて、月もいとかすかに道たどたどしきを、心のゆくに任せて、夜打更くる程に石山に詣うでて、さるべき人の坊に立ち隱れて、僧都尋ねて、消息せ(イさせ)給ひたれば、驚きて參りたり。僧都「そこ〳〵になむ忍びて物せさせ給ふ」と申せば、やがて僧都を案內にておはす。程遠くもあらざりけり。消息云ひに僧都入りぬるに、さるべき木の下に立ち隱れて、何のいた

(一)侍はせて—女房侍達は皆寺內に留めておいて。
(二)御方許り—對の君だけが。
(三)やをらかの尼君—母の家にひそかにおはせし尼君の乳母の君を連れて行つた。
(四)京には—中宰相の君は廣澤の御堂に、大凡は廣澤の御堂の方にのみ指して、行つた。
(五)左衞門督—知らせずに、中君も病氣がよくなつたので。
(六)關より—左衞門督も誰も見舞にやつて來ない。
(七)これをよそに—中君が石山寺に。
(八)寄り付き扱ひ給はぬ心の中ぞイナシ譬へん方なきや—關よりをちに籠り給ふよしを、いと覺束なく、これをよそに聞き騷ぐ許りにて、寄り付き扱ひ給はぬ心の中ぞイナシ譬へん方なきや。
(九)問ひ給ふに—石山寺に。
(十)如何にと思し餘りて—中君の傍に付き添うて世話をしてやらぬ大納言の心中は、譬へるものもない程に悲しい。
(十一)いとあながちなる樣に—石山寺に籠つてゐると、よそながら聞いて心配してゐる許りで。
(十二)垣間見の導せし少納言—中君の樣子を大納言が。
(十三)垣間見の導せし—中納言が中君の所に見舞に行く爲の導をした。
(十四)少納言—大納言の乳母の子の少納言。
(十五)親しく—その他にも、親しき家來を二三人。
(十六)忍びやつして—ひどく人目を忍んで、わざと人目にたゝぬ服裝をして。「やつす」はやつれた樣子をする事。
(十七)道たどたどしきに—月影も薄くて、道もよく分らないのに。
(十八)心のゆくに任せて—心任せに歩いて行つて。
(十九)さるべき人の坊に—懇意な法師の住んでゐる部屋に、中納言は忍び宿つて。
(二十)僧都尋ねて—法性寺の僧都の宿所を探して、自分の來てゐる由知らせてやつたから。
(二一)そこ〳〵に—何所其所に(宰相の乳母の家に、中君はひそかに宿つて居られるのです。
(二二)程遠くも—中君の居る所は、石山寺から遠くも離れてゐない。
(二三)立ち隱れて—大納言が、人に隱れて。以下大納言が、附近の樣子を見ての心中の情を寫す。
(二四)何のいたはりもなく—少しも念を入れて造作したものではなく。

(一)さてや試み給ふべき―一つ石山寺にお籠をして見たら如何でせう。(二)苦しき御心地―父大臣も病中の苦しい心地にも。(三)此の事が大切だと―中君の御事をいみじと思つて。(四)さてこそ試みる―如何にも石山にてこそ試みしみて、中君が癒るか何かお籠をたのめしてみるべきあつかなたのに、今まで氣が筈つかなかつたとは、殘念だ。(五)我が心地は、唯今死ぬ心配をするなる様子もないから。(六)その君に―中君の傍に、いつも付き添ひて居たらむ―自分の傍に付き添うひたらむ―自分の身が(七)我が心地は―自分は、今にも死ぬ様子もないから。(八)それなむ嬉しかるべきと―中君の傍に居ても少しも嬉しいとも思はぬ世話をしてやつてくれる方が嬉しく思ふ。(九)哀れに悲しく思ふ。(十)大臣の悲しく宰相中將が、父此の寺の御修法を安産の修法を行ふ。(十一)三月廿五日は、石山寺へ參つた修ふ。(十二)七日は、期限を廿日から廿日間に定めて。(十三)さりともその程には、幾ら何の一法―出産なでも、その頃には無事出産なさうと思つて。(十四)宰相中將に申かげた。(十五)御送つて給ふ―石山まで中君を送つて來た。(十六)此のお傍には。(十七)思ひ宣ふめれど―一本にめれば、「ば」の方宜し。(十八)大納言のお一人だけには、一所に―大君お一人上の父上のお世話をし御所の驗有りとも見え侍らざめるを、さてや試み給ふべき―と申し給へば、苦しき御心地にも、たゞ此の御事をいみじと思して、太政大臣「いとよかめり。早く籠め奉れ。さてこそ試みるべかりけれ。今まで思ひ寄らざりける。我が心地は、唯今死ぬべくも覺えず。覺束なしとな思ひそ。其の君につと添ひ奉れ。我が身に添ひたらむ、更に何と思ふまじ。それなむ嬉しかるべきと、泣く〳〵宣ふを、哀れに悲しく見奉る。僧都はやがて此の寺(イにて)御修法を奉りに出で詣で給ふ。三月廿五六日の程なれば、三七日と限りて、さりともその程にはあらじやはと思ひて、奉て奉り給ひつ。左衛門の督も御送りし給ふ。左衛門督「此所には宰相侍ひ給ふべきよしのみ思し宣ふめれどイば、大納言の上一所にあづけ奉りて便なければ、おのれは歸りなむ。御心地の様を承はりて、これより增り給はば又參らん。一方ならずいみじく心の隙なくもあるかな」と、打嘆きて歸り給ひぬ。よき隙にこそあめれ。此の程に事なくてと、心あるどちは念じ思ひて、夜夜半の事も御堂にては恐ろしがるべければ、おはお頼みしては。(九)おのれは歸りなむ―私はこゝからお暇して、廣澤に歸りませう。(十)御心地の様を―中君の御様子のお知らせをお願ひまして若し之以上に重くなる様であるなら。(十一)一方ならず―中君と父上と兩方に病人をかゝへて、一方ならず甚だ心の落付かぬ事ですが、此の程に事なくて―今の間に人知れずいもので無事出産をさせたいものであると。(十二)心あるどちは―事情を知つてゐる人々は思案をして。(十三)御堂にては―夜夜半に産氣づいた際には、お寺の中では致し方がなくて氣味の悪い事であるから。(十四)おはする顔に―中君が寺内に籠つてゐる様子を裝つて。

に心留めて造り給へりける、(一)廣澤の池のわたりに、云ひ知らず面白き御堂に渡り給ひぬ。宰相の君は、太政大臣「(二)これに孝ずると思ひて、(四)此所に侍ひて、扱ひ聞えよ」とて、(五)留め置き給ふ。(六)宣ふとて、(七)一人渡し奉るべきにあらねば、左衛門督大納言の北の方具して渡し奉り給ひぬ。(八)君達は道を中にて通ひ歩き給ふ。

宰相中將僧都對の君などして、(九)此の程にこそ當り給ふらめ。いかゞすべき。(十)所去りたるやうなれど、人眼繁からずもあらず。太政大臣「(十一)法師も男も、(十二)我が許にはな在りそ。(十三)かしこ彼處に」とのみ宣へば、(十四)集ひ來(イろ)に、中々いと騒がし。左衛門督隙なく通ひ歩き給ひ、氣色怪しと思し咎めてむ。宰相中將乳母(十五)石山の邊に領ずる所に、をかしき小家造りて、(十六)兄も、(十七)その寺の別當にて有りければ、此の二年許り尼になりて、(十八)其處に入り居たるが家こそ、いかなりとも見る人あるまじくよけれと、思し出づるも、(十九)だそこに渡し奉るべきやうなければ、廣澤に參り給ひて、宰相中將「(二十)此の御心地のかくのみ侍るを、(二十一)物問はせ侍れば、(二十二)石山に籠りていとよしと申す。こゝら思ひ殘す事なから、都合がよいと宰相が思ふにつけても。(二十三)そこに渡し奉るべき—そこに中君を連れて行くべき方法が全くないので。(二十四)此の御心地—中君の容體が一向よくなりませんので。(二十五)物問はせ侍れば—陰陽師に占はせて見ますと。(二十六)石山に籠りて—石山寺にお籠りをして、願をかければよくなると申します。(二十七)こゝら思ひ殘す事なき御祈—思ひ殘す事もない程までに、多くの祈禱をしても、一向効驗が見えない樣ですが。

(一)廣澤の池—京都の郊外、嵯峨野にあり。(二)御堂—御寺。(三)これに孝ずる—父大臣の詞。自分れに孝行すると思つて。(四)此所に侍ひて—中君の傍にとどまつて、中君の世話をせよ。(五)留め置き給ふ—宰相の君は殘し留めて置き給ふ。(六)宣ふとて—父大臣は左樣に宣ふとて、父大臣は殘つてをれと仰せになつても。(七)一人渡し奉るべきに—父大臣は唯一人渡し奉るべきに、廣澤の御堂にやるわけにもゆかないので。(八)君達は道を中にて—宰相も衛門督も、一條と廣澤との道を往復なさるが、一條と廣澤の間を往復して見舞つてゐた。(九)此の程にこそ當り給ふらめ—此の程は今頃なら、中君の出產に逃れて、此所去り—本宅に來たが、(十)所去りたる—父大臣の仰せに一條の邊に來たが、(十一)法師も男も—修法する法師達も男の子や家來達も。(十二)我が許にはな在りそ—自分の(大臣の)所には來るな。(十三)彼處に—中君の所に行け。(十四)宣へば—父大臣が。(十五)集ひ來に—中君の所には、人が大勢集つて來るので。(十六)隙なく通ひ歩き—廣澤の御堂に常に一條の中君の所へ常にやつて來て。(十七)氣色怪しと—中君の樣子が怪しく、姙娠の事を覺るかも知れいな。(十八)宰相中將乳母—宰相の乳母が。(十九)石山—近江の石山寺。(二十)兄—宰相の乳母の兄。(二十一)その寺の—石山寺の。(二十二)別當—一寺の長官であつて一山を司る。僧官の名稱。(二十三)此の二年許り—此の二年來。(二十四)そこに入り居たるが—その石山の片邊に隱遁してゐる、その乳母の家が。(二十五)いかなりとも—何うしても他の人が見付ける事も出來まい

(一)御身いとあつく—大臣の御身體に熱が出て、重い病氣にかかつた。

(二)ぬるみ—熱のあるを云ふ言葉

(三)いと後めたくいみじかるべけれど—中君の病氣に自分までしまつたので斯樣に寢込んでしまつたのであらうが、それも致し方がない。人々はさぞ心配に思ふであらう。

(四)此人—中君。

(五)一日にても先立ちて—一日でも早く死んで。

(六)此の悲しびに—中君に死別れる悲しみに。

(七)此の病に—此の中君の病氣に。

(八)念じて—父大臣は病苦を耐へて、中君の寢て居る傍に近寄つて。

(九)御顏に顏を—中君の顏に自分の顏をあてゝ。悲みの切なる樣。

(一〇)山里に—此の山里とは大臣の別莊であつて、廣澤の池畔に建てられてゐるもの。そこへ養生する爲めに、京都を去つて行くのである。

(一一)心勝れたり—「數多の中に」を受けて、大勢の子供の中でも、特にお前を可愛く思つてゐた。

(一二)孝養—「その志」は父大臣の中君が、父に對して孝行を盡す事。それを中君がよく考へ覺えて居るならば、と云ふ意味であらう。但し此の「孝養」の語、上下の文章の關係上少しおだやかでない。或ひは「教養」の字かと思ふが、此の語を用ひた例を當時の文章に見出さない。

(一三)平かにて逢ひ見むと—病氣恢復して、私に無事な顏を見せようと。

(一四)いとたゆきを見上げて—中君の樣、重いまぶたに、ぢつと父の顏を見上げて。

(一五)いとゞ哀に悲しく—中君の泣く樣子を見て父の心。

(一六)侍—親王大臣家の家人を云ふ

(一七)限り—ある命—是が此の世の最後の命。定命。到底助からぬ命であつても。

(一八)疊束なく—中君に別れて山里へ行くのは。

(一九)耐へ難く—父大臣の病苦が耐へ難くなる。

(二〇)つひの別は—死別といふものは、今叫りあるものではない。今は逃れてもいつかはつひに來るものである。

(二一)つひの御住處—出家して後の退隱所として、風流に造作せられたる。此の文、下の「面白き御堂」にかゝる。

御身いと暑くぬるみ出でゝ、いと苦しくし給ふ程、太政大臣、一所に我さへかくて臥しぬれば、いと惡しかりぬべし。いと後めたくいみじかるべけれど、いかゞはせむ。此の人え生き給ふまじきにては、一日にても先立ちて、此の悲しびにあはずなりなむ。念じ思ふやうに、此の病に代りぬるにても本意なり」と宣ひて、念じて、臥したるに寄り給ひて、御顏に顏をあて給ひて、太政大臣、亂り心地いと苦しければ、山里に罷りぬ。數多の中に、生まれ給ひしより、愛しと思ひ聞ゆる心勝れたり。その心ざし孝養を思し知らば、平かにて逢ひ見むと思せ—とて、咽せかへり泣き給へば、いとたゆきを見上げて、打見守りて、涙のこぼれ給ふ、いとど哀に悲しく、女房侍もたゞ爰に侍ふべきよしをのみ宣ふ。御祈の方は法性寺の僧都に、限りある命の程なりとも、此の度は助かるべきよし、祈り申しつゝ、泣く〳〵宣ひ置き、覺束なく悲しかるべき事を思せど、耐へ難くなりまさらせ給へば、つひの別はさてのみやはと、せめて强く思しなりて、年頃出家の本意おはして、つひの御住處

(一)御傍に—中君の。(二)異人々—それ以外の人々は。(三)大納言殿の上—大君。(四)し給ひつる御あたりに—物怪のみ給ひつる御あたりにの。(五)御傍—御傍には、おいでになら(六)君のなどもろ行かじとて—大君が中君の部屋に行くまじと制し云つて。(七)御乳母—乳母達も、中君の部屋に行くまじと制し云つて。(八)嘆き泣き給ふ—上の部屋へ行く事を止める。(九)つてに—人傳に。(十)月頃—日頃。(十一)起き臥し人の訪ふまで—病狀一層ひどく重つて來たと云ひなして。(十二)物怪—氣が鬱して。(十三)ほれ〳〵しく—氣が鬱して。(十四)左衞門督—大臣の長男。中君の心細く思つたが、仕方もないので、許り居られると云ふ事を。(十五)大納言—大臣の長男。中君の秘密については何も知らぬ人。(十六)此所は大納言殿の一の事でもあつたら、ここに居られる大納言にもすまない。(十七)殿の—父大臣がお聞になつて。(十八)人の命知らねば—人の命は、何時死ぬるか分らぬものであるから。(十九)いと心なき樣なり—こゝで中君が聞いて、大納言にそんな不淨な話を聞かせるとは注意の行き屆かぬ仕打と、思はれる。(二十)人の命知らねば—人の命は、何時死ぬるか分らぬもの。(二十一)試みむと—病氣がよくなるか何うかをためして見ようと決心して。(二十二)物問はせ—陰陽師にその事を占はせると。(二十三)所去りてはよかりぬべし—今の場所を離れて、養生するとよくなるでせう。(二十四)故上の—なき母上の。(二十五)一條なるが—一條邊にある母上の持つて居られた家が。(二十六)逃るまじき命なら—中君の死ぬる事が何うしても免がれないやうなら、私が中君に代つて死ぬるから、何うか中君の命を助けて下さい。(二十七)祈り—父大臣が下さ神佛に祈る。(二十八)積にや—その祈禱の効果があつたにや、ためか。

對の御方少將小辨許り、御傍に夜晝添ひ侍ひて、異人々をば御あたりにも寄せず。大納言殿の上をば、對の君「御物怪のかくのみし給ひつる御あたりに」と云ひなし、御乳母どもも行かじとて、いみじく制し申せば、覺束なしと思せど、とをやかに打見給ひつゝ、嘆き泣き給ふ許りを、つてに聞き給ふに、大納言殿は心肝も盡き果てて、いといみじく忍び難く思さるゝに、月頃も例ならざりつる心地の、怪しくのみなりまさるなど云ひなし給ひて、起き臥し人の訪ふまで、ほれ〳〵しく思し侘びたるを、大臣物も覺え給はぬに、左衞門督、その事となくて月頃經ぬるは、賴もしげなきわざなるを、此所は大納言おはする所にて、殿の聞き給はむ事も、人の命知らねば、いと心なき樣一字イやうなり。外に盗み出で奉りて、試みむと定めて、物問はせ給ふに、陰陽師「所去りてはよかりぬべし」とのみ占なひ申せば、故上二字イうへの領じ給ひし所一條なるが、少し荒れたるを、俄に修理し繕ろひて、渡し奉らせ給ふ。かく云ふ程に三月にもなりぬ。大臣、逃るまじき命ならば代らんなど、祈り申し給ふ積にや、

卷

二

(一)かくのみ思ひ浮れ給へる―夫の大納言が此の樣に、心配許りして呆然としてゐるその樣子を大君が見て。

(二)如何にいと安げなく―大君は何んなに、心配して居られる事であらう。

(三)事なく―他の事は考へずに。或ひは、無事に平和であるやうにと言ふ意か。

(四)何方にも―斯樣にして大納言は云ふまでもなく、宰相中將に至るまで、中君の身の處置について心配してゐた。

(五)姫君は―中君は。

(六)いとといみじく耐へ難く―中君は益々衰弱して、最早や命が助からないと思はれるまでに弱つたので。

(七)心あはたゞしくせん方なく―お付の女房達は、あはてゐる許りで致し方もなく。

(八)常の如くたゆみ〳〵て―何時もの通り病氣だと油斷して、何うして此んなに病氣が重くなつてしまつたのだらう。

(九)久しき病の―長い間の病氣が一寸よくなつて、又此の樣に重るのは恢復の見込がない。

いみじく世を亂れ思したる氣色なるを、かくのみ思ひ浮れ給へる御氣色を見給ふが如何にいと安げなく思ふらんかし。誰が御爲めにもいみじく便なくも見苦しくある事の樣かな。終に如何になるべき事どもならむ。事なく何方にも此の事いみじく嘆かしく佗びしくのみ覺ゆ。姫君はたゞいかで骸をだに留めず無くなりなむとのみ思し入るに、いといみじく耐へ難く弱げになりまさり給ふに、心あはたゞしくせん方なく、大臣の君（太政大臣）「常の如くたゆみ〳〵て、如何にしつる事ぞ」と泣く〳〵濕ひ居給ひて、久しき病の絶え間ありて、いとかく重くなり行くはいと賴もしげなき事なりと思し迷ひたり。

て、大納言(一)「今朝とく物し給ひぬと聞き侍りつれど、見え給はざりつれば、虛言なりけりとこそ思ひ侍りつれ」と宣ふ。宰相中將(二)「彼方にいと珍しげなき有樣に惱ましげに物し給へるを、心苦しく見給へつる程に」と申し給へば、大納言(三)「盡きせずいとほしき御心地の樣かな。などかくのみは」と、さらぬ顏に宣ひなすまゝに、涙は先に浮きぬるを、なほさらぬ顏に紛らはして、大納言(四)「なにがしも亂り心地の取り立てゝ苦しと云ふべくも侍らねど、例に變りて物憂くほれ〴〵しくて、おぼろげに思ひ起さずば歩などもせられ侍らねど、さりとて、そのまゝに沈みなば、世にこと〴〵しくもてなし侍らば、殿にも思し嘆かせ給はむかたはら痛さにこそ、せめて忍び侍ればにや、斯樣に物せさせ給ふを、女は心弱くて沈み入らせ給ふならむかし。誰も千歲の松ならねば、物のみ心細く思ひ侍りて、すゞろに心弱きやうに、なりもて罷るかな」と宣ふまゝに押し拭ひ給ふ氣色の、忍び難げに物深げなり。宰相中將「さ思し召されば御祈などをこそ常よりも添へ給はめ。さのみ忍び過ぐさせ給はんは味氣なき事にこそ」など聞えて罷出給ひぬ。心得て氣色見るに、大納言はいみじくも思ひしめ給へるかな。ことわりかな。心淺き身に取りてもいみじく心盡くしなるべき事どもぞかし。上の

(一)今朝とく物し給ひぬと—今朝早くなつたがこちらにお出でになつたと聞いて居りましたが、おつたと云ふ人が、嘘を云つて居りましたのでなのだ。思ひつつて自分をだましたに—中君の方で、何時もと居らずに病氣で苦しんで居らるゝ氣の毒なので、見舞てる居たのでの毒なので、

(二)盡きせず—何時までもよくならずに、お氣の毒な御病氣の樣子ですが。

(三)亂り心地の—私も御亂り心地が惡く、特に苦しいと云ふ氣分がしもあります。

(四)物憂くほれ〴〵しくて—何時ふでもなく身體が退儀でぼんやりになつて居て。

(五)おぼろげに—並大抵の事では氣をひろげに—立てなければ、外出も出來なかつたのでれば—病の床に臥したなら。

(六)沈みなば—世間で仰山にこと〴〵しく騒ぎ立てられては。

(七)殿にも—大臣にも、心配をかけ始めるのが氣の毒さに。

(八)世にこと〴〵しく—世間で仰山に騒ぎ立てられては。

(九)殿にも—大臣にも、心配をかけ始めるのが氣の毒さに。

(一〇)せめて忍び侍れば—强ひて我慢をして居りますせいでか、大臣も安心して居られるのですが。

(一一)女は心弱くて—中君の如き女は氣が弱いので。

(一二)誰も千歲の—「憂くも世に思ふ心になくに叶はぬか誰も千歲の松」（古今六帖第四）

(一三)物のみ心細く思ひ侍りて—しみ〴〵と、物事を心細く思ひ込んで。

(一四)さ思し召されば—その樣に、氣分がお惡い樣ならば。

(一五)心得て氣色見るに—すべての事情を知つて、此の大納言の樣子を見ると、中將の心。

(一六)思ひしめ—深く物を思ひ込んで居る。

(一七)心淺き身に取りても—自分の樣に心の淺い者の身に取つて考へても、甚だ心配な事件なのだ。

(一八)上の—大君が心も亂れて、物思ひに沈んで居る樣子なのも

すなめりと心得給ふに、ましてと胸塞がりて、吾も涙を止めやらでまた沈み臥し給ひぬ。いとことわりなれば慰めやるべき方なくて、大納言の御方に參り給へれば、女房童花々と化粧じて數多所々に打群れつゝ、碁雙六打つもあり、繪物語書きなどするもあり、花をもてあそび、歌を詠み、文を書くもあり、皆思ふ事無げなるに、上ぞいと氣高く物鮮やかに清げなる樣して、さしも心地よげならずいたく世を思ひむすぼゝれたる氣色に眺め給へば、大方の有樣は差當りて思す事あるべくもあらず華やかなるを見るにも、いみじく嘆かしげに靜まりたる御方先づ思ひ出でられて譬しへなく見較べらる。宰相中將殿は出でさせ給ひぬるか」と問へば、女房「さもあらず、外にこそ」と答ふ。此の御方にはもとよりこまやかならねば、よき程にて外に參り給へれば、大納言は面杖をつきて、軒の雫を眺め入りて、いみじく物嘆かしげなる御氣色を、むべなりけり。聲も涙もと宣ひし御氣色を怪しと思ひしは、かくなりけりと思ひ寄らず、よそに思ひけるよと打見守るに、いみじく心苦しかりける有樣に並べたらましかば。などて引き違へしあやにくさぞとよと見ゆるも心憂く口惜しくて、とみに物も云ひ出られぬに、大納言今ぞ打驚きて眼押し拭ひ、さらぬ顏に

(一)胸塞がりて—中君も急に胸が一杯になつて、泣き臥してしまつた。
(二)いとことわり—中將の心。中君が泣くのも尤も。
(三)文を書く—詩を書く。
(四)皆思ふ事無げ—誰も皆心配が無さそうだ。
(五)上—大納言の北方。大君。
(六)さしも心地よげならず—大して愉快さうな樣子でもなくて甚だ世の中の事を考へて沈んで居る樣子で、外を眺めて居られるが。
(七)大方の有樣—この大君方の樣子に、總じて目下の所何も心配事がなく。
(八)靜まりたる御方—中君の方の哀愁に閉されてゐる樣が。
(九)殿は—大納言はおでましになりましたか。
(一〇)外にこそ—外の方のお部屋にこそ。
(一一)此の御方—此の大君の方には、宰相中將は、此の大君の方とは以前からあまり親密にして居ないので。
(一二)よき程—よい加減の時分に、大君の部屋を去つて。
(一三)面杖—頬杖。
(一四)むべなりけり—中將の心。事情を知つて見れば、その悲みも尤もだ。
(一五)聲も涙も—前に大納言の詠んだ歌。
(一六)かくなりけりと思ひ寄らず—あの大納言の物思ひに沈んだ有樣は、此の中君の事の爲めであるとは自分には思ひもかけず。
(一七)よそに思ひけるよ—他人の事で悲んで居られると思つた。
(一八)打見守るに—宰相中將が大納

言の顏を見つめるにつけても
(一九)いみじく心苦しかりける有樣—中將の心。此の大納言と中君とを結婚させたならば、萬事好都合であつたのに。
(二〇)あやにくさぞとよと見ゆるも—何だつて合憎に緣談が違つた人と結ばれたのであらうかと中將が思ふにつけても。
(二一)今ぞ打驚きて—大納言は今になつて、漸く中將の來て居る事に氣が付いて。

(一)參らぬ日は―私があなたのお部屋に、參らぬ日はございませんが。
(二)打泣んかつゝ―「心苦しげに聞え給へば」にかゝる。
(三)柑子―蜜柑。蜜柑等を取り寄せたのは姙娠の中君に勸めるためである。
(四)我も―中君も。
(五)此の君の見え給はぬは―宰相中將がお出でにならぬ時には。
(六)身の心憂く耻かしく―姙娠して以來。
(七)いと慎ましけれど―宰相中將ごに顔を會はせるのも、甚だ尻込みが入らんも思ひ隈なければ―ひたすら泣き臥して居つても悲しみの果もないので。
(八)沈み入らんも思ひ隈なければ―ひたすら泣き臥して居つても悲しみの果もないので。
(九)思ひ隈なしは、考へ盡くさぬ事もなく、ぢつと思案に耻ける意味。
(九)つくろひなく―涙で顔を洗ふだけで、何の化粧もしない。
(一〇)にほひわたりて―一層色艶が出て。
(一一)見なし給ひつるまみ―だるさうな眼やうな顔の樣子などは。
(一二)あはれこれをいたづらに―此の句は「思ひなしつるぞかし」に、此の中君の病氣をば、考へなかつた。
(一三)後は知らず―或ひは、將來は來の事などは考へなかつた。
(一四)御命のあらん事も―かういふ狀態では、中君の命も危いと兎角事も―今までは、中君の命も危いと思ひながら。
(一五)我が怠りのやうに―宰相中將は自分の過失から中君がこんな結果に陷つたやうに思はれて

參らぬ日は侍らねど、見奉り向はせ給ふこ（イとの隔たるやうに侍れば、いとど悲む方なく）こそ思ひ給へつれ」と、打泣きつゝ柑子やうの物など取り寄せて心苦しげに聞え給へば、我も實に此の君の見え給はぬは覺束なく思ひ慣ひにしを、身の心憂く耻かしくなりにし後より、心の鬼に空恐ろしく耻かしくのみ覺えて、さやかにも向ひ奉る事もなくて月頃になりにけるもいと悲しく、いと慎ましけれど、沈み入らんも思ひ隈なければ、少し頭擡げ給ひたり。夜晝涙のみ流るゝよりほかのつくろひなくて月頃になりぬれど、露許りも衰へなく、御顔はいとゞにほひわたりて、打面痩せ給ひつ（二字イへる）美しさは似る物ぞなきや。いさゝか引きもつくろはぬ額髪は、殊更にひねり懸けたらんやうにこぼれかゝりて、いと慎ましげにたゆく見なし給ひつるまみつらつきなど、云へばおろかなり。あはれこれをいたづらに後は知らず思ひなしつるぞかし。御命のあらん事も難しと、つくゞと見守れば飽かず悲し。我が怠りのやうに足摺とか云ふやうに泣きぬ許りの心地ぞする。まして大臣の打聞きつけて思さむ心の中いみじくいとほし。さりげなくと忍べどもみたらず（イえたへず）泣かれぬるを、此の事聞き給へるとは思しも寄らず、たゞ我が御心地のかくのみあるを、得世にあるまじと思

足摺をして泣きたい樣な氣持

さりげない風を仕樣と耐へて居たが。

(一六)大臣の打聞きつけて―父大臣が、中君の姙娠した事を知つたならば。
(一七)さりげなくと―宰相中將は、
(一八)みたらず―一本の「えたへず」を取る。我慢しきれずに。
(一九)此の事聞き給へると―中君は中將が、自分の姙娠した事を對の君から聞いたとは思はないで。
(二〇)得世にあるまじと―中將は自分が到底命を助かる事は出來まいと思つて、泣いて居るのであらうと中君は推量した。

(一)飽かず口惜しき―さういふ不始末を仕出かしたとは。
(二)此の際を―中君が出産する時の事を、何うかして人に知れない様に取り計らひたいものだ。
(三)身を捨ててこそ―命を捨てて中君の爲めによろしく計略を廻らさう。
(四)見せ奉らせ給ひそ―中君に、心配して居る風を見せるな。
(五)いとゞ思し入らむに―中君が益々悲に沈んでは重大事。
(六)事にもあらず―何でもない様な風をして。
(七)平かにてだに―無事出産が出來たならば結構な事だ。
(八)此の君も―宰相中將も。
(九)御前に歸りおはして―宰相中將が中君の傍へ。
(一〇)人近くは―中君の傍近くは、女房達を近付けないので。
(一一)さるべきどち―親しい者同志
(一二)いと近く―宰相中將が。
(一三)ゐざりのき―少將小辨が。
(一四)御ぐしなる―一本の「さくら」の誤。櫻襲。
(一五)御衣の限り身もなくて―着物だけで身體はない様に見える
(一六)身體が痩せて居る様に見える
(一七)顔を引き入れて―着物の襟の間に顔を引き入れて。物思はしき様。
(一八)眼も昏るゝ―宰相中將の心地ゆの隙―少しでも氣分のよい時には、工合のよい様な風なして。
(一九)御髮もたげて―起き上がつて、時々は私達にも顔を見せて下さい。

もだゝしき面目ある御有様を見奉らんとこそ明暮思ひつれ。飽かず口惜しき事なりや。云ひてもかひあるべき事にもあらず。實に此の際を人の知るまじくいかでか構ふべき。身を捨ててこそ思ひたばからめ。いたく此の事嘆きてな見せ奉らせ給ひそ。いとゞ思し入らむにいみじかるべし。事にもあらずもてなして慰め奉り給へ。後行く先の事は知らず、平かにてだにあらせ奉りなば」など語らひて、此の君も此の事聞きて後は胸塞がりて夜晝嘆かしくいみじきを、御前に歸りおはして見れば、人近くはもてなさねば、女房童べなど物の後にさるべきどち語らひていとのどやかなるに、御前には御帳の前に少將小辨許りいみじく涙ぐましげにて、世を打眺めて侍ふに、いと近く參り給へれば、少しゐざりのきぬるに、御几帳押し遣りて見給へれば、御ぐし なる御衣どもの上に蘇芳の濃く薄き重ねて、いとつやゝかなる御衾を押し遣りて、雛を作り臥せたらんやうに、御衣の限り身もなくて見えたるに、打ち遣られたる御髮の裾は房やかにこちたくて、顔を引き入れて臥し給へるがいみじく哀れげなるに、眼も昏るゝ心地して、「宰相中將」などかくのみしぼゝみ過ぐさせ給ふ。つゆの隙おはしまさんにはよろしくもてなし給ひて、御髮持上げて時々は見えさせ給へ。幼くおはしゑしゝより取り分き思ひ初め奉りて、一日も見奉らぬ日の隔たり侍らば、いといみじく身に愁ある心地し侍るに、月頃かくのみ理もれ過ぐさせ給ひて、

ら、隔ては如何なりける事ぞと、かの君にさへ心も措かれじ。大納言は率て隱し奉りてんといられ給へど、ほかにおはせばさもや思ひ寄らん。此の御身からにて、名許りはさはれ、後の事になしてん。人樣の事を思ひて、かの御爲めにもさばかりの事をば如何引き出でんと、少將と語らひ合はせて、春雨のどやかに降りたるに、宰相中將此方に侍ひ暮らし給ふに、今日ぞ云ひ出でむによからめと思ひて、御前にはこれかれ侍へば、姫君も此の君に聞かせつべかめりと思さんも心苦しければ、「局に下りて聞えさすべき事なむ。立ち寄らせ給へ」と云はせたれば、例ならずと驚きながらおはしたれば、几帳押し遣りてと寄ィおらせ給へども、いと耻かしげなる樣したるに、打ち出でにくく思へども、我が心知りなる事かはとせめて思ひなして、對の君「此の御心地のかくのみ苦しき」など云ひ始めて、初めよりの事を細かに語りて、對の君「かゝる事を此の月頃見奉り煩ひ侍り。如何し侍るべき」と云ふを世の常ならず聞きて、ほろ〳〵と打泣きて、宰相中將「さるべきにこそ物し給ひけめ。人の上の樣々なるを見聞くにも、人に優れ給へる御有樣なれば、などてかなのめにおはせん。何時しかお

(一)隔ては如何なりける—宰相中將に打明けずして、隔てをおかるは怪しかりん事だと。
(二)かの君に—宰相中將から隔てをおかれない樣にしよう。
(三)率て—中君を連れて隱させてしれて、何處かに姿を隱させて居らるべきと。
(四)他におはせば—大納言が他の處家に居るものならば、さうふ處に置くもしようと思ひ付かう。
(五)此の御身がらにて—此んな立派なの御身分ならのに。
(六)名ばかり事—「さばかり」にかかる。
(七)さはれ—他人の噂は兎も角も後廻しとして。
(八)かの御爲めに—大納言が中君の爲めにも、大納言が中君を隱すといふ樣な事は左樣に連れて委をしたくないものだ。
(九)此方に侍へば—此の方で。
(一〇)姫君も此の君に—中君も、自分が姫の事を對の君が兄上に話しなるのだなと、おもひて、中君のお部屋で直ちに宰相中將に委細の話をするのは局に下りて—對の君の部屋に於いて、申し上げたい事があります。
(一一)云はせ—使の者をして、宰相中將ならず—對の君がその局に自分を招くとは、いつになく宰相中將は早速對の君の部屋と寄らせ給へ。
(一二)几帳押し遣りてと寄らせ給へ—宰相中將は對の君の几帳を押し退けて、突然對の君の傍近く近寄れたけれども「と寄らせ」一本によれば「通らせ」。
(一三)いと耻かしげなゝ樣—對の君が何と耻かしく思はれる程に、宰相中將の樣子が美しいので。
(一四)我が心知りなる—自分が始めから、事情を知つて仕出かした過失でもない。
(一五)なのめにおはせん。何時しかお—此の姫嫁の事を此の頃持て煩つて居るのです。
(一六)さるべきにこそ—それも前世の因緣。
(一七)人に優れ給へる—他の女に比べると、中君は人よりも優れてゐる。
(一八)なのめに—疎々として一生を終りはすまい。「なのめ」は平凡、普通等の意。
(一九)いつしかおもだたしき—早く誇るに足る、名譽なる中君の出世。是は中宮等になる事を意味して居る。

(一)我があたりにかゝる事—自分の兄弟に関係して居る事とは思ひ寄らずかし。(二)一夜の名残、人間に蔭につきて寛ひ給ふ氣色の、いといみじく頗はしければ、つゆの隙あるべくもあらず、中の障子も上の渡り給ふ折ならでは、つと掻固めて、いさゝかの風のまよひもあるべくもあらずのみもてなせば、(八)いみじく心憂けれど、げにそれもことわりなれば、夜は寝覺め、晝は眺め暮らしてのみ過ぐし給ふ氣色、いみじくさりげなくもてなし忍び給へど、女君は見るかひなく思すにやと耻かしく思し知れど、如何は宜ふべき、怪むべき方なければ、心に結ぼゝれてのみあり渡り給ふ程に、此の月も晦日方になりぬれば、對の御方月日の過ぐるを數へつゝ、御乳母子のいとはかなくさく容貌よきが少將小辨とて姉弟あると三人して、ともかくもおはせん程の事仕遣るべき方なきに、宰相中將大方の人がらも兄君よりは懷かしく、情俺くまである所つきて、幼くより此の御方に哀れなる物に取り分き心寄せ、此の御事をば身に代へても如何にてと思したるに、如何はせん、知らせてむ。待ち聞かむ程ぞ淺ましと思ふとも、人に氣色知らすべくも物し給はぬ人がらなり。知らせずとも氣色は怪しと見てん物かな

(一)我が兄弟の名残—大納言はあの晩(二)一夜の名残—人間に蔭につきて—人の居ない部屋に忍び込んで以來(三)人間に蔭につき—人の居ない際間に蔭につきて—人の居ない部屋に忍び込んで以來(四)頗はしければ—物憂にあつて中心が殘つて。(五)上の—大君の。(六)掻固めて—對の君の心。(七)風のまよひ—風の迷ひ入る隙間もない様に用心をするので(八)いみじく心憂けれど—大納言の心は。(九)いみじくさりげなく—黄だしく心中の物思ひを、さりげない風をして忍び隱して居られるが。(一〇)女君は—大君は。(一一)見るかひなく—その大納言の愁はしげなる様子を察して、自分に嫌氣がさしたのだらうかと大君に耻かしく思つた。(一二)怪むべき方—不審を訝す方法もないので。(一三)心に結ぼゝれて—大君は心中鬱々として暮して居る。(一四)此の月—正月。(一五)「なく」—一本に「なし」なし。(一六)姉弟—姉妹。(一七)ともかくもおはせん—出産の際の處置に取るべき方法がない。(一八)兄君よりは—宰相中將の人物は、兄君の衛門督よりも情深い。(一九)此の御方に—子供の時分から中君をひいきにして。(二〇)此の御事をば—中君に關する事ならば。(二一)如何にせん—對の君の心。何とも致し方がないから、此の秘密を宰相中將に知らせてやらう。(二二)身に代へても如何にてと—命にかけても、何とか處置をしてやらうと思つて居られるので。(二三)人に氣色—人に秘密を打明けるほどな人間ではない。(二四)知らせずとも—知らせなくとも、大抵察しては居られるだらうのに。

ふなる、人數多中障子のもとに打ちそよめく音すれど、とみに立たむとも覺えず、階隱の此方面に盛りに咲きこぼれたる櫻の、色も匂もたど〳〵しきまで霞み渡れる夕の空を、端によりかゝりてつく〴〵と眺め入り給へる容貌は、常よりも云ふ方なく匂ひけうらに、もてなし樣は靜かに心憎く艶めきて、物をいみじと思ひ入り屈じ萎れ給へる樣の、やゝもせば涙も得愼むまじげなるを、宰相はいと怪しくもあるかな。いみじき事を思すとも、いとかく色に出でて思すべき人にはあらず。世に取りて我が御身はつゆ許りも愁はしく思すべき事もなし。さかしき人賢き人なく亂るゝ事こそあらめ。それは何許りの人にてか此の御心をかく思ひ惱ましさんと打傾きつゝ、物を聞え止みて、めでたの人の御樣や。我女にて、かばかり打覺え眺めたらんを見ては、いみじからむ后の位をも捨てゝなびきよりなむかしと、つく〴〵見守り入りたる花の木末に、鶯のいと華やかに鳴きたるに、

我がごとや花のあたりに鶯の聲も涙も忍び佗びぬる

と獨言つまゝに、涙もこぼれぬるを、さりげなく紛らはして立ち給ひぬる氣色の、物深く哀れげなる樣ぞ類なき。されば よ、えならず思すべき御心の中なりかしと耳止して出てゐる。

(一)人數多―大君が歸るので。
(二)とみに―急に立たむとも―大納言は立ち上らうとも思はない
(三)階隱―階段の上へさし出してある屋根。
(四)此方面―こちら側に。
(五)色も匂もたど〳〵しきまで―色も艶もはつきりとは見えぬまでに、一面に霞がかかつた。
(六)匂ひけうらに―顏の色艶が美しく。
(七)いと怪しくも―中納言の樣を見て、宰相中將の心。
(八)いみじき事を―大納言は心中何んなに心配事があるとも。
(九)世に取りて―世間並に考へれば、大納言の御身には。
(一〇)さかしき人賢き人―すぐれた人と云はず、賢い人と云はず何んな人でも、戀に心を亂す樣。
(一一)何許りの人にて―何程の美人なので、此の大納言を是程に思ひ惱ませて居るのだらうと。
(一二)打傾き―宰相中將の不審がる體。
(一三)我女にて―自分が若し女であつて、斯樣に美しい男が物思ひに沈んで居るのを見たならば。
(一四)なびきよりなむかしと―此の詞こゝで切れて、下の「されば よ」にかけて見る。
(一五)つく〴〵と見守り入りたる―大納言の體。
(一六)我がごとや―自分と同じ樣に花に宿る鶯も悲しみに耐へかねて立ゝ鳴き涙なこぼして居るのだらうか。風葉集春下に、寢覺の關白の歌として、宰相中將の心。
(一七)立ち給ひぬる―立ち去つて行く。
(一八)されば よ―大納言の歌を聞いて、宰相中將の心。
(一九)えならず思すべき―一方ならず、心中に煩悶して居られる事があるのだと。
(二〇)耳止まれど―大納言の歌に注意が引かれる。

(一)いさゝか同じ心に—大納言の心。自分の味方となつて一寸した事でも相談にのつてくれる様な人間は一人も居ない。

(二)如何に云ひ遣りすべき事にかと、起き君に文通したらよいだらうかと。「遣りすべ」は「遣りつ」の誤か。

(三)夕方殿におはしたれば—夕方大納言は大臣の所へ参つて見ると。

(四)昨夜より—大君お付の女房の詞。

(五)姫君の—中君がいつもよりお加減が悪いので。

(六)あの御方に—大君は中君の部屋に居られます。

(七)渡らせ給へと—自分が歸つたから、大君にこちらへお歸りなさいと申し上げてくれ。

(八)いとゝほしき—中君がそんなにお悪いとは甚だお可哀想だ。

(九)如何なる御心地—何ういふ御病氣でいつもそんなにお悪いのでせう。

(一〇)例の隅より—此の前も忍び込んだ隅の方から、中君の部屋へ入つて來て。

(一一)宰相中將—中君の兄弟。

(一二)うけたまはる—聞く所によれば、中君はいつも御加減が悪いと許り承つて居りましたが。

(一三)常よりも—昨晩はいつもよりもお悪いと。

(一四)驚きながらなむ—驚いて、早速おが見舞にあがりました。

(一五)不覺に—病氣が危篤であつた後。

(一六)いと怪しく—不思議な御病狀で居られたが。

(一七)大臣などの—大臣や大君等が中君の部屋へ看病に集つて。

て、(一)いさゝか同じ心につゆの事を交す人はなし。我が御心は富士の峯淺間の嶽よりも焦がれまさる事の樣は、げにいみじく便なし。(二)如何に云ひ遣りすべき事にかと、起き臥し嘆き侘びつゝ、夕方殿におはしたれば、(三)女房、(四)昨夜より姫君の常よりも心地まさらせ給ひたれば、あの御方になん(五)」と聞ゆるにも、先づ打嘆かれて、大納言「渡らせ給へと聞えよ」なども云はれず、大納言(六)「いとゝほしき事かな。常にかくのみは如何なる御心地なれば物せさせ給ふらん」など打ち云ひなして、いよ／＼引きつくろひて、例の隅より歩み渡りて、御簾の前につい居給へり。驚きて宰相中將出でて御褥參らす、大納言「うけたまはる、世の限り心苦しき御氣色とのみ聞き侍るを、常よりも增さらせ給ふよしをあなたの人々申し侍りつれば、驚きながらなむ。如何やうに物し給ふにか」と宣へば、宰相、「去年の秋不覺に侍りし後、更に現樣なる折なく、いと怪しくのみ物し給へど、常の事に今は思ひなりて、さのみち心驚き侍らぬに、物怪などのし侍るにや、今宵はいと苦しげに侍りつれば、大臣などの此方に集ひて、打休みに今なむ彼方に物し侍りぬ」と聞え給ふに、大納言「こよなく久しくなり給ひぬる御心地かな。たゆませ給ふこそ怪しけれ」など云ふとも覺えず。我が上は今ぞ彼方に渡り給

(一)に今は思ひなりてさのみも心驚き侍らぬ—等と、油斷をなさるのがいけません。

(二〇)云ふとも覺えず—大納言は胸が一杯なので、そんな口先の挨拶なと、何を云つて居るのか物も覺えない。

(一八)打休みに—休息する爲めに、大君達は今丁度自分の部屋へ歸る所です。

(一九)たゆませ給ふこそ—「常の事

く苦しげなる御氣色を、(一)いといとほしと見奉り驚き給ひて、(二)大臣の君に御消息聞え給ひたれば、渡り給ひて、御修法に侍ふ中に、(三)驗かしこきを召して、御加持參りなどし給ふ。(四)かの御方の人々も、(五)「殿はやがて晝出でさせ給ひにけり。今宵は歸らせ給ふまじきなめり」と申せば、上もやがて此方に御殿籠りぬ。姫君かく思し扱ひ給ふ御氣色のおろかならぬにつけても、世に知らずまばゆく心憂き身の有樣、終には如何に憂き物に思し果てんと思せば、いみじく慎み給へど、止め難く泪のみ流れ出で給ふを、(九)御物怪なめりと誰も誰も見奉り嘆き給ふに、明けぬれば對の御方我が局に下りても、(十)如何に云ひ遣るべき事にかと打眺めて居たるに、(十一)此の御文を取り入れて見るに、(十二)いとかく煩はしからず慎ましからぬ事ならば、あはれも忍ぶべくもあらぬ御書樣言の葉かなと、打返し〳〵見るに、(十三)昨夜押し入りおはしたるも心疚しく、出で給ふべくもあらざりし侘びしさに、とく渡らせ給へと聞えし、げに如何に思しけむ、打微笑まれて、(十四)中なる御文を引き解きて、あはれ知らん人に見せまほしけれど、ひたぶるにいみじとのみ思しためるには、かひもあらじものをと思ひつゝ、(十五)引き返し我が御返の限りを例の押し放ち言少なに書かれたるを、心疚しく見るかひなしと見給ひ

(一)いといとほしと見奉り—大君が中君の樣を。
(二)大臣の君—中君の病狀がよくないと父大臣に知らせたので。
(三)驗かしこきを召して—御修法をする爲めに參つて居る僧僧の中でも、特に効驗のすぐれてゐる人を召して。
(四)かの御方の—大君の方の女房達も。
(五)殿はやがて—大納言は、間もなくお晝頃お出ましになりました。
(六)姫君—中君。
(七)かく思し扱ひ給ふ—中君の心配して、親切に世話をして呉れるにつけても。
(八)まばゆく—恥しく。
(九)思し果てん—秘密を知つた時には、姉君が何んなに自分を嫌な奴だと思ひ込んでしまはれる事だらう。
(一〇)御物怪なめり—何か憑物がとりついて、斯樣に涙を流させるのだ。
(一一)如何に云ひ遣るべき—何う云つて云ひ紛らはしたらよからうかと。
(一二)此の御文—前に記した大納言の手紙を使が持つて來たので其を取り入れて見ると。
(一三)いとかく煩はしからず—對の君に、此の樣に、中君との間に、心懸りな秘密のない間柄であるのならば。
(一四)昨夜押し入り—對の君が昨夜の事を追懷する樣。
(一五)打微笑まれて—昨日の事を思ひ出すと、對の君は思はず微笑ませられて。
(一六)中なる御文—對の君宛の手紙の中に同封せられてゐる中君宛の文。
(一七)引返し我が御返の限りを—使の者を待たせておいて、直ちに對の君は、自分だけの返事をし、つもの通り愛嬌なく簡單に。
(一八)書かれたるを—書いてある返事を、使の者が持つて歸つたのを大納言は見て。

(一)思ひ紛らはして—是は下の「身にしみ返りて耐へ難きに」といふに對照してある言葉で。(二)げにやよろしかりけり、まだ知らず珍しく哀れなりつるに、あらう。(三)腰のしるしをさへ添へて、(四)何のをかしう見んなる節も見えず、ひたぶるに恐ろしく思ふ心もそれほどでもなかつたのでといふ意味であらう。(五)枕の下は海人も釣す許りに浮かび明かして、對の君、君の昨夜の心低いといふ事の爲めに、女たつてゐた時には、その身分の(六)陸奥紙七八枚

せめて思ひ紛らはして、げにやよろしかりけり、まだ知らず珍しく哀れなりつるに、腰のしるしをさへ添へて、何のをかしう見んなる節も見えず、ひたぶるに恐ろしく佗びしと思ひまどひ、消え入りつる氣配の、身にしみかへりて耐へ難きに常よりもまどろまれず、枕の下は海人も釣す許りに浮かび明かして、對の君、君の昨夜の心の憂く淺ましく、此の世ならざりしをひたすらに思ひなりぬるよし、陸奥紙七八枚ばかりに盡きもせず盡くして、さすがにまた引き返し、此の御文御覽ぜさせて、御心地の隙に御返必ず取りて給へ。さらば昨夜の怨みも少し解けなむと、細々と書き給ひて、中に白き紙の世の常ならぬ樣したるに、心殊に引きつくろひて、書きも遣られず涙かけつゝ、

わくらはに流れ逢ふ瀨を涙のみ云ひやる方もなくてやみにし

爰にはかの上渡りて見給ふに、さりげなくて對の御方寄りて、二人の御涙に絞れあふべくもあらず濡れそぼちたる御衣ども、引き遣り繕ろひ奉れど、大方も所狹く苦しき御身に、いとゞ恐ろしく佗びしかりつる名殘に、かたはら痛ささへ添へて、いみじ

(七)此の世ならざりしを—是も前世からの惡緣だと深く覺つたので。(八)陸奥紙—檀紙、造り出しの陸奥紙といふ。(九)さすがにまた引き返し—左樣に怨み言を書いたものゝ、また思ひ返して。(一〇)この御文御覽ぜさせて—大納言が御文の君へやる手紙の詞の續き。此の手紙の中に同封してある中君宛の歌を、何うか中君の御氣分のいい時には返歌を書いて貰つて下さい。(一一)涙かけつゝ—涙の雫を手紙に落しながら。

(一二)わくらはに—中君宛の歌。たまゝ〳〵あなたにお目にかゝつたのに、泣く許りで何もお話せずに別れてしまつたのは甚だ殘念です。(一三)爰にはかの上—中君の部屋には大君が見舞にやつて來たので。(一四)對の御方寄りて……繕ろひ奉れど—對の君が中君に傍近く寄つて中君を庇つては居るけれど。(一五)絞れあふべくもあらず—大納言中君二人の涙で、絞る事も出來ないまでに濡れた中君の着物を。(一六)引き遣り—亂れた所を直してやる。(一七)所狹く苦しき—姙娠の身。(一八)かたはら痛ささへ添へて—大君には良心が咎めるのでも。

くがりながら、(一)女の御氣色の誠に消え(イも)果てぬ許りなるが心苦しさに、(二)飽かず引き別る丶程、誠に身(三)を分ち止むる心地ながら、(四)南のそばより出て、角の間の障子の中に入り給ひて、少將が、(五)渡り給ふべき道暗くなすとて、御殿油(六)搔き直すとて立ちたる裳の裾を取りて引きたれば、さしよりたるを、障子の中へ引き入れて、對の君の今宵の淺ましきイきを云ひ遣り給はず泣く〳〵、大納言「今は現し心も無くなんなりにたれば、人(七)の聞き思はむ事など辿るべくもあらず」と、ひたぶるに荒れ立ち給ふ氣色に、聞えん方なければ、たゞ打嘆きて、少將「我(八)が御心一つを遣らせ給ひて、などかく怨めしき御心にも侍るかな。早出でさせ給ひてよ。自ら(九)御氣配紛るべくもあらず、洩りもこそ聞え侍れ」など云ふもしるく、(一〇)かの(一一)御伴に參りたる少將と云ふ人、大君方の少將「少將の君はいづくにぞ」と尋ぬる聲すれば、云ひあへず、戸を搔い放ちて出だし奉りて入りぬ。(一二)飽かずいみじき名殘、今宵はいとゞ現し心あるべき心地せねば、人は如何思すべきと思せば、やをら出で給へば、御消息なども上に聞え給はで、我が御方に打臥して、思ひ廻すに、(一三)但馬が女と思ひ紛れたりし名殘は、人からの淺さを

(一)女の―中君の。
(二)飽かず―引き別るゝ程―飽き足らぬ心をもつて、大納言が別れて歸つて行く時には。
(三)身―分ち止むる―一身を二つに留まりさせたい氣持はし乍らも。
(四)南のそばより―帳臺の南側の隅から出て。
(五)渡り給ふべき―大納言の通り道を、他の女房に見付けられない爲めに暗くする。
(六)引きたれば―大納言が少將の裳を。
(七)人の聞き思はむ事など―人目を憚りうなどとに思ひも致しません。
(八)我が御心一つを―自分勝手な事許りなすつて。
(九)自ら御氣配紛るべくもあらず―あなたがこゝにお出でになつては自然とその御樣子が、紛れもせず中君の部屋の人々に聞れるであらう。
(一〇)云ふもしるく―聲が洩れると少將が云つた通りに、中君の部屋では少將の聲を聞きつけて。
(一一)かの御伴―大君のお伴をして來た大君方〻女房の名。
(一二)云ひあへず―中君方の少將は大納言に言葉を終りまで云はずに。
(一三)入りぬ―中君の部屋の中へ入つてしまつた。
(一四)飽かずいみじき名殘―大納言は思がけられずして、不滿足な甚だ憤懣に耐へぬ情が消えないので、心あるべき心地せねば！
(一五)現し心あるべき心地せねば！―下の「我が御方に打臥して」の句にかゝる。
(一六)人は如何思すべきと―何時までも中君の部屋の近くに居ては、人から怪しまれるかも知れぬと思つたので。
(一七)御消息なども上に聞え給はで―大君には何の案内もなしに默つて自分の部屋に入つて。
(一八)但馬が女と―中君を但馬守の娘と思ひ間違へてゐた時の氣持では。

(一)ありし夜にも劣らず—以前大納言が忍び込んだその時にも劣らずに。

(二)一つにまろがれて—髪の毛などが身體にびつたりとくつついて。

(三)こしらへやらぬ程に—大納言は未だ中君を慰めすかして意に從はさない中に。

(四)唯今御湯より—大君の云ひ付けられます樣は、中君の御氣分は何うであらうか、氣懸りだから。

(五)御有樣確かに—中君の御樣子を確に聞いて來いとの事でございます。

(六)御心地今日は—大納言の心。對の君が中君の御氣分は宜しいと答ふべきに—大納言が、中君の部屋から出て行く樣子がなほいの間に困つて。

(七)出で給ふべきに—何うぞ大君に渡らせ給へ—何うぞ大君に來る樣に仰つて下さい。

(八)なほ渡らせ給へ。見奉らせ給へ。いとわりなくなんと申し給へ—と云ふを聞くに、大君に御傳へ下さいと、わるくなんて居ると所ですと、大變困つて居る。

(九)云はむ方なくいみじければ、大納言「あないみじ。かれ聞き給へ。さはれたゞかくて侍らんよ」と云ひあへ給はず、對の君「吾が君、今宵は出でさせ給ひね。何時もかばかりの隙は」といられ佗ぶれば、さてありぬべかりつる事を、いといみじく憎く、心もつきなけれど、とばかりありて渡らせ給ふとて打ちそよめく音の近く聞ゆるに、大納言「殊更に顯してんと思せばこそ渡り給へと宣ふらめ。何か罷り出でん」とあやにくもて紛らはす心地、如何にげにいみじく佗びしかるらむと思ふさへ哀れに悲しくいみじきに、こゝら思ひ積る事も云ひ遣る方なく咽せ返るを、姫君はありし夜にも劣らずそら恐ろしくいみじきに、一つにまろがれて、汗と涙とに浮び出ぬ許りの氣色に消えかへりたる樣、云ひ知らず哀れげに美しきを、こしらへやらぬ程に、あなたより女房「唯今御湯より上らせ給ひて、今日は御心地如何おはしますらむ、いと覺束なきを、苦しげにせさせ給はゞ參り來む。よろしく物せさせ給はば、今宵は打休み侍りなむ。御有樣確かに承け給はりて」と云ふなり。御心地今日はよろしくなむ、打休ませ給ひてをなど答へよかしと思ふに、またさぞ云はむと聞き給ふに、對の君、出で給ふべき氣色の聞えぬに思ひ佗びて、對の君「常よりも今日はいと苦しげになむ。なほ渡らせ給へ。見奉らせ給へ。いとわりなくなんと申し給へ」と云ふを聞くに、

りてのみ臥し給ひたるに、物も覺えず、頭許り擡げて、對の君を控へて、わなゝき給ふを引き放たれぬ、せん方なし。對の君「吾が君や、などかくあやにくに心憂き御心にかあらん。いとかく思ひ遣りなくなどはよもとこそ思ひ聞えさせつれ」と、いみじと思ひてあはむれど、大納言「少し世の常にもてなし給はましかば、つゆの心をも慰めてこそはあらましか。ことはかりながら、いとゞ跡を絶ち給ふ怨めしさに現し心もなくなりにけるぞや。ともかくもな宣ひそ。たゞあちよりてさりげなくもてなし給へ」と宣ふに、云ふかひもなし。實に御格子下し、御殿油などに人々數多參りあへれば、御帳の外にゐさり出て物など云ひ紛らはし、さらぬ顏にと思ふ心地もいとわなゝかしく侘びしけれど、とかく聞き云ふべきやうもなければ、御乳母子の少將君と云ふとたゞ眼を見交して居たり。男は現とも覺え給はぬ心まどひに、見ても淀まぬとは誠なりけり。旅寢の見し夢には、つぶ〳〵と丸に美しう肥えたりし手當の、ひきかへたるやうに細くあへかになりたるに、腹いとふくらかなるを、はかなく引き結はれたる手當など愼む事なし。明暮見んにてだに、かゝる人を未だ近くては見ざりつるに、珍しく世の常の心地せじを、まいてあないみじ、これをさりげな

(一)對の君を控へて—對の君に取りすがつて、震へて居るのを。
(二)引き放たれぬ—中納言が引放さない。
(三)吾が君や—中納言に云ふ詞。
(四)思ひ遣りなくなどはよもと—あなたは斯樣に、思慮分別のない人ではまさかあるまいと思つて居りましたのに。
(五)あはむれど—侮辱をするけれど。
(六)つゆの心をも—少しは私の心も慰んだでせうが。
(七)ことはかりながら—一本の「か」無き方宜し。「ことわり」
(八)いとゞ跡を絶ち給ふ—全く消息を絶つてしまはれた。
(九)ともかくもな宣ひそ—あれこれと文句を云ひなさるな。
(一〇)たゞあちよりてさりげなくもてなし給へ—たゞあちらの方へ行つて、知らぬ顏をしつてあらせよ。
(一一)數多參りあへれば—燈火をつけ多數參り集つて來たので。
(一二)ゐさり出て—對の君が、女房達の中に大勢出て物など云ひ紛らはしてゐる。
(一三)旅寢の見し夢には—女房達と話をしてごまかして居る。
(一四)乳母子—中君の乳母の子。
(一五)見ても淀まぬ—引歌未詳。「水も淀まぬ」の誤か。
(一六)旅寢つの見し時には—以前中君に逢つた時には。
(一七)手當—手探りに女を觸つて見た時の感じ。
(一八)はかなく引き結はれたる—腹帶すらも結んで居る樣子も。
(一九)愼む事なし—隱れる所もない。
(二〇)明暮見んにてだに—下の「珍しく世の常の心地せじを」にかゝる詞。
(二一)珍しく世の常の—毎日中君と逢つても、常に中君を初戀の女の如く思つて、世間にありふれた女のやうな氣持はしないであらうのに。
(二二)まいて—まして。是は下の「あはれに悲しくいみじきに」にかゝる詞。
(二三)あないみじ—大納言の心。大きいのを、覺られぬ樣に隱して居る中君の心中は。
(二四)これをさりげなく—此の腹の

(一)常の事に—父大臣は中君の病氣を。
(二)打ちゆるびたり—氣をゆるして居られる。
(三)大納言に—下の「心憂けれど」にかゝる主語である。
(四)たゞ夢語などの樣に—夢で見たる事を話す樣な風で、中君懷胎の事を討の君が大納言に知らせて後。
(五)言傳—大納言からの。
(六)如何にも此の程—此の「如何にも」は、下の「立ち隱るゝ事侍らじ」にかゝる副。
(七)行く末如何にもゝ—將來は如何にもよき樣に取り計らひませうから、今は何うか知らぬ顏をして下さい。
(八)耳にも聞き入れぬに—大納言の言傳を。
(九)少し道理なれど—大納言の心其も尤もだが。
(一〇)人に人目を—人の見る目も構はず。
(一一)上は—大納言の北方、大君は。
(一二)御髮—髮を洗つて。
(一三)表に—大納言は。
(一四)小弓—當時の遊戲。
(一五)御前に—大君の傍には誰も居ない。
(一六)母屋より通りて—「より」は「に」の意。廂の間から母屋に入り込んで。
(一七)御格子—格子を閉めて。
(一八)近く參る人の—中君の傍近く接へて居た女房達が、云ひつけられた用事をする爲めにそつと中君の傍から退いて行つたいなば。
(一九)推し量りて—大納言は、中君の傍に人の居ないのをよく察して。

ば、常の事に目馴れて、おどろ〳〵しくきのみは心を盡くし給はず、打ちゆるびたり。大納言は、たゞ夢語などの樣に、さばかり云ひ知らせてし後、言傳はかなき御文などをだに、對の君吾が君如何にも此の程自らつゆの氣色も漏り侍りなば、いとゞ立ち隱るゝ事侍らじ。若し思ひの外に長らへさせ給ふ事もあらば、行く末如何にも〳〵」と云ひて、耳にも聞き入れぬに、少し道理なれど、いみじくあるまじく便なき事と云へども、いとかくしもあるべき事かと心憂けれど、我も人に人目を憚さず押し破るべき事の樣にはあらねば、沸き返る心地して忍び過ぐし給ふに、上は御髮すまし暮らす日、我は殿上人數多參りて小弓射などするに、射暮らし給ひて夕つ方入り給へれば、御前に人もなし。例の中障子の程に寄りて聞き給へど人音もせねば、やをら母屋より通りて聞き給へば、對の君の聲にて、對の君御格子參りて御殿油など參りてよ」と云ふなれば、近く參る人のゐさり退きたる程に、いとよく推し量りて、やをら帳の帷子を引き上げてすべり入り給ふを、思ひ寄るべき事ならねば、中君對の御方の參り給ふな」と問へば、答もせず、たゞがれの程の中暗なるに、たゞ中に入る氣色、人がらの紛るべくもあらぬを、いと淺ましく覺えて、中君いなや。こは如何に」と搔い探れば、衾押し遣りて添ひ臥し給ふに、女君は在るにもあらず沈み入

(二〇)中暗—家の中が暗いのに乘じて「薄暗」の誤か。
(二一)人がらの紛るべくもあちぬを—人の樣子が、紛れもなく大納言へ、あるので。
(二二)搔い探れば—中君の驚き驚く樣。
(二三)衾押し遣りて—中納言は蒲團を押し除けて。

(一)己が爲めは―下の「あながち」にいみじき―(二)さはれかくて心知りなる過失すら、男子の好色はさこそ侍れ。さはいかくて心知りなる詞。そのおれ父くて心知なる過失―そのうさんの事は別問題として、斯様に私が意識的に犯した過失であつても。(三)男子の好色は―男子が色を好むのは、致し方がないものである。(四)たゞあながちに―自分に取つては、事と云ふだけだが。非常に甚だ恥かしい。(五)聞かせ奉り侍らず―お父うさんには申し上げないのである。(六)いづくより―赤兒の母の素性は、明かさずにごまかして。(七)殿に迎へて―父關白の邸に引取つて。その子供をお父うさんの爲めにはあづけて。(八)御心も許しけて―お父うさんが私に來ればよいと思つて居られる、その御心を安心させてあれる。一本に「ゆかしてあれよう。(九)大納言―中納言。(一〇)成り給ふ様―下の「めでたさを―御顔色等(一一)御匂―御顔色等實に御立派であるが。(一二)此方には―中君の方では。(一三)紛れ難げに―腹が大きくなつて、ごまかす事が出來難くなる。(一四)大臣のつと添ひ給ひて―父大臣が、中君の傍につき添うて。(一五)常の御物怪―御持病がひどくなつたのである。常時は、大抵の病氣は惡物惡物怪は惡物の事。取りついたのだと信じられた。(一六)吾が君さりげなくて―あなた平氣な顔をしてゐらつしやい

中納言(一)「己が爲めは、(二)さはれかくて心知りなる過失すら、男子の好色はさこそ侍れ。さして此は深き科あるべき事ならねば、たゞあながち(四)にいみじき事に侍るめるが、女の爲めには實にいといとほしき事に侍れば、聞かせ(五)奉り侍らず。御前許りには漏らし侍るなり。若し平かに侍らば、いづくより(六)出で來たるともなく紛らはして、殿(七)に迎へてあづけ奉りてこそは御心(八)も許し奉らめ」と宣ふも涙ぐましくあはれげなる氣色淺からず。宮も物語にこそかゝる事はあれ、夢のやうなる事をも聞くかなと、いといみじくあはれがらせ給ふ。

司召(九)に大納言に成り給ひぬ。いとゞやむごとなく成り給ふ(一〇)様、咲き出づる花の様に華やかに成り増さる御匂(一一)のめでたさを、此方(一二)には月の重なるまゝに、程なき御身こちたく紛れ(一三)難げに成り増されば、つゆ御髪も持上げ給ふ時なく、月頃はかなき菓物をだに見入れ給はず、音をのみ泣き給ひて弱り給へる人の、所狹く苦しく日に添へて成り増さり給ふまゝに、せむ方なく頼もしげ（イなけ）れども、大臣(一四)のつと添ひ給ひて思しまどはむがせん方なければ、對の君「常(一五)の御物怪に例ならずおはします」とのみ云ひなして、大臣など見奉り給ふ時は、對の君「吾(一六)が君さりげなくて」とのみ云ひ聞かせ奉りて、起し据ゑ奉れば、我にもあらず御髪持上げなどして御覽(一七)せられ奉り給へよと中君に注意して。

(一七)御覽ぜられ―父大臣に、中君　が顔を見せる。

(一)夢などの―夢見が悪くて、物忌をしなければならぬし。
(二)心地も、悩なりぬなる―氣分も悪いものだから。
(三)祈の師―中納言の病氣の際に祈禱する法師共。
(四)慎む事―名前は明かす事が出來ないが、ある所のある人が懐姙した。
(五)山三井寺―山は比叡山延暦寺
(六)分ちて―僧侶達を其々の寺に派遣して。
(七)修法五壇許り―五壇の修法の事。五つの壇に五大尊明王を配置して、是を本尊として祈禱を行ふ。
(八)佛現―持佛のお像を顯現して。
(九)幼くより―中納言の、法性寺の僧都に申す詞。
(一〇)今に―いとゞ親しく―殊に僧都は中君の秘密を知つて居られるので、あるから、猶更今は親しく思はれる。
(一一)心一つには思ひ餘り―下の「中宮に」「申し給ふ」に懸けて心得る。
(一二)中宮には―さるべき御中―中納言は中宮とは仲がよくて、中宮には、下の「つゆの事も聞えさせ」は、下の「つゆの事」に續く。
(一三)いと忍びて―中納言が、中君の事をもひそかに中宮に語るて。
(一四)それかとて―その女かと思つて。
(一五)かゝる事―中君が姙娠なした事。
(一六)此の君に―中君の婿となつたら都合がよかつた。
(一七)一日も殿の―先達ても、父關白が仰せになる樣には。

は、中納言「(一)夢などの慎しむべきやうに見え、(二)心地も例ならぬを」と宣ひなして、親しく思す祈(三)の師どもを召して、(四)慎む事あるべき邊にかゝる事のある、事なかるべく平かなれと念ずべきよしこまかに宣ひて、(五)山三井寺などに分ちて、(六)修法五壇許り始めさせ給ふ。法性寺の僧都には更にも云はず、日々に佛現して供養し奉るべき事宣ひて、中納言「(九)をさな幼くより取り分きて頼み聞ゆるしるし此の折なむ見るべく侍る。(一〇)今はいとゞ親しくあはれになむ思ひ聞ゆる」と宣ふまゝに、涙ぐみて深く思し入れたる氣色、僧都もいみじくあはれと見聞ゆ。御祈はかくさまゞ〳〵に始めて、(一一)心一つには思ひ餘り、(一二)中宮には、さるべき御中と互に隔てなく、つゆの事も聞えさせ給へば、いと忍びて、(一三)初めより有りしさま、(一四)それかとて新少將をあながちに申し勸めし有樣など、泣きみ笑ひみ 中納言「その夢の中にもかゝる事なん侍りける」と申し給ふ。中宮「同じ事ならば此の君にさておはすべかりける事かな。如何に女の心地もせん方なく侘びしからん。(一五)心苦しくいとほしき事かな。(一六)一日も殿の「(一七)廿が中に設けつるこそよけれ。今まで子を設けざめるが口惜しきなり。(一八)こゝら侍ふ女房の中に中納言子と名告り出づるがあるまじき」と宣ひし物を、(一九)聞き給ひて如何に忍びもあへず思し喜ばん」と宣へば、

(一八)廿が中に設けつるこそ―廿にならない前に、子供を一人位つくるがよろしい。
(一九)今まで子を設けざめるが―中納言には、此の年になるまで一人も子供の出來ないのが。
(二〇)こゝら侍ふ―澤山居るお付の女房の中にでも。
(二一)中納言子と―中納言の胤を宿したと。
(二二)あるまじき―居ないのだらうか。
(二三)聞き給ひて―中君が中納言の胤を宿したと云ふ事を、父關白がお聞きになつたなら。

(一)それこそ頼もしかなれ—此の僧都を頼みに致して居るのであります。
(二)殿上—下の「さいなむ」に續く。父太政大臣様が。
(三)我が心にも—是許りは父大臣が幾ら頼つても、自分の思ふ通りには願はなつてもらない物だのに。
(四)今まりでと—何うして今まで子供が出來ないのかと。
(五)度毎にさいなむ—何時も大君をお責めにさいなむ。
(六)その曉のまゝに—あなたが中君に逢はれたあの曉以後、そのまゝ中君のあつたならば、婿となられたのであつたなら。
(七)如何に思し喜び—何あんなに大臣は、中君の姫婿を喜ばれたことであらうか。
(八)いとゞ覺束なきを—一層中君の事が氣懸りとなつたが。
(九)かやうにてその御有様の中納言「(八)いとゞ覺束なきを、かやうにてその御有様聞かせさせ給へよ」と宣ふ。對の君「そはさもありなむ。(一〇)かの殿にて、すべて吾が君、つゆ許りの御事うけたまはり侍らじ。此の程よりは何時よりもさりげなくこそ。(一一)片端にても心得る人出で來なば。(一二)たゞ推し量らせ給へ。かくいと(一三)心細く見奉るとも、(一四)限りある御命の程、若し長らへさせ給はば、心盡しの御契の果、(一五)自ら有り果つるやう侍りなむや」と、行先を頼むやうにて跡を絶つ氣色ながたら　二字イちらちめしき、ことわりなきや。
その後はいとゞ(一六)心だましひもあくがれまどひて靜心なくのみ覺ゆるに、(一七)女君の物煩(イは)しげなるまみにて、(一八)はかなき事にも心置きて見咎めつべきに心苦しくて、嘆きをイナシだに聲立てゝはえすまじきに思ひ侘びぬ。(一九)大殿がちに紛れつゝ、(二〇)大方の人聞に

(イ給へ)侘びて、僧都にこそ漏らし聞え侍りしかば、(一)それこそ頼もしかなれ。よもおろかならじ。殿上我が(二)心にも(三)任すまじき物を、太政大臣『(四)今まで』と度毎に(五)さいなむものを、(六)その曉のまゝにあらましかば、(七)如何に思し喜びかひあらましと、思ふにも云ふにも盡きせず覺ゆる事なりや」と、いみじく打嘆きつゝまどろまぬに夜も明けぬ。
中納言「(八)いとゞ覺束なきを、(九)かやうにてその御有様聞かせさせ給へよ」と宣ふ。對の君「(一〇)そはさもありなむ。かの殿にて、すべて吾が君、つゆ許りの御事うけたまはり侍らじ。此の程よりは何時よりもさりげなくこそ。(一一)片端にても心得る人出で來なば。(一二)たゞ推し量らせ給へ。かくいと(一三)心細く見奉るとも、(一四)限りある御命の程、若し長らへさせ給はば、心盡しの御契の果、(一五)自ら有り果つるやう侍りなむや」と、行先を頼むやうにて跡を絶つ氣色ながたら　二字イちらちめしき、ことわりなきや。
その後はいとゞ(一六)心だましひもあくがれまどひて靜心なくのみ覺ゆるに、(一七)女君の物煩しげなるまみにて、(一八)はかなき事にも心置きて見咎めつべきに心苦しくて、嘆きをイナシだに聲立てゝはえすまじきに思ひ侘びぬ。(一九)大殿がちに紛れつゝ、(二〇)大方の人聞に

(一)自ら有り果つるやう—自然とお二人の契が、圓滿に結ばれる様な時節もありませう。
(二)心—魂も—中納言の様。
(三)任す—命を危い様で。
(四)今まで—何時迄。
(五)たびごと—毎度。
(六)あくがれまどひ—心細いので。
(七)如何に思し喜び—何あんなに大臣が。
(八)いとゞ覺束なきを—一層中君の事が氣懸りとなつたが。
(九)かやうにてその御有様聞かせさせ給へよ—中納言の様。
(一〇)そはさもありなむ—こゝに來て中君の事を話すのは宜しうございますが。
(一一)かの殿にて—大臣のお邸の内では。
(一二)たゞ推し量らせ給へ—充分お考へ出來たなら。
(一三)心細く見奉る—此の様に大變ですが。
(一四)限りある御命—若し中君が定命ありつて、生き長らへる事が推し量らせ給へ—充分お考へなすつて下さい。
(一五)自ら有り果つるやう—自然とお二人の契が、圓滿に結ばれる様な時節もありませう。
(一六)心だましひ—魂も—中納言の様。
(一七)女君の—大君。
(一八)はかなき事にも心置きて—中納言の一寸した行爲にも、氣跡を絶つ—今後交際を絶つてしまふ様な口振なので。
(一九)氣色ながたらめしき—一本の「氣色ながち怨めしき」を取る。
(二〇)いとゞ心魂も—中納言の様。
(二一)女君の—大君。
(二二)はかなき事にも心置きて—中納言の一寸した行爲にも、氣
(二三)大殿がちに—その後中納言は父關白の家に引き込み勝で人目をくらまして。
(二四)大方の人聞—世間の人々には、を廻して咎めだてをする。

(一)忍び隱さめ―その樣に中君が姫嫌なしなめならば、意外の契なれ結ばんでその後逢はれないと思ひつゝも、その事を怨みしく思ひつゝも、その秘密を心中に隱しておきもしまほしうが。

(二)かくわりなき思ひを―今はもう仕方がないので、かういうして私の切なる心を滿たす方法を取らうと思ふ。

(三)それすべて―そんな無茶な事は全く出來ませんと。

(四)初は知りし事ぞ―初二人が關係を結ぶ樣になつたのはどうしたわけかと、最初からの事までも世間の人に非難せられれる事は出來ますまい。ひ逃れても、私達はそれを云ふ事が姫嫌したのも、前世の因緣でせう。

(五)かくて物せさせ給ふも―中君

(六)そいおもむきの樣々に亂れさせ―その姫嫌の始末なする爲めに、色々常識には、づれた方法を取るのは、お互の爲めに面白くありません。

(七)後行く先までは―過去將來の事までは、今私は考へて居りません。

(八)げに道理―中納言の心。對の君の云ふ事は。

(九)つくも―一本の「さても」をとる。

(一〇)あるにもあらず―中君の悲しんで居られる樣子。

(一一)明日までのかねごと―明日までは命に別條がないと云ふ樣な豫言も信じられませんで。

(一二)いと頼もしげなきのみこそ―「まして」「等と云ふ詞を補ひて見る。

(一三)實に如何に程なく―中納言の

ばこそ思ひの外なる契を怨みて忍び隱さめ。今はたゞかくわりなき思ひをだに延べんと思ふ」と宣へば、對の君「それすべてあるべき事にも侍らず。初は如何なりし事ぞと咎められ侍らん罪逃れ遣る方侍らじ。かくて物せさせ給ふもさるべきにこそ侍らめ。そのおもむきの樣々に亂れさせ給はむ誰が御爲めもいとあいなく、後行く先までは辿り思ひ給へ侍らずや。たゞ此の際は如何で人に知らせじと嘆き思ひ給ふる許り」と云ふ。げに道理なるに、云ふ方なき涙のみ盡くして、中納言「つくゝさてもまた行き逢ふ事はなくて過ぐべき、いたく懸け離れ思しな捨てそ。さばかりの契世に淺くはあらじ物を」と宣ふ氣色のいと心苦しげなれば、對の君「あるにもあらず沈み過ぐさせ給ふ樣、すべて明日までのかねごとを思ひ給へ侍らず、いと頼もしげなきのみこそ」とて打泣きぬ。あはれ、實に如何に程なく見えし人の、中宮などだにこちたく苦しげに思したりし事を、人に知られじと忍び嘆き給ふらむと思ふぞいみじくわりなからむかしと思ひ遣らるゝ心苦しさにつけても、いと相見まほしき事ぞ限りなきや。中納言「さのみ忍び思しつゝ御祈などもせさせ給はじな。春宮の御時に見しかば、かゝる人はたゞ祈をのみする事とぞ見しかと宣ふ。對の君「心一つに思ひ

心。「實に如何に」は下の「忍び嘆き給ふらむ」に續く詞。

「程なく」はほつそり、痩がたの等と釋す。中君の樣を云ふ。

(一四)中宮などだに―中宮の樣な方でも、姫嫌の時には苦しさうであつたのに。

(一五)人に知られじと―中君は姫嫌を隱して。

(一六)いと相見まほし―中納言は中君に逢ひたく思ふ。

(一七)春宮の御時―中宮が春宮を生んだ時の有樣をよく見て居りますと。

(一八)かゝる人は―姫嫌の女には。

に、まして心の限り盡くし給ふはいみじからん何の岩木も靡き立ちぬべきに、慎ましく煩はしとのみ思ひ放ち聞えつる心も弱き心地して、その程明けぬ夜の闇にまどはれし樣なのめならぬまゝに、宮の中將の氣配わざと聞きし樣など、ほのかに打笑ひいみじく嘆きつゝ、對の君「たゞさばかりの節にてだに、世の常のなげの事にてだに侍らぬを、此の世にのみはあらぬ御契の程かなと見え侍る御心地の樣なるを、月日の過ぎ侍るまゝに如何にもてなし奉るべきかと、又云ひ合する人も侍らぬまゝに、ただ朝夕心一つを亂り給へる程は推し量らせ給へ。嘆き扱はれ給ふ程などは自ら聞し召し合はすらむかし。今や人しるく見奉らんと靜心なく思ひ給へる程は、怨めしかりける御契の程は如何許りかは心憂く見奉る」など言ひ出でたるに、淺ましく胸もいとゞ塞き亂るゝ心地して、とばかり物も云はれず、顏に袖を押し宛てゝ塞きかね給へる程、見る人も耐へ難くあはれなり。いみじくためらひて、中納言「過ぎにし方はよしやこれに皆消えぬ。さてそは如何し奉らむずる。世の聞き耳、人の思はむ事は、よろしき事にこそたどらるわざなりけれども、かくもおはせぬ先に取り隱し奉りてんのみこそよからめ。後の聞えありとも如何はせん。かく著るきしるしのあるまじく

(一)心の限り盡くし給ふは—心の有りたけを盡くして熱心に口説き立てるお言葉には。
(二)いみじからん何の岩木でも。
(三)慎ましく煩はしと—對の君の心。
(四)弱き心地—「弱る心地」とありたい所。中納言なれば。
(五)その程明けぬ夜の闇—以下對の君が中納言に話した事。中納言が中君の所に忍び込んで來、悲しみにとざされた事。
(六)わざと聞きし樣—中納言が宮の中將ぎと聞きし樣—宮中將の有樣をばわざ〳〵垣間見したので、宮中將の事。
(七)ほのかに打笑ひ泣いみじく嘆きつゝ—笑つたり泣いたりして。
(八)たゞさばかりの—たゞあの一夜の契を交したゞけであるのに。
(九)世の常のなげの事—一夜の契を結ぶ位世間に普通無い事でもない。
(一〇)此の世にのみはあらぬ御契—此の世にのみは前世からの因緣と見えて、その一夜の契で懷姙された樣子である。
(一一)又云ひ合する人—他には相談をする人。
(一二)人しるく見奉らんと—今にも人が、確かに中君の姙娠の事を見付けるであらうかと心が落ちつかなければ。
(一三)怨めしかりける御契の程—怨めしい晩のあなたの仕業をば、何程情なく思つた事であらうか。
(一四)いみじくためらひて—中納言は、深く心を押ししづめて。
(一五)よしやこれに皆消えぬ—過去の怨は、その話を聞いて皆消えてしまつた。
(一六)さてそは—その姙娠の始末は
(一七)よろしき事にこそ—世間の噂はうまく取りつくろふやうに工夫も出來る事であるが。「たどらる」は「たどらるゝ」の誤か。
(一八)かくもおはせぬ先—左樣に人日につく樣にならぬ前に。
(一九)取り隱し—中君を。

も知らで、(一)かくなりて後に聞きつけて訪れ給はん、(二)打解け並べてあらせ奉らんと思ふ事こそ難からめ。あながちに知らせ奉らじとは思ひかくべき事にもあらず」と宣ひけるを、(三)さも思ふ事なれば、(四)怨み佗び給ふに、（對の君）「此の邊にてはいみじく慎しく侍り。(五)さはその夢御覽じけむ所に、いみじく忍びて立ち寄らせ給へ。(六)さてなむ思ひ合はすべき事ども侍る」と聞えて、(七)僧都の九條に渡り給ひぬ。中納言も(八)例ならず承け引きたるに心騷ぎて、(九)いつしかと(一〇)例の乳母御覽ずるやうにておはしぬ。(一一)消息宣ひたるに、(一二)とくと聞えたれば、ありし竹の中より歩み出で給へるに、(一三)むくつけしと見し曉はかうにこそありけれと、夢のやうに思ひ出づ。(一四)籠垂の中に御座參りて、障子押し開けて、(一五)几帳添へて、(一六)まほならずはた隠れて對面したり。(一七)初めよりして、なくなりにし心、時明が女とをカ宮に召させし事、(一八)異人にィと思ひなして思ひ亂れしに、かうなりけりと聞きつけたりし心地、(一九)云ひ續け給ふ言葉氣色眞似びやるべき方なし。なほざりの淺はかなる一言を宣ふに、情々しく、(二〇)あはれに木深き氣色を添へ給ふ人がら

(一)かくなりて後に―か様に中君が姙娠して後にその事を中納言が聞きつけて、中君の所に通ふ様になり。

(二)打解け並べて―文二人を夫婦にさせて、一緒に住まはせようと思ふ事は。

(三)さも思ふ事なれば―對の君もさう思つて居た事であるから。

(四)怨み佗び給ふに―中納言が、對の君を怨む文をやつたその返事に。

(五)このわたりにては―此の所で中君をあなたに逢はせるのは甚だ人目が憚ましい。

(六)さはその夢御覽じけむ所に―それでは以前あなたが中君にお逢ひになつた、あの僧都の別莊に。

(七)さてなむ思ひ合すべき―そこで相談致したい事があります。

(八)僧都の九條に―中君をば九條なる僧都の別莊に連れて行つた。

(九)例ならず承け引きたるに―對の君がいつになく承知したので。

(一〇)いつしかと―大急ぎで。

(一一)例の乳母―僧都の別莊に住んでゐる、あの乳母を。

(一二)消息宣ひたるに―中納言が隣の僧都の別莊に居る對の君の所に、過なやると。

(一三)とくと―早くお出で下さいと對の君の返事があつたので。

(一四)むくつけし―對の君の座つて居る前には几帳をおいて―全身に知らぬ男が忍んで來て氣味が惡い事だと思つたあの朝も、中納言は矢張斯様にあの竹垣の中から出入をされたのだつたと。

(一五)障子押し開けて―襖はあけはなしたまゝで。

(一六)几帳添へて―對の君の座つて居る前には几帳をおいて―全身ではなくて、少し許り身體を几帳の影に隠して。

(一七)まほならずはた隠れて―全身ではなくて、少し許り身體を

(一八)初めよりして―中納言は、初めて行頼に隣家の女の話を聞いた事から。

(一九)なくなりにし心―その後使をやつて尋ねさせた所、隣家の女達は皆歸つたらしく、その姿が見えないと聞いて失望落膽した事。

(二〇)異人に思ひなして―時明の娘は、あの晩の女ではなかつたと見定めて。

(二一)かうなりけりと―あの晩の女は此の中君であると云ふ事を。

(二二)云ひ續け―中納言の云ふ事を。

(二三)木深き氣色―鬱深い樣な、木立の深い氣色と譬へたのである。

かくのみ心(一)の限りあらねど漏らし渡り給ふに、心弱く思ふにはあらで、月日を數へつつ此(二)の御有様の心一つに思ひ遣るべき方なく佗びしきを、かくまで尋ね知り給ひぬとならば、かゝる事なきほのめかし出でて、同じ心に嘆き思はせ奉りやせまし。さてもあへなく煩はしけれど、おはしつきて後心知りの過失にもあらず。かゝるべからん二字イりける御契知らるゝを、あながちに懸け離れても何の猛かるべきにはあらん。我一人心を碎くよりは、云ひ合はせてだに胸の隙を明くべきぞかしと思ひなりて、僧都に、對の君「此の殿なむ聞きつけていみじく宣ひ渡るに、此の事を聞かせや奉るべき。さてややみぬべき」と云ひ合はすれば、僧都「親子の御契さてやむべうもなし。たひらかにもおはせば、すゞろに引き忍びて、はふろかさんやは。後の聞え聞き憎く、ともかくも云ひ紛らはして、さばかり見ぞし給へるにこそ見せ知らせ奉らめ。同じくは聞きつけてかく宣ふ折に、對面して聞え給ひてよ。げに他所の事にもあらず。いと便なき事なれば、思はざる外に此の殿におはしつかざる先に、かゝる事出で來ぬ。互に誰とがよい。

(一)心の限りあらねど―思ふ心なき部打明けるといふ譯ではなく、吁々その片端を洩らす。

(二)心弱く思ふにはあらで―對の君は中納言に許さうと今までの心がにぶつた譯ではないが。

(三)月日を數へつゝ―月が重なつて、生み月の近づくのを數へつゝ。

(四)此の御有様の―中君の事が、自分の心一つでは何とも思案に及ばないので困つて居るのであるが。

(五)かくまで尋ね知り給ひぬ―此の様に中納言が、あの晩の女を中君と知つて尋ね寄つて來られる事のなきほのめかし―中君が、姫娘した事を中納言に告げて、「本の「かかる事など」を取る。

(六)同じ心に―自分と同じ様に、中納言にもその處置について心配させよう。

(七)さてもあへなく煩はし―中君姫娘の事をも今更何の甲斐もなく面倒せても、中納言に知らなくなるかも知れないが。

(八)さばかり見ぞし給へるに―その様に、中納言が中君の部屋にやつて來た時に、中君懷姫の様を見せ知らせ―中君懷姫の様を赤兒か棄てしまふわけにも行かない。

(九)おはしつきて後心知りの過失―中納言がきつと大君の婿となつて中納言を中君に通じさせたわけではなく、中納言が大君と過つた事を知つて中納言を中君に懸け離れてしまつても、何の言ひ寄つて來られる。

(一〇)此の殿なむ聞きつけていみじく宣ひ渡るに―對の君が、あの晩の女を中君であると知つて言ひ寄つて來られるので。

(一一)此の事―中君姫娘の事。

(一二)僧都―對の君の兄。

(一三)此の事―中君姫娘の事。

(一四)たひらかにもおはせば―無事安産せらかにもおはせば。

(一五)すゞろに引き忍びて―其を中納言には無暗に秘密にして、兒を棄てしまふわけにも行かない。

(一六)ともかくも云ひ紛らはして―下の「見せ知らせ奉らめ」に續く文章。他の女房達なら何とかうまく誤魔化して。

(一七)さばかり見ぞし給へるに―その様に、中納言が中君の部屋にやつて來た時に、中君懷姫の様を見せ知らせ―中君懷姫の様を赤兒か棄てしまふわけにも行かない。

(一八)見せ知らせ奉らめ。同じくは聞きつけてかく宣ふ折に、對面して聞え給ひてよ。げに他所の事にもあらず。いと便なき事なれば、思はざる外に此の殿におはしつかざる先に、かゝる事出で來ぬ。互に誰と

(一九)同じくは聞きつけて―同じ事ならば中納言が中君の事を聞きつけて、色々と怨み言なと言つて居る際に、お前が中納言にお目にかゝつて話した

(二〇)他所の事―他所にもあらず―全くの他人の事ではない。同じ身内の人の事でもあるし。

(二一)いと便なきちき事なれば―下の「あながちに知らせ奉らじと」は云々」にかゝる詞。

(二二)思はざる外に―中納言が意外にも大君の婿となつたが、其よりも前に。

へれば、御前にもはこれより参る。歩み出で給ふ。うしろもてなし、飽くまで静やかに艶めかしく心憎く、指貫の裾まで匂ひこぼるゝやうなり。女房達見奉り送りて、いみじくめでたくおはする殿の御様かな。これに劣り給へら人の、此の御方に参り給はんこそ佗びしかるべけれ。これこそ御前にはいと似つかはしくおはすべけれ一など云ひあへるを、御方（詞の書「頬はしく漏りもこそ聞ゆれ。戯れ言にてもあいなき事なり」と諫めて、あはれなりつる御氣色に心に懸りて覚ゆるに、とばかりありて紛らはして御文さし入れたり。

中納言　立寄れば岩打つ波のおのれのみ砕けて物ぞ悲しかりける

ありつる面影に劣らず美しげなる書様を一人見るぞ口惜しかりける。今日は萬の慎ましさも思ひ消ちて御返聞ゆ。

詞の書　人知れぬ袖のみいとゞこぼつるは世を経る波の名殘なりけり

清げに書きたるを、見知りけりと珍しきに、まして自のと見ましかば。如何ならん時一行にても見むとぞ思ひ届じたる心地なるや。

(一)御前―先驅の者共。
(二)うしろ―後駆。
(三)指貫―奴袴。袴の裾をくゝる様に貫に作る。
(四)この御方―此の方より劣るなら、此の中君の婿となられば情ない事だ。
(五)これこそ御前―中君前には―此の中納言こそ中君前の婿として似つかはしい方である。
(六)御方―詞の書。
(七)頬はしく漏りもこそ―大君方の人にも聞かれては、事が面倒だ。
(八)戯れ事にても―冗談にしてもいい事を云ふのは分別のない事である。
(九)あはれなりつる御氣色―中納言の。
(一〇)紛らはして―中納言からの文とは云はずして、其となくお使のものが手紙を中君の所に持つて来て、御簾の下からさし入れた。
(一一)立寄れば―中納言の文に書かれて寄れてある歌、「岩打つ波の」は碎けて訪るにかゝる序詞。中君の所へ訪けた所、私の心だけが碎けた様に悲しく思はれましたし、中君は何んともお思ひにならなかつたでせうが。
(一二)一人見るぞ―中君にも見せずに一人だけで見るのは残す念なる事だ。
(一三)今日は萬の慎ましさも―今までは遠に萬事を上げなかつたが、今日は見逃す事が出来なくて、色々な氣遣りも忘れてしまつて対の君が御返事を差し上げた。
(一四)人知れぬ―人知れず涙に袖をぬらして中君が悲んで居らしゃる事は、以前にもあつたが中君の所に忍び込まれた事の心配が未だに残つて居るからであります。「波の名残」と云つたのは中納言の歌に「岩打つ波」とあるからである。
(一五)見知りけりと―詞の君はあの晩の男が、自分であると云ふ事を知つてゐる。
(一六)自のと―中君自身が書いた手紙であるとして嬉むのなら、如何に嬉しい事であらうか。
(一七)如何ならん時―何時になつたら、一行でも中君自身の手紙が貰ふ事が出来ようか。
(一八)思ひ届じたる心地なるや―つまり心持が夢幻になつてしまつた。

れずあなづらはしき人をば、たゞ御簾の中にこそ入れさせ給ふべけれ。(一)いとうと〳〵しく—斯樣に御簾の外に置かれるのは甚だ打解けずに。(二)顯證なる心地する」と宣へば、女房(三)何時馴れてかさまでは。今少しも面馴れさせ給ひてこそ御簾の中は—といと馴れて答へかけて、なべての女房の聞えんはかたは(四)骨なる—鬼床しくない、露(五)何時馴れてかさまでは—あなたとは少しも親しくして居りませんから、未だ其の樣に御簾の中へお入れする事は出來ません。(六)なべての女房の聞えんは—普通い女房が中納言のお相手申し上げるのは。(七)御簾の中は—お入れ申しませう。(八)答へかけて—下の「讓りて入りぬなり—」に續く。(九)なべての女房の聞えんは—普通い女房が中納言のお相手申し上げるのは。(一〇)かたはら痛かるべければ—お氣の毒なので。(一一)讓りて入りぬなり—對の君に中納言の相手を讓つて、その女房は奥へ入つてしまつた。(一二)いたの氣配や—中納言の心。樣子だ、何といふ女だ素氣ない。(一三)誰ならむと、これさへ飽かぬ心地し給ひて、中納言「近き程に侍ひては年頃ぞかしな。此の御方に未だ參らぬは今日は思ひ給へ驚かれて」など宣ひて、さし寄りて、中納言「などはいと淺ましくはもてなし給ふ。少しよろしき事にこそ。人の思はむ所も憚からし聞き憎し。(一四)人に知られじなど思し召さば、和め給はばこそよからめ。思ひ佗びぬれば何事も、え更にたよりあふまじく思ひ餘りて侍り」など打ちかすめつゝ、唯今如何で居給ひつらん、御簾引き上げても入りなまほしく靜め難きに、涙ぞこぼれぬる。盛りなる櫻の朝露にしをるゝ心地して、餘りはしたなかるべければ、中納言「參り初め侍りぬれば、日々にも」とあざやかに云ひなして、やがて此方の御門より出で給

(一)いとうと〳〵しく—斯樣に御簾の外に置かれるのは甚だ打解けずに。(二)顯證なる心地する—鬼床しくない、露骨な。(三)何時馴れてかさまでは—あなたとは少しも親しくして居りませんから、未だ其の樣に御簾の中へお入れする事は出來ません。(四)御簾の中は—お入れ申しませう。(五)答へかけて—下の「讓りて入りぬなり—」に續く。(六)なべての女房の聞えんは—普通い女房が中納言のお相手申し上げるのは。(七)かたはら痛かるべければ—お氣の毒なので。(八)讓りて入りぬなり—對の君に中納言の相手を讓つて、その女房は奥へ入つてしまつた。(九)いたの氣配や—中納言の心。樣子だ、何といふ女だ素氣ない。(一〇)誰ならむと、これさへ飽かぬ心地し給ひて、中納言「近き程に侍ひては年頃ぞかしな。此の御方に未だ參らぬは今日は思ひ給へ驚かれて」など宣ひて、さし寄りて、中納言「などはいと淺ましくはもてなし給ふ。少しよろしき事にこそ。人の思はむ所も憚からし聞き憎し。(一一

(一)影耻かしく—姿を見せるのが耻かしく。
(二)巖の中にもと—岩窟の中にも姿を隠してしまひたいと思ふ様になつたのは。
(三)御前なる人々の—以下女房達が以前中君の元氣であつた時分の事を懷しみてゐる心。
(四)打笑ひなど—以前中君が元氣であつた時には、女房の話を聞いてあてやかに笑ひにお見てはつたりしたのも、私達も心配が全くなくなつてしまふ様な心持がした。
(五)心地せしかなと—下の「見奉るにこそ」に續く。
(六)盡きもせず—何うしていつまでも快復の期なく、御病氣の様子であるのであらう。
(七)物心細く—さぞ頼み少く思つて居られる事であらう。
(八)訪れ渡り—手紙を中君の所にやる。
(九)内に—宮中に。
(一〇)かばかり近き程に—中納言が大君に語る詞。斯様に中君の居間の近くに平生住んで居りますので。
(一一)なめげなる有様—自然失禮な事を致しました事もありませう。
(一二)かしこまり取り添へて—そのお侘びかたがた中君をお訪れしませう。
(一三)心異に引きつくろひ—何時もよりもまた入れて着物を着こなして。
(一四)中の間の方—中君の部屋の前で。
(一五)打聲作りて—案内を請ふ。
(一六)つい居給へれば—膝をついて居られる。
(一七)心憎く打そよめき—御簾の中では、女房達の身じろきをする衣摺の音が奥床しく聞える。
(一八)綀—敷蒲團。
(一九)さし出で—御簾の下から、縁側に座つてゐる中納言にさし出す。
(二〇)由緣離れずあなうらやましき人—中君とは親類筋に當り、氣のおけない私の様な人間に。

も影耻かしくて、如何で人の見ざらん巖の中にもと思ひなりにたる、我が身ながら我が身とは覺えぬに、人々の變らぬ様に並み居たるを見渡し給ふにも、物のみ悲しく思さるれば、涙を浮けてつく〴〵と眺め給ふ氣色、いみじき夷と云ふとも、見奉らば必ず涙落ちぬべき御有様なり。御前なる人々の物語するをも慎かしく聞き留めて、いと匂ひやかに打笑ひなどし給ひしこそ世の物思ひ忘るゝ心地せしかなと、かくのみ盡きもせず例ならぬ御氣色ならむ、物心細く思さるゝにこそはあらめと、見奉るにこそ忌みもせられず皆涙ぐまれぬ。

中納言は鶯の聲よりも先に訪れ渡り給へれど、見聞き留むる氣色もなきに思ひ餘り、三日も過ぎのどやかなる晝つ方、内に參り給ふとて、中納言かばかり近き程に月頃待るに、自らなめげなる有様も漏り聞き給ふらん。かしこまり取り添へて。今日よき日にもありけり。かの御方に今まで參らぬよ。いと忘々しき事なりや」と宣ひて、常よりも心異に引きつくろひ給ひて、南の簀子よりいと様よくのどやかに歩みおはして、中の間の方に打聲作りてつい居給へれば、御簾の中心憎く打そよめきて、驚き顔にはあらず、しめやかに打ちそよめきて、褥さし出でたれば、中納言由緣離

(一)色なる方—髪の毛は美しい方であつて。
(二)こまゝ〳〵とさはらかにて—髪の毛筋が細かでさつぱりとしてゐる。
(三)限りなき人—此の上もない美人。
(四)姫君—中君。
(五)床より—御帳臺の臺から。
(六)奉り代へ—着物だけは着代へた。
(七)紅梅の八許り—紅梅襲の着物。是は五衣。
(八)打見守り較べて—大君と中君との容貌を見較べて。
(九)その程にもあらず—以前の様に美しくもなく。
(一〇)なほ見奉れ—なほの事、お前の顔かしばし〳〵と見られるのであるが。
(一一)侍と悲しと—一本の「いと悲しと」を取る。
(一二)見咎め給ふ人もやと—中君が姫娘として居ると、見付ける人があるかも知れないと。
(一三)伏眼にのみ思されて—伏眼勝に許りしのみ思されて居らうと思つて。
(一四)例ならず起き居給へるを—皆が歸つてしまつてからも、中君は何時になく起き出て居るのが女房達には珍しかつたので。
(一五)ばしたなきやうなれば—そのまゝ帳臺の中に入つてしまふのも、間が悪いから。
(一六)見渡し給へれば—庭の景色を常の事—何でもない事が。
(一七)かやうなる程は—以下中君の心。
(一八)何となく思ふ事なかりし—何

色なる方によりて、こまゝ〳〵とさはらかに清らにて、袿の裾にゆる〳〵とおはす。これこそは限りなき人の御様なれと見るに、姫君の床より下りて、引きつくろふともなく打解けて、御衣許り奉り代へたる、紅梅の八許り、萠黄の小袿、袖口裾の褄もなく打解けて、御衣許り奉り代へたる、紅梅の八許り、萠黄の小袿、袖口裾の褄まで、たを〳〵と艶かしく着なし給ひて、はな〳〵と匂ひ満ちたりし御容貌の變るまで、面痩せ給ひにたれば、貴に心苦しげなるを、大臣も兄の殿ばらも、有難くあはれなりと打見守り較べておはす。大臣一月頃になりぬれば、その程にもあらず衰へ果て給ひぬらんと思ふに、なほ見奉れ、なか〳〵今少しらうたげなる様の添ひ給へる一とて侍ィと悲しと見奉り給ふ。見咎め給ふ人もやと、我が心の鬼に恐ろしくわりなければ、伏し眼にのみ思されて、人々の見奉り給ふを、いと苦しく思さる。皆立ち別れ給ひぬるに、例ならず起き居給へるを珍しく御前に人々參りたれば、はしたなきやうなれば、床に押し懸りて見渡し給へれば、氷解けたる池の面は鏡のやうにて、曇なく空の氣色も何時しかと春めき霞める夕に、常の事今日は物事に改まる心地して、我が身も珍しく覺えて、かやうなる程は琴掻き合はせ、何となく思ふ事なかりしいつなりけん。片時も立ち離れ給ふは心細く覺えし殿にも、中納言の上にも、見え奉るはいと苦しく覺えなりにたり。親しく使ひ馴れし人々にも心配事はなかつた。活を送つてゐたのは、何時の昔となつたのであらうか。

(一九)何となく思ふ事なかりし—何
(二〇)いつなりけん—その平和な生

て年も返りぬ。

(一)朔日に—正月元旦に。
(二)中納言の御方—中納言が大君と共に住まつてゐる部屋の方に。
(三)殿の拜禮に—大臣が中納言の所に年賀に来られたので。
(四)急ぎ出で給ひぬ—急いで身の大臣の方に會ふ爲めに、中納言が奥の方から出て來た。
(五)御節供—元旦の御膳。
(六)御帳—御几帳。帳臺や几丁に下つてゐる幕に。
(七)紅梅—裏蘇芳、表用ひる。
(八)その色々—五衣の色。
(九)五重襲の唐衣—五色の糸で織つた唐衣。
(一〇)萠黄—襲の色目の名、表薄青裏綾。
(一一)童—童の裝束に。
(一二)搔練—練の色目の名、表裏共に打ちたる紅。
(一三)袙—婦人童女が肌近くつける着物、下着。
(一四)汗衫—童女の着る上着を云ふ。
(一五)色どもゝ調はず—中君の方は大君の方の女房の樣に着物の色目も揃はない。
(一六)紅梅柳櫻—以下何れも裏の色目の名。梅は表白に裏蘇芳。柳は表青裏白。櫻は表白裏赤。山吹は表薄紫裏黄。薄色は表はあみ帶びたる薄紫、裏は薄赤。蘇芳は表薄赤、裏濃紫。
(一七)所々—思ひ〳〵に、風情ある樣に衣裳を着飾つて。
(一八)なにかいふ—何かしてそんなに寢て許り居らるのか、とかしこまり—大人の縁起い悪い事だ。

朔日に中納言の御方内外人々參り集ひて、きら〳〵しくあらまほしく見えたり。殿の拜禮に參り給ひければ、急ぎ出で給ひぬ。御節供參る氣色などめでたし。御帳御几帳皆紅梅の織物にて、女房もその色々各々數知らず重ね着て、表着も各々同じ色の織物なる、五重襲の唐衣、萠黄の三重の裳。童搔練の袙に、紅梅の織物の五重の汗衫、萠黄の織物の表の袴、思ふ事なく心地よげにもてなすもことわりなり。限りなくかしづきたてられて出で給ふ男君のめでたさ、清げなる匂、物思ひ忘れ、老も退く許りなるを、大臣君も見るかひあり、嬉しと見奉り給ふ。中の御方には、女房達童の色どもゝ調はず、紅梅梅柳櫻山吹薄色蘇芳紅などを打雜ぜて、一色づつ裳唐衣所々をかしう仕立てゝ、數多參りたれど、かくのみおはします御有樣なれば、今日とても心地よげならず、思ひ靜まりつゝ、たとしへなくのどやかなるに、大臣渡り給ひつゝ、なほ〳〵ためらひて起きさせ給へ。いとゆゆしくも。とて御几帳押し遣り給へば、少し起き上り給ふもいと愼し。左衛門督宰相中將も此方に參り給ひて、中納言の上も渡り給へり。紅の御衣八許り見ゆ許りなる上に、櫻の五重なる御衣、萠黄の小袿物より異に氣高く貴に清げに、御髮

(一九)なにとかしこまり—大人の縁起い悪い事だ。
(二〇)左衛門督宰相中將—何れも中君の腹違の兄弟。
(二一)中納言の上—大君。
(二二)紅の御衣—大君の裳束、紅の御衣は五衣の多、重ねられた樣。
(二三)櫻の五重なる御衣—上着。
(二四)小袿—婦人の略式の禮服、一番上に着る。普段に打掛て居きもの。

(一)はかなく空に—空しく相手の行方が分らずに—迷つてゐて。(二)互にふかかゝる契の—互にかゝる契を結んだ、前世の因縁までが怨めしい。(三)身からの知らずつて—自分の身が何うなつても構はなければ—自分の身が何くまでも此心中決心する事に出來ないあるか。(四)如何人も—中納言の煩悶してゐる人の歌引は心重なるまゝに。(五)思ひの重なるまゝに—葵姫の月が重なると共に。(六)程なき御身は—ほつそりと痩せて居られる御身體は。(七)ふくらかに—腹が大きくなるほど。(八)思しくづみて—くづむほどに思ひこしづみて。(九)いと怪しく—如何なれば打伏しにたるまゝに、沈みなどは寫が誤りか。(一〇)如何なる事か、又は中君は此の樣に思ひつゝ。(一一)折なくなりたると—下の「思しまどひて」に續く。(一二)御祈—病氣平癒の祈禱。(一三)帶など—腹帶。(一四)大殿の—大君中君の父太政大臣。(一五)疑ひたのである。—中納言を婿に取つた。此の尋ぬは求め取る意。(一六)いみじく口惜しき際—何んなつゝはかなく空に漂ひて、(一)互ひにかゝる契の前の世まで怨めしきに、身を知らずばと心は思ひなされず。心盡くしなりや。如何にせんとのみ、明暮は佗ぶる氣色持て隱せど、如何人も思ひ咎めざらむ。

姫君は月の(五)重なるまゝに、程なき御身はいちじるくふくらかに成りもておはするまゝに、せん方なく思し呆れたり。帳の外に出で給ふ折もなく、思しくづみてのみおはするを、いと(九)怪しく、如何なれば(一〇)かくのみ取り立てゝその所とおどろ〳〵しくはあらぬ物から、月日を經て起き上り給ふ折なくなりたると、終に如何に物し給ふべきにかと大臣思しまどひて、御祈たゆむ折なし。對の君は帶など忍びてせさせ奉るにつけても、大殿の、(一四)太政大臣「中納言殿の御子をとく見むとてこそ尋ねしか。未ださる氣色のなきにやあらん。いみじく口惜しき際なりとも、此の人の子とだに名告り出づる人あらば、人のそしりもどき知るべくもあらず、數まへ物めかさむ」と宣ふなりとて、かの御方の辨の乳母、宰相などが祈りまどひ、心もとながるに、あやにくにいみじのわざやと、心肝を碎き思へど、いとゞしく思し入らんにより、事にもあらず聞え慰め、思ひ入れぬ樣に紛らはしてのみぞ有りける。かくのみ心一つに嘆き

(一)はかなく—空しく。(二)ふかかゝる契の—互にかゝる契を結んだ、前世の因縁までが怨めしい。(三)身からの知らずつて—自分の身が何うなつても構はなければ—自分の身が何くまでも此心中決心する事に出來ないあるか。(四)如何人も—中納言の煩悶してゐる人の歌引は心重なるまゝに。(五)思ひの重なるまゝに—葵姫の月が重なると共に。(六)程なき御身は—ほつそりと痩せて居られる御身體は。(七)ふくらかに—腹が大きくなるほど。(八)思しくづみて—くづむほどに思ひこしづみて。(九)いと怪しく—如何なれば打伏しにたるまゝに、沈みなどは寫が誤りか。(一〇)如何なる事か、又は中君は此の樣に思ひつゝ。(一一)折なくなりたると—下の「思しまどひて」に續く。(一二)御祈—病氣平癒の祈禱。(一三)帶など—腹帶。(一四)大殿の—大君中君の父太政大臣。(一五)疑ひたのである。—中納言を婿に取つた。此の尋ぬは求め取る意。(一六)いみじく口惜しき際—何んなに賤しい身分の者でも。(一七)知るべくもあらず—人の惡口非難などは知らぬ顏をして。(一八)數まへ物めかさむ—自分の子供の數に入れて、立派な取扱をしよう。(一九)かの御方の—大君お付の乳母や女房達。(二〇)心もとながる—大君に子供の出來るのを待遠しく思ふ。(二一)心肝を—對の君が。

(一)袖の氷解けずは―袖の氷も解けない程泣きあかしたのは何事だつたか。若し貴女の爲め。後撰集卷八―思ひつゝ寝なくにあくる冬の夜の袖の氷はとけずもあるかな―

(二)聞きつけて―中君。

(三)此の君は―中納言の獨言を聞いての對の君の心。此の君は中納言。

(四)あはれなど―中納言の心情が氣の毒だと、此の獨言を聞いてその心中を察した樣な風はせずに。

(五)さる心して―充分注意をして

(六)心も知らざりつる―中納言の樣。

(七)かゝる契を―對の君の歌「白露のかゝる契を見る人も消えて侘びしき曉の空」を指す。

(八)顯かすべくもあらず―二人の秘密を公表して訪れる譯にも行かないので。

(九)對にいとわりなく紛れおはして―對の君や中君の住んで居る部屋へ。

(一〇)聞きつけて給ひてけるを―對の君の心。あの晩の女が此の中君であるとふ事を中納言が知つたのに。

(一一)せめてあらがひ隱れても―強いてその女ではないと言ひ張つて、姿を隱しても效果はあるまい。

(一二)承け取りあはれを懸けても―中納言の頼み言を聞き屆けて互ひに愛情を交す事になつても、夫婦にはなれないのである。

(一三)何のかひもなく―何のかひもない上に。

(一四)物の聞えいみじう煩はしかるべければ―世間の評判が甚だうるさいから。

(一五)あらがはぬ物から―中納言の

夜半の寝覺　卷一

身もしみ氷り、あはれに悲しきにもつゝみあへず、

中納言「はかなくて君に別れし後よりは寝覺めぬ夜なく物ぞ悲しき

何なり袖の氷解けずは」と、格子に近く寄り居て獨言ち給ふ氣色を聞きつけて、胸潰れて顔引き入れ給ひぬるに、對の君も解けて寝る夜なくのみ嘆き明せば、此の君は聞き付け給へるにこそありけれ。煩はしきわざかなと思ふ物から、あはれなど聞き知り顔ならむやは。それより後はさる心して、つゆ寝覺めの氣色洩り聞かせず。心も知らざりつる日頃こそ見聞き咎むる事なかりつれ、さるべき隙々あながちに、ふに、對の君と云ふは、その曉かゝる契をと答へし人なりけりと聞きなして、顯かすべくもあらず、寝覺めの夜な〳〵、夜々曉の紛れなどに、對にいとわりなく紛れおはして、月頃思ひ煩ふ心の中を、涙に浮き沈みつゝ云ひ聞かせ、明暮は御文を隙無く書きおこせ給へど、聞きつけ給ひてけるを、せめてあらがひ隱れても猛かるべきやうあらじや。さりとて承け取りあはれを懸けても何のかひあるべうもあらぬ物ゆゑ、物の聞えいみじう煩はしかるべければ、あらがはぬ物から承け引く事なし。ことわりに怨みやるべき方なく、我も人もあひなかりける人違に、有らぬ名告を綾へ

言葉を拒絶もしないが、又承諾もしない。

(一六)ことわりに―中納言の心。其も尤もで、中君のつれなさな怨む事も出來ない。

(一七)我も人も―自分も中君も、情ない事には互ひに相手を人違へしたので。

しなりぬ。此の方には、いとかく心入れて迷はじと思ひし物を、口惜しくも亂れぬる心かな。雲の他所の事ならば思ひ寄り難かるべき事にもあらず、さすがに近く見聞き渡らむが、靜め難くいみじかるべき、など思ひ續くるに、胸せき上る心地のみして、文をやるとも實にと承け引くべき人もなし。對の君に如何で逢ひてしがなと思へど、隙あるべくもなし。我があるを自ら見聞き知りもやしにけむ。打解けて出でいもイしつる、さは云へど如何に見聞きつらむ、患ふとのみ聞きわたるは、かやうの心亂れにこそありけれ。思ひ寄らざりけるよと、人の心の中をさへ押し量るに、云ふ方なくぞあるや。女君のいと氣高く耻かしきさましたるを見るにつけても、思ひやられて、ともすれば涙ぐましく靜心なくて、人間には中障子のもと立ち離れず、心憎くのみもてなして、つゆも女房の氣配なども洩れ聞えず、心は空にあくがれて涙こぼるゝ折のみ多かるを、人目如何に怪しと思ふらんと思へば、靜心なく、夜はいとゞつゆもまどろまれぬまゝに、人の寢入りたる隙には、やをら起きて、そなたの格子の面に寄りて、立ち聞き給へば、人は皆寢たる氣色なるに、帳の中とても、廂一間を隔てたれば程なきに、衾押し除けらるゝ音、忍びやかに鼻打ちかみ、自ら寢入らぬ氣配のほのかに洩り聞ゆるを、同じ心に寢覺めたるにこそあめれと思ふに、他事ならじを、ありし夢の名殘の覺むる夜なきにこそはと聞き渡さるゝさへ、

(一)此の方には―女との關係につい(二)雲の他所の事ならば―遠く離れた赤の他人ならば、言ひ寄る事も難しくなるが。(三)近く見聞き渡らむが―傍近く見聞きつゝ言ひ寄る事も出來ないのが、諦めて心を落ちつけける事も出來ず甚だつらいのである。(四)文をやるとも―手紙を中君の所にやらうとしても、誰も其を尤な事と承知してくれる女房も居ない。(五)我があるを―私が此の家の婿となつたと云ふ事を。(六)出でいもイ―一本の如く「出で人」の誤。(七)患ふとのみ―中君が患つてゐると私が聞いて居たのは。(八)人の心の中―中君の。(九)女君のいと氣高く―自分の妻、大君の。(一〇)思ひやられて―中君の姿が思ひやられて。(一一)人間には―人の居ない時には。(一二)心憎くのみ―中君の部屋の樣子。(一三)女房の氣配なども―中君は勿論女房の氣配すら見えず。(一四)そなたの―中君の方の。(一五)帳―臺。(一六)廂一間―一間は柱と柱との間一つ。廂の間一つを隔てただけ。(一七)衾―蒲團。(一八)他事ならじを―その樣に夜更けて寢覺めつゝ、物思ひに耽つて居るのは他の事ではあるまい。たゞあの晩の事を思ひ出してであらう。

(一)心得るぞ―そこの相手の女が、誰であるかを知つて。
(二)涙のみ―高瀬の濱、濱松中納言物語―にも高瀬の濱を詠んだ歌があるが、恐くは何れも高師の濱の誤つたのであらう。高師の濱―和泉國高師附近の海濱。今云ふ。慧しく濱寺濱涙許り澤山流れ出てゐたれば、相手の女が誰かも分りませんでした。
(三)思ふに口固められ―多分貴女は對の君の爺から、誰にもあの晩の君の身分をあかすなと口固めをされたらうのに、これ程私をば、私には深く有難く思はれました。
(四)此の世ならず―此の世だけでなく來世までも深く
(五)後めたくなり―ぬる―惜しからぬる、長く生きも延びて早く死んでは困る、長く生きて此の心を遂げたい。
(六)宮上―上らせ給ひにしかば―中宮上に、帝の御寵宝にお出でになつて居られたので。
(七)出で給ふ―中納言が。
(八)ほのかなり―新少將の氣配。
(九)さなめりとり―中納言が、新少將の所に忍び込んで居ると。
(一〇)吉野の山の近け―古今集卷六―ふる里は吉野の山し近ければ―吉野の山の雪は降らぬ日もなし―一日もみ雪降らぬ日はなし―一日もみ雪降り積つた日はないので、折から雪の景を見て此の歌を口吟んだのである。
(一一)誰と知らざりつる程は―中納言の心。あの女が誰かそし身分を知らなかつた時には。
(一二)蓬萊の山―仙人の住むと云ふ蓬萊の山でも。
(一三)そこにその人は―そこにその人が居ると。
(一四)我が心と―自分から自分の心を思ひ反して、心をゆるめる折もあつた。
(一五)見る目―海藻の海松布（みるめ）と掛詞。
(一六)同じ麓の草ながら―同じく手近に居る、自分の妻の姉妹ではありながら。
(一七)露もかくべき―上の麓の草を受けて露と云つた。少しも云ひ懸ける事が出來ずして。

心得るぞ、なか〳〵覺束なかりつるよりも淺ましきや。

中納言

涙のみ高瀬の濱に寄る船の渚も見えず漕がれ渡れば

よしや思ふに口固められ給ひぬらん物を、かばかりまでもかすめ出でたる心ばへを、此の世ならず思ひ知られてなむ、惜しからぬ命の程も後めたくなりぬる」など宜ふに、はかなく明方にもなり行く。宮上に上らせ給ひにしかば、御迎へにとて立ち別れて出で給ふを、宮中將昨夜ほのかなりし氣配の心に留まりければ、局にと聞きて、此の邊に佇まひ明かしけれど、さなめりと思ひ知りて　宮中將「吉野の山の近け れば」と氣色ばみて過ぐるを、立ち止まりて、中納言をかしと聞き給ふも、女は、たゞなるよりは苦しく覺えけり。

誰と知らざりつる程は蓬萊の山と云ふとも、そこにその人はと聞きつけなば、必ず尋ね上りて行きあひなむ。我が心とのどむる折こそありけれ。渡津海の底にも、我が心の深きは、思ひ入りなば、見る目の難かるべきかと思ひつるにこそ慰む方もありつれ。明暮立ち馴れつる同じ麓の草ながら、露もかくべき方なく佗びしと思

(一)うたて覺えて―嫌らしく思つて。
(二)押し籠めて―中君の身の上を明かさずに秘密にしておいて。
(三)さるべき人々―立派な女房達の自分よりも優つた人々が自分に、斯様に親しく言葉をお
(四)宣ひかくるをば―中納言が自かけになるのを。
(五)あらず―あるまじき事。
(六)中々にこそ―却つて怪しからん事だと、他の女房達は思つてゐる事であらう。
(七)此の事故―中君の事故。
(八)知らず顔にや―知らぬ顔をして、中君の身の上を明かさぬ譯には行かぬ。
(九)一つ所に―同じ家の婿となつて。
(一〇)上手めかしく―上品らしく、落着いた様子をしては居るが
(一一)深くもあらぬ―深く思慮もない、若い新少將の心には。
(一二)いみじき言葉を―甚だ切なる情こめた言葉を。
(一三)今宵にこめたる言葉を。
(一四)今宵に限りてんずるよし―今晩は是非その女の身の上を明かせよと、今晩に限るよしを。
(一五)聞え煩はせ―素性を明かす事なさる誤魔化してしまふ。
(一六)言葉をかしく―婉曲に言ひ紛らはす事も出來ないで。
(一七)女君に―一本に「かば君」とあり対の君は新少將の叔母に當る故、対の君を指すのであらう。
(一八)方は―方にて―秘密を洩らしたと悪く云はれる事は兎に角、
(一九)言ざかりより―此の歌「拾遺百番歌合」及び「風葉集」雜三に寝覺の女院新少將とて出づ

懸想び宣ふ筋交りたらば、我が心地うたて覺えて、ひたぶるに持て離れ押し籠めてあるべきに、かけてその氣配はなくて、心耻かしくのどやかなる氣色のわりなく怨み和め給ふ樣の、今まで忍び籠めてんは心苦しく覺えて、さるべき人々の我には打優りたるも、此の殿の一言葉も宣ひかくるをば、あらず、中々にこそ覺ゆべかめれ。此の事故かばかりあはれなる御氣色心ばへを、せめて知らず顔にや有るべき。一つ所になり給ひ渡れば、つひに聞き給ひてんものから、我しも忍び籠めて、此の御心に怨みおかれ奉りて、思し捨てられ奉りなん事の、さこそ上手めかしくもてなし沈めたれど、深くもあらぬ若き心地には、いと苦しく反き難く覺えければ、いとたく思ひ煩ひて、とみにも答へぬ氣色に、いよ〳〵いみじき言を盡くして、今宵に限りてんずるよしを云ひ續け給ふに、世に立ち馴れたる人ならば、それにつけても聞え煩はせつべけれど、さすがに言葉をかしくも言ひなさず。ひたぶるに心苦しくのみ覺えて、を君怪しく聞えてけりと云はむずらんと思ふ方は方にて、此の君に打捨てられ奉らんいとほしさは身にしみければ、いたく打嘆きて、

新少將　漕ぎ返り同じ湊に寄る船の渚はそれと知らずやありつる

御よひの闇は遠からぬ程ながら、覺束なく思し召しつらん」と許り答へたるを

(一)うたて―嫌らしく。
(二)懸想び宣ふ筋交り―恋慕ひ宣ふ筋違ひ。
(三)我が心地―自分の心。
(四)宣ひかくるをば―言葉をかけるのを。
(五)中々にこそ―却つて。
(六)知らず顔にや―知らぬ顔をしてゐるのであらう。
(七)此の事故―中君の事故。
(八)心苦しく―気の毒で。
(九)一つ所に―同じ家に。
(一〇)上手めかしく―上品らしく。
(一一)深くもあらぬ―深く思慮もない。
(一二)いみじき言を―甚だ切なる情。
(一三)今宵に―今晩。
(一四)聞え煩はせ―素性を明かす事。
(一五)言葉をかしく―婉曲に言ひ紛らはす事。
(一六)立ち馴れ―立派な。
(一七)漕ぎ返り―漕ぎ返り。
(一八)渚―渚。
(一九)御よひの闇―御存知なかつたのですか。あなたの婿となつて居られる大君と同じ血筋の姉妹だとは。
(二〇)御よひの闇は―あの晩にあなたが人目の闇を忍んでお逢ひになつた女は、あなたの間近くに居られまずのに。「宵」は一本「通ひし」とある。

(一)かなはざりける—世の中の事と云ふものは、自分の思ふ様にならないものだ。引歌があらしいが、不明。或は小野小町集の「心にも叶はざりける世の憂き目は見じと思ひける哉」と云ふ歌であらうか。

(二)参り初めしより—新少将が初めて宮中に仕へて居た時分から。

(三)例の寝覚—例の女の事を思つて、夜寝られぬまゝに。

(四)などかあらん—何事があらうか、其に構やしない。

(五)さるかたには—其位の男と交際をするのには、何の差支へもない。

(六)人の物云ひぞ—併し、世間の噂ごとゝふものは南倒なもの。

(七)さこそ見る人—私がおもものの前の所に来るのを見つけた人も、欠張り懸だと思ふ。

(八)そはさは—さぞ—の誤か。

(九)人知れぬ隠れたるしるしはきりともと思ふに、常にうとうとしき氣色こそ心憂けれ。今めかしき氣添へたる仲よりも、たゞよその思のあはれなるこそ誠に覺ゆれ。まして心あらん女はきこそ思すべかめれ。本意なし」などゝいみじく懷かしく宣ひて 中納言「その行く方の知らまほしさに、あぢきなく思ひ寄り、宮にも召させしなり。あが君今宵聞かずば見ず知らでやみなむ」と誓ひ宣ふ氣色、くよ。峯に隠れしと云ひつる返事を如何で答へ出でつるぞと、うとましく思ひ續けて

新少将「知らざりし雲の上にも行き交り思ひの外に住めば住みけり

かなはざりける」と忍びやかに眺め出でて居たれば、云ひ知らず乞ひ深く香り満ちたる直衣姿ぞ寄り来る。中納言の御弟三位中将参り初めしよりあながちに云ひ寄り給ひしを、わりなく逃れたるが尋ねおはしたると、胸潰れてまどひ引き入りぬるに、中納言御宿直なりけるが、例の寝覚に佗びて立ち寄り給ひたりけるにぞありける。中納言「さるべからむ人の立ち寄らむには馴れ〳〵しからぬ程に聞え出でたらんになどかあらん。さるかたには如何あるべき。人の物云ひぞ難かしきやうなめるな。まろがかやうに立ち寄るをもきこそ見る人思ふべかめる。そはさはれ苦しとな思しそ」など宣ひて 中納言「人知れぬ隠れたるしるしはきりともと思ふに、常にうとうとしき氣色こそ心憂けれ。今めかしき氣添へたる仲よりも、たゞよその思のあはれなるこそ誠に覺ゆれ。まして心あらん女はきこそ思すべかめれ。本意なし」などゝいみじく懷かしく宣ひて 中納言「その行く方の知らまほしさに、あぢきなく思ひ寄り、宮にも召させしなり。あが君今宵聞かずば見ず知らでやみなむ」と誓ひ宣ふ氣色、

(一〇)今めかしと訴へるへつらふ氣添へたる—當世風の華やかな戀仲よりも、よそなる思ひを思ふ。

(一一)本意なし—左様にうとゝしく取扱はれるのは不満に思ふ。

(一二)その行方—あの晩の女の行方が、なんとてお前にその女の行方を尋ねようと思ひついて。

(一三)あぢきなく思ひ寄り—仕方がなくて。

(一四)あが君—我が君、人に云ひかける詞。

(一五)今宵聞かずば—今晩その行方

なお前がそはなかったならば私はもうお前の事を見も知りもせず世話もすまい。

御様限りなけれど、源氏の大殿の中の君の御容貌の懐かしさには、え並ばせ給ふまじかめり。あはれあたら様を浅ましき夢の中にも紛れ給ふかなと、心の中に思ひ出で聞えて、中納言のいと耻かしき御匂を見る度毎に、いと口惜しく思ひけり。

雪降り月いと明く澄みたる夜、殿上人数多参りて、戸口に我はと思ひたる人々数多居たるに誘はれて、中に交りたり。慎しくて答へもせむ東面のそばの方に引き入りて居たるを、誰々など問ひ聞きて、契定めし辨少將などたゞならず云ひかゝれども、暗きにおもむきたる方をいとよく押し量りて、居たる東面にさりげなく尋ね寄りて、

辨少將「石山の峯に隠れし月影を雲の他所にて廻りあひぬる
思し出づ(イる)や。あはれなり」と氣配も様も人よりは懐かしく艶きて、いと忍びやかに云ひたるに、え聞き過ぐさで、

新少將　雲井には澄む空も無き月なれば谷に隠れし影ぞ戀しき

とて、やをらすべり入りて、局に紛れ居りて、なよらかなる宿直物にひきかへ、火取の火起して、袖に引き入れて、ひたぶるに見捨てん事もさすがに口惜しき夜の様なれば、遣戸押し開けて、里の方思ひ出でて、親達の思ひおきてしには違ひて、淡つけくも持て出でぬる身の有様かな。我が心も立ち馴れ行

(一)源氏の大殿—太政大臣。
(二)澄まし夢の中に—中納言の中君の所に忍び込んだ事。
(三)御匂—御類色。
(四)戸口—家屋の出入口の四方にある妻戸。
(五)我はと思ひたる人々—自分こそは美人だと思ひ上つてゐる女房達。
(六)中に交りたり—新少將も女房達の中に。
(七)答へもせむ—一本の「答へもせず」。
(八)そばの方—端の方。
(九)誰々など問ひ聞きて—殿上人が女房の名を尋ねて。
(一〇)契定めし—新少將とかれて婚約。
(一一)暗きにおもむきたる方を—新少將は暗い所に逃げ隠れてゐる、その所を辨少將はよく知つて。
(一二)石山の—石山でお別れしたあなたに、意外にも宮中でお日にかゝりましたね。
(一三)雲井には—新少將歌。宮中に住む雲井には、私は、昔の身の上が戀しく思はれます。
(一四)宿直物—中宮のお傍で宿直する時に着る寝巻。
(一五)ひきかへ—着かへる。
(一六)火取—薫物をたく香爐。
(一七)袖に引き入れて—寝巻によき様に移りすき入れて。
(一八)ひたぶるに見捨てん事も—全く外の事を顧めないのも殘念に思ひたぶるに見捨てんのであるの景色。
(一九)淡つけくも—軽薄にも男と歌の贈答をする様な事をし出かす程の風情がある夜の景色。
(二〇)我が心も—自分の心も、他の女房達と同じ様にすれて行く自分の有様は情ない事だ。

(一)心ときめきして—嬉しさに心がどきゞする、胸騒ぎする。
(二)侍ひつけさせむ—つくは落ちつく事、馴れる事。娘を宮中に住ませ馴れさせる。
(三)しかへつゝ—着物を、美しい着物にかへつゝ—着代へさせて。
(四)かどあり—才能がある。
(五)挑みけれど—戯を云ひかけたが。
(六)世に馴れたる人—中納言の中高に申す詞。世馴れた人なら程なく兎に角。
(七)程なき窓の中に—貴い家庭内に閉ぢ籠つて育て上げられた箱入娘でありますのに。
(八)恥かは—恥ぢさせ給ふ—娘に顔を耻ぢ隠して、お姿をお見せにならぬ譯は少しもありません。
(九)侍ひ難く—その様にあなたが重々しくしてゐては、娘がお仕へ難くして困ると思ふからです。
(一〇)御前許させ給へ—お傍近く参る事を許して下さい。
(一一)御様容貌—中納言の。
(一二)人たなべては—普通には、女と親しくなさらない。
(一三)わざと見入れ給ひて—殊更、此の但馬守の娘とは親しくなすつて。
(一四)世の常に懸想び—普通の人の様に、色氣の含んだ詞はお漏らしにならない。
(一五)たゞ哀なる御心ばへ—何の氣色もなくて、たゞ物懐かしい中納言の御心の様子。
(一六)いとあはれに—但馬守の女の心。
(一七)参り給はず—中納言が宮中に。
(一八)たたれず—一本の「人知れず」えさせ給ふと語れば、親どもゝさればよと嬉しう本意ありて、心ときめきして念じ祈りつゝ、同じくは侍ひつけさせむとて、そのまゝに罷出させず、裝束など眼もあやにしかへつゝ侍はせたり。

少し立ち馴れ行くまゝに、人がらいとかどあり、心ばせありてもてなしければ、宮もいとよき者に思し、殿上人なども心憎く思ひてゆかしがり挑みけれど、こよなく心上りしてはかなく返事すべくもあらず。引き入りねたげにもてなしたり。中納言「世に馴れたる人こそ侍れ。程なき窓の中にのみ籠り居て侍りてん物を、何かは耻ぢさせ給ふ。侍ひ難く侍らん。御前許させ給へ」と申させ給ふを聞くに、嬉しうあはれなり。御様容貌はめでたく清らになまめきて、人をなべては更に見入れ馴らし給はず、氣高く物遠き御有様に、わざと見入れ給ひて、事にふれて懐かしく思しおきて給ふ。世の常に懸想びたる筋にはた洩らし給はず、たゞ哀なる御心ばへなれば、いとあはれに、若き心地にはおろかならずのみ思ひ知られて、参り給はず程經る時は、たゝィ人しれず、但馬守女「如何なれば」など待たれ給ふ心もつきにけり。中納言宣ふものをとて、御前許されぬれば、新少將とぞ召さるゝ。いと氣高う賜はゝしき

(一九)如何なれば—何故に中納言はお見えにならないのかと。
(二〇)新少將—但馬守の女の賜はつた呼名。
(二一)いと氣高う—中宮の様を見て新少將の心。

(一)有らざりけりと—但馬守の三女は、あの晩の女ではなかつたと。
(二)これ離れぬにこそ—何うしても此の女と無關係な者ではない。
(三)しかこれをだに—左樣ならば此の女をだに手懷けて。
(四)思ひ返されず—全く諦めてもしまはれない。
(五)戀醒めには思し召さるとも—豫期に反して大した美人でもなかつたのに、興ざめにお思ひになつても。
(六)こよなく思はむ—何うして甚しく、思ひうとんじたり致しませうか。
(七)かばかりなるこそ—あれ程の女も世の中には少いのです。
(八)月榮—月に照らされると、甚しく美しく見える人。
(九)局にも—但馬守の女の部屋にも。
(一〇)とあれかゝれ—斯樣々したがよい。是は色々と中納言が宮中生活の注意を與へる言葉を略して記した詞。
(一一)見し人と—お前は嘗つて、私を見た事がある人だと覺えて居りますか。
(一二)さは淺ましく—女の心。さてはあの晩呆れた氣味の惡い事だと思つて騷いだ、あの忍び込んだ男が。
(一三)暫しはさこそあれ—中納言の心。暫らくは斯樣に遠慮して居るが。
(一四)必ず云ひてん—必ずあの女の素性を白狀するであらう。
(一五)馴れむつれ—馴れむつび親むを人知れぬ飾に—人知れず情を通はして居られるのだと、中宮の方では合點して居られる樣子である。
(一六)局の後見に侍る人—但馬守の女の宿つてゐる局の主（あるじ）。
(一七)局の後見に侍る人—但馬守の意中を。
(一八)親のあらまし事—女の親なる但馬守の意中を。

參りなば、何の滯りなく見る目に飽くまで眼馴れなむと思ふ賴みにこそ心を慰めつれ。有らざりけりと見なし果てゝ、行く方も知らず、果てもなく佗びしくて、如何にもこれ離れぬにこそ。しかこれをだに懷け語らひて、其の行く方をも自ら知りなむと思へば、あらざりけりとてもこよなくも思ひ返されず。參り給ひたる毎に、中納言「宮にも戀醒めには思し召さるとも、わざと召したる物を、御心留めさせ給へ」と申し給へば、中宮「などてかこよなく思はむ。かばかりなるこそ人は難けれ。おくれたりと見ゆる所無く目安かめり」と宣はすれば、中納言「いなや。月影に見給へしよりはこよなく劣りにたり。月榮する人にこそあめれ」と打笑ひて、局にも立ち寄り給ひつゝ、中納言「如何に。侍ひ疲れぬや。とあれかゝれ」と實やかに教へ、用意し給ひつゝ、中納言「見し人と覺え給ふや。その夜をあはれと思ふぞ」など忍びつゝ宣へば、さは淺ましくむくつけしと思ひまどはれしは、此の人にこそと思ひ合はすれば、いみじく物慎しげに答へもせず。暫しはさこそあれ。見馴れなば必ず云ひてんと思して、馴れむつれ心寄せ渡り給ふ。宮の御方には人知れぬ筋に思したるとぞ心得べかめる。局の後見に侍る人も、親のあらまし事を聞き置きたれば、中納言なむ常に懇に見

(一)菊の色々―五衣の色。菊がさは裏白。色目の名。表白裏青、又は表白裏蘇芳、又は表白裏紫。九月十月に用ふ。ここは十一月一日までもこの色の五衣。蘇芳たのもの。五衣にその菊襲の濃いのやう薄いのやう、色々を洗ひ出して重ねて来てゐた。

(二)濃き掻練に蘇芳の織物の袿―掻練は裏の色目の一、表裏共に打ったる紅。蘇芳は表裏赤目。蘇芳実赤。織物は綾を織り出たる上等の品。袿は五衣の上につけ上着。

(三)青色の無紋の唐衣―青色は麹塵（きくじん）とも稱す。青く且つ黄なる色。無紋は模様の入らないもの。唐衣は女子の禮服、一番上につけ上に結び様。

(四)かんざし―髪の「引き遣り給へば」

(五)側の―下の

(六)有る氣色許りは―自分の持つてゐる容貌くらゐに、そんなに隠さない様に見せてくれてもよいではないか。

(七)なびきかゝれる―扇を除けられたので、仕方なく髪を振り動かして顔を打ちかけて顔を隠す。その髪のかゝり具合も

(八)側目―横顔。

(九)後の―後ですぐ

(一〇)其の中勝るゝ―是等受領の身分の者の中では。

(一一)未だ見知らぬ様―未だ嘗つて見た事もない様な美人だと、中宮に申し上げたが。

(一二)かばかりにては―是程の容貌

言胸打潰れて、眼を立てて見給へば、菊の色々を濃く薄くこちたくこき交せて、濃き掻練に蘇芳の織物の袿、青色の無紋の唐衣にて、よき程にゐざり出でたる容體頭付、物より抜け出でたる様して、髪のかゝり、かんざしいと貴やかになまめきて、扇さしかざしたる袖口、もてなしたる様、あくまで懐かしくたをやかなれど、見しその人とは覺えず。なほ怪しく覺束なさに、御殿油を少し明く挑げて、例の、中勝る有る氣色許りは如何でかは」とて、扇を少し引き遣り給へば、いとわりなく思ひてなびきかかれる髪のかゝり、側目、長押の下にて、琵琶弾きし人に見なしつ。あな怪し。後の聞えもあり。他人を参らせむやは。姉二人あり。一人は右中辨の妻、今一人は藏人の少納言の妻にてこそあれ。其等をば出だし立つべきにあらず。またこれこそ其の中勝るゝ容貌ならめ。ありしは譬ふべき方無かりし者を、誰なりけむと、掻き亂り心地騒ぎぬ。来だ見知らぬ様したりとのみ申し聞かせたるに、實にかばかりにては耻ならざめれど、云ひし程よりはとや御覽じ落すらんと、いとほしく思へど、思ひつる程は、類なき心の中ながらも、思ひ落しむる方様に自ら思ひ紛れ、又宮に

(一三)いとほしゝ―女を氣の毒に思ふ。

(一四)思ひつる程は―今迄但馬守の娘だと思ひつめてゐた時分に

(一五)類なき心の中―心の中では、此の上もなく女を慕しく思つてゐたが。

(一六)思ひおとしむる方様に―然も

女の身分が賤しい者だから、何うでも自分の思ひ通りに成ると思ふと、自然に心が紛れもした。

かくのみ思ひ嘆くを中納言かけてもえ知り給はず、いみじく心の中に深くも浅くも思はむ事を、人の色に出でて眼留むべくもあらぬ御様なれば、をさ〳〵夜離れなく在り付きながら、月頃になり行くまゝに、面影見まほしき心いられには、宮を絶えず申し給へば、しきりに召さる。本意なく嘆かしと親ども思へど、但馬守「如何はせむ、かゝるべき宿世にこそはあらめな。中納言などの心留め給ふやうもあらば、さ許り如何なる海人の子のもとに在りとも、中納言子と名告り來る者有らばと願ひおはすに、さもあらばなか〳〵いとめでたかるべき事なり。ふみ許りをだにその人とは云はれじ」と、さ許りおとしめ思す心をしも、先づかねごとに思ひ寄り云ふもおこがましし。婿取せまし儀式に仕立てゝ、霜月の朔日頃に參らす。その夜など聞き給ふ夜は御宿直にて、中宮一兄もいと親しく侍る者なり。わざと召し出ださせたる心ばへもいとほしく、程々につけてはかしづき習はせたらん物を、火明く挑げて、人々數多見むは、はしたなかるべき事なり」と宣ひて、人々立て給ひて、さるべく忍びやかなる限り侍はせ給ひて、參りぬと聞き給ひて、何時しかと御前に召す。中納

(一)心の中に深くも浅くも思はむ事を―中納言が大君を深く愛して居るなら、面に現はしてあつて人から注目せられる程の事があつては、ならない程の家柄の事であるから、此の家に住み付いた人々の離れる事がなく、此の家に一夜も離れる事もないもの。

(二)面影見まほしき心いられ―あの晩の女の顔を見たくて、心がじれるので。

(三)夜離れなく―夜離れなく。

(四)宮を絶えず申し給へば―但馬守が中宮に催促するので。

(五)しきりに召さる―中宮からも但馬守に向つて、早くその娘を出す様にお召しがある。

(六)さ許り―下の「願ひおはす」に懸かる言葉。

(七)海人の子のもとに―何んな賤しい漁師の娘に生ませて、その所で育てられてゐる子供であつても。

(八)中納言子と―中納言の實子であると。

(九)願ひおはすに―中納言の父關白が、あれ程願つて居られるのに。

(一〇)さもあらば―自分の娘が中納言から寵愛せられたならば。

(一一)ふみ許りをだに―文許りか、「つゆ許り」の誤か。不詳。

(一二)さ許り―程。

(一三)先づかねごとに思ひ寄り―但馬守を、心中輕蔑して居られる中納言の事をば。

(一四)御宿直にて―中納言は宮中にお泊りになる。

(一五)わざと召し出ださせたる―娘に婿を取らうとしてゐるのにわざ〳〵宮中へ召し出させたので、親の心持は眞に氣の毒である。

(一六)程々につけては―高位高官の人の樣な眞似は出來まいが、身分の低い者は、その身分に應じて矢張り、娘を大切に育ててゐたであらうのに。

(一七)八々立て給ひて―女房達を立ち去らしめて。

(一八)さるべく忍びやかなる限り―然るべき、おとなしい女房許りを。

(一九)いつしかと―早くと待ちかねて、中宮のお傍に召す。

所は先づ生先あり、(一)華やかなる様に定まり給ひぬるを嬉しき事と喜び侍るに、いと怠々しき事にも侍るかな。中納言(二)おはしつかぬ先ならましかば、此の事同じくは此方様に構へ侍りなまし。(五)此の中納言の御祈、(六)童におはせしより己なむし侍り。(七)御爲めにも此の事いと〳〵不(八)便なり。これ皆此の世のみならず。御祈は心の及びたらんに從ひて仕うまつらん。中にも此の姫君は御外目いと(九)警束なり。女と申しながらも、前の世の事により生まれもし給へると見ゆる物を、かゝる不便の事のおはすらん、空しくいたづらに捨てられぬ物なり一と云ひて、佛現し奉りて御祈すべきよし、頼もしげに云ひ置きて歸り給ひぬるに、胸の隙を明けて、さりともと頼み思ふ。姫君は(一〇)此の事聞き給ひてし後、恐ろしく悲しく思されて、骸をだに殘さず此の世に無くなりなばやと思し入るに、月頃弱り頽れ給ひぬる心地またあやまりて、(一一)音をのみ泣きつゝ頭も擡げ給はず、御帳の中に沈み入り給へれば、侍ふ人にも起き上り見え給ふ事もなし。中納言の上はいと氣高く物遠き(一二)様して、御氣配も麗はしく重りかにのみおはすれば、打解け難き物に女房なども皆つゝみ聞えて、此の君は氣近くもらうたげにもおはすれば、仕うまつるもいと侍ひよくのみ習ひたるに、ありしにもあらず、御顏見奉る事も難く稀にて月頃になれば、各々皆くむじ痛けに思ひたり。

(一)華やかなる様に―立派な婿をお貰ひになつて、身が固まつた。(二)ないと怠々しき事―中君にそんな事件が起るとは、不注意千萬。(三)おはしつかぬ先―中納言が大君の婿にならない先。(四)此方様に―此の中君の婿となる様に、取り計らひも出來よう。(五)此の中納言の御祈―此の中納言の息災無事なるを祈る祈禱は。(六)童におはせしより―中納言が子供の時から私がしてゐた。(七)御爲めに―中君のみならず中納言の身の爲めにも。(八)不便―都合な事である。(九)警束―きやうそくとも云ふ。極めてすぐれたる事。(一〇)前の事―前世の善行によつて、此の世に斯様な美人として生れて來たのであると見える。(一一)かゝる不便の事の―此の様な不都合な行爲があつたからと云つて、見捨てておく譯には行かない。(一二)佛現し奉りて―持佛を開帳して。(一三)さりともと―さりとも、惡い事はあるまいと。(一四)此の事聞き給ひて―姫嬢したと云ふ事を聞いて。(一五)またあやまりて―一層氣分が惡くなつて。(一六)中納言の上―中納言の夫人大君。(一七)物遠き―物懷しいの反對、親しみ易くない事。(一八)つゝみ聞えて―遠慮して。(一九)此の君は―中君は。(二〇)くむじ―「屈じ」と書く。心が結ばれて晴れやらぬ事。「くし」とも「えくし」ともいふ。

侍りなむ。(一)かくてもいと侍ひ憎き折々侍れども、一所の御心苦しさに一日許りの隔も覺束なく覺え侍りてこそ何事も聞き知らぬやうにて過ぐし侍れ。世に後めたき事は聞えさせじ。例のやうに時々しくもてなして物せさせ給へ。更にな思し入れそ」と打泣きつゝ慰め聞ゆれど、顔に袖を押し宛てゝ反き給ひぬる姿の、限りなくをかしげなるに、御髪は項より末まで、いさゝかおくれたる筋なく、つや〳〵と(五)ひまなくこりあひて、長さはこちたくもあらず、丈に五六尺許り餘り給へる末の、五重扇を廣げたらんやうに、清らに多くこりあひて、類なくめでたし。あないみじ。勝れ給へる人の樣(イカ)な。さりとてなどてかいたづらにかゝる人の成り果て給ふやうの有らん。かりにてもかゝる事の紛れ有りて、いとかく物を思はせ奉る、我がしたる過失ならねど、ねたう口惜しく悲しく思ひ餘りて、法性寺の僧都の物し給へるに、いと忍びて有樣を細かに語りて、對の君「かゝる事の有るにせむ方なくなんあるに、此の御事は萬に後安き物に思し賴みたるに、いとなむ佗びしく苦しき。此の御事心に入れて事無かるべく祈り申し給へ」と泣く〳〵語らひ聞え給へば、僧都驚きて、僧都「故上の、あはれに己が寄邊無かりしを、かくまで育み立て給ひたる御心を思ひ侍れば、此の御前達の御事は、朝夕の念誦のついでには、先づ祈り念じ奉るに、一

(一)かくてもいと侍ひ憎き折々―方の人に惡口を云はれるので、此の樣に世話をする事も出來難い樣なもしばゝあつたのですが、お一人がお氣の毒なので。
(二)何事も聞き知らぬやうにて―その樣な非難惡口も知らぬ顔なして。
(三)世に後めたき事は―あなたの身に取つて、不安心な事は決して申し上げません。
(四)おくれたる筋なく―おくれ毛もなく。
(五)ひまなくこりあひて―隙間もない程に束になつてゐて。こりあひて―は凝り合ひて。
(六)こちたくもあらず―餘りに長過ぎもしない。
(七)丈に―背の高さに。
(八)五重扇―檜扇の一種。極めて上等の扇。板の幅が極めて狹く開き、五つ重ねて普通の扇の幅になる。
(九)などてかいたづらにかゝる人の成り果て給ふ―どうしてこれらの人が幾らかいたづらにかゝる人の成り果てるのか。
(一〇)法性寺の僧都の物し給へる―法性寺の僧都が何かうして、此の樣な立派な人に役目を云つて、身をふたなうして給へる僧都。
(一一)對の君―僧都の兄。
(一二)此の御事は萬に後安き物に思し賴みたるに―僧都を尋ねて來たので。
(一三)此の御事は―父君の太政大臣が、此の中君の事は皆自分に任せて安心して居るものとして來たのですから、一層情なく苦しいのです。
(一四)故上の―故北の方が。此の北の方は大君や中君の母。
(一五)一所は―大君は。
(一六)事無かるべく―此の懷胎の事が、無事に安産の出來るやうに熱心に佛樣に祈つて下さい。

(一)今は如何はせむと—今はもう何とも致し方がないと、中納言が思ひ諦めてしまふと云ふ様な事は、男の心としては決してあるまい。
(二)物の聞え—すると世間の取沙汰が、もつとやかましくなるだらう。
(三)心地あやまりて—大君の婿が實はあの晩の男であると中君が知つたならば、氣も狂はんばかりに何んなに情なく思はれる事だらう。
(四)むげにさる心知り給はざらむも—全くその事を、中君が御存じになくその事を、中君が御存じにさる心知り給はざらむも—全くその話を、あなたに致さないのも何らかと思ひます。
(五)聞え知らせずは如何でか—全くその話を、あなたに致さないのも何らかと思ひます。
(六)我をも知られじと—自分の身分をも知られまいと。
(七)見顯はし給ひては—但馬守の娘が、あの晩の女ではないとあらはしたならば。
(八)他所にだにあらず—中納言は全く他所の者ではなくて、今は姉君の婿となつて居られるので。
(九)煩はしき事さへ添へて—面倒な事が起るであらうと思ひまするのに。
(一〇)たゞにはおはしまさぬ—普通の身ではない、懷胎して居る。
(一一)皆此の世の事にも—皆前世からの因縁づくでありますから。
(一二)さるべき事と—さうなるべき運命と。
(一三)餘りならば—餘りに悲しみ沈んで居ると。

給ひなば、男の御心は、今は如何はせむと世に思さじ。物の聞え今少し煩はしく聞き苦しかるべしと思へば、音無くて引き入り給ふ。心地あやまりて如何に思さむと思へど、むげにさる心知り給はざらむも悪しかるべければ、夜一夜思ひ明かして、つとめて、對の君「かくてのみはなどか沈み過ぐさせ給ふ。時々は起き上らせ給へ」と、せめて起し据ゑて、御髪搔き下し奉りなどするついでに、對の君「いといみじく御命も絶ゆ許り思しためる御事を、懸けても思ひ出でじと思ひ侍れども、むげに聞え知らせでは如何でか。おはせし人は此の中納言にこそおはしけれ。但馬が女と思しおとして、我をィとも知られじと思して、宮の中將の君とは名告り給ふなりけり。但馬が女と思はせて已み侍りにしかば、さ知り給ひて中宮に召さるゝなりけり。見顯はし給ひては必ず尋ね怪め思さむ物ぞ。他所にだにあらず、近き程にて、自ら聞き知り給ふ事もあらば煩はしき事さへ添へて思ひ給ふるを、御前の御有樣もたゞにはおはしまさぬなめり。さる心をせさせ給へ」と聞え出でたるに、いみじと思して、面のさと赤み給ふまゝに、涙こぼれかゝりぬる美しさの似るものなきに、いとゞ悲しくなりて、對の君「吾が君かくな思し入りそ。命だに侍らば身を捨てても世に御前の御身に科あるべくは構へ侍らじ。云ふかひなし。皆此の世の事にも侍らざなれば、たゞさるべき事と思し慰めて、さりげなくて物せさせ給へ。餘りならば怪しと人も氣色見

(一)心耻かしげに—奥床しい様子で。
(二)これこそ限りなき際なれ—斯様な女が、最も勝れた美人であるのに。
(三)面影はなどて—あの晩の女の面影はなどてさは様殊に勝れしぞと、先づ怪しきまで思ひ出でらる。此の對の君宵の間などに參りつゝ見るに、物打宣へる氣配などの、たゞ見し夜(四)宵の夢なるに、いとまた淺ましく、こは如何なる様ぞと覺ゆれば、式部卿宮中將の氣配聞き合はせまほしくなりて、(五)如何なるついでがなと思ひわたるに、中納言此所へおはし初めぬるもてはやし奉らんとて、月明き夜などは御遊など繁きに召されて、此の中將も常よりも繁く參りて、宰相中將に付きて此の御方に馴れ寄り來るを、例はさしももてはやさぬを、若き人出だし會はせて、物など云はせて、(九)忍びて聞くに、此の氣配いと貴やかに心憎けれど、(一〇)似るべくもあらざりけり。なほ此の中納言にこそ物し給ひけれと見聞き合はせつるに、(一一)同じくはなどて在らせ奉らで、口惜しく(一二)いみじのわざやと、さりとも思し出でんかし。かけても知り給はぬにこそあめれ。但馬の守の女と深く思したりしを、(一三)さ知り給ひて俄に中宮よりは召さるゝにこそありけれ。今は知らせてあひなしかし。さりとて淺うはあらざりける契の程、つひには如何なるべき事ならむとゝくゝと思ふに、涙のこぼるれば、(一四)聲聞かば覺え給ひなむ。(一五)知りだに初め

(一)心耻かしげに、よしある氣色ぞ人に異なる人の御程容貌、(二)これこそ限りなき際なれ。(三)面影はなどてさは様殊に勝れしぞと、先づ怪しきまで思ひ出でらる。此の對の君宵の間などに參りつゝ見るに、物打宣へる氣配などの、たゞ見し夜(四)宵の夢なるに、いとまた淺ましく、こは如何なる様ぞと覺ゆれば、式部卿宮中將の氣配聞き合はせまほしくなりて、(五)如何なるついでがなと思ひわたるに、中納言此所へおはし初めぬるもてはやし奉らんとて、月明き夜などは御遊など繁きに召されて、此の中將も常よりも繁く參りて、宰相中將に付きて此の御方に馴れ寄り來るを、例はさしももてはやさぬを、若き人出だし會はせて、物など云はせて、(九)忍びて聞くに、此の氣配いと貴やかに心憎けれど、(一〇)似るべくもあらざりけり。なほ此の中納言にこそ物し給ひけれと見聞き合はせつるに、(一一)同じくはなどて在らせ奉らで、口惜しく(一二)いみじのわざやと、さりとも思し出でんかし。かけても知り給はぬにこそあめれ。但馬の守の女と深く思したりしを、(一三)さ知り給ひて俄に中宮よりは召さるゝにこそありけれ。今は知らせてあひなしかし。さりとて淺うはあらざりける契の程、つひには如何なるべき事ならむとゝくゝと思ふに、涙のこぼるれば、(一四)聲聞かば覺え給ひなむ。(一五)知りだに初め

(一〇)忍びて聞くに—對の君が、ひそかに宮中將の聲を聞いて見ると。
(一一)似るべくも—あの晩の男に。
(一二)同じくはなどて—同じ事ならば、何故此の中君の婿としてこゝに通はせずして。
(一三)いみじのわざやと—甚だ情けない事だと。以下は下の一つくゝと思ふにに受ける。
(一四)思し出でんかし—中納言はあの晩の女の事か、大君の婿となつた今でも思ひ出して居る事だらう。
(一五)知り給はぬ—あの女が此の中君であるとは、中納言は御存じない。
(一六)さ知り給ひて—但馬守の娘と知つて。
(一七)あひなしかし—今はその晩の女が中君であると云ふ事を、中納言に知らせては都合が悪

(一三)さ知り給ひて俄に中宮よりは召さるゝにこそありけれ。
(一四)聲聞かば—自分の聲を中納言が聞いたならば、あの晩に話した女だと中納言が思ひ出すであらう。
(一五)知りだに初め給ひなば—あの晩の女が中君であると、中納言が知り初めたならば。

そこらの御祈の験にや、此の頃は少しよろしくなり給ひつるやうにて、時々御髪持上げ給へど、淺ましかりし事を思すに、胸明くよなく、空恐ろしくのみ思し碎けたる樣いと哀なり。此の三月許りは例の樣なる事もなく、自らとれて見ゆる御乳の氣色などを、御方は見奉り知り給ふに、すべて云はむ方なし。かゝるべかりける御契にて、思ひがけぬ事もありけるにこそあめれ。淺ましう夢の樣なる目をも見るべかりけるかな。こはいかにしなし奉るべきにかあらむ。いみじのわざやと心まどひ增されど、また思し入らむもいみじかるべければ、とかく紛らはし、御湯殿なども心もと盡き、思ふにも云ふにも盡きぬまゝに、たゞ佛神を念じ奉る。大方には此の御心地も少しよろしくなり給ひたるを、御いそぎの事大殿より驚かし申し給へれば、思し立ちて、十月一日と定めて、女房三十人、童四人下仕同じ數、儀式しつらひ、さばかり耻かしげなる人の、なのめならず見給ふ許りと、世の常ならぬ淸らを盡くして、思し急ぎたり。其の夜になりておはし初めぬ。御心ざしおろかなりとなけれど、習ひにし寢覺の、ありしに變るけぢめもなし。畫見奉り給へば、甘に一許りや餘り給ひつらん、かたなりなる所なくとゝのひ果てし程少しそゞろかなれど、見苦しうもあらず。頭付容體いと淸げにて、あざやかに氣高く、淸らなる容貌もてなし有樣も、

(一)例の樣なる事もなく―毎月ある月の障がない。
(二)とれて―着物をはづれて。一本には「はづれて」とある。
(三)御方は―對の君。
(四)思し入らむも―中君がその事を知つて、深く思ひ込んでしまつては大變。
(五)心もとつき―心肝消滅す。氣力もなくなる。
(六)思ふにも云ふにも盡きぬ―思案に餘つて。
(七)此の御心地も―中君の氣分も。
(八)御いそぎの事―結婚式の事。
(九)大殿より―關白左大臣の方から催促する。
(一〇)しつらひ―室内の裝飾。
(一一)さばかり耻かしげなる人―あれ程に勝れたる中納言が。
(一二)なのめならず見給ふ許り―一方ならず感賞する程に。
(一三)淸らを盡くして―上の「儀式しつらひ」に續く。
(一四)御心ざし―中納言の大君に對する愛情は、決して薄くはなかつたが。
(一五)ありしに變る―以前と違つて物思ひがなくなつたと云ふ樣な變化もない。
(一六)甘に一許り―大君の年齡。
(一七)かたなりなる―不充分な所はなく、全く成熟し切つて。
(一八)少しそゞろか―少し意外な程ではあるが。

(一)珍しがりて―あの女が久しぶりに父に會ふので、珍しがつて父に。
(二)亂れ留むる―思ひ亂れつゝ、相手を注意して見る。
(三)眼昏れぬ―涙にくれる。感涙にむせんだのである。感慨無量の體。
(四)田舍のけに―續いて地方の國守となり、田舍住居をしてゐた故に。けには故に、爲にの意。
(五)宮殿に―中宮が父六臣殿に、時明の三女を宮仕へさせる樣に申す。
(六)仰せらるゝ―大臣が時明に。
(七)申さすー人をして云はしめた。
(八)人をのみ勸めー中宮に勸めただけでは不安心なので。
(九)衞府奏―武官の奏、近衞府の司の樣。
(一〇)見餘り給ひて―充分にその容貌を見つめてから。
(一一)たゞよろしく聞かせー但し中宮は妹をよい女だとお聞きになつて。
(一二)いと異樣なる―妹は大變醜い人間でありますのに。
(一三)兄を見よー妹の容貌を知るには兄の顏を見よ。當時の俗諺。
(一四)わぬしー お前。
(一五)さばかりにてーお前の樣に美しいだらう。
(一六)事にてー仕事として。

あな淺まし、そが女とも覺えざりし者かなと、打見守られつゝ微笑まれ給ふ。(一)珍らしがりて見え向ひつらん面影身に離れぬに、涙もさしぐまれ樣々(イに)亂れ(イ日を)留むるも知らず、國の事などしたゝかに申し居たる樣見るに、權中納言の御文ありなど云はむに、便なかるべしと思ふに、(二)眼昏れぬ。さるは賤しき際にもあらず、上達部の族にて、暫しは公達交らひもしけるを、打續きたる田舍のけにかくなりにけるなるべし。上りにけりと聞し召して、(五)宮殿に申させ給ひければ、「三の女宮に參らせよ」と仰せらるゝ。(六)婿取せむと思ひ、急ぎて上りたるに、召さるるはいと口惜しく本意なく覺ゆれど、否び申すべき方なければ、かしこまりて參らすべきよし申さす。(七)中納言殿は人をのみ勸め聞え給ひて心もとなくいぶせければ、兄の右近の丞なるが參りたる衞府奏、(九)これはしも賤しからず汚なげなき、眼留め給ふに見餘り給ひて、(一〇)中納言「まことと妹をや宮より召すなる。」右近丞「しか仰せ言候ふなり。」中納言「さて如何、參らせむとすや。」右近丞「いかでか參らぬやうの候はん。たゞ(一一)『よろしく聞かせおはしまして召しおはしますにや。いと異樣なる者を』と嘆きかしこまり申す」と申せば、中納言(一二)「兄を見よと云ふ事あむなれば、わぬしにや似たる。(一三)さばかりにて有りなむ」と打笑ひて、我たゞならぬ氣色にや見ゆらんと思せば、他事に云ひなしつ。

太政大殿には、中君の御心地を嘆き扱ひ給ふを事にて、はかなく九月にもなりぬ。

(一)はかなく思ひ覺ませども—つまらぬ事だと、思ひ諦めようとしたが。
(二)内わたりのとのゐがち—兎角宮中へお泊りになつて。
(三)例ならず紛れつゝ—何時になく、女房達の部屋に忍び寄つて。
(四)その家の門—但馬の守の家族の住んで居る家。
(五)なれる姿—自分の忍び歩きの思つてゐた姿を、女に見せたくやつれて。引歌に及ばず。
(六)見入るれば—女の家の中を。
(七)その程に—その身分にふさはしい家屋の樣。
(八)三つ葉四つ葉に—葉に棟の事で、三棟四棟と瑞内に棟數の多い事。催馬樂歌「此殿はむべも富みけりさき草の三つ葉四つ葉より出でたる詞」此の歌
(九)そゝめき—そは〳〵する。
(十)ありし月影—あの晩の女を。
(十一)うちつがひゆきすり—女の家の出入の人々が、押し合ひへし合ひ賑はしく勢あるさまが「さゝべきこは一本の「騷ぎ」とある方よろし。
(十二)交野の萩原—引歌未詳。
(十三)人々しくは—自分の實名を名乘らずして消息をしたのでは自分を立派な人だと思つて承知してくれる樣に事は決して有るまい。
(十四)逢ふには身をもかふる—倒歌多し、引歌に及ばず。
(十五)鳥籠の山なる—古今集墨滅歌「大上の鳥籠の山なる名取川いさと答へよ我が名洩らす

みやせむとすらん　と宣はすれば、中將言「え澁り申さじ」と聞え給ふ。寢覺めのみせられて、はかなく思ひ覺ませども、苦しきまでに心に懸り給ふ。慰むやと內邊のとのゐがちに、例ならず紛れつゝ心慰むかと紛れ給へど、見し夜の月影の忘れるべくもあらず。御歩きの折々、その家の門を過ぎ給ふ折もあるにはなれる姿も見えまほしう、いといみじく忍び難く見入るれば、その程につけたる家造り、三葉四葉に門のほとりまで賑はゝしくそゝめきたるに、いとゞ心劣りして、宮の中將の云ひしやうに、深き山の麓、淋しき蓬葎の下より、ありし月影を見付けたらば、實にいみじき山人の女と云ふとも、苦しかるべきやうもなく、心の牽くに任せても、もてなし迎へ寄せてむかし。命盡きぬ許りに戀ひしくあはれなるに、たゞ打番ひ行き摺りさべきわぎ勢ひたるが佗びしくもあるかなと思ひ續け、涙を落しつゝ、交野の萩原よりも過ぎ佗び給ひて思し煩ひ給ふ。なほ消息やしてまし。人々しくはよに承け引き返事などはせじ。逢ふには身をもかふるたぐひなくやあると思し亂れつゝ、鳥籠の山なるとや口固めてましと、心弱く思し弱る折しも、時明の朝臣昨夜罷り上りたるよし申す。先づ胸潰れて、常は見え留めてナシ給はぬ人なれど召し入れたれば、歳五十許り、きらゝかなる樣したれど、黑くふつゝかにあらはにその品しなき、

是は萬葉集卷十一の歌を入れたもの、上の句は序詞で

下の句は男の名は知らないと云つてその名を洩らすなと云ふ意。ここも此の歌の下の句の意を借り用ひたのである。

(一)式部卿宮の中將は御甥―式部卿宮は太政大臣と兄弟なれば中將は大臣の甥に當る。
(二)こゝに―太政大臣邸に。
(三)此の御心地訪ひに―中君の病氣見舞に。
(四)先づ胸つぶれて―對の君は、はつと胸をつかれて。
(五)それかとのみ―一寸見た所では、あの晩の男の樣に見受けられる。
(六)やをら入りぬ―對の君は又そろそろと奥の方へ入つてしまつた。
(七)但馬が女と―對の君の心、中將はあの晩の女を、但馬の守の娘と深く信じてゐた樣子だから。
(八)文遣りてけん―但馬守の娘の所へ、手紙を遣つたらうか。
(九)此の君―但馬守の女。
(一〇)などと―下の「心を盡くし增す」にかゝる。
(一一)有らずとも―中將があの晩の男ではないと、聲音などが違つてゐる事に氣が付いて、不審がる樣な事もなく。
(一二)あひなき濡衣なるや―中將の身なるやは、割に合はない濡衣だ。
(一三)修法讀經―中君の病氣平癒の祈禱や、讀經。
(一四)姫君―大君の。
(一五)わり母なき事を―困つた事だと乳母達は何れも思つてゐたが、知れず―「思ず事のあれば」に掛かゝる詞。
(一六)「人知れぬ涙に袖は朽ちにけり逢ふ夜もあらじ何に包まむ」―拾遺集卷十一。
(一七)逢ふ夜もあらば―「人知れぬ涙に袖は朽ちにけり逢ふ夜もあらじ何に包まむ」―拾遺集卷十一。
(一八)いたく口惜しうも―大君との

(一)式部卿宮の中將は御甥にて、琴笛など習ひ、こゝに親しく參れば、此の御心地訪ひに參りたるよし聞くにも、先づ胸潰れて、例は何とも見え留めず、見ぬ人なれど、わざと立ち出でて見遣れば、貴に艶めきたる心地して、靜かに打眺めて居たるも、うちつけ目には、それかとのみ見え留めらるゝ心地すれば、やをら入りぬ。但馬が女と深く思ひたりしかば、たださ思はせて止みにしを、文遣りてけん、如何に此の君思ふらんなどと、おろかなる外目こそ時々も見れ、近く忍びやかならん氣配などは未だ聞きも知らねば、有らずとも え聞きもあやめず、淺ましとのみいとゞ心を盡くし增すぞあひなき濡衣なるや。此の御心地日を經ていとみじくなり增さらせ給へば、近くなりぬる御いそぎをも延べて、修法讀經など殿の中隙なく立ち騷ぎたるを、姫君の御乳母も、折惡しき御心地なりや。わりなき事を思ひ知りあへれど、中納言は人知れず逢ふ夜もあらばと思す事のあればにや、いたく口惜しうも イナシ思さず。大方の訪ひはいと懇に聞え給ひけり。

宮に參り給へれば、中宮「宣ひし事を行明に云はせしかば、『いと異樣なる者を、如何に聞し召したるにか。ともかくも父が上り參うで來なむに』などぞ言ひける。惜し

(一)式部卿宮の中將は御甥―式部卿宮は太政大臣と兄弟なれば中將は大臣の甥に當る。
(二)こゝに―太政大臣邸に。
(三)此の御心地訪ひに―中君の病氣見舞に。
(四)先づ胸つぶれて―對の君は、はつと胸をつかれて。
(五)それかとのみ―一寸見た所では、あの晩の男の樣に見受けられる。
(六)やをら入りぬ―對の君は又そろそろと奥の方へ入つてしまつた。
(七)但馬が女と―對の君の心、中將はあの晩の女を、但馬の守の娘と深く信じてゐた樣子だから。
(八)文遣りてけん―但馬守の娘の所へ、手紙を遣つたらうか。
(九)此の君―但馬守の女。
(一〇)などと―下の「心を盡くし增す」にかゝる。
(一一)有らずとも―中將があの晩の男ではないと、聲音などが違つてゐる事に氣が付いて、不審がる樣な事もなく。
(一二)あひなき濡衣なるや―中將の身なるやは、割に合はない濡衣だ。
(一三)修法讀經―中君の病氣平癒の祈禱や、讀經。
(一四)姫君―大君の。
(一五)わり母なき事を―困つた事だと乳母達は何れも思つてゐたが、知れず―「思ず事のあれば」に掛かゝる詞。
(一六)「人知れぬ涙に袖は朽ちにけり逢ふ夜もあらじ何に包まむ」―拾遺集卷十一。
(一七)逢ふ夜もあらば―「人知れぬ涙に袖は朽ちにけり逢ふ夜もあらじ何に包まむ」―拾遺集卷十一。
(一八)いたく口惜しうも―大君との

結婚の、延期になつた事を。
(一九)云はせしかば―人をして云はせた所。
(二〇)いと異樣なる者を―行明が申すには、あの妹に大變見苦しい者でありますのに。
(二一)父が上り參うで來なむに―父が但馬の國から上京した時に相談してから御返事致しませう。
(二二)惜しみやせん―宮仕へに出す事を嫌がるだらう。

(一)もどかし—「もどかし」は非難をする。「もどかし」は非難をしたい心持。
(二)思ひ固むる—中納言が諦めようと心を固く持つと、返つて戀しさが増す。
(三)心の鬼—疑心暗鬼を生ず、自分の心に疚しい所があるので。
(四)如何思ひ寄らん—宮中將が。
(五)紛らはしに—様子を氣取られまいと誤魔化しに。
(六)いろふ—「いろふ」は干渉する事。つまらない事にかゝり合はない。
(七)殘りなき御心—考へ餘す所のない御心。充分に思案の行屆いてゐる御心。
(八)明い給ふ—一晩中話し明す。
(九)片つ方の胸は—一方の中納言の胸は。
(一〇)今日もや物忌ならむと—中納言は、あの女は今日も物忌であらうかと、思案に沈んで居られる様子なので。
(一一)宮—中納言のその様子を見て、何か思案してゐるのか知りたく思つて居られると。
(一二)思しやりて—中納言が。
(一三)かの御君—中君は。
(一四)まどひ立ちにける—立つは喪しい狀態を云ふ。あの晩男が近づいて來たので、喪だしく心が動顛した。
(一五)苦しげにのみなり—懷胎したのである。つまりの狀態。
(一六)いみじく思されて—今度は中君が病氣になつたので、以前のさとしがあつた時よりも一層心配して。

(一)もどかしと思はれぬし。耻かしさよと、思ひ固むるにしも戀しさは忍ばるべくもあらず。いといみじく打嘆かれ給ひぬる心の鬼に、如何思ひ寄らんと愼ましき紛らはしに、中納言いとよく思しよりけり、いろはず、殘りなき御心とこそ聞き思ひつれ—と打微笑み給へば、宮中將などてさは聞し召しけむ など、かやうにすゞろごとをとかく云ひ紛らはし明い給ふ。片つ方の胸は明くべき世なく苦しくぞ思さるゝや。今日もや物忌ならむと思しやるに、宮いとゆかしげに思しやるに、今日や物忌果てぬらんと 十六字イナシ 思しやりて、行賴して問はせ給へば、行賴「今朝曉に歸り候ひけるにイナシこそ候ふめれ。兄迎へに參うで來たりつゝ、いと夜深く歸る音し候ひつる。その後見給ひつれば、格子も下し廻して、人も侍はざりつ」と申す。我をば宮の中將とや思ふらんと哀に心苦しく思し遣る。かの姫君恐ろしくいみじと思しけるに、やがてまどひ立ちにける御心地、日を經ていといみじく苦しげにのみなり增さらせ給へば、いとゞ恐ろしかりし物忌のさとしより、かく患ひ給へば、いみじく思されて、たゞ此の御あつかひをし給ふに、對の君などの心の中には、胸碎け、我が心知の過失ならねど、佗びしく思ひ嘆かるゝに、

(一七)此の御あつかひ—父大臣は此の中君の介抱許りをしてゐる。
(一八)胸碎け—對の君は事情を知つてゐるので、特に心配してゐるのである。
(一九)我が心知の—自分が情を知つてゝ、男の肩入をしたわけではないが。

らざらむ人聞こそ、深き心ざしなくとも用ひらるべき物には侍れ。さる基定めて、打忍びては海人の子をも尋ね侍らん。但しその中にことぞ侍る。やむごとなからずとも、父母も添はず心細げにて、思ひも懸けぬ山里、蓬葎の中に、容貌有様をかしからむ人を見出でては、そは品程を尋ね撰らるべきにも侍らず。いみじう哀に様殊に思ひ侍りぬべし。此の石山の月影は、自ら世を見給ふるに、その程はさばかり目安く侍り。たゞそれに親も立ち添ひて、物頼もしげに賑はゝしき覺えのいみじくふさはしからぬにより、所がらの忘れ難かりぬべき有明をもせめて思ひ消ち、文許りをだに繁く遣り侍らず。その人の女をこそいみじく懸想すなれなど、我は我と思ふとも、まことしく取りなし云はれん音聞の、何許りならぬ身の際にも猶苦しく思ひ給ひて、止めてしぞ」と云ふ心上り、いとこよなく物遠し。中納言「あないとほし。何許りの人にていとさ思ひ落さるらん。女はなずらへに思ひ寄る心も有りやしけん」とさりげなく答へなして、心の中に、我が思ふやうにうるせく物を云ふかな。なほ人に抜けたる人なりや。此の君達だにかく思ひけるよ。まことに今宵許りを明かす心地耐へ難くわりなく覺ゆれど、知られて尋ね佗びかゝづらひまどはむも、いと音聞輕々しう便なかるべし。よくこそは思ひのまゝに名告り寄らずなりにけ

(一)さる基―その様な本妻を。
(二)ことぞ侍る―一つ申して置きたい事があります。
(三)そは品程―其ほどその女の身分等を、撰り探したりする事はない。
(四)いみじ―一本の「いみじう」を取る。
(五)様殊に―普通の女とは違つて特に寵愛せられる。
(六)自ら世を見給ふるに―その後色々の女と見較べた所では。
(七)所がらの―石山での所がら、物懐しく思つたのも。
(八)その人の女をこそ―あんな人の女を戀してゐると。
(九)我は我と思ふとも―世間の噂などは何うでもよい、自分は自分の勝手にするのだと思つても。
(一〇)まことしく取りなし―上の「懸想すなれなど」に續けて見る。
(一一)心上り―思ひ上る、高振る。
(一二)物遠し―氣疎い、嫌らしい。
(一三)なずらへに―「なずらへ」は「なずらひ」の愛身の言ひ方。女は、妻にでもして貰ひたいと思つてゐたかも知れない。
(一四)我が思ふやうにうるせく―自分の思つた事を素直に言ふ人だな。うるせくはうるはしくと同意。
(一五)なほ人に抜けたる人なりや―矢張此の宮の中將は、他の人よりも勝れた人だ。
(一六)此の君達だにかく思ひけるよ―此の人でも、此の様に賤しい身分の人と契を結ぶまいと考へてゐる。
(一七)今宵許りを明かす心地―自分の住所姓名も打明けずに、昨晩一晩だけの契を結んで夜を明かしたと云ふ事は、眞に殘念な心地がするが。
(一八)知られて―女に住所姓名を明かして。

(一)天の原—天涯遠く走り行く月には、誰も影を並べる者は居ないでせうよ。(二)されば—さやうに—此の話とは違つて、自分の逢つた時には女は自分に返事を云ふ事も出来ない風で。(三)誰とはなく—自分の素性も誰とは明さず、突然女の所に忍び込んだのではあるが。(四)秋の風に—以下その魂の女の姿の形容。(五)引き切り難くて—全く交際を斷つてしまふ事も出来ずして。(六)折々過ぐし侍りしかども—一本に「折々過ぐし侍らざりしかども」とある方よろし。(七)何かはわざとも—何もわざわざ夫婦ならう等とは、相手の女も思つて居ない事でしたから。(八)他事なく—他の事は心中になく、只あの女の事だけが心にしみ込んで。(九)後より戀の—古今集卷十九、「昆よりあとより戀の責めくれば、せん方無みぞ床中に居る」此の歌によつて書いた。(一〇)事なしびて—何んでもない樣な顏をする。(一一)勝れて心ざしの行くに—身分が賤しいので此の上もなく輕蔑した女なるが、併し甚だ氣に入つた女、人々は妻としないで居りませうか。多分妻にするでせうね。(一二)心につかむをこそは—氣に入つた女をば、よい女としておかう。(一三)角生ひ眼一つあらんが—たとへ角が生え、眼が一つある樣な醜い女であらうとも。

女

(一)天の原雲井遙かに行くべきに影を並ぶる人や無からむ

とこそ云はせて侍りしか」と語るを、さればさやうに云ひ返すべくもあらず、誰とはなく(三)ゆくりなき程の事とは云ひながら、秋(四)の風に吹き亂る苅萱の上の露亂れ散りつらん氣色したりつるこそ、らうたさは先づ思ひ出でらるゝに、涙ぐまれて、さてさてといたく聞き留めて問ひ給ふ。中納言「その後影並べんの氣色ありや。並べやし給ひし」と問ひ給へば、當中將「さまでも尋ねより候はず。折々音なひ侍るに、憎からず答へ侍れば、引き切り(五)難くて、自らさも侍る折々過ぐし侍り(六)。さりしかども、何かはわざとも人も思ふべき事ならねば、絶えて久しくなり侍りぬ」と、我が心にだに唯今他事なくしみかへり(八)、後より(九)戀の責めくる心地する人の事を、いとなほざりに事なしびたる氣色の心妬(一〇)ながら、いでさのみは世に覺えじを、たゞさりげなく云ひなすならむと覺ゆれば、中納言「こよなく思しおとしめたる人の勝れて心ざしの行くに、任せでや人はあらんとする」と問ひ給へば、當中將「それは人の心々にこそ候はめ。まことに口惜しき賤(一一)にも宿世(一二)と云ふ物に引かれ、唯我が心ざしあるを用ひる人もあるぞかし。それまた憎からず。心(一三)につかむをこそはつくにし侍らめ。されどなにがしは明日(一四)の契は知らず、今宵まで思ひ給ふるやうは、いと角生ひ眼(一五)一つあらんが、

(一四)なほ品程もあなづらにしからざらむ—矢張その身分の、賤しくないといふ評判のある女が。

なほ品程(一六)もあなづらはしか

(一)打名告りても―實名を明に名告つて。
(二)とどまりはへまほしく―一本の「とくふりはへまほしく」たとる。急いで女の許に行きたいとの意。
(三)停み紛れ歩く―女の居る部屋の前に停んだり、部屋の中に紛れ込んだりする事。
(四)中宮御方―中宮御付の女房。
(五)皆人日馴れて―殿上人が、皆見馴れて珍しく思はない。
(六)月影のしばし―一本の「過し難さ」をとる。
(七)好色物語―好色の話。
(八)さるべき人―見たりしやうなどもしるく―中納言の思つてゐた如くに、案の定。
(九)思ふもしるく―想像以上に風情のあるやうに振舞つてゐる。
(一〇)思ふ程よりも―此の語は下の「もてなしたりしかども」に續いてゐる。
(一一)局―泊つてゐる部屋。
(一二)かの局は―あの部屋に泊つてゐる。
(一三)月の桂の空目―月中の桂が紅葉すれば、月の光は明るく照ること言ひ傳へられてゐる。これは秋であるから、月の桂と云つてその光の明るい事を意味したのである。月の光に美しく見えた見違ひであらうと。
(一四)過ぐし難く―見過し難く。
(一五)下りぬめり―下山するのであらうと。
(一六)さやかにも―見つる月と、滿つる月とを云ひかけた。その月を女の姿に譬へたのであるはつきりと貴女のお姿を見ました。此んな事ならばいつそ

打ち名告りても、駒の足とどまり(一一)ィとくふり はへまほしく眺め入り給へるに、人しもこそあれ、宮の中將の參り給へるさへあはれに懷かしく覺えなりて、中納言「内邊にても、とかく停み紛れ(一二)歩く事は、下蔀に侍りし時だに、身につきなき事に思ひ知り、慣はざりし事にて、いとゞ初々しからむも慎しく、中宮御方(四)のは皆人(五)目馴れて思ひ侍るもねたさに、振り離れて眺め侍りつる月影(六)のしばしィすごしがたさを折嬉しう」と呼び寄せて、かの石山にて云ひ寄りけむ事の云ひ出でさせて聞かまほしければ、例ならず打亂れて、世の好色物語(七)、又物に詣うでてさるべき人(八)はィナシ見たりしやうなど、語り出でたるに、中將も打解け、思ふもしるく(九)、宮中將「去年の秋頃にや侍りけむ、石山に忍びて籠り合ひて侍りし人、思ふ程よりもよしなからず(一〇)、局(一一)などの氣配、もてなしたりしかども心も止めず、ひとへに行ひ侍りしに、曉にかゝる月の谷の底さへ殘りなく侍りしかば、とかく立ち廻りつゝ眺め侍りしに、かの局(一二)は出づる氣色にて通り侍りしを、立ち隱れて見侍りしかば、(イ事々しくもてなしかしづきてあまた侍りし中に)目安き人(一三)こそ侍りしか。月の桂の空目(一四)にやとは思ひながら、過ぐし難く(一五)侍りて、下りぬめり(一六)と見送りて、

宮中將　さやかにも見つる月かなことならば影を並ぶる契りともがな

と云はせ(一七)侍りしかば、いととく、

(一七)云はせ―使の者を女の傍にやつて云はせた。

の事、あなたと姿を並べる夫婦の契を結びたかつたのです

か」と申し給へば、中宮「何ぞ」と問はせ給ふを、(一)假の枕をば—女と假寢の夢な共に見た事だけは、隱しておいて中宮に話さず。(二)琴の音より—合奏を聞いた事(三)かいばみ—垣間見にて、竹の間からそつとのぞいて見た事(四)その品ならず—賤しい身分の者の樣でもなく。(五)よろしきが—顏形のすぐれたるが。(六)新中將平少納言—女房の呼名であらう。(七)またなべてには—一通りならず美しい。(八)目止まり給ひけるは—上の、「おぼろげにあらじ」に返る。(九)そもがな—その女を召使ひたいものであるが。(一〇)さるべき—その女を呼びよせるべき適當な知人が居ない。(一一)兄にこそは—その女の兄に云ひ付けてお召出しなさい。(一二)なにがしは—私は。(一三)殿に—父關白に。(一四)宣はせよとあらば—中宮のお言葉を行明に申し傳へよと、あなたが誰かに云付けになつたら宜しいでせう。(一五)さかしく—下の「申し出でつるぞや」にかけて見る。(一六)心合はする人—自分と心を合して、媒介をして呉れる女房。(一七)御宿居所—中納言が、宮中に賜はつてゐる御寢所。(一八)姨捨山—信濃國にあり。月の名所。我が心慰めかねつ更級や姨捨山に照る月を見て大和物語—此の歌を思つて書いたものである。(一九)つらづゑ—頬杖。(二〇)何の人目や—何の人目を憚かる事があらうかと。

その品ならずいといみじく優に打見え候ひしか。さやうの下蔭のよろしきが數多侍ふこそ心憎く候へ。召し出でさせ給へ」と申し給へば、中宮「新中將平少納言などにも勝りしか」と宣へば、中納言「知らず、さまで委くはいかでか見侍らん。またなべてにはあらぬ心地ぞし候ひし」と申し給へば、中宮「勝りけるなめり。おぼろげにあらじ。更に人の善し惡し宣はぬ人の深く眼止まり給ひけるは。そもがな。さるべき便ここそなけれ」と宣はすれば、中納言「兄にこそは召さめ」と申し給へば、中宮「さらばやがて君宣へかし」と宣へば、中納言「なにがしは申さじ。殿に侍ふ行明はそれが兄に侍り」と宣はせよとあらば。さかしく、人數多侍はせまほしくて申し出でつるぞや」と、さりげなく聞えなし給ふ。暮れ行く空のみ眺められつゝ、すゞろに心は騷がれあくがるゝ心地すれど、我とは知られじと思ふ。固からん物忌に、心合はする人なくては、昨夜のやうに紛れ入るべきやうなしと押し量らるれば思ひ絶えたるも、苦しきまで思さるれば、里へも罷出給はで、御宿直所に今宵もいとさやかにさし出づる月の光、姨捨山の心地して、人遣りならずいみじく物思はし「つらづゑつきてつくづくと眺めたもの」出でつゝ、昨夜の面影は身を離れず、何の人目やと

(一)忍ぶれど面影山の―面影山は因幡にあり。こゝは面影といふ枕詞。幾ら耐へ忍んでも、あの女の面影が自分の身を去らない様に思はれて辛い。

(二)思ひ腐し―悪く思ふ事。くさす事。

(三)思ひありとえも岩垣の―えも云はずを岩垣沼に云ひかけた岩垣沼は岩で取り圍まれた沼下句も岩垣の縁語で作つたあるとは恋ひ慕つてゐる事を恋ひ慕つて、自分の云ふ事が出来ずして、自分の心耐へ一つにしまつておいたが、切なくなつて終に此の心なれたなくあらして漏らしたのです

(四)御返―大君の返書。

(五)漏るからに―此の歌も岩垣水の縁語で作つた。心を人に漏らす様では、その人の心に深く思ひ入ない事が分りますですからあなたが私はお慕はしいといふ様な事は、返つて何にも申さないでおきます。

(六)上―帝。

(七)秋の野花を―着物の模様をいふ。

(八)等しき際―自分と同じ様による身分の女も、亦大勢その中に居て。

(九)容貌ある名高く―美人の聞え高く評判して。

(一〇)ほのかなりし月影―昨晩、朧月夜の光で見た顔形。

(一一)しおかせ給ひて―中納言が。

中納言　忍ぶれど面影山の面影は我が身を去らぬ心地のみして

などかくしも思ふべきと、せめて思ひ腐し思ひ覺ますにも、なほ哀に耐へず打嘆かれつゝぞ書き給ふ

中納言　思ひありとえも岩垣の沼水につゝみかねても漏らしつるかな

物の哀に思ひ流さるゝまゝに、筆に任せて書き流されたるは見所あり。御返待ち給ふ程打休み給へれば、久しく待たれて參りたり。萩重の紙に

大君　漏るからに淺さぞ見ゆる中々に云はでを止みぬ岩垣の水

墨薄くほのかに紛らはして、貴やかに書かれたりと見給ひて、内裏に參り給へれば、中宮の御方に上渡らせ給へる程なれば、女房達常よりも化粧じ用意して、色々の單重、裳唐衣、秋の野花ィ秋野の花を折り盡くして、卅人許りえも云はずもてなして、此所彼所に打群れて居たるを、例はさしも眼止まらぬを、今日は心留めて見渡し給ふに、等しき際はた數知らず、打解けたる程や如何あらむ、化粧じいどみたるもてなし用意したる様どもは、取分き悪しと見ゆるなく、又いと容貌ある名高くのゝしり、宮いとよき人に思したる人々もあり。見るに總てほのかなりし月影になずらふべきぞなきや。淺ましくも眼もあやなりしかなと心に掛けて思ひ較べ給ふ。上歸らせ給ふ御送りしおかせ給ひて、中宮に、中納言「ある山里にほのかなる者をこそ見給へりし

(一)召し取らせ—女を宮中へ召させて。
(二)心の止にて—他の女に心を移さないで。自分の心の止り所。
(三)さる私物に—その様な、自分の内々の寵愛物として。
(四)妄女—諸國より宮中へ奉つて御覽の事を司らしめたもの。
(五)妄女を召す帝—大和物語の平城帝の事等をさす。
(六)さのみこそはあれ—たゞ其だけの事であつて、大した事でもない。
(七)只女—宮仕をしない普通の女。
(八)下れる窓—賤しい人の家。
(九)參り給ふ—中納言は、宮中へ參るべき用事があるから。
(一〇)げに物忌—前の、對の君の云つた事に應ず。
(一一)情無きやうに—中納言の心、此のまゝ默つて歸つては。
(一二)人寄るべくもあらぬに—固き物忌で、訪れるべき事でもないのに。
(一三)初々しくて—初心らしい、氣恥かしい。
(一四)宿の—女が泊つてゐる宿の。「君が住む宿の木末のゆくゆくと隱るゝまでにかへり見しはやと」(拾遺集卷六、贈太政大臣)
(一五)おほき大殿に—太政大臣の御女、大君に。
(一六)初めて御文聞え—結婚する前の許婚同志の、文始めの手紙を差し上げる。
(一七)日取らせ給ひて—今日に、その文始めの日をお定めになつて。
(一八)そゝのかし—父關白が、中納言に勸める。

死ぬ許り覺ゆとも、なほ暫し思ひ念じて、中宮に申して召し取らせ奉りて、宮仕ひ樣にて見む。さだに出で離れなば、他に誘なひ出でなどして、また思ひ增す方なき心の止にて、さる私物に忍びて見む。さては人の耳だつべき事にもあらず。采女を召す帝は無くやは有りける。これはえして宮仕へ人を限りなくもてなし思はむ、科にもあらず。さのみこそはあれ。只女にては、下れる窓の内に忍びて、通はむこそいと見苦しかるべけれと思しなりぬ。今日必ず内に參り給ふべければ、急ぎ歸り給ふとても、竹の中へ入りて見給へば、實に物忌固かるべし。格子ども皆下して、經の聲のみぞ聞ゆる。情無きやうにこそ思へ。誰ともなくて消息せばやと思へば、人寄るべくもあらぬに、打ち叩かせむも初々しくて、覺束なながら歸り給ひぬ。宿の木末は、實に隱るゝまでぞ顧みられ給ひける。殿におはしつきて、おほき大殿に今日初めて御文聞え給ふべき日取らせ給ひて、そゝのかし聞え給へば、恥かしき邊をと、いたく用意して筆取り試みわたし給ふも、今宵の夢は先思ひ出でられて、消息をだにせずなりぬるよ。はかなき程と云ひながら、世の常の懸想には違ひても有るかなと思ふにも涙ぐまれて、書く文も打置かれて、とばかり眺め給ふ。

(一九)恥かしき邊を—太政大臣の家は氣のおける所だから、うまく書かなければならないと。
(二〇)試みわたし—何度も手習をする。
(二一)今宵の夢—昨晩女と逢つた事
(二二)消息をだにせず—後朝の手紙をすらやらなかつた。

なればぞかしと、明けぬ夜の闇と昏るゝ心まどひの中にも、思ほえつつ、

云ひ傳へなどもせずさし答へたるをめざましく聞き給ひて、竹の下に紛れ入り給ひぬ。なほ人には有らぬにやと、むくつけく見送らる。

白露のかゝる契を見る人も消えて佗びしき曉の空

立ち歸り打休み給へど寢られず、めざましく貴に、限なかりつる人の氣配有様かな。如何にすべき事ならん。尋ねんに跡はか無き事には有らねど、かうながらはあながちに忍び寄らむも世の聞き耳のいとほしきに、思ひ滯らん程や自らいたくイナシらんと思ふぞいと人遣りならず衰なる。なほかくながらは一行の文遣らん事も、自だに世の常に心かはして打忍び見つべくば有るべきを、さはえ有るまじき氣配なりつるを、大方の親兄弟の見て、大殿の中納言におはすとても、明暮出し入れて見つべからん人には、なか〳〵劣りて、口惜しくも有るべきかな、こは有り果つべき事かはとも、また、思ひの外に高き宿世の有りけるよ。式部卿宮中將だに、忍びてと思へりしに、かくこそ有りけれなど、嘆きも喜びもし云ひあつかはん、いみじくかたはなるべし。

(一)昏るゝ—涙にくれる。
(二)思ほえつゝ—上の「人なればぞかしと」に續けて「見る」。
(三)白露の—對の君の歌。第一句はいたゝる云ひ出す爲めに置く。
(四)云ひ傳へ—對の君なども取次ぎ中納言へ傳ひ伝へ。
(五)めざましく—氣に入らない事。
(六)人には有らぬにや—中納言の心。
(七)立ち歸り打休み給へど—中納言の君達の心。
(八)めざましく貴に—此の「めざましく」は、眼がさめる様なの意。
(九)跡はか無き—跡方もない。何の手懸りもない。
(一〇)あながちに—斯様に名前を偽り、人目を忍んで無理矢理に忍び通ふのも。
(一一)世の聞き耳—世間の評判、取沙汰が氣の毒。
(一二)自だに—相手の女さへ、人目を忍んで逢ふ事に同意して呉れたならば。
(一三)有るべきを—上の「文遣らん事も」に續く。
(一四)さはえ有るまじき—女がさうは承知をしさうもない様子。
(一五)天方の—世間一般の。
(一六)大殿の中納言—關白の若様なる中納言。
(一七)見つべからん人—左様に關白しの子息を婿に取つても、恥かしからぬ身分の人。
(一八)劣りて—自分の身分は。
(一九)有り果つべき事かは—末遂げられるべき緣談ではない。
(二〇)高き宿世の—自分の娘は意外にも高い身分の人と緣を結ぶべき運命を持つてゐる。
(二一)かくこそ有りけれ—中納言のやうな方と關係を結んだと。
(二二)嘆きも喜びもし—女の親が以上の如く思つて、悲んだり喜んだりする。
(二三)云ひあつかはん—女の親から自分を婿の様に取扱はれては
(二四)かたはなるべし—見苦しい。

(一)まろも―私も。
(二)石山の御傳へ―石山での御傳言。
(三)定まり―婚約をする。
(四)ゆくりなく思ひよりぬるを―突然侵入しようと決心したのを。
(五)かみにはいはせじ―誤魔あるべし。
(六)何時までか此所には―何時まで此處にゐらつしやるのか。
(七)れたがりて―殘念に思つて。
(八)心得つるに―對の君が。
(九)人柄は―宮の中將の身分は。
(一〇)同じゆかりに―中君と同じ親類筋なので。
(一一)此の御程よりは―此の中君の身分に較べると、中君の夫としては位が低すぎる。
(一二)さ思はせて―今の場合は、中君をば三の君だと相手に思はせて。
(一三)また自ら斯許りの御契は―又自然と緣あつて、此の後此の男と契を結ぶ樣な運命を免れる事が出來なかつたならば、其をば何うしようか、その時は如何とも致しようがない。
(一四)呆れ痛きに―呆れる事が甚だしい。
(一五)よしノ、し―よしめく、奥深い所がある。
(一六)姉なむめり―中納言の心、此の人は三の君の姉であらう。
(一七)いたくな物せそ―あまり嘆きなさるな。
(一八)いと難き御物忌―對の君が男の來ることを謹る口實。
(一九)いかでか―何うして今晩逢ふ事が出來ませうか。
(二〇)出でてや有らまし―其では歸

御方端近くゐざり出たるに寄りおはして、中納言 實に如何に怪しく思さるらむ。(一)まろも夢とぞ覺ゆる。石山の御傳へを引き蓮へ舞少將に定まり給ふる怨めしさに、(二)ゆくりなく思ひ寄りぬるを、(三)さりともよもかみにはいはせじ。何時までか此所には と此の人にも中將と思はせて宣ふに、實に宮の中將のねたがりて、一人離れ居たる程を窺ひて入り來たるなめりと心得つるに、人柄は同じゆかりに賤しかるまじけれど、此の御程よりは位の淺きと思ふにいみじければ、此の際はさ思はせて、また自ら斯許りの御契は終に逃れ給はざらんをばいかゞはせむと、涙落ちぬれど、さりげなく持て隱して、對の君 世に知らず亂り心地呆れ痛きに何事も思ひ給へ分れず。と答ふる氣配貴やかによし〳〵し。姉なむめりと思し寄せて、中納言 いたくな物せそ。此の暮をいと忍びやかにて待ち給へよ。と宣へば、對の君 今日明日はいと難き御物忌にこそ侍らめ、いかでか。中納言 口惜しくわりなき事かな。さば出でてや有らまし」など、立ち返りつゝ嘆き休らはるゝ程、月も入りぬべし。

中納言 世に知らぬ露けきなりや別るれどまだいとかゝる曉ぞなきいたく思ひ亂れ獨言たる氣配の、なのめならずなまめかしきも、名に流れたる人

(一)なのめならず―一方ならず。
(二)世に知らぬ―今迄女と別れても、今朝の樣に涙に濡れて悲しい別をした事はありませんで。
(三)名に流れたる人―式部卿宮中將は好色の名高い人だから、物云ふのも上手だと。對の君は中納言を宮中將と思つてゐる。
(四)久は―何泣かれたる人か、前の歌の事を意味する。

(一)よそめ—遠くより見たる姿。(二)宮の中將—式部卿宮の中將。(三)さればば—斯樣に處女らしい樣子であるから、宮の中將などに心をかけてゐる樣な樣子も見えない。(四)世馴れ見えぬ人—未だ戀の經驗のない人。世は男女間の戀愛をいふ。(五)よそのこころ—よそから見た時には、何うだか分らぬが。(六)近くなる際—接して見た時には、斯樣な樣子なのであらう。(七)いられ—心がいら〳〵する。寢も眠ず—以下は對の君の體。(八)誰とだに知らぬ—對の君の心相手の男を誰とも知らぬ。(九)實に理なれど—中納言の心。(一〇)なほ〳〵しき—身分の高くない人。(一一)まだきに—自分の身分を早くは明かすまい。(一二)世の噂—世間の噂、評判。(一三)自ら許りには—中君の當人だけには。(一四)此の夜ならず—今晩だけの、偶然の出來心ではない。(一五)さるべきにや—是も前世からの因緣なのでせう。(一六)限りなき心—限りなく慕はしい心。(一七)思し慰めて—貴女自らを慰めて。下の「思しなりね」にかかる。(一八)親達に云はすべくは—お前の親達に惡口を云はせる樣な事は、決して仕出しはしない。(一九)同じ心—私と同じ心になつて私の云ふ事をきいて下さい。(二〇)搔き雜ぜなる—混雜してとり

(一)よそめ(遠くより見たる姿)の月影よりも近優りして、あえかにらうたげなるにいよ〳〵あはれにて、(二)宮の中將などにされば心寄すべき氣色も見えず。(四)世馴れぬ人は、(五)よその心こそ、(六)近くなる際はかうもありかしとらうたく思すに、程無く明けぬべき夜も口惜しく思し亂るゝに、鷄もしば〳〵音なふに、寢も眠ず(七)いられ居たる人の、(八)誰とだに知らぬ嘆かしさをいみじく云ひ思ひたるに、(九)實に理なれど、(一〇)なほ〳〵しき當りに、我まだきに(一一)知られじ。見では片時在るべくも有らぬを、自ら我が爲め世の音聞見苦しくもどき無かるべき樣にてこそと、耐へぬ心を靜めて名告もし給はず。(一二)自ら許りには、立ち別るべき心地もせぬまゝに、中納言「(一三)此の夜ならず、石山にて見奉りしより、(一四)さるべきにや、(一五)限りなき心の留め難くなりにたるも淺からぬ契の程と思し慰めて、(一六)親達に云はすべくは世に構へじ。唯今は如何にも〳〵同じ心に思しなりね」と、宮中將と思はせて、いと(一七)搔き雜ぜなる言葉に語らひ慰むるを、聞き入るべくもあらず、絶え入りぬ許りなる氣色を、心苦しくわりなくこしらへわび給ふに、(一八)取りもあへず天の戸明くる氣色なるに、晝さへかくて在るべきならねば、(一九)後瀨の山を賴めおきて、霧深く立ち籠めたる有明の月に紛れて立ち出で給ふ。(二〇)さすがにゆかしければ、對の

(一)とめのない事。(二)こしらへわび—慰めかねる。(三)取りもあへず—忽ちに、直ぐに。(三)天の戸明くる—夜が明け放れる。(四)後瀨の山—後の逢ふ瀨を、若狹の歌枕後瀨山に言ひかけた。(五)さすがにゆかしければ—中納言の心、さすがに別れ難く思つて。

(一)むくつけく—氣味惡く。
(二)和琴の人—對の君。
(三)參り給へや—上の御格子も」に續く。格子を閉めてしまひなさい。
(四)かゝれば—奥の方では、見知らぬ男が中君を連れて入りこんでゐるので。
(五)くだ〳〵しければ止めつ—作者の地の文。面倒だから詳しく書かない。
(六)聞き交して—手紙の取遣りをして。
(七)ゆくりなからん—突然その男と逢つた場合には。
(八)まいて心の中どもは—まして知らぬ者同志が逢つた二人の心の中には。
(九)しるけれど—著しいけれど。
(一〇)心の慰むべき方なし—對の君の心。
(一一)我が心とせぬ—對の君が、他の男の媒介をしたわけではないけれど。
(一二)いたづらに—中君の身も、今は無益な身の上。
(一三)思ひ續くるに—對の君が。
(一四)思遣り—對の君は心を思ひ廻らす事が。
(一五)ゑびのゝしりて—大聲で云ひ騷いで。
(一六)後の隱れなくとも—後には皆の人が知つても。
(一七)御几帳ども—ものさし差へて—几帳を立てて、二人の姿が他の女達に見付けられない樣に隱すので。
(一八)御前に—中君が、顏を見られる事を嫌がつてゐる女房達は。
(一九)近劣りす—傍近くよつて見ると見劣りのする事。

れて、姫君を奥の方に引き入れ奉る(イに)、人心地覺えずむくつけく恐ろしきに物も覺えず、奥の方より和琴の人の聲にや、對の君、御殿籠れ、御格子も、更けぬらん、人人參り給へや—と云ひてゐざり入るに、かゝれば、云はむ方なく思ひまどふなども世の常なりや。くだ〳〵しければ止めつ。互に聞き交して心交したらむにてだに、ゆくりなからん淺ましさのおろかならんやは。まいて心の中どもは如何ありけん。脫ぎやられたる直衣差貫の手當り匂は、えも云はず貴なる氣色しるけれど、心の慰むべき方なし。殿のいと後安き者に思して放ち渡し奉り給へるに、かゝる事の聞えても有らば、我が心とせぬ事にてはあれど、いみじくも有るべきかな。此の御身も今はいたづらになり給ひぬるにこそあめれと思ひ續くるに、あたらしう口惜しく涙に溺ほれ迷ひながらも、思遣りいと靜かなる人にて、云ふ効なき事を云ひのゝしりて、あまねく人の知らんはいみじかるべし。後の隱れ無くとも、此の際はなほ忍びて止みなんと思ふ心にて、御几帳どもをさし差へて、對の君「御前に耻ぢ聞え給ふ人人は、著きに、さし退きてを」と、さりげなく云ひなして、胸は騷ぎながら、つゆもさとどろまず。男君は、うはべこそ限りなくとも、少し近劣する事もやと思しつるに、恐ろしくいみじと怖ぢわなゝきて、消え入る樣に泣き沈みたる氣配手當り、

(一)恐ろしくいみじと—中君の體。

ばみ懷かしくなまめき、こぼれ懸れる額髮の絶え間のいと白くをかしげなる程など、まことしく優なる者かなと見ゆるに、(一)箏の琴人は長押の上に少し引き入りて、琴は彈き止みて、それに寄り懸りて、西に傾くまゝに曇りなき月を眺めたる、此の居たる人々ををかしと見るに較ぶれば、村雲の中より望月のさやかなる光りを見付けたる心地するに、淺ましく見驚き給ひぬ、中納言「これこそは行賴が賞めつる三の君なめれ。長押の端なるは姉どもなめり。これこそその際の勝れたるならめ。如何で眼もあやにあらん」とまもるに、(二)「容貌はやむごとなきにもよらぬわざぞかし。竹取の翁の家にこそかぐや姫は在りけれ」と見るにも此の程の樣はなほ珍かなり。契や有りけむ、今宵は過ぐすべうも有らねば、(四)やをら立ち出で給ひて、行賴に、中納言「(五)此の竹の中に隱れて」と云ひて歸り入りて見給へば、和琴の人は入りにけり。琵琶箏の琴の人は物語り忍びやかにしつゝ眺むめり。人は池の邊など涼み歩くなるべし、(六)そなたに聲などあまたして、(七)いと靜やかなるに、ゆくりなく淡つけき振舞はおのづから輕々しき事も出で來るをと、有り難く思し治めたる心なれどゝば、我ながら怪しく靜め難きを、(八)人の程をこよなき劣りと思ふにあなづらはしく、今宵を過ぐして、また云ひ寄らん風の便も、さすがに有るべきやうも無しと思し寄りて、(九)月蔭の方に一寄りて、やをら入り給ひにけり。人氣に驚きて、見返りたる程に、やがて紛

(一)箏の琴人―是が中君である。

(二)その際の―斯樣な低い身分の者の中の勝れた女であらう。

(三)まもるに―見守るに。

(四)今宵は過ぐすべう―今晩は、ただではすまされない樣に思はれる。

(五)此の竹の中に隱れて―私は此の竹の中に隱れて樣子を見てゐるから、お前は歸つてもよい。

(六)そなたに―庭の池の邊では。

(七)いと靜やか―二人の女の居る方は。

(八)人の程をこよなき劣―身分が甚だ低い人だと思ふ。

(九)月蔭の方に―一本の「月影の傾くに」をとる。

て、文など候ひけるを、女は返事などしてそれに心寄る氣色に候ひけれど、かの中將の『忍びて時々通はむ。親に知られて顯れてはあらじ』と候ひければ、親ども益ながりて、辨少將に契りて候ふなり（一字イ欠なり）」と申せば、笑ひ給ひて、中將「きては女は本意ならずや思ふらん。心ばせある者なり（一字イ欠なり）。中將に心寄すらん」と宣ひて、竹の下に歩み寄り給ひて聞き給へば、琴の聲はいとよく搔き合はせられて、中にも箏の琴の時々搔きまぜたるはいと勝れて聞ゆ。此方も彼方も竹のみ茂り合ひて、隔つきづゝしくも固めずしどけなきに、行賴押し開けて、行賴「同じくはこれより入らせ給へ」と申せば、中納言「人や見付けむ。輕々しく」とは宣へど、箏の琴は彈くらん人ゆかしく、心留まりてやをら入り給へれど、此方も竹多く茂りて、横たはれ塵ごもたる松の木の蔭にて、人見付くべくもあらず。軒近き透垣の下に茂れる荻の下に傳ひよりて見給へば、池遣水の流、庭の砂などのをかしげなるに、簾垂巻き上げて、冊に今ぞ及ぶらんと覺ゆる程なる人、高欄の下にて和琴を彈く有り。頭つき容體細やかにしなづゝし（イく）きよらなるに、髮のいと艶やかにゆるゞゝとかゝりて、眼安き人かなと見ゆるに、向ひ樣にて、紅か二藍かの程なめり、いと白く透きたる好ましげなる人すべり下りて、長押に押し懸りて、とざまをなかあひて（イめて）、琵琶にいたく傾き懸りて搔き鳴らしたる音聞くよりも、打もてなしたる有樣容貌いと氣色

(一)益ながりて—無益な事と思つて。
(二)隔つきづゝしくも固めず—垣塀等をしつかりとは作らないで。
(三)押し開けて—竹の間を押し分けて。
(四)箏の琴は—此のは、を等の誤字か。
(五)此方も—僧都の方でも。
(六)横たはれ—横に這つてゐる。
(七)和琴を彈く有り—是は對の君である。
(八)しなづゝし清ら—一本の「しなづゝしく清らなる」とある。
(九)二藍の程なめり—着物の色合が。
(一〇)白く透きたる—肌が白くて、きめのこまかい。
(一一)好きしげなる人—是が但馬守の三女である。
(一二)すべり下りて—長押の上よりゐざり下りる。
(一三)長押—部屋の間を仕切つてある構本。
(一四)とざま—外の方を。
(一五)なかあひて—一本の「眺め出でて」を取る。

(一)そこに—僧都の別邸に。
(二)よそ人—他人。
(三)御前—中君の御前。
(四)中君—中君の。
(五)若き心地—中君も女も互に。
(六)かたみに—十八日の—物忌の日に。
(七)これは—十八日の夜なり。東に唯呉竹許りを隔てたる所に、左大臣殿の中納言殿の、御乳母の月頃患ひけるが爰に渡りて、尼になりにける訪に、それも今日のイナシいみじく忍びやかにておはしたり。飽かずいみじと思ひ聞えたるも見過ぐし難くイし、程なく歸り給はむも心苦しう思されければ、その夜立ち泊り給ひつるに、夜更けて人静まりぬる程に、いと近く吹き交ふ風につけて、琴の聲一つに搔き合はせられていと面白く聞ゆるに驚き給ひて、中納言「あな覺えな。誰が住む所ぞ」と問はせ給へば、御乳母(イ子)の少納言行頼と聞ゆる 行頼 法性寺の僧都の領ずる所には、此の水無月より、今の但馬の守時明の朝臣の女なむ渡りて住み候ふなり。月明き夜はかくこそ(イは)遊び候へ」と聞ゆれば、中納言「それが女共はかゝる事や好む。思はずの事や」と宣へば、行頼「かやうに出で居て時々遊ぶ見給ふるに、何れも目安く見給ふる中にも、源大納言の子の辨少將に契りてかしづき候ふ三に當るは、總てまことしく優げなる氣色になむ。式部卿宮中將石山に詣りて、ほのかに見りければ、四十五日達へにそこにぞイて あらせける。母君罷り通ひ、よそ人にもあらねば、女もやがて御前に參りて、めでたくをかしげなる御樣を明暮かくて見ばやと若き心地には思ひけり。かたみに懷かしく覺えて、風涼しく月明き夜、山里めかしく面白き所なれば、端近くゐざり出でて物語りなどし給ひつゝ眺め給ふ。御物忌は十七日なりければ、これは十八日の夜なり。東に唯呉竹許りを隔てたる所に、左大臣殿の中納言殿の、御乳母の月頃患ひけるが爰に渡りて、尼になりにける訪に、それも今日のイナシいみじく忍びやかにておはしたり。飽かずいみじと思ひ聞えたるも見過ぐし難くイし、程なく歸り給はむも心苦しう思されければ、その夜立ち泊り給ひつるに、夜更けて人静まりぬる程に、いと近く吹き交ふ風につけて、琴の聲一つに搔き合はせられていと面白く聞ゆるに驚き給ひて、中納言「あな覺えな。誰が住む所ぞ」と問はせ給へば、御乳母(イ子)の少納言行頼と聞ゆる 行頼 法性寺の僧都の領ずる所には、此の水無月より、今の但馬の守時明の朝臣の女なむ渡りて住み候ふなり。月明き夜はかくこそ(イは)遊び候へ」と聞ゆれば、中納言「それが女共はかゝる事や好む。思はずの事や」と宣へば、行頼「かやうに出で居て時々遊ぶ見給ふるに、何れも目安く見給ふる中にも、源大納言の子の辨少將に契りてかしづき候ふ三に當るは、總てまことしく優げなる氣色になむ。式部卿宮中將石山に詣りて、ほのかに見

(八)東に—僧都の別邸の東隣。
(九)爰に—此所に。
(一〇)それも今日に—一本の「の」なき方宜し。
(一一)飽かず—乳母の心、いみじと歸るのは飽きたらず、中納言は早く納言の思ふ。甚だ情なく思ふ。
(一二)立ち泊り—乳母の給ひつるに—乳母の所に泊る。
(一三)一つに搔き合はせられて—合奏しつゝ一つに聞ゆるのが、調子がよく合つて一つに聞える。
(一四)疊えな—思ひがけない事だ。
(一五)御乳母の—一本に「御乳母子の」とあるを取る。
(一六)但馬守時明—
　　行明
　　右近丞
　　一女（右中辨妻）
　　二女（藏人少納言妻）
　　三女（新少將）
(一七)目安く—見苦しくない。
(一八)契りて—婚姻の約束がしてある。
(一九)三に當る—三番目の女にあたる。
(二〇)まことしく—眞面目で。
(二一)式部卿宮中將—太政大臣の御兄弟式部卿宮の子息なる中將。
(二二)石山—近江の石山寺。

に知らず耻かしく悲しき物に思ひて、あながちにさりげなくもてなして、君達の御方離れず思ひ後見聞ゆる中にも、大姫君はやむごとなき御乳母も添ひ奉りて、殿の御つれ〴〵の折々使ひ慣はしなどし給へりけれど、此の君のいと若う貴やかにをかしきに思し移ろひたるやうなりければ、いと心よからぬ者に思ひて、今北の方と付けて、きしろひ蔑しめられて、いみじく耻かしくわりなければ、あの御方には今となりてはいたくも見馴れ寄らず、中君にはいとよかりし御乳母もなくなりて、おとな〳〵しき後見も無きまゝに、心うつくしうひとへに打解け、むつびおはしたるがいと哀に覺えて、心安くも有れば、唯此の御身に添ひて起き臥し給ふを、大臣も「いとよかんめり。此の御方に預かりて、思し後め」とて、萬に打預け給へれば、此方がちに趣き果てにたれば、いと聞き憎さ勝れど、聞き知らぬ様にて、らうたく心苦しき有様を打語らひて憂きも辛きも慰め給ふ。

法性寺の僧都九條にいとをかしき所領ずるを、時々心安き所にてぞ對の君罷出などしける。殿の御いそぎ近うなり渡れば、いと物騒がしう大方なれば、難き御物忌にて悪しかるべければ、所去りて忌み給ふべきなれば、そこにてとて、對の君許りを添へて、いといみじく忍びて、此の夏但馬の守の女婿取りせむとて、かしづくも、新しき所に渡すべきも、方の塞が

(一)あながちにさりげなく―強ひて知らぬ顔をよそうて。(二)後見聞ゆる―君達のお世話をする。(三)使ひ慣はし―時々は大姫君の乳母に夜のお伽をさせたが。(四)此の君―對の君。(五)思し移ろひ―大臣の御心が。(六)心よからぬ者―うるさい者に思ひて―大姫君の乳母達が。(七)きしろひ蔑しめられて―爭ひなして輕蔑せられる。(八)わりなければ―苦だ情けないので。(九)あの御方―大姫君の御方。(一〇)おとなおとなしき―居なくなつて。(一一)相當の年配の。(一二)此の御方に預かりて―中君の方に關係して。(一三)思し後め―よく世話をせよ。(一四)聞き憎さ勝れど―大姫君方の人々の悪口がまさる。(一五)心苦しの有様―中君の。(一六)打語らひて―中君と話をして。(一七)慰め給ふ―對の君が。(一八)時々―暫間に。(一九)殿の御いそぎ―姉君の結婚式。(二〇)なり渡れば―一本に「なりに」とある。(二一)大方―騒がしさが、邸内あまねくであるから。(二二)物忌―齋戒沐浴して、穢に觸れない様にする事。(二三)それこそいい―九條なる僧都の別邸で物忌をしようと。(二四)新しき所に―新しい家に住まはせる。(二五)方の塞がり―當時の迷信。天一神又は金神の居る方向に向つて行けば凶事に出會ふといふので、此の塞がつてゐる方を外して他の方向にある家に宿つて、而して後その目的地に向ふ。是を方違へかたたがへと云ふ。

(一)御氣色賜はらせ給ふに―太政大臣が、關白に御都合をお伺ひすると。
(二)御心ざしは―父大臣は、姉君よりも妹君の方を此の上もなく愛して居られたが。
(三)八月一日と定めて―結婚式を八月一日と取りて。
(四)いそぎ給ふ―準備をし給ふ。
(五)男君―太政大臣の子息達。
(六)さし並べ―關白の子息と夫婦にさせたならば。
(七)引きき越し給はで―姉より先に結婚させる事は出來ないで。
(八)片つ方の御心―大臣の心中には、姉君の結婚と共に一方では。
(九)物のさとし―神のお告、託宣。
(一〇)物問はせ―占師に判斷をさせる。
(一一)御年當りて―厄年に當る。
(一二)經給ふまじき―此の世には生きて居ずに早死をする。
(一三)近くなりぬる御いそぎ―近付いて來た結婚の準備。
(一四)宰相―法性寺僧都
(一五)但馬守妻―對の君
(一六)法性寺―京都九條にあり、藤原忠通の開創にかゝる。後廢頽す。
(一七)さるかたにしたゝかなる樣に―國守の妻として富み榮えて住みついた。
(一八)弟―妹の事。
(一九)故上―なき大臣の北の方、帥の宮の女の事。
(二〇)御具―御伸間。
(二一)源氏太政大臣北の方
(二二)比叡山、天台宗の本山。
(二三)驗者―祈禱の効驗のある人。
(二四)山―

有らんこそめでたからめと思し占めて、殿に御氣色賜はらせ給ふに、關白「などてか(一)は皇女達より他は此の人こそやんごとなかるべきよすがなれ。後安く目安かるべき御伸」と承引き給ひてければ、御心ざしはこよなく立勝りたれど、限りあれば、先大姫君の御事を八月一日と取りていそぎ給ふ。男君太郎は左衞門督かけたる中納言、二郎は右宰相中將にてぞ物し給ふ。中君こそさし並べたらむに、今少し間柄よからめと思しながら、姉君はえ引き越し給はで、片つ方の御心には、いかでこれに劣らぬ樣にも取り續き見てしがなと思し亂れたるに、七月一日いとおどろ〳〵しき物のさとししたり。思し驚きて物問はせ給へば、陰陽師―中の姫君の御年當りて重く慎しみ給ふべし」となん數多の陰陽師考へ申したり。御容貌有樣のめでたく優れて、此の世には經給ふまじきにやと、危くゆゝしう見奉り給ふに、かゝれば、思し騷ぎて、近くなりぬる御いそぎに添へても、此の御祈は樣々に始め給ふ。

母上の御兄宰相と云ひし人の女二人、男子一人有りしは法師になりて、山に此の頃並び無き智者驗者にて法性寺の別當兼たる僧都の位にて有り。女は但馬の守なる人の妻にて、子供など數多出で來て、さるかたにしたゝかなる樣に有りつきたり。弟は故上の子の樣にて生し立て給ひしかば、上失せ給ひて後、君達の御具になりて、對の君と聞えて物し給ふ。此の殿も淋しき獨り寢の折々打ち忍び立ち寄り給ふを、女世

(一)返る年—明る年。
(二)夢にも見えず—夢の中にも天人が現はれずに、目が覺めて見ると。
(三)天の原—此の歌拾遺百番歌合に寢覺の上として出で、風葉集雜二には寢覺の廣澤淮后として入る。意は明瞭である。
(四)姫君—姉君。
(五)如何にもてなし聞えん—何の樣な婿を取らうか。もてなしは世話をする事。
(六)春宮—東宮に同じ。
(七)御腹—御母。
(八)御覺—御寵愛。
(九)いかめしさに—甚だしい所にもつて來て。
(一〇)御兄弟の兄弟。
(一一)私物—后を表向に寵遇なさるが、承香殿は內心より寵愛せられ苦しう思ふといふ意。
(一二)心苦しう—かわゆく。
(一三)末々にて—其等の女御方の後から、帝の傍に參らせたとて。
(一四)何許りの事—大した御寵愛もないでであらう。
(一五)未稚兒にておはします—まだ幼少なので、東宮に差し上げるわけにも行かない。
(一六)才—學問。
(一七)權中納言—この物語の主人公
(一八)中將かけ—かけは兼にて兼官
(一九)物し給ふ—おいでになる。
(二〇)かなし子—愛子といふに同じ
(二一)御母后—又は皇后。
(二二)たぐひ—配遇、妻。

夜半の寢覺　卷一

敎ふる人こそあれ一と許り聞え給へど、中々語り續け給はず。又返る年の十五夜に月眺めて、琴琵琶彈きつゝ、格子もふげながら寢入り給へど、夢にも見えず、打驚き給へれば、月も明方になりにけり。あはれに口惜しう覺え、琵琶を引寄せて、

天の原雲の通ひ路閉ぢてけり月の都の人も訪ひ來ず

曉の風に合はせて彈き給へる音の云ふ限りなく面白きを、大臣も驚かされて、珍かにゆゝしく悲しと聞き給ふ。

此の君に姫君は今五許りがィのこのかみに物し給へば、盡大人び給ひにたるを、いかにもてなし聞えんと思し亂るゝ事限りなし。此の頃內には、關白し給ふ左大臣の御女、春宮の御腹にて后に居給へる、御覺のいかめしさに、御兄弟の式部卿宮の御女承香殿女御と聞えて、私物に心苦しう思し留められたる末々にて、何許りの事有るべきにあらず。春宮は未だ稚兒にておはします。如何はすべきと思すに、左大臣の御腹に、容貌心ばへ、すべて身の才此の世には餘るまで優れて、限りなく世の光と公私思ひ崇められ給ふ人有り。歲も未だ廿に足らぬ程にて、權中納言にて中將かけ給へる物し給ふ。關白のかなし子、后の御兄、春宮の御叔父、今も行末も頼もしげにめでたきに、心ばへなどのさる我がまゝなる世とても傲り人を輕むる心なく、いと有難く持て治めたるを、帝の御母后に居ざらむ女は此の人のたぐひにて

ものいとよく覺ゆるを、怪しさに琵琶を取寄せて彈き給ふに、大臣聞き給ひて、「(一)こは如何に斯く彈き勝れ給ひしぞ」これはまた、何うしてそんなにお上手に彈く事が出來なかつたのか。(二)あざみ」呆れて。(三)夢をば」中君は夢の事は恥かしいので、父君に話さなかつた。

(四)滯らず」「思ひ續けらる」に續けて見る。(五)譬ふるべき調無く」譬へる曲もない程に、而白く思ひ出して彈く事が出來る。(六)教へし月日を」天人が又來ると云ひ殘しておいた八月十五夜を。(七)つとめて」早朝。(八)殿は」父大臣は。

(九)教へのまゝに」天人の教へた通りに。(一〇)姫君」姉君、大君。

(一一)たど〳〵しくてえ彈き留めぬ」私はうろ覺えでよく覺える事が出來ぬのに。(一二)淺ましき」あなたが、そんなにうまく彈くとは呆れた事だ。

(一三)えしもやなからん」えは得、しもは强意の助辭、やは感動詞。多分居ないでせうよ。(一四)あたら人」あたらは惜しむ意さても惜しい人が。此の詞は中君の將來の運命の豫言である。

如何に斯く彈き勝れ給ひしぞ。珍かなるわざかな」とあざみ驚き給ひつれど、夢をば恥かしうて中々に語り續けず。常に習ひし箏の琴よりも、夢に習ひし琵琶は、聊か滯らず、譬ふるべき調なく思ひ續けらる。人の聞くには搔きも鳴らさず、人知れず教へし月日を數へて待つに、またの年の八月十五夜になりぬ。その年此の君は十四になり給ふ。つとめてより雨降り暮らせば、月もあるまじきなめりと口惜しう眺め暮らすに、夕さりつ方風打ち吹きて、月ありしよりも空澄みて明くなりぬ。殿は今宵内に文作り御遊びあるに參り給ひぬればいと靜かなるに、端近く御簾卷き上げて、宵には例の箏の琴を彈き給ひて、人靜まり夜更けぬるにぞ琵琶を教へのまゝに、音のある限り出して彈き給へれば、姫君「常に彈き給ふ箏の琴よりも是こそ勝れて聞ゆれ。昔より取分殿の教へ給へて、常にたど〳〵しくてえ彈き留めぬものを、淺ましき君の御樣かな」と聞き驚き羨み給ふ。例の御殿籠りたるに、ありし同じ人、天人「教へ奉りしにも過ぎて、あはれなりつる御琴の音かな。此の手どもを聞き知る人はえしもやなからん」とて、殘りの手今五を教へて、天人「あはれ、あたら人のいたく物を思ひ、心を亂し給ふべき宿世のおはするかな」とて歸りぬと見給ふに、此の手どもを覺めて更に滯らず彈かる。淺ましう思ひ餘りて、姉君に中君「夢に琵琶を

(一)御風邪起らせ―風邪をひき給ふ。
(二)所々にひとへに月を賞で―所所の家で、何の餘興もなく唯月だけを眺める。
(三)此の源氏の大殿―太政大臣邸。
(四)大のか―大どかに同じ調。
(五)そこらの年―そこらは多數の義、多年。
(六)珍かに―父大臣の心。
(七)ゆゝしう―忌々しい、不安な。餘りに上手なので、早死たしはせぬかと不安なのである。
(八)傾き懸りて―琴を枕として寢る。
(九)髮揚―髮を結つた樣。支那の婦人は結髮す。
(一〇)唐繪の樣―支那人の服裝をした人。
(一一)昔の世の契―前世からの因緣。
(一二)彈き留め―彈き方を覺えて。
(一三)數多の手を片時の間に―多くの琴の彈き手を、一寸の時間に覺えてしまつた。
(一四)此の世に傳はらぬ―此の下界に傳はつてゐない手が、もう五つある。
(一五)驚き―眼が覺める事。
(一六)殿も習はし給はぬ―父君が教へて呉れないので。

朱雀院の帝御風邪おこらせ給へりければ、俄に止まりて、いと榮なく、所々にひとへに月を賞で給ふ夜あり。此の源氏の大殿にも、御籠ども上げ渡して、姫君達端に出で給ひて、大君は琵琶を、御容貌は清らに、いと氣高くて、大のかなる物の音を、ゆるゝかに面白く搔き鳴らし、中の君は幼く小き御程に、今宵の月の光にも劣るまじき樣して、箏の琴を彈き給ふ。その音云ふ限りなく、そこらの年を經て彈き染みたるよりも、今めかしく澄みたる音を彈き增し給へるに、珍かにゆゝしう悲しと見聞き奉らせ給ふに、夜更くるまゝに、いといみじく面白くあはれなり。これを唯今物思ひ知らん人に見せ聞かせばやと思す程に、夜いたく更けて、皆御琴にわがて傾き懸りて、御殿籠り入りたるに、小姫君の御夢に、いとめでたく清らに、髮揚麗しき、唐繪の樣したる人、琵琶を持て來て、天人「今宵の御箏の琴の音、雲の上まであはれに響き聞えつるを、尋ね參うで來つるなり。己が琵琶の音彈き傳ふべき人、天の下には、君一人なむ物し給ひける。これもさるべき昔の世の契なり。これ彈き留め給ひて、國王まで傳へ奉り給ふ許り」とて敎ふるを、いと嬉しと思ひて、數多の手を片時の間に彈き取りつ。天人「此の殘りの手の此の世に傳はらぬ今五あるは、來年の今宵降り來て敎へ奉らん」とて、失せぬと見給ひて、驚き給へれば、曉方になりにけり。琵琶は殿も習はし給はぬものなれば、わざと彈かんとも思はぬに、習ふと見つる手と

(一)人の世の様々―種々様々の戀愛事件を聞いたけれども。(二)寝覺の御仲らひ―此の寝覺物語の主人公の御仲らひ。(三)そのもとの根ざし―その主人公の仲位の根ざし。(四)源氏―その悲劇の原因を探つて見ると。(五)文―漢詩を云ふ。(六)女御腹―女御の御腹に生れた人であつて。(七)たゞ人―臣下の列に下つて、源氏の姓を給ふ事。(八)朝廷の御後見―大臣を意味して。(九)やむごとなき覺え―その希望がとゞけられて大臣となり、世間から人望があつて尊重せらるる。(十)羨みなく―どちらも同じやうに忘れ形見を殘して。(十一)競ひ隱れ―二人共同じ頃に死んでしまつた。(十二)世の常に思ししつらふ―世間並の妻を迎へる。しつらふは準備する意。こゝでは妻を迎へる事。(十三)教へ奉り給ふにも過ぎて―限りなき音を彈き給ふにかゝる詞。教へるよりも勝れてよい音をたてる。(十四)唯一度に―たつた一度習つただけで。(十五)此の世のみにて―前の世に善き行をしたゞけであらう。(十六)常よりも明しと云ふ中にも―十五夜は他の日よりも月が明るいと云ふが、その中でも特に今夜は雲が一つもなくて明るいので。

(一)人の世の様々なるを、見聞き積るに、なほ寝覺の御仲らひ許り、淺からぬ契ながら、世に心盡しなる例は、有り難くもありけるかな。(二)そのもとの根ざしを尋ぬれば、その頃太政大臣と聞ゆるは、朱雀院の御兄弟の、源氏(四)になり給へりしになむありける。琴笛の道にも、(五)文の方にも、勝れていと賢く物し給ひけれど、(六)女御腹にて、はかばかしき御後見もなかりければ、中々たゞ人(七)にて、(八)朝廷の御後見と、思し掟てけるなるべし。その本意ありて、いとやむごとなき覺(九)に物し給ふ。北の方、一所は按察の大納言の女、そこに男二人物し給ふ。帥の宮の御女の腹には、女二人おはしけり。形身どもを、羨みなく(十)留めおきて、(十一)競ひ薨れ給ひにし後、世を憂きものに懲り果てゝ、いと廣く面白き宮に、獨り住にて、男女君達をも、皆一つに迎へ寄せて、(十二)世の常に思ししつらふ御心も絶えて、一人の御羽の下に四所を育み奉り給ひつゝ、男君には笛を習はし、文を教へ、姫君のいと優れて生立ち給ふには、姉君には琵琶、中の君には箏の琴を教へ奉り給ふに、各々敏う賢く彈き勝れ給ふ中にも、中の君の十三許りにて、まだいといはけなかるべき程にて、教へ奉り給ふにも過ぎて、(十三)唯一度に、限りなき音を彈き給ふ。此の世のみにてし給ふ事にはあらざりけりと、哀に悲しく思ひ聞え給ふ。

八月十五夜、(十六)常よりも明しと云ふ中にも雲なきに、内にも御遊あるべかりけれど、

卷

一

校註

夜半の寢覺

第四段……三三九
附錄……三四三
窓のともしび（横山由清）……三四五
序……三四六
目次……三四六
夜寢覺物語年立……三四八
夜寢覺物語系圖……三五〇
在他書缺物語歌……三五六

——目次終——

校註 夜半の寢覺 目次

夜半の寢覺……一
卷一……三
卷二……七一
二三卷間缺卷梗概……一四七
卷三……一五三
卷四……二〇三
卷五……二六五
五卷以後缺卷梗概……三三一
寢覺物語繪卷詞書……三三五
第一段……三三六
第二段……三三七
第三段……三三八

きもの、大體を掲げ、又、他本によつて底本の文字を補ふべき場合は、これを括弧内に記入して、その然る事を示した。イと記してない小字は、すべて、編者の註記である。且つ又、多く漢字に書き改め、對話符號や、句讀點や、改行等を施して、ひとへに、讀解の容易ならん事を期した。

別に頭註を加へ、缺卷の部分には梗概を記し、又、寢覺物語繪卷の繪詞、及び、横山由清が本書に就いて研究した窓の燈を附して、讀者の便宜を計つた。繪詞は、原作の一部であると思はれる。窓の燈には、誤謬の箇所も散見する。(此の鐫刻に於ては、括弧内に、本書の頁數、その他の編者の註記が加へてある)。もとより、世に存する僞書說の如きは信ずべき限りではない。寧ろ我々は、此の書をもつて、更級日記の著者の遺著、しかも最も不遇なる遺著として、論ずる事をさへ試みてゐる。詳細の點に至つては、我々の研究の一切を網羅具備した、「校註夜半の寢覺」の廣本を見る事によつて知悉氷解せられたい。此の簡略なる標註本の註解の不備なる點も亦、その中に遺補してある。尤も、校正の進行中に、時として、本文にも頭註にも、考へ違ひをした點を見出して愕然とした事もあるから、本書の中にも、必ずしも誤れる點がないとは斷言し難い。これに關しては、是非とも識者の示教を仰ぎたいものである。

最後に、本書の刊行に當り種々なる恩惠を賜はつた、德富蘇峯、佐佐木信綱博士、藤井乙男博士、藤村作博士、田中親美、鴻巢盛廣、澤潟久孝、島津久基、久松潛一の諸先生、及び、山岸德平、岩淵兵七郎、池田龜鑑、森本治吉、長澤規矩也、有馬賢頼、川瀨一馬、小川壽一、橋本佳、松尾聰、鈴木俊秀諸氏の先輩知友、又、東北帝國大學の村岡典嗣先生、前田侯爵家尊經閣文庫の永山近彰氏、大野木克豐氏、水戸彰考館文庫の雨谷毅氏の方々に厚く御禮申上げたい。本書の印刷には、種々なる困難があつたが、よく我々の意を體して下すつた、發行所、及び、印刷所の方々にも、深く感謝する次第である。

昭和八年三月　　編者識

序

平安朝文學の主流とも云ふべき物語作品の中でも、夜半の寢覺だけが、未だ全く世人の眼にふれてはゐない。版本もなく、寫本も數少く、專門の研究者さへも、此の作品に關しては知る所が多くない。それは必ずしも此の作品が價値少き爲めではなく、反對に、我々は、平安朝後期の作品の中でも、此の物語の如きは、傑作の一に數へるべきである事を信ずる。文章も枯淡な處があつて、圓熟して居り、殊に構想の自然な發展と、巧妙な構成とは、識者の味讀に値するものと思はれる。たゞ此の作品が世に流布しなかつたのは、その中間と後部とに缺卷があつて、內容の連絡を缺いでゐる上に、大抵の寫本は、卷次が亂れ、或は錯簡、脫落、誤寫等の爲めに、本文を理解する事を甚だしく妨げたからである。故に、此の物語を充分に理解するのには、根本的に研究しなければ、到底不可能な事と考へる。

我々は此所に觀る所があり、此の物語に沈潛する事數年、漸く、此の物語に關して、世に發表する機會を得るに至つた。卽ち、本文に註解を施し、更に我々の研究、本文の校異、及び、此の物語に關する一切の資料を合して一冊となし、世に問はんと欲するのである。但し、それは、紙數多く、且つ、內容にふさはしい外觀を保つ爲めに、裝幀の善美を期したので、從つて、價も廉ではなく、部數も限定せざるを得ない事情にある。勢ひ、此の傑れた作品が、世の志ある士女の机上に普く及ばざる事を憂へて、我々は別に簡素なる形態をもつて、その本文のみを公にし、これを世に頒たんとする。卽ち此所に「校註夜半の寢覺」の略本と稱するものが、それである。

本文は、竹柏園藏本を底本として、前田侯爵家藏本、東北帝國大學附屬圖書館狩野文庫藏本、帝國圖書館藏本、靜嘉堂文庫藏本を以つて校訂した。卽ち、本文の間に小字を以つてイと記し、諸本の校異中、取るべ

P
189
S776
1909

LIBRARY
1917
UNIVERSITY OF TORONTO

文學士 藤田德太郎編
文學士 增淵恒吉編

校註

夜半の寢覺

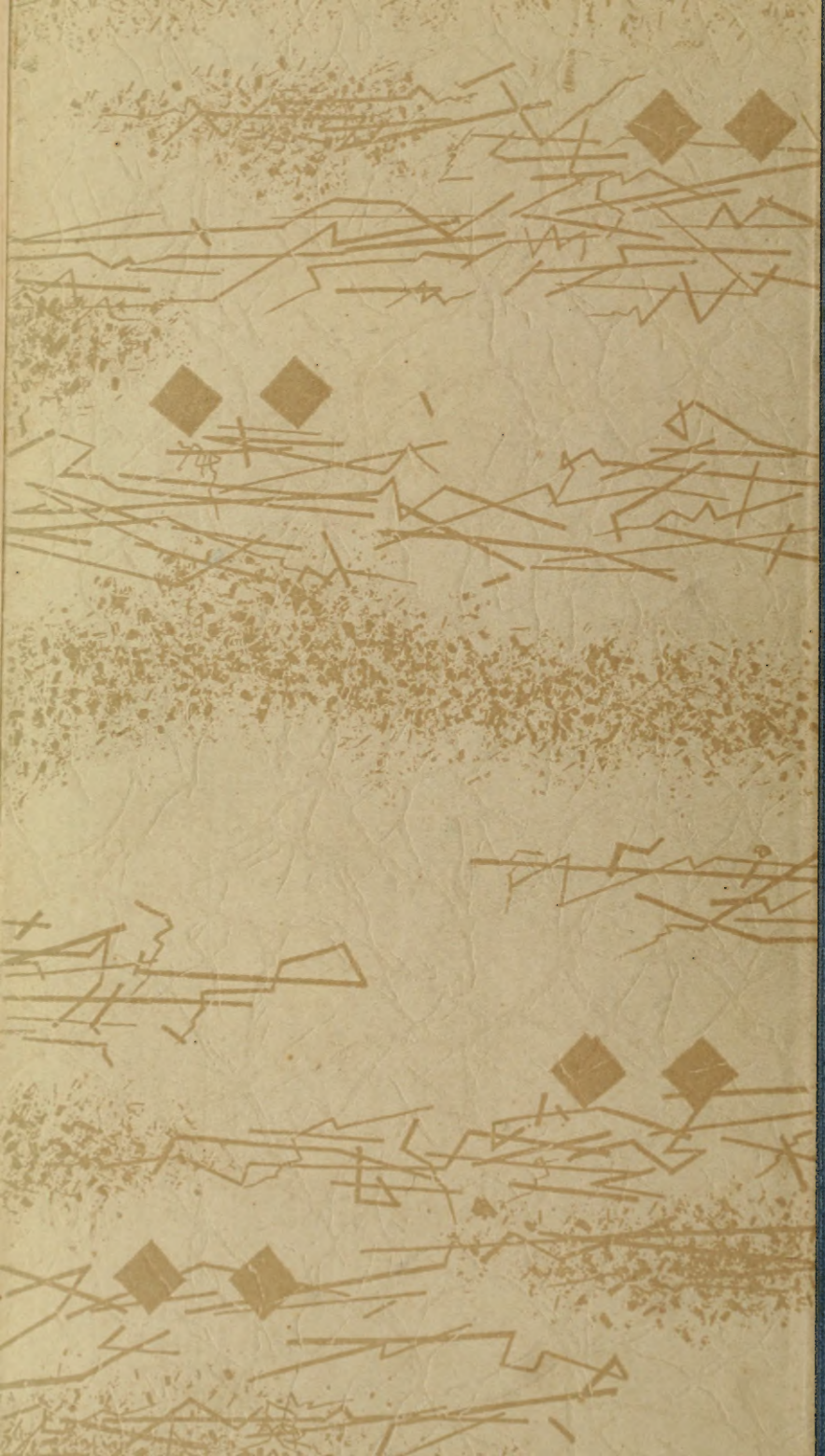
東京 中興館藏版

ISSEI
東京 吉成

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

PL
789
S9Y6
1933

Sugawara Takasue no musume
Yowa no nezame

East Asia